

日本美術年鑑

昭和十四年版

美術研究所

## 序

わが國が、總力をあげて、曠古の大事業たる事變の完遂につとめつゝある今日、國內の文化的活動は、いさゝかも澁滞することなく、かへつてその任重さが認められ、美術またその本分を果すべく、いよく旺盛な活動を示しつゝある事實を見て、無限の感謝を禁じえないのは、ひとり吾人のみであらうか。

美術研究所は、その使命に鑑み、現代における美術界全般の動きについても、調査と研究とを怠らないのであるが、その記録として本年鑑を編纂し、昭和十一年以來、年々これを出版してゐる。目的とする所は、光輝ある聖代の藝術活動のすがたを、永く世にとゞめるとともに、わが美術が、國民文化の華として、一層うるはしく、健全な發展をとげる上に、幾分の寄與をなさんとするにある。

こゝに上梓する昭和十四年版は、例年に比して若干の縮少を行つた。それは、便覧のうち、最も利用の頻繁と見られる美術家團體一覽、美術家及美術關係者名簿などを存置したほか、比較的不急と思はれる大部分を割愛したことで、戦時下における、節約の趣旨に出たものにほかならぬ。また職員中に名譽の應召者を出したことなどから、發行期が著しく遅延するのやむなきに至つた。一時の功を急ぐよりも、能ふかぎり正確な調査を後日にのこしたいとの念願にもよることと、併せて諒恕をこふ所以である。

本書の編纂に際しては、諸官廳をはじめ、美術家、學者その他公私の諸方面から、資料の供給などにつき、あらゆる援助を辱くした。中にも、古美術保存、修理等に關する貴重な記録及び寫眞は、文部省宗教局の懇篤な協力を仰いだものである。發掘、調査などについて、當面の専門學者から重要な報告を寄せられた部分もある。一々芳名を挙げがたいが、こゝに記して深甚なる感謝の意を表したい。

なほ本書は、所員和田新及び助手倉田平吉にその編纂を擔當せしめ、現代建築については囑託山田智三郎に分擔せしめたことを記しておく。

昭和十五年三月

美術研究所長 矢 代 幸 雄



## 凡 例

一、本年鑑はその内容を「本欄」、「挿圖」及び「附録」の三部に大別する。本欄は我が國美術界の全般につき、昭和十三年度、即ち同年一月から十二月に至る一年間に現はれた主なる出来事、製作又は發表された注意すべき作品、發表された文獻等を記録し、挿圖は右に添ふ作品の寫眞を主として掲げ、附録は便覧として例年掲載するもののうち美術家團體一覽、定期刊行物一覽、美術商一覽、美術家及美術關係者名簿のほかは本年度はこれを省略して、たゞ行政、教育、觀覽等に關する官公施設の重要なもののみを便宜上輯録した。記事中「本年」とあるは昭和十三年を指すもの、月日のみを擧げて年を記さぬ場合亦同様である。

一、美術として本年鑑が取扱ふ範圍は、從來一般に行はれる狹義の解釋に従ひ、繪畫、彫刻、工藝及び建築に限ることとした。繪畫のうちで「日本畫」及び「洋畫」の區別は、嚴密には困難の場合もあり、又その稱呼も字義として好ましいものとは言へないが、便宜のため姑く一般の慣習に倣ふこととした。建築は用途に従つて種類も多く、殊に近年の傾向に在つては之を美術として取扱ふことに問題も多いが、茲では吾人の見地から注意をひくものの範圍に止めた。

一、人名を記す場合に敬稱は一切之を省いた。

一、本欄、現代美術の中美術展覽會の項には、明治、大正以後活動した作家の遺作展觀、回顧的展覽會、及び外國美術展覽會等に關しても、便宜上此に含めて取扱ふこ

ととした。

一、同、展覽會以外の作品については、その範圍を擴げるならば限なきため、茲には多少とも公共的性質を有するもの、或は記念碑的意義を有するものに限ることとし、主なる作品少數のみを選んだ。

一、同、美術教育の欄に於ては、之に關する彙報的な記事若干を輯録するに止めた。普通教育における圖畫教育は、美術とは關係が深く、屢々美術教育とも呼ばれて混同されてゐるが、本年鑑では特殊な場合の外は之を取扱はず、専門の美術教育の範圍に止めることとした。

一、挿圖として掲載した作品の寫眞は、年度内に製作、若くは新作として發表されたものに限つた。その選擇は、大體各分野における製作活動を代表せしむるを旨とし、必しも傑作のみを選出した譯ではない。古美術に關しては、年度内における修理、新發見の資料等限り、その注意すべきものを輯めた。

一、附録は、昭和十三年十二月末日現在の記録たることを原則とするが、使用の便を圖り、その後の消息をも例外的に記載、若くは之によつて訂正した部分もある。

一、本欄中、美術文獻目録、並に附録中、美術家及美術關係者名簿については、夫々その項の初に凡例を記した。

# 目次

序	一
凡例	二
目次	三
挿圖目次	五

## 本欄

昭和十三年度美術界概観	一〇
美術展覧會(月日順)	一一

一月	一一
日本漫畫會展——熊岡美彦個展——矢來莊現代日本畫展——朱玄會展——南蘆造近作洋畫展——四行會展——等	一一

二月	二二
長谷川昇油繪展——白日會展——清尚會展——春台美術展——熊谷守一、野間仁根作品二人展——里見勝藏個展——光風會展——旺玄社展——關尚美堂展——新美術家協會展——等	二二

三月	二五
木心舍彫刻展——井井會展——渡邊氏舊蒐集洋畫展——島根縣工藝品展——伊藤繼郎個展——春虹會展——讀畫會展——太平洋畫會展——山本鼎個展——獨逸國際手工業博出品作內覽——獨立展——多聞堂展——京都工藝院展(京都)——東丘社如月會展——主線美術協會展——東海四縣聯合輸出工藝試作展——東陶會展——六色會工藝展——蓮袖會展——大久保作次郎個展——日本美術院同人展——白朝會展——東光會展——蕨青社展——青甲社展——上杜會展——山崎省三個展——戊辰會展——等	二五

四月	三三
蕨青會展——白御會展——藩友會展——麥僊溪仙遺作展——高間總七個展——東海美術協會結成記念展——煌土社展——等	三三

五月	四二
九阜會展——立陣社展——三春會展——第一美術協會展——構造社展——京都市美術展——淺井忠遺作水彩展——創工社工藝展——日本新興南畫院展——工人社小品展——大河內夜江個展——東臺邦畫會小品展——童林社展——島崎鶏二個展——六潮會展——岸田劉生十周忌回顧展——相模彫刻小品展——大阪市産業工藝展——實在工藝美術會展——日本深藝院展——松島畫舫春季展——明助美術試作展——遠藤、狩野、長谷川三人展——三越五作家展——青樹社展——靜岡縣美術協會展——木下義謙個展——現代美術展——自由美術家協會展——大日美術院展——海洋美術展——東京會展——日本彫刻家協會展——清水正太郎個展——一水會々員展——絕對象派協會展——新美術人協會展——等	四二

六月	五二
清光會展——瑠々會展——土田麥僊遺作展——荒木十歌個展——東丘社展——東陶會日本陶藝展——朝鮮美術展——京都工藝美術協會展——藤田嗣治個展——本山竹莊還曆記念東西大家展——京都昭和工藝協會展——岩田藤七個展——土田麥僊遺作畫稿展——伊東陶山遺作展——九品庵東西大家展——中村直人北支從軍展——島野重之個展——セクシヨングル洋畫展——墨人會展——造型彫刻家協會展——村井正誠小品展——瑠須畫社展——梅原龍三郎個展——兒玉畫藝展——等	五二

七月	五九
青丘會展——春台特別大阪展——高島達四郎個展——陸軍從軍畫展——關尚美堂展——日本畫三人展——日本山岳畫協會展——久保田金僊四大戰役從軍畫展——新制作派協會結成記念展——煌土社展——等	五九

八月	原田和周遺作展——等	六一	美術講演・講義	一一八
九月	青龍社展——第三部會展——二科會展——日本美術院展——朗峯畫藝展——明助美術展——彭城貞德個展——白日莊展——川口軌外個展——八條彌吉遺作展——朝倉彰碧遺展——北信輸出工藝展——近畿聯合工藝展——大輪畫院展——等	六二	講演——各大學美學美術史講座	
十月	林重義個展——銀座一畫廊創立記念展——林武個展——貿易局輸出工藝展——河合卯之助個展——菅野圭介個展——日本美術協會第百六回展——文部省美術展——雲崗石佛スケッチ展——臺灣美術展——創紀美術展——八木岡春山個展——全國商業美術展——等	七〇	古美術展覽會・展觀（月日順）	一二三
十一月	兒島善三郎個展——橋本關雪個展——河井寛次郎個展——白壁會展——京都美術館秋季展——和田英作個展——三岸節子個展——大森光彦個展——橋本八百二個展——歷程美術協會展——大阪新美術家同盟展——近藤浩一路個展——七絃會展——福澤一郎個展——東京會展——日本人形社展——大潮會展——川端龍子個展——一水會展——新制作派展——新興美術協會展——文展京都陳列會——等	八一	古美術關係彙報（月日順）	一五六
十二月	高島屋新作展——新燈社展——井南居展——上弦會展——藤島武二個展——岡田謙三個展——和光會工藝展——新興美術家協會展——桃源會展——五陽會展——新構造社展——女神會展——海老原喜之助個展——日本版畫協會展——高村真夫畫業四十年記念展——鶴田吾郎漢口從軍展——福田肩仙從軍展——等	八七	古美術保存	一六九
展覽會以外的作品		九一	昭和十三年度國寶指定 附同所有者變更 同品目改正	一六九
日本畫・洋畫・彫刻・挿繪・建築		九六	同 國寶修理	一七六
美術界彙報（月日順）		一〇五	同 重要美術品認定 附同資格消滅	一七七
物故作家及美術關係者		一一五	同 史蹟指定 附同改稱 解除	一八九
美術行政		一一六	同 朝鮮寶物及古蹟指定	一九四
美術教育		一一六	美術市場	二一〇
			東京、大阪、京都、名古屋各美術俱樂部賣立高値表	
			昭和十三年度美術文獻目錄	二一五
			凡例・目次	二一七
			現代美術關係文獻	二二七
			古美術關係文獻	二三六
			日本畫	一
			洋畫	三二
			彫刻	六八
			工藝	八二
			建築	九二
			古美術資料	一〇一
			物故作家及美術關係者	一〇七
			附錄	

國寶保存會—重要美術品等調査委員會—帝室技藝員—帝國藝術院—文部省美術展覽會—輸出工藝振興委員會—貿易局工藝品輸出振興展覽會—貿易局輸出工藝圖案展—美術研究所—東京美術學校—東京高等工藝學校—京都市立美術學校—京都市立繪畫專門學校—京都市立美術工藝學校—工藝指導所—陶磁器試驗所—附瀬戸試驗場—東京帝室博物館—恩賜京都博

物館—大阪市立美術館—奈良帝室博物館—朝鮮總督府博物館—李王家美術館—美術家團體—覽(五十音順)—定期刊行物—覽—美術商—覽—美術家及美術關係者名簿(五十音順)

## 挿圖目次

### 日本畫

矢來莊現代日本畫展(一) 春堤(小川芋銭)	一	白御會展(二八) 椿寺の庭(中島榮刀)	五	明朗試作展(五二) 風市(田代寬哉)	九
清尙會展(二、六、七)	一	菩提會展(二九) 寒堤(水田竹園)	五	個展(五三) 夕暮(長谷川路可)	九
冬暖(加藤榮三) 秋の娘、冬の娘(谷口富美枝)	一	東西名家表裝展(三〇) 梅柳早春(村上華岳)	五	五作家展(五四—五七)	九
春虹會展(三一五、八)	一	春の青龍社展(三一—三四)	五	姉羽鶴(小杉放庵) 葡萄(山口塞春) 猫(橋本關雪) 二枚拾(橋本清方)	九
暮春(金島桂華) 烏骨鶏(柳原紫峰) 芥子の花(宇田萩郎) うつらう春(上村松園)	一	犬ボーイ(奥田正一) 戦捷の春(川端龍子) 潮風(坂口一草) 良樹(市野亭)	五	大日美術院展(五八—六二)	一〇
讀畫會展(九、一〇)	二	新興美術院展(三五、三六)	六	猿(東照宮所見) 菅澤幸司 伐木(結城素明) 高千穂(青木大乗) 春の土(常岡文龜) 向日葵(川崎小虎)	一〇
淺春(荒木十畝) 貝灰工場其ノ二(海老原南葵)	二	寬(田中安山子) 機織(鬼原素俊)	六	新美術人協會展(六三—六八)	一一
如月會展(一一、一二)	二	蘇州クリータ(古城江觀)	七	ハーモニカバンド(藤田隆治) 砂丘(柳文男) 澤(福田豊四郎) アトリエ(藤田復生) 乳牛(吉岡堅二) 花(柴田安子)	一一
カワウソ(曲子光男) 圓雪(三輪晃勢)	二	九阜會展(三八—四一)	七	清光會展(六九、七〇)	一二
日本美術院同人展(一一—一五)	二	春光(森白市) 春苑(山口華楊) 山春(福田豊四郎) 童女(溝上遊龜)	七	梅花(小林古徑) うさぎ(安田教彦)	一二
伊豆三題ノ内(酒井三良) 觀音(荒井寛方) 少女(中村貞以)	二	京都市美術展(四二—四四)	七	瑞々會展(七一、七二)	一三
院友展(一六) 春待つよひ(佐藤耕寛)	三	春(會津勝巳) 兄弟(秋野不矩) 圖裡即興(西村五雲)	七	宵の春(西山翠嶺) 清潭(西村五雲)	一三
葱青社展(一七—一八)	三	日本新興南畫院展(四五—四七)	八	三暢社展(七三) 梨花(河村光彰)	一三
もみぢの高尾(池田遙郎) 實る山村(柴原希祥)	三	山西省(難春) (直原放青) 風(村上蘭田) 春律(渡瀬凌雲)	八	本山竹莊居還曆記念東西大家展(七四—七六)	一三
青甲社展(一九—二二)	三	六潮會展(四八—五〇)	八	涼宵(橋本關雪) 雄姿(池上秀畝) 秋山飛瀑(川合玉堂)	一三
日蝕(一) (樋口富麻呂) 夏宵調音(北野以悅)	三	源深(中村岳陵) 土蜘蛛(木村莊八) 芍藥(山口塞春)	八	墨人會展(七七—八〇)	一三
雨餘(西山翠嶺)	四	青樹社展(五一) 林間二題(橋山葩生)	九	大原風景十二題ノ内水泳の少女(小松均) 桃村(渡邊大虛) 青鷲(小杉放庵) 一休禪師(菅橋彦)	一三
戊辰會展(二二—二七)	四				
末黒野(磯部草丘) 野兔(島春潮) 清香(松本姿水) 相武登早春(村雲大様子) 朝もや(川合玉堂)	四				

瑠璃畫社展 (八一—八四) ..... 一四

三月風景 (山本丘人) 日盛り (高山龍雄) 甲外上  
野原 (田中憲之) 池のある風景 (山口吉三郎)

尙美展 (八五—八七) ..... 一五

翠巒 (太田聰雨) 夏果 (堂本印象) 枇杷 (加納三  
樂)

煌土社展 (八八) 山莊に於ける廣業先生 (野田九浦) ..... 一五

青龍社展 (八九—九七) ..... 一六

晃山彩廟 (鳥欄) 右 (加納三樂) 明惠傳 (一) (福  
岡青嵐) 猛禽舍 (市野亭) 大同石窟 (大露佛) (川  
端龍子) 奈良 (法華堂) (山崎豊) 鹿 (佐藤木草)

高原放牧 (坂口一草) 悦島屏風 (木村鹿之助) 大  
陸作<sup>シネスカン</sup> 連作第二作 源義經 (川端龍子)

日本美術院展 (九八—一五) ..... 一七

山の夜 (郷倉千毅) 初雪 (佐野光穂) 大地悠々 (山  
村耕花) 二少女 (加藤農明) 大同石佛 (前田青邨)  
梅花薫る (横山太一) 爽風 (中村岳陵) 鶴 (奥村  
土牛) 鵲飼 (酒井三良) 天地和平 (荒井寛方) 武  
藏野六題ノ内 (小山大月) 浴女 (溝上遊龜) 磯小  
林柯白 殘照 (堅山南風) 雲崗靈巖三題ノ内 (眞  
道黎明) 浴後 (中村貞以) 二月堂水取 (其二) (新  
井勝利) 綠陰 (大智勝觀)

五周年記念明朗展 (一一六—一一八) ..... 二一

北海の幸 (伊久留朗爾) 五百羅漢 (東條光高) 靈  
廟龍虎 (川口春波)

白日莊現代大家展 (一一九—一二二) ..... 二二

上宮太子 (安田叔彦) 芙蓉花 (結城素明) 書見上  
村松園 月清む空 (鈴木清方)

日本美術協會展 (一二三) 冬朝 (森梅溪) ..... 二二

文展 (一二四—一五八) ..... 二二

仙苑 (田中融哉州) 椎茸取り (遠山隆一) 時宗と  
祖元 (服部有恆) 雪に埋ちる (河合健二) 初春閑  
村 (森谷南人子) 庭園 (山本丘人) 店魚 (廣倉清  
光) 雨後 (堅山南風) 禪苑清現 (河原悦人) 祖先  
と俱に在り (鴨下晃湖) 就後 (西村卓三) 牛と子

供 (伊東深木) 京洛三女 (不二木阿古) 矢呼び (森  
戸果香) 夕和雲 (橋本明治) 七面鳥 (川崎小虎)  
紅葉 (秋野不矩) 青柳 (福田平八郎) 碓 (上村松  
園) 盲女と花 (奥田元栄) 皇太神宮 (横山大觀)  
黎明 (八木園春山) 時雨、山湖 (川村曼舟) 孫  
子勤姫兵 (安田叔彦) 一樹の蔭 (川金玉堂) 凱陣  
交歡 (菊池契月) 千代尼 (太田聰雨) 七面鳥 (兒  
玉希望) 軍犬 (小室翠雲) 神鶴 (宇田萩郎) 幽く  
ろめ (伊藤小坡) 一致對敵 (西澤信敬) 郊外風景  
(村雲大橋子) 國香 (池上秀敏) 古事記 游能基呂  
島 (鈴木朱雀)

個展 (一二五九) 夕立雲 (川端龍子) ..... 二九

七絃會展 (一六〇—一六四) ..... 二九

實と花 (双幅) 小林古徑 大橋公 (前田青邨) 歌舞  
伎の始 (鈴木清方) 觀自在 (安田叔彦)

個展 (一六五) 泊舟 (上海十六浦) (橋本關雪) ..... 三〇

展覽會以外の作品 (一六六—一七二) ..... 三〇

宮中御下命畫、松鯉圖 (川端龍子) 大宮御所御下  
命畫、鯉巴 (川端龍子) 京都崇仁隣保館掲揚記念  
畫、五箇條御誓文奉戴之圖 (落洞晴谷) 東京朝日  
ビル内アラスカ壁畫、振武威八戟三部作ノ内 (福  
田翠光) 高野山根本大塔壁畫、眞言八祖像下部裝  
飾畫ノ内 (堂本印象) 京都丸物壁畫、アジヤの女、  
(杉本哲郎)

洋 畫

個展 (一七三) 椿の道 (大島) (熊岡美彦) ..... 三二

個展 (一七四) クメールの遺蹟 (鈴木良三) ..... 三二

四行會展 (一七五) 丘上 (中尾彰) ..... 三二

個展 (一七六) 風薫る (南雲造) ..... 三二

個展 (一七七) 櫻婦 (長谷川昇) ..... 三二

白日會展 (一七八—一八〇) ..... 三三

櫻島 (荻野康兒) 夏の海 (池部鈞) 椿 (富田溫一  
郎)

泰台展 (一八一、一八二) ..... 三三

早春 (矢島堅士) 岩越國境 (岡田三郎助)

野間熊谷二人展 (一八三) 實る稲田 (野間仁根) ..... 三三

個展 (一八四) 寒椿 (里見勝藏) ..... 三三

光風會展 (一八五—一九一) ..... 三四

ヒュッテの人々 (石川滋彦) 放浪者 (朝井闔右衛  
門) 薔薇 (清水良雄) 根拠地 (中村研一) 室内  
(島野重之) 秋 (辻永) 畫室にて (大河内信敬)

旺玄社展 (一九二、一九三) ..... 三五

歡呼の聲に送られて (尾崎三郎) 玩具のクマと人  
物 (田澤八甲)

新美術家協會展 (一九四—二〇一) ..... 三五

養魚場 (古家新) 青帽子 (近藤光起) 湖畔 (早川  
國彦) 雪晴れの小みち (田邊三重松) 冬の港 (中  
村善策) ボローゲム (寺田竹雄) 青い敷物 (宮  
本三郎) 早春高原 (服部正一郎)

個展 (二〇二) 自分の顔を見る裸婦 (伊藤織郎) ..... 三六

太平洋畫會展 (二〇三—二〇五) ..... 三七

紅茶 (高村真夫) 口紅石楠 (丸山曉霞) 靜物 (渡  
部審也)

個展 (二〇六) ばら (サムホルム) (山本器) ..... 三七

獨立展 (二〇七—二一一) ..... 三七

雲 (夕) (福澤一郎) 群鳥 (川口軌外) 蕃人 (野口  
彌太郎) 彫刻室 (高島達四郎) 沐浴 (海老原喜之  
助) 擬裝 (清水登之) 水田 (須田國太郎) 邊七 (田  
中佐一郎) 丘の上 (鈴木亞夫) 乳牛 (松島一郎)  
箱根 (兒島善三郎) 山中 (小林和作) 女の肖像  
(林武) 大陸の人々 (鈴木保徳) 王道聖七 (瀧  
洲記念) (中山鶴)

主線美術協會展 (二二二—二二四) ..... 四〇

松島 (橋本八百二) 水平線の見えろ室内 (高間惣  
七) 夜光 (堀田清治)

連袖會展 (二二五、二二六) ..... 四〇

窓 (金子博信) 薔薇 (安井曾太郎)

白朝會展 (二二七)	川奈 富士コース (金井文彦)	四一
東光會展 (二二八—二三〇)	山 (佐藤一章) ヒヨドリ (野口謙藏) 柘榴 (熊岡美彦)	四一
上社會展 (二二二) 五月 (牛島憲之)		四一
獨立小品展 (二二二、二三三)	小晶 (高島達四郎) 散形 (中山穂)	四二
個展 (二三四) 風景 (山崎省三)		四二
二科會小品展 (二三五、二三六)	私の畫室 (藤田嗣治) 風景 (中川紀元)	四二
國畫會展 (二二七—二四二)	續 (庫田毅) 子女奏樂圖 (河野通勢) 竹窓裸婦 (梅原龍三郎) 晴子 (椿貞雄) 大山 (別府貫一郎) 太海風景 (青山義雄)	四二
個展 (二四三) 移民 (野田英夫)		四三
春陽會展 (二四四—二五八)	早春の港 (厚門) (田中善之助) 枯蓮池 (吉田達磨) 薄と面等 (加山四郎) 早春の池 (井頭) (橋堀角次郎) 城址 (石井鶴三) 庭 (二見利節) 緑衣の婦人 (水谷清) 冬の鹽久津 (栗田雄) 母子像 (中谷泰) 乘鞍と木曾御嶽 (足立源一郎) 遼東誘談 (二) (木村莊八) 小憩 (小林徳三郎) 高カラの男 (島海青兒) 入江 (中川一政) ヨットハウス (遠藤興太)	四四
自由美術家協會展 (二五九—二六二)	百靈廟 (村井正誠) 構成 (平岡潤) 白鷗 (金煥基) 風景 (矢橋六郎)	四六
全關西洋畫展 (二六三—二六五)	伊豆 (高岡徳太郎) 江浦風景 (小出卓二) 草上靜物 (銅井克之)	四七
日本水彩畫會展 (二六六、二六七)	春の奧多摩 (石川欽一郎) 晩春行樂圖 (石井柏亭)	四七
京都市展 (二六八) 雪後 (黒田重太郎)		四八
童林社展 (二六九)		四八

挿圖目次

城信義追悼記念事變壁畫 (同人共同製作)	個展 (二七〇) こでまり (島崎鶴二)	四八
六潮會展 (二七一、二七二)	花中の人 (中川紀元) 庭の牡丹 (牧野虎雄)	四八
一水會々員展 (二七三) 櫻と桃 (木下義謙)		四八
清光會展 (二七四) 京城府 (安井曾太郎)		四九
個展 (二七五) 高崎山 (その二) (梅原龍三郎)		四九
春台大阪特別展 (二七六) 顔 (有馬とえ)		四九
新製作派二周年記念展 (二七七—二七九)	讀書 (猪熊弦一郎) 夏の省線ホーム (野田英夫) 家 (内田慶)	四九
二科展 (二八〇—三〇三)	風景 (糧倉省吾) 式根の女 (宮本三郎) 夏の畫 (大澤昌助) 花賣り (藤井二郎) 田園 (野間仁根) 蕃人の家族 (田口省吾) 草原 (島崎鶴二) 都會情趣 (鈴木信太郎) 建設 (寺田竹雄) 夏草 (國枝金三) 暮合 (岡田謙三) 竈の前 (那覇) (藤田嗣治) 砂丘 (正宗徳三郎) 看護婦 (田村孝之介) 小休止 (十五分) (徐川西方) 追撃戦 (栗原信) 戦況 ニュース (銅井克之) 島の訣別 (那覇) (藤田嗣治) 突撃 (向井潤吉) 靜物 (北川民次) 織女 (東郷青兒) 設定一九三八 (廣幡憲) 象 (D) (山口長男) (D) (X) 山本敬輔) 占 (伊藤翠郎)	五〇
個展 (三〇四) 櫻花 (彰城貞徳)		五〇
個展 (三〇五) 秋の露 (林重義)		五四
文展 (三〇六—三四〇)	麗日 (森田元子) 草はら (大澤海藏) 春 (鈴木千久馬) 畫室にて (安藤信哉) O 先生と孫 (大貫松三) T子 (二見利節) 運動場に於ける像 (中野和高) 曉の金剛山 (齋藤興里) 金藏獅子 (森田茂) 征軍 (太田喜二郎) 庭後 (阿以田治修) 靜境 (橋本はな) 山湖と白樺 (眞垣武勝) 松ト竹 (庫田毅) 山映小景 (林儀衛) 室内 (中村研一) 北洋落日 (青山義雄) 耕到天 (藤島武二) 北京萬字樓 (中澤弘光) 戦争ヲ作ル (木村莊八) 九龍壁 (北京)	五四

(川島璽一郎) 裸婦扇 (梅原龍三郎) 開封風景 (和田雪面) 港 (石川寅治) 沈黙 (中村不折) 信濃の鍛冶屋 (石川義彦) 草蘆三韻 (河野通勢) 九十九里 (大久保作次郎) 朝 (高間惣七) 砂河を渡る (伊原宇三郎) 靜物 (安達眞太郎) 樹下棋戰圖 (植藤種男) 伊豆の海岸 (三宅克己) 敵地へ出發 (鶴田吾郎) 綿羊 (南薫造)	個展 (三四一) アネネネ (兒島善三郎)	六〇
個展 (三四二) 花 (菅野圭介)		六〇
個展 (三四三) 溪流 (奈良にて) (和田英作)		六〇
個展 (三四四) 風景 (福澤一郎)		六〇
一水會展 (三四五—三五三)	山湖 (中村義策) モナコ遠望 (南佛) (小山敬三) 母と子 (池部鈞) 江南の春 (有島生馬) 蒙疆平穩 (石井柏亭) ふじざくらの下にて (木下義謙) 中綱湖 (高田誠) 昆明湖 (北京萬壽山) (嵯伊之助) 少女林泉 (山下新太郎)	六一
新制作派協會展 (三五四—三六三)	樹蔭 (島田和) 壁看板の家 (小松益喜) 丘 (内田慶) 庭 (三田康) 母達 (伊勢正義) 習作第一 (鈴木誠) 雪 (佐藤敬) 紅葉 (中西利雄) 野牛 (内田武夫) 憩ふ踊子達 (小磯良平)	六二
上弦會展 (三六四—三六六)	細流 (和田英作) 楊柳 (岡田三郎助) 午前の光 (和田三造)	六四
個展 (三六七) 新高山の日の出 (藤島武二)		六四
個展 (三六八) 乳兒 (海老原喜之助)		六四
展覽會以外の作品 (三六九—三七二)	岐阜丸物食堂壁畫「スペインの野祭」(水谷清) 神戸商大講堂壁畫三部作ノ内「光明」「雄圖」(中山正實)	六五
國畫會展 (三七二—三七三)		六五

版畫



開闢譜・東北經鬼門版畫屏風(左)(棟方志功)女  
大生(アブノワ) 六六

造型版畫協會展(三七四) 狐市街(小野忠重) 六六  
文展(三七五—三七九) 六六

名古屋城(前川千帆) 軍艦進水(川西英) 佐渡尖  
閣(平塚運一) 勝鬘器・善知鳥版畫曼荼羅(棟方  
志功) ビクニツク(永瀬義郎) 六六

日本版畫協會展(三八〇—三八二) 六七  
北齋の肖像(織田一磨) 青島(黒木貞雄) 秋田風  
俗鹿島流し(勝平得之) 六七

展覽會以外の作品(三八三) 六七  
日本文化中央聯盟當選ポスター(神原繁) 六七

## 彫 刻

本心舎展(三八四) I氏山の幸(吉田白嶺) 六八  
主線美術協會展(三八五、三八六) 六八

女立像(岸崎猪之助) 試作(安藤照) 六八  
日本美術院同人展(三八七、三八八) 六八

猫(石井鶴三) み、ゆく(松原松造) 六八  
國畫會展(三八九—三九一) 六八

七生(山内壯夫) 紀念碑「海の荒鷲」の一部(清  
水多嘉示) オリジナルビツク記念像「冬に寄す」本郷  
新) 六八

自由美術家協會展(三九二—三九三) 六九

作品(植木茂) a(小野里利信) 六九  
構造社展(三九四—三九九) 六九

少女(萩島安) 誘惑(齋藤素嚴) S子の首(原  
田新八郎) ラグビー(野村公雄) 李氏騎馬像(後  
藤泰彦) 庭園風俗コンポジション其三 三人の子  
供達(安永良徳) 七〇

相撲彫刻小品展(四〇〇—四〇二) 七〇

上手投きまる(石井鶴三) 控力士(新海竹蔵) 七一  
日本彫刻家協會展(四〇二—四〇六) 七一

女(飯村直久) 友田恭助氏の像(加藤顯清) 腰掛  
けた女(早川鶴一郎) K夫人の顔(片山義郎) ま  
どろむ女(武井直也) 七一

日本木彫會展(四〇七—四〇九、四一一) 七一  
五郎犬(本田德義) 粧(三木宗策) 春(山脇敏  
男) 漲生(内藤伸) 七二

第三部會展(四一〇、四一二—四一八) 七二  
難民歸る(楓橋のあたり)(日名子實三) 猛進永  
原廣) 座像(大木芳明) 一番乗り(エスキース  
(畑正吉) 驚駕麗走(池田勇八) 山羊親子(上田直  
次) 習作(舞女)(石川確治) 蹶起(名久井十九三)  
二科展(四一九—四二二) 七三

踊る女(上田曉) 勤勞少年(笠置季男) 無名戰士  
のモニウマン(長谷川八十) 立てる女(水野欣三  
郎) 七四  
院展(四二三—四三四) 七四

少女(山本豐市) 高濱氏像(石井鶴三) 女立像  
(村田德次郎) 運月尼(吉田白嶺) S彫刻家ノ  
像(松原松造) 能姿(入江美法) 鏡獅子試作(平  
橋田中) 曉の進軍(中村直人) 冬の風神(宮本重  
良) 葦鷺圖(新海竹蔵) 鏡拐(松村秀太郎) 無量  
壽佛(大内青圃) 七六  
文展(四三五—四五八) 七六

渡河戦(野々村一男) 戦争(三部作二、望輝)(中  
村直人) 孔雀明王(佐崎龍村) 燎原(森大造) 武  
勳(安) 神意發動(北村西望) 不動明王(關野  
聖雲) 無敵の境を行く(梁川剛一) 人橋(小倉右  
一郎) 鷹ヶ峯の秋(山崎朝雲) 筆忠の像(朝倉文  
夫) 就後工場の護り(藤野舜正) みのる秋(日下  
寛治) 赤誠(親山三毅) 秋の作(安藤照) 朝(西  
田明史) 女(大嶽茂樹) 母子(山畑阿利一) 自然  
觀照によれる(堀江越) 幸ちやん(建昌大夢) 髪  
を洗ふ女(北村正信) 女(荒井徳亮) 大處連作の  
内(谷風) (富永朝堂) 鏡(藤井浩師) 八〇

展覽會以外の作品(四五九—四六五) 八〇

## 工 藝

滿鐵教育塔「合唱」(北村西望) 兒玉源太郎大將馬  
上像(北村西望) 釋迦大佛像原型(松田尚之) 小  
村侯像(朝倉文夫) 伊藤博文公立像(建昌大夢)  
板垣伯立像(北村西望) 大隈侯立像(朝倉文夫)

京都工藝院展(四六六—四六九) 八二

天目五種(清水六兵衛) 蟹文花瓶(辻晋太) 漆器  
コヒー棚(岩村貞雄) 手鏡錦掛掛清墨粉圖(山  
鹿清華) 八二

國畫會展(四七〇) 色繪大皿(富本憲吉) 八二

實在工藝美術會展(四七一—四八二) 八三

衛立(山崎覺太郎) 盛器A(豊田勝秋) 花瓶(内  
藤春治) 一輪挿(丸山不忌) 花挿(高村豊周) 龍  
斑衛立(運田修吾郎) 亞麻朱の帯(木村和一) 果  
物盛A(稻場勝那) 前菜入四種(河村喜太郎) 彫  
漆視箱(佐藤陽雲) 敷物(客用)(山脇道子) 衛立  
(吉田文夫) 八五

日本漆藝院展(四八三) 客間セット(同人合作) 八五  
東陶會第二回日本陶藝展(四八四—四八九) 八五

黃瀬戸釉繪柳文花瓶(加藤華仙) 駱駝置物(長谷  
川怒) 金魚文皿(小川雄平) 彩磁草花文花瓶(板  
谷波山) 炆器香爐(安原喜明) 彫刻板硝子置物(大  
庭要一) 八六

文展(四九〇—五一五) 八六

銀龍文之龜置物(山脇洋二) 銀鍍花瓶(海野清)  
銀打出萩虫文花瓶(寺田龍雄) 青銅鷺文水盤(林  
萬壽人) 鑄銅花瓶(香取正彦) 鑄銅鷺波衛天(津  
田信夫) 硝子花瓶(佐藤潤四郎) 黃銅吳竹玉蘭文  
宮 桂信春) 珉珉巧玉鉢(岩田藤七) 陶器甜瓜壺  
(清水正太郎) 硝子飾皿(各務鑑三) 四方形赤繪錦  
鉢(寺池旬妹) 釉裏紅六角花瓶(中後茂吉) 陶製  
草文鉢(大森光彦) 漆器湖畔小景小屏風(小松芳  
光) 漆器鸞詩繪棚(松田權六) 漆花蝶文寶石箱(高

野松山) 漆菊の屏風(吉田源十郎) 染革風呂先屏風(廣川松五郎) 乾漆喰籠(中川哲哉) 彫漆石南花の圖手箱(磯井如眞) 透し編竹製盛器(阪口宗雲齋) 壁面裝飾(板谷梅樹) 二枚折草花文染革屏風(大坪重周) 手織錦萬壽山の春屏風(山鹿清華) みちぐさ和染壁かけ(長濱重太郎)	九一
個展(五一六) 練上壺(河井寛次郎) .....	九一

## 建築

東京女子大學講堂(レイモンド建築事務所設計)	九二
正面、側面、チャペル内部(五一七—五一九) .....	九二
聖母女學院講堂、體操場(レイモンド建築事務所設計)	九二
西側外觀(五二〇) .....	九二
根岸小學校(東京市建築部第一工務課設計)	九二
南側外觀、外氣教室(五二一、五二三) .....	九二
第一ホテル(清水組設計)(五二三—五二六) .....	九三
外觀、大食堂、一階平面圖、規準階平面圖	九三
グリーンコートスタジオアパート(鑑探誠一設計)	九四
全景、正面玄關、一階平面圖(五二七—五二九) .....	九四
強羅ホテル(土浦龜城設計)(五三〇、五三二) .....	九四
正面、ホールよりロビーを望む	九四
東日會館(大倉土木株式會社設計)(五三三) .....	九五
正面	九五
第一生命保險相互會社(渡邊仁、松本與作設計)	九五
全景、營業室、背面廻廊(五三三—五三五) .....	九五
名古屋逓信局(逓信省營繕課設計)(五三六—五三八) .....	九五
西側外觀、中庭圖、一階平面圖	九五
大庄村役場(村野藤吾設計)(五三九—五四二) .....	九六
外觀、正面玄關、塔屋屋上、一階平面圖	九六
日本放送會館(山下壽郎建築事務所設計)	九七
全景、第一演奏室(五四三、五四四) .....	九七
大阪災害科學研究所	九七
(堀口捨巳設計)(五四五—五四六) .....	九七

## 挿圖目次

南正面、北面	九八
大島洲候所廳舎(堀口捨巳設計)(五四七、五四八) .....	九八
南正面、西側	九八
航空計器工場(戸田組設計)(五四九) .....	九八
工機工場内部	九八

日本電力黒部川第二號堰堤、發電所(日本電力株式會社及山口數象設計)(五五〇—五五三) .....	九八
取水口の内部・前堤、沈砂池の水門建物、發電所	九八
全景、發電機室	九八
東京・F氏住宅(山口數象設計)(五五四) .....	九九
ボーチ、玄關	九九

西ノ宮・山川邸(堀口捨巳設計)(五五六、五五七) .....	九九
表玄關車寄、二階八帖間	九九
東京中野・N邸(山脇巖設計)(五五八—五六〇) .....	一〇〇
玄關入口、居間、一階平面圖	一〇〇
徳川公爵邸(土浦龜城設計)(五六一) .....	一〇〇
南面外觀	一〇〇

## 古美術資料

修理竣工國寶建造物(五六二—五八四) .....	一〇一
聖神社本殿、觀心寺書院、石津寺本堂、經崎神社表門、瑞龍寺佛殿、同上法堂、同上總門、豐樂寺藥師堂外觀、平清水八幡宮本殿、大聖寺不動堂、園城寺大門、同上新羅善神堂、妙成寺書院、同上書院内部、同上鎮守堂、如庵、岡山城西九西手櫓、五社神社々殿、同上、法隆寺大講堂、同上内部、同上復原模型、仁和寺仁王門	一〇一
修理續行中國寶建造物(五八五—五九四) .....	一〇四
教王護國寺本堂、定光寺本堂、經路城イノ渡櫓、同上ハノ渡櫓、ニノ渡櫓、ホノ櫓外觀、普門院本堂、神明宮社殿、興福寺東金堂内發見の石染須彌壇の遺構其ノ一、其ノ二、法隆寺傳法堂、同上夢殿	一〇四
朝鮮清岩里廢寺址發掘狀態(五九五、五九六) .....	一〇六

八角塔址正面階段及中門ニ通ズル步道、同上西方部	一〇六
藤原京發掘狀態(五九七、五九八) .....	一〇六
十二堂附近の瓦包含層、南門址の發掘狀況	一〇六

## 物故美術家及美術關係者

(五九九—六一〇) .....	一〇七
武田五一、小村大雲、松岡映丘、津端道彦、倉田清、濱田耕作、西村五雲、森村宜稻、木島櫻谷、倉田白羊、長尾建吉、小川幸鑑	一〇七



## 昭和十三年度美術界概観

## 總記

支那事變開始せられて第二年、戦局は擴大され戦時色は濃厚となつて、朝野をあげてわが國民はこの國家的大事業遂行のため、あらゆる態勢をととのへて進むこととなつた。精神的にも物質的にも國內のすべての事象は、直接間接にこれと關聯をもつて動いた。美術界もまた、もとよりその例をもれない。

戦争と美術、或は戦時における美術——特にわが國が曠古の躍進をとげんとする時運に際會して、美術はいかに進むべきか——といふ新な課題が、今年の美術界に提出されたのであつた。この課題に直面して、時代の動きに敏感な作家たちは、性急な解決にあせるものも多く、またそれらの間にあつて、信念の稀薄な人々が、あはてぎみに方途を摸索するさまも見られ、美術界も痛切に非常時を経験した。この一年間の動きには、美術界のうけたさまの衝動と刺激と、これに應じてなされた煩悶と反省など、幾多の事態がふくまれ、他のあらゆる部門と同様、美術界もまた、一つの革新期に入つたことを認めさせるものがあつて、深甚な注意を喚起せずにはおかぬのである。

高度の精神文化に屬し、それ自身平和的性質をおびる美術活動にとつて、戦争のあたへる影響が——たとへ一時的とはいへ——悲觀的であることは常

識である。その意味から、事變勃發の當初、一時美術界は不安と憂色とにつゝまれた。しかしその不安はやがて解消した。戦時に入つた昨秋、美術界は常と變らぬ活動を見せてゐる。そして今年は一長期戦が覺悟され、國家總動員の態勢が要求され、物資の制限その他がいよゝゝ強化された昭和十三年を通じて——當然、平時と異なる種々の影響が見られるにせよ、美術界は依然、平常通りの活動が許されてゐる。作家の自由な製作については何の束縛もつけぬのみか、かへつて活動の範圍をひろげられ、精神的な鼓舞を加へられる如き現象を示してゐる。豫想とは逆に、少くとも表面的には、美術隆昌の時代をさへ現出してゐるのである。

この事實は何人も意外とする所であつた。とかく有閑者の道樂視され、文弱とも見られがちであつた美術が、今日では、閑事業として斥けられるどころか、戦時下とはいへ一日もおろそかにすべきではなく、美術家は彩管をとつて文化の第一線にたち、その本分を盡すことこそ國家に貢獻する道であるとの理解が、世人一般にもたれ、また作家にもたれたのである。しかも戦時に入つて、美術の果しうる役割が、平時には考へられなかつた領域にまで擴げられ、重要視されることになつたのは、すこぶる愉快な發見といはなければならぬ。同時に、かゝる事實から、未曾有の戦争を遂

行しつゝ、なほ綽々たる餘裕を示し、國內の文化的活動にいさゝかも支障を生ぜしめぬ我が國力の偉大さを知ることが、感銘を禁じ得ぬ所である。

社會百般の事象が一大轉換の期に入つたことを思はせる今日、思想上に、ひいては文化全般の上に、大きな轉回が行はれつゝある。近年過渡的狀態にあり、一面ある行詰りを思はせてゐた美術も、全體とはいへぬが、そのうちに鋭敏に時代を反映し、もしくはそこに新な途を打開しようとする動きの、早くも現れつゝある氣運を見のがすことはできない。非常時局が愛國精神を喚起し、民族的自覺と矜持とを促すことは自然で、近年日本精神がとなへられ、固有の文化に對する反省と檢討との氣運が勃興した。事變開始以來急激に昂つた國民的感情と、總動員態勢とは、おのづから美術に影響して、本年の美術上には最も顯著な傾向として、一には日本主義的反省となり、一には戦争美術の課題となつてあらはれたことが觀察される。

日本主義はまた復古主義、あるひは懷古主義ともなる。一方鎖國的な狹義の日本主義を排して、新時代の日本藝術を世界的立場において開拓しようとするものもある。日本美術の特質の檢討、古典及び傳統の研究、主題藝術に關する反省などの諸問題が考究される風潮を見せた。

戦争美術の名は新に興つて、多くとなへられ、本年の美術界に最も特色ある現象として注意をひいた。昨秋から本年を通じて、數十名の作家が——主として洋畫家であるが、日本畫家、彫刻家など

をもまじへ陸海軍に従軍を志願して、大陸各地の戦線を視察した。軍當局も美術家の任務を理解し、奨励し、差支なき限り従軍を許して、あらゆる便宜を供したばかりでなく、軍自ら畫家を依頼して戦地に派遣し、戦争の記念畫製作を計畫するなど、積極的な態度を示した。戦時に美術が動員されたことかくの如きは、未だかつて例を見ぬ所である。従軍畫家らは競つてその報告のスケッチ展覽會を開いた。陸軍に従軍した畫家によつて大日本陸軍従軍畫家協會が組織され、その主催による展覽會も開かれた。五月に朝日新聞社が催した戦争美術展覽會は、わが國古來の戦争に關する名作をあつめた最初の企てで、時節がら注意をひき、戦争美術に關する諸問題を賑はした。

この氣運にあつて、現在の戦争に取材し、或は直接間接に事變に關係する畫材をとつた作品が、自然數多く現れた。その多くが未だ藝術的にすぐれたものとは見がたいが、中には注意すべき作品もいくつあり、この新たな主題がいかに發展するかは、興味深き今後の課題に屬する。

美術行政の方面では、文展の開催が一つの重要な問題を提起し、これに對する當局の處置が英斷として世の注目をひいたばかりは、別段の動きは見られなかつた。帝國藝術院は全く活動を示さず、昨年來懸案の美術調査會設置のことも、時に報道が行はれるだけで、本年中は實現を見るに至らなかつた。文展は、昨年新たな機構によつていはゆる新文展が設定され、今年はその第二回を開く豫定のところ、事變下における物資制限の強化

は、準備中の紀元二千六百年記念日本萬國博覽會、オリンピック東京大會などの延期または中止を決定する情勢を來したため、文展も中止説が有力となり、顧問會議の結果は荒木文相に裁斷を一任した。文部當局の熟議に基き、文相はその開催を決定したが、文展については別の意味から種々の意見が行はれるにせよ、この場合の處置は、當局の美術に對する理解と重視とを示すものとして、一般から歡迎された所であつた。文相の指導精神としては、今日の如き戦時下においてこそ美術の飛躍的發展を期待し、非常時國民の覺悟を示すとともに、時局を反映し、國民的氣魄を發揮した作品を要望する旨の談話が報道された。

文展は開催されたが、物資節約の立場から出品を一人一點に限り、また作品の寸法制限を強化した。その影響の最も多く見られたのは洋畫で、すべて五十號以内に限つたことは、從來の會場の空氣を一變した觀があつた。これに對しては多く好評であつたことは、これまでの大畫面濫作の弊が甚しかつたことを語るものであらう。なほ本年は、從來在野團體として活動をつゞけてゐた、春陽會と國畫會が參加して注目をひいた。

文展には時局を反映した作品も現れたが、また例年とかはらぬ、平和時の作品も多く出品されて賑つた。文展ばかりではない、主要な美術團體を初め、大小幾多の展覽會は平時と何の變りもなく開かれ、すこぶる盛況を示した。秋季の主な展覽會の統計などに見ても、一般に入場者の數が激増してゐて、美術に對する世人の關心が、平時に比

してむしろ加はつたことを物語つてゐる。

本年物故した人々に、日本畫家では渡邊晨畝、小村大雲、松岡映丘、津端道彦、稻田吾山、渡邊公觀、西村五雲、森村宜稻、木島櫻谷、小川芋錢及び畫家ではないが前相國寺派管長橋本獨山などの諸名家があり、洋畫家に林明善、一本隼次郎、福井謙三、青柳喜兵衛、倉田白羊、彫刻家に牡鹿頂山、後藤泰彦、建築家に武田五一、小林福太郎、藤井厚二、その他商業美術家濱田増治、批評家關如來、西洋木版をつたへた合田清、額縁製造の創業者長尾建吉、恩賜京都博物館長和田不二男、元奈良女子高等師範學校教授水木要太郎、考古學の泰斗京都帝國大學總長濱田耕作など、幾多の人材があつたことは、わが美術界の損失として、痛惜にたへぬ次第である。

## 日本畫

日本畫は物資制限の影響から最も遠く、日本主義の風潮に歡迎されやすく、一般社會に汎く親まれる所などから、他の部門に比して、外形的には最も恵まれた環境におかれたやうに見えた。展覽會、賣立などにおける日本畫鑑賞者の激増は著しい。戦時の物心兩面の緊張した生活に、美術による精神的な慰安を求めようとする要求からもあらうが、他方、特殊な方面の好況が新たな美術の需要層を増加させた結果とも見られ、美術市場における情勢は、時節がら古美術品があまり動かぬに比して、新畫の需要すこぶる多く、作家が注文に應じきれぬ場合もあるといはれる。戦争が齎した

この意外な好況は、畫壇隆昌の意味から幸福だともいへるが、他面、藝術的には嚴重に戒心されなければならぬ。

日本畫はなま／＼しい現實を寫すには適しないと考へられてゐる。その故か、時局への關心を示した作品も、ほとんどすべてが現實を回避し、著しく歴史畫的、懷古的、或は象徴的で、現代の意識に強く訴へるものに缺ける傾向を見せた。

現實を描かなかつた點ではやはりその範圍を出ないが、時代意識をとり扱つて、川端龍子<sup>ジュンコ</sup>は本年最も注目すべき作「源義經」(青龍社展)を完成した。彼は常に時局に主題を求め、一般の作家が夢想さへせぬ構想を示してゐるが、この作は鎧武者を描きながら復古的な痕をとゞめず、新しい時代を呼吸してゐる。空想と象徴とをまじへ、繪畫的にも見ごとな成功を収めたことは、一つの切實な問題の解決としてすこぶる興味が深い。

現代の戦争をとり扱つたものは全く見られなかつたといつてよい。銃後の生活などを描いたものも、絶無とはいへぬがきはめて少く、中村貞以の「浴後」(院展)はその中の最も注意される一作であつた。こゝにも多分の理想化が見られるとともに、現實との不調和が作者を苦しめた痕を歴然と示してゐる。

戦争ではないが、大陸に新な視野をひらき、畫材をこゝに求めたものが院展に數點見られた。しかしそれらには、古代の石佛、石獅などの廢址が、懷古的に或は詠歎的に寫されてゐるにとゞまつて、内容の上から現代の意識にふれるものはほ

んど見當らない。たゞそれらの中で前田青邨の「大同石佛」は、堂々たる作風と技法的追求の熱意を示し、際だつてすぐれた出来となつた。悠久感の表現にある成功を見せたこの作は、本年の傑作のうちにかぞへられる。大同石窟は畫家の興味をひき、院展に都合三點、青龍展に龍子の雙幅が出品された。

日本的なものへの反省、もしくは復古主義ともいふべき思潮は、當然、日本畫壇に最も多く現れた。文展の作品を通覧しても、近年すこぶる顯著であつたいはゆる新日本畫の、特に洋畫化的風潮が甚しく抑制された形で、懷古的趣味が主題の上に多く見られ、技法も傳統に従ふといふか、概して常套的なものが多かつた。時局を象徴し或は戦争に因むといつても、上古の人物、武士、風俗、などをかり、或は鎧武者を描き、歴史畫題を求めるといふ風である。

主題の上からも最も日本精神的なものであるとして、横山大觀の「皇大神宮」があげられるであらう。これは謹嚴さが作者の氣持に餘裕を與へなかつたためか、藝術的にはあまり成功しなかつた。菊池契月の「交歡」は缺點も指摘されたが、大作を黒白調にまとめ、陣中小景に人間的感情をとらへんとする新鮮な創意を示して、注目すべき作であつた。川合玉堂、上村松園などすでに古典的な格調をもつ大家として、その存在をいよく明確にした。玉堂の「一樹の蔭」は、何の粉飾もない作者の謙虚な自然觀とともに、平和に對する愛が流露してゐる。

松園の近年における創作活動はますます刮目させるものがある。「うつらう春」(春虹會)に見る如き、艶麗きはまりなき畫態と通俗性をもつて世間に啖稱されるときに、なほ高度の藝術性を失はぬことは偉とすべきである。旺盛な製作力は幾多の展覧に作品をおくり、非凡の技術は文展の「砧」に遺憾なく示された。

小品ながら本年の收穫中逸してならぬものは、安田靫彦の「孫子勒姫兵」(文展)であつた。日本的といふよりは東洋の古典に對する憧憬と、研究の辛苦がひそむことを見るが、作品は新鮮な興味を與へ、現代の知的教養を根柢とする所に、動かせぬ作者の地位を語つてゐる。技術的完成が殊に重要な役割をなす日本畫では、老練な大家の作品が第一線に立つことはやむを得ぬが、同時にそれらの作家たちが、一作ごとに創作の熱意を示すことも著しい事實である。

もとより中堅といはれる人々の間にもすぐれた作がない譯ではない。たゆまぬ努力に本年注目すべき成績を示したのとして、兒玉希望と堅山南風とをあげるのであらう。希望が戊辰會に出した「朝暉」、「蘆雁」の二作は見ごとな成果であり、南風の文展作「雨後」また近年のこの作者の精進を示して生彩をもつ出来であつた。

新な技法と表現とをもつて、新たな日本畫を開拓しようとする作家たちの活動には、注意すべきものがいくつある。福田平八郎はその代表的な一人であるが、「青柿」(文展)は彼の眞摯な研究的態度を示したのとして、本年批評家の間に最も

多く問題とされた。中村岳陵の大作「爽風」(院展)は新たな浪漫的感覚をもつて異彩を示したが、それよりも、小品ながら六潮會出品作「潺湲」の成果を推すべきであらう。在來の日本畫が企ておよばなかつた自然描寫の一面が、こゝに見ごとに成就されて賞讃すべき成功を見せてゐる。同じ會に出品された山口蓬春の「芍藥」は特に急進的とはいへないが、現代の感覚に研ぎのかゝつたものを示した。

院展の郷倉千靱、溝上遊龜なども見のがすことができぬ。遊龜の「浴女」は大膽な構圖、筆力、近代的感覚の故をもつて評判を博した。文展では橋本明治が「夕和雲」に將來を期待させる才能を示したほか、秋野不矩、山本丘人などが新人として興味をもたれた。

新日本畫の運動として注意されるものに、吉岡堅二、福田豐四郎の二人を中心とする新美術人協會の結成とその第一回展があつた。これは數年來の新日本畫研究會の發展で、必しも本年の新運動といふのではないが、新に陣容をたてた革新運動の代表的な一群として、今後を期待させるものである。この會における堅二の「乳牛」と、豐四郎の「濤」とは、今年の記念作となるものであらう。

團體の動きとしてはその他に、日本畫會の解散及びその更生とも見られる日本畫院の結成、明朗美術聯盟の分裂による大輪畫院の結成、新人による玖窓會、歷程美術協會の結成などが記される。

昨年日本美術院を脱退した院友たちによる新興美

術院、舊日本南畫院の關西系作家による日本新興南畫院など、それ／＼第一回展を開いた。これらの中には、何か新しいものを生み出さうとする氣運がうかゞはれるが、その成績はいづれも將來にまたねばなるまい。

既成團體の活動もそれ／＼に見られた。創立十周年を迎へた青龍社は、新興運動としてすでに主要な位置をしめ、秋季展のほかに春の青龍展をもよほし、常の如き潑刺とした活動を見せてゐる。大日美術院、墨人會など昨年に引きつゞき第二回展を開いた。昨年第一回同人展を開いただけで、今春盟主松岡映丘を失つた國畫院の不幸は、同情にたへぬ所である。

塾展、同人展の類も多く、今年は塾展流行の風潮を見せた。また畫商、百貨店などの催す展觀もすこぶる盛で、それらの中には中々充實した内容をもつて興味深いものがあつた。しかし藝術的に一層重要視されるのは、同じく畫商などの主催になるが、特定の作家を選んで例年催されるいくつかの會である。今年始められた清尙會、井井會、三越五作家展などのほか、既設のものでは春虹會、九皋會、六潮會、清光會、珊々會、高島屋五作家展を改稱した青丘會、七絃會などがそれで、それ／＼に興味ある活動を示した。

個展の主なものとしては、福田翠光、津田青楓、坂口一草、伊藤小坡、石山太柏、大河内夜江、荒木十畝、八木岡春山、橋本關雪、近藤浩一路、川端龍子などの作品展がかぞへられる。

なほ昭和十一年物故した土田麥僊の遺作展が、

京都と東京とで開かれ、彼の生涯にわたる主要作が陳列されたことも、記憶さるべきであらう。

## 洋 畫

洋畫壇は常の如くすこぶる活動的である。事變の影響もこゝには最も敏感に、製作の上にも最も直接的に現はれた。二三年來やつぎばやに興つた畫壇の新運動といふやうな現象は、本年はほとんど見られず、むしろ急進的な前進は一時足ぶみの状態で、新におこつた時世の轉回を反映し、一般的には時代にいかに対處すべきかに苦慮、反省するかに見え、一部には十分の準備もなく戰爭に新たな主題をとらへようと、盲目的にとびこんで行つたといふ風も見える。

事變開始以來、たちまち從軍を志願した人々が相ついでおこつたが、戦線の擴大とともに從軍畫家の數もふえ、一時は流行とも見られるほど多くの作家が、北支、中支あるひは南支戦線の、至る所に出かけた。前述の如くその大多數は洋畫家である。今年になつては相當な有力作家の加はるものもふえ、軍當局が戰爭記念畫製作の目的を以て畫家を依頼するやうになつては、藤島武二、石井柏亭、藤田嗣治、田邊至その他知名の作家が多く從軍し、あるひは手腕のある少壯新進の作家らが上海戦線の記念畫製作を分擔着手するなど、戰爭畫に對する關心にはかに高まつた。

戰爭畫の課題に對しては、今日の畫家たちは全部といつてよいほど未経験である。從軍畫家による報告として、大陸各地の從軍スケッチ展はおび



たゞしく開かれた。しかしそれらの大部分は戦争のなま／＼しい現實を傳へるものでなく、大陸風景、あるいは戦蹟の寫生圖の類で、戦争の報道としては、現實感のせまる寫眞や映畫を見なれた今日の世人には、ほとんど興味をもたせなかつたといつてよい。もとよりそれらは單なる素材であつて藝術的製作ではない。寫眞とは別の使命をもつて、當然、繪畫が、偉大な戦争の感銘を寫して、しかも藝術的成功をおさめ得ぬはずはないであらう。すでに幾多の戦争畫、或は事變に關聯した作品が現はれた。その注意すべきものについては、以下に述べようとするが、たゞ今年中の成績を概観して、藝術的に高度の價值をもつ作品は、早急の今日では未だ見られず、今後の實現に期待するほかはないと思はれる。

近代の戦争が繪になるかどうかといふ一應の論議が行はれたりもしたが、それを十分検討してゐる暇もなく、多くの畫家が戦争畫にとりかゝつたといふ形である。この新な課題に面して、從來あまり繪畫のための繪畫ともいふべき主潮にかたむいてゐた畫壇には、再び主題藝術の問題が反省される氣運を生じた。それにとりなつて、寫實主義に對する檢討、ひいては古典に對する興味と研究などが一つのまじめな藝術上の反省として考へられるやうになつた。これは本年の洋畫壇に見られる注意すべき思潮である。

畫面の味や、新感覺のみにたよつてゐた作品では、主題藝術に面し、もしくは現實的な描寫と個人的感覺を抹殺してしまふほどの力の表現を必要とする戦争畫に面しては、いかに無力であるかが實證されつゝあるのを見るのである。

戦争をとり扱つて注意をひいた作品には、獨立展に清水登之の「擬装」「江南戦跡」、二科展に向井潤吉の「突撃」、田村孝之介の「看護婦」、栗原信の「小休止十五分」、藤田嗣治の「島の訣別」、文展では伊原宇三郎の「汾河を護る」、朝井閑右衛門の「生還特務兵」、一水會に石井柏亭の「蒙疆平穩」、有島生馬の「江南の春」などがあり、特殊なものとして童林社會員合作の「城信義追悼支那事變壁畫」があつた。

これらもすべて戦争畫とはいひがたいが、その他に、直接間接に事變に關聯したもの――將兵を描き、大陸風物を描き、病舎を描き、銃後の生活を描くなど、――これまでなかつた主題が興味をもつて多くとり扱はれた。しかしほとんどそれらは作畫の題材として用ひられたに止まり、戦争の内容をとらへようとしてはをらぬ。

戦争そのものを描かうとする困難をあへてしたもの、向井潤吉の「突撃」であつた。その技術は相當に目的にそふて一つの成功を見せてゐる。しかし藝術的批判にはどこまでたへうるであらうか。尋常な寫生的作品の多いうちで、清水登之が示した前衛的様式化の仕事は、朝井閑右衛門の異常な感覺的表現になる畫面とともに、異色あるものとして興味をひいた。記録的な戦争記念畫には確實な寫實主義の技術が要求されるとともに、藝術作品としてはさま／＼な表現の可能が、戦争畫の場合にも當然あり得ることを示唆したものであ

る。

畫壇の活動がこの種のものののみであつた譯では無論ない。春秋の季節には各種の團體きそつて例年にかはらぬ展覽會を開いた。官展系の作家による諸團體も、國畫會、春陽會、獨立美術協會などいはゆる在野團體も、その内容に至つては、むしろあまりに事變色がなさすぎるのが意外とされる位であつた。國展には梅原龍三郎の「城山」「竹窓裸婦」が中心をなし、それに青山義雄が一つの新たな勢力として、その甘美な色彩主義が多くの追隨者を出してゐることが目だつ。春陽會は相變らずの藝術境に籠つてゐる特記する程の變化も示さなかつた。

新時代の意識を常にとり入れてゐる點で、獨立展の動きを見のがすことはできぬ。この會は昨年度名の會員と別れ、動搖が傳へられもしたが、青年の間に支持者多く、内容に多少の變化を加へつ一つの分野に活動を示した。新勢力と見られるものは前衛派の勃興である。會員の中でこの傾向を代表するものは福澤一郎で、本年の作品「雲」(夜)(夕)(晝)の三部作はすこぶる注目されるものであつた。その他には日本の作品を志して一つの様式を創り出してゐる兒島善三郎や、大陸に畫題をとつてこの會らしい製作を示す中山巍、鈴木保徳などがある。

二科會は二十五回の展覽會を重ね、その歴史的使命はすでに終つて、今では雜然たる寄合世帯の觀がある。全體として藝術的に低調なことは惜まれるが、作品が多數であるだけに、個々のものに

ついては相當に興味ある仕事を見出すのは、やはり洋畫壇における一つの大勢力たるの位置を失はぬ所以であらう。今年は事變室を設けてその關係の作品を蒐めたことは一つの試みであつたが、既述の諸作のほか特記すべきほどのものを見なかつた。會員の中で最も活動を示したのは藤田嗣治である。出征をとり扱つた「島の訣別」のわざとらしさはとらぬが、琉球風俗を描いた「客人」その他數點は、地方色の感興が横溢してすぐれた作品となつた。

文展では既述の如く、外形上の空氣を一新したが、内容にも幾分の變化を見せた。在野の作家たちがいくらか加はつて異色をそへたことは興味もたれたが、それらは趣味的な要素がかつて、技術上の水準では官展系作品に及ばぬものが多いといふ評も行はれた。從來の空疎な大畫面がなくなつたことは欣ばしいが、その一部分を切りとつたやうな畫面ではなほさら見るにたへぬ。大作をこなす練習のみに苦心してゐる青年作家のものに、その弊がないとはいへなかつた。

形が揃ふとともに、質の上でもほゞ平均した成績であつた。藤島武二の「耕して天に到る」、中澤弘光の「北京萬字樓」、中村研一の「室内」、齋藤與里の「曉の金剛山」、梅原龍三郎の「裸婦扇」などがおもな收穫として記憶される。

今年第二回展を開いた一水會と、第三回を重ねた新制作派協會とは、それ／＼畫壇における位置を確定した觀がある。前者は溫雅な寫實主義を、後者は奔放な近代的行動主義ともいふべき特色を

示してゐる。前者は後進養成機關の如く、後者は同人の氣まゝな發表機關の如くにも見える。後者では小磯良平の「慰ふ踊子達」が衆目をひいた。これらのほか大小の公募展、同人展、個展などたえず開かれ、展覽會の盛なること洋畫壇に及ぶものはない。同人展の主なものとして新美術家協會は十周年展を開きその成績を注目させた。上杜會も興味をもたせるものである。宮本三郎、田村孝之介、栗原信の三名は今年朱玄會を作つて第一回展を開いた。畫商の主催としては岡田三郎助、和田英作、和田三造の三名を會員とする上弦會が出来た。

個展を開いた作家は、梅原龍三郎、藤島武二、和田英作、南薫造などの大家を初めとし、かぞへきれぬほどである。彭城貞徳の珍しい個展もあつた。梅原の個展は充實した彼の近業を示すものとして特に目だつたものの一つであつた。昨年新制作派協會に加はつた野田英夫は、アメリカに學んだ特異の畫風を示し、その鋭い才能とともに興味と期待を抱かせるものがある。

近年大いに流行の勢を見せた前衛派の運動にはいくらかの動きが見られ、エコール・ド・東京その他二三集團の解散、結成などが行はれた。二科展出品者による九室會の結成なども記録される。

## 彫刻

材料及び表現の特性から見て、彫刻は最も永久性のある記念碑的製作に適してゐることは、古來幾多の名作が教へる所である。彫刻が事件の描寫

や説明に不適當であることは、一面、複雑な内容を單純な形に包含させ、象徵させ、それだけにかへつて内潜的な力と永遠性とを具へるものといへる。彫刻家の間にはゆるるモニユメンタルな製作を目ざして、その研究に志すものが近年多く見られるやうになつたことは、彫刻の本質に鑑みて自然であり、わが彫刻界の進歩のために欣ばしいことといはねばならぬ。

現在においては、遺憾ながら彫刻は未だ不振である。繪畫に比して、彫刻は多くの場合從屬的地位におかれ、置物としての小品が僅に一部に鑑賞されるほか、世人は彫刻に對してほとんど興味と關心を示さない。夥しい市井の繪畫展覽會に伍して、彫刻展の開かれるものはかぞへるほどもなく、彫刻の専門雜誌はおろか、多數の美術雜誌の取扱ひは沈黙か或はややく申譯の程度である。しかしそれに對しては、世人の無理解をせめるよりも、やはり從來の作家たちが、あまりにも藝術的に興味ある製作を示さなかつたことを反省しなければなるまい。彫刻が、習作的な寫實主義や、表面の形似、感覺や味の問題に低徊してゐるかぎり、現狀を脱し得ないであらう。進歩的な作家たちが、こゝを脱して造型性の本質をとらへようと苦心する努力は尊重さるべきであり、この氣運が見えつゝあることに多大の望みが囑せられる。

純粹な彫塑團體として、構造社の研究的態度は常に興味をひく所であるが、今年は充實した成績を見せず、物たらしめ觀があつた。「四角錐をなす群像」その他多數を作つた安永良徳は最も旺盛な

創作力を示すが、奔放にすぎる才氣がこの作家に禍してゐることを惜む。第三部會、日本木彫會などの無氣力は遺憾である。前者には事變に關した取材もいくつか現れたが、日名子實三の小品が達者な腕を示してゐる程度で、舉ぐべきものを見なかつた。池田勇八や石川確治の板彫りの仕事は彫刻に背をむけたもので、指導的責任をもつ人々がこの態度をとつては、同會の彫刻界における存在は忘れられてしまふであらう。

モニュメンタルな作風の研究と、新鮮な造型意識をつかまうと努力する點で、二科會彫塑部と國畫會彫塑部とはそれ／＼に興味をひくものがある。前者では指導的位置にゐる渡邊義知が今年は出品を見せず、後者では、同様な清水多嘉示が大作「記念碑『海の荒鷲』の一部」を作つて、なまなましい事變にふれるとともに、記念像の一つの型を提出した。この方向の代表的作品にあぐべきものであらう。しかしこれらの會に見る作品の多くは、未だ摸索的狀態にあり、技術上の幼稚さを脱しきれない。

院展彫塑部には木彫が多く、また味で見るべき興味ある作家、新海竹藏、宮本重良、松原松造などの人々があるが、現代彫刻の進展の上に大きな役割を期待することは困難である。平櫛田中の「鏡獅子試作」は、彼がこの主題の完成に辛苦する熱情と藝術的良心とを示す點で、敬意を禁じ得ぬものであつた。その他に主線美術協會、日本彫刻家協會などの團體もそれ／＼展覽會を開いたが、特記する程の成績も示さなかつた。

文展は大多數の作家を收容し、數の上では本年は殊に盛況であつた。いはゆる力作必しも質のすぐれたものではないが、ともかく多數の力のこもつた仕事が見られ、他の團體展のふるはぬ今年の彫刻界を代表するにたるものであつた。文展彫刻の主潮として、健實な寫實的作品を目標としてゐることは自然であらうが、その意味で相當の成績をあげたといへる。戦争は彫刻に新たな主題をあたへ、壯嚴な精神と力との表現が、その領域において一層適切な表現を得るものと期待されるのであるが、事變に取材したいくつかの作品で、この期待を満足させるものは少かつた。中村直人の「戦争『三部作望郷』、野々村一男の「渡河戦」などが、中ですぐれたものである。人柱の渡河作業を説明的に寫した浮彫、丸彫の類はいづれも失敗して、かゝる取扱ひが彫刻の本質に適せぬことを教へてゐる。労働やスポーツに取材したものでは、藤野舜正の「銃後工場の護り」が代表的な出来であつた。

寫實主義的なもののほか、文展にはなほ、佛像の精神を學ぶもの、アルカイズムに範をとるものなども見られ、それ／＼の發展に期待させる。木彫で富永朝堂の「大虚連作の内（谷風）」は創意ある仕事で、注目すべき成績を示した。概して先輩の作品よりも、新進のうちに質のすぐれたものが現れつゝあることは、將來のために心強い。議事堂に飾られた三名の憲政功勞者の像をはじめ、記念碑的銅像は相變らず諸方に立てられた。中には満洲に建設された朝倉文夫の「小村侯像」

や北村西望の「兒玉大將騎馬像」の如き巨像もある。銅の制限はこの方面にも悩みを加へることとなり、代用材料としてセメントその他のものの研究も行はれてゐるが、その完成も必要ながら、從來あまりに多い退屈な「銅像」に對する、藝術的反省が要望される。

根津嘉一郎の發願によつて鑄造中の朝霞の「釋迦大佛像」（松田尚之作）は、坐佛で總高五十一尺といふが、銅制限のため一時中止をよぎなくされた。なほ附言すべきは近年諸方に流行する大佛の建立で、本年は、長野縣湯田中に百尺をこえる觀音像が立てられた。信仰の問題に關するとはいへ、この種のものの多くが藝術的に劣惡なことは當然で、大きさと永久性とに鑑みて影響の憂ふべきものが少くない。信仰の對象であるだけに、なほさら慎重な考慮を望むものである。

## 工 藝

事變の影響を直接に、實質的に、最も強くうけたものは工藝と建築とであつた。建築は消極的な影響のみで、全く停頓をよぎなくされた形であるが、工藝は國策の方向に従つて積極的な活動を示し、重大な轉回を行ふこととなつた。今年の工藝界に課せられた最も大きな問題は、第一に物資の制限とこれに伴ふ代用品の研究であり、第二に國際收支改善策としての輸出工藝の振興である。

戰時における物資の制限はまづ金屬に最も強化された。昨年末の金使用規則について、四月には銅使用制限規則改正、銑鐵鑄物製造制限令、七月

には鋼製品製造制限令、鉛、亜鉛、錫等使用制限規則、八月には銅使用制限規則改正、金使用規則改正などが相ついで發令され、一般に工藝品の金屬使用が禁ぜられた。その他輸入品はもとより、諸種の物資について統制が行はれ、殊に産業工藝の方面では大きな打撃をかうむることとなつた。

産業工藝を指導する商工當局では、その對策を急務とし、例年初夏の恆例とされる商工展も延期して本年中は開かず、業者に對する應急處置をそれ／＼講ずる一方、數次にわたる各部門の工藝關係技術官會議では、資源開發、代用原料の研究、輸出振興の方策などを主題として協議をかさね、或は業者を集めて代用品懇談會を開くなどの努力を示し、一方從來の輸出工藝展を貿易局輸出工藝展として開催し、輸出工藝獎勵に力をつくした。工藝指導所をはじめ地方指導機關などの努力も専らこの方向に集中された。

しかしこれは主として産業工藝の部門についてである。産業は平常の作業を一時中絶させても輸出の製品に全力を傾けなければならぬが、わが國の工藝がすべて輸出向になる譯にはゆかぬ。産業工藝、或は輸出工藝を優秀ならしむるには、その根柢に自由な藝術的創作が獎勵されなければならぬ。輸出工藝では仕向先の外國人の趣味、用途に適應させることが第一條件とされ、それには先方の生活に最も適合した器具、換言すれば巧妙な模倣が成功する場合もあり、また日本特有の材料技術を用ひた―彼から見れば異國情趣の―味が喜ばれることもある。いつれにせよわが國の工藝と

しては變質的なものとならざるを得ない。

こゝに輸出工藝の困難さがあるが、從來の輸出工藝品の不評に鑑みて、藝術的意匠の貧困さはその最も致命的な缺陷である。その意味の功利的要求からも、敢て輸出を目的とし、或は産業を目的としない純粹に藝術的立場からの工藝が發達し、豊富にならなければならぬのである。本年の工藝界は俄かな時世の變動とともにこの難問題に逢着し、對策に腐心しつゝ、しばしためらふ如き様子を見せた。

しかし藝術的な創作獎勵の必要は當然認められて、材料制限にもある緩和が講ぜられ、工藝界も、展覽會その他に現れた所では、例年とほゞ變りのない歩みを見せたことは幸ひであつた。代用材料の問題も、文展に高村豐周がY合金の使用を見せて注意をひいたほかは、一般の美術及び工藝展では格別新なものを見なかつた。

文展は藝術的工藝の中心と見られてをり、大多數の有力作家をあつめてゐる點で、その代表的なものであることに變りはない。從來官展の工藝が、技術尊重の弊としてしば／＼有閑的な豪華趣味となつて非難もされたが、今年の成績は全體として絢爛華美な風潮が影をひそめ、近代感覺をねらふ生硬な惡趣味も減じ、概して質實な風が見えた。特に日本的な傳統を重んじ、古典の美を生かさうとする傾向が注意をひく所であつた。これは一般に日本主義的な時代の思潮の現れと見るべきであらうが、他面輸出向産業工藝の風潮に對し、前述の意味の藝術的立場を守らうとする、作家の

反省とも見られぬではない。

今年もやはり金工、漆工に佳作が多く、中で彫金に新鮮味のあるよい仕事が多くなつたことが認められた。陶磁の不振は遺憾である。工藝にも戦争がとり扱はれたことは興味がある。大庭一晃の「彫刻硝子ストーブ前衛立」はその類で技法的な面白さを見せた。染織で繪畫模倣の戦争圖その他は甚だ低調である。

工藝を生活に結びつけ、或は藝術を産業に結びつけようとする實在工藝美術會の運動は、工藝界に獨自の位置を占めてすこぶる注目をひいてゐるが、今年第三回展を開いた成績は、期待が大きだけに失望を禁じがたいものがあつた。前述のやうな今年の特殊な事情が原因となつた故もあらうが、出品作の多くが甚だ困迷のさまを見せてゐる。この會の一つの特色である合理主義も、作品の上でそれに徹底せぬうちに、早くもゆき詰りを來してゐるのではないかと思はれるふしもあつた。

團體の活動としてはなほ京都工藝院、日本漆藝院、國畫會工藝部、創工社展、工人社などが主なものとしてかぞへられ、その他にも同人展、個展など多く開かれ、又人形の流行も近年の風潮として盛であつた。國展の工藝部は、富本憲吉の陶器諸作に勉強ぶりが見られるとともに、全體として充實した成績を示した。團體ではないが、日本民藝館が諸種の展覧を催して、その主張を示す活動を行つたことも記憶される。

工藝指導機關の贊助出品が、實在展などに見ら



れたが、材料研究など科學的方面の努力は十分に認められるものの、意匠の點で甚だしく劣惡なことは速かな改善を必要とすべく、輸出工藝の問題に鑑みて、いよゝその重要さを指摘せずにはをられぬのである。

## 建 築

昨年十月の鐵鋼工作物築造許可規則の公布以來本年度に入つてつゞゝに公布せられた建築制限の諸規則（鐵鋼工作物築造許可規則改正、鋼使用制限改正、間接には銑鐵鑄物製造制限令、鋼製品製造制限令、米松販賣取締規則等）、及び事實上建築を困難ならしむるに至つた材料及び勞力の不足と急激な昂騰（昭和十一年を基準とする同十三年九月の建築費指數は、鐵筋コンクリートのビルディングに於て一七九、木造住宅に於て一八四。以上建築年鑑による）により、今年度起工された大建築は、時局産業の工場をのぞいては、ほとんど皆無なるは勿論、前年或はその以前に起工されたものも、工事なかばで中止するに至つたもの、或は規模を縮小するのやむなきに至つたものもあり、中には、銀座松坂屋の如く、地階の建造のみ許されて、地上建築は中止するに至つたものさへ生じた。

かくして今年度竣工した大建築は僅少ではあつたが、世界に誇るべき優秀作品の數においては、例年にまさるとも劣らぬ成果を示したのは欣ばしい。土浦龜城の強羅ホテル、堀口捨巳の大島測候所、村野藤吾の大庄村役場、山口蚊象の黒部川第二發電所（日本電力の技術部と共同設計）、渡邊仁及

び松本與作の第一相互館等は、みなそれゝの意匠において、日本建築史上特筆さるべきものであらう。このほかにも名古屋逓信局、聖母女學校講堂等すぐれた建築は少くない。

第一相互館は、建築美の上からはよりよき取扱ひも考へられようが、書類の保護を第一條件として、天災、空襲などの災害に對する安全率を極度に高めることを目的とし、しかもそれを合理的に解決すべく、この目的からくる頑固さを思ひきつて強調したのは、量の美の表出に細部に至る迄神經を用ひた周到さによつて、相當な成果を示してゐる。しかもこの大建築を劃期的ならしめるものは、さうした美術的意匠にあるのではなく、潜函工事によつて第三期層まで掘り下げた基礎工事やあらゆる災害に對して非常な強固性をもつ構造、及び内部の衛生設備や、事務を圓滑ならしむべき機械設備である。

第一相互館についてなほ一つ特記すべき點は、このわが國保險金融界の一王座を占める營利會社の大殿堂が、従來いはゆる財閥の殿堂の壯麗なルネッサンス風を固守してきたのに反し、前年度の日産館について、合理主義への一步を進めたことである。たとへ一步とはいへ、舊態の歐米風な壯麗さへの執着を最も強く示したこの種の建築にさへ、材料及び構造自體の美を發揮しようとする傾向が認められるほど、合理主義は一般の風潮となつて來たのである。

さらに進んで、鐵骨鐵筋コンクリートなる新しい構造體に即して、わが國人獨特の美意識を盛つ

た建築を創造しようとする氣運は、次第に擴がりかつ深まりつゝある。前述の土浦龜城の強羅ホテル、堀口捨巳の大島測候所、山口蚊象の黒部川發電所等は、さうした氣運の種々な方面の代表作としてあげたわけであるが、このほかになほ筆者の注意を逸した優秀作品もあることであらう。強羅ホテルは、その神經のこまかくゆきとゞいた設計とともに、日本座敷を鐵筋コンクリート建築に合理的に嵌めこんだ點を賞さるべきもの。近代都市の必然に要求すべき耐震耐火の高層建築と、坐禮の日本式生活との調和問題のさしあたりの解決を示してゐる。この問題が、鐵筋コンクリート構造の性質からいつて、比較的容易に解決さるべくして解決されず、鐵筋コンクリートといふと小さな歐風窓の日本間のみ建てられてゐたのは、いはゆる西洋建築の概念と、鐵筋コンクリート建築の概念とが混同されてゐたからであらう。大島測候所は、鐵筋コンクリート建築を、日本的感覺を以て驅使し、しかも材料及び構造に忠實に、構成の遊戲に陥らず、純粹の構造體自體の美を發揮した點で、現代日本建築の傑作といへる。黒部川發電所は、従來日本においては美術的意匠を閑却して、純土木的工事として建設された發電所及びダムを、はじめて建築家の意匠によつて美術的にまとめあげた所に、重大な意義がある。しかもこの場合、建築家はよく技術者と共同して、機能自體の美を發揮し、また周囲の風景と調和せしめるのに成功してゐる。

合理主義を超越して、特異な美術意匠を示した

傑作に、村野藤吾の大庄村役場がある。かゝる傾向のものが、全くの獨創で、しかも非常に美しく造形され得るといふ事實は、現代日本文化の新しい一面と實力とを示すものとして興味があり、昔時の日本建築の形にのみとらはれて、空虚な日本建築様式論をなす前に、一應考へねばならぬ問題である。

意匠の上から特筆すべきものには、ほかにレイモンド設計の東京女子大學禮拜堂及び講堂があるが、これは明かにベレーのレンシー教會堂にその想を得たものである。しかしこの方法がすぐれたコンクリートの意匠法である以上それを採用し、單なる模倣にをはずす、それ自身の美を創造してゐる點は賞すべきであらう。

美術的な造形上の合理主義ではないが、そのプランに徹底的な合理化を行つた作品として注目すべきものに、第一ホテルがある。アメリカ式システムの日本規格化—プランに於ても、尺度に於ても—であり、建築自身としてはとにかく、ホテル設計の合理化としてたしかに一步をすゝめたものといへる。

古典的建築には、本年は優秀作品が少かつたかに見える。日本銀行の増築部分が、明治期の傑作辰野博士の舊館とほりの意匠をとりながら、使用面積増大の必要からか、その上にさらに一階をかさねたことは、もと／＼地上三階のエレヴェーションだけに、全體のプロポーションをすつかりだいなしにしてしまつたのは残念である。

住宅建築は、戦時には住宅が拂底するといふ、

奇妙な、しかもいつもながらの現象があらはれたが、建築費の昂騰や勞力の不足から住宅建築も激減し、建築年鑑の統計によるも、前年度の六大都市の新築住宅棟數六一、四一六に對し、本年は僅に四三、六二八にすぎぬ。これらの住宅は勿論大部分がいはいゆる日本建築であり、昔ながらの大工の手になる建築—殊に數寄屋建築—のうちには、賞讃すべき作品もあることであらうが、雜誌に紹介された建築家の仕事としては、堀口捨巳の山川邸が目だつ。又山口蚊象のF氏邸はその整理された外觀や、玄關及び門の關係のとり扱ひ方に、又山脇巖のN氏邸は内部の空間の工藝的區劃に、それ／＼注目すべきものがある。

小住宅の拂底は、アパート建築の流行に益々拍車をかけた形であるが、まにあはせものの多い中に、鶯塚誠一のグリーンコート・アパートは、日本の一般條件に適した程度において文化的要素をもつた、そして地形をたくみに利用しつゝした、すぐれた設計である。アパート建築には、それだけの利用者への親切はぜひほしいものである。

最後に一言したいのは、大連市公會堂の懸賞設計競技に、優秀な文化的構想をもち、合理的な意匠になる前川健一の設計が、一等に當選したこと、同人のいはゆる「新日本建築」のためのみならず、わが國建築設計競技の進歩として、ひろくわが建築界のために欣ぶべきことであらう。

## その他

時局に際し、物資の制限に關しては既述の如く

様々の處置が講ぜられたが、その中で銅使用制限規則に除外例を設けて、美術展覽會の出品物にはその使用を許したことや、支那事變特別稅法の施行にあたり、多少とも奢侈的性質をおびるものほとんどすべてに互り物品稅を課したにもかゝらず、繪畫、彫刻などの美術品は一般にこれから除外したことなど、文展開催の斷行と思ひあはせて、行政當局の美術に對する特別な考慮がうかはれ、注意をひくものがあつた。

藝術上の活動のほか、美術が一般の社會に働きかけ、國民生活の必需品の一部となりつゝある趨勢は、特に事變を契機として、本年著しく看取される所であつた。美術家の國民的至情から積極的に示した奉仕が、その主要な動因をなすものである。最も顯著な現れとして、傷痍軍人慰問の獻畫運動を忘れることはできぬであらう。療養中の將兵に精神的慰藉を與へるため、繪畫作品を寄贈する運動は、個人的に或は團體的に、たえず行はれたが、まとまつた企てとしては、文部省の斡旋と美術團體の協力で傷痍軍人慰問美術家聯盟が設けられ、全畫壇から三千五百點に餘る多數の作品を陸海軍の病院に贈つた。このほかにも、或は展覽會に小品即賣室を設けてその賣上げを國防費に獻納し、或は傷痍軍人もしくは遺家族を展覽會に無料で優待するなどの心遣ひを示した例は多く、また軍事急がきやボスターの原畫作製、寄贈などによつて、美術家が奉仕した分野はすこぶる廣汎なものがある。軍部その他の當局が示した理解及び援助と、美術家が時局に際して盡した熱誠と

は、過去において全く例を見ぬ所であり、種々の意味からその重要性を認めるとともに、欣快の情を禁ずることができない。

日本萬國博覽會の計畫は延期のやむなきに至つたが、明年アメリカに開かれるニューヨーク及びサンフランシスコの兩萬國博覽會には、積極的に賛同することとなり、政府は二百八十萬圓の豫算を支出、紐育桑港萬國博覽會協會がその事務に當つて準備を進めた。兩者とも日本特設館を設け、現代美術及び工藝について出品が行はれるほか、サンフランシスコには古美術展も併せ開かれる筈で、これには國際文化振興會が出品の選定、蒐集に當り、年末には發送を了した。

防共國ドイツ及びイタリアとの親善關係は益々密接で、本年は日獨文化協定の締結を見るに至つたが、明年ベルリンで開かれる大規模な日本古美術展覽會の準備も、昨秋以來委員會によつて順調に進められ、慎重な選擇による百二十六點の出品を決定、丸尾國寶鑑査官及び福井東北帝大教授附そひのもとに發送した。この中には國寶二十九件重要美術品三十二件を含む名品が網羅され、從來に例を見ぬ本格的な日本美術紹介として、その成果に期待すべきものがある。なほこの展覽會に際し、文化使節の意味で、政府が井上三郎侯を派遣したことも特記されるであらう。

その他主として工藝關係であるが、本年行はれた海外紹介の事業としては、日本工藝品シカゴ陳列會、ライブチツヒ見本市特別出品、ドイツ第一回國際手工業博覽會參加、ジュネーヴにおける國

際庭園都市計畫展覽會出品などが主なものとして記録される。

東京帝室博物館の復興開館と、李王家美術館の竣工開館とは、今年美術館事業の上に見られた特筆すべき二大慶事であつた。御即位記念として復興翼賛會が建設奉獻した帝室博物館本館は、昨年建築落成以來陳列準備を完了し、十一月十日畏くも聖上陛下の行幸を仰ぎ奉つて、めでたく開館された。世界的な大美術館の偉容とともに、開館に際して行はれたわが古美術名品の特別陳列は、吾人の絶大な歡びを禁じ得ぬものであつた。なほこれに伴つて、表慶館が近代美術の陳列にあてられることになつたのも、多年の渴望をいやす一つの方策として重視される所であるが、同館の性質及び規模から見て、近代美術館としての積極的な活動をこれに望むことは無理であらう。

李王家がかねてから美術御獎勵のために御盡力になることは、感銘にたへぬ所であるが、近代美術館として從來公開されてゐた、德壽宮内の石造殿に隣接して新に壯麗な美術館を建設、これを李王家御所藏の古美術品の陳列にあて、兩者をあはせて李王家美術館として開設されたのであつた。

その他各地の博物館、美術館など常の如き活動を示し、古美術に關する特別陳列、展覽會などいくつか開かれた。奈良帝室博物館の繪卷物特別展覽會、恩賜京都博物館の谷文晁遺作展覽會、大阪市立美術館の肉筆浮世繪展覽會、大原美術館の浦上玉堂作品特別展觀などが主なものにかぞへられる。多數の國寶その他の名品をあつめ、大規模

な展覽會として注意をひいたものに、大阪毎日新聞社主催の東洋大美術展覽會と、東京朝日新聞社主催の戰爭美術展覽會とがあつた。

大陸に對する關心のあらはれの一つとして、大同石窟が畫家の興味をひいたことは前にのべたが、學術的研究の立場からは、京都の東方文化研究所によつて、今年同石窟の詳細な調査及び撮影の事業が行はれた。日支兩國の學者によつて東亞文化協議會が設置されたことも記憶さるべく、今後治安の恢復に伴ひ、文化提携の一部門として、藝術上の聯絡親善が重要視されることはいふまでもなく、その方策に關してはまじめに考慮されなければならぬであらう。

# 美術展覽會

一月

## 新自然派協會第三同展(洋)

一月三日—七日 銀座・松坂屋

小城西の社中を以て組織する同會の第三同展で、小城は油繪「吼ゆる海」を出品、陳列總數六十五點。

## 諸作家洋畫展

一月三日—十日 大阪・美術新論社畫廊

## 玉澤潤「青島、金州」洋畫展

一月三日—十一日 大阪・阪急百貨店

作者最初の個展で、青島、金州等の風景小品二十六點を發表した。

## 高橋亮第二同從軍スケッチ展(洋)

一月五日—十日 大阪・美交社

## 東山魁夷滯歐スケッチ展(日)

一月九日—十一日 銀座・松坂屋

作者は昭和八年美術研究のため獨逸に赴き、のち日獨文化協會の交換學生に推薦され、前後二ヶ年留學した。同協會後援の下に滯歐スケッチ百餘點を陳列した。

## 若狹物外南畫展

一月十日—十七日 名古屋・松坂屋

## 武者小路實篤近作小品展(洋)

一月十二日—十五日 吉祥寺・ナナン

## 若山爲三郎洋畫展

一月十二日—十七日 大阪・美術新論社畫廊

## 豐藤勇洋畫展

一月十二日—二十一日 大阪・阪急百貨店

## 東丘社三樹會第二同展(日)

一月十三日—十七日 京都・丸物

美術展覽會(一月)

堂本印象畫塾の有志二十餘名の組織する會で、會員は各々二曲片雙大の作品を發表した。

## 東京毎日新聞社主催日本畫新作展

一月十三日—二十日 銀座・三味堂

東西の諸家二十四名の小品を陳列した。

## 宮脇公實洋畫展

一月十三日—二十二日 新宿・南海畫廊

## 小早川篤四郎戰線スケッチ展(洋)

一月十四日—十六日 神戸・大丸

## 大阪朝日新聞社神戸支局主催

## 日本刀名作展

一月十四日—十七日 神戸・三越

## 神戸日日新聞社主催

## 日本漫畫會展

一月十四日—二十日 銀座・三越

會の創立既に古く、知名の漫畫家を網羅する。油繪、水彩、日本畫等九十餘點を出陳し、事變ものも見られたが、多く低調な滑稽を脱しないものであつた。

## 八煌社第一同展(日)

一月十五日—十七日 京都・朝日會館

## 大森啓助洋畫展

一月十五日—十九日 神戸畫廊

## 沙果會第一同小品展(日)

一月十八日—二十三日 新宿・伊勢丹

## ハンガリー文化資料展

一月十九日 丸ノ内・國際文化振興會

## 熊岡美彦個人展(洋)

一月十九日—二十三日 日本橋・三越

八年ぶりで開いた第二回の個展で、風景を主として近

作油繪五十點を陳列。樺太、臺灣、朝鮮、南支等の寫生を含み、作者の特質を發揮したものであつた。「迴廊奇岩」「佳人禪門」「砂丘夕映」「椿の道(三原山登山道)」等をあげる。

## 羊和會彫金展

一月十九日—二十三日 日本橋・三越

## 楊佐三郎洋畫展

一月十九日—二十三日 大阪・美術新論社畫廊

## 梅原龍三郎作品展觀(洋)

一月二十一日—二十三日 銀座・三味堂

兜屋西川武郎主催。某家所藏の梅原の大正十年より昭和元年までの舊作油繪小品、素描等十七點を展觀した。

## 名古屋新聞社主催日本畫展

一月二十一日—二十七日 名古屋・松坂屋

## ジヌス・オム第一同展(洋)

一月二十二日—二十四日 銀座・紀伊國屋

## 曉友會第一同展(洋)

一月二十二日—二十六日 新宿・天城畫廊

## 多摩帝國美術學校作品展

一月二十二日—二十七日 澁谷・東横百貨店

## 臨田和、春日部たすく二人洋畫展

一月二十二日—三十一日 大阪・阪急百貨店

## 新制作派第二同展(洋)

一月二十二日—二月三日 大阪市立美術館

## 大阪朝日新聞社後援

## 福原武夫個展(洋)

一月二十三日—二月一日 新宿・南海畫廊

## 鈴木長三暹羅風景展(洋)

一月二十四日—二十九日 日本橋・三越

暹羅協會主催。「クメールの遺跡」を初め、シヤム、カンボヂヤ等の風物を描いた油繪四十餘點を展觀した。

## 矢來莊現代日本畫展

一月二十四日—二十九日 日本橋・三越  
美術評論社主催、東西の諸家三十餘名の新作を蒐めた。小川芋銭の水郷風物を寫した紙本淡彩「春堤」、安田

瓢彦の絹本淡彩「菊御作」、川合玉堂の「春渡」等を始め、橋本關雪、西山翠嶂、前田青邨、小林古徑、中村岳陵、堂本印象、菊池契月、上村松園等の出品があつた。

朱玄會第一回洋畫展

一月二十四日—二十九日 日本橋・三越

二科の新會員宮本三郎、田村孝之助、栗原信の三名が新に組織した同人展で、各人十數點の油繪を出陳した。宮本はいはば挿繪的な通俗さを脱しきらないが、賦彩と様式化には獨自の近代的な明快さを有し、筆も達者である。「坐禪婦」「手鏡」などが挙げられる。栗原は常の如く範による特色ある仕事を見せた。

小村大雲新作畫展 (日)

一月二十五日—二十七日 大阪長堀・高島屋

南薰造近作洋畫展

一月二十五日—二十九日 銀座・青樹社

近作の油繪三十二點、風景畫が主である。粗い筆觸、ねつこい色彩を特徴とするが、「子守娘」(西藏)、「高原」「風蕩る」等爽やかなる感興を盛り、格調も高い。

東西大家新作繪畫展 (日)

一月二十五日—三十日 大阪・三越

美術と趣味社主催

第十三回女流畫展 (日)

一月二十五日—三十日 京都・大丸

大毎京都支局主催

NBG第二回展 (洋)

一月二十六日—二十八日 銀座・紀伊國屋

四行會第五回展 (洋)

一月二十六日—三十日 銀座・資生堂

獨立展の新人中尾彰、佐藤英男、池田金之助、竹中三郎等四名の同人展。各作家とも好んで、「發掘」或は「史蹟」等の文學的主題によつて象徴的内容を求めてゐる。中尾彰の諸作が注意された。

「そのモチーフに、岩、長城などが共通に取上げられてゐるが、これは、繪畫から人生的なものへの省察を無意識にやつてゐる憧憬の現はれとも思へるのだ……結局現代青年作家の不安な浮遊した氣持を示すものであり一つの過渡的現象でもあるだらう。」(都評)

猪熊弦一郎個展 (洋)

一月二十六日—三十日 大阪・美術新論社畫廊

佐伯祐三素描淡彩畫展

一月二十六日—三十日 神戸畫廊

野口道方染織工藝小品展

一月二十七日—二月五日 新宿・天城畫廊

女性人形同人第二回人形展

一月二十九日—二月二日 銀座・松坂屋

二月

大森桃太郎第一回富士山畫展 (洋)

二月一日—五日 銀座・資生堂

柏木俊一洋畫展

二月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

富士山を描いた油繪小品二十點を陳列。

現代水彩畫會展

二月一日—六日 日本橋・三越

現代水彩畫會主催。出品者は石井柏亭、石井鶴三はじめ計二十六人。

「三宅克己、丸山曉霞等の變り榮えのしない作品の中に石井柏亭の『早春』は見逃せぬ佳作である。單なる風景描寫ではあるが、水繪の材料を以て油彩に匹敵するの量感をも出してゐるところ、その技巧に敬服する。その他中西利雄の『人物』、赤城泰舒の『岬』等もあるが、春日部たすくの小品『南京陥落の』の才氣も認められよう。」(龍：朝日評)

長谷川昇油繪展  
二月一日—六日 日本橋・三越

出陳作品は裸婦、人物十六點、風景靜物等十五點。技巧的に洗練され、色彩は華麗である。十五號、二十號大のものが多數に上り、中で「裸婦」「スタンドの少女」「鏡の前」「姉妹」等の人物畫が挙げられ、いづれも純粹な繪畫的感興を内容とし、充實した近業を示してゐた。

日本人形社主催人形展

二月一日—六日 銀座・松屋

主として同人の新作、七十點を陳列した。

童寶美術院第八回展

二月一日—七日 日本橋・三越

附第五回大東京女學生製作お人形展

盆子新作陶器の會

二月一日—七日 大阪・阪急百貨店

東西大家日本畫小品展

二月一日—七日 大阪・松坂屋

田川勤次油繪展

二月一日—十日 大阪・阪急百貨店

諸大家新作日本畫展

二月二日—七日 大阪・阪急百貨店

石川菊壽個展 (洋)

二月二日—十一日 新宿・南海畫廊

白日會第十五回美術展 (洋、彫)

二月二日—十三日 東京府美術館

創立十五周年を迎へ、特別陳列として會員富田溫一郎の新舊作三十五點、吉田三郎の彫塑十三點を展觀し、なほ昨年末名譽の戰傷死をとげた會員山内貞の遺作十一點を出陳した。

池部鈞の海の四季を描いた水繪は輕妙な特技を見せ、例年の如く異色がある。中澤弘光の舞妓スケッチも危な氣のないもの。油繪では外に香田勝太、間部時雄、田中



繁吉、野口良一、熊谷登久平、秋元松子、伊藤清永等の作が挙げられる。富田温一郎は技巧無難であるが藝術的陰翳にたぬ憾みがあり、山内貞の遺作は寫實風の習作的作品であつた。ほかに小堀進、荻野康児の水繪が例の如く注意された。

彫塑部は、吉田三郎は精力的であるが感興に乏しく、永原廣その他の作家は多く不振であつた。

應募出品 洋畫一九三五點（六八三名）、彫塑一一二點（三七名）

入選 洋畫二八一點（二〇一名）、彫塑一三點（一二名）

總陳列數 洋畫五六四點、彫塑四〇點

授賞 白日賞 川口榮、山田三郎、古川陽子（以上繪畫）、富田匠美（彫塑）

新會員 田島龜彦、明珍勝友、岩崎良平（以上彫塑）

新會友 飯島八郎、渡邊百合子、古川陽子、佐藤龍雄、大石七風、荻原英一、青山龍水、森靜一、川口榮、島田四郎、谷部正、内田梅吉（以上繪畫）、星野直弘、富田匠美（以上彫塑）

清岡會第一回展（日）

二月三日—七日 銀座・松坂屋

關尚美堂の主催で、世間から注目されてゐる新進日本畫家を選び、新に會を作つたもの。野心的な新藝術團體といふのではなく、それだけ活氣には乏しいが、それだけの特色を示してゐる點で興味はある。作家十一名、作品十九點。谷口富美枝の現代風俗を描いた「秋の娘」「冬の娘」は粗雑さを免れないがスケッチとして才筆を見せ、橋本明治はとりましてわざとらしく、奥村厚一は自然描寫はすなほであるが藝術的なひきしめ方の不足が見られた。

第十三回春台美術展覽會（洋、工）

二月三日—二十日 東京府美術館

本郷繪畫研究所の關係者一同の作品を陳列する恆例の

美術展覽會（二月）

藝展で、太平洋畫會と並べて、いはば舊帝展風油繪技術の温床とも見做し得られよう。陳列數は洋畫二六六點、工藝三八點で、別に松平四郎の遺作一五點、原田虎猪の遺作三〇點を陳べた。

會長の岡田三郎助は老境の高雅な風格を語る逸作「岩越國境」を出品、伊原宇三郎の「水源風景」は固有の手堅さを有し、その他中村研一、辻永、太田三郎、矢島堅

土、有馬さとし等の作品が指導的なもの。山崎坤象、森田元子、高宮一榮、田村一男、伊藤清永、柳瀬俊雄等は

新進の中で比較的注意されたが、低調な説明に終るものが少くない。昨秋上海戦で名譽の戦死をとげた松平は佛

國留學の畫歴を有し、又原田は屢々帝展に入選とともに將來を囑目されてゐたものである。

工藝の陳列では岩田藤七の硝子、林二郎の木工、富樫光成の漆藝が挙げられる。

春台特賞 内藤素、森田元子、高宮一榮、春台賞 宮河久、松浦莫章、柳瀬彌生

立石鐵臣個展（洋）

二月七日—十一日 大阪・美術新論社畫廊

永井久晴第四回作品展（日）

二月七日—十二日 日本橋・高島屋

淡彩水墨畫が主で、陳列數二十點。

早苗會小品展（日）

二月八日—十三日 大阪・大丸

從軍畫家小早川秋聲戰線スケッチ並蒐集品展

二月九日—十七日 京都・丸物

日出新聞社主催

朱明會展（日）

二月十日—十二日 名古屋・十一屋

熊谷守一、野間仁根作品發表二人展（洋）

二月十日—十四日 數寄屋橋・日動畫廊

熊谷は裸婦、靜物、風景等小品二十餘點を出品、特殊

な侘びのある感興を盛るが、時に奇巧に涉つた感がないでもない。野間は油繪六十餘點、水彩その他四十餘點の多數を壁間所狭く出陳した。田園情趣、虫魚、花卉或は空想を独自の感覺で描いてゐる。

山崎隆夫洋畫展

二月十一日—十三日 神戸畫廊

里見勝藏新作展（洋）

二月十一日—十五日 銀座・資生堂

獨立脫會後の作者にとり、個展が重要な製作發表の譯であらう。油繪十七點、例により赤、黄、青等の強い色彩を用ひ、筆致は放膽で、強烈な畫面である。二十五號の「紫陽花」、十二號の「寒椿」は態度に於てゴッホの造型を學んだかにも見え、又「錦山碧湖」は南畫的であつた。總じて、表現手法に於ける苛烈さには親愛を寄せ難いところがあつた。

彩交會第一回展（日）

二月十一日—十七日 名古屋・松坂屋

名古屋出身の京都繪專卒業生を以て組織する。陳列點數四十點。

半弓會第一回洋畫展

二月十一日—十九日 大阪・阪急百貨店

阪急百貨店美術部主催の展覧で、出品者は岡田三郎助、石井柏亭、藤田嗣治、坂本繁二郎、梅原龍三郎、安井會太郎、牧野虎雄、和田三造、田邊至、山下新太郎、曾宮一念の十一名。

歐洲古版畫展

二月十一日—十九日 大阪・阪急百貨店

津川清平近作展（洋）

二月十二日—十六日 神戸畫廊

翠紅會第十三回展（日）

二月十二日—二十日 新宿・伊勢丹

女流作家の同人展で陳列總數約四十點。

佐藤長生個展 (洋)

二月十二日—二十一日 新宿・南海畫廊

日本人形社小品展

二月十三日—十七日 大阪・三越

大谷房吉個展 (洋)

二月十三日—二十日 大阪・美術新論社畫廊

備前燒名工作品展

二月十四日—二十日 日本橋・高島屋

白山卓吉、富田通雄色紙展

二月十五日—十八日 大手町・永樂ビル

大久保青更雛人形小品畫展 (日)

二月十五日—二十日 銀座・三越

永日社第一回試作展 (日)

二月十五日—二十日 新宿・伊勢丹

日本精神宣揚を主題とする作品を展覧。

名取春仙第四回個展 (日)

二月十五日—二十日 新宿・伊勢丹

第一回マーブル人形展

二月十五日—二十日 銀座・三越

日動畫廳鑑賞會 (洋)

二月十五日—二十四日 數寄屋橋・日動畫廳

各派綜合美術工藝小品展

二月十五日—二十五日 新宿・天城畫廊

光風會第二十五回展 (洋)

二月十六日—三月六日 東京府美術館

白馬會の解散後生れた同會は二十七年の星霜を重ねて、本年第二十五回展に及んだ。舊帝展の中堅を會員、會友に擁して、あたかも春の文展の如き觀がある。先輩の出品では岡田三郎助の小品「山中湖」を初めとして、中澤弘光「早春」、小林萬吾「富士」、辻永「春」、「秋」、中村研一「根據地」、寺内萬治郎「裸婦」、太田三郎「采衣」などを擧げる。一方新人層には躊躇なく大畫面を試

みて、いはば挿繪的能力を發揮する傾きが著しく、須田剋太の「海と暗影」、井手坊也の「馬のゐるスキー場」、石川滋彦「ヒュッテの人々」、朝井閑右衛門「放浪者」等がその代表的なものと目される。その他には、島野重之「室内」、川合修二「芽出し頃」、大河内信敬「畫室にて」、森田元子「女人像」、高宮一榮「秋日」等が比較的良質の制作として目をひいた。なほ同會には圖案工藝の一室が設けられ、杉浦非水の「回顧二十五年」と題する舊作圖案の貼まぜ屏風及び山形駒太郎の出品がその主なものであつた。

搬入數 三七二四點、入選數 三七〇點

陳列總數 洋畫四六〇點、圖案工藝四一點

光風特賞 須田剋太、光風賞 西村愿定、新會員 池上浩、橋口康雄、小川智、栢森義、花嚴巖、田中實一、長原坦、黒田頼綱、山下忠平、山崎坤象、水上信雄、白川一郎、杉村淳

新會友 伊藤四郎、田中義夫、高宮一榮、高橋道雄、高坂元三、中谷ミユキ、山中清一郎、益山雅衛、藤井芳子、小林定三、足立眞一郎、白井次郎、本儀信、森田元子、數見定一、中田滿雄

玖窓會第一回展 (日)

二月十七日—二十一日 銀座・資生堂

菅澤幸司、稻垣虎之助等東美校日本畫科の昭和九年度出身者を以て組織する。

朱玄會大阪第一回展 (洋)

二月十七日—二十二日 大阪・西區土佐堀通 午步畫房

島津マネキン部第九回新作展

二月十八日—二十日 神田・島津東京支社

池上巖個展 (洋)

二月十九日—二十日 大阪・美交社

野口道方染色個展

二月十九日—二十日 大阪・美交社

二月二十日—二十八日 新宿・エルテル

田中忠雄個展 (洋)

二月二十日—二十八日 大阪・阪急百貨店

漫畫半折展

二月二十一日—二十二日 丸ノ内・永樂俱樂部

平尾竹霞繪畫展

二月二十二日—二十五日 大阪・三越

京洛在任大衆作家小品畫展 (日)

二月二十二日—二十七日 京都・大丸

三條會新作陶藝展

二月二十二日—二十七日 神戸・大丸

三浦竹泉遺作展

二月二十三日—二十五日 大阪長堀・高島屋

皐月吟社俳畫展

二月二十三日—二十七日 日本橋・白木屋

高間惣七洋畫近作展

二月二十三日—二十七日 大阪・美術新論社畫廊

旺玄社第六回展 (洋)

二月二十四日—三月七日 東京府美術館

牧野虎雄を中心とする同會の公募展で、例年に大差なく寫實的傾向の作品が多いが、概して元氣と覇氣に乏しく、技術的水準の低調さが憾まれる。牧野虎雄の「紅鹿の子百合」「へちまと朝顔」「仙石原初夏」三點は獨自の東洋的感興に成る作であり、「……氣分で繪を描く人に牧野虎雄氏がある、牧野イズムが東洋的であることは又餘りにも觀念的な作畫境であることを物語つてゐる、このごろ「人間牧野」は更に靜定的な情緒と平凡さを加へ又野心がなくなつて來てゐる(都評)なる評は、肯綮に當つたものであらう。會員の作では岩井彌一郎は色が鈍重であるが或る佳きがあり、尾崎三郎の「歡呼の聲に送られて」はスケッチ的な生彩をつかみ、その他田澤八甲市村雄三、坂田虎一、三谷浩三、宮芳平、橋作次郎、能

勢真美等の諸作が注目された。なほ小品室を設けて、會員の趣味的の小品を陳べた。

陳列總數 二百七十三點

新會員 市村雄造、佐藤文雄、中村新次郎、宮芳平、森由太郎、藤村はつる

新會友 佐々木利榮、保科米三、皆見鸚三、村尾榮、野村豐子、廣藤道明、佐藤義太郎、野田政基、橋原康道

丸野豐司、淺田一枝、橋本三郎

旺玄社賞 廣藤道明、中央商會賞 淺田一枝、M賞 野村豐子、王様水彩賞 山下儔、山口力雄

春光會第四回展(洋)

二月二十五日—二十七日 神戸畫廊

フリードランター夫人繪畫展

二月二十五日—二十七日 神戸・大丸

九六會南畫展

二月二十五日—二十七日 神戸・三越

關尚美堂日本畫展

二月二十五日—二十八日 日本橋・東美俱樂部

東西作家十八名を選んで各一點の作品を蒐めた。力作といふよりはむしろ輕快な作が多く、郷倉千靱の「泰山木」、川端龍子の「宿鳩圖」、安田靉彦の「うさぎ」などの佳品を得た。

レ・リラ小品展(洋)

二月二十五日—二十八日 數寄屋橋・日動畫廊

二科展の新人を以て組織し、藤田嗣治、野間仁根、北川民次の賛助出陳があつた。

ウキリー・ザイレル(Willy Zeller) 油繪展

二月二十五日—二十八日 數寄屋橋・日動畫廊

後援、ドイツ代理大使、スペイン公使、ボルトガル公使、下郷傳平

第四回日大藝術科美術部展(洋、彫)

美術展覽會(三月)

二月二十五日—二十八日 銀座・紀伊國屋

現代大家日本畫展

二月二十五日—二十八日 大阪・南海高島屋

現代名工逸作品展

二月二十五日—二十八日 大阪・南海高島屋

武者小路實篤日本畫個展

二月二十六日—三月四日 新宿・天城畫廊

新美術家協會十周年記念展(洋)

二月二十六日—三月七日 東京府美術館

舊鉦人社の創立以來本年は十周年に相當する。同會は二科の會友を中心とし、毎春同人展を開催して近年その充實した勉強ぶりが注目せらるゝに至り、春の主要な展覽會の一つに擧げられる。

出品者二十五名、陳列總數百十六點。宮本三郎の賛助出品「青い敷物」は觀照の俗を脱しないが健筆を注目され、松本弘二は相變らず塗りの仕事に獨自の好みを見せる。田邊三重松の「雪晴れの小みち」は描寫の獨自の様式化に力めて面白い出来であつた。服部正一郎も自分の様式を創り、中で「早春高原」が擧げられる。寺田竹雄の「ボーゲム」はアメリカ風の壁畫的構成に特色を發揮した。その他、近藤光紀は穩かな畫風に最近深みを加へ、外に伊藤繼郎、金子博信、新海覺雄、早川國彦等の諸作が注意された。

### 三 月

故高木長葉遺作展(日)

三月一日—五日 銀座・養生堂

昭和十二年四月逝去した故高木長葉の遺作三點、「松林」「奥多摩」「火藥庫の土手」及び小林古徑、前田青邨、奥村土牛、石井柏亭、川島理一郎の賛助出品を陳列した。

大阪美術第二十四回展(日)

三月一日—五日 大阪・三越

大阪三越が毎春主催する日本畫の公募展で、本年は西山翠嶺、西村五雲、堂本印象、中村大三郎、宇田萩邨、山口華楊、矢野橋村、福田平八郎、菊池契月、北野恆富、水田竹圃、菅橋彦に鑑査を委嘱して開いた。

遠山陽子洋畫展

三月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

熊谷守一、野間仁根二人展(洋)

三月一日—五日 神戸畫廊

小早川篤四郎 戰線報告スケッチ展(洋)

三月一日—五日 彦根・丸菱

本心舎第二回彫刻展

三月一日—六日 日本橋・高島屋

吉田白嶺の社中、岡村進、林是、松村外次郎、中村直人等を以て組織する同人展で、木彫の外にブロンズ、乾漆等三十點ばかりを陳列した。いづれも小品で、白嶺の木彫「I氏山の幸」は洋服姿の全身肖像で堅實な小品であつた。

木島柳鷗觀音畫像展(日)

三月一日—六日 新宿・伊勢丹

アサヒ漫畫會同人色紙漫畫展

三月一日—六日 京城・三中井

矢野橋村、赤松雲嶺、水田竹圃、水田硯山南畫展

三月一日—七日 名古屋・松坂屋

松坂屋美術部主催

フランス繪畫展

三月一日—七日 大阪・松坂屋

日佛畫堂主催

春秋會第十八回洋畫展

三月一日—十日 大阪・阪急百貨店

巴人社第五回展(洋)

三月二日—六日 銀座・紀伊國屋



井井會新作發表會 (日)

三月三日—六日 東京美術俱樂部

宮崎井南居主催、東京の廣島晃市、堅山南風、木村棲雲、奥村土牛、田中咄哉州、京都の小野竹喬、山口華楊金島桂華、宇田萩郎、徳岡神泉の十名によつて新に組織された會で、各人二點づつの作品を陳列、出品の未着など不揃ひの憾はあつたが清新な好展觀であつた。中で堅山南風「白雨」、斜陽、田中咄哉州「沙雁」「那須野」二人の作は際だつてすぐれ、頗る光彩にとむできであつた。

市民の建築展

三月三日—六日 大阪市立美術館

渡邊氏舊蒐集洋畫賣立展觀

三月三日—七日 銀座・青樹社

青樹社主催、渡邊六郎舊蒐集洋畫の賣立で、元「方寸」同人の舊作が主となつてゐる。油繪では山本鼎、森田恆友、小杉未醒、坂本繁二郎の滯佛諸作、水彩デッサンでは石井柏亭、山本鼎の舊作が多数見られた。陳列數油繪七十六點、水彩畫稿八十五點。

島根縣第三回工藝品競技展

三月三日—七日 松江商工會議所

島根縣物産獎勵館及び島根縣工藝協會の主催、審査は山崎覺太郎を委員長として、漆器、陶器、木竹、金屬、瑪瑙製品等の入選作を陳列した。外に仙臺工藝指導所出品の參考品をならべた。

濱交會第十二回洋畫展

三月三日—七日 横濱・野澤屋

内藤銀策畫贊個展

三月四日—六日 神田・東京堂

早春社第一回展 (日)

三月四日—六日 京都・大丸

川村曼舟主宰の早苗會内の新人を以て組織する會の展

觀。

白日莊主催東都大家小品畫展

三月四日—十日 銀座・三越

東西日本畫展

三月五日—十日 日本橋・白木屋

伊藤繼郎個展 (洋)

三月六日—十日 數寄屋橋・日動畫廊

作者は關西在住の二科會會友である。室内人物、靜物等を畫題とし、重厚なマチエール、朦朧たる寫形に異色があり、未だ洗練に乏しいが、色彩構圖に洒落れた機微を示して注目されてゐる。作品數三十九點。

純正美術綜合展 (日、洋、彫)

三月六日—十三日 大阪市立美術館

垣見宣修主催

古代染織紋樣圖案第七回展

三月七日 大禮記念京都美術館

西村五郎洋畫個展

三月七日—十一日 大阪・美術新論社畫廊

三和會特選新作陶磁展

三月七日—十二日 日本橋・高島屋

高島屋美術部主催

那智瀧子綜合服飾展

三月八日—十三日 大阪長堀・高島屋

仲田菊代洋畫個人展

三月九日—十三日 銀座・資生堂

作者は一水會の出品者で油繪二十四點を發表した。

武藤雙葉集泰西版畫展

三月九日—十三日 上野・松坂屋

春虹會第四回展 (日)

三月九日—十四日 日本橋・三越

京都畫壇の代表的作家十七名を會員として、三越主催、

東京及び大阪に開催するこの會は、毎春行事の主な一つとして注意される所、各作家夫々の境地を示しつゝ、全體として京都畫壇の傾向を窺はせて興味深い。各人一點づつの出品、いづれもそのない技巧で纏められた相當の力作で、躍進的なものは見られないが、上村松園の「うつらう春」、菊池契月の「斜陽」、金島桂華の「暮春」など精進の跡を見るべく、神原紫峰の「鳥骨鶏」、福田平八郎の「大根」また夫々の特色ある仕事として注意をひくものであつた。

出品目録

日向	石崎	光裕	春宵	中村大三郎
花鳥	西山	翠輝	うつらう春	上村松園
麗春	西村	五雲	芥子の花	宇田萩郎
白鷹	堂本	印象	好日	山口華楊
暮春	徳岡	神泉	萌春	窠本一洋
涼雨	小野	竹喬	大根	福田平八郎
春かすみ	川村	曼舟	鳥骨鶏	神原紫峰
暮春	金島	桂華	斜陽	菊池契月
魚へる車	竹内	栖鳳		

生田花朝、木谷千種近作展 (日)

三月九日—十五日 大阪・阪急百貨店

加賀陶工十人展

三月九日—十七日 大阪・松坂屋

讀畫會第三十一回展 (日)

三月九日—二十四日 東京府美術館

故荒木寛畝の一門及びその系統に屬するものを以て組織する展で、既に古い歴史をもつ。出品畫は何れも一通りの技術を具へ、危な氣はないが同時に進歩的な面に乏しい。荒木十畝の「淺春」を初め、西澤笛畝の「梅雨明けの頃」、森白甫の「憩」、牧野大成の「鯉賣る店」、太田秋民の「漁夫の女」等何れも傳統的な確かな技術を示すもの。以上に對し、新人の海老原南夷の「灰貝工場」、岡世紀の「犬と小鳥」、中島晃華の「かわうそ」等は洋畫化の影響を蒙り效果の稀薄なるを免れぬがこれらが授賞

の選に入つた。他に獎勵賞の松久休光の「水禽」が佳い出来であつた。

搬入数一五二點、入選数七三點 陳列總數八二點、

讀畫賞 海老原南英、獎勵賞 新山草羊、岡世紀、松久休光、佳作 中島晃華

### 久本弘一洋畫展

三月十日—十三日 神戸畫廊

### ル・ブルブル第二回展

三月十日—十四日 大阪・丹平ハウス

### 中京美術大家新作展

三月十日—十四日 名古屋・十一屋

### 中京美術振興會主催

### 太平洋畫會第三十四回展(洋、彫)

三月十日—二十一日 東京府美術館

洋畫境に古い傳統をもつ同會恒例の公募展で、この會には中村不折、丸山曉霞、渡部審也等先輩の出品が見られ、新人の畫風も概ね寫實的で進取的な生彩に乏しい。石井柏亭の「裸形」は凝滞なき佳品、その他に奥瀬英三、高村真夫、多々羅義雄、桑重儀右衛門等の諸作が主なもの。若い作家では安田豊の「前線」があるが平板で鈍い。なほ鶴田吾郎、等々力己吉兩名の北支從軍作品計四十六點及び石井明の滯歐スケッチの特別陳列があり、又故松本金三郎の油繪遺作六點が出陳された。彫刻部は振はない。

陳列數 繪畫三五七點、彫塑一六點、一般搬入總數三三八〇點(五二〇名) 入選數 繪畫一二五點(八五名) 彫塑一三點(二三名)

授賞 太平洋畫會賞 能見三次、會員獎勵賞 相曾秀之助、褒賞 白石久三郎

### 京都一般圖案院展

三月十一日—十二日 大禮記念京都美術館

### 山本鼎新作サムホール展(洋)

美術展覽會(三月)

三月十一日—十五日 數寄屋橋・日動畫廊

小豆島において描いた小品を主とする三十點を陳列した。「夕陽の海」「二本の棕櫚」など廣大な風景を巧みに小畫面に要約し、又「ばら」「夏蜜柑」等の靜物も格調の高いものであつた。

### 南薰造近作洋畫展

三月十一日—二十日 大阪・阪急百貨店

### ドイツ國際手工業博覽會出品作內覽

三月十二日 九ノ内・國際文化振興會

ドイツ政府主催の下に今春ベルリンで開催された國際手工業博覽會には、別項掲載の通り國際文化振興會が本邦を代表して参加し、商工省、外務省、東京府、東京市その他の協力を求めて参加出品の準備に當つたが、出品物發送に先だちその内覽を行つた。出品は合計二〇〇點で、種目は概ね出品規約に基き、手工藝の歴史的資料、現代手工業品及び製作實演、關係文獻、民藝品等に大別された。歴史資料は上古の鏡鑑、古瓦、鏝、江戸時代武家装束、古民藝品等、現代製作品は漆器、竹細工、金工品、日本刀、人形、七寶、染織品、和紙應用品、小木工品、弓等に互る本邦固有の工藝品、日常の器具、雜貨で、尙堆朱楊成、富本憲吉、飯塚琅玕齋、六角紫水等作家の出品も含まれた。出品物の選擇に於て、本邦手工業の特色ある技術を概略紹介した點は多とすべきであらう。(本欄九頁參照)

### 會宮一念素描展

三月十二日—十六日 銀座・三味堂

座右寶刊行會主催、作者の隨筆集「いはの群」の出版を記念しての個展である。

### 多摩帝國美術學校圖案科會展

三月十二日—十七日 日本橋・白木屋

### 堤泰三南畫個展

三月十二日—十七日 大阪・そごう

### 東西諸大家新作畫展(日)

三月十三日—十四日 神戸・神港俱樂部

京都の佐藤梅軒、神戸の佐藤隆三共同主催

### 富山縣工藝品展

三月十三日—十五日 高岡市商工獎勵館

### 縣工藝協會主催

### 清原重以知洋畫個展

三月十三日—十七日 大阪・三越

### 前田竹房齋花籠展

三月十三日—十七日 大阪・三越

### 吉田博一日本畫展

三月十三日—十七日 大阪・美術新論社畫廊

### 楠瀬日年作龍溪硯展

三月十三日—十九日 大阪・三越

### 第八回獨立美術協會展覽會(洋)

三月十三日—四月三日 東京府美術館

近年同會ではいはゆる前衛派が一般應募者の間に擡頭してきた。昨年里見勝藏、伊藤廉等はこの風潮と相容れずして脱退したが、それにより同會發祥以來のフォーヴ的特色の一面が失はれた譯である。一般應募者の前衛派的制作は概ね技術の洗練を缺いて、没個性的に流行をおふものに過ぎず、見るべき仕事は未だ殆んど見當らない。しかし全般的に見て前衛派は近代的造形諸意識を含んでおり、その流行は畫境の新傾向を代表する同會にとつて自然な成行であらう。會員は應募出品の騷擾なるに災されず、各自落ちついて仕事をしつゝある。前衛派に積極的な支持を與へてゐるのは福澤一郎で、他の會員は應募者の風潮にはむしろ放任的な態度を採るかに見えるが、ともかくいづれも新時代的精神と技術を具へて各自の境地を進めてゐることは注目される處であらう。

第一室、兒島善三郎の「箱根」は從來の様式化を大作に試み、大風景を裝飾的、平面的にとり扱つてゐる。濫



境内	福島 重旺	櫻	○鈴木 亜夫	春光	山木 衛	踏切り風景	古川 盛雄	水に遊ぶ少年	富樫 寅平	作品	永井東三郎
白日(紙園精舎 の鏡の音云々)	金谷 義敏	寡婦	田村 一二	花	故明石 友次	花	吉村やす子	夏	同	トルソ	阿部 芳文
花と少女	○川口 軌外	氷稜	同	静物	同	白	米倉 壽仁	三橋 健	同	顕花植物	同
小品	同	ウインド	石井 國美	風景	同	帆船の記念	立川 鶴三郎	秋	同	班目 秀雄	神話
静島	同	雉木山	平田 市郎	空間の誘ひ	荒木 剛	古都噴泉	△熊谷登久平	肖像	同	大久保實雄	敗者
黄色い布れ	同	荷馬車	長島 常吉	郷愁	浅野 研一	バラシユート	同	人物	同	小石原 勉	變貌
二女	大島 巴	畫	同	假説闘牛士	幸 詩	美しき海	同	蒼蒼	同	古澤 秀頼	早贇
横濱風景	佐田 勝	河畔	高見 正一	假説闘牛士	中村 善種	モンスセラなど	同	地表の生涯	同	同	早贇
落日	久保 一雄	赤い家	石 薫	擬装	○清水 登之	空の動	矢橋 尚武	窓の女	同	大塚 耕二	午後
初秋花園	岡村 芳男	風景	田中安太郎	江南戦跡	同	山脈	鐵指 公藏	風景	同	松尾 武義	ハルビン風景
静物	同	雪嶺	兒玉 貞平	作品	菊地 又男	はてしなき城壁	酒井 正	風景	同	山本 祐明	水邊
京橋の屋根	宮島佐一郎	感傷	澤 健太郎	静かなる死	金子 英雄	「黄昏」	小野鐵之助	風景	同	寺坂 正信	魔術の創造
陽春	重見 末造	離散	廣谷 次郎	街と少女	加藤 文生	尾道風景	渡 洋一	室戸印象	同	空野洲繪人	母子
森と橋	齋藤 紅一	鐵屑の山	島田 正次	流れ行く眼	池島勲治郎	風景	同	風景	同	三水 公平	座像
朝霧	文挾 勝	永馬	門脇 耕	結末期	川俣 偉自	パンチユールA	助	回想	同	福島二一郎	夏
大いなる前進	同	海岸	△齋藤 長三	朽木	中島 穰	パンチユールB	同	習作	同	△中間 冊夫	海邊
あねをとと	鳥居 敏	人々のある園	同	枯野の花	柿手 春三	パンチユールC	同	群像A	同	同	運ぶ人
道化の床	同	夕暮の卓	同	破船	安藤かをる	同	同	群像C	同	同	月房
ミネルプの再来	井上 孟	芋晶B	久保 吉文	山	鎌田 知治	同	同	原生林	同	今井 憲一	工房
花菖蒲	高橋 弘二	紅葉	垣内佳太郎	旭岳	服部 木爾	風景	同	海底の園	同	同	風景
浅間山麓風景	同	鷗鷗	長尾 完二	遺跡	榎本 省吾	宇野港	中津瀬忠彦	風景	同	齋藤 求	鐵屑を拾ふ(A)
作品	沼 富次郎	海邊の女	同	崖	同	雲の庭	細野 尚志	空地	同	安田 謙	鳥群と卵
夕映	梅原 茂	風景	水沼 清	植物	岡田 徹	夕陽の矢檣崎	久代 敏貴	郊外	同	森 堯之	海
曲馬	大口 登	作品A	足達 襄	風景	不破 正彦	海と岩	伊藤 和義	冬園	同	同	ふたり
漁師	飛岡 文一	作品B	同	風景	廣木 英雄	史跡	赤星 孝	同	同	同	或る地平線
思慕	狭間 二郎	裸	△菊地 精二	馬	坪内節太郎	嚴	同	同	同	同	神話時代……二
都會	大島 正	蝦夷地	同	林のある風景	宮崎 精一	枯野	同	同	同	同	雲(夜)
静物	宮城 四郎	同想	同	白い鹿	同	少女ト馬	同	同	同	同	雲(夕)
暮雪	西村健次郎	旅の夢	三崎 孝雄	句ひ	島津 冬樹	橋のある風景	同	同	同	同	雲(晝)
スペインの	和田傳太郎	トリチカのある	末定 豊	フランスの女	同	人形と風景のあ	同	同	同	同	飛翔の幻想
子供達	○野口彌太郎	奇術する雲	山下 武夫	裸婦	○林 武	戦捷の郷	高原 政孝	風景	同	同	黄昏の憂鬱
蕃人	同	風景	渡邊 寛治	裸婦	同	海水着	成瀬田鶴子	樹のある風景	同	同	風景
夜のレストラン	同	母子	荒井不可志	風景	直村のぶ子	二女	同	時代的な風景	同	同	自畫像
雪景	藤崎 眞	祈り	小牧源太郎	少女	花	室	山崎 貴英	裸婦坐臥	同	同	イマジナシヨ
TUBA	○鈴木 亜夫	青い塔	高松甚二郎	少女	花	室	山崎 貴英	裸婦坐臥	同	同	イマジナシヨ
丘の上	同	五時間目	同	少女	花	室	山崎 貴英	裸婦坐臥	同	同	イマジナシヨ

美術展覽會 (三月)

赤松	三好 正雄	庭	内屋 雅恵
山容	小松恒太郎	作業場	龍 河
海風	綾川廣太郎	波止場裏	井口奈保江
樹	同	人物	岡部文之助
立石墳地帯	小川原 脩	山と湖	同
旅人(蒙古)	齋田 武夫	相撲(1)	△藤岡 一
玻璃	同	戦争器	同
郊外地	中島英砂緒	相撲(2)	同
港と人	浮島 弘行	風景	鈴木 昌枝
鳥と風	同	人物	同
コング紀行	吉加 江清	石門風景	染谷 葵一
海の粧ひ	高畑 正明	まりつき	矢崎 重信
初春	持田 徹	向島展望	吉田 宗一
晩冬風景	堤田 繁	電光と海	葛見安次郎
園丁と孫たち	加納 辰夫	風景	石原 眞一
コンボジション (馬と子)	新羅 室介	高原の幻影	矢崎 博信
岩に倚る	佐川 敏子	風景	矢崎 牧廣
女達	同	金魚鉢と植物	松本文一郎
天狗道風景	小川 謙	風船	小川マリ子
劍の舞	玉城 實	肖像	峰村リツ子

都筑眞琴個人展 (日)

三月十四日—十九日 日本橋・高島屋  
四條派風の花鳥畫二十一點を出品した。

清尙會第一回展 (日)

三月十五日—十七日 京都・大丸

立體圖案第三回展

三月十五日—十九日 銀座・資生堂

東京高等工藝學校内の高藝彫刻會の主催で、多く石膏によるスタンド照明、花器、時計等の原型試作四十餘點を陳列した。

山田皓齋個展 (洋)

三月十五日—十九日 大阪・ガスピル

飯塚環玕齋花籃展

三月十五日—二十一日 日本橋・三越

鐵道省美術部第八回洋畫展

三月十五日—二十一日 神田・鐵道博物館  
多聞洞展覽會 (日)

三月十六日—十八日 日本橋・東美俱樂部

橋本多聞洞主催、東西の作家三十五名の新作を蒐めた。川端龍子「淡翠粧」、安田靫彦「百合」、菊池契月「家康公少年像」、上村松園「娘」、酒井三良「松籟」、その他川合玉堂、橋本關雪、西村五雲、小林古徑等の出品があった。

新銳繪畫集團第一回作品發表展

三月十六日—二十日 大阪・午歩畫廊

高岡銅漆器染繪輸出見本市

三月十七日—十八日 神戸商工會議所

京都繪專、美工生徒作品展

三月十七日—二十日 大禮記念京都美術館

大野夢風新作魚類畫展 (日)

三月十七日—二十日 神戸畫廊

京都工藝院第二回展

三月十八日—二十日 大禮記念京都美術館

京都工藝界の綜合團體として昨年創立された同院の第二回展で總計百六十五點を陳列した。なほ新進會員の作品を審査の結果左の通り授賞した。

(知事賞)「鸞變羽紋花瓶(陶)」叶松谷(市長賞)「あざみの圖手箱(漆)」平石孝(工藝院賞)「風呂先屏風沼」(染)佐野多景夫(工藝獎勵賞)岩村貞雄、奥村究果、田中貞造、田中保、辻普六、前田良三、砂長伸(東京展記事参照)

東丘社如月會第五回展 (日)

三月十八日—二十日 京都・大丸

堂本印象畫塾の作品展で、出品者の顔ぶれは毎回選抜される。師風に倣はず各々好むまゝの畫風を試みてゐる。印象は双幅「春光秋葉」を賛助出品した。

日本美術學校生徒習作展

三月十八日—二十二日 神田・東京堂  
ムーヴ美術集團展

三月十九日—二十一日 臺北教育會館

第十五回鶴山試作展 (洋)

三月十九日—二十三日 神戸・ブチギヤラリー

東郷青兒油繪小品展

三月十九日—二十三日 京城・三越

油繪小品二十一點、ミニアチュール二十點を陳列。

白御會第二回展 (日)

三月十九日—二十三日 大阪市立美術館

佛蘭西十八、十九世紀版畫展

三月十九日—二十四日 大阪・關西畫廊

佐伯祐三遺作展 (洋)

三月十九日—二十六日 新宿・天城畫廊

天城畫廊主催。故佐伯祐三の油繪、素描等三十四點を蒐集陳列した。

中村大三郎畫塾試作展 (日)

三月十九日—二十七日 大阪・松坂屋

主線美術協會第二回展 (洋、彫)

三月十九日—二十八日 東京府美術館

同會の公募による第二回展。繪畫部では高間惣七が充實した近業を示し、外に堀田清治の大作「夜光」、橋本八百二の「松島」等が主な出品として目に留るが、同部は藝術的統一に缺け、雜然として概ね低調である。これに比して彫刻部には一貫した作品的主張が認められ、單純化への様式的發展を心がける傾向がその一特色として挙げられる。安藤照の「試作」、河内山賢祐の「トルソ」、村田勝四郎の「少女立像」、藤澤古實の「肖像」、小笠原貞弘の「白鳥」等それら追求の過程にあるものとして今後に興味を繋ぎ得るものであつた。臺石に卵形をおいた堀江越の「試作」も一種の感覺が漂ふものであつた。

搬入數 (繪畫)三二五 (彫刻)五七點



陳列數 (繪畫) 一三五 (彫刻) 七三點  
受賞ナシ

文化學院美術部卒業製作展

三月二十一日—二十一日 神田・文化學院

多摩帝國美術學校卒業生成績品展

三月二十一日—二十一日 同校

福與悅夫繪畫展 (日)

三月二十一日—二十四日 大阪・三越

矢野橋村の門人で、南畫二十餘點を發表した。

加藤靜兒近作展 (洋)

三月二十一日—二十五日 名古屋・松坂屋

東海四縣第四回聯合輸出工藝試作展

三月二十一日—二十五日 岐阜商工獎勵館

岐阜縣及東海四縣工藝協會聯合會の主催。岐阜、愛知三重、靜岡の四縣から約八百點の應募出品があり、鑑査の上陳列した。陳列の種目は、普通試作品たる陶磁器、漆工品、金屬品、染織品、木竹品、紙製品、玩具及雜工品、課題試作品たる喫煙具、盆類、テーブルクロスを初め商工省工藝指導所、陶磁器試驗所、瀬戸陶磁器試驗場大阪府立工業獎勵館の試作品、商工省貿易局及岐阜縣工業試驗場の海外蒐集品等であつた。(大朝による)

東陶會第十回展 (陶、硝)

三月二十一日—二十五日 日本橋・三越

顧問板谷波山、宮川香山の外、會員十六名の新作品總計百五十五點を陳列した。一般陶磁器の外に小川雄平、各務鐵三、小柴外一等によつてバート・ド・ヴェールやクリスタルの仕事を加へられてゐる。概して商品的で特に擧ぐべき作品に乏しいが、板谷波山の八點はさすがに光彩あり「青磁立瓜花瓶」「彩磁珍果文水指」等美しいできを示した。

日本彫刻家協會小品展

三月二十一日—二十五日 日本橋・高島屋

高島屋美術部主催。日本彫刻家協會の會員が各自彫像木彫等による小品及び帶留、バックル等の小工藝品を出品した。

六色會第二回工藝品展

三月二十一日—二十五日 銀座・資生堂

香取正彦、各務鐵三、吉田醇一郎、板谷梅樹、宮之原謙等の組織する同人展で、金工、硝子、漆、陶器等の小品を出陳した。

林重義新作油繪展

三月二十一日—二十五日 神戸畫廊

「雪景」「牡丹」等近作油繪十數點を展覧した。

伊谷賢藏洋畫展

三月二十一日—三十一日 大阪・阪急百貨店

井井會關西展 (日)

三月二十二日—二十四日 京都・大丸

林鶴雄第二回洋畫個展

三月二十二日—二十五日 丸ノ内・日本工業俱樂部

近作の油繪四十一點、多く兒童の姿を畫題とする。

連袖會第一回展 (洋)

三月二十二日—二十六日 銀座・青樹社

安井曾太郎に師事する一水會の出品者二十名が組織する會で、安井の贊助出品「薔薇」一點を得て、油繪計二十八點を陳べた。「薔薇」は作者独自の單純化を見せ、會員中では金子博信、中村琢二等が注意された。

富山縣工藝品展

三月二十二日—二十六日 神戸・大丸

加藤靜兒新作油繪展

三月二十二日—二十六日 數寄屋橋・日動畫廊

各地の風景畫、油繪三十點を陳列した。

大久保作次郎個展 (洋)

三月二十二日—二十七日 日本橋・三越

東京に於ける最初の個展で、油繪三十七點を陳列。「海

の幸」「富士」等に巧みぬ畫風を見せてゐた。

木心會第二回彫刻展

三月二十三日—二十六日 大阪・南海高島屋

日本美術院第五回同人作品展 (日、彫)

三月二十三日—二十七日 上野・松坂屋

繪畫二十四點、彫刻十點を陳列。活氣に乏しく、あり來りの手なれた作品といふ程度であるが、それだけ落つきもあり安易に眺められる。眞道黎明の「春曉」、長野草風の「瀧響」などの墨畫があまりに横山大觀の皮相を摸してゐるのは如何なものであらうか。大觀の「白砂青松」は常套を出でず、安田靉彦の「赤人」も振はなかつた。酒井三良の「伊豆三題」は場中最も面白く、荒井寛方の「觀音」も佳作。中村貞以の「少女」は特色を示して愛すべき作。彫塑はいづれも置物の程度であるが、石井鶴三の鑄銅「猫」卓越し、松原松造の乾漆「みづく」は個性的な表現に興味をひく。新海竹藏の「練丹」は人形として好ましい作であつた。

春虹會第四回展 (日)

三月二十三日—二十七日 大阪・三越

東京美術學校卒業製作陳列會

三月二十四日—二十六日 東京美術學校

院友第三回展 (日)

三月二十四日—二十九日 銀座・松坂屋

白朝會第四回油畫展

三月二十四日—三十日 日本橋・高島屋

田邊至、大久保作次郎、吉村芳松、安宅安五郎等八名の同人展で、手輕な風景畫の出品が多く、沈滞の氣味であつた。

川島梅關新作繪畫展

三月二十四日—三十一日 大阪・阪急百貨店

ハンガリー國畫家ヤシツク肉筆畫展

三月二十四日—四月二日 早大演劇博物館

東光會第六回展 (洋)

三月二十四日—四月三日 東京府美術館

齋藤與里、熊岡美彦等を中心とする同會の第六回展で、應募作品二八一二點の中二五七點を入選、之に會員會友の作を合せ、計四一二點を陳列した。例年の畫風に格別の變りもなく、熊岡美彦の支那婦人を描いた「牡丹の庭」「柘榴」は平俗の嫌ひはあるが筆は達者である。齋藤與里の「鳥の娘」はや、調子の低さが目だつた。筆は重いが野口謙藏の「ヒヨドリ」「晩秋一隅」は色彩愉しく、その個性的な進境に注目せしむるものがあつた。その他、佐藤一章、渡邊浩三、岡部晋生、江藤哲、松岡整、山下大五郎、正田二郎等の諸作が挙げられる。

新會員 正田二郎、山下大五郎、井上脩、石本秀雄、森田茂

新會友 江藤哲、田代順七、辻利平、山本清、岸田淑子、松岡正

無鑑査 小貫綾子、松本富太郎、藤田慎治、渡邊義一  
 授賞 (東光賞) 倉馬藏、河原修平 (M氏獎勵賞) 河井達海、二重作龍夫、土橋芳次 (逝去)、筒井茂雄 (K氏獎勵賞) 谷田靜子、安達良雄、熊岡正夫、橋尾整八 (Y氏獎勵賞) 荻名芳夫、大寄丹次郎、田村みつ、松岡正直 (ホルバイン賞) 福本かつる、徳永富士子 (佐藤畫布賞) 栗原正、坪田道夫 (東亞畫布賞) 久門元夫、上田素由

荻青社日本畫展

三月二十五日—二十七日 大禮記念京都美術館

竹内栖鳳門下十一名の同人展で、昨春の大阪における試作展に次で、今回改めて第一回展として開催した。各人數點を出品。池田遼郎「もみぢの高雄」、柴原希祥「實る山村」、川本參江「石佛」等のほか同人の連作「京洛春秋」が出陳された。

大阪高島屋綜合美術第二回展

三月二十五日—二十八日 大阪・高島屋

中京美術大家新作展 (日)

三月二十五日—二十九日 名古屋・十一屋

中京美術振興會主催、新愛知新聞社後援  
 東方美術協會第一回展 (日、工)

三月二十五日—三十一日 京都・朝日會館

青甲社第十一回展 (日)

三月二十六日—二十八日 大禮記念京都美術館

暫く休止してゐた西山翠嶂畫塾の塾展を復活開催したもの。翠嶂の「雨餘」、堂本印象の「女子出定」、客員中村大三郎の「女人」を初め、福田翠光、北野以悦、川上拙以、石川英鳳、福田惠一、樋口富麻呂、秋野不矩、三谷十絲子等の諸作が挙げられる。出品數七十三點。

霸王樹社第四回洋畫展

三月二十六日—三十日 銀座・紀伊國屋

鍍金協會主催金屬美術工藝品展

三月二十六日—三十一日 日本橋・三越

藝苑社主催詩歌題贊東西大家新作小品畫展

三月二十六日—三十一日 日本橋・高島屋

藝苑社主催で日本畫家三十名の小品を蒐め、これに尾上榮舟、大木惇夫、川路柳虹、高濱虛子の題贊詩歌の色紙短冊を添へて展覧した。

上社會第十一回展 (洋)

三月二十六日—四月四日 東京府美術館

昭和二年の東京美術學校洋畫科出身者を以て組織する同窓展で、この會は畫壇の活潑な新人を輩出して、旺んである。會員十九名の作品計九十八點の外に、故植松治郎の遺作二十點を陳列した。猪弦蕉一郎の作品は風俗に對するいはば卑近な耽美を出ないが、その技巧には特別な才能があり、「白き帽子」「顔A」等を挙げ得る。牛島憲之の「石灰焼く島」は點描風の賦彩に特異な工夫を見せ、中西利雄の水彩は極めて技巧的であるが筆致冷く、面白味に乏しい。その他加山四郎の堅牢な畫風を見るべ

く、小磯良平、島野重之、荻野映彦等の寫實的諸作も注意される。故植松の遺作は穩健な寫實になり、「臥裸婦」が力作であつた。

東郷青兒小品展 (洋)

三月二十七日—二十八日 仁川・松屋

田中忠雄洋畫個展

三月二十七日—三十日 神戸畫廊

須賀卯夫個展 (洋)

三月二十七日—三十日 大阪・南海高島屋

獨立小品展 (洋)

三月二十七日—三十一日 數寄屋橋・日動畫廊

獨立の全會員の油繪小品、計四十三點を陳べた。

磁座第一回展 (洋)

三月二十七日—三十一日 新宿・天城畫廊

山崎省三近作展 (洋)

三月二十八日—四月二日 銀座・青樹社

油繪二十五點を出品、春陽會離脱後の作者の近業を示し、注目すべき個展であつた。小豆嶋の橄欖畑を描いた風景畫が主で、外に靜物の類が數點あつた。重厚な灰色の諧調と要約的な筆觸には獨自の素朴な味ひがあり、風景では十二號の「橄欖樹」が挙げられ、靜物では三十號の「畫室の一隅」にこの作者の特質が見られた。

現代大家新作畫茶掛展

三月二十九日—三十一日 茅場町・清水ビル五階

戊辰會第九回展 (日)

三月二十九日—四月二日 日本橋・三越

川合玉堂の門下を以て組織する同會は前年その組織を擴大して充實した制作發表を行つたが、今年も會員の制作より二十八點を厳選してこの展覽會を開いた。出品畫はいづれも二曲半雙に相當する大さのもの。顧問川合玉堂の「朝もや」は無得な行筆にこの大家の造詣を遺憾なく表はした入念な作で、好評を博した。兒玉希望の「朝

暉、「蘆雁」の二幅亦非凡のできといふべく、傳統的技術に創意を加へんとする果敢な企圖を了解させる。村雲大模子の「相武臺早春」は全體の調子を捉へて成功し、藤井觀文の「横」、高田美一の「蒼鷹」の素直な努力を探る。磯部草丘の「木黒野」はやゝ散漫さが惜しまれる。その他川崎求霞「郊外淺春」、山下巖「蓮根探り」、花村晃歡の「東風」等が擧ぐべき佳作であつた。別に會員の合作「四季風物帖」が出陳された。

#### 克堂第二回作陶描畫展

三月二十九日—四月三日 大阪・松坂屋

#### 吉田喜藏日本建國史蹟バステル寫生展

三月二十九日—四月三日 大阪・大丸

#### 創更會第一回展(日)

三月二十九日—四月三日 大阪・大丸

#### 三木翠山第二回個展(日)

三月三十一日—四月二日 大阪・ガスビル

#### 京都五作家陶藝展

三月三十一日—四月三日 大阪・關西畫廊

### 四月

#### 郷土の美術工藝展

四月一日—二日 石川縣工藝指導所

#### 石川縣工藝指導所の竣工記念展

#### 八木博日本畫展

四月一日—三日 銀座・鳩居堂

#### 寄我會第十一回展(日)

四月一日—三日 大禮記念京都美術館

水田竹園社中の南畫展で、出品四十七點。竹園の「寒堤」を初め、水田硯山「石溪新綠」、湯川三舟「海風」、片桐白登「八甲田の初夏」、末藤米園「澤國早春」、立松玉泉「朝霧」等があつた。

#### 白御會第二回展(日)

四月一日—三日 大禮記念京都美術館

京阪在住の日本美術院々友を中心とする集りで、その第二回展を大阪及び京都に於て開催した。會員の作品三十餘點及び小林柯白、眞道黎明、小島一鷺、中島清、中庭煥華等の特別出品を併せて計四十三點を陳列。會員の中では中島榮刀、小松均、佐野光穂、山本大慈、今井紫洗、持田卓二等の諸作が注目された。別に富田家所藏の故溪仙の遺墨、草稿、寫生帳等を展觀した。

#### 軌線美術第一回展(日)

四月一日—三日 京都・河原町ギヤラリー

日本畫の新傾向に屬する山口壯、芝正雄、下川千秋、船田玉樹等の新人が新に結成した同人展。

#### 濤友會第三回洋畫展

四月一日—四日 數寄屋橋・日動畫廊

二科出品者の同人展で、北川民次、野間仁根の賛助出品を併せ四十二點を陳列した。

#### 唯型第二回展(洋)

四月一日—五日 銀座・紀伊國屋

#### 土田夢僊、富田溪仙遺作畫幅展(日)

四月一日—五日 日本橋・高島屋

夢僊十七點、溪仙二十二點を陳列した。

「夢僊がすべて直で行かうとするを溪仙が反對に曲で行かうとする」と云つた趣き、その曲直相抗する處に、これが見所がある。然し夢僊は、力に於てたしかに溪仙に押されながら、二仙の勝敗の分、自らこゝに定らざるを得ないのである。陳列品中、夢僊に於ては、つゝじ、文鳥、溪仙に於ては、菊慈童、花の寺、寛道春風等が眼に入つて面白い。(K・T生、中外商業)

#### 高間惣七第三回個人展(洋)

四月一日—五日 銀座・資生堂

資生堂美術部主催。本年の主線美術展に出品の「水平線の見える室内」「室内」等を交へ近作二十二點を展觀した。色彩に神經を用ひて裝飾的效果を擧げたものが多

く見られた。

#### 岸田劉生遺作展開催委員作品展(洋)

四月一日—五日 麴町・室内社畫堂

#### 橋口康雄個展(洋)

四月一日—五日 新宿・天城畫廊

#### 古瀬素石個人展(日)

四月一日—五日 銀座・松屋

#### 貴道草衣小品畫展(日)

四月一日—五日 大阪・三越

#### 豐岡孝子洋畫展

四月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

#### 現代朝鮮民藝品展

四月一日—六日 日本橋・高島屋

#### 日本民藝館主催

#### 吉田秀吉、小野忠重二人展(洋)

四月一日—七日 上野・美蘭社

#### 田中寅三「海と船」洋畫展

四月一日—七日 大阪・阪急百貨店

#### 現代廿五大家油繪「神國日本」百題展

四月一日—九日 大阪長堀・高島屋

#### 東海美術協會第二十七回(綜合)

四月一日—十日 名古屋・鶴舞公園美術館

東海美術協會主催。恒例の綜合公募展で、應募數は日本畫二七三、洋畫五二九、彫塑二六五、工藝二五八點、入選は日本畫五四、洋畫一九、彫塑二一、工藝五二點、陳列總數約二七〇點であつた。

#### 古賀忠雄個展(洋)

四月二日—四日 麻布會館

#### 東西名家新作表裝展觀

四月二日—四日 芝・東京美術俱樂部

京都の表具師松浦松榮堂並に藤岡光影堂の主催の表裝展觀で、東西諸家三十餘名の出品があつた。中で上村松



園の二尺三寸堅「春」、村上華岳の二尺横「梅柳早春」、橋本關雪「雨意」等を佳品とする。

### 三木辰夫帝大構内エツチング展

四月二日—六日 一ツ橋・學士會館

### 諸大家新作小品畫展 (日)

四月二日—七日 大阪・阪急百貨店

### 春の青龍社第六回展 (日)

四月三日—七日 日本橋・三越

出品資格を秋季展入選者に限り、五十點の搬入作品中三十點を入選とし、これに社人の作品六點を加へて都合三十六點を陳列した。川端龍子の三幅對「戦捷の春」は花鳥畫に時局意識を托したもので、その他に一二の例を除き別に戦時らしい特殊な取材は見られなかつたが、いづれも潑刺とした活氣を見せて、この會の特色とする健闘ぶりを發揮した。坂口一草は「潮風」「雲影」の佳作を示し、加納三樂の「瑞兆」「豊穰」とともに力作。木村鹿之介の「雪」は機智的な狙ひで面白く、市野享の「良梢」は特色をもつて注意をひく。鈴木茂子の「理容」、時田直善の「浦の女」、安西啓明の「梅花圖」、渡邊樺雄の「寒牆」、丸木位里の「ラクダ」などをあげる。

青雲賞「爽秋」渡邊龍三、「大ボーイ」奥田正一、「鳥巴」大塚榮治

### 京都工藝院東京第二回展

四月四日—六日 丸ノ内・商工獎勵館

京都展の出品に若干の増減をして開いたもの。京都における各部門の作家を集めたこの會は、同地工藝界の現状を概観しうる點で興味深い。傳統の地であるだけに一般に穩かな作風を示し、突飛な新しさをおふものは見られず、技術的にはいづれも相當の洗練を示して各人の藝に勵んでゐる。同時に個性的な特質を明瞭にした作に乏しく、たま／＼新工夫の意匠を見せたものは多く敦養の不足をもの語つてゐる。清水六兵衛が燦星、瑛玻、甕

甕、樹皮、魚鱗の五種の同形天目茶碗を出品してゐたのはその精藝を注目させた。清水正太郎の技術も見るべきであるが「赤繪飾皿」はとらない。辻普六の「蟹文壺」は單純な形と釉の效果よく愛すべき作であつた。染織には種々の工夫が見られたが意匠繁雜の厭あるものが多い。その類を脱せぬが山鹿清華の「手織錦壁掛清晏舫(北支萬壽山)」は獨自の表現になつて傑出したものであつた。陶藝七十一、染織二十二、漆藝二十、金工七、木竹四、合計百三十四點の陳列であつた。

### 龍村平藏新作帶地展

四月四日—六日 日本橋・高島屋

### 二科會々員會友小品展 (洋、彫)

四月四日—九日 銀座・青樹社

青樹社主催。陳列數七十二點。會員の出品では藤田嗣治の「私の畫室」は小品ながら洗練された獨目の筆技を見せ、鍋井克之の「草上靜物」は表現に癖があるが感覺的に卓越したものがあつた。正宗得三郎の靜物、中川紀元の風景等も各々の特色を示し、その他北川民次、野間仁根等が注意された。會友は不振、彫刻は川崎榮一の木彫一點が出品された。

### 第四回越佐工藝美術展

四月五日—六日 新潟・不動院

新潟縣出身の工藝家を以て組織する。郷土工藝の振興に資せんとするもので、今回は同人の外に縣下及び在京縣出身作家の作品を公募の上同展を開いた。搬入總數は一八〇點、入選三八點。

越佐賞「桐文卓」内田宗寛、「鑄銅飛鳥文花瓶」池田逸堂、「彫漆香盆」小野修造

### 現代大家揮毫帶地展

四月五日—七日 上野・松坂屋

### 讀畫會展 (日)

四月五日—十日 大阪・大丸

陳列點數三十三點。

### 壽山鈴木雪哉第四回日本畫展

四月五日—十日 新宿・伊勢丹

### 奥瀬英三油繪展

四月六日—十一日 大阪・阪急百貨店

### 第五回大衆向工藝品展

四月六日—十二日 大禮記念京都美術館

### 紫風會日本畫展

四月七日—十日 大阪・松坂屋

### 山口久一洋畫個展

四月七日—十一日 大阪・美術新論社畫廊

### 第五回昭和工藝美術展

四月七日—十二日 日本橋・高島屋

高島屋美術部主催。出品者は文展第四部無鑑査の中堅である各務鐵三、香取正彦、北原三佳、宮之原謙、三村自芳、信田洋、大須賀喬、山本自燼等十五名で、陳列數七十餘點。

### ゴッホ作品研究展

四月七日—二十五日 市川・國府臺病院

式場隆三郎の主催で、ゴッホの模寫を展覧した。

### 岩佐古香第三回作品展 (日)

四月八日 京都・八坂俱樂部

### 光安浩行鑑峯富士展 (洋)

四月八日—十日 福岡縣產業獎勵館

### 中村大三郎畫展 (日)

四月八日—十日 大禮記念京都美術館

中村大三郎畫塾では去る三月の大阪松坂屋における試作展について、第二回の塾展を京都に於て開催した。大三郎の贊助出品「弱法師」二曲片又は遒勁な線、淡雅な色彩により題材の古典的な品格と味を捉へ、最近の力作として注目をひいた。外に、會津勝巳、加藤美代三の授賞作品、福岡玉儒、南家有吉の諸作が好評であつた。尙

過般の松坂屋展の出品畫も一室にまとめて陳列した。  
實用新美術協會第一回展

四月八日—十日 神戸畫廊  
四行會洋畫展

四月八日—十一日 銀座・資生堂  
斑社第二回展(洋)

四月八日—十二日 銀座・紀伊國屋  
銀座三味堂第五回洋畫展

四月八日—十二日 銀座・三味堂  
三味堂主催で藤島武二をはじめ牧野虎雄、中川紀元、金山平三、中川一政、川島理一郎、木村莊八、田邊至等の近作計十點を陳列した。

#### 第十六回表藝展

四月八日—十七日 東京府美術館  
東京表藝師組合主催の例年の表藝展で、出品畫は東西諸家の作品で、總點數三百二十九點、別に徒弟習作品二十七點。

表展賞 小川久雄、推薦 松本包吉、銀賞 根岸福太郎、松谷定之助

#### 日支工藝品博覽會

四月八日—十七日 津山市・鶴山館

#### 新興美術院第一回展(日)

四月八日—十九日 東京府美術館

日本美術院の院友の一部が昨年同院を離脱して結成した新團體で、出品を公募して第一回展を開いた。同人十名の作十二點のほか、入選作三十三點を陳列。茨木杉風の「漁村冬日」六曲一双以下鬼原素俊の「機織」、吉田澄舟の「みゆる秋」、田中案山子の「寛」、小林三季の「本朝妖石傳殺生石由來」、小林渠居の「苗木の春」など丈夫の努力を見せたが、新興運動としての活氣にはなほ物たらしめがみつた。搬入數二百三點。

獎勵賞「濱」淺香金四郎、「池彩」長谷川優策

美術展覽會(四月)

佳作「ガード下のカフェー街」町田兼人、「安居」成田玉泉

同友推舉 以上四名  
須田嘉亭個人展(日)

四月九日—十日 江戸橋・日本商工會館  
第四回越佐工藝美術會展

四月九日—十日 長岡市商工會議所  
朝見香城新作展

四月九日—十一日 名古屋・丸善  
バラを愛する會油繪小品展

四月九日—十三日 數寄屋橋・日動畫廊  
第一回朝鮮畫實藝院展

四月九日—十三日 京城・三越  
秋田美術會第十回展(綜合)

四月九日—十三日 神田・東京堂  
河合卯之助作陶展

四月九日—十四日 大阪・三越  
小絲源太郎油繪展(洋)

四月九日—十五日 大阪・阪急百貨店  
文彌人形展

四月九日—十七日 新宿・三越  
國畫會第十三回展(洋、版、彫、工)

四月九日—二十四日 東京府美術館

昨年會員會友の制を改め總て同人として、繪畫部だけで三十六人の同人を擁するに至つたが、會の中心をなすものは極めて少數の作家で、獨立獨行の境地を占めるものに乏しく、追從的な作家が大部分を示めることはこの會の色彩を統一ある特色のものにしてゐると共に、質の上で脆弱たらしめてゐる。梅原龍三郎が事實上この會を率ゐることに變りはないが、今年は青山義雄の感化が著しく現はれ、その作風に影響された甘美なる色彩主義が會場に横溢した。この傾向は在來の國展の特色と矛盾するものでなく、むしろこれに一層拍車をかけた觀がある。

第一室では庫田寮の「山畑」以下五點が異彩を示した。この作家は獨自の氣象を以て感覺的寫實を超えた繪畫の純粹性を追求せんとする點で、その努力は注目し値する。立石鐵臣の「日輪」その他の諸作は光の描寫を試み

てゐるが粗雑さを免れぬ。第二室、梅原龍三郎は「城山」と「竹窓探婦」とを出品した。いづれも作者の最上の作とはいへぬにしても、丹念な力作で倦むことなき精進を示してゐる。こゝには技術の巧拙を離れた作者の境地が力強く主張され、高價な藝術を形作つてゐる。第三室に宮坂勝、馬越樹太郎、別府貫一郎、柏木俊一等の作品があるが舉ぐべきものなく、第四室では辻愛造、土田文雄の風景畫が注意をひいた。辻は華麗な色彩を主とした寫生で、類型に陥らんとするが自然に忠實な勉強ぶりを見せてゐる。土田の「山間秋景」、益田義信の「外房の夕暮」等を數へてよいであらう。第五室、青山義雄の風景及び靜物の三點はさすがにその行き方に於て群を抜いてゐる。技巧的なものが目だち過ぎるが、大ざっぱに見える仕上げに十分な用意があつて華美な色彩にも拘らず畫面は鞏固であり詩情もある。第六室の河野通勢、椿貞雄の諸作は、夫々の畫風を守り續けて古風に見える點はむしろ尊重すべきであるが、内容に進展なく現代に訴へるものに乏しい。

外に特別陳列としてドラン、ルオー及びスゴンザツクの作品四點が陳列された。

版畫はこの會の特色をなすもので、ある意味で繪畫より興味をひくものがある。川西英、棟方志功、ブノワ恩地孝四郎等の同人夫々特色ある作品を示した。棟方の墨刷六曲一双の大作は、異色はあるが粗大に流れて版畫の味を失つてゐる。

彫刻では清水多嘉示の「記念碑」「海の荒鷲」の一部

はその全計畫を知らぬが、この大作は記念碑的な像として或る成功を見せてゐる。同じ作者による「三浦先生像」もよいできであつた。山内壯夫の浮彫「七生」は幼稚な點はあるが傾向として將來を期待させる。本郷新の「母子像」その他の「壁面への試作」も面白い試みである。吉田芳夫の「農婦木彫原型」個性的なうまさがあり、佐藤忠良の諸作はごまかしのない確かきを見せた。

この會の工藝は藝術的な趣味性を基調とし、屢々手藝的であるが、今年是一般に技術も進み、實用に適し愛玩にたへるものを多く見つけた。會場意識による氣どりや技巧過重のないことはよい。特色ある仕事として注意をひいたものに鈴木椿牛の型染の諸作、福田力三郎の陶器諸作があつた。前者の二曲一双に仕立てた「廿四孝」面白く、後者の「黒繪扁壺」はどつしりした佳作。富本憲吉の「色繪大皿」「色繪大壺」「金欄手大皿」いづれもすぐれた出来であつた。

搬入数	版畫	彫刻	工藝	計
一、四一九	二〇六	一八一	二二二	二、〇一八
入選数	八六	二〇	二五	六九
陳列数	一五九	三二	三七	二〇六
特別陳列	四	〇	〇	四

同人推薦（繪畫部）杉本健吉、馬越樹太郎  
國畫獎學賞（繪畫部）山崎隆夫、小林邦報（彫刻部）  
佐藤忠良（工藝部）福田力三郎  
褒狀（繪畫部）福井敬一、加藤作三（彫刻部）船越保武（工藝部）森好子  
K氏賞（彫刻部）吉田芳夫

出品目録（○同人）

繪畫	商館	松原	英一
女児	石井 照	人日	加藤 作三
窓	○中村 博	早春	同
卓	同	同	同
三人	野口 道方	山畑	○庫田 葵

海松	○庫田 葵	城山	○梅原龍三郎	柿	○佐藤 哲三	丘の道	伊藤 十一
石松	同	竹窓櫻婦	同	夕景	同	ミシンの女	宮本 正名
静物	同	小谷風景	小林 邦報	妻室より	○辻 愛造	湯杓會風景	○仰木 茂
マニキユア	同	婦人像	同	矢櫃	同	自畫像	中村 茂好
放課後	同	ベコニヤ	同	夕景	同	シヤボテンと子供	同
教會堂風景（A）	同	一鵜湖	小松 廣二	溪日	同	秋晴れ（ひまは	東 克己
庭	同	遊魚	旭 五良	漢流	同	春の巴里郊外	○大淵 武夫
日輪	○立石 鐵臣	庭	○村上 巖	川岸	同	ニース	同
ゆふばえ	同	山道	同	奥香落	同	ノートルダム・	同
猫	同	梅林	同	川沿ひ	同	ド・バリ	同
夕暮時（ビレネ	同	風景	依岡 恒喜	窓邊婦人	同	春の丘	同
浴女試作	同	摩周湖	國松 登	或る異人館	同	奈良の秋	同
稿馬	○藤田 太郎	松と人江	○宮田 重雄	伊豆風景	同	子供と雪	松本 満男
海影	同	立てる裸婦	○宮坂 勝	山間秋景	同	畫室	同
斜面のレストラン	同	腰かけたる裸婦	同	暮れゆく海	同	老人	同
教會堂雪景	同	晴天摩周湖	馬越樹太郎	編物	同	ひまはり	同
洋品店圖	同	早春庭	同	長津呂の入江	○眞垣 武勝	窓	同
早春の木々	同	静物	同	顔	同	マダム・シロタ	同
風の日	同	女児横顔	同	大連風景春	永原 織治	六旗莊	○大谷 房吉
室戸風景	同	志樂室と白樺	同	果物と紙風船	八里 茂子	早春の六甲	同
海女達	同	群の木の秋	同	入江	○益田 義信	中央氣象臺前	同
瀧	○山下 品藏	驛を望む	田川 信榮	外房の夕暮	同	多賀風景	○佐藤 豊吾
椿咲く村	同	善福寺	豊田 晴郷	花	同	風景	同
葡萄と梨	同	自畫像	○武者小路實	誠樓	同	春景	○山村 正美
樹影（帝大）	同	静物	同	へうたん	同	濱の杜	同
秋（帝大）	同	大山	○別府貫一郎	白帝城雪景	同	紀南の海	同
海に沿ふ村	同	少年像	○久保 守	少女	同	松樹	同
住吉川風景	同	肖像	同	川下り	同	温室	同
西洋園	同	秋の風景	廣田 旺子	洋蘭	同	子女奏樂圖	同
花と影の静物	同	赤い上着の娘	長谷川正波	かひがら草と猫	同	庭園	同
静物	同	花	同	雪の林道	○仰木ゲルト	卓上静物	○河野 通勢
海の見える風景	同	一鵜湖	○柏木 俊一	スキー道	同	薔薇	同
櫻島風景	同	南豆白濱	同	大海風景	○青山 義雄	夏の日	○椿 真雄
胡人胡歌	同	空地	吉田 勇	静物	同	白菜	同
角山（山海關）	○池邊 貞喜	阿片を喫ふ女	サルワトウレ	夕映の漁村	同	港の朝	同
		森	メルジュエ	一隅	同	水仙	同
		越後の秋	○佐藤 哲三	早春	同	特別陳列	同
						ドラン作	

[illegible]





夜の宿(一)	○木村 葉八	阿寒風景	佐藤 昌風
夜の宿(二)	同	老アイヌ	同
鏡山鳥瞰	同	椿	佐藤 萬郎
(永井荷風氏小説挿繪) 瀬東釣談	同	僕のおモチヤ	同
城趾	○石井 鶴三	如來	吉川 清
紫陽花	同	婦人像	同
レヴュー(一)	同	黄樂山萬福寺	同
レヴュー(二)	同	海邊裸婦	同
クロツキ	同	鳥	同
「宮本武藏」挿繪	同	開拓地秋色	△兼平 英示
「去る日来る日」挿繪	同	スキーの少女	同
アトリエにて	野崎新右衛門	夏衣少女	同
或る男の像	同	管絃團	同
顔	同	鯨鯨	同
飛ぶ鳥	前田藤四郎	妹の像	同
風景	同	静物	同
輪馬	琴塚 英一	ギョメーの印象	同
冬の鹽久津(未成)	○栗田 耀	郷村	石井 彌一郎
サイネリヤ	同	劍澤寺	△楊 佐三郎
アネモネ	佐藤 春夫	さばとおこぜ	同
浴場(一)	同	風景	伊川 廣治
浴場(二)	佐甲 久芳	ハンモックに	廣瀬 進
スラブヤの郊外	同	乗る子供	同
バリ島島の女	兒玉 彦三	白いマント	原田 武男
バナナと海	同	山手風景	同
栗	同	倉の前	佐野 八郎
花	吉田 達磨	藝妓の瀬戸	曾根 靖雅
Kの像	同	若き藝入	矢野 眞風
羅漢像	同	工場地帯	河村 芳枝
枯蓮池	同	奪ひ合ひ	手塚又四郎
蓮の花	同	野外寫生	山田隆三郎
早春の港(夏門)	早川 芳彦	海港風景	同
○田中善之助	同	下の渡し	大森 滋
アネモネ	柴田 恕夫	泉	大久保一郎
椿先	同	供物	同
女 シュミーズ	同	南の春	同
圓柱	同	浅春	西川 武人
アイヌの蠟	佐藤 昌風	座像	關四郎五郎
			三原 繁

美術展覽會(四月)

松の庭	三井 永一	狐火の八重垣姫△齋藤清二郎	四月十四日—十六日 新宿・天城畫廊
花と籠	吉澤 正之	寺小屋	津田青楓第五回個人展(日)
青き皿の果物	同	夏祭即興	四月十四日—十九日 日本橋・高島屋
静物	森 松治	白き橋と子供達	同
父の像	山川 清	檻臥婦人像	同
小豆島早春	同	桃と瓶の静物	同
ミルクを飲む女	同	雪嶺のある風景	同
佐渡戸中風景	同	赤ちやんをあやす秋口	同
アネモネとチュ	同	廊下にて	同
リリッパ	同	掃除のあと	同
頰杖	同	風景	同
舟	同	伊井 兼美	同
沖繩風景	同	コスチューム	同
遺作(一)	舟木 章	磯田 善工	同
遺作(二)	同	△岩田榮之助	同
上總風景	同	風景	同
静物	同	雪の教會堂	同
胸組む女	同	馬小屋	同
石川 武彦	同	西田 秀雄	同
福田翠光第三回個人展(日)	大阪長堀・高島屋		
四月十二日—十四日	大阪長堀・高島屋		
高島屋美術部の主催で、花鳥畫二十餘點を展觀した。			
長谷川昇個展(洋)	大阪・三角堂		
四月十二日—十六日	大阪・三角堂		
第三回NBG洋畫展	銀座・紀伊國屋		
四月十三日—十五日	銀座・紀伊國屋		
方洛繪畫展(日)	大阪・朝日會館		
四月十三日—十五日	大阪・朝日會館		
主催方洛畫伯後援會、後援大阪朝日新聞社			
小城基洋畫展	名古屋・松坂屋		
四月十三日—十六日	名古屋・松坂屋		
常岡卯三郎油繪小品展觀	大阪・三越		
四月十三日—十七日	大阪・三越		
郷土玩具展	愛知縣商工館		
四月十三日—二十二日	愛知縣商工館		
高橋卯八個展(洋)			

四月十四日—十六日 新宿・天城畫廊  
津田青楓第五回個人展(日)  
四月十四日—十九日 日本橋・高島屋  
花卉蔬菜風景畫展覽會として、絹、紙、幅、冊とりまぜ二十五點を陳列。墨技も手に入つて線のこまかい小品と限らず、あらく達筆に相當の大作もこなししてゐた。「京洛名門帳」など作者の特色を示す面白いものであるが、少し粗雑なのが惜まれる。

坂口一草新作畫幅展(日)  
四月十五日—十七日 大阪長堀・高島屋  
近作の花鳥畫十五點、いづれも幅太な裝飾的筆致に特色を示してゐた。

野田英夫作品發表展(洋)  
四月十五日—十九日 敷寄屋橋・日動畫廊  
米國で修業し、昨年歸朝して新制作派協會に加はつた作者の個展で、油繪、素描その他彼地における作品が多いが、日本で描いたものもある。素描にしっかりと技を示し、細線描を多く用ひて油繪も素描的である。鳥瞰圖或はモンタージュ風の構圖を特色とし、描寫に一種の鋭い觀察を見せた。一般にフランス的教養に基づく洋畫界に、別種の特異な畫風を加へたものとして興味深く將來の發展について期待させるものであつた。

青山義雄洋畫個展  
四月十五日—十九日 大阪・美術新論社畫廊  
里見勝藏新作個人展(洋)  
四月十五日—十九日 京城・三越  
故下坂英夫遺作展(洋)  
四月十六日—十八日 日本橋ギヤラリー  
工藝青年派第二回展  
四月十六日—二十日 銀座・紀伊國屋  
最近東京美術學校を卒業した金工の新人野崎南海雄ほか三人の會で、合理主義の作品を試みてゐる。

小磯長平作品展 (洋)

四月十六日—二十日 神戸畫廊

戊辰會繪畫展 (日)

四月十六日—二十一日 大阪・三越

山口舛平舞踊三十題畫展 (日)

四月十六日—二十二日 大阪・阪急百貨店

第五回九州沖繩各縣聯合工藝試作品展

四月十六日—二十二日 沖繩縣會議事堂、沖繩工業指導所

九州沖繩聯合輸出工藝品展の第五回は沖繩縣に於て開催された。陳列數約六〇〇點、その他指導試驗機關の參考品を展示し、全般的に輸出振興を目ざす努力が窺はれた。福岡のゴールドグラスの新製品、綴通の手法を應用したハンドバッグ、竹製品、佐賀の陶磁器、長崎の鼈甲細工、熊本の木製品、鹿兒島の鍋器、大分の竹製品、沖繩の漆器、陶器等夫々各地の特産が輸出貿易の見地から講評の對象となり、有望視されてゐる。(工藝ニュース七ノ五による)

黒田重太郎個展 (洋)

四月十六日—二十三日 大阪・阪急百貨店

日本彫會第七回展

四月十六日—二十五日 東京府美術館

三十九點陳列。創作的感興に乏しく概して匠人的な、それも平易な小品の類が多く、振はぬ展観であつた。木彫の技巧よりも塑造的な人形の如きものが殖えつ、あるやうに見える。又この會のみではないが、古代彫刻に範をとる簡樸な靜的姿態を披ふものが屢々見られるが、生命感に缺けて形骸にとゞまるものが多いことは反省を要する點であらう。三木宗策は「粧」の外佛像の石膏原型數點及び「伽陵頻迦」を出品して努力を示した。その他山脇敏男の二人の裸女を組合せた「春」をあげる。

齊白石近作畫幅展

獨立美術大阪展 (洋)

四月十七日—二十四日 大阪・朝日會館

陳列數百三十五點。

日本美術協會第四百回美術展 (彫、工)

四月十七日—二十六日 上野・日本美術協會

同協會第四百回展として彫刻、工藝、寫眞、版畫、建築設計圖等に互る公募展を行つた。搬入總數は五五一點(二三八名)、入選二七八點(一七七名)、無鑑査出品五一點(三一名)、陳列數は合計三二九點であつた。尙參考品として兎を陳列した。(一三三頁参照)

授賞 (二等賞)「神苑の朝」(彫刻) 翁朝盛、「青春」(彫刻) 故下飯野辰雄、「牛」(彫刻) 福井庸賢、「銃後の努力」(彫刻) 菊地互道、「彩蝶花瓶」宮坂房衛、「彫金象嵌果實器」三井義夫、「小屏風」大森光波、「黃銅葡萄架風置物」加納晴雲、「磯松文鶴首釜」加藤忠三郎、「鑄銅虎置物」林萬壽人、「線彫文花瓶」安原喜明、「紫陽花文庫」室瀬春二、「三等賞」(スキー) (彫刻) 米林菊雄、「うたふ」(彫刻) 宮本朝壽、「禿鶺鴒」(彫刻) 三木貞夫、「收穫」(彫刻) 山崎秀雄、「赤い櫛」(彫刻) 安西順一、「仔兎を抱く少女」(彫刻) 須賀東三、「工房」(彫刻) 三代久雄、「野飼にて」(彫刻) 早川朝洋、「テーブル・センター圖案」栗山照次、「ブラックケット圖案」横田良男、「花盛器圖案」入谷武、「手袋圖案」松田穰、「彫拔竹根風模樣卷簾入」中川竹仙、「小野道風」内田祐康、「銀蠟燭着双魚文銅打出花瓶」河内宗明、「象嵌鐵花瓶」小澤天來、「飾皿」鈴木虎仙、「蟹金具」板坂直清、「蓬萊山青銅飾宮」會田富康、「青銅華蝶文花瓶」丸谷端堂、「白銅矮雞置物」加納榮一、「鑄銅兩耳帶文花瓶」池田逸堂、「青銅花瓶」高橋敏男、「鑲變列線文花瓶」竹内蘭山、「クリスタル硝子花瓶」小柴外一、「刷毛目水指」星野國太郎、「金桐手花瓶」岡本爲治、「草花紋卓」村田義忠、「鳴子百合風爐先屏風」古山

英司、「果實飾宮」工藤喜代志、「風爐先屏風」藤岡保子「リボン刺繍日向花額」清水コキク、「浪」(寫眞) 錦古里孝治、「山里の春」(寫眞) 澤村美峰、「里の春」(寫眞) 近藤白鹿

M氏蒐集油繪展

四月十八日—二十二日 銀座・青樹社

支那事變海軍從軍畫家スケツチ展

四月十九日—二十三日 日本橋・高島屋

海軍協會主催、海軍省後援。出品の從軍畫家は小早川篤四郎、吉原義彦、古島松之助、三國久、高橋亮、清水登之、齊藤八十八、中川紀元、佳谷磐根、小林喜代吉、古城江觀、故岩倉具方方の十二名、合計二百四十二點を陳列した。

森菊溪作陶展

四月十九日—二十三日 大阪・三越

小山榮達歴史畫展

四月十九日—二十三日 名古屋・松坂屋

龍村平藏受賞記念織物美術展觀

四月十九日—二十四日 大阪長堀・高島屋

岡文六染織個人展

四月十九日—二十四日 大阪長堀・高島屋

山岸主計新作日本畫、木版畫展

四月十九日—二十四日 大阪・大丸

第二回五彩會展

四月二十日—二十二日 新橋・工業會館

石井彌一郎滯歐作及近作展

四月二十日—二十三日 數寄屋橋・日動畫廊

作者は春陽會の出品者で、滯歐中の小品を主として四十點を發表した。

時事彫刻研究會第五回展

四月二十日—二十三日 日本橋・白木屋

伊藤小坡傑作展觀



四月二十日—二十三日 日本橋・白木屋  
一噌青水第三回個展(日、工)

四月二十日—二十四日 銀座・三味堂

川瀬竹春新作陶磁展

四月二十日—二十四日 日本橋・高島屋

第四回新興獨立美術展(日、洋、工)

四月二十日—二十九日 東京府美術館

無鑑査組織の展覧會で、種目は日本畫、洋畫、工藝、  
陳列數九十餘點。

物故天才畫家回顧傑作展

四月二十日—五月五日 新宿・天城畫廊

天城畫廊創業五周年記念として、明治以降特殊な才能  
を示した物故洋畫家淺井忠、青木繁、中村彝、岸田劉生、  
青山熊治、前田寛治、萬鐵五郎、佐伯祐三、古賀春江、  
關根正二等の遺作小品を陳列した。

鬼頭鍋三郎洋畫個展

四月二十一日—二十五日 大阪・美術新論社畫廊

山口久一洋畫展

四月二十一日—二十五日 神戸畫廊

石山太柏個展(日)

四月二十二日—二十四日 芝・東京美術俱樂部

作者の八回目的個展で、花鳥風景等、計四十七點を出  
陳した。

東都大家木彫刻小品展

四月二十二日—二十七日 大阪・三越

表裝同人展

四月二十二日—三十日 東京府美術館

故飯田操遺作展(洋)

四月二十三日—二十四日 姫路・商工會議所

佐々木京林個展(日)

四月二十三日—二十五日 名古屋美術俱樂部

美術展覽會(四月)

村上無羅日本畫展

四月二十三日—二十五日 基隆市公益社樓上

中野秀人個展(洋)

四月二十三日—二十七日 銀座・青樹社

第一回鮫島利久近作小品個展

四月二十三日—二十七日 銀座・三越

彩虹會第四回彫金作品展

四月二十三日—三十日 大阪・阪急百貨店

第十二回全關西洋畫展

四月二十三日—五月一日 大阪市立美術館

關西在住並に出身の二科系作家を以て組織する同會の  
公募展で、一般應募點數二千九十三點、その中入選は二  
百二十二點、陳列總數三百七點であつた。鍋井克之の  
「草上靜物」をはじめ高岡徳太郎の「伊豆」、小出卓二の  
「江浦風景」、その他濱田稔光、辻愛造、古家新、田村孝  
之介、早川國彦等の諸作が舉げられる。

會員推薦

飯田清毅、小出三郎、西村五郎、米良道博

中村眞

會友推薦 玉澤潤一、津田周平、柴田又太郎、川有智  
良三、奥山堤

授賞(全關西朝日獎勵賞) 下高原龍巳、山口久一、田  
中修、(特選) 藤井義晴、渡邊信正、山本秀臣

坂井範一(洋)

四月二十四日—二十七日 數寄屋橋・日動畫廊

昨年新作派展に於て受賞した新人で、油繪三十一點  
を發表した。風景、裸婦等裝飾的に扱つて甘美ではあつ  
ても深味に缺ける憾があつた。

型會第一回發表展(工)

四月二十四日—二十九日 銀座・養生堂

今春東京美術學校工藝部を卒業した黒瀬英雄、高橋節  
郎、金子徳次郎、小杉二郎の四名が、金工、漆工、木工  
等の新作を發表した。

林鶴雄洋畫個人展(洋)

四月二十四日—三十日 大阪・阪急百貨店

堀柳女人形藝開設一周年記念展

四月二十四日—三十日 日本橋・高島屋

經緯工藝展

四月二十六日—三十日 銀座・紀伊國屋

第二回岐阜縣窯新作陶磁器發表會

四月二十六日—三十日 新宿・伊勢丹

原生社春季小品展(洋)

四月二十六日—五月一日 新宿・伊勢丹

末光續油繪個人展

四月二十六日—五月一日 大阪・大丸

川口軌外個展(洋)

四月二十七日—五月一日 大阪・美術新論社畫廊

同畫廊主催。

日本水彩畫會第二十五周年記念展

四月二十七日—五月十五日 東京府美術館

大正二年設立以來二十五周年を迎へ、その記念展とし  
て開いた。四百點をこえる出品の中には石井柏亭、石川  
欽一郎、丸山晚霞その他創立以來の會員の作も交つて、  
新舊様々の畫風を見せてゐることは興味深い。今日で  
は中西利雄、春日部たすく、荻野康兒等によつて代表さ  
れる新作風が一般に流行し、水彩畫の技法もよほど變つ  
たことが目につく。暢達な筆、略筆の効果、新鮮な美し  
さなど技術の上に相當の進歩は見られるが、これらに共  
通して畫面効果が本位となつて一樣に大味であり、水彩  
畫を油繪とは異つた繊細な材料驅使の妙味において鑑賞  
せんとするものに或る失望を與へてゐることは否めな  
い。陳列中目ぼしい作品としては、相田直彦の「馬車」、  
長尾三郎の「若葉」、李仁星の「橋のある風景」、渡部菊  
二の「女の像」、草刈二郎の「冬」、茅原哲衛の「教會」、  
下澤木鉢郎の「晚春泊江村」、南薫造の「四月の梨畑」、

古川弘の「赤い日傘」、山本不二夫の「佐原眼鏡橋」、林義勇の「風のある日」「朝」、岩崎義信の「農家の一隅」「風景」、石井柏亭の「晩春行樂圖」などを挙げる。

陳列四百十二點、別に富川温一郎の旅行資作品「能登半島」七點。外に特別陳列として外國作家の水彩畫六十點を所藏諸家より借用陳列した。十五世紀イタリヤのミニアチニールを初めとして、ジェリコー、ドラクロワ、ドーミエ、コンスタンタン・ギース、デアズ、フォンタネー、メンツェル、サージエント、リュシアン・シモン、ピサロ、クラウゼン、シニヤツク、ボナール、ヴァン・ドンゲン、アスランなど諸名家の多くは輕い小品であるが、よき參考を供するものであつた。

日本水彩畫會賞 藤江志津、岩崎義信、第一賞 林義男、キング賞 本多信彦、みつゑ賞 篠野正雄、ヴェルネ賞、半田丈夫、ホルバイン賞 寺居健一、東亞賞 平島武夫

#### 林テイク洋畫展

四月二十八日—三十日 神戸畫廊

#### 田中繁吉洋畫個展

四月二十八日—三十日 福岡・岩田屋

#### 林明善遺作展（洋）

四月二十八日—五月二日 名古屋・鶴舞公園美術館  
本年三月逝去した故林明善の遺作展で、帝展第十三回出品の「無題」、新文展出品の「釋尊降誕圖」をはじめ第一美術協會出品の油繪、版畫等計百五十九點を展觀した。

#### 第五回千葉縣美術協會展（綜合）

四月二十九日—五月一日 千葉縣立圖書館

#### 青潮會第四回展（日）

四月二十九日—五月一日 市川市・第一小學校

#### 町田曲江門下を以て組織する會

#### 臺灣美術協會第四回展（洋）

四月二十九日—五月一日 臺北教育會館

#### 竹由會日本畫小品展

四月二十九日—五月四日 新宿・三越

#### 西澤信敬門下の同人展

#### 造型版畫協會第二回展

四月二十九日—五月九日 東京府美術館

「版畫の純粹なる造型性の確立」を期する若い版畫家の集りで、會員入選作の外に裕伊之助、西田武雄、猪熊弦一郎、恩地孝四郎等の賛助出品を併せ約八十點を陳列。會員では水船六洲、小野忠重、入選では野崎新右衛門等の出品が挙げられるが、版畫技術に於て今後の習練に俟つべきものが多い。外にピカソ、マチス、ラルメツサンその他外國作家の版畫を陳列した。

## 五月

#### 五明會第一回展（綜合）

五月一日—三日 銀座・三味堂

#### 九皋會第四回展（日）

五月一日—三日 日本橋・東美俱樂部

關尚美堂主催。會員は文展、院展の中堅作家十四名で、太田聰雨、奥村土牛等は着實な作風を見せ、外に吉岡堅二、福田豊四郎等の新様式畫、高橋周桑のや、メカニツクな傾向の構圖、徳岡神泉、杉山寧等の一種即物的な流行の花鳥畫等が挙げられる。

#### 立陣第六回展（洋）

五月一日—四日 銀座・資生堂

文展系の新進、石川滋彦、野口良一、川端實等十三名を以て組織する同展は今回を以て解散した。

#### 九元社第四回小品展（彫）

五月一日—四日 銀座・三越

#### 貌第二回展（洋）

五月一日—五日 銀座・紀伊國屋

#### 猪熊弦一郎をフランスへ送る新制作派會員展

五月一日—五日 數寄屋橋・日動畫廊

新制作派協會會員猪熊弦一郎が渡佛するに際してその行を壯んにするための催しで、同會々員は各自二點を、又藤島武二が一點を賛助出品し、猪熊の近作十五點と併せて陳列した。

#### 六秀會美術工藝品展

五月一日—五日 大阪・松坂屋

#### 大倉陶園新作展

五月一日—六日 日本橋・三越

#### 春秋會第十九回洋畫展

五月一日—七日 大阪・阪急百貨店

#### 春陽會第十六回名古屋展

五月一日—八日 名古屋新聞社

#### 大村廣陽繪畫展（日）

五月一日—八日 大阪・阪急百貨店

#### 三春會第五回展（洋）

五月一日—九日 東京府美術館

昭和三年度東美校洋畫科の卒業生を以て組織する同人展で出品者二十二名。全體に穩かな作風を示してゐる。

#### 香川美術第五回展

五月一日—十日 高松・三越

#### 廣島縣美術協會展

五月一日—十日 廣島縣產業獎勵館

#### 第一美術協會第十回展（洋）

五月一日—十九日 東京府美術館

同會は昨年彫刻部を解消し、本年より洋畫のみの公募展となつた。應募出品數一一八〇點、入選一九〇點、陳列總數三二四點。會員御厨純一、濱地清松等は例年に變らないが、河邊梅村の「きづな」（絆）は色に生彩があり、注目すべき成果を示してゐた。外に山田篤の水彩が

挙げられ、三國久、高橋亮は油絵の従軍スケッチを出品した。一般應募出品畫の水準は甚だ低調たるを免れない。尙回顧陳列として物故會員青山熊治、栗原忠二、林明善及び故會友永淵貞勝の遺作等計二一點を展覧した。

新會友 野村陸雄、谷井喜三郎

客員 葛城喜良

授賞(第一美術賞、副賞、船岡賞)長谷川富三郎(栗原獎勵賞)久保木スミオ(船岡賞、副賞N氏賞)木村捷司

### 構造社第十一回展(彫)

五月一日—二十日 東京府美術館

彫刻團體として主要な位置を占め、研究的態度を以て常に興味と注意をひく會であるが、會場はあまり氣力の籠らぬ小品の類が多く、物足らぬ觀があつた。尤も時局下だといつて必しも事變的取材によることが能ではないが、落つた平常の研究を續けてゐることは喜ばしいが、創作的意欲の充實と野心的な力作がもつと現はれてほしく思はれる。斎藤素嚴は「誘惑(コンポジション)」「水泳メダル」等に浮彫の熟技を示した外「或るロータリーの中心」を試みた。安永良徳はやはりこの會で最も注意をひく活動を見せつゝ、その旺盛な製作力と奔放な意欲とはやゝ濫作の弊に陥らんとし「四角錐をなす群像」の如き、怪奇感以外に高く評價し難いが、いくつかの「庭園裝飾(コムポジション)」小品、數種の浮彫等何れも巧みな才能を示してゐる。野村公雄の「二ツのトルソ」は撤回された。「ラグビー」はシュールレアリスム的な試みで奇矯さを出でぬ。荻島安二は「マスク」(少女(商業用彫塑)等に熟練を示した。その他概して寫實的な作が多い中で後藤泰彦の「李氏騎馬像」は小品ながら素直な出来であり、市之瀬廣太の「忘れられた畫家の胸像」は鋭い觀察を以て傑出してゐた。研究賞の中では清田清也の「マントヒヒ」面白く、山畑阿利一の「胸像」もよい

出来であつた。

搬入數三〇九、入選數五九、陳列數一二〇點

會員推薦 淺沼俊雄、星野健一

授賞(研究賞)「S子の首」原田新八郎、「裸婦」小口節三、「胸像」山畑阿利一、「マントヒヒ」清田清也、「立像A」森本清水、「女の首B」瀬戸團治

### 出品目録

裸婦立像	白石 正義	裸婦	高橋 正三	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
トルソ	小口 節三	子供	浅沼 俊雄	少女(商業用彫塑)の中心	習作	三人のニムフ達
水泳メダル	齋藤 素嚴	Y子の首	原田新八郎	或るロータリー	習作	三人のニムフ達
眠り	武田謙之助	妻を配せる自刻像安永	良徳	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
五輪を目ざして	齋藤 吉郎	マントヒヒ	清田 清也	少女首像	習作	三人のニムフ達
和子	清田 清也	二ツのトルソ	野村 公雄	少女首像	習作	三人のニムフ達
立像 A	森本 清水	ラグビー	同	少女首像	習作	三人のニムフ達
習作 三	小口 節三	女の首	西川 亨	少女(商業用彫塑)の中心	習作	三人のニムフ達
豊原翁の像	古村 清志	母子	宮地 寅彦	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
裸婦	小口 節三	結婚先生	野村 公雄	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
お馬	坂口秋之助	女の首 B	瀬戸 團治	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
ヒロミチ	瀬戸 團治	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	安永 良徳	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
浴	山畑阿利一	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	安永 良徳	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
をんな	清水 清太郎	幼女 A	宮地 寅彦	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
少女	井手 則雄	マスク	荻島 安二	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
李氏騎馬像	後藤 泰彦	少女	中野 五一	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
齋藤彌三郎翁像	中野 五一	構想	後藤 泰彦	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
門出	星野 健一	習作二	小口 節三	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
婦人像	清水 清太郎	T嬢の首	中野 五一	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
黎明	後藤 泰彦	豊穣(帯止)	後藤 泰彦	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
少女	植木 力	豊穣(帯止)	中野 五一	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
鏡	後藤 清一	豊穣(帯止)	中野 五一	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
四角錐をなす群像安永	白石 正義	豊穣(帯止)	中野 五一	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
影	白石 正義	豊穣(帯止)	中野 五一	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
婦人	瀧川 美一	豊穣(帯止)	中野 五一	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
神宮競技メダル	進藤 俊雄	豊穣(帯止)	中野 五一	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
幼き日の夢	浅沼 俊雄	豊穣(帯止)	中野 五一	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
東武氏像	中野 五一	豊穣(帯止)	中野 五一	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
座像	井手 則雄	豊穣(帯止)	中野 五一	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達
トルソ	木島 五郎	豊穣(帯止)	中野 五一	庭園裝飾(コムポジションその二)海豚にのつたエロス	習作	三人のニムフ達

京都市第三回美術展(総合)			
五月一日	二十日	大禮記念京都美術館	

### 京都市第三回美術展(総合)

五月一日—二十日 大禮記念京都美術館

# 美術展覽會 (五月)

京都市が美術獎勵を目的として創設した綜合公募展の第三回で、今回の審査員及び鑑査の成績は左の通りであつた。

審査委員 (日本畫) 石崎光瑤、橋本關雪、西村五雲、西山翠嶂、堂本印象、登内徹笑、小野竹喬、川村曼舟、金島桂華、竹内栖鳳、中村大三郎、宇田萩郎、上村松園、山口華楊、榎本一洋、福田平八郎、福田惠一、禰原紫峰、菊池契月、水田竹園 (洋畫) 大橋孝吉、太田喜二郎、鹿子木孟郎、田中善之助、黒田重太郎、須田國太郎 (彫刻) 沼田一雅、矢野判三、松田尚之 (工藝) 番浦省吾、神坂雪作、山鹿清華、江島長閑、澤田宗山、清水六兵衛、岸本景泰

種別	入選数
日本畫	四九四
洋畫	四二八
彫刻	四五
美術工藝	二二六
合計	一一九三

別に同展委員の無鑑査出品は日本畫三五、洋畫二三、彫刻四、美術工藝二八點で、陳列品の總数は六一六點をかぞへた。

## 受賞者

日本畫五名

「春畫」奥村厚一、「春」會津勝巳、「兄弟」秋野不矩、「仕度」菊池隆志、「白夜」平間且陵

洋畫十名

「大吟崎」飯田清毅、「殘花」今井憲一、「口紅」伴庄兵衛、「裸女」錦義一郎、「枯蓮池」吉田達磨、「丹波舊道」山本正雄、「梅咲く小豆島」松村綾子、「石榴」福井勇、「眠られぬ夜のために」北脇昇、「龍安寺石庭」島津冬樹

彫刻三名

「女」岡本庄三、「N君の裸像」峯孝、「腰をかけたる女」柴田和彦

美術工藝八名

「染織キリン四曲屏風」八田泰造、「刺繍額文鳥」岡村土佐生、「サボテン飾棚」奥村究果、「黒耀袖花瓶」中後茂守、「布ニ依ラサル刺繍額もりかこ」村田春緑、「山郷調手宮」山田豊、「金欄手花瓶」新開邦太郎、「紫緋磁鉢」森野嘉光

淺井忠遺作水彩畫展

五月二日 上野・美術研究所

四月三十日美術懇話會例會として、淺井忠の水彩畫素描等の諸家に藏せられるもの三十四點を展覧、石井柏亭の講話を行つたが、五月二日その陳列を公開した。

催青會作品展 (洋、彫)

五月二日 五日 神戸畫廊

東都大家紙本畫展

五月三日 六日 名古屋・松坂屋

創工社第二回工藝展

五月三日 七日 大阪堺筋・生駒時計店

無絛社解消のあとをうけて結成された大阪の工藝家團體で、「多量生産への指示を與ふる如き力を持ち」現代の生活に即した一品製作工藝の創造を趣旨とする。昨午事變の爲展覽會を中止し、本年第二回展を開いた。陳列は同人十七人の新作約九十點の外に京都及大阪の壯年作家十七名の贊助出品があり陳列總数は百十四點であつた。會員の主なる出品としては、今井千尋「白銅花器」、中條義男「堆朱飾銅花瓶」、河合壽成「鐵製盛器」、後藤年彦「鉛平脱菓子皿」、會田裕宣「鑄銅香爐」、平松宏泰「彫金鯉置物」、橋外波「喫煙具」、福岡洋哉「錫製刻煙草臺」、田邊竹雲齋「高手花籠」、山本竹立齋「飛翔香盒」などの諸作がかぞへられる。尙贊助出品者は「京都」堂本五三良、番浦省吾、岸本景泰、河村喜太郎、楠部彌一、伊東

信助、八木一輝、奥村究果、楠田撫泉、中村鸛生、小合友之助、岩村貞雄、平石孝、久保金平、清水正太郎、「大阪」日比野近三、高松敬子。

江藤純平個展 (洋)

五月三日 七日 大阪・美術新論社畫廊

日本新與南畫院第一回展 (日)

五月三日 九日 大阪市立美術館

舊日本南畫院の關西系作家により昨年十一月結成された同會の公募第一回展で、南畫の常套的概念を排し個性を重んずるをその主張とする。直原放青の事變從軍畫、湯川三舟、渡瀬凌雲、村上蘭田、須網雨亭、福與悅夫等の諸作が舉げられる。陳列總數五一點、一般應募數九三點、入選數一三點。

授賞者 木村繁樹、上山自醒

日本民藝館主催新作工藝春季例會

五月三日 六日 五月五日 駒場・同館

河井寛次郎、濱田庄司、船木道忠の陶器、芹澤銈介の染色、外村吉之介、柳悅考の織物、棟方志功の版畫等を主とする新作工藝品を展覧した。

日本民藝館主催歐米古陶器展觀

五月三日 八月十四日 駒場・同館

英國のスリッブウエアを主とし、その他デルフト、ピスパノモレスク、ペラミン等歐米の古陶器を展覧した。出品者は同館及び河井寛次郎、濱田庄司、伊藤駿一、水谷良一、森數樹等である。

五月會第七回洋畫展

五月四日 八日 銀座・青樹社

黒田重太郎個人展 (洋)

五月四日 八日 福岡・岩田屋

潮野覺藏中支線油繪展

五月五日 六日 東京會館

ウキリー・ザイレル作品發表展 (洋)

五月五日—七日 大阪・美交社  
國畫會同人小品展

五月五日—九日 銀座・三味堂

新紳會第一回發表會(洋)

五月五日—九日 神田・東京堂

同調會第一回展(日)

五月六日—八日 銀座・紀伊國屋

今年の東美校日本畫科卒業生の會で、洋畫の表現に接近したものが多く、無理な顔料の使用に困つてゐる畫面も見られた。

高橋虎之助洋畫展

五月六日—八日 名古屋・丸善

水船三洋、倉員辰雄、福原達朗、安達眞太郎第二回近作油繪展

五月六日—八日 銀座・資生堂

太平洋畫會主催國立公園勝景油繪展

五月六日—十一日 銀座・三越

太平洋畫會主催、厚生省體力局內國立公園協會後援で太平洋畫會員が十四地方の山水美を分擔寫生した油繪百四十三點を陳列した。

朱葉會第二十回女子洋畫展

五月六日—十一日 日本橋・白木屋

加藤溪山青磁百陶會

五月六日—十一日 日本橋・高島屋

吉祥會第一回展(綜合)

五月七日—九日 吉祥寺武藏野第一小學校

大阪女流畫家第五回展(日)

五月七日—十一日 大阪・三越

大阪女人社主催。生田花朝、織紅鸞、木谷千種等を役員とし毎年大阪三越に於て開催する公募展で、本年は矢野橋村、北野恆富、菅橋彦が鑑査に當つた。一般應募者一五七名、入選者六四名、陳列點數は計七八點。

美術展覽會(五月)

河合卯之助作陶展

五月七日—十一日 京城・三越

工人社工藝小品展

五月七日—十二日 日本橋・高島屋

同人十五名の金工及び硝子の小品數十點を陳列。舊套を脱せんとする研究的努力が示され、野心的大作でないだけに概して面白く見られた。板金を多く用ひて、置物、壁飾、花入、香爐に及んでゐるが、輕快な表現の面白さが主となつて、用途から見て未だ一時的効果に止つてゐるものが多い。

村越道守や信田洋の硝子と金屬或は木材等を組合せた生産工藝としての試作は態度としてよく、各務鐵三の完成を見せたクリスタルの仕事と佐藤潤四郎の吹硝子の仕事との對比も興味がある。後者は研究途上を示すが吹硝子の特質を更に生かす工夫に將來が期待される。

「硝子花生」「帶止」等面白く見られた。大須賀喬の銀を用ひた彫金の仕事は迷ひなく、地味ではあるがよい質を示してゐる。北原千庵の小銅版打出し、透彫り等による「壁面飾」數點は藝術味をもつて愛すべきものがあつた。

日本美術協會第五回美術展(書、篆刻)

五月七日—十五日 日本美術協會

參考陳列は一三四頁參照。

大河内夜江個展(日)

五月八日—十日 大阪美術俱樂部

青霞會、岡墨光堂の主催。大谷章由、根津嘉一郎等の推薦により、作者最初の個展を開いた。出品畫は山水二十點である。

辻永洋畫展

五月八日—十五日 大阪・阪急百貨店

日本美術院々友繪畫展(日)

五月九日—十二日 名古屋・松坂屋

日本美術院の院友を以て組織する院友俱樂部の研究會

作品七十二點を展觀した。

遠山清個展(洋)

五月九日—十三日 大阪・美術新論社畫廊

愛染會染織刺繡展

五月九日—十三日 日本橋・三越

愛知縣出身獨立美術入選者展(洋)

五月九日—十三日 名古屋・丸善

故江南武雄遺作展(洋)

五月十日—十一日 銀座・紀伊國屋

東都大家第一回日本畫小品展

五月十日—十二日 新宿・伊勢丹

伊勢丹美術部主催。

十六世紀以降外國版畫油繪即賣展

五月十日—十二日 銀座・資生堂

東臺邦畫會第十三回小品展

五月十日—十五日 日本橋・白木屋

東美校日本畫科出身者の團體たる同會の小品展で、會長結城素明を初め會員八十八名が出品した。

杉芽會第一回展(洋)

五月十日—十五日 新宿・伊勢丹

鑑起研究會第五回工藝美術展

五月十日—十五日 日本橋・白木屋

金澤工匠會第三回美術工藝展

五月十日—十五日 大阪・阪急百貨店

童林社第六回展(洋、彫)

五月十日—十九日 東京府美術館

東京美術學校洋畫科及彫刻科の昭和十一年度卒業生の組織する同窓展。會員の出品は油繪六十餘點、彫刻十餘點で、尙今事變に出征戦死した會員城信義を追悼すべく會員一同が合作した油繪大作「城信義追悼支那事變壁畫」を出陳し併せて故人の遺作七點を陳列した。又大河内信敬將來のピカソ、スゴンザツクの銅版畫を主とする特別



陳列を行つた。

武者小路實篤日本畫小品展

五月十一日—十五日 京都・丸物

留加會第八回展（洋）

五月十一日—十九日 東京府美術館

文化學院美術部出身者の組織する會である。

富岡鐵齋遺作展

五月十二日—十四日 日本橋・白木屋

松本弘二新作洋畫個展

五月十二日—十四日 京城・三越

四元莊第二回洋畫展

五月十二日—十五日 銀座・三越

鈴木千久馬の畫藝展で油繪六十餘點を展觀した。

島崎鶴二近作展（洋）

五月十二日—十六日 數寄屋橋・日動畫廊

獨特な類型的人物諸作のほかに風景、花などの油繪小品を陳列。神經の鋭い情緒表現を見せ、作者が大作よりは花卉などの小品に適した長所をもつことを思はせた。

「こでまり」の爽かな美しさよく、「鹿」は巧みでできあつた。

八木岡春山個展（日）

五月十二日—十六日 大阪・三越

工精會第一回家具展

五月十二日—十七日 日本橋・高島屋

古城江觀從軍スケッチ展

五月十二日—十七日 新宿・三越

東台會第六回美術展（綜合）

五月十三日—十五日 奈良會館

虹人社第一回展（洋）

五月十三日—十五日 銀座・紀伊國屋

方水社第十九回展（日）

五月十三日—十五日 宇治山田・三重縣商工獎勵館 別館

岐阜社第三回美術展（日）

五月十三日—十五日 岐阜柳ヶ瀬・百貨堂

川田康舟、横山春溪等の組織する會の公募展である。

一般應募數八〇點、入選二〇點、陳列總數二九點。

岐阜社賞「富有柿」高木春堂

成蹊美術會第二回展（洋、工）

五月十三日—十七日 日本橋・白木屋

白石久三郎個展（洋）

五月十三日—十七日 福岡市産業獎勵館

菊池契月畫藝繪畫展（日）

五月十三日—十七日 名古屋・松坂屋

大分縣美術及工藝品展

五月十三日—二十二日 別府市・縣殖産館

萬華鏡社第八回雅會（日、工）

五月十四日—十五日 神田・如水會館

六潮會第七回展（日、洋）

五月十四日—十七日 日本橋・三越

六人の會員の氣持がよくあつて、日本畫、洋畫の區別を感じさせぬ所にこの會の特色があり、夫々一家をなす人々でありながら、若さを失はぬ所に期待と興味とを與へる。第七回を開いて今年は殊に充實した好成绩を見せた。中村岳陵の水たまりを捉へた「秋霖」は苦心が見えて効果は上らなかつたが、水中の鯉を寫した「潺湲」は渾然とした佳作。山口蓬春の「芍藥」は濃彩華麗で申しからず、立派であつた。輪廓に銀の描線を用ひたのもいや味でなく、よくきいてゐる。福田平八郎の「鴛鴦」は裝飾的取扱ひに特色を示すが、未だ多く成功せず。牧野虎雄の油繪五點では「庭の牡丹」「初夏の夕暮」がよく氣分を捉へた。中川紀元の油繪六點は手なれた筆觸を示すが、表面的な技巧が先だつ傾きを免れぬ。木村莊八は絹本「道成寺」、扇面「土蜘蛛」などの日本畫出品した。別に柴田是眞の寫生帖三十一冊（梅澤隆貞藏）が

特別陳列され、そのまじめな勉強ぶりがよく示されたのは頗る興味の深いものであつた。

九阜會第四回展（日）

五月十四日—十七日 大阪・そごう

岸田劉生十週忌回顧展（洋）

五月十四日—十八日 銀座・資生堂

劉生の十週忌を記念し、舊草土社同人の主催によつてその遺作三十點が展觀された。テムペラ畫二、三のほか全部油繪であつて、大正二年（二十三才）よりその逝去の昭和四年（三十九才）に至る迄の毎歳の作品を陳列した。これらの作品はその生涯の作として一部分にすぎないが、比較的順序立てて展觀し、彼の畫業の概略の變遷を窺ふことができた。即ちその初期の作品としては印象派風の風景やリーチの肖像があり、ついで次第に北歐藝術の感化による劉生独自の強い寫實的な傾向の風景や靜物や肖像がある。時代からいへば大正四年草土社の創立以後數年の間であり、著名なる「黒帽子の自畫像」（大正四年）、「切通風景」（大正四年）、「林檎のある靜物」（大正六年）、「牡丹圖」（大正九年）などである。次で彼が初期肉筆浮世繪、宋元畫或は廣く東洋畫の研究によつて到達しつゝ、あつた作品がある。即ち春陽會創立前後からその晩年に至る作品であつて「二人麗子」（大正十年）、「麗子八歳洋裝」（大正十年）、「冬瓜」（昭和元年）等である。最後の年の「大連風景」に於ては、むしろ卒直な直觀を窺ふことができる。要するに彼は偉大なる畫家たるには未だ若くして逝つたが、その獨自性に至つては近代畫家中著しきものあつたことは今日に於て明瞭である。

出品目錄

作品	製作年代	所藏者
築地居留地	大正二年	東京 木村莊八
齋藤與里氏像	同	同 中川一政
リーチ氏像	同	大阪 齋藤清二郎
千家元磨氏像	同	東京 岸田家

自畫像 大正三年 東京 森村 義行

黒帽子の自畫像 同 大阪 岩田 希芳

代々木風景 同 東京 森村 義行

切通風景 大正四年 同 森村 義行

赤土の風景 同 同 森村 義行

林檎三ツ 同 大正六年 同 森村 義行

静物 同 同 森村 義行

川瀬正光氏像 大正七年 同 森村 義行

麗子五歳像 同 同 森村 義行

麗子坐像 大正八年 同 森村 義行

牡丹圖 大正九年 同 森村 義行

樓門五三樹 大正十、十一年頃 同 森村 義行

劇場風景 同 同 森村 義行

二人麗子 大正十年 同 森村 義行

麗子像 同 同 森村 義行

住吉詣 同 同 森村 義行

麗子八歳洋装 同 同 森村 義行

村嬢圖像 同 同 森村 義行

椿花 大正十一年 同 森村 義行

麗子像 大正十二年 同 森村 義行

村嬢 大正十三年 同 森村 義行

冬瓜 大正十四年 同 森村 義行

郵妓 同 同 森村 義行

岡崎桃乙氏像 同 同 森村 義行

大連風景 同 同 森村 義行

冬小品 同 同 森村 義行

### 相携彫刻小品展

五月十四日—十八日 銀座・三味堂

三味堂主催。相携に取材した彫刻小品の展覧で、出品者は石井鶴三、長谷川義起、山本豊市、喜多武四郎、宮本重良、新海竹藏の六名で、石井の「上手投きまる」はクロツキー的な呼吸を生かして面白く、新海の「控力士」喜多の「追手風親方」は小味な趣きがあった。

### 中尾達個展(洋)

五月十四日—十八日 大阪・美術新論社畫廊

### 日本民藝新生活品展

美術展覽會(五月)

五月十五日—二十五日 大阪・阪急百貨店  
大阪市産業工藝展

五月十五日—二十九日 大阪市立美術館

主催者は大阪府、大阪市、堺市、大阪商工會議所、大阪府工業懇話會、大阪府工藝協會。種目は第一部美術工藝品、第二部圖案及包裝、第三部産業工藝品で、陳列は應募入選作の外に商工省貿易局の海外蒐集工藝品、造幣局の外國戰時貨幣等の參考出品を初めてとして數多の贊助出品があつた。

授賞(大阪府知事賞) 大津毛織合資會社、(大阪市長賞) 岩田千虎、(大阪商工會議所頭賞) 村田鹿次郎、(二等賞) 岩田千虎、村田傳七、島田一郎、(三等賞) 裕成美代子、田邊竹雲齋、河原咲子、橋外波、沖本國明、小林美春、笹岡家具店、平松宏泰、會田裕宣、河合壽成、山本立軒、川口虛舟、大栗和七、義江辰治

### 宇野三吾陶器の會

五月十六日—二十三日 大阪・阪急百貨店

### 實在工藝美術會第三回展

五月十六日—三十日 東京府美術館

工藝界の進歩的方面を代表する綜合團體としてこの會の運動は重要視されてゐるが、今年第三回展を開き會員會友の作品及び公募作品の外、官設工藝指導機關の贊助出品を得て總計二九〇點許りを陳列した。全體に通ずる現代生活の用途を旨とした新鮮さと、會場意識を離れた自由な制作態度とは首肯できるものがあり、この會の存在意義を明確ならしめてゐるが、個々の作品については未だ満足すべきものに乏しい。といふよりは前回に比して一般に低調の觀があり、方途に迷ひつゝあるのではないかと思はせるものが多かつた。理論に縛られ、合理的追求が先だつて個々の作家の感覺情操の自然な流露を妨げてゐる場合もあるのではないか。

會員の作品夫々の特質を示してはゐるが、とり立てて

優れた出來のものも見られなかつた。高村豊周は「花挿」「花壺」「喚鐘」等を出品し一進展を期さうとしてゐる。

漆では山崎覺太郎の歐洲人物などを模様にした「乾漆花瓶」「衝立」等は、過般の歐洲視察で得た新なヒントに基づくものであらうが、不消化の難を免れない。吉田源十郎は蒔繪に、佐藤陽雲は彫漆に夫々の技を示す。後者の「うるし彫草文手箱」は新な効果を見せ、陶器では河村喜太郎の「前菜入四種」等は工夫を見せた。授賞された稻場勝邦の「果物盛(A)」は新味があるといふだけのもの。玩具、人形の類も幾つか入選してゐるが新奇な趣味に止まるものが多い。

贊助出品で陶磁器試験所のもは意匠面白からず、殊に瀬戸試験場の「用途の進歩性を基調とせる試作品」と稱する「昭和陶器土瓶」の類に至つては惡趣味の甚しいものである。指導機關が材料、技法の新研究に盡す努力は認められるが、製品を見ると概して意匠の點で頗る振はぬことは遺憾である。

搬入數一一五六、入選數一五一、陳列數二八七點。

授賞(實在工藝賞)「衝立」吉田丈夫、「装幀」横川武(實在工藝獎勵賞)「七寶嵌丸匣」會田裕宣、「果物盛(A)」稻場勝邦、「刺繍ハンドバック」菊本締子、(S氏賞)「龍斑衝立」蓮田脩吾郎

### 出品目録(○會員 △無鑑査)

白銅花鉢	北村 一朗	花器	秤 雄吉
朱の帶	○木村 和一	花器	○河村喜太郎
七寶嵌丸匣	會田 裕宣	額面(くらげ)	北村 一朗
和染爽涼小屏風	長安右衛門	塗分平卓	矢部 覺平
銀打出花挿	寺田 龍雄	盛器 A	○豊田 勝秋
花挿 B	○豊田 勝秋	花器	○河村喜太郎
紙塑人形 虹	岡 とも	鑄銅花器	多田 茂吉
花器	△深瀬 嘉臣	花盛器 B	森 清三
花瓶銀欄手	岡本 爲治	花瓶鏡彩	大町 存
拔蠟吳須鉢	○新井 謙也	うるし彫草文手箱	○佐藤 陽雲
(風月双清)			

花盛(浪)	田中 利一	草花文様卓布	二口 善雄	草の葉透香爐	○新井 謹也	鐵器文様燭台	岩手縣工業試驗場	卓布	○廣川松五郎	漫然たる集合C	故新川 太郎
乾漆花瓶(兔)	○山崎覺太郎	花瓶	○丸山 不忘	前案人四種(試作)	○河村喜太郎	具一組(贊助出展品)	試驗場	吳須白泥花瓶	○新井 謹也	同	同
燭臺	長谷川 昇	アルミニウム・アルゲル材利用の家具模型作品	西川 友武	文鏡燭臺	下 暢	鐵器肉鍋 一個	同	ストープ前立	熊谷重太郎	同	同
水注し蓋(かたつむり)	下 暢	アルミニウム・アルゲル材利用の家具模型作品	同	青銅花生	伊坂四郎人	四枚折屏風	中村 妙子	鐵花燭器	荻原 富雄	同	同
女帯	○廣川松五郎	第九	同	鷗の小屋風	磯部 善壽	装幀	横川 武	四方花入	中川 哲哉	同	同
吳須繪柵欄花瓶	○新井 謹也	アルミニウム・アルゲル材利用の家具模型作品	同	花瓶燭臺	宮下 善壽	吳須繪長花瓶	○新井 謹也	木製玩具兔馬	服部 茂夫	同	同
彫漆燭臺	鈴木 秋湖	第八	同	銀絲目卓	増村 益城	彫漆燭臺	吉田 竹堂	玩具(ヘビ)	和田 義三	同	同
花挿	○新井 謹也	第九	同	燭臺	○磯矢阿伎良	魚紋花生	木内 尙文	玩具(アタ)	同	同	同
菓子器	大原 彰	吳須繪鉢(草の葉)	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
釣花生	小原 亮三	乾漆花瓶(少女)	○山崎覺太郎	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
果物盛(A)	稻場 勝邦	乾漆花瓶(少女)	○山崎覺太郎	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
輪花文燭臺	山田 豊	油滴香燭臺	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
帶止金具(かに)	○深瀬 嘉臣	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
彫漆燭臺	○佐藤 壽雲	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
簪煙草入	○中村 董一	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
刺繡燭臺	平野利太郎	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
鑄銅燭臺	○中村 董一	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
人形「かへり路」	五味 文郎	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
花瓶	○内藤 春治	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
花(漆皮額面)	○廣川松五郎	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
灰皿	高瀬 耀一郎	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
盆	○森 耀一郎	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
龍斑衝立	運田修吾郎	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
線文鑄銅花瓶A	鈴木 泰	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
彫漆手元簪筒	○佐藤 壽雲	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
黒釉松花瓶	○山崎覺太郎	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
長手盆	高瀬 耀一郎	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
乾漆釣花生	○山崎覺太郎	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
水盤	高瀬 耀一郎	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
コヒーヒル盆	○山崎覺太郎	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
花挿	○高瀬 耀一郎	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
白銅兎置物	八井 孝二	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
蠟燭「とくだみ」	橋田 裕年	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
卓板	○高瀬 耀一郎	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
盤鏡	○高瀬 耀一郎	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
青銅水盤	○高瀬 耀一郎	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同
ツツシオン	○高瀬 耀一郎	繪給草文花瓶	○新井 謹也	燭臺	○磯矢阿伎良	手燭	西川 友武	置物(籃)	○森 耀一郎	同	同

をみなへし茂入	内藤 四郎	永宇透香燭	○新井 謹也
紙塑人形・雪國	岡 二郎	灰皿	○高村 豊周
筆筒	木内 尙文	こぶしの花	○廣川松五郎
角のある花挿	萩原 富雄	蘭文花壺	△西村 敏彦
器の試み	鈴木 泰	テンプルセンタ	中村 妙子
木彫花文小箱	海老塚四郎	鉄繪皿	浅谷 豊秋
静物	○廣川松五郎	鮑型硯	崎川 羊堂
テンプルセンタ	中村 妙子	蛙硯	堀尾 卓司
果物鉢	奥村 薫	皮ハンドバッグ	熊谷重太郎
香爐臺	中川 哲哉	(黒)	二口志保子
裝飾額(女の顔)	水野 嬌夫	草花セクター	△大坪 重周
壁面裝飾、梅	△中村 董一	木彫ハンドバツ	△大坪 重周
丘、蠟染壁掛	山岸 堅二	グ、口具	同
漆工品噴霧塗裝	漆工省工藝	木彫ハンドバツ	同
應用鉢(贊助出	指導所	漆皮たんぼ	安藝 邦子
品)		ハンドバッグ	同
金工品ステンレ	同	白雲陶器流釉果	商工省陶磁
ス應用果物盛	同	物盛(贊助出品)	器試験所
金工品綜合着色	同	昭和陶器土瓶各	瀬戸試験場
應用シガーボツ	同	種三個	同
金工品綜合着色	同	昭和陶器文房具	同
應用パウダーボ	同	一組	同
金工品綜合着色	同	白雲陶器流釉花	同
ツクス	同	盛器	同
金工品綜合着色	同	盛器	同
應用ボンボン入	同	木松之繪	同
小木工品豆人一組	同	置物(虎)	同
編組品オードブ	同	小壺	同
ルセツト一組	同	小棚	同
子供室用敷物	△山脇 道子	小棚	同
鑄銅花挿B	△中村 董一	青銅花瓶	同
水盤	連田修吾郎	鉢	同
洋犬置物	芳武 茂介	木象嵌手元棚	同
柿	○廣川松五郎	一輪挿	同
茶箱	増田 三男	蠟燭刺繡松小屏風般若	同
盛器B	○豊田 勝秋	人形みのり	同
吳須白泥花瓶	○新井 謹也	鑄銅花挿A	同
(世泰時窓)	高橋 節郎	彫刻硝子鉢	同
巻簾入	佐藤 孝三	長谷川 昇	同
指描草花文壺	下 暢		
飾棚			

美術展覽會 (五月)

乾漆花瓶(鶏)	○山崎覺太郎	漆皮ハンドバ	○廣川松五郎
客間用敷物	△山脇 道子	ツク	
高山泰子個展(洋)	五月十七日—十八日	銀座・紀伊國屋	
大河内夜江近作個人展(日)	五月十七日—十八日	京都美術俱樂部	
久城月美人畫展	五月十七日—二十日	大阪・阪急百貨店	
小林茂洋畫展	五月十七日—二十二日	大阪・大丸	
荒木十畝新作畫展(日)	五月十七日—二十二日	大阪・大丸	
第十六回春陽會大阪展(洋)	五月十七日—二十二日	大阪・朝日會館	
日本漆藝院第二回展	五月十七日—二十二日	大阪・朝日會館	
東京における主要漆藝家を集めた代表的團體として注			
意される會である。昨年第一回に引續き東京府と協同主			
催の下に第二回展を開いた。出品を公募して入選作をも			
並べてゐるがその数は少く、同人の作品發表が主となつ			
てゐるが各人よく努力した仕事を見せ、前回に比べて新時			
代が、つた感趣味のものを減じ、穩かな傳統的作品が多			
く落つて見られた。本間華華の「平手箱」、横越自入の			
「大丸盆」、都築幸哉の「伏籠」、中川哲哉の「香盆」、圓			
膳」など擧ぐべく、入選中では岡田章人の「彫漆盆」、谷			
澤不二松の「彫漆香盆」、笠原北光の「乾漆八角鉢」など			
佳作であつた。客室と主人室のモデルルームに同人等の			
連作を飾つたが、比較的無難の程度で、この種の試みは			
趣味の統一が不可能なことを思はせた。陳列數一〇四點			
内入選作一九點。			
授賞(日本漆藝院賞)「二枚折屏風」船本汀、(賞)岡			

川章人、船本汀、六角顯雄、谷澤不二松			
石川縣第十七回工藝美術展	五月十八日—二十二日	金澤・石川縣商品館	
新興工藝作品展	五月十八日—二十五日	新宿・伊勢丹	
九皋會第四回展(日)	五月十九日—二十日	京都・岡崎公會堂	
松島畫舫春畫展(日)	五月十九日—二十一日	日本橋・東美俱樂部	
松島畫舫主催、東西の諸家三十餘名の新作を蒐めた。			
川端龍子の「雛雀」、川合玉堂「鶴飼」、木本大果「朝顔」			
森白市「夏の日」、奥村土牛「西瓜」などが出陳された。			
關西大家紙本書展	五月十九日—二十一日	名古屋・松坂屋	
明麗美術第三回試作展	五月十九日—二十二日	銀座・松坂屋	
恒例の春季試作展で、同人盟友等の作品十九點を陳列			
した。川口春波の唐獅子の彫刻を描いた二曲一双「双戲」			
は力作ながら色感に難があつた。木和村創爾郎の「椿花			
譜」は裝飾的に過ぎ、小林彦三郎の「山櫻」、田代寛哉の			
「風市」などが擧げられるが、全體になほ一層の感覺的			
洗練が望まれた。外に故落合朗風の對幅「茶郷二題」を			
陳列した。			
東西大家小品紙本書展	五月十九日—二十二日	上野・松坂屋	
紫川莊主催。東西四十餘名の紙本小品畫を蒐めて展觀			
した。			
遠藤教三、狩野光雅、長谷川路可第一回三人展(日)	五月十九日—二十三日	銀座・松坂屋	
故松岡映丘の門下である三人が各自約十點宛發表し			
た。長谷川路可の扇面屏風「歐洲とところどころ」は穩か			
な筆致で文學的情趣があり、狩野光雅は六曲半双の			

「霜の朝」に古風な筆法を見せた。

# 白閃社第二回日本畫展

五月十九日—二十二日 銀座・松坂屋

小室翠雲門下の渡部香堂、田能村竹莊、江川武村等十餘名が組織する南畫の同人展である。

# 酒井三良日本畫展

五月十九日—二十二日 京城・三越

橋本多聞洞主催。

# 久本弘一個展 (洋)

五月十九日—二十三日 大阪・美術新論社畫廊

# 五作家新作畫展 (日)

五月十九日—二十三日 日本橋・三越

日本畫壇に頭角を抜く五作家の作品各人二點宛を集めたもの、何れも相當に努めた作で見こたへのある展覧であつた。夫々得意とする畫材と畫風とを示し、中で橋本關雪の「猫」品位あつてよく、山口蓬春の「椿」「葡萄」は豊かで美しい出来であつた。

# 出品目録

田家駒興	橋本 關雪	猪	橋本 關雪
龍門	川端 龍子	鯛矢	川端 龍子
二枚拾	鍋木 清方	蟹	鍋木 清方
山研	山口 蓬春	姉羽鶴	小杉 放庵
	小杉 放庵		

# 新興九谷作陶展 (日)

五月十九日—二十四日 上野・松坂屋

# 日高昌克個展 (日)

五月十九日—二十六日 大阪・松坂屋

# 高橋暉山第二回花鳥畫展觀

五月二十日—二十一日 日本橋・東ビル六階

# 表現第七回展 (洋)

五月二十日—二十二日 銀座・紀伊國屋

# 青樹社第五回展 (日)

五月二十日—二十二日 愛知縣商工館

横山葩生、安藤美雲、嶋谷自然、我妻碧字等七名の同人及び研究會員を以て組織する名古屋の日本畫團體で、作品五十餘點を展覧した。

# 島雄健洋畫個展

五月二十日—二十三日 神戸畫廊

# 佐伯米子第三回個人展 (洋)

五月二十日—二十四日 銀座・資生堂

# 井南居第二回水墨畫、附視展

五月二十日—二十四日 日本橋・高島屋

宮崎井南居主催。東西の諸家三十名の水墨畫を展覧し、併せて坂東實山所藏古硯三十面を參考に陳列した。

# 根本露外第二回日本畫個展

五月二十日—二十四日 銀座・三味堂

# 静岡縣美術協會第三回展 (綜合)

五月二十日—二十四日 静岡縣教育會館

同會主催。公募鑑査による綜合展で搬入數は日本畫五〇、洋畫一五一、彫刻二五、工藝一九點、入選は日本畫一〇、洋畫四一、彫刻五、工藝六點。陳列總數は贊助、無鑑査出品を併せ一三六點。

# 工人社工藝小品展

五月二十一日—二十二日 長岡商工會議所

# 日本美術院同人作品繪畫彫刻陳列會

五月二十一日—二十二日 谷中・日本美術院

# 日本美術院主催、繪畫三十餘點、彫刻十餘點を陳列。

松田彫塑研究所落成記念展

五月二十一日—二十三日 京都・同所

# 木下義謙近作小品展 (洋)

五月二十一日—二十四日 數寄屋橋・日動畫廊

油繪小品約二十點を陳列、坦々たる描寫に作者の特質を發揮してゐた。

# 關西大家紙本畫展

五月二十一日—二十五日 名古屋・松坂屋

# 土田夢僊遺作展

五月二十二日—二十六日 大禮記念京都美術館

# 森田光達繪展

五月二十二日—二十七日 大阪・三越

# 現代美術第一回展 (日、洋)

五月二十二日—二十八日 東京府美術館

現代美術社では左記の通り審査員を依頼して、東洋畫西洋畫の公募展を開催した。

(第一部) 山口蓬春、宇田萩郎、金島桂華、中村岳陵、奥村土牛、福田平八郎 (第二部) 金山平三、牧野虎雄、安井曾太郎

搬入數 第一部一三二點、第二部二一六點

入選數 第一部七一點、第二部六六點

陳列總數 一三七點

受賞者 (第一部) 濱倉清光、濱田觀、和高節二、加藤春峰、芝正雄 (第二部) 西村愿定、橋作次郎

# 自由美術家協會第二回展

五月二十二日—三十一日 上野・日本美術協會

長谷川三郎、村井正誠、矢橋六郎、山口薰等の組織する會の公募第二回展である。この會はいはゆる近代的な知性の要求に創作動機を置き、在來の觀念に提はれず、表現手段の選擇にも新機軸を示し、同一人が繪畫、オブジェ、寫眞等の諸種目に携るのも注目される。廣い教養ある視野に立つ點で新時代的であり、畫壇の青年層に刺激を齎したと見るべきであらう。しかし示された作品の結果が、多くは狭いメカニズムの觀照であるのは物たりなさを覺えさせられる點である。

長谷川三郎は繪を出品せず、「レリーフ」A B C Dは矩

形上に種々圓形レリーフを配合したコンポジションで、オブジェとしての一種の効果をあげ、その放膽な計畫は會の面目を代表するものであつた。村井正誠は油繪「支

那」を代表するものであつた。村井正誠は油繪「支

那」を代表するものであつた。村井正誠は油繪「支

那」を代表するものであつた。村井正誠は油繪「支

那」を代表するものであつた。村井正誠は油繪「支

那」を代表するものであつた。村井正誠は油繪「支

那」を代表するものであつた。村井正誠は油繪「支

那」を代表するものであつた。村井正誠は油繪「支

那」を代表するものであつた。村井正誠は油繪「支

那」を代表するものであつた。村井正誠は油繪「支

那」を代表するものであつた。村井正誠は油繪「支

那」を代表するものであつた。村井正誠は油繪「支

那」を代表するものであつた。村井正誠は油繪「支

那」を代表するものであつた。村井正誠は油繪「支



「那の町」その他に圖面的な構圖による諧調を盛つて注目  
をひき、山口薫は油繪、カラージュ等種々の作品を試み  
てゐた。寫眞では北尾淳一郎、馬場三郎の諸作があり、  
又津田正周、船山玉樹、岩橋永遠等の新傾向日本畫が新  
しく出品されて注意された。その他平岡潤、植木茂等の  
カラージュ、オブジェ等は創意に乏しく、一般應募作品  
には所謂アブストラクションの傾向を没個性的に模倣し  
た低調な作品が多かつた。

搬入總數 七五三點、入選數 一一一點

授賞 協會賞 文學、啓蒙派工藝集團合作、北垣正  
樹、劉永國

會員推薦 難波田龍起、植木茂、北尾淳一郎

會友推薦 馬場三郎、馬場和夫、船山玉樹、岩橋永遠  
小山昇、中村眞、山岡良文

大日美術院第二回展(日)

五月二十二日—六月五日 東京府美術館

新しい日本畫創造を目ざして、新進作家獎勵の爲に昨  
年設立、本年第二回展を開いた。青年作家の熱心な努力  
が見られ、その點頗る活氣にとむが、技術的に未完成な  
のはやむを得ぬとして、方向の上で疑問を抱かせるもの  
も少くない。傳統的な技法をすることに専らで、基礎  
的修練に乏しく、表現に確信のない相互模倣が目だつ  
のも望ましいこととはいへぬ。無鑑査出品のうち常岡文龜  
の「花」「春の土」「綠陰」は裝飾的に面白く、菅澤幸司  
の「猿(東照宮所見)」は才氣を見せた作であつた。同人  
で結城素明は「伐木」を、青木大乗は「高千穂」と「あ  
らし」の大作を、川崎小虎は「向日葵」を出品、後者は  
厚ぬり胡粉地に草筆でつけたて風に描いた一種の味のあ  
るものであつた。陳列數九十六點。

授賞(大日美術院賞)「植木栽培場」加藤英純、(大毎

東日賞)「七面鳥」平口勝雄、(協賛會賞)「畫」是永仲

BAN第一回洋畫展

五月二十三日—二十五日 銀座・紀伊國屋

海洋第二回美術展(洋)

五月二十三日—二十七日 日本橋・三越

海軍協會、海洋美術會主催。海軍省後援。昨年より海  
軍記念日の行事として國民の海事思想鼓吹のため、海洋  
を主題とする洋畫展を開催、今回はその第二回展で、各  
派の出品による百五十餘點を陳列した。

人見彌造作油繪展

五月二十三日—三十日 名古屋・後藤版畫店陳列場

東京會日本畫新作展

五月二十四日—二十六日 東京美術俱樂部

株式會社東京會主催。東西畫壇の全般に亘り七十餘點  
の新作を蒐めた。なかで川合玉堂の磯馴松を配した「涼  
波」、鎗木清方の「夏」、墨票を描いた荒木千畝の「初夏」  
川端龍子の「愛狗圖」、堂本印象「山光煙雨」、菊池契月  
「稚兒文珠」、その他中村岳陵、奥村土牛等のものが、床  
の間の鑑賞に應じた夫々の持味を示している。

早川尚古齋花籠陳列會

五月二十四日—二十七日 日本橋・三越

ともゑ會展(洋)

五月二十四日—二十八日 銀座・青樹社

東京渡邊家舊集油繪展

五月二十四日—二十八日 大阪・朝日會館

青樹社主催。

寸土社第五回洋畫展

五月二十四日—二十九日 大阪・關西畫廊

關西在住の向井潤吉、高岡徳太郎、木下公男等の組織  
する同會の第五回展である。

高島貫鑑猛虎畫展

五月二十四日—二十九日 大阪・大丸

麻生豐上海南京スケッチ展

五月二十四日—三十一日 大阪・阪急百貨店

日本彫刻家協會第二回展

五月二十四日—六月八日 東京府美術館

會の趣旨に「この會は文化人としての彫刻家であり度  
いと思ふ人々の集りです」とあるやうに、會員が近代的  
教養を意識する點がこの會の特色をなしてをり、各人セ  
ンスのある仕事を示してゐる。併し、概して造型的骨格  
に於て薄弱なる憾みがあり、その故に折角の文學的趣味  
性が反つて、本格的彫刻の追求に禍ひとなり、未稍へと  
陥れる憂ひが見られた。敵村直久の裸女立像「女」は姿  
態の表情的な説明に際り、中村七十、片山義郎、黒田嘉  
治、早川巍一郎、黒川泰の諸作についても、技巧的熟練  
がいはゞ工藝的に傾く惧れがあり、菅沼五郎の「首」の  
諸作もむしろ清算すべき趣味を宿すものゝやうに見られ  
た。加藤顯清の「友田恭助氏立像」は故人の舞臺姿を等  
身に再現したもので、やゝ生氣の乏しさが惜まれた。陳  
列總數は應募入選數を併せ九十三點であつた。

授賞 第二獎勵賞「少女」坂東文夫、「新生」高澤七  
郎、「少女像」阿部進六、「大地に立つ女」明石順吉

準會員推薦 武次郎、阿部進六

清水正太郎新作陶磁展

五月二十五日—三十日 日本橋・高島屋

東京における作者の初めての個展で、近作九十餘點を  
發表した。

「清水焼の六兵衛氏を父とする正太郎氏が始めて個展を開い  
た。豐滿な色彩で柔かい釉彩効果を擧げたものを得意としてゐ  
るがその爲め却つて落着きのないものになつてゐるものも見受  
けた。中でも見事な技術を見せてゐたのが黒釉の花瓶で花模様  
を鐵染料に活かして溢味のある効果を収めてゐる。其他面白い  
塗りでは古い支那の技法である珐瑯の皿を作つて研究の深さ  
を示してゐる。その他「金欄手獅子文鉢」は試みは佳いがしつ  
くり来ない。紫翠箱の咬い調子は成功してゐる。」(三・三・五・二  
九、都)

## 田邊至個展（洋）

五月二十五日—三十日 大阪・美術新論社畫廊

## 海軍從軍畫家戰地スケッチ展

五月二十五日—三十日 大阪・ガスビル

## 海軍協會大阪府支部主催

## 「昭和みつゑ」第二回展

五月二十五日—三十一日 日本橋ギヤラリー

## 麓人社洋畫展

五月二十六日—二十八日 銀座・紀伊國屋

## 黒曜會第三回展（日）

五月二十六日—二十九日 京都・大毎會館

## 金子博信、中村琢二洋畫展

五月二十六日—三十日 銀座・資生堂

## 早苗會小品展（日）

五月二十六日—三十日 名古屋・松坂屋

## 美術往來社日本畫新作展

五月二十七日—二十九日 芝・東京美術俱樂部

美術往來社の主催、東西の諸家四十餘名の新作を蒐めて展覧した。

## 九大美術部洋畫展

五月二十七日—二十九日 福岡日日新聞社

## 一水會々員展（洋）

五月二十七日—三十日 銀座・三味堂

銀座三味堂の主催で、一水會々員八名の新作二點づつ、計十六點を展覧した。石井柏亭の「小豆島」、安井曾太郎の「普陀宗乘廟」、裕伊之助の「バラ」、木下孝則の「ピアノに凭る女」、木下義謙の「櫻と桃」、中村善策の「山村風景」などが挙げられる。

## 國學院大學美術研究會第十六回洋畫展

五月二十七日—三十一日 新宿・天城畫廊

## 末澤繁信洋畫展

五月二十八日—三十日 神戸畫廊

## 石火光哉洋畫個展

五月二十八日—三十日 福岡日日新聞社

## 絕對象派協會第一回展（洋）

五月二十八日—三十一日 數寄屋橋・日動畫廊

山本敬輔、廣幡憲など二科會第九室出品の五名の作家が新に結成した同人展で、いはゆる抽象派に屬する作品を見せた。

## 造型美第四回展（染色）

五月二十八日—三十一日 京城・三越

## 熊谷守一新毛筆畫招待展觀

五月二十九日 奈良大佛殿西側赤門内上司雪海方

## テザミ第三回洋畫展

五月二十九日—六月一日 銀座・紀伊國屋

## 新美術人協會第一回展（日）

五月二十九日—六月五日 東京府美術館

福田豊四郎、吉岡堅二が中心となつて組織した新進の日本畫團體で、作品公募の上その第一回展を開いた。日本畫の傳統的技巧によらず著しく洋畫化の傾向をおふ點が注目される。多くは反省と含蓄を缺いた摸索的創作であるが、青年らしい過渡期的技術の實驗を大膽に示したものとといふべく、その點興味をひくものであつた。吉岡堅二の「乳牛」（四曲半双）及び福田豊四郎の大作「濤」の二作は共に同會の代表作で、裝飾的様式化を行つた大膽な經營には非凡な能力を認められるが、繪畫的には或る低調さを免れ難い。その他では柴田安子の「花」、藤田隆治の「ハーモニカバンド」、遠藤燦可の「歸路」、神田頑之、岩崎鐸、藤田復生等の諸作が比較的良質のものとして挙げられる。搬入數九五、陳列六四點。

## 綜合人形藝術展

五月二十九日—六月五日 日本橋・白木屋

## 人形藝術院主催。東京日日新聞社後援。

## 辻愛造洋畫展

五月三十一日—六月五日 大阪・美交社

## 六月 月

## 昭和工藝協會創立十周年記念展

六月一日—二日 大禮記念京都美術館

## 軌線第二回美術展（日）

六月一日—三日 京都・河原町ギヤラリー

## 新簞曾第三回同人展（日）

六月一日—四日 京都・大丸

橋本關雪門下の檜崎鐵香、椋崎朱雀、三津川光胖等十數名が組織する同人展で、關雪は尺八横物「順風」を贊助出品した。

## 青松會第三回日本畫展

六月一日—四日 上野・松坂屋

## 朔日會第一回展（洋）

六月一日—五日 銀座・三味堂

## 清光會第五回美術展

六月一日—五日 銀座・資生堂

名家七人を會員とする後藤貞太郎主催の展覧。陳列數六點。洋畫では安井曾太郎筆「薔薇」、「京城府」が最近のこの作者の色彩と簡約的表現を示して注目をひいたが、や、技巧偏重に涉つたのが惜まれる。坂本繁二郎の「林間馬」、「黃馬」二點は例の獨自な様式に成る。日本畫では小林古徑の「梅花」は主題に趣好を凝らしてをり、安田靉彦の「うさぎ」は描線に工藝的な美しさのあるもので、巧緻な出来であつた。

## 珞々會第四回展（日）

六月一日—五日 日本橋・高島屋

高島屋主催の展覧で、今回の出品者は東京側二人、京都四人である。招待日には京都側の出品はいづれも未着で、上村松園の「綠雨」はつひに會期に遅れ、同會の大

阪展に陳列された。一流作家が相當の力作を示したもので、技巧的には豪華であるが、内容の上で必しも充實したものとは見なしがたい。西村五雲の「清潭」は瀟灑を寫して飛沫の描寫に巧妙な刷毛さばきを見せ、西山翠嶂の「豎幅「宵の春」は鼻二羽を描いて構圖に洒落れた趣好を示した。菊池契月の「八幡太郎」は淡雅な賦彩による仕上美しく、錦木清方の「稻妻」は雷鳴に脅えた娘の姿を描いて、古風な風情を表はした。結城素明の三幅對「大八洲」は中央を富士裾野の農耕圖、左右を山櫻にした象徴的な畫題のもの、上村松園の「綠雨」は婦女三人の立姿を描いて常の如き重厚な賦彩を見せた。

### 土田麥僊遺作展(日)

六月一日—五日 東京府美術館

昭和十一年將來を惜しまれつゝ逝去した土田麥僊の遺作展覽會は、五月二十二日より二十六日迄大禮記念京都美術會に於て催されたが、これに引き續き東京に於ても開催された。彼の五十年の生涯における主要作品と畫稿寫生帖等七十六點が展覧され、その畫業の跡を詳に觀ることができた。鈴木松年の畫風にあきたらず、轉じて竹内栖鳳の門に移つた彼は、既に若冠にしてその鋒芒を現はした。第十二回新古美術品展覽會に於て二等賞一席を得た「春の歌」、第二回文展に於て三等賞を得た「鬨」、又第五回文展の「髮」の如き、いづれも彼の學んだ傳統的筆致を示しつゝ、既に後年の秀れた構力と色調とを豫示してゐる。更に第六回文展の「鳥の女」より第七回文展の「海女」、第八回文展の「散華」、第九回文展の「大原女」に至つては、次第に近代西歐畫或は上代佛畫の研究に啓發され、傳統的日本畫を打破しつゝ、躍動的な畫面を構成して行つた跡が窺はれる。更に文展第十一回の「春禽趁晴圖」に於て一轉機を示した彼は翌大正七年同志と共に國畫創作協會を組織し、その第一回に「湯女」を、第二回に「三人の舞妓」を、第三回に「春」を出品して

振幅の廣い、色彩豊麗な畫風を示してゐる。次で大正十年渡歐して専ら巴里に在つて近代藝術を究め、翌年伊太利を經由して歸朝したが近代西洋畫の長所を採りつゝ、更に古大和繪等の研究によつて「林泉舞妓」(第四回國展)「大原女」(第六回國展)等を生んだ。次で帝展に復歸して「鬨」(第十回帝展)、「明粧」(第十一回帝展)を出品するに至つて、彼は明瞭にその獨自的な様式の完成へと進み、寧ろ中期の動的な畫面に比し靜的に沈潜せる作風を示し、白を主調とする單純明調な色彩と濃滞なき綫による輪廓づけを發展せしめて行つた。かくして彼の晩年の「平牀」(第十四回帝展)、「燕子花」(第十五回帝展)或は絶作「妓生の家」の如き秀れた作品が成つた。しかも、この遺作展に出陳された克明にして倦むところなき舞妓や草花の寫生或は刻苦せる畫稿を觀る時、彼の偉大なる藝術の決して偶然に成つたものでないことを痛感させられた。

### 陳列目錄

春の歌	四曲 片双	京都市 峰	光次郎藏	大原女寫生	額 三面	京都市 土橋嘉兵衛藏
新古美術展第十二回出品				湯女	二曲 一雙	松阪市 小津與右衛門藏
風景	一幅	一ノ宮市 野村一	志藏	春禽趁晴圖	二曲 一雙	大連市 首藤 定藏
風景	一幅	同		文展第十一回出品		
髮	一幅	京都市 京都繪畫專門學校		舞妓寫生	額 三面	新瀉縣 近 寅一郎藏
文展第五回出品				三人の舞妓	額 一面	倉敷市 大原孫三郎藏
熊野の山	一幅	京都市 同	忠藏	大原女	額 一面	
大原女	四曲 一雙	京都市 同	忠藏	國展第二回出品		
文展第九回出品				舞妓寫生	額 一面	
南國の冬	一幅	京都市 土井久	彌藏	國展第四回出品		
鳥の女	二曲 一雙	京都市 文 部 省藏		林泉舞妓圖	額 一面	京都市 近 熊次郎藏
文展第六回出品				國展第四回出品		
散華	左右二枚折 中央六枚折	京都市 吉田 忠藏		林泉舞妓圖小下繪	額 一面	京都市 増田徳兵衛藏
文展第八回出品				舞妓寫生	額 一面	京都市 野間 清治藏
海女	六曲 一雙	新瀉縣 關 眞次郎藏		國展第三回出品	額 二面	
				娘寫生	二曲 片双	
				帝展第十二回出品		
				朝顔	二曲 一雙	
				國展第七回出品		
				明粧	額 一面	京都市 侯爵 細川護立藏
				帝展第十一回出品		
				平牀	額 一面	京都市 大禮記念京都美術
				帝展第十四回出品		
				燕子花	額 一面	京都市 文 部 省藏
				帝展第十五回出品		
				御物	額 二面	
				鬨	額 七面	
				枝生の家寫生	額 一面	
				枝生の家(未成—總筆)	六曲 片双	
				妓生の家草稿	六曲 片双	
				久通宮家御貸下		
				甜瓜圖	御小櫃四枚	
				朝顔寫生		
				金魚	一幅 和歌山市 平野庄三郎藏	
				富貴草	一幅 大阪市 森居幸一郎藏	

舞妓（團扇型）	一幅	和歌山市	池田昌克藏
鮎	一幅	和歌山市	池端俊輔藏
蓮寫生	一幅	京都市	土橋嘉兵衛藏
芍藥	一幅	倉敷市	大原孫三郎藏
清光會第一回出品			
菊	一幅	京都市	大波羅密寺藏
甜瓜圖	一幅	京都市	堀井龍三藏
七絃會第二回出品			
舞妓	一幅	京都市	玉置源一郎藏
春虹會第一回出品			
山茶花	一幅	京都市	小西艶太藏
七絃會第四回出品			
黃蜀葵	一幅	京都市	小西長治郎藏
七絃會第三回出品			
蓮花	一幅	倉敷市	大原孫三郎藏
清光會第三回出品			
大原女	一幅	京都市	田附藏
燕子花	一幅	京都市	伊藤庄兵衛藏
歌妓圖	一幅	京都市	平尾贊平藏
七絃會第五回出品			
龍に香魚	一幅	京都市	内貴清兵衛藏
小原女（小揚子にて描く）	一幅	京都市	内貴清兵衛藏
妓生	一面	京都市	佐藏梅吉藏
舞妓	一幅	京都市	田附政治郎藏
芥子	一幅	千葉市	齋藤三郎藏
國展第五回出品			
落花	一幅	倉敷市	大原孫三郎藏
朝顔	一幅	京都市	智積院藏
京都美術館出品			
舞妓	一幅	京都市	細川雅子藏
清光會第三回出品			
鷄	一幅	京都市	近熊次郎藏
聖德太子奉讀展出品			
蓮華	一幅	京都市	土橋嘉兵衛藏
七絃會第一回出品			
茄子 紙本	一幅	京都市	恒藤恭藏
舞妓 紙本	一幅	京都市	立半靜雄藏
碧粟寫生	六十七枚	大阪市	八木正治藏

歌妓寫生	三十二枚	京都市	平尾贊平藏
蓮寫生	十二枚	大阪市	八木正治藏
朝鮮古墳壁畫模寫	五面	京都市	上田四郎藏
林泉舞妓下圖	一幅	京都市	上田四郎藏
妓生寫生	三幅	京都市	上田四郎藏
大原女草稿	大額一面	京都市	金島桂華藏
ヴェストイユ風景（テムベラ）	額二面	京都市	金島桂華藏
舞妓寫生	七面	京都市	金島桂華藏
舞妓寫生	一面	京都市	金島桂華藏
燕子花寫生	一面	京都市	金島桂華藏
蝶寫生	一面	京都市	金島桂華藏
茄子寫生	一面	京都市	金島桂華藏
妓生寫生	一面	京都市	金島桂華藏
俱舍曼陀羅模寫	五幅	倉敷市	大原孫三郎藏
蓮寫生	一幅	倉敷市	大原孫三郎藏
帶地意匠	額	京都市	武内龜之助藏
衣裳描畫	二着	京都市	武内龜之助藏

浩然社第六回展（日）

六月一日—五日 新宿・三越

西山畫塾第十一回青甲社展

六月一日—五日 大阪・三越

熊谷守一日本畫展

六月一日—五日 大阪・阪急百貨店

立光會第三回洋畫展

六月一日—五日 大阪市立美術館

關西の東光會出品者の組織する公募展で、百八十餘點を陳列、別に東光會員の贊助出品があつた。

塊藝會第六回彫刻展

六月一日—五日 名古屋・丸善

名古屋の新進彫刻家が組織する同人展で、菅沼五郎、大嶽茂樹をはじめ同人十一名の作品計四十點を陳列した。

大阪日本畫展

六月一日—七日 大阪市立美術館  
自有俱樂部主催。大阪在住の村上徹山、圓尾華市、稻

村虹亭、岡茂以等五十六名を會員とする自有俱樂部の日本畫展で、同人の作品四十餘點を陳列した。

春秋會第二十回洋畫展

六月一日—七日 大阪・磯急百貨店

一窓會第一回展（日、彫、工）

六月一日—七日 大阪・松坂屋

京都美術工藝學校を三十年前に卒業した日本畫の案本一洋、三宅風白、工藝の石田玉英、彫塑の荒谷芳雄等が新に組織した同人展。

律動第二回展（洋）

六月三日—五日 銀座・紀伊國屋

鈴木清第一回作陶展

六月三日—五日 京都・朝日會館四階畫廊

壺、香爐、盛器等約八十點を陳列。

服飾美術展覽會

六月三日—七日 銀座・松屋

藤田嗣治日本畫展

六月三日—十日 大阪・關西畫廊

近作の半切、横物等十八點を陳列した。

荒木十畝個人展（日）

六月四日—五日 東京美術俱樂部

阿部文吉主催。荒木十畝の近作三十點を展觀した。花鳥畫に独自の畫格を持してゐる。

……、閑寂、冬、春、海魚、鶏頭花、早春等の時に林檎に取材し、時に菊に取材し、時に魚介に取材したこれ等の花鳥は十畝の今度の個展に於ける類かき建設畫であり、新鮮の芳氣噴るが如き、沈寂にして清淡、近頃の厭にアルミニウムのやうにくねつた色線を施した院展派風の感覺的花鳥に對し、古格嚴たる十畝の花鳥は熱暑に冷氣を送るが如く、まことに名匠なる哉の感ぞうに深い。……（塔影一四ノ八）

堂本畫塾東丘社第一回展（日）

六月四日—六日 大禮記念京都美術館

堂本印象畫塾の展覽會で、總陳列數五十九點。印象は六曲一雙の「雲收日昇」を出陳した。

授賞(東丘賞)「鳥の群」曲子光男、「昭和十三年に拾ふ」古川雅司、「春」澤野文臣、「樂園」三原清宏、「春宵」不二木阿古、「探魚」戸島光雄

### 岩田藤七工藝硝子新作品展

六月四日—十三日 銀座・服部時計店

### 東陶會第二回日本陶藝展

六月四日—十四日 東京府美術館

東陶會が主催して會員、會友等の作品の外、全國から出品を公募或は招待して開く大規模な陶藝展で、今年はその第二回を開催した。陳列を地方別に第一室九州、山陽、山陰、北陸、第二、三室京都、第四室中部地方、第五、六室關東地方としてゐることは日本陶藝の現状を概観する上に興味がある。たゞ作品の上からは陶磁工藝の代表的水準を示すものとはいひ難く、數の割に傑れた作品に乏しかつた。陳列總數一七七點。

授賞(東陶賞)長谷川白峰、大庭要一(東陶獎勵賞)佐藤孝三、栗木伎茶夫、勝尾青龍洞、松本吉二(出光賞)安原喜明、長谷川怒、加藤華仙、松本佩山(日賞)小柴外一、唐杉榮四

### 第十七回朝鮮美術展(綜合)

六月四日—二十五日 京城・景福宮内、鮮展會場

朝鮮總督府の事業である鮮展は既に十七回に達した。今回の審査委員は、東洋畫橋本關雪、矢澤政月、西洋畫和川英作、伊原宇三郎、彫刻及工藝高村豐周の五名で、鑑査の成績は左の如くであつた。

	個人數	人員	入選數	人員
第一部 東洋畫	一五三	一〇一	五五	五三
第二部 西洋畫	七九四	四〇七	一五三	一二七
第三部 彫刻工藝	二〇五	一一一	八九	七五
合計	一五二	六三九	二九七	二五五

別に無鑑査出品は第一部一二點(二名)、第二部一五

點(一四名)、第三部九點(九名)、計三六點。

授賞 昌德宮賜賞 第一部「靜郊」沈銀澤、第二部「襟巻した女」大塚與志、第三部「めじろ」淺川牧榮 朝鮮總督賞 第一部「中庭」田淵秀明、「夏日」金基昶 第二部「すちちび」山下一彦、「こま」根津莊一、第三部「樂浪文様彩漆寶石匣」坂部幸太郎、「女人立像」金復鎮

特選(第一部)金基昶、千葉房男、江口敬四郎、今川慶一郎、田淵秀明、沈銀澤、(第二部)松崎喜美、金仁承根津莊一、山下一彦、田中紀弘、大塚與志、沈亨求、櫻田精一、崔桂淳、高島功、(第三部)姜萬國、坂部幸太郎、鎌田龍子、鄭寅城、金東顯、淺川牧榮、戸張幸男、金復鎮

### 京都工藝美術協會第九回展

六月五日—九日 大禮記念京都美術館

京都工藝美術協會主催の第九回展で、染織、陶磁、漆工、金工、木工、版畫等の種目に互る作品を公募の上、入選作を陳列した。總搬入數は七九一點、入選三六八點で、外に審査員及無鑑査の出品四七點があつた。

授賞(特賞)寺池旬輝、安部英三郎、三木貞三、里村義國、清水祥次、福永俊吉、中村鶴生(選匠賞)塚本繁加納白干、中島且陽、岡本爲治、野呂天潤、衣畑勲、眞井邦雄(府知事よりの工藝賞)寺池旬輝

### 赤松雲嶺藝墨雲社第二回繪畫展(日)

六月五日—十日 大阪・阪急百貨店

### 全染織圖案第九回大展覽會

六月六日 東京府美術館

日本織物新聞社主催。東京府後援。日本精神表現の標準圖案展観。

### JAN八回展(洋)

六月六日—九日 銀座・紀伊國屋

### 藤田嗣治第五回琉球作品發表展

六月六日—十日 數寄屋橋・日動畫廊 最近三週間、那覇、首里に滞在して琉球の特殊な風物を描いた十二號以下の小品二十餘點を發表した。「海を見守る墓」をはじめ「海邊の墓」「琉球の女」等洗練された筆致で地方色を捉へ、優れたものであつた。素描淡彩の「那覇美人」も獨特な技巧の味を見せてゐた。

### 松尾松濤個展(洋)

六月六日—十日 丸ノ内・東京會館

### 新制作派協會デッサン展

六月六日—十日 神戶畫廊

### 美友會第十三回工藝品展

六月六日—十一日 大阪・三越

### 三暢社第一回邦畫展

六月七日—九日 銀座・三味堂

東美校出身の蓮尾辰雄、河村光彩、三輪敏夫三名の日本畫同人展。

### 愛知社同人近作展

六月七日—九日 名古屋・丸善

### 本山竹莊還曆記念東西大家新作畫展

六月七日—九日 東京美術俱樂部

骨董商陶篋堂の前主人本山竹莊が還曆に因んで開いた展観で東西諸家の新作を蒐め豪華な會場効果を備へてゐた。川合玉堂の豎幅「秋山飛瀑」及び横幅「鶴飼」のうちで後者は往年の帝展作とは同圖題のもの、竹内栖鳳は葱に犬を配した「初夏」、横山大觀は「桃」を出品した。橋本關雪の「夕月」及び狸を描いた「涼宵」の二點、安田靉彦の「豊公」、菊池契月の騎馬武者像「魁」、その他池上秀畝、奥村土牛、上村松園、山口蓬春等の出品が挙げられ、中村岳陵の雄を描いた「永日」は構圖整ひ、兒玉希望の二作も健筆の仕事であつた。

### 陳列目錄

春の夕暮 伊東 深水 雄姿 池上 秀畝



美術展覽會（六月）

五六

奉景山水	橋本 獨山	永日	中村 岳陵
夕月	橋本 關雪	やなぎ櫻	上村 松園
涼宵	同	白梨	山口 蓬春
若葉蔭	西村 五雲	關庭	山口 華楊
渚鷗	西山 翠嶺	豐公	安田 叔彦
糸櫻	堂本 印象	春溪	松林 桂月
花菖蒲	徳田 神泉	鴨	前田 青郎
双鷄	奥村 七牛	鯉	福田 平八郎
秋山飛瀑	川合 玉堂		小林 古徑
鶴飼	同		小室 翠雲
長春	川端 龍子	鷹	兒玉 希望
白雲重疊	川村 曼舟	櫻花双鶴	同
宵櫻	鍋木 清方	聖觀音	荒井 寛方
叭々鳥	堅山 南風	鶯	荒木 十畝
鶴	金島 桂華	秋景山水	木村 糖雲
暮色蒼々	橋尾 翠田	魁	菊池 契月
桃	橋山 大綱	杜鵑	岸浪百脚居
曉歌	田中剛哉州	華山先生	島田 墨仙
初夏	竹内 橋風	富貴	廣島 晃甫

春泥會試作展（日）

六月七日—十日 大阪・松坂屋  
中村貞以畫塾の試作展で陳列數五十餘點。

型成第二回美術展（洋）

六月七日—十日 京城・三中井

李陽會展

六月七日—十一日 神田・東京堂

阜月會第三回工藝展

六月七日—十二日 日本橋・白木屋

眞道黎明北支風景畫展

六月七日—十二日 大阪・大丸

作者は同盟通信社の依頼で昭和十二年の秋北支に従軍したが、そのスケッチに基く新作十五點を陳列した。

石川縣工藝美術品展

六月七日—十二日 日本橋・高島屋

太田三郎洋畫日本畫展

六月七日—十三日 福岡・岩田屋

岩田屋美術部主催

京都昭和工藝協會第十回美術工藝品展

六月八日—十日 九ノ内・東京商工獎勵館

創立十週年を迎へ「十に固める意匠」「婦人用具としての工藝品」等の課題を設けて、會員の作品を展覧した。

種目は金工、七寶、漆器、陶磁器、木竹品、染織、刺繍その他で、陳列數約五百點に上つた。

土肥刀泉作陶展

六月八日—十一日 銀座・資生堂

日本新興南畫院第一回展

六月八日—十二日 大禮記念京都美術館

磁座第二回展

六月九日—十三日 日本橋ギヤラリー

堤寒三北支みやげ南畫展

六月九日—十三日 銀座・三越

艸園會々員洋畫小品展

六月九日—十三日 大阪・松坂屋

田中佐一郎洋畫、宇野三吾陶器展

六月九日—十三日 京都・丸物

大美展（日、洋）

六月九日—十五日 大阪市立美術館

別車傳資水彩畫展

六月九日—十五日 大阪・阪急百貨店

朝鮮工藝展覽會

六月九日—十八日 大阪長堀・高島屋

朝鮮工藝研究會主催、朝鮮總督府後援

原生社第二回展（洋）

六月十日—十二日 銀座・紀伊國屋

美術展覽社主催第一回振興會（日）

六月十日—十二日 神田・松本亭

荻谷巖洋畫個展

六月十日—十二日 神戸・大丸

同志社大學繪畫部駿馬會展

六月十日—十二日 京都・朝日會館

新古ギヤマン展

六月十日—十四日 上野・松坂屋

東京美術家協會第一回展

六月十日—十四日 銀座・青樹社

第一美術協會小品展（洋）

六月十日—十五日 大阪・美交社

岩田藤七創案第四回新興硝子器展

六月十日—十六日 日本橋・高島屋

作者独自の吹硝子の技巧になる食器、花盛、鉢、果物器、置物等を陳列した。形と賦彩に自由な趣致を見せて中々面白いものが多かった。

全國優良工藝品展

六月十日—十九日 富山縣商工獎勵館

織田一磨蠟染展

六月十一日—十二日 吉祥寺・アキモト畫廊

南方畫壇第一回展

六月十一日—十二日 高崎市・公會堂

竹谷富士雄、桑原實、森繁作品發表展（洋）

六月十一日—十三日 數寄屋橋・日動畫廊

岩田秀耕個展（日）

六月十一日—十三日 京城・三中井

半弓會第一回日本畫展（洋）

六月十一日—十五日 大阪・阪急百貨店

茶室と床の展覽會

六月十一日—十五日 京都・丸物

瀧野川彫塑研究所試作展

六月十一日—二十二日 東京府美術館

小倉右一郎が指導する研究所の試作展で小倉右一郎、

早乙女龜次、山畑阿利一等の賛助出品があり、計六十餘點を出陳した。

### 港屋古陶磁展

六月十二日—十四日 兵庫縣・御影公會堂

### 中川紀元個展

六月十二日—十六日 京城・三越

### 土肥刀泉作陶展

六月十二日—十七日 大阪・阪急百貨店

### 森村宜裕繪畫展(日)

六月十三日—十七日 大阪・三越

### 土田麥僊遺作畫展

六月十三日—十七日 大阪・三越

大阪三越では故土田麥僊の畫稿二百餘點の展觀を行つた。朝鮮婦人、老人、妓生、舞妓、芍藥、百合、牡丹、燕子花、山茶花、桃、櫻等が主なる畫材であつた。

### 京洛百景圖繪展(日)

六月十四日—十七日 岐阜・丸物

### 伊東陶山遺作展

六月十四日—十七日 名古屋・松坂屋

名古屋松坂屋美術部では故二世陶山の遺作百數十點を展觀した。栗田燒の傳統的技術に成るもので、床置、茶器、花瓶、菓子器の類であつた。

### 九品庵主催東西大家新作畫展(日)

六月十四日—十九日 日本橋・高島屋

九品庵栗田作太郎の主催で、東西の諸家四十餘名の新作を揃へた。輕い小品ながら、奥村土牛「靜物」、竹内栖風「南支風光」、結城素明「峻嶺」、森白市「幸魚」などが挙げられる。

### 中村直人北支從軍畫展

六月十四日—十九日 銀座・松坂屋

彫刻家中村直人は北支に從軍して得たスケッチを發表した。皇軍將士の陣中小景や、支那の風俗を毛筆彩畫、

鉛筆彩色畫、水墨畫等で描いたものである。

### 筑前美術第五回展(綜合)

六月十四日—十九日 銀座・松坂屋

### 亞夏漫展

六月十四日—十九日 銀座・松坂屋

### 木春會洋畫展

六月十五日—十七日 銀座・三味堂

### 島野重之第一回個展(洋)

六月十五日—十八日 數寄屋橋・日動畫廊

作者は光風會々員で、昨年文展で特選となつた。風景畫が多く、筆致は手なれてゐるが、更に感覺の新鮮さが望まれる。

### 近藤浩一路新作畫幅展(日)

六月十五日—十八日 大阪長堀・高島屋

### 平岡權八郎近洋畫展

六月十五日—十九日 銀座・青樹社

### 大久保作次郎個展(洋)

六月十五日—十九日 大阪・美術新論社畫廊

### 京都工藝美術協會展

六月十五日—二十日 日本橋・三越

### 五五頁參照

### 淺井不見近作油繪展

六月十五日—二十日 名古屋・後藤版畫店

### 丸山曉霞高山植物色紙展

六月十五日—二十五日 新宿・天城畫廊

### 木下孝則洋畫個展

六月十六日—十九日 神戸畫廊

神戸畫廊主催。油繪二十餘點を陳列した。

### 日本畫小品展

六月十六日—二十日 日本橋・三越

### 三越主催

### 時代美術品展

六月十六日—二十一日 上野・松坂屋

### 鍋井克之色紙展

六月十六日—二十三日 大阪・阪急百貨店

### 青桃會洋畫展

六月十七日—二十日 大阪市立美術館

### セクションダール第五回洋畫展

六月十七日—二十一日 大阪市立美術館

關西洋畫壇の新人を以て結成し、田村譽志那、玉澤潤一等同人十八名の作品計百二十二點を展觀した。

### 琉球けてもの掘出し市

伊藤清永琉球風景洋畫展

六月十七日—二十三日 大阪・阪急百貨店

### バート・ド・ヴェール作品展

六月十七日—二十五日 大阪・阪急百貨店

### 大日美術院第二回展

六月十七日—二十七日 大阪市立美術館

### 五一頁參照

### 小林觀爾個展(日)

六月十八日—二十日 日本橋・東美俱樂部

近作三十點を展觀、花鳥畫に街はぬ技巧を發揮して好評を得た。

### 日本美術振興會花鳥畫展

六月十八日—二十日 東京美術俱樂部

### 墨人會第二回展(日)

六月十八日—二十七日 上野・日本美術協會

昨年菅橋彦、小杉放庵、津田青楓、渡邊大虛等十二名を會員として創立した同會は作品公募の上最初の東京展を開催した。應募總數一〇六點、入選一六點、陳列總數四三點。

小杉放庵は孔雀を主題とする二曲半双「青鸞」及び模四枚に描いた「山行」を出品、後者は構圖に作者の長所を堂々と發揮して立派であつた。菅橋彦の六曲一雙「春

郊日午、秋晚東野」は「一休禪師」と共にいはば老境の雅懷を表現した逸作で、頗る異彩を放つた。矢野橋村の六曲一双「四季行樂圖」は力作、中川一政の「俳諧屏風」も独自の妙味があり、その他渡邊大虚の南畫風の諸作、小松均のスケッチ風の描寫が擧げられ、津田青楓の「牛久沼河童畫冊」は洒脫でこの會らしい出品であつた。小川芋錢の出品は見られなかつた。

#### 佛生寺虛明個展（日）

六月十九日—二十三日 京都・丸物

#### 十作家花瓶と水盤展

六月十九日—二十三日 大阪・三越

#### 皇軍慰問寫眞とスケツチ展

六月十九日—二十四日 京都・丸物

#### 造型彫刻家協會第四回展

六月十九日—二十九日 銀座・三越

本郷新、山内壯夫、明田川孝、峯孝等主として國展彫塑部の作家を以て組織する同會の同人展で、ブールデルの傾向をおふもの、メカニズムの型式化を試みるもの、近代的なインテリゲンチヤの匂ひを感じさせてはるるが、概ね彫刻的に稀薄で、迫るものに缺ける憾みがあつた。彫刻の外に同人のデッサンを陳列し、参考にロダンの素描、マイヨールの婦人胸像を出品した。

#### 村井正誠小品展（洋）

六月二十日—二十二日 敷寄屋橋・日動畫廊

「舊作展だと思ふ。……氏の藝術態度は自由美術展では抽象的な形體をとつて來たが、その當時と少しは變はりがないと思ふ。……氏の態度は繪畫藝術の態度である、それは對象世界に對して氏の場合は勞働氣によつて把握し、勞働氣として表現する。例へば今度の個展の『朝』はその好例であつて、獨特なリリズムの世界を示してゐる。……最近の作品は氏の生活設計圖として受けとられ、餘りにもモノローグの世界に閉ぢこもり過ぎはしないかと思ふ。」（アトリエ一五ノ一〇）

#### 瑞爽畫社第三回展（日）

六月二十日—二十三日 銀座・養生堂

故松岡映丘門下の新人を以て組織する同人展で、新興大和繪を近代化せんとする形式的試みは一應認められる。たゞ全體に弱々しく、挿繪的見方の安易さを脱せぬ傾きがあるのを遺憾とする。なかで、山本丘人の「紅葉の季」はたらし込みで手際よく描いて近代的に神經を盛り、杉山寧も技巧的には無難な仕事を見せてゐた。出品十一人、十六點。

#### 松柏堂前波貞吉表裝小品展

六月二十日—二十三日 銀座・三味堂

#### 古戦跡を主題とせる吉田喜藏バステル畫展

六月二十日—二十二日 大阪・清交社別室

#### 上田清一洋畫個展

六月二十日—二十三日 名古屋・丸善

#### 新日本洋畫協會小品展

六月二十日—二十三日 大阪・美術新論社畫廊

#### 梅原龍三郎個展（洋）

六月二十日—二十四日 日本橋・高島屋

陳列する所「朝暉」以下九點、いづれも二十五號乃至四十號の大きさで、「竹窓裸婦」と「竹窓讀書」の外はすべて海岸或は山を描いた。青と緑とを主調とするもの多く、緑青などの岩繪具を併用して美しい色彩効果を示し、筆觸の自由さと相まつて獨自の魅力ある畫境を作る。個展として稀に見る充實した展觀で、作者最近の勉強をよく示した。

#### 東風會日本畫展

六月二十日—二十四日 日本橋・白木屋

#### 白木屋美術部主催。

#### 駿川竹葵齋有馬龍展

六月二十日—二十四日 日本橋・白木屋

#### 白日會小品展

六月二十日—二十五日 大阪・美安社

#### 西川一章亭遺作展

六月二十一日—二十三日 日本橋・三越

#### 素顔社洋畫展

六月二十一日—二十三日 銀座・紀伊國屋

#### 河村喜太郎作陶展

六月二十一日—二十四日 日本橋・三越

#### 辻愛造洋畫個展

六月二十一日—二十四日 神戸畫廊

#### 眞野紀太郎近作個展

六月二十一日—二十五日 銀座・青樹社

#### 青甲社第四回展（日）

六月二十一日—二十五日 京都・大丸

西山翠嶂畫塾の素描展で、翠嶂を初め堂本印象、福田惠一、森守明、西山英雄、上村松篁、福田翠光、三谷十糸子等六十餘名が研究的な素描を發表、京都においては珍しい展觀として注目をひいた。

#### 伸草社第四回展（日）

六月二十一日—二十六日 新宿・伊勢丹

#### 六萌會洋畫展

六月二十一日—二十八日 丸ノ内・東寶地下グリル

#### 珣々會第四回展（日）

六月二十二日—二十四日 大阪長堀・高島屋

#### 山田双年個展（日）

六月二十二日—二十四日 名古屋・十一屋

#### 池上浩個展（洋）

六月二十二日—二十五日 京城・三越

#### 正宗得三郎洋畫個展

六月二十二日—二十六日 住吉・觀音林俱樂部

合資會社東言社主催。六十號の「或る日の午後」をはじめ油繪計三十四點を陳列した。

#### 六雲會第三回展（洋）

六月二十三日—二十六日 大阪市立美術館

石井光樹油繪展

六月二十四日—二十九日 大阪・三越

十數年歐米に滞在、先年歸朝した作者の滯歐作を發表した。

三神社第二回展(日)

六月二十四日—二十九日 大阪・三越

同人太森富平、梶川眞人、直原放吉三名の近業二十餘點を陳列。

金澤四秀會工藝展

六月二十四日—二十九日 大阪・三越

伊藤藤洋畫展

六月二十四日—三十日 大阪・阪急百貨店

岡正一個展(洋)

六月二十五日—二十七日 神戸畫廊

有吉正雄神戸三十景展(洋)

六月二十五日—二十八日 神戸・プチギャラリ

くろも第五回展(洋)

六月二十五日—二十九日 銀座・資生堂

兒玉畫塾第二回展(日)

六月二十五日—二十九日 日本橋・三越

兒玉希望門下の作品展で、いづれも相當の努力を見せた大作二十五點を陳列した。別に希望の「牡丹」が賛助出品されたが、落つた品位と確かな技術を見せてさすがに際だつてゐた。授賞作品夫々に研究的態度の見るべきものがある。

熟賞「日高川」奥田元宋、「菖蒲」大矢三郎 長流賞

「凍田」須藤荷義

蒼原會水彩畫小品展

六月二十五日—二十九日 銀座・三味堂

牧野鶴彦油繪個展

六月二十五日—二十九日 名古屋・後藤版畫店

繪更紗第二回畫林作品展

美術展覽會(七月)

六月二十五日—二十九日 大阪・阪急百貨店

清光會展(日、洋)

六月二十五日—三十日 大阪・美術新論社畫廊

細合秀毅個展(日)

六月二十六日—二十九日 京城・三越

等々力已吉北支從軍畫展(洋)

六月二十六日—三十日 新宿・天城畫廊

水彩畫七人展

六月二十六日—三十日 數寄屋橋・日動畫廊

日動畫廊の主催で、石井柏亭、中澤弘光、三宅克己、石川欽一郎、南薫造、三上知治、中西利雄の水繪數點づつを蒐めた。石井の「蔬菜」「那須山麓」「松林」は感覺の充實した佳品であつた。

鈴木良三スケッチ展

六月二十六日—三十日 京城・三越

岡墨光堂新作畫展

六月二十七日—二十八日 大阪・美術俱樂部

戰線スケッチ展

六月二十七日—二十九日 高松・三越

クロツキ一研究所作品展

六月二十八日—三十日 銀座・紀伊國屋

新田穰版畫バステル個展

六月二十八日—三十日 京城・三中井

聖書に取材した繪畫展

六月二十八日—七月三日 新宿・伊勢丹

荻青社日本畫展

六月二十八日—七月三日 大阪・大丸

先に京都美術館に同人展を開催した同會では同人連作の「大阪名所圖繪」の内二十四景及び新品の小品十一點を展覧した。

岡墨光堂新作畫展(日)

七月一日—二日 京都美術俱樂部

岡村吉右衛門染色展

七月一日—三日 西銀座・たぐみ工藝店

青丘會第三回新作畫展(日)

七月一日—五日 日本橋・高島屋

高島屋主催。從來の「五作家展」を改稱したもの。出品者は太田聽雨、奥村土牛、徳岡神泉、溝上遊龜、山口華楊の五名。聽雨の豎幅「岩代のたよ女」は作者最近の人物畫における研究振りを示し、土牛の尺八豎「軍鶏」は簡略な表現に工夫を見せ鋭いものがあつた。神泉の檉鳥を描いた「霜秋」、華楊の「實桃」は技巧的に無難で床の間の鑑賞に適し、遊龜の「桃」も婦人らしく構圖の整つた穩かな出来であつた。

田中實三第三回「海と船」油繪展

七月一日—五日 數寄屋橋・日動畫廊

淺見隆三陶器展

七月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

澤田宗山作陶展

七月一日—五日 小倉・井筒屋

井上雲凌近作展

七月一日—五日 小倉・井筒屋

村尾絢子作品展(洋)

七月一日—五日 神戸畫廊

大倉陶園新作陶磁展

七月一日—六日 京城・三越

井上賢三個展(洋)

七月一日—七日 大阪・阪急百貨店

四大家水彩畫展

七月一日—六日 大阪・美交社

美交社主催。出品者は石井柏亭、石川欽一郎、眞野紀太郎、富田溫一郎の四名。

## 第三回春台美術特別大阪展

七月四日—九日 大阪・三角堂

同會幹部級の作家の出品四十三點を陳列した。岡田三郎助は「伊豆風景」「裸婦」「那須野の初秋」外二點の作品を出陳した。

## 現代大家水彩畫展

七月四日—二十日 新宿・天城畫廊

## 深耕會新作畫展

七月五日—十日 大阪・大丸

## 高島達四郎第一回近作展（洋）

七月六日—十日 數寄屋橋・日動畫廊

作者の最初の個展で、近作油繪二十餘點を展觀した。構圖、色彩に都雅な近代的教養趣味があつて面白いが、深味の乏しさが惜しまれる。「石膏と花」「果物」等が挙げられよう。

## 新東京展（洋）

七月六日—十日 神戸畫廊

村井正誠、山本直武ほか同人四名の關西進出展。

## 鈴木清洋畫展

七月六日—十日 名古屋・丸善

## 草上文庫主催現代大家俳畫小品畫展

七月六日—十一日 日本橋・高島屋

俳句専門の圖書館、草上文庫の經營を支援する目的の展觀で、畫壇人三十名が俳畫、小品畫を贊助出品した。

## 白石久三郎洋畫展

七月六日—十三日 大阪・そごう

## 彩々會展（洋）

七月七日—九日 銀座・資生堂

## 支那事變勃發一周年記念陸軍從軍畫展（日、洋）

七月七日—十三日 日本橋・三越

大日本陸軍從軍畫家協會主催、陸軍省後援。支那事變勃發一周年を記念しての催しで、出品者三十餘名、陳列

數日本畫洋畫等百六十六點。概ね北支における從軍作品で、南京の寫生も若干見られた。繪畫としては多く低調を免れず、川端龍子の「蘆溝橋」、長谷川春子の「黃河を渉る」等が佳い出来であつた。

## 小柴錦侍洋畫個展

七月八日—十二日 銀座・三味堂

油繪の近作十八點を兜屋西川武郎の主催で展觀した。

## 足立源一郎個展（洋）

七月八日—十二日 京城・三越

## 墨人會第二回展（日）

七月八日—十七日 大阪市立美術館

## 第十七回朝鮮美術展地方巡回展

七月八日—十七日 釜山日報社

## 主催釜山日報社

## 三尾吳石猛虎畫展

七月九日—十二日 名古屋・松坂屋

## 二葉會繪畫展

七月九日—十三日 大阪・松坂屋

## 南畫鑑賞會第五回展

七月九日—十三日 上野・日本美術協會

## 神原浩個展（洋）

七月九日—十五日 大阪・阪急百貨店

## 御國彫宗家社中展

七月十一日—十三日 銀座・資生堂

## 關向美堂展（日）

七月十一日—十三日 日本橋・東美俱樂部

關向美堂の主催で、主として中堅層の作家三十名の新作を蒐めた。なかで堂本印象の「夏果」、太田聰雨の太原女を描いた「翠簪」、中村岳陵の「猫」等は技巧的にそつがなく作られ、その他高橋周桑、森白甫、島山錦成、金島桂華、田中咄哉洲等は何れも花鳥畫を出品して感覺手法著しく共通し、近頃の鑑賞畫の典型をなすものであ

らう。特別出品として徳岡神泉、奥村土牛、森白甫等の新作陶器繪を陳べた。

## 日本畫三人展

七月十一日—十五日 數寄屋橋・日動畫廊

二科會の藤田嗣治、熊谷守一、野間仁根三名の日本畫を出品した。

「……洋畫では見られない三人の趣味がそれぞれはつきり示されて面白い、例へば藤田氏の極彩色畫「手鏡」に見るグロと新浮世繪風の味、「酒」に見る諷刺と人物の活躍、熊谷氏の「鳥」「蝦蟇」「金魚」に示された色と線の放膽さ、野間氏の「猛虎」は正に猫に類し、「河童」は牛久の芋饅頭より若いだけにまた別な味があり、「潭靜魚」「清流遊魚」など童畫の趣きがあつて嬉しい」（田野）

## 大日本魚類版畫集一周年記念魚の版畫展

七月十一日—十七日 大阪・ガスビル

## 自由美術家協會展

七月十一日—十七日 大阪市立美術館

## 日本山岳畫協會第三回展

七月十二日—十六日 日本橋・高島屋

山岳を愛好する洋畫家十五名が組織する同會の第三回展で、足立源一郎、石井鶴三、丸山晚霞、中村善策等の諸作が挙げられる。

## 等々力已吉北支戰線スケッチ展（洋）

七月十二日—十七日 名古屋・後藤版畫店

過般東京朝日新聞社の囑託として今事變に從軍した作者のスケッチ三十餘點を陳列した。

## 河野珠石南畫展

七月十三日—十七日 大阪・三越

## 淡光會小品展

七月十三日—十七日 大阪・美術新論社畫廊

## 坂井範一近作發表展（洋）

十月十四日—十七日 名古屋・松坂屋



伊藤德衛個展(洋)

七月十四日—十七日 銀座・紀伊國屋

黒美社第二回展(日)

七月十五日—十七日 京都・河原町ギヤラリ

鮫島利久、神保和幸二人展(洋)

七月十五日—十九日 銀座・資生堂

三味堂第二回日本畫展

七月十六日—十八日 銀座・三味堂

三味堂主催で、津田青楓、小杉放庵、山口蓬春、小野竹喬等の小品を陳列した。

島田鑛太郎個展

七月十六日—二十三日 大阪・阪急百貨店

關尚美堂大阪展

七月十七日—二十一日 大阪・そこう

久保田金僊四大戰役從軍畫展

七月十九日—二十三日 上野・松坂屋

今春北支に從軍した作者がその作品と、往年日清、日露兩戰役及び上海事變に從軍した際の寫生畫とを合せて陳列した。日清二〇、日露四四、上海事變二八、支那事變三〇、合計一二二點。

寺田政明個展(洋)

七月十九日—二十三日 門司・ルビー・コンフエクショナリ

山元櫻月個展(日)

七月十九日—二十四日 日本橋・三越

東西名家小品展

七月二十日—三十一日 大阪・阪急百貨店

小菅徳二個展

七月二十一日—二十五日 銀座・資生堂

新制作派協會滿二周年記念展(洋)

七月二十一日—二十五日 銀座・三味堂

結成滿二年を記念して開き、會員十名が一畫づつを出品した。手頃の大ききで、技巧の達者な人々であるだけに

揃つて中々見事である。但しこの派の主流をなす意識的な近代性誇示は時々類廢的不健康さの蔭を宿し、又技巧的新工夫が一時的な効果に終る危なさがある。

野田英夫はアメリカで習得した技術を以て日本の群衆に對して中々鋭い觀察を見せた。日本の風習の珍しく見える外國人の目であるが、それだけに他の人々が繪を作ることに没頭してゐる間に、この畫家は熱心に物を見ようとしてゐる。内田巖の「家」は氣の利かぬ畫面であるが獨自のよいものを持ち、猪熊弦一郎の感覺的に鋭敏な巧妙さと對蹠的な立場を見せる。伊勢正義の「黒い着物」三田康の「赤衣」など夫々巧みさを見せた。

池田遙邨、上村松篁新作紙園會展

七月二十三日—二十四日 京都・梅軒畫廊

畫商佐藤梅軒では紙園會に因む展覧として池田遙邨、上村松篁二人の新作各々六點宛を陳列した。

京洛諸大家新作紙園會展(日)

七月二十四日—二十六日 京都・土井撰美堂

紙園會に因む土井撰美堂の展覧で、菊池契月の「京娘」西村五雲の「小犬」その他竹内栖鳳、村上華岳、徳岡神泉等多數の出品があつた。

青柳社第一回展(日)

七月二十四日—二十六日 名古屋・松坂屋

大家名作色紙展覧

七月二十四日—二十六日 日本橋・白木屋

横田仁郎與日光風景畫展(洋)

七月二十五日—二十九日 日本橋・三越

静岡縣美術工藝品展

七月二十五日—三十日 日本橋・高島屋

美術往來社主催新作畫展

七月二十六日—二十八日 日本橋・東美俱樂部

竹内栖鳳、西村五雲、上村松園、西山翠嶂等の新作を初め計二十數點を陳列。

煌土社第四回展(日)

九月二十六日—八月一日 上野・日本美術協會

野田九浦門下の會で出陳數三十二點。必しも師風を繼がず新日本畫の思ひきつて洋畫に近づいた試みなども見られて變化に富む。その類の中では吉岡堅二の「牛」が優れてゐた。野田九浦の「山莊に於ける廣業先生」三幅對は人物を白描風に描いてすがすがしさを持った佳作であつた。その他には小品ながら徳永觀林の「魚四題」を擧げる。

松本富太郎洋畫展

七月二十六日—八月二日 新宿・伊勢丹

宮澤鐵夫南支從軍スケッチ展

七月二十七日—三十一日 新宿・伊勢丹

安田豐小品展

七月二十七日—三十一日 新宿・天城畫廊

遊戲三味會文墨作品展

七月三十日—三十一日 上野・梅川亭

八月

軌線美術三回展(日)

八月一日—三日 京都・河原町ギヤラリ

高間惣七個展(洋)

八月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

松村巽、望月省三二人展(洋)

八月一日—五日 大阪・美交社

蒙古美術品展

八月一日—七日 名古屋・松坂屋

中野政行個展

八月三日—七日 京城・三越

山口薰個展(洋)

八月三日—八日 大阪北區・大和書房

大和書房主催。

福岡出身美校在學生展（綜合）

八月四日—八日 福岡・産業獎勵館

岡崎桃々洋畫個展

八月九日—十四日 京都・大丸

島津マネキン創作品展

八月十日—十一日 大阪商工會議所

日本畫三人展

八月十日—十四日 數寄屋橋・日動畫廊

高間惣七、小林全郎、兒島善三郎三人の日本畫を展覧した。

南紀美術展（綜合）

八月十三日—十九日 輕井澤法政大學村講堂

小松益喜個展（洋）

八月十四日—十八日 大阪・美術新論社畫廊

國畫會第十三回展

八月十六日—二十一日 神戸・大丸

今泉陶園新作展

八月十六日—二十一日 京城・三越

渡邊藤一遺作展（彫）

八月十七日 佐渡・大乘寺

マネキン新作發表展

八月十七日—十八日 博多商工會議所

島津製作所福岡支店マネキン部主催。

陸軍從軍畫展

八月十九日—二十三日 名古屋・松坂屋

セクシオン・タール洋畫小品展

八月二十日—二十五日 大阪・そごう

鶴田吾郎北支新作品展（洋）

八月二十日—二十七日 名古屋・後藤版畫展

本年五月陸軍省囑託として北支戰線に従軍して得た水彩、素描計二十五點を陳列した。

BBC第三同ボスター展

八月二十日—二十七日 銀座・三越

山下忠平洋畫個展

八月二十一日—二十三日 京城・三中井

常滑町陶工組合主催貿易展示會

八月二十一日—二十三日 常滑町・陶器館

晨風會繪畫展（日）

八月二十一日—二十七日 名古屋・松坂屋

大野麥風魚類畫展（日）

八月二十四日—二十八日 大阪・そごう

原田和周遺作洋畫展

八月二十四日—三十一日 大阪・阪急百貨店

昭和十一年、四十二歳を以て逝去した故春陽會々友原田和周の遺作十數點に、木村莊八、石井鶴三、林俊衛、足立源一郎等の贊助出品を加へて陳列した。

マネキン第十回新作發表展

八月二十五日—二十七日 神戸・島津製作所東京支店

黒田外喜男洋畫展

八月二十五日—二十七日 京城・鐘紡サービスステーション

方治個人展（日）

八月二十五日—二十九日 神戸畫廊

神戸新聞社後援。滯日中の中華民國畫家方治は神戸地方の被害罹災者救済義捐を目的として個展を催し、近作二十五點を展覧した。

新興美術家協會展（綜合）

八月二十五日—三十日 福岡日日新聞社畫廊

從軍畫家小品展

八月二十五日—九月四日 新宿・伊勢丹

宮城文子油繪工藝個人展

八月二十六日—三十日 銀座・青樹社

廣告美術展

八月二十六日—三十日 大阪・そごう

岩手縣繪畫工藝展（綜合）

八月二十七日—九月二日 岩手縣商品陳列所

關西バスター畫第十一回展

八月二十九日—九月二日 大阪・三越

關西バスター同好會主催。

九月

石川英鳳繪畫展（日）

九月一日—四日 名古屋・松坂屋

酒井三良新作展（日）

九月一日—四日 大阪長瀬・高島屋

深澤紅子洋畫個展

九月一日—五日 銀座・資生堂

現代水彩畫家新作展

九月一日—五日 日本橋・高島屋

國產の水彩繪具を試用し、日本水彩畫會員二十九名が出品した。

松下溪哉作珍竹作品陳列會

九月一日—五日 大阪・三越

神津港人朗朗北支風景畫展（洋）

九月一日—七日 銀座・三越

油繪、鉛筆畫を併せて約百點を陳列。

林重義素描淡彩展（洋）

九月一日—七日 大阪・阪急百貨店

白朝會小品展（洋）

九月一日—七日 大阪・美術新論社畫廊

青龍社第十回記念展覽會（日）

九月一日—二十八日 東京府美術館

創立以來十年を經過し、今回はその記念の意をもつて開いた。一貫した同社の主張が明瞭な特色を示して、やや單調ではあるが、步調を揃へて活氣にみち、非常時を

意識しつゝ、藝術上の熱意を示した観があつた。主宰川端龍子の健闘は相かはらず目ざましく、昨年に引き續く「大陸策」連作の二「源義經」の大作と、「大同石窟」二幅とを出品した。前者は紙本竪八尺幅二十四尺、沙漠に憩ふ路駝の間に白馬を従へて東天を拜する鎧武者を描いたもの。空想と實感と象徵とを混へ、雄大な氣宇をたへて、時局に生まれた代表的作品の一に擧ぐべき出来であつた。後者は同時に院展に出陳された數點の大同作品との比較に興味をもたれた。坂口一草は「黃婆」に新奇の試みを見せたが、成功とはいへず、加納三樂の「日光山彩廟」は刷毛の興味にかられて企圖を明瞭ならしめぬ憾があつた。むしろ「花溪圖」に優れた技を見る。山崎豊の「奈良」は法華堂内部を遠筆に描いた獨特のものであるがスケッチ風の描法が粗大に陥つて、題材の雰圍氣を失ふ結果となつた。大畫面を草筆で纏めることは、龍子以下この會の特色の一をなすものであるが、これはしばしば一時的な効果本位となり、畫面を脆弱ならしめる憂を伴つてゐる。

木村鹿之介の鹿島屏風は奇巧はないがしつかりと描けてゐて、單調な姿態のくりかへしにかへつてこの鳥の特性をとらへ、裝飾の効果も面白いものとなつた。形式化が目立つが市野享の「猛禽舍」も健實な作ですぐれた才能を示してゐる。岡本成薫の「槌にのせて」は素直な態度を賞すべく、森省三の「グライダー」は新鮮な感覺と技巧の點で、時田直善の「望洋」は確實な把握の點で、河野正長の「鹿の舞」は郷土的な味のある點で、それぞれに注意を引く作であつた。

搬入總數 一四四點(一七人)、入選數 三二點、陳列數三九點

獎勵賞、青雲賞「鹿島屏風」木村鹿之介、Y氏賞「グライダー」森省三、獎勵賞「猛禽舍」市野享  
社人推舉 山崎豊、社友推舉 木村鹿之介、佐藤本草

美術展覽會(九月)

市野享、時田直善  
社子推舉 渡邊龍三、河野正長、佐藤正一、鈴木茂子、里見公起、上條靜光、直江義春

### 出品目録

源義經	川端 龍子	妍姿	大塚 榮治
大陸策 第二作	同	芥子	幾久
大同石窟	同	望嶽	渡邊 龍三
接引洞・大露佛	同	鹿の舞	河野 正長
高原放牧	坂口 一草	平林寺の庫裡	佐藤 正一
黃婆	同	電光ニユース	鈴木 茂子
晃山彩廟	加納 三樂	斜光	里見 公起
鳥欄・花門・獸墻	同	工楷	上條 靜光
花溪圖	同	石柱	直江 義春
明惠傳	福岡 青嵐	櫓にのせて	岡本 成薫
奈良	山崎 豊	待客	野原 茂生
後災・法華堂・紫雲	同	其ノ一・其ノ二	小川茂麻呂
蕉雨	渡邊 綱雄	あるサーカス團	細野 光治
華桐	小島 龍子	麥秋	谷野敬一郎
鹿島屏風	木村鹿之介	熱帶魚	林 榮太郎
猛禽舍	市野 享	永代橋	古野 大蔵
猛洋	時田 直善	城	森 省三
二龍來春	演出 榮一	グライダー	池上 隆三
山貌	利谷 双樹	飼業	琴塚 英一
殘照	松宮 左京	戦ヒ	沼野 匡志
松	坂 第一	女達	川端 龍子
鶴	岡部建一郎	草原行	

### 日本民藝館特別展觀

九月一日—十一月十九日 駒場・同館  
第三部會第四同展(彫)  
九月二日—十八日 東京府美術館

官展に反對して結成された現在唯一の在野彫刻團體で年々公募展を開いて四回に及んだもの。元來この會の特色をなしてゐる通俗性及び實用性は、それ自身必しも難とすべきではないが、會員等の作がいつでも軽いものか

實用を主眼としたものに止まつて、年一回の展覽會に力の籠つた藝術的製作を示さぬことは、會の存在が注意されるだけに頗る物たらぬ觀がある。時局に取材したものも相當あるが、技術の見るべきものに日名子實三の置物原型「難民歸る」、「雨の特務兵」或はるはがき大の浮彫「江南戰跡譜」等の小品がある位で、意氣揚らぬ。畑正吉の諸作の中では「テニス」が佳作の部であらう。池田勇八は相變らず馬を主題としてゐるが、今年は着彩の板彫を試みた「戯れ」競馬場所見」等を出し、又板に線刻の「二匹の犬」の如きを作つた。これらは彫刻の領域を離れて繪畫に近づいたもので、結果は甚だ低調である。石川確治の諸作亦繪畫的な着色板彫で、彫刻精神の喪失が目だつてゐる。上田直次の「山羊親子」は無難の程度。永原廣のセメント浮彫「猛進」は未完成ながらある特質を示してゐる。故岩田是命の遺作の中では大理石の「女の顔」が優れ、早乙女龜次の「サーカスの子」は物語的興味で造型的な力に缺ける。林玄海の木彫佛傳の大作は異色を示した。實用彫塑とは餘技といふよりは本技を本にした工藝作品であるが、未だ技術的洗練に乏しい。搬入數一九五、入選八五、陳列數一三一(内實用彫塑二五點)

### 出品目録(○會員、△會友)

中村梅吉氏像	△向山 映路	みのり	○吉田 久繼
遠吠	故岩男 是命	立女	同
シニバード	同	髪	同
狼	同	淵	同
女の顔	同	二匹の犬	○池田 勇八
猛進	永原 廣	望遠	同
勤勞報國	成田 政男	幼時と(裏)榮	同
鬼	○吉田 久繼	冠を得た時	同

天馬	○池田 勇八	想	野澤 彪	首習作	安田 鶴男	翡翠	宮 昌太郎
蒲原氏像	同	乳牛	川城 良	夕燒	△鈴木 賢二	陶製三枚皿	永原 廣
戲れ	同	ナールカスの子	△早乙女龜次	秋	須賀 東三	白檀香盒佛	田村 一火
競馬場所見	同	女	大木 芳朗	石切場の女	△鈴木 賢二	陶製坐牛	永原 廣
鑿駕籠走	同	坐像	同	觀世音像	同	鷺	白石 定行
必勝の面	○上田 直次	習作「舞女」	○石川 確治	夢殿	後藤 五郎	陶製帶止錄	永原 廣
山羊親子	同	合歡	同	或る女の胸像	名久井十九三	同木の實	同
鶏	同	月下美人	同	おんな	水野 德二	同荒鷺	同
死の中隊杉本五郎中佐	同	島藤翁	○日名子實三	習作	内堀 功	同白鳥	同
銅山坑夫	尾崎 吳業	歸る姑娘	同	S子の像	同	同水運	同
錦千物	石塚 裕康	雞民踊る	同	地藏さん	新關 國臣	同蟹	同
動物園の野牛	新關 國臣	雨の特務兵	同	瞑想	小森田春雄	同鈴蘭	同
動物園の野牛	同	江南戰跡譜	同	トルソー	新關 國臣	同水の精	同
隠起	名久井十九三	テニス	○畑 正吉	女習作	田村 一火	同木帶止	同
S氏の首	成田 政男	テニス	同	おしどり	尾崎 吳業	同葡萄	同
婦人歩行	半藤 政衛	テニス	同	習作	白石 定行	同葡萄	同
雪深き頃	同	突進	同	まどろみ	大木 芳朗	同葡萄	同
胸像	永原 廣	一番乗り（エス・キース）	同	愛國行進曲	小森田春雄	同葡萄	同
小憩	△鈴木 賢二	テニス	同	（繪理大臣）	○畑 正吉	同葡萄	同
中安信三郎氏像	上田喜久丸	テニス	同	かぐや姫	○石川 確治	同葡萄	同
操縦習作	水野 德二	太子降誕、降臨、涅槃、成道、出城	同	かぐや姫	同	同葡萄	同
兎	白石 定行	「上三郎作」	同	山羊ステッキ	永原 廣	同葡萄	同
荒鷺に捧ぐ	△鈴木 賢二	山本安美さんに	同	山羊ステッキ	同	同葡萄	同
めだか	江島作太郎	同	同	山羊ステッキ	同	同葡萄	同
田舎の老婆	橋本 肇	同	同	山羊ステッキ	同	同葡萄	同
小犬スケッチ	山田 稼造	同	同	山羊ステッキ	同	同葡萄	同
歩哨	牧田 清山	同	同	山羊ステッキ	同	同葡萄	同
寺田先生	林 坤明	同	同	山羊ステッキ	同	同葡萄	同
男の習作	野原 吉朗	同	同	山羊ステッキ	同	同葡萄	同
習作（職場）	後藤 五郎	同	同	山羊ステッキ	同	同葡萄	同
自像	鈴木 花咲	同	同	山羊ステッキ	同	同葡萄	同
荒鷺試作	永原 廣	同	同	山羊ステッキ	同	同葡萄	同
かも鹿	山田 稼造	同	同	山羊ステッキ	同	同葡萄	同
陶製掛額	永原 廣	同	同	山羊ステッキ	同	同葡萄	同
首	櫻井 利一	同	同	山羊ステッキ	同	同葡萄	同
あやば	尾形喜代治	同	同	山羊ステッキ	同	同葡萄	同
婦人坐像スケッチ	尾形喜代治	同	同	山羊ステッキ	同	同葡萄	同
女の首	金子 忠雄	同	同	山羊ステッキ	同	同葡萄	同
アンゴラ兎	白石 定行	同	同	山羊ステッキ	同	同葡萄	同

二科會の陳列は本年も四百八十點の多數に上つた。同會近年の風潮として主題に對する風俗畫の觀照もしくは興味を擧げることが出来る。社會的様相を直ちに作品に反映することは一應文化的に華やかであり、その華やかさが同會の漠然としたいはゆるモダニズムの内容を成してゐる。

この數年概して應募作品が一般に萎靡疲勞して、表面的な新趣向の影が薄くなり、むしろ會員の素養ある仕事に實質的な進境を見出し得たやうであつた。

今回、時局に即應した試みとして、事變關係作品の一室を設けた。藤田嗣治、向井潤吉等の力作も出陳されたが大部分は事變風景に對する通俗な意識を繪にしたもので、「輕佻」の誇りさへも蒙り、企てとしては失敗に近かつた。

尙昨年同様會員小品即賣室を設け、賣上金壹千百圓を陸海軍省へ献納した。

第一室。寺田竹雄の「建設」（フレスコ）、「見世物」はアメリカ風の壁畫的手法を傳へて注意すべき出來榮えを示した。宮本三郎の「式根の女」は描寫の卑近さを脱け切らぬが、極めて技巧的な點で注目した。高岡徳太郎は常に垢抜けした畫風を企て、獨立展の林武を想ひ起させる。その他、山本直治、藤川榮子がよく、大澤昌助の二點は常識的に纏められすぎた憾みがあつた。

第二室。島崎鶴二、岡田謙三は各々好みの人物の主題をくり返し、夫々歪形、調色に特徴があるが、雙方ともに一種女性的神經の作家である。

第三室。鍋井克之の「戦況ニュース」は技巧的に優れたものがあつたが、やゝ感覺の新鮮さに乏しかつた。野間仁根の「夏園」は作者の特徴を生かし、熊谷守一は裸婦の小品に侘びのある筆致を示した。ほかに國枝金三の「夏草」が擧げられる。

第四室。鈴木信太郎の裝飾的に様式化した「都會情趣」

大分縣美術協會傷損軍人慰問獻納畫展（日、洋、彫）  
九月三日—六日 大分・トキハ百貨店

大獨逸國展覽會  
九月三日—二十八日 上野・日本美術協會  
主催ドイツ大使館、日獨文化協會、東京日々新聞社。  
ドイツ文化の源流に溯り、その發展の經緯と特質を具體的に日本國民に紹介するを目的として、日獨文化協會の計畫に基き、ドイツ國宣傳省展覽會部がその展示構成を實施した。會場十室に互つて地圖、寫眞、繪畫、模型、遺物、圖表等を陳列し、現代ドイツの展覽會技術を示す最初の例として注目された。

第二十五回二科美術展覽會（洋、彫）  
九月三日—十月四日 東京府美術館

はすなほな美しさを盛り、山口省吾は無難な風俗描寫を試みた。藤田嗣治の琉球旅行の收穫である三點は、獨目の技巧を餘蘊なく發揮してをり、その點目覺しい出来であつた。外に濱川葆光の鹿を描いた「樹蔭」がある。

第五室は特別に事變關係作品二十四點を極めて陳列した。藤田嗣治の沖繩人の出征を描いた「島の訣別」は國民的な感動を表出し、向井潤吉の「突撃」は古典的技術による手堅い制作であつたが、大時代的な姿態、人物の表情には種々批評も加へられたやうである。田村孝之助の「看護婦」は俗調に傾いた。栗原信の「小休止十五分」は筆の技巧による明快な大作で、やゝ通俗的であつた。同室の一般出品畫は總じて低調なるを免れなかつた。

第九室には所謂前衛派の作品を陳べた。北川民次の「静物」は手堅い佳品であつた。抽象畫では山口長男、廣幡憲、山本敬輔等が図形の中に何らかの思念を沈めてをり注意された。外に工藝的な味に墮した作品が少くない。

第十室。正宗得三郎は「白濱の波」に廣潤な空間を巧みに表現して優れ、その他中川紀元、黒田重太郎、東郷青兒の諸作は例年に變らない。

その他の室では服部正一郎の「袋田瀧」、伊藤繼郎の「占」、吉井淳二の「人物」、田中忠雄の「終曲」など作者の特質が顯はれてゐる點で注意をひく。

彫塑部は昨年同様ミニメンタルな作風が風靡し、それに基く表現の解釋、様式化が専ら行はれて、彫塑技術の堅實な追究が一面停滯してゐる觀がある。松村外次郎の「立山縁起」は木彫の巨像で、ミニメンタルな解釋が注意されたが、量的な鈍重さは如何ともし難いものであつた。長谷川八十の「無名戰士のモニウマン」は感覺的に平俗なものとなり、水野欣三郎の「立てる女」は觀照の概念的な憾みがあるが、中ではよい方であつた。笠置季夫、上田曉の製作は無難に止まつて、生彩に乏しく渡邊義知の出品がなかつたのは寂しかつた。

搬入數 繪畫三七一四點(一九四四名) 彫塑一八三點(九三名)  
入選數 繪畫三八四點(三二四名) 彫塑一六點(一六名)

會員推舉 上田曉  
推薦 吉井淳二、伊藤繼郎、長谷川八十  
會友推薦 早川國彦、錦義一郎、吉原治良、田邊三重  
松、山口長男、藤井二郎、藤川榮子、水野欣三郎  
特待 尾澤辰夫、加治屋隆二、大澤昌助、山尾薫明、  
松下義晴、寺田竹雄、北島辰夫、神保俊子、加藤敏子、  
後藤一彦

出品目錄 (○會員、△會友)

繪畫	出品	會員	會友
見世物	寺田 竹雄	茶室庭	野村 守夫
建設(フレスコ)	同	女と犬	川合喜二郎
壁畫試作(同)	同	牛	同
生贄	山尾 薫明	水汲みの女達	松下 義晴
樂園の森	同	水	同
山村風景	北川 實	河岸	大澤 昌助
庭	同	夏の晝	同
初孫	渡邊辰之助	風景	△榎倉 省吾
松と櫻	△山本 直治	少女	井上 賢三
尙武の節句	同	裸體	林 鶴雄
式根の女	○宮本 三郎	黃の風景	同
琉球のキモノ	藤川 榮子	七夕	高須 操
裸體	同	集い	成井 弘文
溫室	川北 信三	庭の話	新井ふみ子
當世女姿	米良 道博	南紀海岸	小山 良藏
室内	△安宅 虎雄	淡島六地蔵尊	岡田オカイン
サロニにて	同	慶北の家	藤澤 俊一
窓ひらく	築山 節生	木蔭に憩ふ	山田 等
アトリエ	佐野繁次郎	サーカス(A)	角野 毅
庭	同	沙漢(B)	同
踊る娘	○高岡徳太郎	湖畔	△福島金一郎
武蔵野	同	山村	同
姉妹	玉澤 潤一	草原	○島崎 鶏二
桔梗	島崎 鶏二	霧の奥日光	鍋井 克之
外人墓地	伊勢雄次郎	漁村風景	樺野 修
朝	加藤 尚義	江ノ浦風景	同
山村の子供等	旭 亮弘	帶揚げなど	林 テイコ
夏の花	鈴木 國威	公園プール	高山 道雄
丘を望む風景	伊藤 信夫	夏園	梅原 英子
支那の道化	・ワグナー	田園	○野間 仁根
父の像	大洞 章	溪流	同
花賣り	藤井 二郎	耕作	同
橋上	同	水仙	同
卓上静物	同	森と土塀	川有智良三
蘇鐵	同	秋郊	池田 兼徳
リスと子供	小西 光雄	朝顔	會田 延彦
肖像	山中 菊代	圓い門	ハーパー
河岸の夕暮	末永 保夫	崎濱の海(越前)	・ワグナー
亂舞	鳥居 正之	あさがほ園	園谷 敏樹
隠れん坊	同	仔馬	草深六治郎
野外裸婦	○岡田 謙三	裸	○熊谷 守一
練習	同	杉林	同
幕合	同	顔	同
窓	同	夏服の女	同
落合風景	近藤 歌子	都會情趣	○鈴木信太郎
街	松本 俊介	芭蕉	同
あじさいと女	同	芍薬	同
百合の花	坂本 益夫	雪	同
風景	松見 秀子	北國の少女達	八重垣逸郎
芍薬	米田歌之助	無題	安波 新吉
冬がれ	佐藤眞紗子	化粧	鶴田 宏
夏草	○國枝 金三	階段の下	同
僧院	同	泉南風景	同
若葉の風景	森野 弘	土人の家族	○田口 省吾
家庭	君家 三郎	オロツコの男	同
化粧臺	青木 一夫	オロツコの老婆	同
ビクニツク(神)	小田 正春	犬の散歩	篠原 末介
戸にて	同	鮎釣	同
梅薫る	○鍋井 克之	出水の後	三村 精一
戦況ニュース	同	簞笥	小島 詰治



カード	下條久爾雄	ニュース映畫	東本 春水	桑畑より	杉浦 三郎	緑の背景に倚る	高橋 迪章	王子工場街	十龜廣太郎	眠れる子供	加賀美幸直
擊劍道場	梶村 正義	見送る人々	阿部 合成	海風	安部治郎吉	擬態	小林 孝行	静物	森 達雄	裸女	黒川 健二
蕨野	今井 晃	宣撫	△柏原覺太郎	緑の庭	同	斷から	雨蛙	階段のある街	田川 覺三	人物(1)	△吉井 淳二
飯雨	西村千太郎	友の出征	△小出 卓二	遊女と馬	廣田 強志	作品	鈴木 進平	白濱の波	池上 丁一	人物(2)	同
網	河野 通紀	街の戦時風景	柳田孝次郎	南の島の女達	大城 皓也	カルスト	山口 長男	砂丘	同	昇降口	同
樹蔭	○濱田 葆光	彫刻	△三浦舜太郎	仙人掌	同	象 A	同	夏燈園	同	山村の春	同
三笠山	同	女	△木内 克	カビヤン社の女	○橋井 禮市	象 D	同	青シヤツ	同	木挽	同
肉店	劉 啓祥	犬	村田 虎次	生蕃家族	同	象 E	同	静物	同	造船	同
坐婦	同	男	乘松 嚴	鳥籠	同	メキシコ舞踏	同	海岸風景	同	丘	同
提燈行列のある	山本 進	退治(素戔鳴尊)	八柳 恭次	田中喜美子	同	○北川 民次	同	子供と猫	同	緑陰會話	同
農家	水澤 正一	習作	西出 大三	長崎泉風景	吉本 富三	同	同	松間馬	同	○中川 紀元	同
夏の庭	大宮司正一	青空へ同化	河合 芳男	人形	中山 安	見物人(メキシコ)	同	戦後圖(メキシコ)	同	坂本繁二郎	同
二人の部屋	大塚 直樹	坐せる女	中澤 安雄	森の歌	尾澤 辰夫	設定一九三八	同	同	同	佐伯 米子	同
窓の前(那覇)	○藤田 嗣治	中距離選手N	柳田 昌	鴨	同	同	同	夏山にて	同	兒玉 勝次	同
客人(糸薙)	同	立てる少女	渡邊小五郎	首里城	有岡 善郎	同	同	金魚鉢のある静	同	高木 壽子	同
孫(那覇)	同	作品三十八	織田久馬一	野の花	今井 龍一郎	同	同	季節	同	細井善三郎	同
阿波人形	藤井 義晴	習作	今ヤヨ子	洗ひ髪	佐々木宗一郎	同	同	鯉の鳴く學院	同	松井 米三	同
(事變關係作品)	同	踊る女	△上田 曉	草上	指田 由米	同	同	村の風景	同	友田 みね	同
戦友	高根澤政子	習作	植木 力	野の幸	高根澤政子	同	同	織女	同	○東郷 青見	同
鳥の訣別(那覇)	○藤田 嗣治	立像	後藤 一彦	無題	棟方 寅雄	同	同	婦人像	同	同	同
聖戰	太田 四郎	勸誘少年	堀内 正和	瓦礫場風景	元川 克己	同	同	花	同	黒田壽美子	同
飯後	伊藤 静尾	首(男)	山本 博一	晩秋スケッチ	同	同	同	灰色の闘士	同	山路 眞護	同
卓資山風景	金 宗 燦	立山縁起	○松村外次郎	川原にて	萩野 正雄	同	同	夏の夜の構想	同	吉田 一雄	同
突撃	○向井 潤吉	立てる女	赤塚 秀雄	水田	△松井 正	同	同	窓	同	内山 泰一	同
コドモ	△酒井 亮吉	征空	水野欣三郎	うらわ	同	同	同	波切風景	同	△古家 新	同
看護婦A	○田村孝之介	女の首	堀田 嚴	風景	同	同	同	演の石灰小屋	同	同	同
看護婦B	同	黎明(習作)	△川崎 榮一	畫室待友	多木 透哉	同	同	夕月	同	同	同
敵機襲来	尾崎悦之助	戦跡記念像	△長谷川八十	子供	永丘 智行	同	同	朝の風景	同	同	同
防共の夜	鈴木 猛人	(書品品)	同	室内	中野安治郎	同	同	スケートリンク	同	同	同
秋	濱野 長正	繪 畫	大塚 興志	百観音さま	櫻木 七次	同	同	裸女	同	同	同
大陸風景	同	背戸	田邊榮次郎	期に這ふ花	木寺 徹	同	同	仁王	同	同	同
抗日民衆に與ふ	難波栄空像	繪馬	伊庭傳治郎	遊び	笹部 正雄	同	同	少年	同	同	同
(小休止十五分)	○栗原 信	母と子供	田中 修	豚	川原 隆夫	同	同	町雨	同	同	同
(徐船の方違艦艦)	同	緑庭	太田 多美	詩思	村田實史雄	同	同	雪山	同	同	同
倉永部隊長戦死	井上 安男	椰子	中田 岩彦	航海	同	同	同	白衣大士	同	同	同
の別	石腸 悦三	少女假睡圖	大羽 昇一	南風	同	同	同	蟬桃のある静物	同	同	同
驛頭の印象	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

小島の砲臺	米倉 父	平和	日高 健泰	終曲	田中 忠雄
雪の藝科高原	△松本 弘二	た、かひ	同	技手達ち	村山 正吉
思ひ出の海金剛	同	風景	上島 龍	犬	山路 商
アトリエ	船越かつ美	流	丸樹長三郎	女の集り	齋田 喬
燈臺のある村	水野 勝美	温泉の一隅	渡邊 澄子	みづきは	久富 邦夫
神戸風景	津畑 ミツ	謡曲の先生	田代 光	古庭新緑	石丸 一
五月の庭	西田 静子	祇園祭の頃	津田 周平	山邊春	内藤 秀因
待ち合せ	加藤タキノ	庭に立てる少女	佐藤 眞一	八月の庭	篠原 薫
砂あそび	金山 和平	海風	飯田 清毅	老人・野寒・少女	下高原龍巳
T夫人像	遠山 陽子	露臺	同	中村徳次郎	新木正之介
花を持つ肖像	同	金魚と子供	伊東市太郎	外出前	早川 貞明
静物	小田島 義	蓮沼	寺田清四郎	琉球のまつり	清水 刀根
泊村風景	玉井 安武	障喜	遠藤 了敬	鐘樓	同
駿馬と女	△園部 邦香	障害競馬	芝野 武男	湯山の瀧	風呂 同
夏の洞窟湖畔	田邊三重松	海村の祭日	關野準一郎	門	ベンギンの島
羽黒山參道	同	森	佐藤吉五郎	ぼたんざくら	午後五時の阪神バ
北洋の荷揚げ	同	暗い小路	同	同	同
太海風景	御供 長夫	登り窯	百足 遠六	同	同
樹と海	服部 陽一	朝の米の浦	森 由太郎	同	同
古都風景	岡田 徳則	水浴	宮川 仁	同	同
網	寺田 榮枝	眞晝	森 繁	同	同
花	同	花、悲しき玩具	平川 要	同	同
浴室の隅	青山 龍水	海邊の貯炭場	小林 武夫	同	同
憩	石川 重信	風景	鈴木 幸雄	同	同
植輪群像	岩月 信澄	父と娘	宮島 庸二	同	同
袋田瀧	△服部正一郎	庭	西阪 修	同	同
好文亭にて	同	ブランコ	森 英	同	同
静物	西村 五郎	巡査と迷子	福谷 静子	同	同
庭	堀澤 好一	海邊風景	西山一三郎	同	同
支那町の畫	橋本 勝	温室	西田 秀雄	同	同
風景	大野 宏	運	永田 頼綱	同	同
サーカスの少女	内海 九郎	辻の女達	小野岩太郎	同	同
春の草花	花谷 時子	糸満の井戸	加治屋隆二	同	同
民藝の部屋	河邊 昌久	運命	同	同	同
網網	船橋 治彦	公園	李 快大	同	同
群舟	小島 大輔	石を切る山	高井壽三郎	同	同
庭つたひ	岡田 芳三	六月の沿線	伊藤 勇	同	同
ひるね	中野 享	浴みする人達	九野 豊司	同	同
障得物競走	吉田 稻彦	同	北島 達夫	同	同

美術展覽會（九月）

日本美術院再興第二十五回展覽會（日、彫）

九月三日—十月四日 東京府美術館

志摩風景 仲村 一男 庭 丹下富士男  
葡萄棚のある風 清水 ふく 浴衣 柴田又太郎  
景 三人 澤田 哲郎

木村武山、安田敦彦、小林古徑、小川芋銭、彫塑部では佐藤朝山、保田龍門等同人の出品なく、事變の影響といつても、若干の北支畫材その他が少々見られる程度で全體として例年とさして變化もなく、院展らしい安穩の境に静まつてゐる。二三の進歩的作家以外には内容にも畫因にも殆ど進展を見せず、夫々勞作を示してゐるながらなほこの觀があるのは、沈滞の氣を免れぬものといはねばならぬ。時局に關聯を示す大陸畫題として雲崗石窟に取材したものが三點あつたが、その中で前田青邨の「大同石佛」は黄土を主色とした淡い調子に大きさと悠久感を現した尤作で、本年度主要作として注目すべき出来であつた。但し、こゝでも線描が、對象の質と量感の表現から遊離し、却つてそれを妨げる輪廓に終つたことは、省みらるべきであらう。眞道黎明の「雲崗靈巖」三題は成功したものといひ難い。その他の大陸畫題で石獅を描いた山村耕花の「大地悠々」は、寫生的な風景畫で調子を忘れ、立體描寫を誤る結果となつた。これらの作家が大陸に目をむけると共に、いづれも過去の遺跡、廢址などに主題を求めてゐることは、日本畫家の一傾向を示すものであらう。

多く問題とされ概して好評であつたものに溝上遊龜の「浴女」があつた。斯鮮明朗な近代的感觉を求め、殊に透けて見えるタイトルのゆがみに湯の動きを現した機智は世人の興味をひいた。併しこの寫眞的な取扱ひは運動の瞬間の固定であつてその本質を捉へ得ず、畫面を不安にしてゐるだけである。ともかく野心的なこの試作に見られる科學的態度と手腕とは、作者の新たな境地を拓くものと

して期待してよいであらう。中村貞以の「浴後」は幼児を抱く半裸の女で銑後を守る母性を現したものと見られ、多分に宗教畫的な理想化を示し、清楚ではあるが形式がちがうで内容にも乏しかった。併しこの作者特有の氣稜は注意される。一層理想と象徴化を行つた荒井寛

方の「天地和平」は技法的な美しさにとゞまつた。堅山南風の「殘照」は鷄を描いた六曲一双の大作で練達した快技を見せ、横山大觀の「梅花薰る」は平明な自然の一角を捉へた墨畫で、よくおだやかな氣分を出した。郷倉

千毅の「山の夜」と、中村岳陵の「爽風」とは夫々特色ある浪漫的作風を示して注意さるべき作であつた。「山の夜」は作者の長所の最もよく發揮されたもの、「爽風」は

洋畫に接近したもので、内容の淺深はともかく、繊細な感覺と詩趣にとんでゐる。酒井三良の「鷄飼」と太田聰

雨の「一つ松」いづれも努力したが多く酬いられず、大智勝觀の「綠陰」は作者の本領を示して品よく、小山大

月の「武藏野六題」小品連作は一種の狙ひを捉へた。奥村土牛は「鷄」を描いて新鮮な快筆を見せた。

同人以外では新井勝利の「二月堂水取」六題を出色とする。繪卷風の構圖で技も確かであり、よく情景を捉へて面白い。恩田耕作の「野牛」も力量を示すが藝術的感

興乏しく、佐野光穂の「初雪」は技術的にはたゞししいが裝飾的效果もよく題意を現はし、加藤晨明の「二少女」は素直な作であつた。中島清の「ゆあみ」高橋周柔の「樹と鳥」、安孫子萩聲の「行春」など注意すべき作にあげ

る。彫塑では平橋田中の「鏡獅子試作」徹底した寫實の技を見せ、その研究態度と確かな技術は尊重されるが、こ

れはもとより完成作品ではない。石井鶴三の二作中では「高濱盧子氏像」優れ、山本豊市は小品ながら「少女」に健全な寫實を示した。村田徳次郎の諸作の中では「女立像」をあげる。中村直人は時局に取材した作品を出し「曉

の進軍」に浮彫を試みたが佳作と稱し難く、北京の子供はスケッチの面白さをもつた木彫の小品。宮本重良の「風神二題」は個性的な面白い作であつた。松原松造は振はなかつたが「S彫刻家の像」は佳品、新海竹藏は壁面裝飾の陶製浮彫によい味を見せた。

その他入江美法の「能姿」、松村秀太郎の「鐵拐」、柏木康兵の「少年像」、櫻井祐一の「或る男」、關谷充の「土」、林是の「Y氏像」等をあげる。

搬入數 繪畫五二〇點、彫塑一七九點  
入選數 繪畫七四點、彫塑四九點  
同人出品 繪畫二三點、彫塑二〇點  
院賞（繪畫）第二賞「二月堂水取」新井勝利、第三賞「二少女」加藤晨明、「初雪」佐野光穂（彫塑）第二賞「能姿」入江美法

同人推舉（彫塑部）村田徳次郎、關谷充  
院友推舉（繪畫部）柿沼宗居、岩田光壺、山口若輪、岡澤明、岡本彌壽子、岡茂以、長井亮（彫塑部）柏木康兵、加藤泰三

## 出品目録（△同人）

## 繪畫

若菰 隱出 英雄 秋  
晚秋 木村 武夫 雨  
孔雀 川手 青柳 田植  
遊魚 吉井 榮紀 遊鯉  
山の出湯 佐藤 耕寛 關 暉明  
夏の出湯 樺田 仙草 北澤 映月  
軍鶏の若雛 時田 南風 初雪  
芝 石崎 巴生 殘照  
馬ノ湯 岩倉 眞像 早春所々  
うるしの木 布倉 良香 關家  
早苗時 柿沼 宗居 天地和平  
花と少女 △田中 青坪 溫室の葡萄  
龜圖所見 栗田 騎歌 春園麗華  
浴後 △中村 貞以 こやすみ 木下 春  
△中村 貞以 玉蜀黍 山口 蒼輪

野牛 恩田 耕作  
名笛初調 小谷津任半  
五丈原 △筆谷 等觀  
木の間 關 青嶺  
五月雨 △北野 恒富  
薔薇 鈴木 主子  
梅花薰る △横山 大觀  
二少女 加藤 晨明  
朝顔 兒玉 白嶺  
抄カメラの前 酒井 とし  
佛傳文學より 四夷 星乃  
にわか雨 藤田 安正  
浴女 小島 丹次  
白牡丹 △澤上 遊龜  
大同石佛 松本 英峰  
演近し △前田 青郎  
追想 川口 浦人  
野兎 弼川 伸二  
乳 △長野 草風  
二月堂水取 上垣 候鳥  
一、若狹井 新井 勝利  
三、内陣 二、食堂  
五、懺法 六、瀟行  
菜菔 菊卷南名雄  
春潮 △橋本 靜水  
磯 △小林 柯白  
山の夜 △郷倉 千毅  
冬日 岩田 光壺  
斜陽 岩田 茂以  
雲嶺靈巖 關 黎明  
（其一）菩薩  
（其二）白那佛洞  
（其三）釋迦傳  
大地悠々 △山村 耕花  
鶴飼 △酒井 三良  
機絲 河内 舟人  
鷺 △鈴木 鳥心  
一つ松 △太田 聰雨  
綠陰 △大智 勝觀  
鷄 △奥村 土牛  
爽風 △中村 岳陵  
茄子 朝長 久美  
武藏野六題 △小山 大月  
岳水田 堤  
春林 畑 夢刈  
南天 川崎 省三  
ゆあみ 中島 清  
グリヤ 鈴木 竹柏  
戲舍 △富取 風堂  
蠶瓜 △橋本 永邦  
お盆 杉山 哲助  
樹と鳥 高橋 周柔  
露澤 加藤 陶綾  
小憩 岩井まさ子  
殘春 赤井 正方  
室生金堂像 彌橋 氏比  
軍鶏 磯山 六郎  
少女 山下日出子  
五十鈴の淵 鈴木 三朝  
貴人愛猫 眞野 滿  
寂光 伊藤 行馬  
劍道 冬木 大西  
苗代 菊池 公明  
聖歌隊 齋藤 達雄  
母娘子 村田 泥牛  
十和田湖二題 館岡 栗山  
奥人瀧秋朝 萬ノ湯  
浴雨 三石 紅樹  
麒麟獅子 中島 策刀  
行春 安孫子萩聲  
朝鮮風景 谷口以佐牟  
朝 金子 草運  
鷹 鷹尾 兵衛  
聖劇 關本彌壽子  
伊藤 喬樹  
野村 采韵  
島田 訥郎

大同石鷹	持田 卓二	鏡獅子試作額	△平橋 田中
彫塑	辻 汎吉	鏡獅子試作	同
福井博士像	同	猫	橋田 七郎
能姿	人江 美法	掬水	大橋 敏男
熊谷守一先生像	長濱 虎雄	首	加藤 泰三
習作	同	安藤選手像	同
正七老	長谷川豊雄	素袢	大野 隆一
裸婦立像	同	童女	山口眞一郎
桔梗を持てる少女	小林 章	觀音	△喜多武四郎
少女	△山本 豊市	習作	同
運月尼	△吉田 白嶺	K氏像	同
鷺	同村 進	或る男	櫻井 祐一
胸像	關 長造	トルソー	中 平四郎
母	岸村 忠次	S彫刻家ノ像	河野 正造
某部隊長の顔	△中村 直人	習作「女」	△松原 松造
砲の進軍	同	習作「男」	同
北京の子供	同	高濱盧子氏像	△石井 鶴三
女立像	村田徳次郎	少年	同
肘つける少女	同	若者	小林 貞吾
男半跏像	同	摩利支天	關谷 充
風神二題	△宮本 重良	土	同
春の風神	同	狗頭	△大内 青園
裸婦	古藤 正雄	無量壽佛	同
津田非佛居士	笹村草人	少女像	同
身仕舞	大和 作内	色讀	矢崎 虎夫
立像習作	小林 章	老人ノ顔	杵谷 精一
父ノ像	小倉 清吉	仔馬	山本 力吉
嬰兒胸像	小柳津三郎	少女	鷹野 忠一
鐵拐	松村秀太郎	田夫	鷹野悦之輔
集	宮本三郎	蓋鷲圖	△新海 竹藏
母ノ像	同	V氏像	林 是
農夫忠藏さん	門脇 滋子	裸婦	同
正受老人	寺瀬 默山	S子ノ像	土井 要輔
少年像	柏木 康兵	裸婦座像	武末 與吉
黒牛猫	同	母と子	佐土 哲二

# 尾張信貴山本堂新築協賛繪畫展

九月六日—十日 名古屋・松坂屋

美術展覽會（九月）

尾張信貴山の本殿新築に協賛し堂本印象、矢野橋村、三輪晃勢等二十名の日本畫家が出品した。

## 矢野鐵山聖戰描畫展

九月六日—十一日 大阪・三越

大阪時事新報社主催。今春來、同社の依頼により北支に従軍して得た日本畫のスケッチ數十點を發表した。

## 佐藤長生第一回油繪展

九月九日—十一日 銀座・養生堂

## 松本富太郎油繪小品展

九月九日—十五日 大阪・阪急百貨店

## 朗峯畫塾第八回展（日）

九月十日—十三日 日本橋・三越

伊東深水の指導する畫塾の作品展で、陳列總數三十三點。師の影響を受けて人物畫が多く、それも現代を描いて潑刺たる氣分はある。池田輝治、遠藤燦可等が受賞した。深水は「朝」に於て時代風俗をかりた半裸婦を描き、他の花鳥畫三點と共に新分野を拓かんとする努力を示してゐた。

## 明朗美術聯盟五周年記念展（日）

九月十日—二十九日 東京府美術館

落合朗風の創立せる同會は朗風の歿後、川口春波主宰となり、その後會員の變動を経たが、五周年記念展を開催するに及んだ。出品者の技術は昨年比して好調を見せたやうである。川口春波の六曲屏風「靈廟龍虎」は色感に難があり、成功してをらぬ。田代寛哉の「飛秋」は感覺の佳さがあり、新人の伊久留朗齋の六曲一雙「北の海の幸」、東條光高の四曲一雙「五百羅漢」はともに表現に屈託がなく、新鮮な觀照が認められた。外に山下昌風「遊子」も面白い出来であつた。陳列數二十餘點、外に朗風の昭和八年作「初冬二題」を特別出品した。

（同人推舉）狩野晃行（盟友推舉）東條光高、渡邊武行、木和村創爾郎、山下昌風（研究賞）伊久留朗齋、東條光

## 彭城貞徳油繪展

九月十二日—十五日 數寄屋橋・日動畫廊

日動畫廊主催。本年八十二歳、我が洋畫壇の先輩である彭城貞徳の油繪新舊作多數を展覧した。作者は既に久しく中央畫壇から隱遁し、従つて今日に及ぶも古風な作柄をその儘に保存してをり、珍らしい個人展であつた。

## 小磯良平近作デッサン展

九月十二日—十五日 神戸畫廊

## 橋本光風漆畫展

九月十三日—十七日 日本橋・高島屋

## 小松均從軍畫展（日）

九月十三日—十七日 銀座・三越

## 支那事變從軍畫展

九月十三日—十八日 大阪・南海高島屋

## 大日本陸軍從軍畫家協會主催

## 龍村平藏新作錦繡帶地展

九月十四日—十五日 京城・美術俱樂部

## 橋徹州南畫展

九月十四日—十七日 名古屋・松坂屋

## 中國四國九縣聯合第五回工藝品展

九月十四日—二十日 德島・縣物産販賣會所陳列館

## 白日莊主催現代大家新作畫展（日）

九月十五日—十七日 日本橋・三越

白日莊主催で、東西の諸家三十餘名の新作を蒐めた。豎幅が多い。何れも手綺麗な仕上げに成ると共に感覺的に充實して生彩のある展覧であつた。鋪木清方の「月清む空」、菊池契月の「大楠公」、安田靉彦「上官太子」、上村松園の「書見」等人物畫に佳作が多いのが注目され、花鳥では結城素明の「芙蓉花」はこの人には近頃珍らしい作柄のもの。尙川端龍子、堂本印象、山口蓬春等の出品があり、その他中村岳俊、郷倉千靱をはじめとして花

美術展覽會（十月）

鳥畫に於てメカニツクな型式化、感覺による共通した仕事の多いのが近頃の傾向として注意をひいた。

諸國美術古燈籠展

九月十六日—十八日 大阪・南海高島屋

北尾修一洋畫展

九月十六日—十八日 神戸畫廊

川口軌外近作展（洋）

九月十六日—二十日 數寄屋橋・日動畫廊

油繪二十五點を陳列、「牡丹」「燒岳」等の寫生的な作品もあるが、概してロマンチックな表現乃至象徴的畫面を作り、朱の勝つた特有の色彩感を盛る。筆や、粗雜で畫面に對する愛着の缺除は物足りぬ。

第五回北信輸出工藝展

九月十六日—二十日 長野物産陳列館

「新潟、富山、石川、福井、長野各縣の聯合主催。本ブロックは工藝王國の傳統を誇る石川、富山兩縣を始めとし、輸出金屬食器の生産數量に於て全國に壓倒的地位を占める新潟縣、布帛工業の福井縣、養蠶、木竹工藝を以て著名な長野縣を包含せる共に、内容の頗る充實した眞に將來の輸出品たるに相應しい力作が多數出品された。殊に今回は非常時下に於ける輸出振興の重要性が深く認識せられ、又本展の主旨が一般に徹底せる結果、出品全般に改善の跡が顯著であつた。出品點數は入選五五三點、擬賞は進歩賞一九點、有巧賞二六點（工藝ニュース七一）

成層繪畫研究集團第一回作品展（日）

九月十七日—二十一日 銀座・紀伊國屋

現代洋畫大家小品展

九月十八日—二十二日 銀座・資生堂

藝苑社主催

木版展

九月十九日—二十三日 銀座・松屋

横江嘉純彫刻展

九月二十日—二十一日 日比谷三信ビル・三友クラブ

細川幻華堂南畫展

九月二十日—二十三日 京城・三越

八條彌吉遺作展（洋）

九月二十日—二十四日 銀座・青樹社

昭和十二年六十二歳を以て永眠した八條彌吉の油繪七十餘點を中澤弘光、赤松麟作等友人の發企で展觀した。外光派風の寫生に終始してをり、昭和十一年文展無鑑査に推薦された作家である。

林重義素描淡彩展（洋）

九月二十日—二十四日 神戸畫廊

山村耕花繪畫展（日）

九月二十日—二十五日 名古屋・松坂屋

近作の花鳥、人物、風景など三十餘點を陳列した。

内田正男洋畫個展

九月二十日—二十五日 京城・大澤商會

現代水彩畫展

九月二十日—二十五日 大阪・大丸

朝倉彫塑塾第十一回彫塑展

九月二十日—二十九日 東京府美術館

同塾恒例の作品展で、塾生平素の成績品を展觀した。

桂ユキ子個展（洋）

九月二十一日—二十四日 數寄屋橋・日動畫廊

淺草美術家協會展（洋）

九月二十一日—二十五日 日本橋ギヤラリー

NBG第四回洋畫展

九月二十二日—二十四日 銀座・紀伊國屋

蘆田秋双並に新月社同人俳畫展

九月二十三日—二十七日

惟軌會第一回展

九月二十四日—二十八日 銀座・資生堂

近畿聯合工藝展

九月二十四日—二十九日 大阪市立美術館

「出品物は例年に比較し總體的に際立つた向上を示し、特に

從來兎角粗製安價品本位の誹りを受けがちであつた大阪、兵庫の出品が良質品へ移行し、又美術工藝の本山として象牙の塔に温床を求めた京都が輸出向實用品へ進出を圖る等、夫々各府縣の特質を生かした將來の工藝（前進せんとする眞摯な態度が見られた。（工藝ニュースによる）

磁元社第一回工藝展

九月二十五日—二十九日 銀座・三越

九頭會洋畫展

九月二十五日—三十日 大阪・そごう

大輪畫院第一回展（日）

九月二十五日—十月二日 日本橋・東美俱樂部

本年五月明朗美術聯盟を脱退した人々の新團體で小林彦三郎を主宰とする。小林彦三郎の「蘇州の苑」、同人樋口英雄の「落陽」その他二十點を陳列した。作品は今後の發展に俟つべきものが多い。

授賞（玄之賞）谷良治、楠奉白光（研究賞）伊坂靜雄

小川原利夫

金澤三匠會展（漆、陶、銅）

九月二十七日—十月二日 大阪・大丸

十月

伊藤慶之助作品展（洋）

十月一日—二日 兵庫縣・御影公會堂

JAN九回展（洋）

十月一日—三日 銀座・紀伊國屋

岳南美術協會展（洋）

十月一日—三日 沼津・第一校尙武館

關西畫壇作品展

十月一日—四日 名古屋・松坂屋

林重義第二回個展（洋）

十月一日—五日 銀座・資生堂

油繪十餘點、風景が多く花卉等もある。日本の油繪を



作らうとする努力から繪具を軟く溶いてはゆるおつち描きとし、光澤のない平面的描法をつめてゐる。いづれも榮にまとめられてゐるが外面的描寫に終り、又筆に反省が乏しく小うさゝいものになつてゐるのは惜しい。

#### 幸松春浦第二回新作畫展(日)

十月一日—五日 日本橋・高島屋

舊南畫院の同人である作者の近業二十六點を展觀した。

#### 竹久夢二版畫展

十月一日—五日 銀座・三味堂

#### 銀座一畫廊創立記念洋畫大家展

十月一日—七日 銀座・銀座一畫廊

同畫廊の創設に當り、各派の洋畫家二十二名の小品を集めて展觀した。有島生馬、石井柏亭、正宗得三郎、伊藤藤廬等の油繪、安井曾太郎の鉛筆淡彩等が擧げられる。

#### 山崎省三洋畫個展

十月一日—七日 大阪・美術新論社畫廊

#### 佐伯祐三遺作展(洋)

十月四日—六日 大阪・堂島ビル清交社

東言社主催。陳列點數二十二點。

#### 貌第三回展(洋)

十月四日—七日 銀座・紀伊國屋

#### 日本山岳畫協會展(洋)

十月四日—九日 大阪・大丸

#### 南蠻陶器陳列會

十月五日—十一日 名古屋・松坂屋

#### 北越美術家清盟會(綜合)

十月六日—十一日 日本橋・白木屋

#### 森守明第一回新作畫個展(日)

十月七日—九日 大阪長堀・高島屋

#### 清水鍊徳歐洲旅行作品展(洋)

十月八日—十日 銀座・資生堂

美術展覽會(十月)

#### 獨立美術秋季展(洋)

十月九日—十三日 銀座・青樹社

#### 八秋會洋畫小品展

十月九日—十四日 大阪・そごう

#### 青龍社第十回展(日)

十月九日—二十日 大阪・阪急百貨店

#### 多々羅義雄個展(洋)

十月十日—十二日 京城・三越

#### 林武近作個展(洋)

十月十日—十四日 大阪・美交社

美交社主催。二十號の「南佛アンチーブ風景」を初め佛國風景の小品及び室戸岬風景に取材したもの等、計二十二點を陳列した。

#### 日本美術院第二十五回展(日、彫)

十月十日—二十五日 大阪市立美術館

#### 綠包社第六回展(洋)

十月十一日—十四日 銀座・紀伊國屋

#### 貿易局輸出工藝展

十月十一日—二十日 東京府商工獎勵館

商工省では本年七月從來開催し來つた商工省輸出工藝展の規定を改め、貿易局輸出工藝展としたが、時局は物資の制限を強化し代用品の研究を獎勵する一方、海外輸出の積極的振興を圖る必要を來してゐるため、例年初夏に開かれる商工展を本年は延期し、輸出工藝展に力を入れて例年の如く開催した。總搬入數四七二〇、内陳列せるもの一七一一點。その内譯は陶磁器硝子及その他の窯業製品二一一、漆器四三八、染織製品一七一、金屬製品一一六、木竹製品二八九、綜合製品三八〇、商工省工藝指導所出品五四、陶磁器試驗所出品五二點である。授賞は各部について夫々賞金、進歩賞、有功賞、褒狀等が選定され、商工大臣賞は「デザインナセット」日本陶器株式會社に與へられた。尙今回の出品は仕向地として南米

プエノスアイレスを目標としたもので、陳列品中より四〇六點を選出、來春同地に開催される陳列會に出品することとなつた。

東京展以後の開催は、京都十一月四日—十日、大阪十一月二十四日—二十八日、名古屋十一月二十四日—三十日の日程で行はれた。

#### 遠山陽子洋畫個展

十月十二日—十五日 銀座・資生堂

資生堂美術部主催。近作油繪二十數點を陳列した。

#### 井上安男中支從軍報告畫展

十月十二日—十六日 名古屋・丸善

#### 河合卯之助陶器展

十月十三日—十七日 日本橋・三越

三越主催で河合卯之助の近作陶器二百點を陳列した。この度は茶道具の製作が主であつた。

#### 建築學會主催第十二回建築展

十月十三日—十七日 日本橋・白木屋

#### 大津密堂創作花器展

十月十三日—十七日 上野・松坂屋

#### 各國時代花器展

十月十三日—十七日 上野・松坂屋

池部鈞、水島爾保布、前川千帆、宮尾しげを、細木原青起漫畫作品展

十月十四日—十六日 京城・三越

#### 二科第二十五回展(洋、彫)

十月十四日—二十三日 福岡日日新聞社

福岡日日新聞社主催。

#### ジユヌ・オム第二回展

十月十五日—十七日 銀座・紀伊國屋

#### 林文壻近作展(日)

十月十五日—十七日 名古屋・松坂屋

#### 東西大家新作日本畫展

十月十五日—十七日 福岡・岩田屋  
新日本洋畫協會第四同展

十月十五日—十八日 大禮記念京都美術館

獨立美術京都研究所の研究生が組織する發表展で、會員の出品約四十點の外に特別陳列として獨立美術秋季展を併せ催した。

荒井龍男個展（洋）

十月十五日—十九日 大阪・美術新論社畫廊

村田丹下りオ・テ・ジャネイロ風景展

十月十五日—二十日 日本橋・白木屋

第一回菅野圭介洋畫展

十月十六日—十九日 數寄屋橋・日動畫廊

作者は獨立展の出品者で、多く北歐風物に取材した油繪三十點を發表した。表現は様式的に要約され、畫背に文學的なものを宿して注意されたが、素描的な不安を否まれなかつた。

川口軌外個展（洋）

十月十六日—二十日 京城・三越

日本美術協會第百六同展（日）

十月十六日—二十五日 上野・日本美術協會協會展  
第百六回は日本畫の公募展として開催された。

搬入數二三五點（一二七名）、入選數七六點（七〇名）、無鑑査出品一八點（一六名）で、合計九十四點を陳列、別に物故會員島崎柳塘、高取稚成、津端道彦、佐竹永陵、村上委山、團藍舟の遺作を約一點づつ陳列した。尙參考品として武人の作畫を陳列した。（一四六頁參照）

授賞（銀賞）「冬朝」森梅溪（銅賞）「梅」恩田得壽、「正晴」鹽崎逸陵、「軍鶴」西野新川、「秋朝」石川美峰、「妙義の朝」稻川光風、「梵」南部春邦（褒狀）十五名

第二回文部省美術展覽會（綜合）

十月十六日—十一月二十日 東京府美術館  
文部省美術展覽會は昨年新機構を制定し、新文展とし

て第一回を開いたが、本年はその規則中に若干の改正を行つて第二回を開いた。事變第二年で物心ともに一層戰時態勢の強化が要求され、紀元二千六百年記念日本萬國博覽會、オリエンチック東京大會も中止されるに至つた事情に鑑み、文展も中止すべきではないかとの意見も有力で、一時は開催が危まれたが、文部當局の慎重な考慮と荒木文相の決断によつて開催が決定され、同時に民族の文化を高め、戰時下における國民の精神と氣魄とを示すべき作品の出現が要望されたのであつた。

一面物資節約の趣旨に添ふべく、出品は一人一點に限り、大さを第一部は縦十尺横七尺以内、第二部は五十號以内、第四部は六尺平方以内若くは六尺平方の場所に陳列し得るものに制限した。これは陳列壁面の混雜を緩和する上にも役だつたが、無鑑査の人選は昨年の通りとしたため、各部とも相變らず無鑑査作品が氾濫した。無鑑査作品の多くが時代の技術的進歩にとり殘され、入選水準以下にある所から常に非難されるが、本年も多くその聲がきかれた。

官展の性質から當局では能ふ限り美術界の諸分野を包容せんことに努め、審査員の人選などにもその苦心が見られた。日本美術院の参加は昨年以來であるが、本年は新に國畫會及び春陽會が参加した。しかし自らの展覽會をもつこれらの團體から主要作家の出品するものは少く大體は従來の官展系作家によつて占められた。やゝ異る色彩を加へたのは第二部で、主として國展に屬する作家たちの出品が比較的多く目についた。

第一部では、竹内栖鳳、橋本關雪、西山翠嶂、錦木清方、荒木十畝、松林桂月、結城素明、前田青邨、小林古徑らの帝國藝術院會員の出品なく、西村五雲が急逝したことも寂しさを加へた。全體として直接事變に取材したものは殆ど現はれなかつたが、日本的或は尙古的ともいふべき主題が多くとり扱はれ、歴史畫、戰爭畫の類

もいくつか見られた。作風の上からも近年流行する極端に洋畫に接近したやうなものは目につかず、傳統的な日本畫の手法を生かさうとするものが主な傾向を示した。ここに時局の精神的影響が認められなくはないが、戰時下だからといつて特別な作品が生れる譯でもなく、概して平常と變りのないものが大部分を占めた。

新鮮さを以て注目される新人達の作品が第一室に集められた。森戸果香の「矢呼び」、奥田元宋の「盲女と花」、山本丘人の「庭園」、秋野不矩の「紅袋」、木本大果の「深秋」、橋本明治の「夕和雲」、田之口青晃の「魚暇」などが目ぼしいものである。個々の出来ばえはともかく、常套に墮さず、内容にも表現にも新たな試みと工夫に進みつ、ある努力は、將來を樂しませるものがあらう。「紅袋」は計畫は十分認められるが技これに伴はず、「夕和雲」は相當思ひきつた野心的な仕事で、ある成功を示したが、寫形の不備が目だつた。

第二室 伊東深水の「牛と子供」は、作者が美人畫の境地を離れ、情趣の世界とは對蹠的な、野性的な力強さを欲したものとして興味をひいた。三谷十糸子の「蟻」は女性の特殊な神經を見せてゐる。第三室には川合玉堂の「一樹の蔭」、横山大觀の「皇大神宮」などがならべられた。前者は野に憩ふ老夫と仔羊の群とを描き、溫雅な作者の自然觀が流露する作で、謙虛な床しさがその品位を高めてゐる。「皇大神宮」は獨自の格調に成る墨繪で、謹嚴を極めた態度が見えるが、それだけ細部に煩はされて全體の空氣が失はれた。堅山南風の「雨後」は水墨に夕顔を描いて潑刺たる運筆の冴えを見せたもの。川村曼舟の「時雨る、山湖」と兒玉希望の「七面鳥」も記すべき作であらう。

第四室、第五室では高木保之助、福田翠光、山川秀峰、西澤信誠、永田春水、村雲大機子らの作品があるが、とりたてて擧げる作に乏しい。信誠の「一致對敵」は軽い

ユーモアがいやみなくとり扱はれた。第六室では菊池契月の「交歡」と上村松岡の「植」とが光彩を放つた。「交歡」は紙本四尺五寸に八尺五寸の大畫面を、描線を主として殆ど白描にまとめ、これに感情の表出を托さうとした試みで、武者繪に新生面を拓かうとする努力を示す。洗練された技術に品位の高さを保つてゐるが、畫面の平板さを免れなかつた。松岡の圓熟した近來の畫業は世の嘆賞する所となつてゐるが、この作また期待にそむかず、諸曲に主題をかりて構想の凡ならざるを示し、氣品もあり情趣もこまやかな作品となつた。宇田萩都の「神鳩」、石崎光瑤の「霜」、矢野橋村の「恐鳥」、田中咄哉州の「仙苑」など好收穫にぞこへられる。「仙苑」は異色あるべきとして好評であつた。

第七室以下特記する作を見ず、第十一室には興味ある數點がならべられた。中でも安田叔彦の「孫子勦姫兵」は、小品ながら洗練の完美を見せた珠玉にも比すべき作で、漢、六朝などの古態を生かし、描法と主題との調和を得て頗る用意ある精品であつた。最も問題とされたのは福田平八郎の「青柿」であつた。青柿一枝の逆光の効果を色彩で見た作品で、日本畫としては極めて大膽な試みを示すものである。研究的な作として、この成果を直ちに完成とは見がたいが、作者の自然追求の眞摯な態度を窺はせるものであつた。その他太田聰雨の「千代尼」、烏田墨仙の「東湖先生と橋本左内」、服部有恆の「時宗と祖元」、村島西一の「養圃雜」などがぞこへられる。墨仙の作は相對する二人物を奇抜な構圖にまとめたもので、難なしとしないが、描線も美しく人物の性格も現はれてすぐれた出来であつた。

第二部では作品の大きさをすべて五十號以内に制限したため、從來流行した大作競争の風が全く影をひそめ、會場の空氣が一變して、やゝ單調ではあるが落ついたものとなつた。會場効果を主とする大畫面になれた作家は

勝手が違ふためか不振を免れぬ傾があつたが、全體としては、技術的水準の揃つたものとなり、鑑賞にも好適なものとしてこの制限は概して好評であつた。事變に取材したものも、戰場における將兵の生活、傷痍軍人、大陸風物、銃後の生活など幾多現はれたが、藝術的には常凡な風景、靜物などの間に主題の上で變化を加へたといふ以上には出なかつた。

第一室には新進の比較的佳作を多く集めた。現在の成績を見るよりも、將來の發達を期待させる點で興味がかかる。坂田虎一の「支那人」、南政善の「老人」、渡邊浩三の「靜物」、板戸庄衛の「綠庭」、石本秀雄の「戦線平日」、森田元子の「麗日」、有岡一郎の「港」、島野重之の「室内」、高宮一榮の「蓮の實」、川端實の「キリコを作る人」、井手坊也の「若空の話」などがこれに屬し、夫々の才能と特質を示してゐる。神田周三の「陸軍病院の一室」は要約した筆にある感情を捉へた。

第二室は殆ど無鑑査のみであるが、既得の技術に安住して進展を見せぬものが多い。第三室に主として指導的位置にある人々の作をならべた。藤島武二の「耕して天に到る」は大膽な筆致と畫面に盛る詩情とに、さすがに獨自の境地を見せて衆目をひく。齋藤與里の「曉の金剛山」は畫面や、疎放ではあるが、感覺本位の行き方として作者近年の快作に推すべき出色のきでであつた。中澤弘光の「北京萬字樓」と川島理一郎の「九龍壁」はいづれも北京に取材して夫々異なる境地を示す。色彩主義で實の描寫を怠つた後者の畫面は壁の實體を失ふ結果を來してゐる。阿以田治修の「庭後」は快く、林俊衛の「山峽小景」は爽やかな異色をそへた。

第四室、中村研一の「室内」は確かな筆になごやかな空氣を捉へて佳品とすべく、國展から加はつた青山義雄の「北洋落日」は特色ある仕事を示して注意をひく。安宅安五郎の「雲影」も好評であつた。第五室では伊原宇

三郎の「汾河を渡る」が従軍報告畫の最も充實した一作と見られ、作者の技法と主題との適合が一つの成功を示してゐる。ほかに氣儘な耽美主義になる高間惣七の「朝」、通俗性をおびるが快いでの寺内萬治郎の「赤いコート」などを舉げる。

第六室、倉員辰雄の「獄」は昨年の繼續で筆技のマンネリズムに墮せんとする危険がある。二見利節の「丁子」と庫田毅の「松と竹」は夫々異色ある仕事で注意をひいた。「松と竹」は新鮮な色と感覺とを賞せられたが、この作で満足すべきではあるまい。中野利高の「草はら」は佳品と稱しがたいが、氣の利いた才筆に印象づけられる。第七室では朝井閑右衛門の「生還特務隊」が異様な感覺的表現を以て注意をひく作であつた。なほこの室に水彩畫、素描、版畫などが集められた。木村莊八の素描「水彩畫、素描、版畫」は熟達した技術のうまい味を遺憾なく發揮したもの。特選された棟方志功の「勝鬘譜」、善知鳥版畫「曼荼羅」は獨善的ではあるが、黑白調の効果の面白いのであつた。勝平得之の郷土色を盛つた「花二題」も版畫の佳作に數へられる。

第八室以下では石川滋彦の「信濃の鍛冶屋」が快い技を示し、梅原龍三郎の「裸婦扇」は文展にこの作家を見ることが珍しきで興味をひいたが、常に見る奔放な力を缺き、生彩のある出来ではなかつた。獨立展を脱した林重義の「紫陽花」はこの會場に不調和を示さぬのみかむしろ甚だ平凡であつた。その他には山崎省三の「ジャンクのある風景」、大貫松三の「O先生と孫」、佐藤一章の「漁夫」、權藤種男の「樹下棋戰の圖」などを目ぼしい作にかぞへる。

第三部彫塑は本年は入選作多く、會場狹隘を告げる陳列で頗る盛況を呈した。しかし質が必しもこれに伴つたとはいへず、殊に大家先輩の作品の多くが振はなかつた。良質の仕事は主に新進の中に見られ、審査員の作品悉く

とはいはぬが、採りがたいものの甚だ多かつたことは遺憾である。作風に異色を示すものがいくらかは見られるが、全體としては常の如く、寫生を多く出でぬ習作的な裸像の類が多くを占めてゐる。

事變に取材した作品もかなり現はれ、兵士を單獨に、或は群像に刻み、戰爭を浮彫に現はしたものが見られたが、多く説明的な描寫に止まり、彫刻のもつ永遠性象徵性などの表現力を十分に働かした作に乏しかつた。

これらの中では中村直人の「戦争」三部作望郷、野々村一男の「渡河戦」などが優品にぞへられる。人柱の渡河作業を寫實的に寫した作品二三があつたが、表現を誤つたため、壯嚴なるべき主題が甚だしく陰慘不快感を與へるものになつた。

勞働に取材し、或はスポーツ選手を寫したのも多く出品された。これらは男性美の表現として彫刻家の常にとり扱ふものであるが、また時局への關心が見られぬでもない。この種のものでは藤野舜正の「銃後工場の謨り」が優れたべきを示した。奥山泰堂の「油と汗」は氣どりが目だつ。大村清隆の「労働者」、進藤武松の「球」、分都順治の「男立像」、吉開伊喜藏の「力投の前」など、寫生を多く出でないが健實な技術を示すものである。

尙古的なもの、或は佛像もいくつか見られた。森大造の「療原」、佛像では關野聖雲の「不動明王」などが注意される。後者は現代の不動像として佳作に入るものであらう。安一の「武勳」は四天王像の形式をかりて新たなミニメントを作らうとしてゐるもので、一つの成功を示してゐる。裸女の作品は相變らず頗る多いが、それらの中で、安藤照の「秋の作」は靜的な表現に成つて美しく、荒居德亮の「女」も快いできであつた。中村七十の「若き女」、大嶽茂樹の「女」なども記すべき作である。建昌大夢の「幸ちゃん」は堅實な技術に成るもの。藤井浩祐の「鏡」は作者として尋常な出来であらう。西川明史の

「朝」は特色ある仕事で、この作は推しがたいが今後の研究が期待される。

その他では、木村圭二の「裏街の兒」は相當の技術をもつが、この主題はもつと藝術的な洗過を必要とする。

木彫の異色ある作として宮永朝堂の「大虚連作の内（谷風）」は巧みな様式化面白く注目すべき才能を示した。なほ木彫には山崎朝雲の「鷹ヶ峰の秋」、雨宮治郎の「聖德太子尊像」、錦戸新一郎の「熱國の神」、又肖像では朝倉文夫の「竿忠の像」、加藤顯清の「北大總長今博士像」、早川魏一郎の「田村オリヂンス翁」などがあつた。

第四部の出品總數二〇一點の内譯は、金工六七、漆工四七、陶磁三八、染・織・繡三〇、人形五、ガラス四、皮革四、竹工三、雜三で、金屬最も多く漆器がこれにつぐ。

全般的に見て、會場効果本位の華美な風潮や、近代がつた惡趣味のものが影をひそめ、概して質實なものの、或は傳統的な道を生かさうとするものが多く現はれたことは本年の主な傾向であつた。これは材料制限による點もあらうが、廣い意味で時局の意識が影響したものと考へられる。工藝の性質から事變を直接反映させることはもとより至難で、主題、意匠など例年と別に變りはない。たゞ繪畫に近い染色圖案その他に、戰爭、兵器などをとり入れたものがあつたが、多くは意匠としてよくこなされず、際物的な感を與へるに止まつて失敗してゐる。

金工では香取正彦の「鑄銅花瓶」、北原三佳の「鑄銅耳付花瓶」いづれも端正に美しく、林萬壽人の「青銅鸞文水盤」も落つきあるよい出来であつた。山本自爐の「鑄銅斜線花筒」は面白い意匠であるが鑄物の特質から見ても如何であらう。佐々木泉堂の「鑄銅鳥首飾瓶」は恐らく唐代水瓶あたりに示唆を得たもので、古雅な風趣をおび品位もあつて作品である。高村豊周の「Y合金鸞忍花盛」また古典的で、しかも漢字の裝飾を加へたことは、無文の抽象的形態を常としてゐた作者の一變化を示す。しか

し結果はあまり成功してゐない。彫金、鍛金には新人が多く、面白い仕事を見せてゐる。透彫が流行した傾があつて新鮮な近代的用途への調和を思はせるものが少くなかつた。大須賀喬の「銀とマホガニー昆蟲文印宮」、桂信春の「黄銅吳竹玉蘭文宮」、鴨政雄の「夏草圖手宮」などがこれに屬する。山脇洋二の「銀龍文之龜置物」は獨創的な面白きであつた。ほかに内藤四郎の「梅花文鍛鐵煙爐」、北原千鹿の「鴉文銀彩壺」、海野清「銀鍍花瓶」などを挙げる。

漆工では蒔繪に松田權六の「漆器鸞詩繪棚」、吉田源十郎の「漆菊の屏風」など古典的な風格と精技を示すものが見られ、小松芳光の「漆器湖畔小景小屏風」は快いできであつた。堂本漆軒の「漆器」はうちはまめ飾箱、平館尙の「漆器縁壽の圖手宮」なども佳品にぞへる。山崎北堂の「漆器奔放屏風」は西歐の感化を示し、新しい建築への適合を企てたものと思はれるが、馬の寫形の不足が缺陷をなした。堆朱楊成の「彫漆獅子文飾箱」、磯井如眞の「彫漆石南花の圖手箱」など行き方は異なるが夫々の巧みな技術を見せ、佐藤藤雲の「彫漆水文視宮」は單純で新鮮な効果を収めた。富樫光成の「漆器浪ゆるやか飾箱」は大膽な面白い仕事で、よい收穫にぞへられる。中川哲哉の「乾漆喰籠」も佳品として見おとせぬものであつた。

陶磁はその技法の性質から新な美を創造することの困難の故もあらうが、出品數に比して優れた作品を多く見出しがたいのは残念である。富本憲吉の「色繪陶板」は美しさを誇示してはをらぬが、謙虛な、かつ新鮮な美をもつて自然にふれた作者の境地を語り、板谷波山の「朝陽磁鶴首花瓶」は釉藥技術の粹をつくして品位ある作となつた。兩者道を異にするが夫々陶磁の本質にふれたものを示してゐる。その他に目ばしい作としては、沼田一の「黄磁雁伏香爐」、清水六兵衛の「青磁花瓶」、宮之原



謙の「陶器葉文釉刺壺」、新聞邦太郎の「五角形酸漿紋鉢」、大森光彦の「陶製草文鉢」、寺池旬輝の「四方形赤繪鉢」などがかぞへられる。ガラスは振はなかつたが、大庭一晃の「彫刻硝子ストープ前衛立」は突撃する兵隊をとり扱つて、かゝるものとしては或る成功を見せた。板谷梅樹の「壁面裝飾」はモザイクの仕事で注意されるものであつた。

染・織・刺繡には相變らずけはくしいものや、拙劣な繪・模倣にすぎぬものが多く現はれ、概して好みが低調である。櫻井霞洞の「蠟額あざみ小屏風」、木村和一の「和染朝顔の屏風」、般若有弘の「二枚折刺繡屏風」、鈴木福富の「婦人長着」、石田玉英の「綴錦魚群壁掛」などが、中でとりうるものであらう。山鹿精華の「手織錦萬壽山の春屏風」と鹿島英二の「天簫絨建染蘭額榮之額面」とは夫々自家の特技を愈々進めつゝあるものとして注意をひいた。染革で大坪重周の「二枚折草花文染革屏風」が好評であつた。

出品数

	搬入数	入選数	無鑑査	陳列数
第一部	一三八二	一三九	九一	二二〇
第二部	二二七〇	二〇〇	一四八	三四八
第三部	三五一	一一八	八五	二〇三
第四部	六三〇	一三八	六三	二〇一
計	四六三三	五九五	三八七	九八二

特選(第一部)「夕和雲」橋本明治、「盲女と花」奥田元宋、「紅裳」秋野不矩、「矢叫び」森戸果香(第二部)「信濃の鍛冶屋」石川滋彦、「O先生と孫」大貫松三、「草はら」大澤海蔵、「勝鬘譜・善知鳥版畫曼荼羅」棟方志功、「獄」倉員辰雄、「松と竹」岸田葵、「T子」二見利節、「畫室にて」安藤信哉、「金藏獅子」森田茂、「麗日」森田元子(第三部)「朝」西田明史、「油と汗」奥山泰堂、「男立像」分部順治、「渡河戦」野々村一男、「母子」山畑阿利一

出品目録

帝國藝術院會員  
審判員  
無鑑査

第一部		出品目録		出品目録	
綿と兎	島	春潮	池彩	藤原 茂富	朝顔
孫	立石	春美	暮	岡田 昇	鴿の群れ
夏宵	渡邊阿以湖	水禽	緑陰	田中 針水	雨の降る
矢叫び	森戸 果香	水漬く麗	水禽	佳日	晴れたる濱
牡丹島	齋藤三夫	岬	加藤 恒久	秋立つ濱	雨の室戸岬
盲女と花	奥田 元宋	牛と子供	伊東 深水	殘された猿曳	雨の室戸岬
庭園	山本 丘人	蟻	三十子	あさ	雨の室戸岬
紅裳	秋野 不矩	晨露露深	藤田 隆	雨の室戸岬	雨の室戸岬
山羊	河原 勇夫	夕光	奥村 厚一	雨の室戸岬	雨の室戸岬
深秋	木本 大果	吉浦の丘	中村 德二	雨の室戸岬	雨の室戸岬
夕和雲	橋本 明治	瀧不動	三宅 鳳白	雨の室戸岬	雨の室戸岬
閑日	猪原 大華	白雲清姿	森田 沙夷	雨の室戸岬	雨の室戸岬
江山送爽	猪飼 俊一	鏡後	西村 卓三	雨の室戸岬	雨の室戸岬
秋	田之口青晃	樹立	吉田 義夫	雨の室戸岬	雨の室戸岬
魚眼	木村 天夫	石垣母	深尾 徹哉	雨の室戸岬	雨の室戸岬
飲馬				雨の室戸岬	雨の室戸岬



管春	澤 宏毅	秋晴れの志賀高	○野口謙次郎	舊城(臺灣地名)	○森 月城	南總の春	田岡 春徑	盟邦の青年	○梶原 貫五	雲影	○安宅安五郎
泊船	村山 兩平	天岩戸	○町田 曲江	五月雨頃	○川船 水梓	慈恩寺の秋	加藤 松溪	秋晴れの午後	○鈴木 淳	北洋落日	○青山 義雄
工房	八幡 白帆	田舎の家	和田 青雨	寧樂追想	水野 深舞	雪映	富永 幸男	○平岡權八郎	○佐藤哲三郎	大王崎の一角	○橋本 邦助
怡園	吉田 登藏	漁村日午	柴田 春叢	旗	林 平雄	第二部	○安田 半圃	芋と茄子	○吉田 博	時道	河原 修平
ふたう	廣田 多津	頼朝手向の露瀾	○猪飼 晴春	賤ヶ嶽	池澤 青峰	樹間	上田 實	水郷新緑	○高村 眞夫	一隅	西野 英二
七面鳥	○川崎 小虎	麥	○幸松 春浦	秋晴	○武田 鼓葉	陸軍病院の一室	神田 周三	張家口城外	○山田 眞正	嵐風去ラズ	杉山 一正
おひろひ	吉村 三郎	秋耕	○太田 聽雨	晴日	是永 伸一	園丁の徳さん	島内 キミ	ハルビンの新聞賣高野	○橋本 はな	静日	安藤 義茂
響れゆく奥野	○福田 惠一	千代尼	○福田 平八郎	向日葵草	小森 綠光	靜物	野澤 寛	鏡	○大野 隆徳	夕風	○室中村 研一
生洲	猪田 青以	青柿	會小室 翠雲	東天紅	○小川 翠村	靜物	安達眞太郎	鏡	○鏡 保博	蘇州風景	○蘇州 鳳景
軍雞	荒川 吳雲	軍犬	○島田 墨仙	關林	飯塚 周俊	辭を聴く	高光 一也	松の森	○松の森	○増田 豊太郎	○江藤 純平
春日連々	上村 松篁	東潮先生と橋本	左内	龍宮淵	○川北 霞峰	支那人	坂田 虎一	○南 政善	○渡邊 浩三	○白鷺城	○蘇州 春の裏町
二人	土肥 蒼樹	寶戲	○飛田 周山	黎明	○八木 春山	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
暮るゝ山家	江崎 孝坪	白雲卷舒	孫子勸姫兵會、密安田 叔彦	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
社殿淨心	加畑 桃倦	淺春	時宗と祖先	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
推茸取り	遠山 唯一	時宗と祖先	審服部 有恆	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
瑞鷹	○佐藤 光華	初春開村	森谷南人子	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
東海の冬	○磯部 草丘	朝	戸田 英二	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
古事記(游能基)	○鈴木 朱雀	地獄變圖	淺見 松聲	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
微句	寺島 紫明	夏溪	山下 竹齋	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
栗日和	清水 有聲	日吉三橋	池田 達郎	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
水郷	鈴木 林泉	京洛三女	不二木阿古	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
軍鶏	○東原 方倦	山麓爽涼	酒井 白澄	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
庭房郷	林 雲鳳	養圃雞	○村嶋 西一	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
群鯉	○大村 廣陽	山村雨情	櫻井 孝一	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
後園	西野 新川	朝	西畑起佐子	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
冬日	陳 永森	みしや	鈴木山太郎	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
浦綴	○織田 觀潮	東海道	小寺 禮三	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
今朝の秋	森戸 國次	あかつきのころ	橋崎 鐵香	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
大和路の村	谷野 圭一	日本平景観	○徳田 隣齋	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
谷間の庭	戸田 北達	春日	井川 末吉	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
少女と犬	○根上 富治	河口	米田 莞爾	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
瀑影	○穴山 勝堂	雪に埋もる	河合 健二	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
若森	○白倉 二峰	丘(琉球)	松尾 冬青	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
山村秋立つ	前田 賢	防火演習	笠松 紫浪	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
六月	本庄 陶苑	亂菊	○小早川 清	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
髮	案本 武雄	梨探	○鄭 末朝	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町
湖畔	升谷 完	北地遠征	○太田 天津	黎明	○阿部 春峰	老人	石本 秀雄	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町	○蘇州 春の裏町

坐像 中尾 達 工場遠望 花野 三雄  
 夜の自畫像 (三宅 英雄) 靜物(水彩) 藤川 九郎  
 はりもの 著名 芳夫 牡丹(水彩) 〇宮部 進  
 阪神水害地風景 山崎 隆夫 百日草(水彩) 齊藤 利彦  
 靴を磨く 松原 勝 臺所の一隅(水彩) 河上 大二  
 或る日の午後 高橋喜傳司 夏(水彩) 〇相田 直彦  
 嶽 食員 辰雄 話(水彩) 瀧澤 邦行  
 讀書 村田 宏治 伊豆の海岸(水彩) 〇三宅克己  
 庭木 土本 薫 花(バステル) 〇矢崎千代二  
 風景 根本從之介 木曾路雨雲(水彩) 〇石川欽一郎  
 T子 二見 利節 雲根澤土(水彩) 〇赤城 泰舒  
 運動場に於ける 〇中野 和 雲根澤土(水彩) 〇赤城 泰舒  
 像 草はら 大澤 海蔵 ワンダーホー ゲルトルード  
 金藏獅子 森田 茂 皇軍到處歡聲 (テンペラ) 〇平澤 大暉  
 騎馬像のある部屋渡邊 武夫 靈峯(庚申)(彩) 〇望月 省三  
 畫 井上 三綱 朝鮮所見(水彩) 伊東 正明  
 にはきき 山下大五郎 生石風景(水彩) 脇田 正二  
 爽立つ海 〇小野田元興 戦争ワ作ル 審木村 莊八  
 日曜の朝(陸軍省 益山 雅衛 ビクニツク(版) 〇永瀬 義郎  
 國防獻金受付) 夏 〇耳野卯三郎 建築作業場(エツチンク) 中井平三郎  
 三角巾を持てる 山田 新一 戦傷兵更生之圖 〇旭 泰宏  
 像 〇土田 文雄 給餌門(版畫) 琴塚 英一  
 深秋 庫田 毅 傷痍軍人と看護 江端 芳市  
 松ト竹 〇佐竹徳次郎 婦(版畫) 坂本通二丁目 関 正一  
 大波月 〇笹鹿 彪 丘腹の稚牛(版) 〇恩地孝四郎  
 少年 藤井 芳子 佐渡大開渡(版) 〇平塚 運一  
 黄衣 〇奥瀬 英三 古城、ろの門(版) 橋本 興家  
 鰯船 松居 均 古戦場、善知鳥 防共の獅子(ベ) 〇寺崎 武男  
 丘の上 〇北島 淺一 聯軍畫、善知鳥 防共の獅子(ベ) 〇寺崎 武男  
 室内 内堀 勉 聯軍畫、善知鳥 防共の獅子(ベ) 〇寺崎 武男  
 院後のみのり 〇高橋虎之助 聯軍畫、善知鳥 防共の獅子(ベ) 〇寺崎 武男  
 父 〇小野田弘彌 聯軍畫、善知鳥 防共の獅子(ベ) 〇寺崎 武男  
 黒屏のある家 小野田弘彌 聯軍畫、善知鳥 防共の獅子(ベ) 〇寺崎 武男  
 縁側 徳永富士子 聯軍畫、善知鳥 防共の獅子(ベ) 〇寺崎 武男  
 素秋 朝井関右衛門 聯軍畫、善知鳥 防共の獅子(ベ) 〇寺崎 武男  
 生還特務隊 關口 文雄 聯軍畫、善知鳥 防共の獅子(ベ) 〇寺崎 武男  
 午後の校庭 西原比呂志 聯軍畫、善知鳥 防共の獅子(ベ) 〇寺崎 武男  
 庭の一隅 名古屋城(版畫) 〇前川 千帆

山小屋の曉(版畫) 〇織田一磨 花二題(春・夏) 勝平 得之  
 (版畫) 軍艦進水(版畫) 〇川西 英  
 嚴(版畫) 前田 政英  
 祈願(版畫) 武田 由平  
 路傍 廣本幸與丸  
 家 船井 美周  
 S軍曹 山崎 坤象  
 木 中川 芳雄  
 端午 野口良一 呂  
 開封風景 〇和田 香苗  
 海ノ子等 星野 正三  
 座像 橋詰英一郎  
 陶都初秋 中條 茂  
 朝網 〇松山 省三  
 母子 土屋 實  
 神都の朝 〇加藤 静児  
 貓 黒田 頼綱  
 信濃の鍛冶屋 石川 滋彦  
 陳中に於ける將 〇關口 隆嗣  
 軍の横顔 川村精一郎  
 果園の娘 〇河井 清一  
 眞夏の島 玉置 弘三  
 夏の日ひと 〇内田 稔  
 金屏海漁 上田 清一  
 砂山 井手 祐子  
 少女 山本通二丁目 関 正一  
 薔薇 池田治三郎  
 記念撮影 高島 茂雄  
 征く人 中村新次郎  
 ひのまる 〇池田永一治  
 母子 東坊城光長  
 木とバトウ 齊藤 廣胖  
 婦人像 岩下 三四  
 昭和醫學のある 〇草光 信成  
 風景 〇濱地 清松  
 羽衣 〇山口 亮一  
 白薔薇 〇山口 亮一

郊外風景 星野 二彦  
 崖 〇都鳥 英喜  
 午後 〇鬼頭銅三郎  
 怒濤 堀田 清治  
 徹地へ出發 〇鶴田 吾郎  
 雨あがり 〇矢島 堅土  
 水邊 〇太田 三郎  
 初秋大瀧山 小林 邦報  
 桃 〇松部 異  
 沈黙 會中村 不折  
 堤の並木 〇金澤 重治  
 紫陽花 〇林 重義  
 巴里の裏町 〇武藤 展平  
 夏日 〇有馬さとえ  
 港 〇審石川 寅治  
 素婉窓 南 素行  
 静物の幸 本多 幸市  
 裸婦扇 會、審梅原龍三郎  
 河畔 〇別府貫一郎  
 Y老人 土佐林豊夫  
 牡丹圖 〇椿 貞雄  
 少女坐像 須田 烈太  
 乗馬訓練 倉垣 辰夫  
 母と子 伊藤 應九  
 洋琴 村田 保三  
 ジヤンクのゐる 〇山崎 省三  
 風景 草藍三願 〇河野 通勢  
 春日 〇故八條 彌吉  
 〇先生と孫 大貫 松三  
 芭蕉 馬越樹太郎  
 漁夫 〇佐藤 一章  
 北海道漁村風光 齊藤 七資  
 日本マホメツト 教團長イブラヒム氏 〇赤松 麟作  
 北京の初夏 〇服部 亮英  
 林間體操 〇富田過一郎  
 野良の一時 〇西山 眞一  
 歌 〇細井 繁誠

源流 横垣 孝一  
 少女と猫 中谷 泰  
 保子と人形 手島 實  
 赤松林 〇香田 勝太  
 むすめ 〇山喜多二郎太  
 樹下棋戦之圖 〇榎藤 種男  
 庭の少女 南大路 一  
 少女像 松岡 正  
 習字 藤 彦衛門  
 秋郷 〇松岡 隆  
 少女 〇坪井 一男  
 アトリエ 〇清水多嘉示  
 赤い帽子 〇牧野 司郎  
 静物 〇築山 節生  
 座像 〇角野判治郎  
 如意輪觀音 白川 一郎  
 摘草 遠田 運雄  
 鎌手の磯 〇木村 義男  
 風景 〇木村 義男  
 漁港 〇辻 愛造  
 八百屋 〇瀬戸千代三  
 菜園收穫 西 博民  
 魚ト野菜 伊川 鷹治  
 公園の朝 大 桃 寛  
 窓際 内藤 隼  
 天草風景 小貫 綾子  
 記念撮影 田代 順七  
 果實籠を持つ女 〇窪田 照三  
 經装 柴田 恕夫  
 母子 〇清原重以知  
 燐銅 江藤 哲  
 精神之日本(其 〇山田 隆憲  
 一、聖傷) 〇橋本 知足  
 再建 〇橋本八百二  
 薔花軍鶏 〇山下 繁雄  
 森の仲間 〇川合改次郎  
 晩秋 〇眞山 孝治  
 西鮮ノ娘 〇佐々貴義雄  
 五色繻 能見 三次

上總風景 〇多々羅義雄  
 激流 〇油谷 達  
 荒鷲の父 〇桑重儀右衛門  
 雪景 松原 武雄  
 蔬菜 中谷ミユキ  
 新聞を賣る女 松本 銳次  
 バジヤマの女 北村 綱義  
 白衣 新道 繁  
 潮香 〇金子 保  
 夏之池 〇井上 よし  
 雨の鷺羽山より 〇竹内 三郎  
 二人 〇松尾 正己  
 極北企業地風景 〇上野山清實  
 女阿婆山頂 〇三上 知治  
 少年 一木萬壽三  
 就後 松田 寅重  
 曇日 川口 四郎  
 斷崖 眞木 雄二  
 キャンプ 伊藤 彰  
 溪流 〇小寺 健吉  
 湫流 山野 正  
 ゆかた 妹尾 壽信  
 外海晴日 大黒 孝儀  
 夏日小景 小林 富藏  
 階上 〇黒田 新  
 和尙さんと子供 〇藤江運三郎  
 窓邊座像 李 石樵  
 寄掛街道古宿 〇岩井彌一郎  
 Y將軍の像 〇長屋 勇  
 おもちや 濱邊 萬吉  
 女と野菜 石橋 武助  
 水くみ 岩崎 勝平  
 草上 遠山 清  
 向日葵其他 〇奥山 保  
 河岸風景 松岡 正直  
 窓邊少女 〇松岡 正  
 南洋の娘 木原 二郎  
 近海魚 鹽見 暉夫

鎌倉風景 肘つく女 牛小舎 山湖と白樺 緑衣坐像 麗日 秋晴 明窓 春苑 刈入れ頃 初秋縁側 第一線 百合花 青衣 野尻湖畔 飯塚部隊長	益田 義信 西尾 善積 齋藤 俊雄 眞垣 武勝 廣本 了 景山 榮次 田邊 穰 中村 茂雄 伊藤 四郎 布施信太郎 菅 一郎 瀨野 豊藏 淺井 眞 田中 繁吉 片岡 銀藏 塚本 茂	多田 道雄 中島 浩 審佐々木大樹 審吉田三郎 宮本 朝壽 瀨戸 團治 審陽野 聖雲 兒島 正典 中野 桂樹 安達 貫一 山口 四郎 審中村 直人 高橋 英吉 坂東 文夫 明石 順吉 伊藤 鉦次 阿井 瑞岑 森山 朝光 橋田 七郎 澤田 晴廣 宮地 寅彦 橋本 朝秀 審建昌 大夢 錦戸新一郎 審安藤 照 西田 明史 大島 駒藏 木下 繁 岩崎 良平 井口 喜夫 佐藤 忠良 山根 八春 小笠原安兵衛 石渡清三郎 長澤 幸夫 照田 稔 金 復鑑 星野 健一 須藤 素弘	裸婦 男 少女立像 (建築彫刻試作) 根 決 審陽野 聖雲 若い女 驚 無我の境 きゝみみ 光を浴びて 暖かけた女 黎明 観自在 日本刀 浴女の構圖 四ツ 松本 宗一 小田 寛一 長谷川義起 小川 孝義 白井謙二郎 鈴木三郎助 日下 寛治 吉賀 壽男 安西 順一 河内山賢祐 泰浩三郎 山脇庄次郎 福井 康賢 萩山 三敷 夏目 貞良 分部 順治 橋江 嘉純 中村 七十 審大總長今博士 審加藤 顯清 會朝倉 文夫 審三木 宗策 審雨宮 治郎 黒田 嘉治	鷹ヶ峰の秋會、審山崎 朝雲 清唱 首像 小き顔 小鳥を持つ少女、後藤 清一 仲秋ノ作 ひととき 燭端 裸婦坐像 男の首 母子 黎明 人の橋 圓錐をなす母子像、安永良徳 大處運作ノ内 (谷風) 鏡 會藤井 浩祐 進藤 武祐 和田 金剛 高澤 七郎 松原 岳南 石井 滋 片山 義郎 鈴木 達 本田 徳義 清水禮四郎 江川 治 松本 治 小野田高節 古賀 忠雄 古村 清志 大慈觀世普菩薩、田村 審火 白衣の凱旋 施無畏者 裸婦立像 矢調べ 架橋 潮風 希望 女と布	三國 慶一 森本 清水 毛利 救水 〇長谷 秀雄 〇杉浦 太朗 〇河村 龍興 〇飯島 波陽 〇山本 稚彦 〇松田 尙之 〇武井 直也 審小倉右一郎 〇富永 朝堂 〇富永 朝堂 會藤井 浩祐 進藤 武祐 和田 金剛 高澤 七郎 松原 岳南 石井 滋 片山 義郎 鈴木 達 本田 徳義 清水禮四郎 江川 治 松本 治 小野田高節 古賀 忠雄 古村 清志 大慈觀世普菩薩、田村 審火 白衣の凱旋 施無畏者 裸婦立像 矢調べ 架橋 潮風 希望 女と布	平和ノ光 少女立像 武動 憩へる女 田村オリデンス 〇早川 龍一 翁 朝盛 中野 五一 陳 夏雨 廣口 重威 向 正三郎 柴田 佳石 雨田 光平 羽下 修三 長谷川 粉藏 松本 庄吉 三好 直 新免 弘男 長谷川 昂 丘上 羽衣能樂 慈現 街の空 郷土 英靈奉讃作 増荒男ノ面影 古川 順三 富田 武雄 山口伊之助 久原 藩子 丸山 圓象 森野 圓象 泉谷喜一郎 服部 仁郎 林 謙三 三木 凱歌 星野 直弘 三坂耿一郎 審北村 正信 佐藤 靜司 木村 珪二	童子像 遐想 女性のポーズ 渡河戦 月影 母子 自然觀照によれる堀江 赴 或る日の中川男、赤堀 信平 力 大和の利劍 力投ノ前 永遠の平和 踊のひとふし 若草の丘 若キ女 浴 女 女 女 女 二人の若者 〇森 大造 〇大須賀 力 〇菅沼 五郎 〇平澤 信男 〇奥山 泰堂 〇河村 清司 〇山脇 敏男 〇吉田 敬示 〇開發 芳光 〇早川 朝洋 〇後藤 良	〇倉澤 興世 〇安田周三郎 〇村田勝四郎 〇野々村一男 〇廣井吉之助 〇山畑阿利一 〇赤堀 信平 〇橋本 高昇 〇吉開伊喜藏 〇飯村 直久 〇燈 幸成 〇中野 昂 〇中島 東洋 〇大嶽 茂樹 〇荒居 徳亮 〇森 大造 〇菅沼 五郎 〇平澤 信男 〇奥山 泰堂 〇河村 清司 〇山脇 敏男 〇吉田 敬示 〇開發 芳光 〇早川 朝洋 〇後藤 良
---	---	--	---	---	---	---	---	--



第七回四行會展 (洋)

十月十七日—二十日 銀座・資生堂

櫻田精一個展 (日)

十月十九日—二十一日 京城・三中井

東京鑄金會鑄金工藝展

十月十九日—二十二日 日本橋・三越

日本民藝協會主催第二回秋季新作工藝展

十月十九日—二十三日 銀座・松屋

大分縣美術協會第三回展 (日、洋)

十月十九日—二十三日 大分縣公會堂

第六回服飾美術展

十月十九日—二十七日 銀座・松屋

雲岡石佛スケッチ展觀

十月二十日 下谷・日本美術院

東京美術研究所の主催で、前田青邨の雲岡石佛スケッチ二十四葉及び諸家所藏の拓本、寫眞等を展觀した。

蒼人會第一回展 (洋)

十月二十一日—二十五日 銀座・紀伊國屋

池田遙邨東海道五拾三次圖繪と帶の會

十月二十一日—二十六日 日本橋・三越

三橋武顯跡畫展

十月二十一日—二十七日 銀座・三越

作者は本年三月陸軍省賜託從軍畫家として中支に派遣されたが、兄加納治雄少將戰死の地を始め南京杭州等戰跡の寫生畫を發表した。

名古屋工藝學校校外展 (圖案、建築、工藝等)

十月二十二日—二十四日 名古屋・丸善

日高昌克第二回日本畫個展

十月二十二日—二十六日 銀座・資生堂

第一回臺灣美術展覽會 (日、洋)

十月二十二日—十一月三日 臺北・臺灣教育會館  
昭和二年以來臺灣教育會主催の下に毎年臺灣美術展を

開催し、回を重ねること十回に及んだが、本島美術界の隆勢に鑑み、その健全なる進歩を圖るため新に總督府の所管に置き、臺灣總督府美術審查委員會を設置し、規程を定めて東洋畫、西洋畫二部の公募第一回展を開いた。鑑査の成績は左の通りであつた。

(一般撥入數) 東洋畫五三、西洋畫三七五 (入選數) 東洋畫二七、西洋畫七三點 (陳列總數) 東洋畫三五、西洋畫八九點

(特選) 東洋畫 薛萬棟、宮田彌太郎、林東令、西洋畫 南風原朝光、西尾善積、張萬傳、院田繁、佐伯久、高橋惟一、高田壽、山下武夫

井上眞齋作陶展

十月二十三日—二十六日 日本橋・三越

朱葉會小品展 (洋)

十月二十三日—二十六日 數寄屋橋・日動畫廊

長谷川春子、仰木ゲルトロド、大久保百合子等三十三名の組織する婦人洋畫團體の會員小品展である。

武内鶴之助バステル畫近作展

十月二十五日—二十九日 大阪・美交社

高取富基遺作展 (工)

十月二十五日—三十日 日本橋・高島屋

東京南畫聯盟展

十月二十六日—三十日 新宿・伊勢丹

小室翠雲を顧問とする同會の展覽會で翠雲の「花卉帖」をはじめ同人の諸作を陳列した。

創紀美術第一回展 (洋)

十月二十六日—三十日 銀座・青樹社

獨立展の前衛派に屬する米倉壽仁、寺田政明、齋藤長三、阿部芳文等十九名が新に結成した會の第一回展である。

第一回大阪南畫展

十月二十六日—三十日 大阪・南海高島屋

油繪諸作家展

十月二十六日—三十日 大阪・美術新論社畫廊  
會宮一念素描展

十月二十六日—三十一日 大阪・阪急百貨店

第二回武者小路實篤日本畫展

十月二十六日—三十一日 大阪・阪急百貨店

第一回鈴木保徳洋畫個展

十月二十七日—三十日 數寄屋橋・日動畫廊

八木岡春山第五回展 (日)

十月二十七日—三十一日 日本橋・三越

作者の得意とする破墨山水を主とする近作十八點を展觀した。

前田竹房齋花籠展

十月二十七日—三十一日 日本橋・三越

工藝青年派第三回展

十月二十七日—三十一日 銀座・紀伊國屋

中山巍個展 (洋)

十月二十七日—三十一日 京城・三越

早大建築學會展

十月二十八日—二十九日 早大構内・大隈小講堂

第三回齊々會展 (彫)

十月二十八日—三十日 銀座・資生堂

東美校彫刻科の最近の卒業生十名が組織する彫塑の同人展。

藤田七九近作展 (南畫、書、篆刻)

十月二十八日—三十日 名古屋・丸善

國土社第二回展 (洋、彫)

十月二十八日—十一月一日 弘前市公會堂

小川倩霞個展 (日)

十月二十九日—三十日 日本橋・東美俱樂部

第五回全國商業美術展覽會

十月二十九日—三十一日 丸ノ内・東京商工獎勵館

全國商業美術教育協會主催の商業美術展は文部省、日



本商工會議所、中外商業新報社後援の下に開催された。  
種目は第一部創作ポスター、第二部新聞廣告圖案、第三  
部陳列窓意匠圖の三部より成り、審査には伊東亮次、和  
田三造、上野陽一、宮下孝雄、杉浦非水、杉山豊祐等が  
當つた。

一般入数 一五一七點 入選数 六〇五點

授賞(第一部) 西島武四郎、渡邊弘治、中川隆、石川  
盛男、小林貞男、佐々木幸一(第二部) 和島定藏、宮島  
肇(第三部) 徳力榮一

帝國美術學校創立記念展

十月三十日 吉祥寺・同校

同校學友會主催

第二十五回二科美術展(洋、彫)

十月三十日—十一月十四日 大阪市立美術館

大阪市立美術館主催

泰西名畫展

十月三十日—十一月十四日 大阪市立美術館

大阪市立美術館主催

## 十一月

第十回早稻田高等學院洋畫展

十一月一日—三日 銀座・紀伊國屋

多摩帝國美術學校創立記念展

十一月一日—三日 世田谷・同校

軌線美術第四回展(日)

十一月一日—三日 京都・河原町ギヤラリー

兒島善三郎個展(洋)

十一月一日—四日 銀座・資生堂

近作の油繪十六點を陳列した。いはゆるフオーヴ的感  
覺に基く油繪の日本化とでもいふべき點にこの作者の方  
向が認められ、獨自の様式を續けてゐる。歪形は大膽

美術展覽會(十一月)

で、情趣に富むが、兎角裝飾的な處理に終りやすい點に  
繪畫としてある物足りなさを覺えさせられる。

登内微笑繪畫展(日)

十一月一日—四日 名古屋・松坂屋

春譽、李櫻、溪仙遺作展(日)

十一月一日—五日 大阪・松坂屋

七彩繪洋畫展

十一月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

同美術本影展

十一月一日—五日 大阪・松坂屋

愛媛縣美術工藝第九回展(綜合)

十一月一日—五日 松山・縣商會陳列所並公會堂

愛媛美術工藝協會並愛媛縣商會陳列所主催

京都大衆向工藝品競技展

十一月一日—六日 日本橋・高島屋

橋本關雪個人展(日)

十一月一日—六日 日本橋・三越

近作十點、二尺乃至三尺の絹本橫物に「鷹」「猿之圖」  
「柳鶯」「芙蓉猫」など鳥獸を主題とする。新な發展はな  
いがさすがに重厚圓熟の技を見せた。や、趣の變るもの  
として中支風景「泊舟」「湖上清曉」の二點があつた。

河井寛次郎新作陶器展

十一月一日—六日 日本橋・高島屋

京都の河井寛次郎の陶器展は毎年高島屋の主催で開か  
れる。品目は壺、皿、鉢、茶器、食器類で、鐵、吳須、  
辰砂の地に丸紋の草繪を施したものが多く、殊に練上げ  
の壺、鉢等に獨自の民藝的な味ひがある。

一美會第二回展

十一月一日—六日 新宿・伊勢丹

白壁會第十六回洋畫展

十一月一日—六日 大禮記念京都美術館

大阪毎日新聞京都支局後援。同會は關西美術院關係の

有志を以て組織する。會員の出品計二百七點の外に指導  
者黒川重太郎の作品十七點を展觀した。

香蘭社新作陶器展

十一月一日—七日 新宿・三越

中村重義第五回個展(洋)

十一月一日—七日 名古屋・十一屋百貨店

愛國ボスター展

十一月一日—七日 日本橋・白木屋

東京高等工藝學校工藝圖案科卒業生制作

國風家具展並並紫江會指物展

十一月一日—七日 大阪・松坂屋

田口省吾洋畫展

十一月一日—七日 大阪・阪急百貨店

京都美術館秋季展觀

十一月一日—十五日 大禮記念京都美術館

京都美術館では秋季展觀として同館收藏の繪畫、彫塑  
美術工藝品等を陳列し、故土田麥櫻作「平牀」並に同畫  
稿、故西村五雲の最後の大作「園裡即興」その他の新收  
品を出陳した。

福島美術協會第九回展

十一月二日—五日 福島市公會堂

横濱美術展

十一月二日—六日 横濱・開港記念會館

豐川須彌第三回個展

十一月二日—八日 新宿・月光莊

第五回全國中等學校商業美術作品競技展

十一月三日—五日 名古屋高等商業學校

岐阜美術研究會第三回試作展(日)

十一月三日—六日 岐阜・百貨堂

第四回奈良美術家聯盟作品展(洋、彫)

十一月四日—六日 奈良會館

會員の洋畫、彫刻等三十點の外に、熊谷守一の水墨畫

三十點、會員作の陸軍病院寄贈畫等を陳列した。

第三回展 (洋)

十一月四日—七日 銀座・紀伊國屋  
李仁星洋畫個展

十一月四日—八日 京城・東亞日報社  
名古屋工藝品第三回展

十一月四日—八日 名古屋商工會議所  
文化學院美術工藝展

十一月五日—七日 神田・文化學院  
全日本素描競技展

十一月五日—七日 神田・文化學院  
泰西版畫展

十一月六日—八日 數寄屋橋・日動畫廊  
型成美術家集團第三回展 (洋、彫)

十一月六日—九日 京城・三越  
第二回草合社展 (日)

十一月六日—十一日 神戶畫廊  
木谷千種畫塾の有志が組織する同人展

「汎」造型會展

十一月七日—十一日 銀座・紀伊國屋  
橋本獨山遺作展 (日)

三越の主催で、京都相國寺前管長故橋本獨山の晩年の墨蹟を陳列した。

東西大家新作展 (日)  
十一月八日—十日 東京美術俱樂部

神戶、畫室社主催  
現代日本畫新作小品展

十一月八日—十一日 銀座・鳩居堂  
美術日本社主催

石川欽一郎日本畫展  
十一月八日—十二日 神戶畫廊

優良工藝品展

十一月八日—十三日 金澤・官市大丸  
金澤工匠會主催、出品點數約二百點。

文展第二部特選作家展 (洋)  
十一月九日—十三日 數寄屋橋・日動畫廊

日動畫廊主催。昭和十三年度文展第二部に於て特選を得た作家、安藤信哉、二見利節、石川滋彦、倉員辰雄、

庫田發、森田元子、森田茂、棟方志功、大貫松三、大澤海藏等十名の作品を三點づつ、陳列した。

木工品製作競技會

十一月九日—十三日 廣島縣產業獎勵館  
井高歸山第一回作陶展

十一月九日—十五日 日本橋・三越  
小出卓二洋畫展

十一月九日—十五日 大阪・阪急百貨店  
加藤靜兒個展 (洋)

十一月十日—十二日 岐阜商工會議所  
芦川弘吉油繪、荒川清忠墨繪展觀

十一月十日—十二日 京都・朝日會館  
魯山人畫展

十一月十日—十四日 銀座・三味堂  
國民精神作興資料展

十一月十一日—十三日 帝國圖書館  
第八回美術工藝展

十一月十一日—十三日 德島商工會議所  
德島縣美術工藝協會主催。

健康美術畫展  
十一月十一日—十五日 新宿・三越

新興美術研究會主催。  
奈良洋畫公募展

十一月十二日—十三日 奈良會館  
波多野一岳個人展 (日)

十一月十二日—十三日 名古屋美術俱樂部  
九大美術部展 (洋)

十一月十二日—十四日 福岡日日新聞社講堂  
BAN第二回展 (洋)

十一月十二日—十四日 銀座・紀伊國屋  
中村大三郎畫塾小品展

十一月十二日—十五日 名古屋・松坂屋  
童寶藝術院小品展

十一月十二日—十五日 京城・三越  
西歐名作版畫展

十一月十二日—十八日 銀座一畫廊  
第一回維新會展 (洋)

十一月十二日—十八日 新宿・月光莊  
和田英作近作畫展觀 (洋)

十一月十三日—十六日 日本橋・三越  
近年殆ど個展のみを以て發表する作者の日常作品、風景、花卉油繪十七點を展觀した。常に見る富士とばらの外、「溪流」「西の京の夕照」「湖畔の春景」など奈良、近江の景色、「蘭花」「睡蓮」その他の花を加へ、練達の筆に倦むことなく自然描寫への精進を示してゐる。

澤田宗山作陶展  
十一月十三日—十七日 日本橋・三越

大亦觀風個展 (日)  
十一月十三日—十七日 日本橋・白木屋

三岸節子洋畫個展  
十一月十四日—十六日 數寄屋橋・日動畫廊

作者は獨立の會友、水彩畫二十數點を陳列した。技術的な洗練が望まれた。

佐藤哲三郎第三回新作洋畫展  
十一月十四日—十六日 神戶畫廊

青柿社第七回小品展 (日)  
十一月十五日—十七日 銀座・紀伊國屋

能美會第一回展(能面、日、洋、彫)

十一月十五日—十九日 日本橋・白木屋

第三回洛秀會展(日)

十一月十五日—二十日 京都・丸物

第八回武藏高等工科學校建築學科作品展

十一月十五日—二十日 新宿・伊勢丹

田口省吾近作個展(洋)

十一月十六日—十七日 神戸・オリエンタルホテル

東言社主催。油絵二十四點を陳列した。

林二郎新作洋家具展

十一月十六日—十七日 日本橋・高島屋

中村恆子洋畫展

十一月十六日—二十二日 大阪・阪急百貨店

大森光彦個人陶器陳列

十一月十六日—二十三日 日本橋・三越

花器、香爐、水指等六十餘點の近作を展覧した。

橋本八百二近作油繪展

十一月十七日—二十日 數寄屋橋・日動畫廊

富士山、岩手山等の題材を主とした近作の油繪を陳列した。

海外美術品藏拂展

十一月十七日—二十日 銀座・資生堂

南嶺堂主催。

第一回歷程美術協會展(日)

十一月十七日—二十一日 神田・東京堂

日本畫人の因襲的な思想と技術を拒否して、造型美術の本質の開拓を目指して結成された同會の第一回展で、岩橋永遠の「凍雪」、船田玉樹の「花の夕」その他江崎孝坪、馬場和夫、丸木位里等の出品があつたが、實質的な創作に向はうとするその新鮮な態度に注目されるものがあつた。

大阪新美術家同盟第五回展(洋、彫)

美術展覽會(十一月)

十一月十七日—二十三日 大阪市立美術館

關西における各美術團體の綜合を趣旨とする同展の第五回で、今回の加盟團體は大阪繪畫會、新畫人集團、六月會、關西水彩畫協會、セクシヨナール、ロボット洋畫協會及大阪彫刻會等で、洋畫六團體、彫刻一團體である。(便覽参照)

青巢會第六回洋畫展

十一月十八日—二十二日 銀座・紀伊國屋

河合卯之助作陶展

十一月十九日—二十日 銀座・星ヶ岡茶寮

墨人會繪畫展(日)

十一月十九日—二十二日 名古屋・松坂屋

甲戌會第六回藝術人形展

十一月十九日—二十三日 日本橋・三越

第四回近藤浩一路新作畫展(日)

十一月十九日—二十三日 日本橋・高島屋

「朴花」「若葉」「遠江」「驟雨」「白雨」など、自然の風物に親しんで繊細な感覺に多く光を捉へた独自の水墨畫近作十二點を陳列した。

七絃會第九回展(日)

十一月十九日—二十三日 日本橋・三越

西村五雲を失つて會員は又五人となつた。小林古徑と菊池契月とはいづれも大幅で都合七點を陳列。數は少いが、一流の技術と態度の慎重さを特色とする作家達の、殊にこの會は用意ある力作を発表する機關としてゐるだけに、やはり見應えのある成績を示した。こゝには氣品を尚び、高度の洗練を目指す謹格さが見られ、それだけに感興の横溢した畫面を求め難いことは或はやむを得ぬであらう。

鎬木清方の「歌舞伎の始」は姿態を彦根屏風にかり、巧に自家のものとして精緻な技を見せ、安田軼彦の「觀自在」は佛畫の因襲に促はれず、一切の虚飾を省いた清

淨新鮮な畫面で、技法も内容に適した佳品。前田青邨の「大楠公」は謹嚴の作で、又作者の長所を示した。小林古徑は本年は院展文展とも出品なく、この會の「實と花」双幅が代表的の發表であつたが柘榴の枝と白芙蓉とを描いた比較的軽い作。菊池契月の「華」双幅は桃山風俗の美女二人を對せしめたもので、艶麗さを求めるよりはおつとりした氣品のうちに心理的な動きを現さうとして相當の成功を見せた。

吉村松坪第一回個人展

十一月十九日—二十三日 大阪・松坂屋

日本民藝館撰秋季新作工藝展

十一月十九日—二十三日 大阪・阪急百貨店

日本陶磁器展

十一月十九日—二十七日 大阪・三越

銃後振興工藝品展

十一月二十日—二十二日 大津市公會堂

第四回豐橋美術協會展

十一月二十日—二十三日 豐橋市公會堂

日本民藝館特別展觀

十一月二十日—十二月二十五日 駒場・日本民藝館

本欄一五三頁參照。

北出塔次郎九谷燒個人展

十一月二十日—三十日 銀座・服部時計店

大獨逸國展覽會

十一月二十日—十二月十一日 大阪市立美術館

福澤一郎近作個人展(洋)

十一月二十一日—二十五日 數寄屋橋・日動畫廊

一部の前衛繪畫運動を率ゐる福澤一郎が開いた最初の個展で、五十號八點を含む近作の油繪二十餘點を陳列した。作品の主題は雲、岩、花或は人などで、普通の寫生を離れて、象徵的意欲を盛るべく努めた作品である。畫面のブクサンを心得た表現は作者の能力を示すものであ

るが、色彩の品格或は深さの點で、今後によつべきものが多い。岩に百合を配した五十號の「風景」の類及び小品の「人」等が挙げられる。

## 第二回經緯工藝展

十一月二十一日—二十五日 銀座・資生堂

## 山内一彦油繪試作展

十一月二十二日—二十四日 銀座・三味堂

## 東京會日本畫新作展

十一月二十二日—二十四日 東京美術俱樂部

株式會社東京會主催の秋季展で、出品者は東西の大家及新人七十餘名。川合玉堂「行く秋」、楠木清方「山茶花」、川端龍子「栗鼠」、小室翠雲「瑞雪」、小林古徑「霜」、兒玉希望「源平桃」、荒木十畝「菊」、酒井三良「江村秋來」、前田青邨「兎」、山村耕花「親鸞上人」、中村岳陵「龍膽」、橋本關雪「輕暖」など見るべく、外に西村五雲の「秋」と題する花鳥畫は故人の絶筆となつたものである。

## 赫土社第一回展

十一月二十二日—二十四日 京城・三中井

## 日大工科繪畫部展

十一月二十二日—二十七日 新宿・伊勢丹

## 杏亭塾同人繪畫展

十一月二十三日 名古屋美術俱樂部

## 東郷青兒洋畫個展

十一月二十三日—二十五日 大阪東區・染工聯合館

## 東言社主催。陳列點數二十六點。

## 雲烟會第十五回展(日)

十一月二十三日—二十五日 大阪・三越

## 丹阿彌岩吉個展(日)

十一月二十三日—二十七日 日本橋・白木屋

## ブブノワ第二回自作版畫展

十一月二十三日—二十七日 新宿・月光莊

## 笹鹿彪洋畫展

十一月二十三日—二十九日 大阪・阪急百貨店

## 第三回日本人形社展

十一月二十三日—十二月二日 上野・日本美術協會

同社の公募による第三回展で、應募作品七十三點、入選二十三點。同人作品を併せ、七十五點を陳列した。會友推薦 菅野くに子、安きよ子

## 大潮會第三回繪畫展(日、洋)

十一月二十三日—十二月四日 東京府美術館

小學校及び中等學校教職員を出品者とする會で、文部省後援のもとに第三回公募展を開いた。(搬入總數)一二七九點。(入選數)日本畫二五、洋畫三八七點。

授賞(大潮會賞)榎戸庄衛(特選)川口雄男、川端五市、竹野谷仁重、阿部廣司、黒澤貞頼、白井剛夫、東谷桃園、山口達、山口猛彦、小林富藏、森桂一、川口四郎、石野安親、島崎政太郎、後藤秋生、三田村寅吉、若林喜久平(無鑑査推薦)白井剛夫、大貫松三、山下大五郎、榎戸庄衛、山口猛彦

## 郷倉千親繪畫展(日)

十一月二十四日—二十七日 名古屋・松坂屋

## 佐賀美術協會第二十二回展(洋)

十一月二十四日—二十七日 佐賀市公會堂

## 川端龍子第八回個人展觀「駱駝行」

十一月二十四日—二十九日 日本橋・三越

青龍展出品作と關聯し、今夏六月北支及び内蒙に旅して得た大陸畫材十二點を製作出品した。日本畫で大陸に取材するもの稀ではないが、時世を意識しつゝ、新境地開拓を努めるこの作者の仕事は類を見ない。而も戰爭に關する畫題が一つもないことも注意される。雄勁、爽快な筆致が主題に適應した「蒙古花鳥」、「夕立雲」など傑出し、住居を描いた「迎福」は色彩の効果面白く、「雲崗閑日」も佳作であつた。

## 三條會作陶展

十一月二十四日—三十日 日本橋・三越

## 石井柏亭從軍畫小品展

十一月二十四日—三十日 銀座・銀座一畫廊

## 一水會第二回展(洋)

十一月二十四日—十二月十日 東京府美術館

昨年第一回展を開いた一水會はその後二三の會員を加へて第二回の公募展を開いた。會場藝術を排し技術を重ねるといふこの會の趣旨は、會員達の傾向と共に、おのづから正統的な平明な作風を多く見せ、荒々しい野心的な大作や、新奇に走るものは見られず、手頃な且つ上品な作品が落つた鑑賞を待つてはるが、一面進取的な活氣の缺乏は一種の物たりなさや與へる。同時に又一般出品には未だ技術的練磨の十分ならぬものが多いことは將來の努力に俟つ所が少くない。さすがに會員達はよく努力して、畫格に於ても技術に於ても相當に充實した作品を夫々に見せた。今年は安井曾太郎の出品がなかつたが、小山敬三の滯歐作二十六點を一室に並べたことはよい收穫であつた。大小の作品總て風景畫で主題の變化に乏しく、且つ手法の上でや、親しみ難い癖が目立つが一面清爽な風趣に富み、中でも鳥瞰的な風景に好ましいものが多い。「エツズの春」「モナコ遠望」「カーニユ遠望」など佳品である。

石井柏亭は大陸寫生の五點を出品した。淡々とした心境を示すが練熟の技はさすがに重きをなす。「蒙疆平穩」を代表的なものとし、小品の「北寺塔(蘇州)」亦佳作である。山下新太郎の「少女林泉」は力作であるが人物と背景の關係にや、不自然さが見える。木下孝則は「川瀬夫人像」に暢達な技術を見せた。いはゆる正統派的の技術でこの作者は顯著な存在であり、品位も低くないが、理智的の要素が多く畫面を冷たくしてゐる。有島生馬の大作「江南の春」は、作者が畫家であるよりも文學者的

素質の勝つことを示したものと外はない。むしろ「ホノルルの女」をとる。裕伊之助の諸作では「清宴舫（昆明湖）」を舉ぐべく、中村善策は「山湖」「動む秋」の大作に努力を示したが、この作者の長所は十分に見られなかつた。池部鈞が新に加はつて「母と子」等に異色ある作を示した。

會員以外では第一室で中村琢二、田崎廣助、矢崎重信などが目立つ。矢崎の「なわとび」その他は農村の少女などを寫した特色のある仕事で注意される。第二室以下で高田誠の風景諸作は技術に未完全なものを多く残してゐるが、忠實な自然觀照によい質を見せた。須磨總吉の「海」「秋」は大まかにまとめて一種の味あるもの、金子博信の小學兒童を主題とした三點いづれも好ましい作であつた。中では「下町の學校」をとる。その他近藤光紀、熊坂満、鈴木良三等を舉ぐべきであらう。

○點  
（搬入數）一一六一、（入選數）一四四、（陳列數）二〇

一水會賞 高田誠、田崎廣助、矢崎重信  
具方賞 中村琢二

### 出品目録（○會員）

むすめ	中村 琢二	モデルと壺	裕 伊之助
母と子	同	あぢさる	同
コートの女	同	溪谷	山口 潔
海濱冬日	平原 美於	本を讀む女	高森 捷三
早春晴日	田崎 廣助	仕事場	同
漁村	同	矢部氏の像	同
小松の丘	同	線陰の少女	石井 三冬
なわとび	同	少年	近岡善次郎
木蔭	矢崎 重信	草角力	同
おてんこつき	同	刈取り	谷内 俊夫
秋	常岡卯三郎	芳公	中居 定雄
晩秋	渡邊 正一	手紙	西脇マデヨリ
清宴舫（昆明湖）	○裕 伊之助	美術	同

美術展覽會（十一月）

魚村	田坂 乾	○小山敬三滯歐作品	六月の庭	熊坂 満	山湖	○中村 善策
小港	同	農家 A	芝浦	同	勤む秋	同
瀬戸	永見 讓治	エツズの春	事變地圖と花	高橋 庸男	廣畑道雄の秋	小平 鼎
黒衣	○木下 義謙	キヤップマルタン	五月の花壇	同	熊小姐像	同
ふじざくらの下	同	エスバリオン	野に憩ふ	北尾 修一	土間	等々力巳吉
貯炭場（清水港）	雄川 泉昌	エスバリオン	大沼風景	同	室内（一）	眞下 慶治
畫家の父	岩松 淳	エスバリオン	大沼の紅葉	石川眞五郎	室内（二）	島 あふひ
靜物	富屋 夏江	モンテクリスト島を望む	大沼の紅葉	同	着物肖像	同
野方	納富 進	古 街	静物	仲田 菊代	みづのり	本郷 惇
山映初夏	同	橋下	少女のモデル	同	果樹	同
裸婦立像	山川勇一郎	南佛山村	静物	同	折紙	荒井 一郎
和服の女	井口 節三	カーニニ遠望	静物	同	溪流	同
舞ノ像	高田 誠	アギニオン（薄暮）	静物	同	下町の學校	金子 博信
山村秋日	同	アルデヤントン河畔	静物	同	へいたいし	同
中瀬湖	同	橄欖樹林（薄暮）	静物	同	遊子供	同
湖畔秋色	同	草 原	静物	同	箱根	同
磐梯山	同	エスタン風景	静物	同	讀書	同
窓	同	エツズ初春	静物	同	面のある静物	同
露支混血少女	同	古村エスバリオン	静物	同	西湖曇日	同
鶴見川	岸 頼正	アンチープ港	静物	同	黒い帽子の女	同
少女	○山下新太郎	ロー河畔	静物	同	氣仙沼港	同
中禪寺湖朝	同	カーニニの丘	静物	同	船船信號所	同
少女林泉	同	ゴード早春	静物	同	赤衣像	同
初夏	同	橄欖樹林（朝）	静物	同	讀書像	同
康安門（北京）	○石井 柏亭	アギニオン（夕）	静物	同	杉	同
中央公園にて	同	靜物	静物	同	雨後	同
蒙疆平穩	同	都會スキーヤー	静物	同	雜林	同
北寺塔（蘇州）	同	ドアに倚れる	静物	同	城外の母子	同
中海公園（北京）	同	青い馬車	静物	同	所持品検査	同
滿洲の妓女	古川 環	ステチアスと猫	静物	同	樂しき湖畔（京北）	同
漁夫	○池部 鈞	座せる裸婦	静物	同	想思樹のある街	同
母と子	同	少女	静物	同	有井村（春）	同
椅子による少女	大橋 文子	○有島 生馬	静物	同	有井村（秋）	同
靜物	同	パン樹と椰子	静物	同	應召の朝	同
人物	同	ツド（ホノルル）	静物	同	森 寅雄	同
竹の秋	松下壽々子	江南の春	静物	同		
秋果靜物	近藤 光紀	ホノルルの女	静物	同		
淡島様の銀杏	末松 勇		静物	同		



美術展覧會 (十一月)

鏡の前	森 寅雄	午後の裏口	金澤 信夫
信州青木湖風景	久野 昌康	コップ酒の男	同
朝の池	坂倉 國臣	村落の娘	○池部 鈞
高原の野庭	平井 武雄	山村の娘	同
ハムロのワツバ	別車 博資	農場風景	山中仁太郎
阿寒瀧口	繁野 三郎	奥人瀬川	同
池畔雪景	山口 敬男	青龍橋	故加藤 一也
蔭	同	浜鹿南門	同
妙義白雲山	赤城 泰舒	居庸關附近	同
甲斐初秋	齋藤 大	宣化南門	同
有栖川庭園の秋	富田 通雄	龍烟鐵宿舎	同

新制作派協會第三回展 (洋)

十一月二十四日—十二月十日 東京府美術館

「反アカデミツク」を唱へて舊第二部會と訣別した青年作家を以て組織する同會は、公募による第三回の展覧會を迎へて會としての落ちつきを備へ、各人の實力を世に問ふに至つた觀がある。會員猪熊弦一郎は渡歐中のため特色ある作品を見せず、又野川英夫も病氣のために出品がなかつた。

同會は、個人的には各々の特異性を有するにせよ、概して、時代の風俗的好尚を卑近な感興を以て追ふ風が著しく、是非何れにせよ、この點が同會の特色を成してゐる。制作振りも沈滞に陥らず、覇氣を失はぬのはよいが、畢竟作家としての觀照に於ては末梢的な感覺主義に捉はれず、本格的な造形美に立ち向はぬ限り、同會現在の或る低調さを清算し得ないであらう。

本回は特別陳列として藤島武二、ボナール、マチスの作品を展覧した。

脇田和の「水邊」その他は垢抜けのした神經を見せて個性的な若々しさがあつた、技巧的にボナールを學ぶ風があつた。小磯良平はアカデミツクな畫風と技術に愈々精彩を加へた。會の作風とは一見不調和のやうにも見えるが、制作が風俗的興味に偏する點は軌を一にする。「練習場の踊子達」が大作であつた。中西利雄の水彩も獨自

の練達が相變らず注目された。冷く整へて行く描寫は風景畫に一種の成功を見せてゐた。内田巖、伊勢正義、三田康の三名は生活感情の抒情を取り上げようとする點で似たところがある。内田の「丘」「山海」は兒童を描いて三部作のもの、如く、靜謐な境地を求める佳い態度が窺はれるが、色彩の點で會の通弊を免れず、或る低調さになくならぬ。三田はユーモラスな味があり、「空港」がよい。佐藤敬の張りのある畫面は特色があるが、奥行に乏しく、猪熊の畫風に追隨するのは積極的でない。鈴木誠は努力してゐるが、成功してをらぬ。一般應募作は會員の感覺に追隨して獨創に缺けるものが多く、小松益喜の街頭風景が題材的に特色があつた。特別陳列の藤島武二の「荒れる日」は縦横の筆致が効果を收めて優れた出来であつた。

陳列總數一二六、搬入數七六一、入選數八五點  
新作家賞 内田武夫

出品目錄 (會員)

繪畫	松田 忠雄	室内の靜物	矢津 綱紀	紅葉	○中西 利雄
机の靜物	同	風景靜物	同	人物 A	同
イチヂク	同	果物賣る女	同	風景	同
立つ坐る	同	風景	同	溪間の秋	同
○脇田 和	同	風景	同	人物 C	同
靜物	同	踊子習作	○小磯 良平	田園調布	同
樹蔭	同	踊り子	同	雲のき	同
水邊	同	憩ふ踊り子達	同	人物 A	同
ヤヤチヤン	同	窓	同	人物 (素描)	同
熱河普賢寺	同	車内	同	木の芽	同
大理石の橋	同	部屋	同	父と子	同
窓邊	同	庭	同	兄弟	同
室内	同	酒場	同	新聞	同
水邊	同	奇蹟の渴望	同	燈火管制	同
俯瞰標	同	靜物	同	半裸の女	同
港の歌	同	ラツシユ時	同	折鶴	同
地上	同	椅子と女たち B	同	人物	同
花	同	新緑	同	人物 A	同
靜物	同	人物 B	同	人物 (素描)	同

領事館の門 秋田 仁也 史跡(聯想) 田淵 巖  
丘を走る汽車 太田 忠 海(同) 同  
空港 ○三田 康 都市(同) 同  
庭 同 特別陳列  
青衣 同 荒れる日 藤島 武二  
静物 前田 利三 風景 ボナアル  
蕨 萩 太郎 風景 マチス  
廢園 原 安祐 人物 同  
古城(聯想) 田淵 巖

### 東風會第二回東西大家新作日本畫展

十一月二十五日—二十七日 日本橋・白木屋

### 新興美術協會第七回展(洋)

十一月二十五日—二十九日 大阪市立美術館

關西在住の春陽會系作家を以て組織する公募展で、會員及び入選作の外に新會員永瀬義郎の版畫及び大橋了介並同夫人、宮下貞之介の滯歐作品を特別陳列した。

會友推獎 三繩文雄、新興賞 河野重軌

### 牧野虎雄洋畫展

十一月二十五日—二十九日 大阪・美術新論社畫廊

### 石川確治個人展

十一月二十五日—三十日 日本橋・高島屋

第三部會々員石川確治の彫刻、油繪、墨繪、陶器等計八十餘點を陳列した。

### 岡常次第八回個展(洋)

十一月二十六日—二十九日 銀座・紀伊國屋

### 新井謹也作陶展

十一月二十六日—二十九日 京城・三越

### 七絃會第九回繪畫展

十一月二十六日—二十九日 大阪・三越

### アシャ洋畫研究所創立十周年記念展

十一月二十七日—二十八日 神戸・三菱

### 支那事變從軍畫展

十一月二十七日—十二月四日 京城・三中井

## 美術展覽會(十二月)

### 長瀧阿貴羅染色工藝個展

十一月二十八日—三十日 神戸畫廊

### 石河光哉北京油繪展

十一月二十八日—十二月二日 新宿・月光莊

### 池田遙邨、上村松篁、三輪晃勢新作畫展(日)

十一月二十九日—十二月四日 大阪・大丸

### 丸山曉霞山岳と高山植物水彩畫展

十一月二十九日—十二月四日 大阪・大丸

### 神庭白梨個展(日)

十一月三十日—十二月四日 新宿・伊勢丹

### 第二回文部省美術展覽會京都陳列會

十一月三十日—十二月十五日 大禮記念京都美術館  
東京に於ける第二回文展閉會後恆例の如く、京都市主催の下に開催した。陳列點數は第一部日本畫二二一、第二部洋畫三二六、第三部彫塑七七、第四部工藝一六六點合計七九〇點で、東京展に比して全體で約百九十餘點を減少した。

## 十二月

### 水彩三人展(洋)

十二月一日—四日 數寄屋橋・日動畫廊

三宅克己、石川欽一郎、眞野紀太郎の水彩畫を陳列。

### 未知會第六回展(洋)

十二月一日—四日 銀座・紀伊國屋

同人展で、本年五月蘭封附近で戦死せる故會員池田俊一の油繪遺作及戰線スケッチを特別陳列した。

### エウタルド・セーラ個人展(彫)

十二月一日—五日 銀座・青樹社

三年前より日本に滞在して居るスペイン人の彫刻家で近作三十一點を陳列した。

### 金重陶陽備前燒茶器展

十二月一日—五日 銀座・資生堂

### 現代名家新作畫展(日)

十二月一日—五日 日本橋・高島屋

### 高島屋美術部主催

「……出品作家は東西の大家巨匠に新進を加へて三十八氏で何れも新筆乃至冬から春への床の間を飾るに相應しい作品を出陳してゐるが、その中でも桐風、玉堂、龍子、土牛、希望、蓬春、平八郎、古徑、契月、岳陵、關雪、關哉州、翠雲、叔彦、秀畝清方の諸氏の作品が眼につく、佳品である(毎夕)」

### 若草會第一回繪畫展(日)

十二月一日—五日 京都・大丸

### 大野夢風新作春向作品展

十二月一日—五日 神戸畫廊

### 新燈社第十六回美術展(日、洋)

十二月一日—六日 大阪市立美術館

恆例の公募展で、青木大乗を初め同人の作品三十點、入選作その他百四十八點の外に海軍病院寄贈畫三十六點を特別出品した。

### 新作日本畫展

十二月一日—七日 日本橋・三越

### 六萌會油繪展

十二月一日—七日 日比谷・東寶劇場地下グリル

### 表裝展

十二月一日—十五日 京都商品陳列館

### 松本弘二第二回近作個展

十二月二日—六日 銀座・三味堂

油繪近作、計十六點を發表した。

### 濱田庄司第十三回近作陶器展

十二月二日—六日 銀座・鳩居堂

### 波多野秋錦個人展(日)

十二月二日—六日 福岡・縣公會堂

### 河井寛次郎新作陶器展

十二月二日—七日 大阪・長堀高島屋

### 水平讓北支藏繪畫展

十二月三日—四日 丸ノ内・東京會館

# 井南居第四回東西大家新作畫展

十二月三日—五日 東京美術俱樂部

井南居宮崎政近の主催、伊藤平山堂、本山陶筆堂の後援による展覧で、東西諸家の新作三十餘點を蒐めた。二尺幅の横物が多く、目につく作品としては西山翠嶂「閑日」、太田聰雨「奥の細道」、川合玉堂「朝寒」、安田叔彦「行秋」、山口蓬春「初冬」、前田青邨「鷺」、小林古徑「觀音」、荒木十畝「早春」、菊池契月「法馬」、島田墨仙「豊公」、小室翠雲「雪江」などがあつた。

# 荒井草雨個展（日）

十二月三日—五日 廣島・中國新聞社樓上

# 現代大家新作日本畫展

十二月三日—六日 上野・松坂屋

# 上弦會油繪展

十二月三日—七日 銀座・青樹社

青樹社が新に主催して岡田三郎助、和田英作及び和田三造の三名の近作を集めた會である。岡田三郎助は「河口湖畔にて」の四十號の力作の外、岩繪具を用ひた「楊柳」及び「風景」二點を出品し、和田英作は「蘭花」の外風景三點、中では三十號の「細流」が代表的なものであつた。和田三造の五點は馬場を描いた「雨あがり」の外風景、人物、菊花等變化ある題材を捉へ、海を描いた「午前の光」は光の描寫の巧な作であつた。

# 岡田行一、堀忠義作品展（洋）

十二月三日—九日 銀座一畫廊

# 佐藤哲三郎新作洋畫展

十二月四日—六日 神戸畫廊

# 藤島武二作畫展

十二月四日—七日 日本橋・三越

近作の油繪二十餘點、すべて風景畫で「瀬戸内海の日の出」「大洗の浪」「潮岬燈臺」「新高山の日の出」から

「西湖」「黃埔口を望む」など各地に取材し、海と山と日の出を好んで取扱つたもの。油繪具の特質を生かした畫面は比類なく、荒く力強い筆觸は色感のよさと共に技術的に完成された美しさを見せてゐる。殊に小品に優れたものが多かつた。

# 松島畫舫秋季展

十二月五日—七日 日本橋・東美俱樂部

松島畫舫主催の日本畫の展覧で、東西の諸家四十餘名の新作を蒐めた。

# 表現第八回展（洋）

十二月五日—七日 銀座・紀伊國屋

# 林重義個展（洋）

十二月五日—七日 福岡・千代田ビル

# 吉田喜藏バステル畫展

十二月五日—七日 大阪俱樂部別室

# 岡田謙三第三回新作發表展（洋）

十二月五日—九日 數寄屋橋・日動畫廊

油繪四十六點を陳列。題材は例により作者の好みの少女の顔、花を持つ女、回想のフランス風景等で、甘い類廢的な感傷を独自の筆致で描いてゐる。

# 和光會工藝展

十二月五日—十四日 銀座・服部時計店

服部時計店の主催により鑄金の津田信夫、高村豐周、陶磁の河村靖山、沼田一雅、漆器の山崎覺太郎、染織の廣川松五郎の外岡田三郎助及び和田三造を加へた會である。津田信夫は鑄鋼の外陶器置物を作り、又和田三造は乾漆置物、及び陶器を試みた。

# 松村小琴第三回個人展（日）

十二月六日—八日 神戸畫廊

# 工精會家具展

十二月六日—十一日 大阪・長堀高島屋

# 大阪美術工藝展

十二月六日—十一日 大阪・三越

# 新興美術家協會第四回展（綜合）

十二月六日—二十日 東京府美術館  
公募による第四回展で、種目は日本畫、洋畫、彫刻、工藝、圖案、版畫、舞臺美術等に互ひ、玉村方久斗の日本畫、大内青圃の彫塑、恩地孝四郎の版畫、伊藤喜朔の舞臺美術等が主なる出品として注意をひく。

授賞（新興美術家協會賞）宇治山哲平、井上秀雄、（美術賞）福島重旺、宮島資雄、菅野剛吉

# 鎌倉彫さび會第一回展

十二月七日—八日 銀座・養生堂

# 日本畫諸作家展

十二月七日—十一日 大阪・松坂屋

# 竹内華陽堂主催

# 虹人第二回展

十二月八日—十日 銀座・紀伊國屋

# 戰時ボスター展

十二月八日—十日 神田・東京堂

# 明大學生廣告研究會主催

大阪在住者本年度文展新入選者展（洋）

十二月八日—十二日 大阪・美交社

美交社主催。出品者は原田實、その他計六名。

# 高橋虎之助個人展（洋）

十二月八日—十四日 福岡・千代田ビル

# 日本青年美術家聯盟第一回展（洋）

十二月八日—十四日 日比谷・東寶劇場地下グリル

# 美術往來社第五回東西名家新作畫展

十二月九日—十一日 芝・東京美術俱樂部

# 北大路魯山人作陶繪畫展

十二月九日—十一日 日本橋・白木屋

# 堀田清治油繪個展

十二月九日—十一日 吉祥寺・ナナン

關西學院、大阪商大畫展

十二月九日—十一日 大阪市立美術館

牧野虎雄小品展(洋)

十二月九日—十二日 銀座・三味堂

中部日本水彩畫會第一同展

十二月九日—十二日 名古屋・鶴舞公園美術館

中部水彩畫會主催。東京圖研社、王様商會後援。横井袖一審査長となり、應募作品四六三點より一六九點を入選陳列した。尙北川民次、藤田嗣治等の特別出陣があつた。

伊賀芭蕉齋作品展

十二月九日—十三日 日本橋・高島屋

東西大家新作畫展(日)

十二月九日—十四日 大阪・三越

川島理一郎北支行制作展

十二月十日—十一日 足利市・共益會館

龜井藤兵衛作畫展(洋)

十二月十日—十二日 神戸畫廊

富田溫一郎新作展(洋)

十二月十日—十二日 數寄屋橋・日動畫廊

日動畫廊主催。近作の油繪水彩等、計二十七點を展覧した。

桃源會日本畫展

十二月十日—十二日 日本橋・東美俱樂部

桃源會主催、出品者七名。徳岡神泉の紙本横物「椿」は作風穩かながら花鳥畫の或る新しい感覺境地を見せ、中村岳陵の「梢秋」も破綻なく明哲な様式的表現に成るものであつた。その他、山口蓬春、福田平八郎、田中咄哉州、溝上遊龜、森白市等の花鳥畫が出品された。

互陽會第一同洋畫展

十二月十日—十四日 銀座・資生堂

中谷泰、二見利節、柴田恕夫、藤野龍等春陽會の有力な新人を以て組織する會の第一回展である。

美術展覽會(十二月)

塚本茂樹歐作品展(洋)

十二月十日—十六日 新宿・月光莊

秋香會洋畫展

十二月十一日—十三日 銀座・紀伊國屋

徳力富吉郎創作版畫展觀

十二月十一日—十七日 京都・芸興堂

新構造社第十二回美術展(洋、彫、工)

十二月十一日—二十五日 東京府美術館

恒例の公募展で、會員の作品及應募出品を併せ、洋畫九一點、彫刻二四點、工藝二三點を陳列した。

(新構造賞)石田隆一(研究賞)井上新爾、小田原早見、串田岩彦、田中連藏、中川安一、關戸直利、蒲生久敏(會員推薦)石田隆一、中森遼(會友推薦)寺尾みち子、村田鹿次郎、伊達徹、北山賢明、加藤春平

エウタルド・セーラ彫刻個人展

十二月十二日—十六日 大阪・三角堂

女紳會第六同展(洋)

十二月十二日—二十日 東京府美術館

主に獨立展の女流洋畫家による同人展で、今回は特に招待出品をも陳列した。招待の作家は甲斐仁代、桂ユキ子、佐伯米子、島あふひ、高山泰子、瀧口綾子、遠山陽子、仲田菊代、西脇マジョリー、橋本はな子、長谷川春子、深澤紅子、森田元子等で、これに會員を併せ、女流作家を綜合した觀があつた。

關尚美堂東西名家新作展

十二月十三日—十五日 日本橋・東美俱樂部

關尚美堂主催。東西諸家四十餘名の新作畫幅を展覧した。

上田耕南日本畫展

十二月十三日—十五日 大阪・三越

田村一男第二回個展(洋)

十二月十三日—十五日 大阪・そごう

海老原喜之助第六回作品發表展(洋)

十二月十三日—十七日 數寄屋橋・日動畫廊

日動畫廊主催。近作の油繪三十四點、その酒脱にして洗練された色彩、及び細部の省略により反つて對象の暗示的説明に成功する手法は作者独自の技術である。然し、工藝的天稟の勝つた仕事であり、繪畫として未だ内容的に物足りない。「少女」「漁夫の家族」「乳兒」「甌」「夏帽子」等が挙げられる。

東都大家木彫刻展

十二月十三日—十八日 大阪・三越

日本版畫協會第七回展

十二月十三日—二十日 東京府美術館

同會の第七回公募展は新作陳列の外に、本年より版畫界の過去三十年を史的に回顧する意味の展覧を累次催すこととなり、その最初として版畫界の先輩、山本鼎、織田一磨二家の舊作を陳列した。

一般の出品は全體に水準が上り、新人の擡頭が目されて好評であつた。やはり、木版、石版が盛んで、銅版は出品も乏しく不振である。會員の作では前川千帆の「高原」、平塚運一の「長崎夜景」等は技術優れ、勝平得之の「秋田風俗鹿島流し」、内田靜馬の「朝市」、其他山口進、下澤木鉢郎、北澤收次等の出品は郷土的題材を巧みに生かしたもの。川西英の木版は色彩に獨自の佳さを見せ、又永瀬義郎の捺擦版、旭泰宏の石版等が注意された。

特別陳列の山本鼎の舊作木版畫は相浦眞三、中島重太郎及び渡邊俣三の所藏にかゝり、大正元年より同七年に及ぶ滯歐作と少數の歸朝後作品で、斯道における作者の天稟を示し、藝術的香氣の豊かなものであつた。織田一磨の作品は、大正五年より現在に及び、百十點を陳列、すぐれた石版技巧を示し、摺みない精進を語つてゐた。尙別に、協會の新事業たる會員の頒布作品「新日本百景

版畫」の一部及び版畫工藝品を陳列した。

一般搬入数一五二、入選数一〇五、會員出品七五

特別陳列 山本鼎作品二二、織田一磨一一〇、百景版

畫二九、版畫工藝その他二三

版畫遺賞(日本版畫書院提供) 黒木貞雄

新會員 根本霞外、武藤完一、中川雄太郎、佐々木孔、

神原浩、朝井清、琴塚英一、關野準一郎

菅野圭介洋畫展

十二月十四日 大阪・堂ビル清交社

横尾翠田個展(日)

十二月十四日—十五日 東京美術俱樂部

新美術家協會「富士山」油繪展

十二月十四日—十五日 大阪俱樂部

中村鐵第三回洋畫展

十二月十四日—十六日 神戸畫廊

寺内萬治郎洋畫個展

十二月十四日—十七日 大阪・美術新論社畫廊

田中忠雄油繪展

十二月十四日—十八日 銀座一畫廊

青泉會工藝展

十二月十四日—十八日 銀座・三昧堂

岡甲會作陶展

十二月十四日—十八日 大阪・松坂屋

池上秀敏社中展(日)

十二月十五日—十六日 上野・鈴木亭

三岸節子水彩室内展(洋)

十二月十五日—十九日 大阪・美交社

菫美會名作展(工)

十二月十五日—三十日 名古屋・松坂屋

高村真夫畫業四十年記念展

十二月十六日—十八日 日伊文化會館

牧野忠永、渡邊直達、鷲尾順敬等を發企者とし、作者

の畫業四十年を記念して開いた。回顧作品二十五點、肖像畫十二點の外、新作畫三十五點を陳列した。

鶴巢會第三回展(洋)

十二月十六日—十八日 京城・三越

研究室六科第二回作品展

十二月十六日—二十日 銀座・資生堂

南洋水産工藝第二回展

十二月十六日—二十日 東京商工獎勵館

鈴木誠個人展(洋)

十二月十六日—二十日 名古屋・安田信託樓上

新作日本畫の會

十二月十七日 大阪・津村別院

大阪新洋畫協會展

十二月十七日—十九日 大阪市立美術館

小山敬三滯佛作品展(洋)

十二月十八日—十九日 大阪市立美術館

扶桑會日本畫洋畫展

十二月十八日—二十日 銀座・交詢社ホール

日佛畫堂主催

鶴田吾郎漢口陷落從軍記念作品展

十二月十八日—二十日 數寄屋橋・日動畫廊

今秋海軍に從軍して陷落二週間後の漢口に赴いた作者

の事變後三回目の從軍行の報告である。發表のものスケ

ッチ約一〇〇點、畫家として目に觸れたもの感じたもの

を只記録に近い様に寫したものである。

能と狂言の版畫展

十二月十八日—二十五日 京都・芸興堂

コンデル蒐集歐洲繪畫展

十二月十九日—二十三日 銀座・青樹社

邦畫即賣展

十二月十九日—二十四日 神戸・朝日會堂

坂倉新兵衛新作陶器展

十二月二十日—二十四日 日本橋・三越

高木背水個人展

十二月二十日—二十六日 大阪・美交社

松本富太郎油繪個展

十二月二十日—二十六日 銀座一畫廊

同畫廊主催

紐育桑港萬國博覽會日本館出品工藝品展示會

十二月二十一日—二十二日 日本橋・三越

高橋卯八代表作個人展(洋)

十二月二十一日—二十二日 丸ノ内・日本工業俱樂部

作者は二科會の出品者で油繪の代表作十六點を展觀し

た。

熊谷守一新毛筆畫展

十二月二十一日—二十五日 名古屋・丸善

寶彩會展(洋)

十二月二十二日—二十六日 東寶劇場地階

橋本多聞堂新作畫展

十二月二十三日—二十五日 日本橋・東美俱樂部

朔日會展(洋)

十二月二十三日—二十五日 銀座・三昧堂

放光堂主催郷土作家日本畫展

十二月二十三日—二十五日 神戸畫廊

福田眉仙日本畫展

十二月二十三日—二十九日 日本橋・三越

過般從軍畫家として渡支して得た戰跡を主題とする日

本畫二十餘點を展觀した。

龍溪硯第二回展觀

十二月二十三日—二十九日 日本橋・三越

水平瀟瀟蘇支小品展(洋)

十二月二十四日—二十八日 新宿・月光莊

岡崎桃乞油繪展

十二月二十五日—二十九日 大阪・美術新論社畫廊



池上秀敏月十五題展覽會(日)

十二月二十七日—二十八日 銀座・資生堂

資生堂美術部主催

洋 畫

## 展覽會以外の作品

### 日本畫

#### 川端龍子謹作御下命畫

川端龍子は豫て畏くも宮中

と大宮御所より御下命を拜し、構想を練つてゐたが、元旦より筆を執り、鯉を描いた絹本四尺巾横物二作を謹作し、三月十日夫々御納め申上げた。宮中御用命畫は「松鯉圖(勝利)」と題し、眞鯉四尾が松の下を悠々遊べしてゐる圖で、大宮御所御用命畫は「鯉巴」と題し、紅葉した楓の下に巴となつて泳ぐ緋鯉三尾を描き、共に戦捷に因んだものである。

#### 池上秀敏筆「清齋直奏圖」

池上秀敏は三洋商會森

傳次郎の依頼で、憲兵學校の講堂に掲揚する扁額を揮毫、四月完成した。圖題は「清齋直奏圖」で、横六尺四尺、絹本極彩色、故實と想像によりその人物表現に努めたものである。

#### 猪飼嘯谷筆「五箇條御誓文奉戴之圖」

昭和十二年

六月皇太后陛下關西行啓の御初京都市崇仁隣保館に御使御差遣を賜はり御下賜金を拜受したが、京都市ではこの光榮を記念するため猪飼嘯谷に依頼して「五箇條御誓文奉戴之圖」を作製し、四月同館に掲揚した。繪の大きさは横四尺二寸、縦三尺二寸、絹本彩色で、圖題は「明治元年三月十四日紫宸殿上に神壇を設け天神地祇を祭り給ふ、當日午刻。出御。總裁三條實美御祭文を讀み畢りて天皇神前に進み玉串を捧げ五事を誓約あらせらる……」、圖中祭文を讀むは三條實美。

#### 堂本印象筆「高野山根本大塔壁畫」

金剛峯寺の依

展覽會以外の作品

鳴による堂本印象筆の根本大塔の壁畫は、眞言八祖像は既に昭和十三年三月に完成してゐるが、八祖像の下部の裝飾畫が九月に全部出来上つた。縦三尺五寸、横十三尺の横長のもの八面で、檜板に岩繪具を用ひ、鳳凰、孔雀、立姿に雉子、柘榴に鸚鵡、睡蓮に鸞、葡萄に鳩、蓮に鶯、椿に鶉等を描いた。古風に泥まらず現代の裝飾畫を試みてゐる點は興味が深い。

#### 小早川秋聲筆「寺院壁畫」

小早川秋聲は東本願寺

横濱別院の壁畫を執筆した。「薙髮」「入室」「配流」「聖德太子」「夢想」「立教」「晚年」の大作で、中央の聖德太子は竪八尺七寸、横七尺、その他は竪八尺五寸に横五尺五寸、麻紙に描いた極彩色の作で、二年近くを費して十月完成した。

#### 杉本哲郎筆「壁畫了シアの女」

杉本哲郎は印度よ

り歸朝早々秋から昭和十四年の新春にかけて京都丸物の依頼による壁畫「アジアの女」を製作した。横三十尺、高八尺五寸、ビルの女のスケッチに取材したもので、漆喰と砥粉混用の土壁に黄土及胡粉混和の上塗工作をし、メデュームは膠、鶏卵、牛乳、布海苔を用ひてゐる。

#### 福田翠光筆「朝日ビル壁畫」

福田翠光は東京朝日

ビルに壁畫三部作「振武威八紘」を描いた。戦争と平和を表象し、第一部は横二十一尺、縦五尺五寸、雲海を飛翔する隼に我が陸海軍の荒鷲を寓意し、第二部第三部は共に十三尺に七尺で第二部は巢籠りと飛び立つ蒼鷹で出征と銃後の護りを、三部は大和櫻、蘭、牡丹に日滿支を象徴し平和のシンボルとして母子の白孔雀を配した。杉板の極彩色畫である。

#### 國枝金三筆「明治天皇記念館油繪」

國枝金三は大

阪市櫻宮橋畔泉布觀の明治天皇記念館に掲げる油繪を謹作し、五月納入した。大きさは縦八尺一寸五分、横七尺一寸で、明治二十年二月十五日大阪城外練兵場における觀兵式を御親閱後行在所偕行社に入御あらせられる御鹵簿の光景を謹寫したものである。同記念館には既に赤松麟作、新井完、林重義、鍋井克之等の記念油繪が納められてゐる。

#### 水谷清筆「岐阜丸物壁畫」

水谷清は十二月、岐阜

市丸物百貨店の食堂及喫茶室の油繪壁畫を完成した。食堂壁畫は「スペインの野祭」と題し、大きさは六尺に十五尺、喫茶室のは欄間繪で三尺に十八尺の「野邊」及び「海邊」の二點である。何れも明快暢達な調子で裝飾的效果をねらつて纏められ、壁畫として極めて成功してをり、注目に値する。

#### 中山正實筆「神戸商大講堂壁畫」

中山正實は母校

神戸商業大學の講堂に壁畫三部作「光明」「富士」「雄圖」を執筆し、約三年を要して十月完成した。正面の「富士」は細長で横巾約八間、直接壁に描き、左右の二作は各々高さ三間、横二間の大幅で特殊の油繪具を以て麻布に描き、壁に固着させてある。尙武的な浪漫を題材とするもので、作者はフランスに於てフレスコ畫家グラノフに就てシル壁畫及びフレスコ壁畫の技法を學んだ人である。

### 彫 刻

#### 長谷川義起作「双葉山表彰額」

大日本相撲協會は

かねて角界未曾有の三場所全勝を果した双葉山に表彰額

を贈ることに決し、長谷川義起がその製作に當り一月完成した。額は横二尺九寸、縦一尺二寸五分のブロンズで中央の表彰文をさき、左右に龍虎を浮彫したものである。

### 建昌、北村、朝倉作「憲政功勞者銅像」

我國憲法發布五十周年を記念し、憲制五十周年記念會に於ては憲政の功勞者伊藤博文公、大隈重信侯、板垣退助伯三巨人の銅像を新議事堂二階中央廣間に設立することとなり、同會の委嘱により建昌大夢は伊藤公を、北村西望は板垣伯を、朝倉文夫は大隈侯を夫々製作した。

除幕式は二月十一日記念祝賀式の當日議事堂に於て盛大に行はれた。いづれも無帽フロク姿の立像で、大隈公は鳩杖を、板垣伯はステッキを持ち、高さは略九尺程度である。

### 清水多嘉示作「滿洲國留日學生會館狛犬」

清水多嘉示は五月二日新築落成式を舉げた小石川の滿洲國留日學生會館の玄關兩側の狛犬を作製した。滿洲國總理張惠景の寄贈に係り、高さ五尺五寸、稻田御影を使用し、作者は仕上げと同大の原型を作製の上石工に彫らしたものである。

### 護國觀世音銅像

長野縣下高井郡平穩村湯田中温泉の丘陵に身長百八尺の觀世音銅像が完成し、五月三日開眼供養式を舉げた。一條實孝公を總裁とする大佛期成同盟會の建立にかゝり、十一年の歲月と約三十萬圓の工費を要したもので、製作には名古屋出身の山田三光が従つた。

### 後藤良作「伏見稻荷神馬」

後藤良は大阪岡崎佐助奉納の京都伏見稻荷神社神馬作製を依頼され、昭和八年以來製作中であつたが、本年六月完成、同十一日及び十二日自宅で内覧に供した上京都に發送した。木彫胡粉極彩色、總高七尺七寸、背高五尺二寸五分の白馬で、和鞍をおき鞍飾を附し、寫實に捉はれず日本馬の特色を示し

て堂々たる作である。

### 横江嘉純謹作「朝香宮殿下御立像」

長くも江南戦線に御活躍遊ばされた朝香中將宮殿下の南京御入城の御英姿を永久に記念する爲、殿下の幕僚たりし飯沼守少將以下一同がブロンズ製の御像を横江嘉純に依頼して謹製、七月九日献上した。軍装を召された御立像で御高さは三尺である。尙殿下には謹作中三回に互りモデルに御立ち遊ばされた。

### 横江嘉純謹作「閑院宮殿下御騎馬像」

横江嘉純は本溪湖會代表の服部眞彦中將の依頼により日露戰役當時の閑院宮殿下の御騎馬像を謹作した。御高さ一尺五寸、日露役の軍装を召され、ブロンズ製である。

### 朝倉文夫作「小村侯像」

滿鐵總裁松岡洋右發企による滿洲建設三偉人顯彰會は我が外交の恩人小村壽太郎侯爵の銅像を大連小村公園に建設することとなり、依頼により朝倉文夫が製作に従つた。高さ一丈二尺、椅子に凭る坐像で、十月六日除幕式を舉行した。これにより、新京の兒玉大將像(北村西望作)、奉天の大山元帥像(本山白雲作)と共に三偉人の銅像が揃つた譯である。

### 北村西望作「兒玉大將馬上像」

滿洲建設三偉人顯彰會の依頼で北村西望は故兒玉源太郎大將の青銅馬上像を製作、十一月三日新京の兒玉公園に於て除幕式が舉行された。高さ一丈六尺の巨像である。

### 加藤顯清作「加藤民吉像」

瀬戸市商工組合の依頼で、加藤顯清は瀬戸の陶祖加藤民吉翁の銅像を作製、除幕式が十一月三日同市に於て舉行された。翁の坐して繪付する姿を彫刻し、高さは八尺である。

### 北村西望作「滿鐵教育塔」

昨年十二月滿洲國に治外法権が撤廢され、滿鐵經營の各種學校が滿洲國に移管されたので、日本側經營の小學校、中等學校五十餘校に奉職する教職員は過去三十餘年間の滿鐵教育精神を象徵する教育塔を建立することとなり、北村西望に依頼した。

像は高さ六尺で日滿鮮女學生が合唱する銅製群像である。十一月六日奉天春日公園に建設、除幕式を行つた。

### 松田尚之作「狩野直喜博士壽像」

松田尚之は狩野直喜博士の壽像を東方文化研究所の依頼により製作した。ブロンズの胸像で大きさは等身の二割大、十一月十日京都北白河の同所で除幕式を行つた。

### 中谷宏運作「品川聖蹟記念公園浮彫記念碑」

西郷從德侯を會長とする品川聖蹟保存會によつて品川區北品川一丁目の明治天皇行在所跡に記念公園が設けられ、その浮彫記念碑を中谷宏運が製作した。浮彫は横三尺九寸餘、縦一尺四寸餘、青銅で、三代廣重筆の明治天皇御東遷の圖を刻んだものである。十一月十五日除幕式を舉行した。

### 中谷宏運作「横川記念公園浮彫記念碑」

日露役の勇士故横川省三を記念する公園が麻布區筆筒町の横川邸跡に開設されるに當り、東京市は中谷宏運に依頼して浮彫記念碑を建設し、十一月二十一日除幕式を行つた。浮彫は横三尺九寸六分、縦一尺九寸八分の青銅で、横川省三、沖積介の風貌が刻まれてある。

### 朝倉文夫作「齋藤子夫妻像」

朝倉文夫は齋藤實子爵記念事業會の依頼により故齋藤實子爵の胸像並びに同夫人の等寸坐像を製作した。ブロンズで岩手縣水澤町齋藤子爵邸内に設立され、十一月二十五日除幕式を行つた。

### 水谷鐵也作「塙保己一銅像」

水谷鐵也の製作による塙保己一の銅像が澁谷區水川町の社團法人溫故學會の庭前に設立され、十一月二十三日除幕式を行つた。高さは三尺一寸五分、檢校の正服を着した坐像である。

### 松田尚之作「釋迦大佛像」

松田尚之は根津嘉一郎の依頼により埼玉縣朝霞に建立の釋迦大佛像の製作に従つてゐる。佛像の總高は五十一尺、佛身は坐像にて四十一尺、蓮瓣十尺、頭部十三尺二寸、螺髮の數一千、耳の長さ七尺六寸、肩巾十二尺、原型の製作は昭和十年八月

より同十二年十二月迄を要して完了し、鑄造は連鑄より着手して十二年二月運鑄を完了、佛身の鑄造は十三年二月より着手、同年九月に至り銅使用制限のため一先づ中止となり、全鑄造の五分の三程を完成してをり、認可を得れば直に續行する豫定である。

### 挿畫

挿繪専門畫家は固より、一般畫家で新聞其他に挿繪を執筆する者も少くないが、それ等の活動の概要を記録する爲、本年度主要新聞所載小説挿繪の一覽を左に掲げる。(新聞名五十音順)

#### 大阪朝日新聞、東京朝日新聞

炎の詩(片岡鐵兵) 朝刊 寺内萬治郎 一三・四・八

暖流(岸田國士) 同 岩田孝太郎 一三・四・九

家に子供あ(坪田讓治) 同 伊藤 廉 一三・五・〇

波濤(林芙美子) 同 小磯 良平 一三・五・一

宮本武藏(吉川英治) 夕刊 石井 鶴三 一三・五・二

花と兵隊(火野葦平) 同 中村 研一 一三・五・三

#### 大阪毎日新聞、東京日日新聞

半處女(小島政二郎) 朝刊 小林 秀恆 一三・五・四

家庭日記(吉屋信子) 同 横田 弘 一三・五・五

沙羅乙女(獅子文六) 同 小林 秀恆 一三・五・六

雨降り峠(村松梢風) 夕刊 志村 立美 一三・五・七

海と兵隊(火野葦平) 同 林唯 一 一三・五・八

喧嘩鳶(那枝完治) 同 小村 雪岱 一三・五・九

#### 河北新報

愛情部隊(富澤有爲男) 朝刊 水谷 清 一三・六・〇

新生(丹羽文雄) 同 野口彌太郎 一三・六・一

心の勝利(徳田秋聲) 同 吉田貫三郎 一三・六・二

陽炎記(片岡鐵兵) 夕刊 山本 鼎 一三・六・三

次郎吉紙鳶(土師清二) 同 岩田孝太郎 一三・六・四

日本振天記(山中峯太郎) 夕刊 鈴木 御水 一三・六・五

聖き血の(山中峯太郎) 同 伊勢 良夫 一三・六・六

京城日報 妻(小島政二郎) 朝刊 宮田 重雄 一三・六・七

見果てぬ(川口松太郎) 同 志村 立美 一三・六・八

青春(竹田敏彦) 同 伊勢 良夫 一三・六・九

麗人莊(竹田敏彦) 同 木 保彌 一三・七・〇

蒲生三勇士(龍齋貞山) 夕刊 岩田孝太郎 一三・七・一

國定忠次(長谷川伸) 同 宮永謙太郎 一三・七・二

紅繪曼荼羅(海音寺潮) 同 今村 恆美 一三・七・三

快男子(大島伯鶴) 同 中 一彌 一三・七・四

開花三世相(村松梢風) 同 若槻 六郎 一三・七・五

柳生旅日記(小金井廣洲) 同 柳生 六郎 一三・七・六

國民新聞 貿易風(富澤有爲男) 朝刊 能勢龜太郎 一三・七・七

華は日に(山中峯太郎) 同 伊勢 良夫 一三・七・八

咲く(北村透馬) 同 高木 清 一三・七・九

花ひらく(北村透馬) 同 小川 倩霞 一三・八・〇

二人草三郎(小堀雄) 夕刊 河野 通勢 一三・八・一

成田不動尊(國枝史郎) 同 野口 昂明 一三・八・二

水戸妖婦傳(仲木貞一) 同 木下 大雅 一三・八・三

晝夜用心譜(三村伸太郎) 同 山本 英妻 一三・八・四

大岡さばき(悟道軒圓玉) 同 桂木 奎輔 一三・八・五

浪人血笑記(沖通二) 同 武田 瑞史 一三・八・六

水戸黃門記(琴澤松男) 同 武田 瑞史 一三・八・七

新愛知 霧の行路(諏訪宏司) 朝刊 伊勢 良夫 一三・八・八

街の物語(沖通二) 同 三船 成美 一三・八・九

愛情部隊(富澤有爲男) 同 水谷 清 一三・九・〇

新生(丹羽文雄) 同 野口彌太郎 一三・九・一

陽炎記(片岡鐵兵) 夕刊 山本 鼎 一三・九・二

治郎吉紙鳶(土師清二) 同 岩田孝太郎 一三・九・三

坂本龍馬(濱本浩) 同 志村 立美 一三・九・四

平手造酒(並樹一平) 夕刊 桂木 奎輔 一三・九・五

鼻唄用心棒(並樹一平) 同 桂木 奎輔 一三・九・六

水戸黃門(中川雨之助) 同 武田 瑞史 一三・九・七

中外商業新報 天國地獄(村山知義) 朝刊 伊東 顯 一三・九・八

幸福の鏡(岸澤光治郎) 同 小林 秀恆 一三・九・九

明智光秀(露尾雨工) 夕刊 名取 泰仙 一四・〇・〇

花の仇夢(武田麟太郎) 同 神保 朋世 一四・〇・一

福岡日日新聞 愛情部隊(富澤有爲男) 朝刊 水谷 清 一四・〇・二

新生(丹羽文雄) 同 野口彌太郎 一四・〇・三

九州の西北(細田源吉) 同 山喜多二郎太 一四・〇・四

陽炎記(片岡鐵兵) 夕刊 山本 日折 一四・〇・五

次郎吉紙鳶(土師清二) 同 岩田孝太郎 一四・〇・六

坂本龍馬(濱本浩) 同 志村 立美 一四・〇・七

報知新聞 ロマンス(宇野千代) 朝刊 宮本 三郎 一四・〇・八

制服の街(竹田敏彦) 同 富永謙太郎 一四・〇・九

忠臣藏(矢田捕雲) 同 小村 雪岱 一四・一・〇

彦左一代(白井喬二) 夕刊 小林 秀恆 一四・一・一

續八州鬼(子母澤寛) 同 志村 立美 一四・一・二

都新聞 子供の四季(坪田讓治) 朝刊 小穴 隆一 一四・一・三

街(阿部知二) 同 脇田 和 一四・一・四

現代の英雄(間宮茂輔) 同 野口彌太郎 一四・一・五

愛情の蔭(岸澤光治郎) 同 田口 省吾 一四・一・六

花の座(中野實) 同 小林 秀恆 一四・一・七

地階の處女(廣津和郎) 同 矢島 堅土 一四・一・八

勤王浪人笛(戸川真雄) 夕刊 矢野 橋村 一四・一・九

石田三成(尾崎士郎) 同 中川 一政 一四・二・〇

兩國棍之助(鈴木彦次郎) 同 小村 雪岱 一四・二・一

讀賣新聞

人妻眞珠（戸川貞雄） 朝刊 岩田孝太郎 一三・五・〇  
虹の祕密（片岡鐵兵） 同 宮本 三郎 一三・五・三  
大陸の花嫁（林房雄） 同 志村 立美 一三・九・〇  
悲戀の爲（藤森成吉） 夕刊 鴨下 晃湖 一三・六・一  
上杉謙信（白井喬二） 同 齋藤五百枝 一三・五・七  
新編錢（角田喜久雄） 同 志村 立美 一三・五・二  
新編丹下（川口松太郎） 同 岩田孝太郎 一三・七・三

## 建築

本年度竣工建築物の詳細なる表は建築學會編建築年鑑に載せられてゐる。さうした表をこゝに載せる事は重複するのみならず、本年鑑の使命でもなく、建築年鑑だけの完璧も期し難いので、こゝには美術年鑑としての立場から、注目すべしと思はれる建築のみを、調査し得た範圍内で、参考の爲に記した。採録すべくして洩れたものもあるべく、本年鑑使用者に單に参考に供するだけのものである。順序は竣工の月に依る。

### 昭和十二年度補遺 十二月

大庄村役場 兵庫縣武庫郡大庄村、村野藤吾設計、岡本工務店施工、鐵筋コンクリート造、地階、塔屋付三階建、建築面積一四九・五坪、總延面積四三五・二坪

### 一月

東京電氣工場 川口市領家町、内藤多伸設計、大林組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造三階、總延面積六、三二三平方メートル

### 二月

文祥堂 京橋區銀座、竹中工務店設計施工、鐵筋コンクリート造、地下一階地上三階、總延面積一、一五七坪  
帝國ミシン工場 東京府下小金井、松田軍平設計、建

築施工研究所施工、鐵筋コンクリート造二階、總延面積二、〇〇二平方メートル

川崎市廳舎 川崎市砂子町、川崎市建築課設計、直喜鑄鋼鐵工所施工、鐵骨鐵筋コンクリート造四階、總延面積六、九九四平方メートル

造幣局廳舎 大阪市北區新川崎、大藏省營繕管財局設計、大倉土木施工、鐵骨鐵筋コンクリート造四階、總延面積四、三六七平方メートル

### 三月

富國徵兵保險 仙臺市國分町、松尾光博設計、清水組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造六階、總延面積二、一二八平方メートル

日本橋俱樂部 日本橋區濱町、久野事務所設計、鹿島組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造五階、總延面積四、八一四平方メートル

東京女子大學講堂・チャペル 杉並區井荻、杉山雅則設計、清水組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造、塔屋共三階、總延面積五〇四平方メートル

不二家ビル 横濱市伊勢佐木町、レーモンド事務所設計、戸田組施工、鐵筋コンクリート造七階、總延面積二、六五六平方メートル

愛知縣廳 名古屋市中區外堀町、愛知縣設計、戸田組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造七階、總延面積二八、二六四平方メートル

李王家美術館 京城市貞洞、中村與資平設計、多田工務店施工、鐵筋コンクリート煉瓦張壁造三階、總延面積三、七三三平方メートル

名古屋逓信局廳舎 名古屋市中區七間町、逓信省經理局營繕課設計、大倉土木株式會社施工、鐵筋コンクリート造一部鐵骨使用、本館地上五階一部六階、總延面積、附屬舎、建築面積一、二二〇坪、總延面積五、五〇〇坪

### 四月

東武鐵道本社 本所區小梅町、清水組設計施工、鐵筋コンクリート造、地下一階地上三階、總延面積五、五五五平方メートル

三菱會館 長崎市出島、大林組設計施工、鐵骨鐵筋コンクリート造三階、總延面積一、一八八平方メートル

朝鮮ビル 京城市黃金町、高橋貞太郎設計、間組施工、鐵筋コンクリート煉瓦張壁造、地下一階地上七階、總延面積一八、三一七平方メートル

朝鮮ホテル及事務所 京城市黃金町、高橋貞太郎設計、間組施工、鐵筋コンクリート造八階、總延面積一八、三八九平方メートル

### 五月

三井物産支店 京城市黃金町、横河工務所設計、多田工務店施工、鐵筋コンクリート造五階、總延面積四、〇一平方メートル

聖母女學院講堂・雨天體操場 大阪府香里、レーモンド建築事務所高木健次郎設計、鐵骨鐵筋コンクリート造二階、一階雨天體操場、二階講堂、收容人員九〇〇名

### 六月

登別グランド・ホテル 北海道札幌別郡登別、木田組設計施工、鐵筋コンクリート造一部木造、地下一階地上三階、總延面積二、〇八二坪

第一ホテル 芝區新橋、清水組設計施工、鐵骨鐵筋コンクリート造地下一階地上八階、總延面積一九、四九五平方メートル

長柄葬儀所 大阪市東淀川區長柄、大阪市營繕課設計、新順一施工、鐵筋コンクリート造一部木造二階、總延面積二、九三三平方メートル

七月

**日魯漁業事務所** 函館市真砂町、岡師嘉彦設計、木組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造地下一階地上四階、總面積三、七九六平方分米

**凸版印刷株式會社板橋工場** 板橋區志村、同社建築設計部設計、施工直督、鐵骨鐵筋コンクリート造三階、總面積六、八〇三坪

**東京聯合江東橋營業所** 本所區江東橋、內藤事務所設計、間組施工、鐵筋コンクリート造二階、建築面積約五、〇一六・七六五平方分米

**日本銀行本館(増築)** 日本橋區本石町、同行臨時建築部設計、清水組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造、地下四階地上六階、總面積一〇、四七六平方分米

**根岸小學校(改築)** 下谷區根岸、東京市設計、戸田組施工、鐵筋コンクリート造三階、總面積三、八四〇平方分米

**強羅ホテル** 神奈川縣箱根強羅、土浦事務所設計、大倉土木施工、鐵筋コンクリート造一部木造五階、總面積二、五〇九坪

八月

**京都帝大病院外科病室** 京都市左京區聖護院、同大學醫務課設計、清水組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造四階、總面積一〇、五九一平方分米

九月

**京都帝大醫院病舎及講堂** 京都市左京區聖護院同大學醫院內、同大學醫務課設計、清水組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造五階、總面積一〇、四六八平方分米

**丸物百貨店** 京都市七條島九下、渡邊節設計、清水組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造、地下一階地上六階、總面積一九、一九二平方分米

**京都競馬場** 京都市伏見區葎島、安井武雄設計、大林組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造五階、總面積一五、九九一平方分米

**日本電力黒部川第二號(鑛釣)發電所** 富山縣下新川郡舟見町外二舟見外六黒部奥山國有林貓又左岸、日本電力株式會社及山口蚊象設計、發電力、最大七二、〇〇〇キロワット、常時二〇、三〇〇キロワット、鐵筋コンクリート造、地下一階地上四階、建築面積一、五四〇平方分米、總面積四、九七〇平方分米

十月

**第一生命保險相互會社** 麴町區有樂町、渡邊仁、松本與作設計、清水組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造、地下四階地上八階、總面積四六、五五一平方分米

**公衆衛生院** 芝區白金三光町、内田祥三設計、大倉土木施工、鐵骨鐵筋コンクリート造、塔屋共六階、總面積四、五六四平方分米

**共同信託會社** 大阪市東區今橋、長谷部竹腰事務所設計、竹中工務店施工、鐵骨鐵筋コンクリート造、地下一階地上三階、總面積一、九八五坪

**日本生命保險株式會社(増築)** 大阪市東區北濱四、長谷部竹腰事務所設計、大林組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造、地下三階地上七階、總面積三、八五五坪

**グリーンコート・スタヂオ・アパート** 淀橋區下落合二ノ七二二、鷺家誠一設計、坂本省吾工務店施工、地階鐵筋コンクリート造、一、二階木造モルタルレンシン仕上、建築面積一二〇坪、總面積二六九坪

十一月

**江別火力發電所** 北海道江別町對雁、内藤多仲設計、木田組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造、總面積三、四四

**東日會館** 麴町區有樂町、大倉土木設計施工、鐵骨鐵筋コンクリート造、地下二階地上八階、總面積三、五一四坪

十二月

**東京放送會館** 麴町區內幸町、山下事務所設計、竹中工務店施工、鐵骨鐵筋コンクリート造、地下一階地上六階、總面積一六、七二四平方分米

**中央氣象臺大島測候所** 東京府伊豆大島、堀口捨已設計、小林組施工、鐵筋コンクリート造、廳舍及觀測塔總面積五九八平方分米

**今渡發電所** 岐阜縣可兒郡今渡、佐藤四郎設計、間組施工、鐵筋コンクリート造、地下二階地上二階、總面積二、〇一〇平方分米

**大鐵百貨店及阿部野驛** 大阪市住吉區阿部野、久野事務所設計、大林組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造、地下二階地上五階、總面積二五、〇六三平方分米

**大阪災害科學研究所** 堀口捨已設計、木村組施工、鐵筋コンクリート造、二階塔屋付、建築面積二九九・七五平方分米、總面積五七七・三五平方分米



## 美術界彙報

一月

## 美術調査會報道

文部省では美術行政一般に關する根本的方策考究の爲美術調査會設置の意向なる旨昨夏發表する所があつたが、近く成案を得て實現することとなつたとの報道が一月五日諸新聞紙上に傳へられた。

## 印度奥地に日本風宮殿建設

印度バ

テイアラ王國のマハラジャが日本風の庭園及び宮殿造營の希望を有し、適當な技師派遣につき昨春カルカッタ駐在米澤總領事に幹旋を依頼したので、爾來外務省文化事業部と國際文化振興會とでその實現方を考究中であつたが、人選の結果建築家谷一東と造園家西川浩の兩名を委嘱同會より派遣することとなり、兩名は一月十二日出發した。

## 日本萬國博覽會準備

昭和十五年に

開催豫定の紀元二千六百年記念日本萬國博覽會準備は着々進捗し、一月二十五日同博覽會規則を制定發表、同時に國務大臣、内閣參議、樞密顧問官、樞、貴、衆三院正副議長等五十五名を名譽顧問に推舉した。又同博覽會の主標として建設し永久に傳へんとする華國記念館は、舊冬募集した一等當選作の設計に多少の變更を加へることとなり、その敷地は月島理立四號地正面に内定した。

二月

## 日本畫會解散

明治三十年創立以來

四十年間に互つて存続し、毎春展覽會を開催して來た日本畫會は、時代の推移に伴ふ四圍の都合上解散することとなり、二月一日會員總會を開いて之を決定、諸方面に挨拶狀を發送した。

## 絕對象派協會結成

前衛派作家等に

よつて組織されてゐた黒色展はこの程解散されたが、その舊同人その他五名は絕對象派協會を結成し、二月六日發會式をあげた。

## 憲法發布五十年祝賀式記念畫

二月

十一日帝國議會議事堂で憲法發布五十年祝賀式が盛大に舉行され、秩父御名代宮殿下の勅語御捧讀以下の盛儀が行はれたが、貴族院ではこの歴史的光景を油繪にして永く傳へることとなり、委嘱を受けた伊原三郎は當日同式場を拜觀、油繪によるスケッチを行つた。

## 新美術人協會結成

昭和九年以來新

日本畫樹立を目指して研究を重ね來つた新日本畫研究會員は、その目的達成の爲新美術人協會を組織し五月第一回公募展を開くこととなつた旨二月十一日發表した。

## 岡田三郎助に壽像を贈呈

昨年文化

勳章拜受の光榮を記念し、知人、門下等

五百餘名が岡田三郎助に壽像を贈ることとなり二月十五日東京府美術館でその贈呈式をあげた。像は和服姿の坐像で吉田久繼の作になる。

## 京都陶磁器輸出振興會設立

京都陶

磁器の積極的な海外新市場の開拓及輸出増進を圖る爲京都陶磁器工業組合では、協議の結果加盟業者を以て同組合輸出部に京都輸出陶磁器振興會を組織することとなり、二月十五日その發會式を兼ねて府、市、關係者その他參集懇談協議する所があつた。

## 玖窓會結成

東京美術學校日本畫科

昭和九年度卒業の有志十名は玖窓會を結成、二月十七日より五日間銀座資生堂で第一回展を開いた。

## 映畫美術家協會結成

映畫界の各方

面に働く美術家達によつて映畫美術家協會が結成され、二月二十三日第一回例會を兼ねた發會式があげられた。

## 昭和洋畫獎勵賞授賞

昭和十二年度

の成績による同賞本年度受賞者は、委員會に於て銓衡中であつたが、二月十九日島野重之、中村善策の二名と決定した。

## 國際手工業博參加

ドイツ政府主催

の第一回國際手工業博覽會は參加國三十餘ヶ國、五月二十八日から六月二十六日迄ベルリン、カイゼルダムで開催されることとなり、豫て勸誘をうけてゐたわが國では、外務商工兩省及び國際文化振興會の間で協議の結果參加する事に決定、二月二十四日正式回答を發した。この企

三月

## ZIGZAG解散

大阪に於ける美

術團體ZIGZAGは、「昨秋の第四回大阪新美術家同盟展參加を契機として再組織の必要を來し、茲により新しき進展を目指し」て三月解散した。

## 女子人形學院創立

人形製作の流行

につれて講習會など多く行はれてゐるが本格的に人形藝術の教養を與へようといふ女子人形學院が麹町區九段四ノ十五ノ十六に設立され、三月上旬から授業を開始することになった。

## ヴェネチアに日本式庭園

ヴェネチ

ア市では日伊親善の表示として純日本式庭園を同市立公園隣接地に作る計畫を立て堀田大使を通じて外務省に幹旋を申込んできたので、同省では國際文化振興會と協力し、一流の造園家を委嘱して設計建設の實現に努力することとなつた。

## 日本實用工藝品展

三月六日から一

週間ライブチツヒに於て開催された一九三八年春季見本市を期し、國際文化振興會及びフレイライン・フユア・ドイツ・エス・クンストゲウエルベによつて日本固有の現代實用工藝品が特別出品された。出品は國際文化振興會が市場から選定購入した日用品で、目ざる、瀝團扇、茶道

具、のれん、すり鉢、茶碗、花造り道具  
蛇の目傘、盆、大工道具、鐵瓶、菓子鉢  
重箱、風呂敷、蒲團、筆、和紙、紙入れ  
煙管入れ、火鉢、屏風、用筆筒、亂れ箱  
針箱等約五百點であつた。

#### 日本工藝品シカゴ陳列會

昨秋開かれた商工省輸出工藝品展出品中から七八點を選択、日本輸出工藝聯合會の主催により、日本工藝品シカゴ陳列會を三月七日より同市に於て開いた。

#### 補助貨幣模範圖案懸賞募集

大藏省では新鑄補助貨幣圖案的懸賞募集を行ふこととなり、三月八日の官報を以てその規定を發表した。種類は十錢、五錢及び一錢で有孔のものと無孔のものとの二種とし、内容は日本精神を宣揚するものたるべきことを要求してゐる。三月三十一日締切、審査は大藏省が行ひ賞金は當選兩種各一點五百圓、選外佳作各五點百圓づつ、但し選外佳作の圖案の一部が貨幣模様の一部として採用せられたものに付ては三百圓までの範圍で増額することあるものとする。

#### ハンガリア畫家作品寄贈

ハンガリア一流の畫家ヤツク・エー・モシユは自作の「勇敢なるヤノシユ」十一枚綴りのオペラ畫を、文化使節として來朝の在ブダペスト日洪協會副會長メイゼイシユトワーン博士に托し、日洪協會々長鍋島直和子爵の斡旋で、三月十七日早大演劇博物館に寄贈した。同館では同二十四日から四月三日迄之を陳列公開した。

#### レオナルド・ダ・ヴィンチ賞設定

イタリア政府中亞極東協會では、日本に於けるイタリア文化研究の優れた業績を表彰する爲レオナルド・ダ・ヴィンチ賞を設定、三月三十日その規定が發表された。本年十二月末日を締切とし、賞金は六千

リレで、審査は日本の學者に依頼、日伊學會が中心となり、イタリア大使を委員長とする審査委員會が設けられる。

#### 石川縣工藝指導所落成

金澤市泉旭町に新築中であつた同指導所建物が竣工したので、三月三十一日盛大な落成式を舉行、四月一日記念講演會、郷土の美術工藝展覽會等を開いた。建物は木骨近代式で本館一八九坪、工場二五〇坪よりなる。

#### イタリア彫刻複製寄贈

三月二十三日來朝のイタリア使節團長バウルツチ侯は、ムツソリーニ首相より畏き過りへの献上品及び近衛首相への寄贈品を初め、同國外相、内相その他より我が廣田外相その他へ夫々寄贈品を齎したが、いづれも同國古來の彫刻名作品の複製で、その中バウルツチ侯より小橋東京市長に贈られた「ローマの牝狼」青銅像は日比谷公園に飾られることとなり、据付を了して三月三十一日除幕された。

#### 四月

#### 支那事變特別稅施行

新に制定された支那事變特別稅法によつて、四月一日から入場稅、物品稅等が施行されること

となつた。入場稅として博覽會、展覽會等は入場料の一割を課せられる。物品稅は書畫及骨董の入札等で總額一萬圓を超える場合、その他貴金屬製品、喫煙具、室内裝飾用品、家具等一定價格以上のものに課し、稅率は價格の一割五分乃至一割である。

#### 「エコール・ド・東京」解散

超現實主義の團體「エコール・ド・東京」は四月二日解散を聲明した。

#### 當麻寺天井畫一部完成

現代日本畫家九十五名から作品の寄進を求め、新客殿の天井を飾らうとする奈良縣當麻寺中之坊では、完成した五十枚の板繪によつて四月七日一室の天井だけの嵌め込みを完了した。

#### 日本畫院結成

東京に於ける日本畫の新聞體として伊東深水等二十餘名の作家により、四月十二日日本畫院が結成された。去る二月解散した日本畫會の舊同人中の主なる者が中心となつたもの、一派一黨に偏せざる公共的試作發表機關たらしめんとする趣旨で、明春第一回公募展を開く豫定である。

#### 補助貨幣圖案當選發表

大藏省が募集した貨幣圖案は、四月十三日審査委員會で九三三一點の應募作品中から十錢、五錢の有孔のもの及び一錢の無孔のものにつき夫々當選一點、選外佳作五點づつを決定發表した。

有孔のもの、當選 大阪市小數利一、選外佳作 同人、松尾忠次、高井界雄、中尾龍作

#### 北川有三

無孔のもの、當選 京都市稻垣耕四郎、選外佳作 丸山秀夫、荒川互弘、森勝三郎、村野嘉壽吉、山田甲子雄

#### 「飾畫」解散

前衛洋畫團體飾畫は四月十四日解散を發表した。

#### 濠洲政府へ油繪伊吹圖寄贈

世界大戰當時濠洲の軍用船團護衛の任に當つた軍艦伊吹の雄姿は、荒井陸男筆油繪として海軍館に保存されてゐるが、元シドニ

ー總領事徳川家正、大阪商船社長村田省藏兩名は、日濠親善の爲同じ主題の油繪を濠洲政府に贈ることとし、同作者に製作を依頼した。作者は一月三十一日渡濠し、同政府の厚意によつてあらゆる參考資料を調査、下圖製作等をなし四月十三日歸朝、縦七尺、横十尺の畫面を揮毫することとなつた。

#### 九州沖繩工藝振興協議

九州、沖繩各縣市工藝關係官職員協議會は、四月十三日から十五日迄沖繩縣工業指導所で開催、各縣提出の協議事項を審議した結果九州、沖繩工藝協會設立の件、國立工藝指導所を九州に設置促進の件等を可決した。

#### 伊達伯よりムツソリーニ首相へ贈物

バウルツチ侯を團長とするイタリア使節團の來朝を機として、伊達伯爵家では同家の家寶とする支倉六右衛門將來の油繪その他の遺物を、四月十五日イタリア大使館に陳列して使節團の閱覽に供したがその節、同家に傳はる伊達政宗使用の提

げ重をムツソリーニ首相に贈呈することとなり、當主興宗伯よりパウリツチ侯に傳達方を依頼した。

### 日本萬國博覽會場模型完成

紀元二千六百年記念日本萬國博覽會の東京會場は廣袤四十五萬坪の東京灣埋立地に總建坪六萬坪の建物を作る計畫で、その全體の模型が四月十九日完成された。

### 佐分賞授賞

佐分賞本年度受賞者は豫て委員の間で銓衡中であつたが、左記五名に決定。四月二十一日數寄屋橋東京ニューグランドに於て關係者參列の上披露した。今回の銓衡は特に戰線に活躍する出征畫家の中から選び、その勞を犒ふ意味が含まれてゐるものである。

賞圖一(白日會)、中村節也(獨立美術協會)、原精一(春陽會)、平通武雄(東光會)、山田正(國畫會)

### 日本萬國博覽會總裁奉戴式

日本萬國博覽會秩父總裁宮殿下奉戴式は、四月二十一日午後日比谷公會堂で盛大に舉行され殿下より優渥なる令旨を賜はつた。

### 銅使用制限規則改正

商工省では昨年十一月から百疋以上の建築物の屋根、庇、樋その他に銅の使用を禁止してゐたが、愈々銅不足を告げるに至つたので、五月一日から銅及び銅合金を用ひた物品は輸出品以外は總て地方長官の許可を得なければ製造出來ぬこととし、省令第十八號を以て銅使用制限規則を改正、四月二十三日の官報で公布した。

### オリンピック競技場駒澤に決定

オ

リンピック東京大會主競技場は明治神宮外苑に建設することに昨年決定されたがその後駒澤移行案が唱へられ關係方面で種々検討中の所、愈々その實現性が確められたので四月二十三日組織委員會に上程、遂に神宮外苑案を棄てて駒澤案に決定した。競技場の構築には東京市が當り競技終了後は東京市の所有とするものである。尙同競技場の設計も東京市建築課で完成された。總坪數十四萬坪、總工費は村を入れて九百五十萬圓。

### S.P.A.集團解散

洋畫團體S.P.A.集團は一先づ事業を終了したものととして解散することとなり、四月二十三日その旨を發表した。

### 銑鐵鑄物制限令

商工省では鐵鑄の民間消費を制限する爲昨年輸出入品臨時措置法に基き鐵鑄工作物製造許可規則を制定、特に建築につきある程度の制限をなしたが、更に民間における鐵鑄消費節約の徹底を圖ることとなり、四月二十五日省令を以て銑鐵鑄物の製造制限を發令した。商工大臣の指定する物品は特別の事情により地方長官の許可を受けた場合の外銑鐵を以て鑄造することを得ずとなすもので、五月十五日より施行される。同時に商工省告示を以て左の通り禁止の物品を指定した。

文鎮、鉛筆削、インク壺、ホチキス、貯金箱、火鉢、茶道用風呂釜、天水鉢、扇風機(工鎖業用ノモノヲ除ク)、鏡臺、煙草セット、灰皿、花器、水盤、燈籠、火消壺、玩具、鉢、柱掛、額縁、茶卓、菓子皿、置物、電氣ス

ンド、電燈支柱用筋木、門柱、扉、瓦、持送り、看板、風窓、窓枠分銅、椅子、金庫(手提金庫ヲ含ム)、簾子掛、掃除器、手摺、格子陳列臺、街頭照明柱、電柱、欄干、柵、交通標識、街路樹保護板、溝蓋、紙屑箱

### オリンピック・ボスター圖案

オリ  
ンピック東京大會宣傳用のボスター圖案は、昨年懸賞募集を行ひ當選作品も決つたが、組織委員會では更に和田三造に委嘱し新圖案が出来たので四月二十五日之を發表、大會の公式ボスターとして作製し海外へ宣傳することとなつた。又札幌の冬季大會の爲のボスター圖案は伊原宇三郎に委嘱、五月二十四日完成された。

### 藤島武二從軍

藤島武二は事變勃發以來戰線視察を希望してゐたが、第一回滿洲國美術展審査の爲四月二十五日新京に向つて出發、用向をすませて後上海南京方面スケッチの爲陸軍省から派遣されることになつた。

### 創紀美術協會結成

前進的洋畫青年作家等十九名によつて、創紀美術協會が四月二十五日結成された。「從來前衛繪畫の若さに見られたる形式の追隨及意識の先行を矯め我等が傳統の母體たる此の祖國の土に立ち飽く迄豊かなる肉體を備へたる新日本の洋畫を創造」したいといふのである。

### 大日本陸軍從軍畫家協會結成計畫

支那事變開始以來北支及び中支戰線の陸軍に從軍した畫家は數十名の多數に及ぶので、その中の有志が發起して四月二十

六日九段軍人會館に會合を開き協議した結果、大日本陸軍從軍畫家協會を結成することとなつた。團體として時局に適した事業を行はうといふのである。發起人として當日參集したのは向井潤吉、瀨野覺藏、古城江親、小林喜代吉、鶴田吾郎、寺本忠雄、等々力巳吉、長谷川泰子等で陸軍省新聞班の柴野少佐も加はつた。

### 陶磁による金屬代用の試み

銅鐵の使用制限規則が公布されて様々の波紋を描いてゐるが、日陶聯では金屬代用の陶磁器製品を懸賞募集したところ家庭用品六百五十八點、土木建築用品二百十八點、機械器具用品三百五十點、その他四百八十一點、總計千七百七點の應募があり、東京工業試験所熊澤技師が審査長となり慎重審査の結果四月二十八日入選者を發表した。二等三名、三等三名、選外佳作十五名。

### 紀淑雄胸像除幕

故日本美術學校長紀淑雄の胸像が同校々庭に建設され四月二十九日除幕式があげられた。

### 五月

### 日本文化中央聯盟ボスター圖案募集

同聯盟では時局に方り東洋平和の確立に邁進すべき我が國民の自覺と奮起に資する爲、本年二月ボスター圖案、歌詞、標語三種の懸賞募集を行つた。ボスターは四月六日締切、應募數一二三九點の中から五月一日左の通り當選を發表した。

優秀(賞金一千圓) 大阪市沖原薫

佳作（賞金各一百圓）多仲孝次、萩清、湯田泰次、富阪健、轟周平

### 大阪繪畫會結成

谷福太郎外五名の作家により五月、大阪繪畫會が結成された。進歩的である爲には先づ藝術作品の價值を廣汎な總體的聯關性に於て發見する所から出發せねばならぬ」と考へ「科學的創造の線に沿つて」努力するものである。

日米交換洋畫展計畫 本年一月サンフランシスコ美術協會から在米中の二科會員國吉康雄を介し、美術を通じて日米親善を圖る爲、相互交換の洋畫展を兩國同時に開催する提案があつたので、二科會ではこの程開かれた在野洋畫五團體懇話會に付議、満場一致の賛成を得、更に近く懇話會を開いて具體案を考究することとなつた。

滿洲國美術展開設 滿洲國では昨年訪日宣詔記念美術展覧會が開かれたが、新に官設美術展覧會を開設することとなり、民生部の主催として第一回滿洲國美術展覧會を五月二日から十日間、新京記念公會堂並に大經路國民學校に於て開催した。會長、副會長、顧問、審査員長、審査員、相談役、幹事長、幹事等を置き第一部東洋畫、第二部油畫水彩畫、第三部彫刻及美術工藝、第四部法書の四部とする。會長は民生部大臣孫其昌、審査員長は羅振玉で、審査の相談役として前田青邨及び藤島武二が招聘された。

第一回展の統計は左の通りである。

第一部 二五六 六八 四 一〇  
第二部 三四九 一六一 五 一三  
第三部 七一 五一 二 七  
第四部 一二九 七二 三 九  
合計 八〇五 三五二 一四 三九

### 南京入城圖作製

入城圖を描く爲陸軍省囑託として三月下旬發南京に赴き、多數の寫生を作つて五月三日歸國した。

### 國際庭園展覽會出品

四月十五日から七月十五日迄ジュネーヴで國際庭園都市計畫展覽會が開かれ、わが國では日本造園協會、國立公園協會、國際文化振興會等の諸團體が協力して出品資料を選定國際文化振興會の手によつて發送した。

出品は京都を初め全國の諸名園の寫眞、實測圖、鳥瞰圖等の外石燈籠名品の寫眞、國立公園の寫眞、及び名園紹介の映畫、幻燈板等である。五月七日審査發表があり、わが國の出品に對しては第一等賞の銀製カップが授與された。

### 上海戰線記念繪畫製作

上海軍報導部では部長木村大佐、金子少佐等の肝煎りで、支那事變記念畫を作製することとなり、衛生上等兵として服務中の長坂泰雄の斡旋により、同人を初め村研一、小磯良平、江藤純平、柏原覺太郎、向井潤吉、朝井閑右衛門、南正善、鈴木榮二郎（軍屬服務中）及び脇田和の十名を製作者に選定して事業に着手した。此等の畫家は軍の委嘱により五月上旬上海に至り、戰線を視察の上夫々部署を定めて

仕事に取りかゝつた。いづれも二百號の油繪とする筈である。

### 陸軍囑託畫家

前記上海軍囑託として從軍した作家等の外、川端龍子、鶴田吾郎は五月末北支より蒙疆へ、中澤弘光、伊原宇三郎は天津北京を経て山西方面に、栗原信は徐州方面に、又八月、九月には石川寅治、石井栢亭、永地秀太、和川香苗、早田三四郎が前後して北支方面に、いづれも陸軍囑託として從軍することになつた。

### 陶磁器關係官會議

商工省主催陶磁器關係技術官會議は五月十一日から四日間京都陶磁器試驗所に於て開かれ、商工省關係官初め全國の技術官等五十六名出席、輸入原料に對する合理的の使用、國產代用原料の研究その他の問題につき協議が行はれた。

### 木漆金工關係官會議

商工省主催第四回木、漆、金工關係技術官會議は、五月十六日より四日間大阪府工業會館に於て開催、商工省白井化學工業課長外十一名地方技術官九十四名出席し種々協議を行つた。特に時局に鑑み輸出振興、資源開發、代用品研究等の問題が考究された。

### ベルリン日本工藝展

日獨文化協會主催で日本工藝展覽會が五月二十一日からベルリン郊外シェーンハウゼン城で開かれた。

### 明蘭美術聯盟同人脫退

同聯盟では同人小林彦三郎を協調の精神に反するものとして除名、同人及び樋口英雄、谷良

治、佐々木順、楠奉白光、穂坂靜夫、山川菁々は五月二十四日脱退を聲明した。

### 慰問品はがき作製

戰地にある將兵に給與されてゐるはがきは從軍畫家等の手になる戰場風景ばかりであつたが、新に陸軍東京經理部では、軍事郵便用の是はがきとして横山大觀、川合玉堂、池上秀畝、飛田周山、和田三造、熊岡美彦の六名に作畫を委嘱、内地の風物を寫したものを作製し、五月二十六日原畫がすべて揃つたので多數印刷の上戰線に送ることとなつた。

### 木戸文相よりヒトラー總統へ贈物

日獨交驛の爲、日本側青少年團の一行は五月二十七日神戸發で派遣されることとなつたが、この機会に、木戸文相よりヒトラー總統に横山大觀筆旭日に富士を描いた絹本横物一幅を贈呈することとなり一行に託した。

### 國際手工業博覽會參加

ドイツ國政府、ドイツ・アルバイトフロント及ドイツ手工業全國團體主催の下に、手工業の經濟的社會道德的、藝術的能力乃至使命を世界に宣示し、又機械萬能主義と一切の規格、劃一主義に對抗する手工業的精神の強調を目的として、第一回國際手工業博覽會が五月二十八日から七月十日迄ベルリン・カイゼルダムに於て世界約二十六ヶ國の出品を蒐めて開催された。

我が國も之に参加、漆器、竹細工、金工品、日本刀、人形、七寶、染織品、和紙應用品、小木工品、弓等の固有工藝品



を國際文化振興會の手によつて蒐集選定の上出品し、又製作實演の爲竹細工の増田峰齋、弓矢の石津重貞を特派した。

**美術雜誌「丹青」發刊** 一水會では新に美術雜誌「丹青」を年四回刊行することとなり、五月下旬創刊號を出した。

## 六月

**麥僊遺作京都美術館寄贈** 過般東京と京都で土田麥僊遺作展が開催されたが之を機會に帝展第十四回出品作「平牀」とその習作百六十三點とが千代子夫人から大禮記念京都美術館に寄贈された。

**人形をドイツに寄贈** 帝大その他のドイツ語教師エルザ・エリザベト・マルクワルトがベルリン博物館の爲に日本の人形蒐集を希望したので、日獨文化協會では西澤笛畝、山田徳兵衛と協議、その幹旋で東京の人形作家等を勧誘、約五十點の作品を蒐め六月六日小石川後樂園内涵徳亭に陳列、同女史に贈つた。

**友田伍長立像** 昨秋江南戦線で戦死した友田恭助の立像は加藤顯清によつて作られ、日本彫刻家協會展に出陳されたが、作者から築地小劇場に寄贈され六月十日同所に於て關係者參列の下に同立像安置式が行はれた。

## ニューヨークに日本文化圖書館設置

國際文化振興會ではニューヨーク市ロツクフエラー・センターに日本文化圖書館を創設することとなり、同會理事長樺山愛輔伯は五月二十六日淺水川九で、同常

務理事黒田清伯は多數の資料を携へ、六月十日發日枝丸で渡米、建設を急ぐこととなつた。樺山伯を初代館長として、日本文化紹介に關する圖書出版物を備へて研究者の利用に供する外、研究費の補助情報の提供、映畫、寫眞の配付その他の事業を行ふ筈である。

**アジヤンター壁畫模寫** 京都の日本畫家杉本哲郎は昨秋渡印し、アジヤンター宮院の壁畫模寫を作製、又セイロンのシギリヤ壁畫の模寫をもなして六月十日歸朝、同模寫は恩賜京都博物館に納めることになつた。

**慰問繪畫** 池上秀畝社中の傳神洞同人八人は二十點の作品を六月十一日陸軍當局に寄附、これらの繪畫は戦地將兵慰問の爲官給便箋の表紙として多數を印刷發送されることとなつた。

**日伊文化會館建設計畫** イタリア政府では日伊親善と兩國文化の發展並にイタリア研究の爲の中心機關創設について計畫中であつたが、之に協力する爲原田積善會は十萬圓の建設費を寄附し、又三井高陽男は麹町イギリス大使館附近の土地約一千坪を寄附したので、近日日伊文化會館を建設することとなり、六月十四日アウリチ大使から發表された。

**歷程美術研究會結成** 馬場和夫、船田玉樹等九名の日本畫家によつて歷程美術研究會が結成された。「東洋の繪畫が一元なるを實證し、東洋繪畫藝術の特徴と美點を鼓吹し」又「世界文化交流の間に

身を處して我等の繪畫を世界材として提示せん爲に研究を起し、所信に従つて審美を究めんとするものである。」

**大輪畫院結成** さきに明朗美術聯盟を脱退した作家達は新團體大輪畫院を結成、六月十六日發會式をあげた。

**新國畫協會解散** 昨秋明朗美術聯盟を脱退した作家等により結成された新國畫協會は「各自の作家的使命を再認識し更に新しき藝術的飛躍を期する爲」六月十七日解散を聲明した。

**國際ペン聯合東京大會返上** 第十八回國際ペン聯合大會は、紀元二千六百年を期して昭和十五年東京で開催されることになつてゐたが、日本ペン俱樂部では協議の結果、時局に鑑みて返上することに決定し、六月二十日からブラーグで開催中の第十六回同大會にその旨を申送つた。

**ドイツ政府より胸像寄贈** 財團法人原田積善會がかねてより日獨文化親善の爲に盡した功績に對し、ドイツ政府では感謝並に顯彰の意味で同會設立者故原田二郎の胸像を寄贈することとなり、來朝中の彫刻家フロイデンベルグ博士に製作を依頼中であつたが、六月十五日完成したので同二十日丸の内東京會館で贈呈式を舉行した。

**金屬代用品懇談會** 商工省では物資動員計畫に基く使用制限物資の代用品に關し關係官廳、民間會社等の代表者を集めて懇談會を開くこととなり、その手初

めとして六月二十三日既に使用制限を行つてゐる鋼鐵の代用品懇談會を丸の内鐵道協會で開いた。

**日獨文化會館建設計畫** 日伊文化會館の計畫と相並んで、同様のドイツ文化宣揚と日獨親善を目的とする日獨文化會館の建設が計畫された。今春原田積善會よりドイツ政府に寄附した十萬圓を基として、日獨協會、日獨文化協會その他關係團體が協議を進めてゐるが、三井高陽男より日伊文化會館敷地に隣接する八百坪の土地寄贈があり、愈々計畫が具體化した。館内に圖書館、講堂、研究室、宿泊室その他を設備する豫定である。

**陸軍從軍畫家協會設立** 陸軍從軍畫家の團結が計畫されてゐるが、六月二十七日飛行館で最初の總會を開いて役員の決定等を行ひ、大日本陸軍從軍畫家協會が設立された。

**銑鐵制限強化** 商工省では四月銑鐵鑄物製造制限を發令したが、之に基き六月二十九日禁止品目の範圍を更に擴大左の通り指定して、七月十五日より施行することとなつた。

本立(ブックエンド等)、シャンデリヤ、机、卓子、寢臺、シャッター用器、郵便受箱ラヂエーター、ガスストーブ、電氣ストーブ、鐵瓶、五徳、卓上呼鈴、名刺刺及傳票刺、紡織・染色又ハ整理用機械器具(針布製造用機械器具ヲ除ク)、窯業用機械器具(硝子又ハ耐火煉瓦製造用機械器具ヲ除ク)、印刷又ハ製本用機械器具、環容用機械器具(バリカンヲ除ク)左ニ掲グル物品又ハ其ノ部分品ヲ製造スル専用機械器具



鐵釘(鑄釘ヲ除ク)、金網、菓子、清涼又ハ致酔飲料、香水、石鹼、蓄音機用レコード、セルロイド及同製品、紙及同製品(ペライタペーパー等特殊ノ紙ヲ除ク)、刷毛及扇子、綿又ハ麻製ノ網、繩及網、帽子、燐寸、金屬箔、萬年筆、鉛筆クレヨン

## 七月

### 商工省輸出工藝展規程改正

商工省では「商工省輸出工藝展覧會」を「貿易局輸出工藝展覧會」に改め、その他規程に若干の改正を行ひ七月二日附官報を以て公布した。

### 南京攻略戰蹟圖獻上

京都の鳥瞰圖

畫家吉田初三郎は海軍從軍畫家として五月下旬渡支、凡そ一ヶ月に亘り戰蹟を寫生して歸洛し、二荒芳徳伯より依頼された獻上畫として南京攻略戰蹟圖、高さ六尺幅四間の大作を謄作中の所、聖戰記念日の七月七日完成した。

### 銅製品の製造制限令

商工省では鉄

鐵鑄物製造の制限について銅製品の製造制限を行ふこととなり、輸出入品臨時措置法の規定に基き銅製品の製造制限に關する省令を制定七月八日附官報を以て公布した。商工大臣の指定する物品又は其の部分品は特に地方長官の許可を受けた場合の外銅材(屑銅を含む)を以て製造することを禁ずるもので、八月十五日から施行される。同時に禁止品目を指定告示したが、日用品を初め、生産力擴充に必要な工鐵業用を除き一般民需用機械類の殆ど全部に亘るものである。

### 鉛、亜鉛、錫等使用制限

商工省で

は輸出入品臨時措置法に基き、鉛、亜鉛錫等使用制限規則を制定、七月九日省令として公布、七月十五日より施行することとなつた。同規則によれば鉛、亜鉛、錫、アンチモン若はニッケル又は之等の合金は、輸出品を除き、又地方長官の許可を受けた場合の外は、飲食用器具、厨房用器具、家具什器、建築用附屬金具、美術裝飾品、喫煙用器具、化粧又ハ身廻用品、裝身具又ハ被服附屬金具、文房具玩具等の製造に使用することを禁ずるものである。

### 日本萬國博覽會延期

紀元二千六百

年記念日本萬國博覽會は、昭和十五年開催の豫定で着々準備中であつたが、時局の爲遂に事變終了後に延期することとなり、七月十五日の閣議で正式に決定した。

### オリンピック東京大會中止

昭和十

五年開催の豫定で準備を進めてゐたオリンピック東京大會は、萬國博覽會の延期と共に中止することとなり、七月十五日閣議の決定に基き、組織委員會では同大會返上の手續をとつた。

### 文展開催決定

今秋の文展は時局に

鑑みて中止すべしとの意見も行はれたが七月十九日顧問會議の結果、開催の可否は文相に一任することとなり、荒本文相は開催を決定、文部省では本年度文展要綱を同二十日發表した。

### 傷痍軍人慰問繪畫寄贈

全國の陸海

軍病院等にある皇軍將兵慰問の爲、文部

省の幹旋で全畫壇より作品の寄贈を募る計畫が成立し、陸海軍、厚生省その他と聯絡、五月十九日文相官舎に在京各美術團體代表者を招いて懇談會が開かれた。關西方面では文部省山川専門學務局長、本田學藝課長、軍、市當局者等及び京都畫壇代表作家等が同三十一日參集協議を重ねた。その結果各美術團體が參加して文部省内に傷痍軍人慰問美術家聯盟を設け汎く作家に呼びかけて寄贈勸誘の實行運動を行つた所、美術界の熱心な賛同が集まり豫想外の好成績を得て、七月二十二日締切つた結果總數日本畫一八四七點洋畫一六七〇點が集められたので、東京府美術館に陳列、關係者内覽の上陸海軍の手によつて夫々各病院に分配されることになった。

### 四天王寺釣鐘獻納

大阪四天王寺で

は鳴らぬ釣鐘として有名な巨鐘「聖德太子頌德鐘」を國家に獻納することを決議し、七月二十二日府社寺兵事課に報告した。同鐘は明治三十六年發願、多數の喜捨を寛めて鑄造されたもので、重量四萬二千貫、地金の時價約百萬圓と見積られてゐる。

### パティアラ派遣兩技師歸朝

印度パ

ティアラ王國に日本風庭園及宮殿造營の爲本年一月派遣された谷一東及西川浩の兩名は、滞在中マハラジャの計に際會その遺志をついだ新王の註文によつて二萬七千坪の庭園に四百坪の建物と六千坪の庭園に三百坪の建物との二つの設計を

完了したが、新王の服喪の爲一先づ歸朝することとなり七月二十四日歸京した。

### 從軍畫家招待

陸軍省新聞班では七

月二十五日夕大日本陸軍從軍畫家協會員一同を平河町寶亭に招待し、陸軍の感謝を傳へ更に彩管の協力を求むる會を開いた。出席者は新聞班長佐藤大佐、恤兵部淺野中佐、藤島武二、石井柏亭、川端龍子その他畫家三十餘名。

## 八月

### 銅使用制限規則改正

商工省では銅

の制限を一層強化する爲四月制定した銅使用制限規則を八月一日省令を以て改正同十五日から施行することとなり、同時に製造禁止品目二百五十七を指定告示した。此等の中には置物、花器等一般工藝品から銅像まで含まれてゐるが、規則中に除外例を設けて左の各號の一に該當する場合に制限を適用せぬこととした。

- 一 法令に依り製造ヲ要スルモノノ製造ニ使用スルトキ
- 二 學術研究、試験又ハ標本ノ用ニ供スルモノノ製造ニ使用スルトキ
- 三 美術展覽會ノ出品物ノ製造ニ使用スルトキ
- 四 鍍金用又ハ箔、紙、絲、粉若ハ液トシテ使用スルトキ

### 金使用規則改正

金の消費を制限す

る爲大藏省では昨年十二月金使用規則を制定したが、その制限を一層強化する必要から、八月二十日省令を以て同規則を改正し即日之を施行した。改正の結果は

從來九金以下のもの、金鍍金のものは制限されず、又金箔、金粉、金絲等は一定の用途に限り使用が禁示され、織物、漆器等には刷限が及ばなかつたものを、すべて制限の範囲に含め、醫藥用として必要やむを得ざるもの又は大藏大臣の許可を得たるもの以外は、一切金の使用を禁じた。

#### 文展審査員内定

文部省では今秋の文展審査員を銓衡中の所八月二十七日第二部を除く入選の内定を了し發表した。

#### 文展開催要項發表

文部省では今秋開催の文展に關し、出品點數計法等を改めた要項を七月三十日官報で發表した。

#### 彫塑家銅使用陳情

銅の使用制限に關し、瀧野川彫塑研究所小倉右一郎が發起人となつて八月二十七日九の内マープルに朝倉塾、構造社、院展彫塑部等十三團體代表が參集、銅の使用許可について協議を行つた結果、商工省、府工務課等に陳情することとなつた。

#### 一水會文展不参加

一水會會員は依然文展に参加せぬことになり八月二十九日左の聲明書を發した。

「去二十八日都下諸新聞に一水會も文展に合流するが如き發表有之候へ共事實は本月初旬文部省より其の交渉を受けたるに付慎重協議の結果本會は依然中立持續に態度一決、之を去る十五日其の筋へ通達を了せり、從つて今回の記事は一般出品者諸君に多大の御迷惑を相掛け候次第に付右誤解なき様御含み被下度候 八月二十九日 一水會」

#### 東亞文化協議會創立

我が政府と中

華民國臨時政府との協力により、日支文化の聯絡機關として東亞文化協議會が設立され、我が國からは學界の權威三十名を代表として派遣、支那側では行政委員長王克敏、教育部總長湯爾和、議政委員長委員長周作人を初め北京大学教授等が代表として出席し、八月三十日北京懷仁堂で盛大な發會式があげられた。引續き九月二日迄人文科學、自然科學の兩部門にわけて會議を開き事業の方策に關する協議が行はれた。

### 九月

#### 東亞研究所設立

東亞新建設の國策遂行に當り、その基礎的調査機關として東亞文化の一大綜合研究所設置の必要が認められ、企畫院に於て外務、陸、海軍大藏當局等各方面と連絡して具體案作製中であつたが、愈々成案を得、官民協力の財團法人組織として東亞文化研究所を設置することとなり、九月一日首相官邸に於て開所式があげられた。

#### 建築部分品代用品協議

金屬の建築資材部分品はすべて代用品におかふべきであるといふ趣旨から、商工省が肝煎りで九月二日鐵道協會に關係官廳、建築關係諸團體の代用品製造業者の各代表等を集めて第一回建築資材部分品金屬代用品協議會を開催、その普及徹底を圖ることとなつた。

#### 文展第二部審査員

文展第二部審査員のみ決定が遅れてゐるが、旅行中の石

井柏亭が九月五日歸京、安井會太郎と共に辭退したので、その他の人選を決定同七日發表した。尙第三部では平櫛田中が辭退したので、同部のみは十四名で審査に當ることになつた。

#### 代用品發明懸賞募集

大阪朝日新聞社では商工省及府市後援の下に代用品獎勵の爲その發明考案の懸賞募集を發表、十一月展覽會を開くこととした。服裝用品、事務用品及運動具、家庭用品、容器及包裝用品、飲食用品、機械工具及部分品、建築材料、再生回收及廢物利用、代用資源の九部に分ち、各部夫々一等千圓の賞金を提供、別に最優秀作品に野村獎學會獎勵金五千圓を贈る。

#### 防空ボスター獻納

全日本商業美術聯盟では、防空に關するボスター原畫百四點を製作し、九月八日東部防衛司令部に獻納した。同司令部では之を利用して同十二日からの防空演習期間中市と聯盟の共同主催で、日本橋白木屋で展覽會を開いた。

#### 日支合同油繪展覽會

北支方面に従軍した石井柏亭等の主唱で、主として従軍の洋畫家等と支那の洋畫家とが合同し日支双方五十點宛の作品を出品、九月十九日から二十五日迄北京中央公園で、第一回中日美術家合同油繪展覽會が開かれた。

#### ヒトラー・ユーゲント招待

來朝して各方面見學中のヒトラー・ユーゲント一行を招待して朝日新聞社主催の午餐會

が九月二十七日上野精養軒で行はれ、同社幹部の外日本美術院から横山大觀、堅山南風、齊藤隆三等出席、大觀は「日本畫の眞髓」と題する講演をなし、南風は揮毫によつて日本畫の實技を紹介した。

#### 海軍從軍畫家囑託

事變勃發以來海軍に從軍した畫家は四十數名に達してゐるが、海軍省では漢口攻略戰遂行の時に當り、繪畫による事變記錄を遺す趣旨から、新に藤島武二、石井柏亭、石川寅治、田邊至、藤田嗣治及び中村研一の六名を囑託從軍せしめることとなり、その打合せ並に壯行會が九月二十七日水交社で催された。

#### 銅像建設一部許可

銅使用制限令の爲銅像は建設中のものも製作困難に陥つてゐるが、九月三十日東京府ではこの制限を緩和し、建設中のものの中餘儀なしと認むるものを認可した。

### 十月

#### 日本新興南畫院文展不出品

日本新興南畫院同人等は文展の出品を見合せる旨十月一日聲明した。

#### 能の海外紹介

「能を中心とした日本文化史」を講ずる爲、外務省文化事業部の幹旋で野上豊一郎が渡英することとなり、能面十五面、裝束十枚を持參、十月二日靖國丸で神戸を出發した。面及び裝束は金剛家及び細川侯爵家等の藏品中から選ばれたものである。

#### 文展審査員招待會

文部大臣の文展

審査員招待會は十月七日午後六時から上野特養軒で開催、荒木文相初め内ヶ崎、伊東兩次官以下關係官、細川侯爵等美術顧問及各部審査員等出席、文相は文展開催に關する抱負を述べ、藤島審査員の挨拶があつた。

### 圖案關係技術官會議

商工省主催第三回圖案關係技術官會議は、十月十二日より四日間丸の内帝國鐵道協會で開催、本省その他の關係官十餘名、全國技術官百餘名出席、新興代用品の工藝的利用と戦時下の工藝品輸出振興方策を中心として協議を重ねた。

### 傷痍軍人感謝繪はがき

傷兵保護院では石川寅治、吉村忠夫及び廣川松五郎の三名に委嘱して傷痍軍人感謝繪はがき三種を作製し、先般同院が全國小學生から募集した傷痍軍人感謝標語當選者並に各道府縣市町村及び教化團體へ十月十八日配布した。

### 工藝美術批評家協會結成

大山廣光、大島隆一及び柴崎風岬の三名は「嚴正なる工藝美術批評確立のため」十月十九日工藝美術批評家協會を結成した。

### 臺灣美術展改組

臺灣美術展は昭和二年以來臺灣教育會の主催として開催して來たが、總督府では新に之を官設展として經營することになり、臺灣總督府美術審査委員會規程及び同展覽會規程を設け、その第一回展を十月二十二日から十月三日まで開催した。

### 石井柏亭歸朝

海軍省囑託として、

約一ヶ月上海にあつた石井柏亭は十月十二日長崎入港歸朝した。海軍館を飾る壁畫として「支那方面艦隊」並に「海軍陸戰隊の奮戦」の二作に従事下圖を完成した。いづれも百餘位のもので完成は來年になる豫定。

### ニューヨークの新畫廊に日本畫出陳

ニューヨークのインターナショナル・ビジネス・コーポレーション社長ワットソンは同社内に畫廊を新設し各國の特色ある繪畫を陳列することとなり、日本畫家の作品出陳を希望して來たので、國際文化振興會では池上秀敏及八木岡泰山に製作を依頼製作中であつたが、秀敏は彩色畫「黎明」、泰山は水墨畫「暮靄」を完成し、十月二十五日發送される運びとなつた。

### 正木直彦露像除幕式

沼田一雅が陶磁器試験所に於て昨年完成した正木直彦陶像は、東京美術學校内正木記念館に据付られ、十月二十六日正木直彦満七十七歳の誕辰を期して關係者參列の下に除幕式が舉げられた。

## 十一月

### 第三部會員脫退

同會員開發芳光は十月脱會したが、上田直次は十一月二日同じく脱退、關係方面に聲明書を發した。

### 新「晨鳥社」結成

西村五雲門下の晨鳥社は五雲急逝の爲同畫塾解散のやむなきに至つたが、同人協議の結果その精神を體して新に晨鳥社を興し、山口華楊

前田荻郎及び西村卓三の三名を總務として常務員その他の役員を選任して畫壇に活動することになり、十一月九日挨拶狀を發した。

### 日洪文化協定と日本文化賞

十一月十五日ハンガリアと我が國との間に日洪文化協定の假調印が行はれたが、之を機會として多年兩國文化親善に貢獻して來た日洪文化協會會長三井高陽男の肝煎りで同協會の名によつて日本文化賞を制定、ハンガリア人の手になる日本研究の優れたものに對して贈ることとなつた。

### 「南京入城式の圖」獻納

京都十三日俱樂部及び世界經濟研究會により花岡萬舟筆油繪「南京入城式の圖」が十一月十六日第十六師團に獻納された。

### 日獨文化協定公布

日獨兩國間の文化的協力に關する協定が十一月二十五日東京で調印され同二十六日附官報を以て公布された。協定は左の四條よりなる。

第一條 締約國ハ其ノ文化關係ヲ緊實ナル基礎ノ上ニ樹立スル爲努力スベク相互ニ右ニ付最モ緊密ナル協力ヲ爲スベシ

第二條 締約國ハ前條ノ目的ヲ達成スル爲學術、美術、音樂、文學、映畫、無線放送、青少年運動、運動競技等ノ方面ニ於テ兩國ノ文化關係ヲ組織的ニ増進スベシ

第三條 前條ノ規定ノ實施ニ必要ナル細目ハ締約國ノ權限アル官廳間ニ於テ協議決定セラルベシ

第四條 本協定、署名ノ日ヨリ之ヲ實施スベク締約國ノ一方ハ十二月前ノ豫告ヲ以テ本協定ヲ廢棄スルコトヲ得

尙調印と同時に發表された外務省聲明

によれば、本協定に即應し兩國の權限ある官憲に於てとりあへず協議方考慮せらるべき事項は左の通りである。

一、日獨文化聯絡協議會設置、二、文化施設の維持、擴充、三、學校教員の任命、四、政府派遣留學生に對する便宜供與、五、教授學生交換、六、青少年團による交遊、七、獨逸における日本の學校及日本に於ける獨逸の學校に對する好意的措置、八、圖書雜誌交換、九、藝術文化交換、一〇、映畫交換、一一、交換放送、一二、運動競技等による交遊

### 服部亮英北京美術學校長となる

九  
月創設された北京美術學校長となつて服部亮英は十一月二十八日發赴任した。

## 十二月

### 東亞文化協議會

日支文化提携機關として今夏創立された東亞文化協議會の第二回評議員會は、會長湯爾和ほか二十一名の支那側評議員を迎へ、十二月一日から五日まで東京帝大安山講堂で開催、人文、自然科學の兩部會に分れて夫々協議を重ねた。

### 朝鮮小學校用國史掛圖

朝鮮總督府學務局では、小學兒童の國體觀念養成の爲國史教育の充實を圖つてゐるが、その爲に同局編輯課では内地一流の畫家に依頼して約百頁に亙る國史掛圖を編纂し全鮮の小學校に使用させることになつた。その内の一圖をなす「皇大神宮」は横山大觀が揮毫し、十二月二日總督宛に届けられた。

### 九室會結成

二科展に於て毎年第九

室に陳列される前衛畫家等三十六名によつて十二月三日九室會が結成された。

藤田嗣治、東郷青兒を顧問に推し來春第一回展を開く豫定で、「二科會に於ける最も新鮮な細胞組織として母體の隆盛に寄與し」「我が民族の優秀性を顯揚し行ひては新東洋文化建設の一助」たらしめんといふ。

### 黒田子爵記念美術奨励資金買上

同資金委員會では本年度の買上として、文展出品中より安藤信哉作「畫室にて」を選定買上げ、大禮記念京都美術館に寄贈した。

### 民藝品をニューヨークに送る

國際文化振興會ではニューヨーク民藝館の希望に應じ、日本の代表的な民族工藝品を送ることとなり、その選定蒐集を柳宗悦に依頼した結果、約半歳に亘り全国各地から漆器、陶器、金工、木工、竹細工、染織、大津繪、繪馬、人形等約百點が集められたので、此等を取まとめ發送することになった。

### 紐育桑港萬國博覽會參加

明春開催されるニューヨーク及びサンフランシスコのゴールデン・ゲート兩萬國博覽會に對する米國政府からの招請に應じ、我が政府では二百八十萬圓の豫算を以て參同することとなり、商工省主管の下に、その參同事務は、日本商工會議所、國際文化振興會、日米協會及日本萬國博覽會協會の四團體によつて設立された紐育桑港萬國博覽會協會が之に當り、本年二月よ

り開始された。

ニューヨーク萬國博覽會はワシントン大統領就任百五十年記念として「明日の世界の建設」を主題とし四月三十日から十月三十日まで、サンフランシスコの金門萬國博覽會は桑港灣の二大鐵橋完成記念として、「交通通信の近代的發達」を主題とし二月十八日から十二月二日迄開かれる豫定で、我が國では兩者に夫々日本特設館及び日本式庭園を建設し、出品は社會生活、觀光、交通、工藝、美術及科學の六部に分けて、商工省が出品調査委員會を設けて選定することとなつた。委員は工藝に關しては國井喜太郎、秋月透、和川三造、水町和三郎及宮下孝雄、美術に關しては川合玉堂、横山大觀、岡田三郎助及津田信夫が委嘱された。

紐育博の日本特設館は内田祥三、岸田日出刀及大熊喜邦の共同設計になる神明造に範をとつたもので延面積約四五〇坪附屬庭園は田村剛の設計で寢殿造りに於ける庭園様式をとつたもので面積約九五〇坪、金門博の日本特設館は設計者は同前で、我が國城廓建築を基調とし江戸時代武家邸宅及塗家造の様式を加味したものの、延面積約四一二坪、附屬庭園は前者と同じく田村剛の設計で九六八坪。紐育の特設館は十月十八日定礎式舉行、桑港のものは十二月二十日上棟式を行つた。

### 太蒼會解散

阿以田治修外五名の洋畫家を會員とする太蒼會は十二月解散した。

### 國際手工業博覽會出品受賞

五月ペルリンで開催された第一回國際手工業博覽會に我が國も參加出品したが、それ等の手工藝品及びその製作過程の映畫を作製した國際文化振興會に對し、ドイツ政府及びローマ國際手工業中央會から賞牌と賞状を送つて來たので十二月二十二日國際文化振興會で授與式を舉行した。受賞者は左の通りである。

安藤重兵衛(七寶)、麻布重一(盆)、株式會社大丸(女衣服)、石津重貞(弓、美濃刀匠補護會(關兼秀一口、宮内一毛筆)、村田吉茂(木綿織物)、高見澤木版社(木版)、たくみ工藝店(茶の湯道具)、龍村平藏(帶)、山田徳兵衛(人形)、山本茂助(傘)、横田峰齋(竹籠)、南部鐵瓶工業組合(鐵瓶)、舟木久右衛門(腕萬珠堂(陶器))

### 有馬賞設定

有馬農林大臣は土の美術の奨励を志し、小城基を援助して滿洲の移民村を主材とする大陸の風物を描かせ、同時に新自然派協會の同人等を動員して全國の農村に主題を求めて製作させ明年早々土の美術の展覧會を開催、優秀作品には有馬賞を出すこととなつた。

### 郵便切手圖案改正

逓信省では郵便切手の圖案を全般的に改めることとなり昨年郵便切手圖案審査委員會を設け、爾來改正圖案の審議を重ねて來たが、この程切手十九種、葉書三種の圖案を決定し委員會は廢止した。

### 昭和十三年中陸軍囑託畫家

本年度中に於て陸軍省より囑託派遣された從軍畫家の氏名及び從軍方面は左の通りである。

高島祥光(北支)、五味清吉、三橋武顯(以上中支)、川島烈一郎(北支)、高橋勝馬(北支)、藤島武二、石井光楓(以上中支)、栗原信、中澤弘光(以上北支)、川端龍子、鶴田吾郎(以上北支)、内藤、伊原宇三郎、榎信太郎、石井柏亭、裕伊之助、和田雪苗、永地秀太(以上北支)、吉田博、佐々貴義雄、大野隆徳、瀬野覺藏、島海青兒(以上中支)

### 昭和十三年中海軍從軍畫家

本年度中に於て海軍省より囑託派遣された畫家及び海軍に從軍を許可された畫家又は彫刻家は左の通りである。

囑託畫家 藤島武二(未行)、石井柏亭、田邊至、石川寅治(以上中支)、中村研一(南支)、藤田嗣治(中支)

從軍畫家 神津港人(北支)、吉田初三郎、吉田秀三郎、吉田朝太郎、田坂昇、麻生豊、佐々貴義雄、佐藤克三(以上中支)、水平讓(北支)、伊藤三壽(北、中支)、野上登(青島)、三國久、御厨純一(以上南支)、小早川篤四郎(南支)、小嶺伸(中支)、清水七太郎(中、北支)、古島松之助(中支)、森脇忠(南支)、高橋亮(北支)、服部正一郎(中、北支)、草光信成、木下五郎(以上中支)、山崎省三(南支)、小林茂(北、中支)、興七郎(南、中支)、吉田三郎、橋本徹太郎、小林喜代吉、齋藤八十八、横江嘉純(以上中支)、奥瀬英三、三上知治(以上中、北支)、代谷兵二(中支)、鶴田吾郎(北、中支)、光安浩行、宮坂勝、田中稻三、金井達三、酒井精一、小泉素彦、一色五郎(以上中支)

「物故作家及美術関係者」 ページ (105～114 ページ)

個人情報保護のため非公開

Pages of the Articles of the Deceased (pp.105-114)

Cut for protection of the personal information



# 美術行政

## 美術調査會計書

文部省では昨年七月帝國藝術院創設後、美術行政一般の問題に關して根本的調査改善の必要を認め、その審議に當るため識者を集めて美術調査會を設置することとなり、その意向を發表したが、爾來當局において具體案考究中の所、文相、次官等の更迭その他のため延引し、つひに本年中は實現の運びに至らなかつた。

## 文展開催決定

事變の爲物資の制限が強化され、昭和十五年開催豫定の日本萬國博覽會、オリンピック東京大會等も延期又は返上されることとなつた情勢に鑑み、文展中止の意見も有力となつたので、文部省では七月十九日顧問會議を開催、細川護立侯、岡部長景子、松浦鎮次郎、正木直彦、清水帝國藝術院長、本省からは伊東次官、山川専門學務局長、本田學藝課長等出席、本年度文展を如何にすべきかを審議した結果、國策の立場から展覽會開否の決定は荒木文相の裁斷に一任することとなつた。

之に對し文部當局は同日午後熟議を加へた末、文相は文展開催を決定し、即時之を發表した。文相の談話として新聞紙上に報ぜられた所は左の如くである。

「本日文展開催について顧問會議を開き各顧問の忌憚なき意見を聴取し之を十分に考察した結果今秋の展覽會を開催することに決定した。一國の美術はその國の民族精神及び文化を表現すべきもので常にその振興を圖ることは最も必要なことであるが、特に美術は歴史に徴しても戦時の如き緊張時こそ飛躍的に發展してゐるのである。従つて文部省としてはかかる戦時下こそ現代の美術も飛躍的に發展し、日本國民の氣魄及び信仰はかかる機會においてこそ美術を通じて發揮される

ものであると信じてゐる。かうした意味において文部省としては美術家も當然この時局を認識されて影響報國の大覺悟をもち、美術を通じて非常時國民の覺悟を示すと共に一筆一刀にこの時局を反映してその精神を傾けられんことを希望する。(讀賣)

## 文展規則改正

今秋文展開催の決定と共に、特に時局下における物資節約の趣旨から、作品の大きさ、出品點數等に關して展覽會規則を改めることとなり、七月三十日附官報を以て第二回文展要項を發表、正式の規則改正は八月三十一日附を以て同日の官報で告示した。

改正の要點は、出品を各部共一點に限つたこと、及び大さの制限を第一部は縦十尺横七尺以内、第二部は五十號以内、第四部は立體は六尺平方以内の場所に陳列し得るもの、その他は縦六尺横六尺以内のものとしたことにある。

## 第二回文部省美術展覽會

前記の如き經過により文部省では第二回文展を開くこととし、本年度審査員五十九名(第一部十五名、第二部十五名、第三部十四名、第四部十五名を決定、各部審査主任の氏名と共に八月二十七日(第二部は九月七日)發表、九月二十二日附を以て正式に依頼した。(附録七二頁参照)

展覽會に關する日程は左の通り行はれた。

出品搬入受付 十月一日—五日  
鑑査打合せ 同六日  
審査員招待會 同七日  
入選發表 同十日(第三、四部)、十一日(第二

部)、十二日(第一部)  
招待 同十五日  
一般公開 同十六日  
出品及陳列數は左の通りであつた。

部	出品數	入選數	無鑑査出品數	陳列數
第一部	一三八二	一三九	九一	二三〇
第二部	二二七〇	二〇〇	一四八	三四八
第三部	三五一	一一八	八五	二〇三
第四部	六三〇	一三八	六三	二〇一
合計	四六三三	五九五	三八七	九八二

審査の結果、本年度は文部大臣賞はなく、特選は第一部四點、第二部十點、第三部十點、第四部七點を決定發表した。又政府買上用品は無鑑査作品中より選定、第一部二點、第二部三點、第三部二點、第四部三點、合計十點を十月二十七日決定した。(七五頁参照)

展覽會の内容及び出品目錄等は別に記す通りである。  
(七五頁参照)  
尙京都市主催による例年の文展京都陳列會は十二月一日より同十五日迄の日程を以て、大禮記念京都美術館に開催された。

## 美術教育

## 構作科設置の建議

學校美術協會研究部では普通教育に於ける圖畫科及手工科の缺點及びその分立の弊を改善せんが爲、この二科を廢して新に構作科(假稱)を設けることを提案し、その案を作製して二月十五日教育審議會及び文部當局に建議すると共に、各方面にパンフレットを送つて輿論喚起に力めた。

構作科の陶冶目的として掲げてゐる所は左の如くである。

一、觀察描寫力の養成、二、構成工作力の養成、三、鑑賞批判力の養成、四、工夫應用力の養成、五、材料用具に對する理解力の養成、六、造形知識の擴充

## 帝國美術學校卒業式

同校第五回卒業式は三月十二日午後二時舉行、同日及び翌日卒業製作を展覧した。

## 東京高等工藝學校卒業及入學者

同校では三月十五日卒業式を舉行、本年度の卒業生並に入學者数は左の通りであつた。

	卒業生	入學志望者	入學者
工藝圖案科	二〇	一七九	二二
工藝彫刻部	五	一四	六
金屬工藝科	一五	一二〇	一八
精密機械科	二二	一一八九	七五
木工工藝科	二七	一五七	二七
印刷工藝科	一九	一四八	二〇
寫眞部	八	九五	八
木工工藝別科	九	二四	一五
合計	一二五	一九二六	一九一

## 京都高等工藝學校卒業生及入學者

同校では三月十五日卒業式を舉行した。本年度の卒業生及入學者は左の通りである。

	卒業生	入學志望者	入學者
色染科	二八	一七〇	二七
機織科	二九	二三九	三〇
圖案科	二六	一九三	三六
窯業科	二一	八八	二八
合計	一〇四	六九〇	一二一

京都市立繪畫專門學校卒業及入學者 同校では三月十八日卒業式を舉行した。本年度卒業生及入學者の数は左の通りである。

	卒業生	入學志望者	入學者
本 科	卒業生	入學志望者	入學者
豫 科	二六	四〇	一八
選 科	二二	二二	二〇

(選科生ハ當分募集セズ)

	卒業生	入學志望者	入學者
研究科	一二	一九	一九
合計	四〇	八一	五七

多摩帝國美術學校卒業式 同校では三月二十一日午前十時より第三回卒業式を舉行し、又同日より二日間本年度卒業生成績品展覧會を開催した。

## 東京美術學校卒業生及入學者

東京美術學校では三月二十四日午前十時より同校第四十七回卒業式を舉行し各科卒業生一三九名に卒業證書を授與した。又同日より三日間卒業製作を陳列公開した。

同校本年度卒業生及入學者数は左の通りである。

	卒業生	入學志望者	入學者
日本畫科	一六	五三	二〇
油畫科	三九	一六九	三七
彫刻科			

	卒業生	入學志望者	入學者
塑造部	一七	二〇	一四
木彫部	七	七	六

	卒業生	入學志望者	入學者
工 藝 科			
圖案部	一六	一一三	一五
彫金部	五	一八	五
鍛金部	三	八	四
鑄金部	八	一五	七
漆工部	六	一六	六
建築科	八	五八	七
圖畫師範科	一四	一四一	一六
研究科	〇	二八	二八
特別學生	〇	一	一

## 女子美術專門學校卒業生及入學者

同校では三月二十六日第四十二回卒業式を舉行した。本年度師範科及高等科の卒業生及入學者数は左の通りである。

	卒業生	入學志望者	入學者
師範科	卒業生	入學志望者	入學者
日本畫部	一九	二二	一七
西洋畫部	一七	三〇	二五
刺繡部	一二	二三	二〇
造花部	〇	一	一
裁縫手藝部	五	二	〇
裁縫部	二〇	四三	三八
高等科			
日本畫部	四	九	八
西洋畫部	三	一〇	九

## 東京女子美術工藝學校開設

岡登貞治を創立者及び校長として洋裁、手藝、織物、帽子等を主とする東京女子美術工藝學校が四月開設された。

## 川合教授辭職

東京美術學校日本畫科主任教授川合玉堂は昭和十一年六月辭表を提出、爾來教壇を離れてゐたが四月十四日依願免官が發令された。

尙同校日本畫科主任の後任は圖畫師範科主任結城素明

教授、圖畫師範科主任の後任には小林萬吾教授が命ぜられた。

#### 文部省中等教員検定

本年度施行された文部省師範學校、中學校及高等女學校教員試験檢定中圖畫及手工科に關しては、圖畫科は五月六日より同十日に至る間に豫備試験を行ひ出願者二六六名中合格者四〇名、七月十三日より同二十二日に至る間に本試験を行ひ受験者九一名中合格者二九名を決定した。手工科は五月五日豫備試験、出願者一七三名中合格者一八名、七月六日より八日迄の間に於て本試験施行、受験者三四名中合格者一五名を決定した。尙本年度圖畫及手工關係の檢定臨時委員は左の通りであつた。

板倉賛治、野尻重雄、三苦正雄、松原郁二、平井富夫、松田義之、阿部七五三吉、鈴川信一

#### 日獨伊親善圖畫募集

森永製菓株式會社では日獨伊親善の爲、文部、陸海軍、外務各省、及び獨伊兩大使館後援の下に、日本、滿洲國、ドイツ及イタリアの小學校兒童及び中等學校生徒の圖畫を募集することとなり、四月一日募集開始、六月三十日締切つたが、全國及び滿洲國迄合めて小學校八二四五、中等學校一七四〇、計九八五校、作品は小學校兒童約三百七十萬、中等學校生徒約三十萬計約四百萬點の應募を得、正木直彦を審査長に結城素明、石井柏亭、和田三造、多賀谷健吉、板倉賛治、三苦正雄を審査員に依頼し、審査の結果を十月一日發表個人賞及び學校賞を夫々贈つた。

#### 東京美術學校設置記念式

東京美術學校では十月四日同校設置第四十九回記念式を舉行し、併せて香取秀眞教授の在職三十五年及び小泉勝爾教授の在職二十五年祝賀式を行つた。

#### 高等教員圖畫科檢定試験

同試験は昭和二年及び同八年の兩回に行はれたが、今年はその第三回として十月四日から同七日迄東京帝大建築學教室で施行、三名の合

格者を決定した。

#### 文部省圖畫教員講習會

本年度文部省中等學校教員圖畫科講習會は、十月十八日から二十八日迄東京美術學校に於て開かれた。講義、講師及び實習擔當者は左の通りである。

日本精神と情操教育(二時間)

世界文化と日本美術(四時間)

金石文及び工藝品文様ノ研究

法並拓本ノ實習(六時間)

日本住宅ノ性質ト其ノ發達(十時間)

日本畫實習

西洋畫實習

多摩帝國美術學校記念式

文化學院展覽會及講演會

第十四回同校展は女學部、美術部、同研究科並に教授作品併せて四六一點出陳。第一回素描展は小學校及中等學校計八六校、一七〇〇點の應募あり、鑑別審査の結果五七點入選した。尙參考品として東西大家作品二九點を特別陳列した。

國民學校藝能科意見書提出

教育審議會に於て決定された國民學校案の藝能科中の圖畫及び作業に關し、東京高等師範學校教授板倉賛治、東京美術學校教授多賀谷健吉、學校美術協會理事長後藤福次郎等二十二名連署で十二月五日教育審議會總裁及び文部大臣宛に意見書を提出した。

その要點は圖畫及び作業共に各學年を通じて毎週教授時間數二時間宛を配當すること、及び作業なる名稱を改めて工作とすること、詳細な理由書を添へてゐる。

同校では十一月一日同校第四回創立記念式を舉行、又同日より三日間記念展覽會を開催し、教授及び學生の作品を陳列した。

文化學院では十一月五日から七日迄第十五回同校繪畫、工藝展覽會並に同校主催東京日日新聞社後援による第一回全日本素描競技會展を開催し、又同六日午後西村伊作、中川紀元、兒島喜久雄、石井柏亭等の美術講演會を開いた。

第十五回同校展は女學部、美術部、同研究科並に教授作品併せて四六一點出陳。第一回素描展は小學校及中等學校計八六校、一七〇〇點の應募あり、鑑別審査の結果五七點入選した。尙參考品として東西大家作品二九點を特別陳列した。

國民學校藝能科意見書提出

教育審議會に於て決定された國民學校案の藝能科中の圖畫及び作業に關し、東京高等師範學校教授板倉賛治、東京美術學校教授多賀谷健吉、學校美術協會理事長後藤福次郎等二十二名連署で十二月五日教育審議會總裁及び文部大臣宛に意見書を提出した。

その要點は圖畫及び作業共に各學年を通じて毎週教授時間數二時間宛を配當すること、及び作業なる名稱を改めて工作とすること、詳細な理由書を添へてゐる。

同校では十一月一日同校第四回創立記念式を舉行、又同日より三日間記念展覽會を開催し、教授及び學生の作品を陳列した。

文化學院では十一月五日から七日迄第十五回同校繪畫、工藝展覽會並に同校主催東京日日新聞社後援による第一回全日本素描競技會展を開催し、又同六日午後西村伊作、中川紀元、兒島喜久雄、石井柏亭等の美術講演會を開いた。

第十五回同校展は女學部、美術部、同研究科並に教授作品併せて四六一點出陳。第一回素描展は小學校及中等學校計八六校、一七〇〇點の應募あり、鑑別審査の結果五七點入選した。尙參考品として東西大家作品二九點を特別陳列した。

國民學校藝能科意見書提出

教育審議會に於て決定された國民學校案の藝能科中の圖畫及び作業に關し、東京高等師範學校教授板倉賛治、東京美術學校教授多賀谷健吉、學校美術協會理事長後藤福次郎等二十二名連署で十二月五日教育審議會總裁及び文部大臣宛に意見書を提出した。

その要點は圖畫及び作業共に各學年を通じて毎週教授時間數二時間宛を配當すること、及び作業なる名稱を改めて工作とすること、詳細な理由書を添へてゐる。

同校では十一月一日同校第四回創立記念式を舉行、又同日より三日間記念展覽會を開催し、教授及び學生の作品を陳列した。

文化學院では十一月五日から七日迄第十五回同校繪畫、工藝展覽會並に同校主催東京日日新聞社後援による第一回全日本素描競技會展を開催し、又同六日午後西村伊作、中川紀元、兒島喜久雄、石井柏亭等の美術講演會を開いた。

第十五回同校展は女學部、美術部、同研究科並に教授作品併せて四六一點出陳。第一回素描展は小學校及中等學校計八六校、一七〇〇點の應募あり、鑑別審査の結果五七點入選した。尙參考品として東西大家作品二九點を特別陳列した。

國民學校藝能科意見書提出

# 美術講演・講義

## 講演

### 一月

教育美術講演會 一月十五日 於京橋  
泰明小學校

「メキシコに於る美術教育」北川民次、  
藤田嗣治

奈良帝室博物館列品講座 一月十五日  
「開基勝寶の出土に就て」佐藤小吉  
浮世繪同好會講演會 一月十九日 於  
日本橋經濟俱樂部

「廣重の江戸風景版畫に就て」藤懸靜也  
「たばこ」と浮世繪に關する座談會—古  
堀榮を中心とする—  
展觀・江戸風景版畫及たばこ資料

大阪市立美術館第十五回美術講演會  
一月二十九日  
「根付に就いて」上川令吉  
「支那文明の展開」羽田亨

### 二月

奈良帝室博物館列品講座 二月五日  
「校倉に就いて」岸熊吉  
大阪市立美術館第十六回美術講演會  
二月十九日

「佛心の具象化」羽溪了諦  
考古學會講演 二月二十六日 於東京  
美術學校

### 三月

「粘土棚について」森貞成

奈良帝室博物館列品講座 三月五日  
「興福寺東金堂發見の佛頭佛手に就て」  
源豐宗  
滿蒙石器の遺蹟發掘講演 三月六日  
於奈良縣大神神社境内大禮記念館 主催  
大和國史會

「滿蒙に於ける石器時代大遺蹟發掘報告」  
末永雅雄  
日本刀講座 三月十三日 於大阪松坂  
屋

「大和傳の研究」本間順治  
浮世繪同好會講演會 三月十六日 於  
日本橋經濟俱樂部  
「阿國歌舞伎圖に就て」高柳光壽  
「たばこ」浮世繪 古堀榮

大阪市立美術館第十七回美術講演會  
三月十九日  
「浮世繪藝術の展開」笹川臨風  
史學會講演 三月十九日 於東大山上  
會議所

「南熱河の古文化に就て」原田淑人  
奈良帝室博物館列品講座 三月十九日  
「北和城南古墳の出土品」梅原末治  
東京美術研究所講演會 三月二十六日  
於東大文學部第三十六番教室  
「花まつりに因みて誕生釋迦の像を語る」

### 四月

大口理夫  
「古美術の鑑定に就て」瀧精一

石川縣工藝指導所竣工記念講演會 四  
月一日  
「所感」正木直彦  
「石川縣美術工藝界の回顧」島田佳美  
「産業工藝と石川縣の將來」國井喜太郎  
「巴里博と近代工藝主潮」田邊孝次  
考古學會講演 四月二日 於東京美術  
學校第九講義室

「飛鳥から奈良時代に互る彫刻様式の一  
考察」小林剛  
東洋美術大展覽會講演會 於大阪市立  
美術館  
第一回 四月二日  
「東洋畫の見方」脇本十九郎  
「正宗抹殺論の経緯」本間順治  
第二回 四月九日  
「この展覽會の見方」脇本十九郎  
「日本美術と支那美術」矢代幸雄  
第三回 四月十六日  
「美術における日本人の感覺」團伊能  
「宋元畫の世界」田中豐藏

東洋美術大展覽會講演會 於大阪市立  
美術館  
第一回 四月二日  
「東洋畫の見方」脇本十九郎  
「正宗抹殺論の経緯」本間順治  
第二回 四月九日  
「この展覽會の見方」脇本十九郎  
「日本美術と支那美術」矢代幸雄  
第三回 四月十六日  
「美術における日本人の感覺」團伊能  
「宋元畫の世界」田中豐藏

東洋美術大展覽會講演會 於大阪市立  
美術館  
第一回 四月二日  
「東洋畫の見方」脇本十九郎  
「正宗抹殺論の経緯」本間順治  
第二回 四月九日  
「この展覽會の見方」脇本十九郎  
「日本美術と支那美術」矢代幸雄  
第三回 四月十六日  
「美術における日本人の感覺」團伊能  
「宋元畫の世界」田中豐藏

東洋美術大展覽會講演會 於大阪市立  
美術館  
第一回 四月二日  
「東洋畫の見方」脇本十九郎  
「正宗抹殺論の経緯」本間順治  
第二回 四月九日  
「この展覽會の見方」脇本十九郎  
「日本美術と支那美術」矢代幸雄  
第三回 四月十六日  
「美術における日本人の感覺」團伊能  
「宋元畫の世界」田中豐藏

東洋美術大展覽會講演會 於大阪市立  
美術館  
第一回 四月二日  
「東洋畫の見方」脇本十九郎  
「正宗抹殺論の経緯」本間順治  
第二回 四月九日  
「この展覽會の見方」脇本十九郎  
「日本美術と支那美術」矢代幸雄  
第三回 四月十六日  
「美術における日本人の感覺」團伊能  
「宋元畫の世界」田中豐藏

東洋美術大展覽會講演會 於大阪市立  
美術館  
第一回 四月二日  
「東洋畫の見方」脇本十九郎  
「正宗抹殺論の経緯」本間順治  
第二回 四月九日  
「この展覽會の見方」脇本十九郎  
「日本美術と支那美術」矢代幸雄  
第三回 四月十六日  
「美術における日本人の感覺」團伊能  
「宋元畫の世界」田中豐藏

東洋美術大展覽會講演會 於大阪市立  
美術館  
第一回 四月二日  
「東洋畫の見方」脇本十九郎  
「正宗抹殺論の経緯」本間順治  
第二回 四月九日  
「この展覽會の見方」脇本十九郎  
「日本美術と支那美術」矢代幸雄  
第三回 四月十六日  
「美術における日本人の感覺」團伊能  
「宋元畫の世界」田中豐藏

東洋美術大展覽會講演會 於大阪市立  
美術館  
第一回 四月二日  
「東洋畫の見方」脇本十九郎  
「正宗抹殺論の経緯」本間順治  
第二回 四月九日  
「この展覽會の見方」脇本十九郎  
「日本美術と支那美術」矢代幸雄  
第三回 四月十六日  
「美術における日本人の感覺」團伊能  
「宋元畫の世界」田中豐藏

「足利時代水墨畫について」

第四回 四月十八日  
「近世畫について」

繪卷物特別展覽會講演會 四月十七日  
於奈良帝室博物館  
「宗教畫としての繪卷物」禿氏祐祥  
「天神緣起」田中一松  
本間順治講演 四月二十日 於大阪市  
立美術館  
「名刀を語る」  
奈良帝室博物館列品講座 四月二十三  
日  
「繪卷物の特性」春山武松

### 五月

第七回東方文化講演ノ内第一回 五月  
三日 於東大法學部第二十五番講堂  
「考古學上より見たるブラジル、ペルー、  
ボリビア」鳥居龍藏  
日本人形研究會講演會 五月四日 於  
日本橋日本橋俱樂部  
「優れたる日本文化を偲びて現代人形作  
家に望む」河野省三  
東洋文庫東洋學講座ノ内 五月五日、  
十二日 於同文庫講演室  
「樂浪土城について」原田淑人  
考古學會講演會 五月七日 於東京美  
術學校大講堂  
「美術考古學に就て」兒島喜久雄  
浮世繪同好會講演會 五月十七日 於  
日本橋經濟俱樂部  
「鳥文齋榮之に就いて」玉林晴朗

「浮世繪肉筆畫に就いて」藤懸靜也

東京美術學校校友會美術講演會 五月

二十一日 於同校

「美術の發展々々のメカニズムに就いて」

柳亮

大阪市立美術館第十八回講演會 五月

二十一日

「白隠禪師に就いて」關清拙

「問出の名僧白隠禪師」後藤光村

奈良帝室博物館列品講座 五月二十一

日

「京都高臺寺藏國寶十六羅漢圖に就いて」

島田脩二郎

早大美術學會戰爭美術に關する講演會

五月二十八日 於早大文學部第七十七番

教室

「西洋の戰爭畫」兒島喜久雄

「東洋の戰爭畫」脇本樂之軒

六月

日本美術の眞價を新しく認識する會

六月四日 於麴町區永田町小學校

講演 團伊能・原田治郎

幻燈、映畫

國學院大學上代文化研究會昭和十三年

度公開講演會 六月十一日 於同大學

「蒙古人の生活とその美術工藝」江上波

夫

「民俗學と國學」折口信夫

大阪市立美術館第十九回講演會 六月十

八日

「日本畫に現はれた美の發展」中井宗太

郎

奈良帝室博物館列品講座 六月十八日

「藥師寺藏二河白道圖に就いて」堂谷憲

勇

浮世繪同好會講演會 六月二十一日

於日本橋經濟俱樂部

「泰信を中心として」脇本樂之軒

井川定慶講演會 六月二十三日 於大阪

日本橋天王寺第九小學校

「松花堂昭乘を語る」

金曜談話會 六月二十四日 於大阪北

濱グルマン

「印度より歸りて」杉本哲郎

アジヤンタ壁畫展觀

考古學會講演會 六月二十五日 於東

京美術學校第九講義室

「東京市内志村に於ける原史時代竪穴群

の調査」和島誠一

日本人形研究會講演會 六月二十七日

於駿河臺佐藤新與生活館

「佛像と人形」丸尾彰三郎

七月

日本人形研究會講演會 七月四日 於日

本橋經濟俱樂部

「國文學、國民性、人形」久松潜一

成層美術講演會 七月十六日 於目黒

南郊繪畫研究所

「美術に於ける構想」柳亮

第八十六回啓明會講演會 七月二十三

日 於日本工業俱樂部

「新獨逸文化と日本」伊東忠太

大阪市立美術館第二回夏期講習會 七

月二十五日—三十日 於同館小講堂

演題並講師

「美的觀照の問題」片山喜之

「明の陶器に就いて」小林太市郎

「技法及金屬材料より見たる日本金工史」

前田泰治

「日本繪畫の諸相」藤井源一

「日本陶藝の概觀」神田松之助

「光悅の藝術」望月信成

「美術史に於ける藤原時代の初期と後期

—特に佛畫に就いて—源豐宗

「近世公卿の女裝に就いて」猪熊淺磨

藥師寺及唐招提寺見學

日本人形研究會講習會 七月二十五日

二十六日 於東京美術學校第一講義室

「顔の形態美」西田正秋

八月

第五回大和史蹟臨地講座 八月五日—

十一日 主催奈良縣社寺兵事課

第一日 榎原神宮參拜

講演「我が國體と日本精神」河

野省三 於畝傍建國會館

吉野河尻、吉野地方見學、臨地

講話

第二日 畝傍、葛城地方、飛鳥地方見學

臨地講話

第三日 天香久山、藤原宮址地方、磯城

地方見學 臨地講話

第四日 宇陀地方見學 臨地講話

第五日 講演「奈良美術の世界的意義」

矢代幸雄 於奈良縣公會堂

法隆寺地方見學臨地講話

第六日 奈良市内見學、臨地講話

第七日 奈良郊外、西の京地方見學 臨

地講話

九月

奈良帝室博物館列品講座 九月三日

「校倉の語」(續)岸熊吉

奈良帝室博物館列品講座 九月十七日

「長谷川信春に關する疑問」土居次義

考古學會講演會 九月十八日 於東京美

術學校第九講義室

「渤海故都出土の瓦磚について」駒井和

愛

成層美術講演會 十月一日 於目黒南

郊繪畫研究所

「寫實の本質と限界」甘粕石介

奈良帝室博物館列品講座 十月一日

「不動明王の形相」明珍恆男

考古學會講演會 十月十五日 於東京美

術學校第九講義室

「上總菅生遺蹟の一考察」大場磐雄

奈良帝室博物館列品講座 十月十五日

「我が國に於ける古文書の傳來」赤松俊

秀

浮世繪同好會講演會 十月十九日 於

日本橋經濟俱樂部

「世界に分布せる浮世繪」藤懸靜也

第八回東方文化講演第一回 十月二十



五日 於東大法學部第二十五番講堂

「渤海國上京の街坊に就いて」原川淑人

京大美術觀賞講座 十月二十七日 於

京都樂友會館

「繪卷物の觀賞」望月信成

大阪市立美術館第二十回美術講演會

十月二十九日

「美と工藝」柳宗悅

# 十一月

京大美術觀賞講座 十一月四日 於京

都樂友會館

「障壁畫の觀賞」土居次義

早稻田大學文學部第七十二教室

於同大學文學部第七十二教室

「鎌倉彫刻の諸問題」吉田長善

奈良帝國博物館列品講座 十一月五日

「上代の馬具に就いて」梅原末治

文化學院美術講演會 十一月六日 於

駿河臺 同學院

「時局と美術」中川紀元

「デッサンの話」兒島喜久雄

「洋畫と日本精神」石井柏亭

京大美術觀賞講座 十一月十一日 於

京都樂友會館

「佛像の觀賞」源豐宗

大阪市立美術館第二十一回講演會 十

一月十二日

「技法より見たる洋畫の鑑賞」須田國太郎

奈良帝國博物館列品講座 十一月十九

日

「日本彫刻に於ける立體性の展開」源豐宗

東方文化研究所公開講演並に展覧 十

一月二十六日 於京都同所

「雲岡石窟に就いて」水野清一

「大同龔都時代の北魏佛教」塚本善隆

展覧・雲岡石窟資料六十點

考古學講演會 十一月二十六日 於東

京美術學校第九講義室

「南京に於ける最近の考古學研究」松本

信廣

# 十二月

藥師寺の會講演 十二月一日 於大阪

高島屋

「北支滿鮮古美術行脚」池田谷久吉

ラヂオ放送(國內)

名古屋・趣味講演 一月七日

「虎の美術史」中川伊作

東京第一・婦人の時間 一月十一日

「押繪と羽子板」山田徳兵衛

東京第一・婦人の時間 一月二十一日

「各國服裝の特徴」和田三造

東京第二・國民講座―現代建築の話―

二月一日「諸官衙の建築」伊部貞吉

二月三日「美術博物館」岸田日出刀

二月五日「劇場建築」佐藤武夫

二月八日「オフィス建築」山下壽郎

二月十日「アパート建築」中村寛

東京第一・趣味講座 二月二日

「刀の鐔の話」永田與吉

前橋 二月三日

「歐美美術行脚より歸りて」塚本茂

名古屋・二月三日

「畫僧風外について」杉浦冷石

東京・趣味講座(京都より) 二月六日

「松花堂昭乗と近衛關白」井川定慶

大阪・講演(金澤、富山) 二月九日

「雪の畫」石井柏亭

東京第二・特輯講座(名古屋より) 二

月十一日

日本精神三講の中「藝術に現はれた日本

精神」鼓常良

東京第二・國民講座―我國の工藝―

(一―三)

二月十二日「金工」海野清

ヨリ三回

二月十九日「陶器」富本憲吉

ヨリ四回

三月二日「織染」龍村平藏

(ハ―九)

ヨリ二回「刺繡」山鹿清華

(十)

三月五日「漆器」松田權六

(十一―十三)

ヨリ三回

東京第一 二月二十八日

「雜祭と日本精神」西澤信誠

東京第二・日曜特輯講座 三月六日

「江南に従軍して」清水登之

東京第二・今日の知識 四月一日

「超現實派繪畫の心理學的な見方」内川

勇三郎

東京第一・中學生の時間 四月八日

偉人の青年時代「雪舟」森本義彰

東京第二・女子青年講座 四月八日

「教養としての美術」荒城季夫

京城・趣味講演 四月十五日

「新しい洋畫の創作と觀賞」里見勝藏

東京第一・講演 四月二十六日

「博覽會の觀方と出品の仕方」永山定富

東京第二・今日の知識 四月二十六日

「春の畫壇に就いて」富永惣一

東京第一・講演 五月七日

「防空と建築」佐野利器

大阪第一・趣味講演 五月十三日

「大阪の工藝」津田信夫

東京第一・講演 五月十五日

「戰爭畫に就いて」瀧精一

東京第二・女子青年講座 五月三十一

日、六月一日

「漆器の扱ひ方」六角紫水

「木製家具の上手な扱ひ方」木槍惣一

東京第二・國民講座、科學解説 六月

二日

「工藝品に使はれる合金」橋本宇一

東京、大阪第一・趣味講演 六月四日

「夏の花鳥畫」堂本印象

福岡・趣味講演 六月四日

「旅の印象」太田三郎

東京第一・修養講話 六月五日

「書畫と人格」中村不折

長野・講演 六月二十五日

「美術鑑賞について」青山隆治

東京第一・趣味講座 七月十日

「名工伊豆の長八」結城素明

東京第二 七月十五日

「陶磁器の特質と利用」伊藤亮

東京第一・婦人の時間

「耳の美しさ」西川正秋

東京第二・七月二十七日

物語「田能村竹田」高尾亮雄

東京第二 八月二日

「國際情勢と藝術界今後の動向」 鼓常良

東京第二・講演 九月十二日

「事變下の美術展」 荒城季夫

大阪・特輯講座 九月二十四日

「近畿の古美術を語る」 岸蕉吉

「近畿地方の彫刻を尋ねて」 京都・源豊宗

「近畿美術工藝巡禮」(京都) 廣瀬都賀

名古屋・趣味講演 十月五日

「戦時下の繪畫と渡邊巖山」 杉浦冷石

東京第二・日曜特輯講座 十月九日

「輸出工藝を語る」 鹽谷狩野吉、國井喜太郎、和田三造、山崎覺太郎、高村豐周

飯野逸平、岡田友次

東京第二・講演 十月十二日

「藝術を通して見たフランスの國民性」 高橋廣江

名古屋・講演 十月十二日

「時局と日本工藝の材料」 山口良三

京城・講演 十月十二日

「防空と建築」 佐野利器

東京第一・子供の時間 十月十五日

「スケッチの仕方」 三宅克己

大阪・郷土一夕話(大分縣の巻) 十月二十二日

「臼杵の石佛」 久多羅木儀一郎

東京第二・青年講座 十月二十四日

支那の文化と社會の内「美術工藝」 奥村伊九良

東京第二・日曜特輯講座 十月三十日

「戦争と藝術の内」 戦争と美術」 柳亮

美術講演・講義

大阪・特輯講座 十一月三日

明治時代の關西文化を語るの内「關西繪畫界の黎明」 中井宗太郎

岡山・趣味講演 十一月五日

郷土の常識(一)「畫雪雪舟を語る」 渡邊知水

東京・講演 十一月七日

「輸出工藝の振興に就て」 明石國助

東京・母の時間 十一月九日

「兒童の圖畫と手工」 山形寛

名古屋・講演 十一月二十六日

「輸出工藝に就て」 菅原省三

東京・日曜特輯講座 十一月二十七日

日本美術と博物館

「帝室博物館復興開館に際して」 杉榮三郎

「日本美術の鑑賞」 溝口頑次郎

「古美術の保存」 荻野伸三郎

「美術教育と博物館」 芝田徹心

東京・趣味講演 十二月二日

「中支那の風景」 藤田嗣治

東京・子供の時間 十二月六日

支那のお話(五)「支那の建築」 藤島亥治郎

東京・講演 十二月十日

「日本主義の畫家菅原白龍」 本間久雄

大阪・趣味講演 十二月二十三日

「挿畫と大衆文藝」 小田富彌

名古屋・講演 十二月二十九日

「最近史蹟に指定された大高城址並びに丸根城址」 山口平三郎

東京第二・講演 十二月三十一日

「岡倉天心の東洋論」 安倍能成

ラヂオ放送(海外向)

四月二十五日・英譯原稿代讀

「日本の輸出漆器」 六角紫水

五月十六日・英譯原稿代讀

「美しい日本甲冑の話」 山上八郎

八月二十一日・獨語

「獨乙に於て開催される日本美術展に就て」 友枝高彦

九月一日・英譯原稿代讀

「形と色に關する一考察」 富本憲吉

九月八日・佛語

「日本の美術に就て」 ベルナル・リュカ

九月八日・英譯原稿代讀

「器と心(工藝の話)」 長島貴三

九月二十六日・英語

「日本の手工藝」 柳宗悅

十月七日・英譯原稿代讀

「日本人の生活と美術」 鼓常良

十月十日・伊語

「今日の日本藝術の諸問題」 有島生馬

十月二十一日・佛語

「日本の美術シーズンを語る」 川路柳虹

十一月十七日・佛譯原稿代讀

「日本建築の特徴」 岸田日出刀

十一月二十一日・佛語

「日本現代美術の話」 西脇マジョーリ

十一月二十六日・佛語

「日本畫の構成と鑑賞」 長谷川路可

十一月二十八日・佛譯原稿代讀

「繪畫に於ける日佛の交渉」 田邊孝次

十二月二十四日・佛譯原稿代讀

「日本の彫刻」 佐々木素雲

各大學美術史講座

〔官立〕

東京帝國大學

「文學部美術史學科」(美學) 美學概論「美的範疇論(美ノ特殊形態)」美學

演習 Baumeister: Hegels Aesthetik」教授大西克禮、「西洋音樂史概説(文藝復興期ヨリ)」講師遠藤宏、「美術史」日本

美術史概説(鎌倉時代ヨリ)」「宋元畫ノ研究」美術史演習(讀及作例展開)」「教授藤懸靜也、「西洋美術史概説(希臘美術史)」西洋美術史各論(十九世紀後半ノ繪畫史)」助教授兒島喜久雄、「泰東陶磁史概説」講師奥田誠一

(考古學)「東洋考古學概説」「考古學演習」講讀(新唐書車服志)」「教授原田淑人、「滿洲考古學」講師駒井和愛

京都帝國大學

「文學部哲學科」(美學美術史)「美學序論」「美に於ける形象と超形象」「演習(美學の諸問題)」教授植田壽藏、「大和繪の展開」講師源豐宗、「藝術の歴史と批評との關聯」講師井島勉

「文學部史學科」(考古學)「考古學概論」「日鮮考古學」「演習(東亞考古學の諸問題)」「考古學實習」「考古學獨書講讀」教授梅原末治、「支那考古學(漢ヨリ唐ニ至ル)」講師水野清一、「埃及第十八王朝史」講師岡島誠太郎

東北帝國大學

〔法文學部〕（美學及藝術學）「美學概論」「特殊講義（作品研究ウイヘルム・マースターとフアウスト）」「演習（Gundolf Goethe）」教授阿部次郎、（音樂論及音樂史）「音樂史（近代フランス音樂）」「音樂論（ベートーヴェンの音樂）」講師加藤成之、（日本美術史）「日本美術史概説（東洋美術史）」「特殊講義（代表的遺作の研究）」「演習（自由討究）」教授福井利吉郎、（西洋藝術史）「特殊講義（初期ギリシャ彫刻研究）」「演習（ルネッサンス美術史）」講師村田潔

九州帝國大學

〔法文學部〕（美學美術史）「美學概説第一部」「美學演習 Worringer: Abstraktion und Einfühlung」「支那畫論史」教授矢崎美盛、「九州上代文化史演習」講師鏡山猛

京城帝國大學

〔法文學部哲學科〕（美學美術史）「美學概論」「西洋美術史」「美學、美術史演習」教授上野直昭、「東洋美術史」「日本美術史（日本繪畫史）」「美術史籍講讀」教授田中豐藏

〔法文學部史學科〕（考古學）「朝鮮考古學」教授藤田亮策

東京文理科學大學

（美學及考古學）休講  
（藝術史）「日本藝術史」講師瀧精一

〔私立〕

大谷大學（考古學）（美術史）休講

慶應義塾大學（文學部）（東洋美術史）

「日本繪畫史（後半）」丸尾彰三郎、「西洋美術史、藝術學」「イタリーの繪畫」「藝術學概論」「守屋謙二、（美學）」「美學概論」大西克禮、（考古學）「實習指導」柴田常惠

高野山大學（文學部佛教藝術學科）

「美學概論」「平安朝ノ佛教繪畫」佐和隆研、「佛教美術概説」「日本近代繪畫史」「高野山ノ佛教美術演習」岡直巳、「滿洲及北支ノ佛教美術」逸見梅榮

國學院大學（美術史）「日本美術史（神道美術史）」教授藤懸靜也、（考古學）「考古學」講師大場繁雄

駒澤大學「日本美術史」笹川種郎

大正大學「美學」大西克禮、「佛教美術」脇本十九郎、「考古學」八幡一郎

東洋大學（文學部哲學科）「美學概論」

大西克禮

同志社大學

（文學部哲學科英文學科）

（美學）「美學概論」「崇高ノ心理」教授岡頼三

立正大學（美學及美術史）「美學概論」

講師西宮藤朝、「日本美術史」講師藤懸靜也、「支那佛教美術史」講師逸見梅榮

龍谷大學（美學、美術史）休講

早稻田大學（文學部哲學科藝術學專攻）

「東洋美術史」「東洋美術研究」教授會津八一、「西洋美術史」「西洋美術研究」講師坂崎坦、「美學」講師大西昇、「東洋美術史研究」（哲學科選科）教授會津八一

〔文學部史學科〕「東洋美術史」「日本古代史（寧樂美術史）」教授會津八一、「考古學概論」教授西村貞次

# 古美術展覽會・展觀

一月

## 置物根付印籠特別陳列

一月六日—二十八日 大阪市立美術館

## 日本民藝館特別展

一月六日—二月二十八日 駒場・日本民藝館

同館及び水谷良一蒐集の琉球の古い紅型、織物、型紙の類約百點並に同館及び土井濱一所藏の李朝水滴約七十點を展觀した。

## 日本刀名作展

一月十四日—十七日 神戸・三越

## 神戸日日新聞社主催

## 紹興出土古鏡特別陳列

一月十五日—三十一日 大阪市立美術館

最近支那浙江省紹興地方より發掘せる古鏡三十五點を陳列した。主に畫像鏡で、時代は後漢より三國時代頃に屬するものである。

## 俳諧古人眞蹟展

一月二十一日—二十七日 日本橋・高島屋

高島屋美術部主催、信濃某家の舊藏に係る其角、蕪村一茶、涼袋、破笠、宗因等の俳句、俳畫、七絶など三八點を萩原井泉水の鑑選で陳列した。

## 古九谷展

一月二十六日—三十一日 銀座西・彩雅房

## 東京帝室博物館繪畫陳列

一月中 同館

東京帝室博物館一月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。

## 鎌倉時代

古美術展覽會・展觀

## 源順像

太宰大貳像

丹波守元眞像

素性法師像

柿本人丸像

維摩詰足像

足利義政像

壬生忠峯像

俊成、定家、堯孝像

藤原、鎌倉時代

樹色紙

中院切

時代不同歌合

其他

室町、桃山時代

竹林七賢圖屏風

龍虎圖屏風

江戶時代

金銀泥繪貼交屏風

花車圖屏風

金銀泥繪歌卷物

新三十六歌仙

石橋山、江之島、箱根圖

加茂祭、近江八景圖

布袋、梅鶴、南天鴨圖

龍、維摩、虎圖

布袋、松竹圖

奈良帝室博物館繪畫陳列

一月中 同館

奈良帝室博物館一月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶)

○山水圖

館

○瀟湘八景圖

○巖子陵及虎溪三笑圖

七賢人四詰圖

四季娛樂狩獵圖

山水圖

○源氏物語末摘花卷

都鄙繪卷

布袋圖

蓮華圖

洗馬圖

常麻寺緣起繪卷

柿本人丸像

恩賜京都博物館繪畫陳列

一月中 同館

恩賜京都博物館一月陳列替品目の内主なる國寶は左の通りであつた。

竹石白鶴圖

扇面古寫經繪

福富草紙

風神、雷神圖

鳴鶴圖

龍虎圖

楊柳觀音像

讀漢書詩

風信狀

史記

玉篇

古詩殘簡

古今集切

靈元天皇宸翰御消息

紙本墨畫 四幅 京都市東海庵

狩野元信 一雙 同 妙心寺

○巖子陵及虎溪三笑圖 紙本着色 一雙 同 奈良縣長谷寺

七賢人四詰圖 同 同 奈良縣長谷寺

四季娛樂狩獵圖 金地着色 一隻 奈良市興福院

山水圖 紙本着色 一雙 奈良縣西大寺

○源氏物語末摘花卷 紙本着色 一卷 滋賀縣石山寺

都鄙繪卷 紙本着色 一卷 奈良市興福院

布袋圖 紙本淡彩 一幅 奈良縣能滿院

蓮華圖 紙本着色 同 京都市男爵水谷川忠磨

洗馬圖 紙本墨畫 一幅 同 本館

常麻寺緣起繪卷 紙本着色 一卷 奈良縣當麻寺

柿本人丸像 紙本着色 一幅 同 瀧上寺

恩賜京都博物館繪畫陳列 網本着色 一幅 同 同

一月中 同館 傳狩野正信筆 一隻 眞珠庵

竹石白鶴圖 傳狩野正信筆 一面 四天王寺

扇面古寫經繪 傳狩野正信筆 二卷 春浦院

福富草紙 傳野々村宗達筆 一雙 建仁寺

風神、雷神圖 文正筆 雙幅 相國寺

鳴鶴圖 牧溪筆 一幅 大德寺

龍虎圖 牧溪筆 一幅 長樂寺

楊柳觀音像 伏見天皇宸翰 一卷 靈洞院

讀漢書詩 弘法大師筆 一卷 教王護國寺

風信狀 同 同 石山寺

史記 同 同 高山寺

玉篇 同 同 本館

古詩殘簡 同 同 曼殊院

古今集切 同 同 同

靈元天皇宸翰御消息 同 同 圓通寺

古美術展覧會・展觀

論語	寬元元年	四卷	高山寺
篆隸文體	藤原時代	一卷	毘沙門堂
華蓋	鎌倉時代	一枚	金剛寺
金銅琵琶・虎模模	同	一面	丹生都賀神社
銅鏡・佛像毛彫	同	同	輪王寺
水品舍利塔	足利時代	一基	實藏坊
銅磬・仁年在銘	藤原時代	一面	峯定寺
同・在銘	鎌倉時代	同	金剛輪寺
同・建保在銘	同	同	輪王寺
油滴天目茶盃	同	一箇	龍光院
耀變天目茶盃	同	同	同
井戸茶盃・銘筒井筒	同	同	毘沙門堂
青磁鳳凰耳花瓶	同	同	同
蓮花蒔繪經箱	藤原時代	一合	勤修寺
一切經唐櫃	同	一合	同
一切經箱	中宮	一合	大長壽院
黑漆螺鈿鞍	傳藤原清衡等所納	一合	春日山比咩神社
蒔繪調度類	同	十四種ノ	高臺寺
	桃山時代	同	同

二月

充美會陽春の古美術展觀

二月一日―七日 大阪・阪急百貨店

英一蝶と門流畫稿展

二月六日―十一日 大阪・三越

大阪三越主催、英一蝶の門流は元祿より相續いて明治に及んだが、その最後の人である英一蜻が舊藏せる同家代々の人の描き遺した粉本を陳列即賣に附した。(展觀案内記事に依る)

法隆寺金堂壁畫複製品展觀

二月八日―三月十日 恩賜京都博物館

岡野繁藏氏東印度遺存古陶磁展觀

二月十八日―十九日 美術研究所

美術懇話會では二月の例會を十八日美術研究所に開催し、岡野繁藏が前後二十年に亘り東印度諸島に於て蒐集

した東洋陶磁約三千點の中より約二百五十點を陳列し、併せてこの蒐集に協力した齋藤正雄の「東印度遺存の古陶磁に就て」なる講話を行つた。陳列品は漢唐以後の支那陶器、青磁彩色陶磁器、染付、日本の伊萬里、薩摩、九谷、安南、交趾、トンキン、カンボヂヤ、宋胡錄等に亘り、中々の優品を數へ興味深い展觀であつた。尙美術研究所では引續き十九日これを公開展觀した。

日本刀展

二月十九日―三月十日 伊賀上野・伊賀文化産業城

財團法人伊賀文化産業協會主催

池田庄太郎蒐集佛教美術展(佛畫、佛具、經卷)

二月二十三日―二十七日 大阪・南海高島屋

英一蝶と門流畫稿展

二月二十六日―三月四日 神戸・三越

東京帝室博物館繪畫陳列

二月中 同館

東京帝室博物館二月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。

平安、鎌倉、室町時代

繪殿聖德太子傳繪屏風(御物) 秦致貞筆

狹衣物語畫卷殘欠

狹衣物語畫卷殘欠

北野天神緣起畫卷殘欠

山王靈驗記畫卷殘欠

打毬圖

堅田圖

竹生島祭禮圖

桃山時代

夏冬山水圖屏風

山水圖屏風

鎌倉時代

蒙古襲來繪卷(摹本)

江戸時代

東海道五十三次圖屏風

琴棋書畫圖屏風  
夏冬山水圖屏風  
虎圖屏風  
隅田川兩岸圖卷  
花卉寫生畫帖  
奈良帝室博物館繪畫陳列  
二月中 同館

奈良帝室博物館二月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶)

○多聞天像十二天像ノ内

○星曼荼羅圖

○聖德太子御像

○佛涅槃圖

○持鉢釋迦如來像

○八相涅槃圖

○小野篁像

○水天像

○廣目天像(四天王增長天像ノ内)

○華嚴五十五所繪

○東征繪卷

○弘法大師行狀繪卷

○佛涅槃圖

○阿彌陀如來廿五菩薩來迎圖

○聖德太子勝鬘經御講讀圖

○六觀音菩薩像

○十一面觀世音菩薩像

○池見觀音菩薩像

○虛空藏菩薩像

○地藏菩薩像

○阿彌陀如來地藏十王圖

○藥通念佛緣起繪卷

一 絹本着色 貞觀 奈良縣 西大寺  
一 絹本着色 藤原 同 法隆寺  
一 絹本着色 鎌倉 兵庫縣 鶴林寺  
一 絹本着色 同 奈良縣 新藥師寺  
一 絹本着色 同 滋賀縣 西教寺  
一 絹本着色 同 福井縣 劍神社  
一 絹本着色 同 奈良縣 弘仁寺  
一 絹本着色 同 大津市 園城寺  
一 絹本着色 同 滋賀縣 淨信寺  
一 絹本着色 同 奈良市 東大寺  
一 絹本着色 同 奈良縣 唐招提寺  
一 絹本着色 同 京都市 教王護國寺  
一 絹本着色 同 奈良縣 宗祐寺  
一 絹本着色 同 同 大藏寺  
一 絹本着色 同 室町 滋賀縣 寶嚴寺  
一 絹本着色 同 奈良縣 靈山寺  
一 絹本着色 同 同 能滿院  
一 絹本着色 同 滋賀縣 寶嚴寺  
一 絹本着色 同 奈良縣 法隆寺  
一 絹本着色 同 奈良縣 能滿院  
一 絹本着色 同 同 大師堂  
一 絹本着色 同 京都市 清涼寺



文殊菩薩像 絹本着色 一巻 鞍馬寺  
二河白道曼荼羅 同 同 豐臣秀吉消息  
一行阿闍梨像 同 同 一巻 高臺寺  
妙音天像 同 同 同 同

恩賜京都博物館繪畫陳列

二月中 同館

恩賜京都博物館二月陳列品目の内主なる國寶は左の通りであつた。

羅漢像 十六幅ノ内一幅ノ來迎寺  
賴朝像 一幅 神護寺  
不動明王像 同 大林院  
山越阿彌陀地獄極樂圖 一組 金戒光明寺  
聖德太子勝鬘經講讃圖 一幅 西來寺  
阿彌陀三尊像 同 醍醐寺  
傳菊池能蓮像 同 菊池神社  
武人調馬圖 同 醍醐寺  
兩界曼荼羅 二面 來迎寺  
釋迦堂緣起 三卷ノ内 清涼寺  
風竹圖 一幅 圓光寺  
柿圖 同 龍光院  
夏冬山水圖 同 金地院  
不空三尊像 一幅 高山寺  
十六羅漢圖 十六幅ノ内八幅ノ相國寺  
二祖調心圖 同 正法寺  
東寺塔供養御願文 一卷 教王護國寺  
手鑑 一帖 林圀寺  
僧最澄入唐牒 一卷 延曆寺  
二荒山碑文 同 神護寺  
後鳥羽天皇宸翰御置文 同 水無瀬神宮  
後醍醐天皇宸翰御消息 同 曼殊院  
傳教大師慶緣 同 來迎寺  
選擇集 一册 山寺  
東畠和尚蒙古退治祈願文 一幅 正傳寺  
東畠和尚蒙古退治祈願文 一卷 同

三月 月

寧樂古美術展

三月一日—六日 大阪長堀・高島屋  
肉筆浮世繪展並鑑藏寺、加太淡島神社人形展觀  
三月十二日—二十七日 大阪市立美術館

主として京阪地方の蒐集家二十余名の蒐藏に係る肉筆浮世繪を展觀した。尙同時に出陳の人形は六十餘點で、京都鑑藏寺の御所人形は同寺尼門跡が徳川中期御所から拜領せるもの、又和歌山縣加太淡島神社の人形は尾州徳川家より拜領のもので、ともに當時の風俗趣味を窺ふ好資料である。(大毎三・二記事に依る)

左に陳列浮世繪の目錄を掲げる。

大阪市 尼崎伊三郎藏 海士圖 六曲屏 岩佐貞雲  
蚊帳美人圖 一幅 懷月堂安 美人圖 同  
美人喫煙圖 同 梅翁野永 揚屋圖 一幅  
立美人圖 同 鳥居清忠 住吉神社圖 六曲  
男女遊宴圖 小屏 西川祐信 京都市 入江波光藏  
美人圖 一幅 宮川一笑 北野神社圖 六曲屏  
渡船二美人 同 歌川豐廣 男女宴舞圖 一雙  
辰巳藝者圖 同 歌川豐國 大阪府 上川令吉藏  
若菜摘圖 同 歌川國貞 美人觀櫻圖 一幅 宮川春水  
美人大顔 同 祇園井持 和歌山縣 加太淡島神社  
額 一面 矢根圖 一面 鳥居清滿  
池戸宗三郎藏 五條橋圖 同 英一笑  
小塚原圖 一幅 菊池容齋 芝居繪 同 歌川國貞  
三重縣 伊藤蟠堂藏 同 同 同 同  
美人圖 一幅 傳土佐光 武内宿禰圖 扁額  
京都市 今井泰藏藏 大阪府 木原忠兵衛藏 人形使圖 一幀  
人形遺圖 一幅 月間雪齋 梅花美人圖 一幅 駒養齋  
大阪市 清海復三郎藏 立美人圖 一巻 龍壽長  
風俗畫卷 一巻 男女花見圖 一巻 歌川豐春  
三絃美人圖 同 遊樂圖卷 一巻 同 歌川國貞  
觀櫻圖 同 觀美人圖 同 同 同 同  
拿美人圖 同 美人花車圖 同 上 龍  
圓窓美人圖 同 圓窓美人圖 同 眞 龍  
京都市 雜 華院藏 二條照美夫人像 一幅  
涼岩受招信女像 一幅 京都市 芝辻安吉藏  
立美人圖 一幅 若衆圖 同  
雪中美入圖 同 夏姿美人圖 同  
生鴈新五郎圖 同 蚊帳美人圖 同  
近藤勝信 鳥居清滿 宮川長春 大津繪青面  
雪中美入圖 同 奧村政信 西川祐信 大津繪立美  
圖十郎舞臺 同 大津繪立美 同  
美人觀櫻圖 同 正月遊戯圖 同 宮川一笑 竹内栖鳳藏  
柳下對話圖 同 紅葉圖 同 北尾常政 立美人圖 一幅  
梅花美人圖 同 庭櫻圖 同 同 同 同  
柳下美人圖 同 石橋圖 同 同 同 同  
釣狐圖 同 同 同 同 同 同  
樓上二美人 同 同 同 同 同 同  
人形使圖 一幀 月間雪齋 年中行事圖 六曲  
一雙

京都市 登内微笑藏 三上芳直藏

都十二帖 一帖 物語繪 一帖

三十二相 二帖 立美人圖 一幅

鐵炮自當定 一帖 美人圖 同

卷九 一帖 兵庫縣 山本發次郎藏

京都市 內藤孝三郎藏 阿國歌舞伎圖(重要美術) 六曲

神樂圖 一幅 阿國歌舞伎圖(重要美術) 一雙

大阪市 野村德七藏 阿國歌舞伎圖 同

風俗圖 六曲 女虛無僧圖 一幅

京都市 藤井乙男藏 櫻下遊宴圖 六曲

若衆圖 一幅 中屏 一雙

美人圖 同 細田榮之 清水寺男女 同

和歌山縣 寶龜院藏 遊樂圖(俗 謠ヲ書ク) 一幅

山川檢校夫 一幅 若衆圖 同

妻像 一幅 京都市 松本善右衛門藏 石川豐信

豐公花見行 六屏 一雙

列圖 一幅

西村古邨遺愛文人畫展

三月十三日—三十一日 恩賜京都博物館

滋賀縣蒲生郡市ノ邊村西村重郎兵衛所藏の文人畫を展  
觀した。いづれも同人の祖父古邨がその在世時に於て揮  
毫せしめたもので、筆者三十九家の大半は翁と親交があ  
り、徳川末期より明治初年に至る文人畫界の趨勢を知る  
に好資料となるものである。展觀目錄を左に掲げる。

寒江獨釣圖 絹本水墨 一幅

秋林山水圖 絹本淡彩 一幅

風雨赴釣圖 絹本淡彩 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

梅圖 絹本水墨 一幅

名花十友圖 絹本着色 一幅

前田暢堂 同

老樹山金圖 同

竹林圖 同

山水圖 同

山水圖 同

山水圖 同

枯木竹石圖 絹本淡彩 一幅

米法山水圖 絹本淡彩 一幅

溪上尋詩圖 絹本淡彩 一幅

池塘春禽圖 絹本淡彩 一幅

秋景山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

關山行旅圖 絹本淡彩 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

山水圖 絹本水墨 一幅

木菟 渡邊南岳 一幅

秋景山水 大倉笠山 一幅

鴉 谷文晁 一幅

葡萄 李上佐 一幅

三井親和像 齊田湖龍 一幅

花魁 西村清狂 一幅

母子雞 清々村仁 一幅

松下美人 紫藤磨 一幅

柳下騎牛童 欽形惠齋 一幅

雪中花鳥 宋紫山 一幅

蓮飯に雀 伊藤若沖 一幅

鯉魚 伊藤若沖 一幅

花下猶兒 田龍山 一幅

雄鷄 伊藤若沖 一幅

富貴寺壁畫模寫並寫真展觀

三月二十六日 美術研究所

美術懇話會は三月例會に於て大分縣富貴寺の壁畫を紹  
介した。堂本印象が去る昭和五年同寺に赴き前後數ヶ月  
に互つて模寫した壁畫の模本並に昨年美術研究所が出張  
撮影した寫眞を展觀し、なほ同壁畫の實地調査に當つた  
美術研究所助手豐岡益人の講話を行つた。右は九州地方  
に於ける唯一の藤原時代壁畫で、極めて優れた作である  
が邊陲の地にある爲比較的世に紹介されることの少かつ  
たものである。模本はこの壁畫の殆んど全部を原寸大に  
模寫し、忠實にして而も生彩あるものであつた。

成田山開基一千年記念寶物展

三月二十八日—五月二十八日 成田公園新會、成

田山境内 圖書館

成田山新勝寺開基一千年祭に際し、同山所藏寶物の一

部を陳列した。能面、刀劍、軸物、繪馬、書蹟、飾繪の

類である。

日本民藝館第八回特別展觀

三月二十九日—五月一日 目黒區駒場・日本民藝館

主として南方支那産の赤繪大平鉢約五十點を陳列、之は現在支那本土にはなく、日本に於てのみ見出せるもの、別に萬曆、天啓等の赤繪凡そ三十點を出陳した。出品者は石井恆、石井克己、伊藤駿一、水谷良一、民藝館等。

日伊學會主催伊太利親善使節招待會展觀

三月三十一日—四月一日 大倉集古館

日伊學會に於ては三月下旬來朝の伊太利訪日親善使節ジャコモ・パウリツチ侯の一行を三月三十一日赤坂の大倉集古館に招待し、諸家所藏の國寶、重要美術品等をはじめ二十數點の繪畫を陳列展覽に供した。目錄は左の通りである。

陳列目錄

- |       |           |
|-------|-----------|
| 屏風    | 吹笛地蔵圖 探幽筆 |
| 花鳥圖   | 雪舟筆       |
| 山水圖   | 元信筆       |
| 蹴鞠圖   | 男爵 大倉喜七郎藏 |
| 犬追物圖  | 不詳        |
| 扇面散屏風 | 根津嘉一郎藏    |
| 泰西風俗圖 | 不詳        |
| 鶴圖    | 光琳筆       |
| 東下圖   | 男爵 大倉喜七郎藏 |
| 山水圖   | 大雅堂筆      |
| 掛物    | 伊能藏       |
| 大日如來像 | 不詳        |
| 花鳥圖   | 男爵 大倉喜七郎藏 |
|       | 雪村筆       |

東京帝國博物館繪畫陳列

三月 同館

古美術展覽會・展觀

東京帝國博物館三月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶)

平安、鎌倉、室町時代

- |       |        |        |         |          |          |       |        |      |         |       |         |            |         |      |         |       |         |       |        |        |                   |       |                             |
|-------|--------|--------|---------|----------|----------|-------|--------|------|---------|-------|---------|------------|---------|------|---------|-------|---------|-------|--------|--------|-------------------|-------|-----------------------------|
| 釋迦六祖像 | 淨土曼荼羅圖 | ○二河白道圖 | ○普賢十難利像 | ○寶樓閣曼荼羅圖 | ○寶樓閣曼荼羅圖 | 十六善神像 | 日吉曼荼羅圖 | 室町時代 | 商山四皓圖屏風 | 山水圖屏風 | 鎌倉、室町時代 | ○松ヶ崎天神緣起繪卷 | 清水寺緣起繪卷 | 江戸時代 | 宮島祭禮圖屏風 | 宮島圖屏風 | 蘭亭曲水圖屏風 | 山水圖屏風 | 洛中洛外圖卷 | 明和南宗畫冊 | 奈良帝國博物館繪畫陳列(○印國寶) | 三月 同館 | 奈良帝國博物館三月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。 |
| 同     | 同      | 同      | 同       | 同        | 同        | 同     | 同      | 同    | 同       | 同     | 同       | 同          | 同       | 同    | 同       | 同     | 同       | 同     | 同      | 同      | 同                 | 同     | 同                           |

四月

港屋主催茶器、古陶、時代繪畫展觀

四月一日—五日 日本橋・白木屋

大毎主催東洋大美術展

四月一日—二十日 大阪市立美術館

- |            |              |            |            |         |        |           |         |        |         |         |           |         |           |           |            |          |        |   |
|------------|--------------|------------|------------|---------|--------|-----------|---------|--------|---------|---------|-----------|---------|-----------|-----------|------------|----------|--------|---|
| ○明空法師像     | ○信貴山緣起繪卷     | ○般若多羅十六善神圖 | ○尊勝曼荼羅圖    | ○山王本地佛像 | ○天台大師像 | ○法然上人行狀繪卷 | ○夢窓圓師像  | ○關廬主圖  | ○佛涅槃圖   | ○愛染明王像  | ○不動明王二童子像 | ○十王圖    | ○弘法大師行狀繪卷 | ○梵天像(十二天) | ○地天像(十二天)  | ○地藏菩薩像   | ○吉祥天像  | ○新開社主催の東洋古美術展は、數年一種の流行をなして、計畫の遺漏、空疎な宣傳等の缺陷がないでもなかつたが、兎に角平常古美術に親しむことの薄い一般大衆に古美術鑑賞の機會を提供した點に於て功績顯著なるものがあつた。而して從來その殆んど總てが東京で開催されたのに對して、關西に於て行はれたことにこの展觀の |
| 絹本着色       | 紙本着色         | 木板繪        | 絹本着色       | 絹本着色    | 絹本着色   | 絹本着色      | 絹本着色    | 絹本着色   | 絹本着色    | 絹本着色    | 絹本着色      | 絹本着色    | 絹本着色      | 絹本着色      | 絹本着色       | 絹本着色     | 絹本着色   | 絹本着色  |
| 鎌倉 滋賀縣 佛心寺 | 藤原 奈良縣 朝護孫子寺 | 藤原 名古屋市 七寺 | 鎌倉 大津市 園城寺 | 滋賀縣 觀音寺 | 同 延曆寺  | 奈良縣 常樂寺與院 | 京都市 妙智院 | 堺市 長泉寺 | 滋賀縣 石山寺 | 滋賀縣 寶山寺 | 滋賀縣 石山寺   | 京都市 二尊院 | 教王護國寺     | 鎌倉 同      | 室町 滋賀縣 西明寺 | 奈良縣 南法華寺 | 江戶 寶山寺 | 同   |



山水圖	楊月筆	京都平瀨陸	△鳥居貫之社人圖	英一蝶筆	東京伯部正直	京靈佳色圖	熊斐筆	松城長谷川治郎兵衛
三保松原圖	狩野正信筆	大阪平尾喜三郎	△布磨舞圖	同	東京遠山元一	聖德太子御像	柳里恭筆	石川岩井慶次郎
○周茂叔愛蓮圖	狩野元信筆	東京小金倉彰	源氏繪帖	土佐光吉筆	東京恩賜京都博物館	山水圖	祇南筆	東京東山美術學校
澤源閣山水圖	同	京都龍安寺	△牟禮高松圖	土佐光起筆	東京齊藤利助	△柳塘圖	彰百川筆	東京藤瀬新一郎
三酸圖	狩野之信筆	同	扇面流圖	小川破笠筆	同	漁樂圖	池大雅筆	兵庫松山與兵衛
桃井直詮像	傳土佐光信筆	京都帝室博物館	○西行法師行狀繪詞	傳光悅筆	同	餘杭扇勝圖	同	同
△牡丹花骨柏像	同	京都帝室博物館	○風神雷神圖	依屋宗達筆	東京同	○十便帖	同	同
△布袋圖	葛閣筆	京都森川勘一郎	○扇面圖	野村宗達筆	東京同	○甲子紀行圖	與謝藤村筆	東京同
職人盡圖	同	東京萩野仲三郎	○連池馬圖	同	東京馬越泰一	△奧の細道圖	同	同
騎馬武者圖	小野通女筆	橫濱東京富太郎	○鄧國圖	尾形光琳筆	東京同	△新綠杜鵑圖	同	同
松鷹圖	傳狩野永德筆	京都妙蓮寺	△寫生帖	同	東京同	△山水畫帖	同	同
○孔雀圖	海北友松筆	同	△花籠圖	尾形乾山筆	東京同	△深林絕壁圖	同	同
○虎溪三笑商山四皓圖	曾我直庵筆	和歌山遍照光院	四季草花圖	立林何昂筆	東京同	△溪山雨後圖	同	同
○山水圖	雲谷等顏筆	東京藤瀬新一郎	杉戸牛圖	渡邊始興筆	東京同	△松疊古寺圖	同	同
○春夏山水圖	傳雲谷等顏筆	同	小督圖	同	東京同	△稻川舟遊圖	同	同
○猿猴圖	長谷川等伯筆	京都龍泉庵	四季草花圖	酒井抱一筆	東京同	△梅花書屋圖	同	同
○豐臣秀吉像	同	東京同	風神雷神圖	同	東京同	△船窓小戲帖	同	同
△版馬圖	同	同	△雞圖	伊藤若冲筆	東京同	△那馬溪圖	同	同
△調馬圖	同	同	△寫生帖	圓山應舉筆	東京同	△富貴天毯圖	同	同
○鷄圖	宮本武藏筆	滋賀多賀神社	美人圖	中應舉、左右源琦筆	東京同	△菊圖	同	同
○枯木鳴鵲圖	同	東京侯爵細川護立	月夜山水圖	長澤蘆雪筆	東京同	△菟道朝瀨圖	同	同
○秋草鴉圖	同	東京京長尼欽彌	美人圖	渡邊南岳筆	東京同	△山水圖	同	同
○一ノ谷宇治	矢野三郎兵衛筆	東京伯伊達興宗	草花圖	同	東京同	△十旬花月帖	同	同
△川合戰圖	山口雪溪筆	京都侯爵細川護立	波千鳥圖	吉村孝教筆	東京同	△曉鶴歸鴉圖	同	同
△紅風圖	同	京都三寶院	猪圖	森祖仙筆	東京同	△永源寺秋景圖	同	同
△四條碓夕涼圖	岩佐勝以筆	東京堂本印象	孔雀圖	森徹山筆	東京同	△四時讀書樂圖	同	同
△源氏物語圖	同	東京京平尾贊平	柳鶯群鴉圖	吳春筆	東京同	△花鳥圖	同	同
△伊勢物語圖	同	東京京平尾贊平	秋草圖	松村景文筆	東京同	△松林圖	同	同
△人丸貫之圖	同	神戶武田忠雄	漁父圖	岡本豐彦筆	東京同	△林和靖圖	同	同
△櫻園山水圖	狩野探幽筆	東京西脇健治	周茂叔愛蓮圖	岸駒筆	東京同	△琴棋書畫圖	同	同
△四季松樹圖	同	京都大德寺	養老瀑布圖	同	東京同	△兼霞堂像	同	同
○狩野探幽像	傳桃田柳榮筆	東京狩野守久	△嵐山圖	田中訥言筆	東京同	△宜男清輪圖	同	同
桐鳳凰圖	狩野常信筆	東京帝室博物館	△嵐山圖	浮田一惠筆	東京同	△嵐鷺鸞圖	同	同
賢聖圖	同	東京近衛文麿	風雨軍鶏圖	冷泉爲恭筆	東京同	△于公高門圖	同	同
				宋紫石筆	東京同	△仙桃圖	同	同







白描下繪般若理趣經	紙本白描	鎌倉	京都市	古杵堂文庫	文昌真君圖	紙本着色	一幅	東京市	平尾贊平	美人假睡圖	絹本着色	一幅	東京市	子爵牧野一成
○白描畫料紙金光明經	同	同	同	神光院	公餘探勝	同	二卷	東京市	松平定晴	富嶽圖	紙本水墨	同	大阪府	子爵清海復三郎
△狹衣物語繪卷斷簡	紙本着色	同	東京市	谷森淳子	寒林晚歸圖	絹本着色	一幅	東京市	帝室博物館	觀瀾圖	同	同	東京市	大隈信常
△住吉物語繪卷斷簡	同	同	京都市	堂本印象	山水圖	同	同	東京市	根津嘉一郎	老子騎牛圖	同	同	富山府	松井伊兵衛
○卅六歌仙公忠像	同	同	倉敷市	大原孫三郎	莊子圖	紙本着色	同	同	岡崎正也	富嶽圖	絹本着色	同	東京市	長谷川赴夫
△釋教卅六歌仙玄寶像	紙本着色	同	東京市	佐々木信綱	蘇東坡像	同	同	大阪府	東京美術學校	松竹梅山水圖	同	同	東京市	子爵牧野一成
一逼上人繪傳斷簡	紙本着色	同	兵庫縣	武藤金太	閻魔王圖	紙本淡彩	一幅	同	清海復三郎	飲中八仙圖	紙本淡彩	一卷	東京市	八木岡春山
矢田地藏緣起斷簡	紙本着色	同	室町同	同	鑄山靜慮圖	同	同	京都市	清海復三郎	山水圖	絹本着色	一幅	大阪府	八田兵次郎
理院歷代祖師像	紙本白描	鎌倉	京都市	醍醐寺	鑄山靜慮圖	同	同	京都市	渡邊善十郎	花鳥圖	同	同	東京市	大橋新太郎
弘法大師繪詞	紙本墨書	同	同	同	秋峯山水圖	絹本着色	一幅	同	藤田謹也	山水圖	同	同	東京市	九鬼健一郎
道成寺緣起	紙本着色	室町同	同	同	相州名所畫冊	布地水墨	一幅	同	岡崎正也	壽老飛鶴圖	絹本淡彩	三幅	東京市	根津嘉一郎
	二卷	室町同	同	同	九仙圖	紙本淡彩	一幅	同	本山豐實	鴻臺真景圖	紙本淡彩	一幅	東京市	子爵牧野一成
		同	同	同	戶山莊圖	紙本水墨	二卷	同	外山知三	老子圖	絹本着色	同	東京市	相見雪雨
		同	同	同	秋林山水圖	紙本水墨	一幅	東京美術學校	長谷川赴夫	春秋花鳥圖	同	同	東京市	遠山元一
		同	同	同	松下觀瀑圖	紙本着色	同	新瀉縣	中野忠太郎	前後赤壁圖	紙本着色	六曲	同	根津嘉一郎
		同	同	同	高士聽流圖	同	同	滋賀縣	柴田源七	彦山真景圖	紙本水墨	一幅	富山府	帝室博物館
		同	同	同	常州袋田勝景圖	絹本着色	一卷	京都市	富岡益太郎	山水圖	同	同	京都市	松井伊兵衛
		同	同	同	花鳥圖	紙本着色	一幅	神戶市	池長孟	歸去來圖	絹本着色	同	同	同
		同	同	同	柿本人丸像	紙本水墨	一幅	京都市	府立大阪博物館	夏冬山水圖	同	同	同	同
		同	同	同	花井冊	絹本着色	一幅	京都市	源空寺	月下鹿圖	紙本淡彩	同	大阪府	同
		同	同	同	釋迦像	絹本着色	一幅	京都市	池戸宗三郎	甘草圖	同	同	同	同
		同	同	同	松潤觀瀑圖	同	同	京都市	香水文一郎	花鳥圖	同	同	同	同
		同	同	同	湖邊春色圖	同	同	京都市	石井柏亭	梅圖	紙本水墨	同	大阪府	同
		同	同	同	王蒙山水圖模寫	紙本淡彩	一卷	滋賀縣	西村重郎兵衛	桃花錦鷄鳥圖	紙本着色	同	大阪府	同
		同	同	同	柳塘山水圖	同	同	府立大阪博物館	府立大阪博物館	雪中枯木鵲圖	絹本着色	同	兵庫縣	小網與八郎
		同	同	同	木村義慶像	同	同	東京市	佐竹光子	富嶽圖	紙本淡彩	同	大阪府	山本發次郎
		同	同	同	米法山水圖	絹本着色	一幅	同	中條國男	旭日老松圖	同	同	同	同
		同	同	同	日金絕頂真景圖	紙本着色	一幅	大阪府	清海復三郎	蓮葉山圖	同	同	同	同
		同	同	同	杜子美像	紙本水墨	一幅	富山府	松井伊兵衛	竹園	同	同	同	同
		同	同	同	習畫々帖	紙本水墨	一幅	京都市	帝室博物館	紫式部圖	絹本水墨	同	同	同
		同	同	同	石山寺緣起稿本	紙本着色	二卷	滋賀縣	石井柏亭	蘇東坡像	同	同	同	同
		同	同	同	國寶 石山寺緣起	紙本水墨	二卷	京都市	石井柏亭	白猿群機圖	同	同	同	同
		同	同	同	喬木竹石圖	紙本水墨	一幅	京都市	大谷光熙	同	同	同	同	同
		同	同	同	軍鶏圖	紙本着色	同	京都市	伯爵	同	同	同	同	同

品目	所藏者
明光古塵雨浦真景	絹本着色 双幅 和歌山市 田村新兵衛
枝頭小禽圖	紙本着色 一幅 京都市 荻生規矩夫
連山一皇松圖	同 同 大阪市 池戸宗三郎
滿眼烟霞帖	絹本着色 一帖 東京市 成瀬澄
孔雀圖	同 一幅 京都市 奥村家

品目	所藏者
明光古塵雨浦真景	絹本着色 双幅 和歌山市 田村新兵衛
枝頭小禽圖	紙本着色 一幅 京都市 荻生規矩夫
連山一皇松圖	同 同 大阪市 池戸宗三郎
滿眼烟霞帖	絹本着色 一帖 東京市 成瀬澄
孔雀圖	同 一幅 京都市 奥村家

烟波海鷗圖	絹本淡彩	一幅	東京市	平尾贊平	過眼圖錄
西園雅集圖	絹本着色	同	新潟縣	中野忠太郎	展覧目録
不動尊像	絹本水墨	同	東京市	眞盛寺	古畫類聚續集
秋溪閑居圖	絹本着色	同	同	菊本直次郎	大臣圖卷
桃壽帶鳥圖	同	同	同	廣野茂	撫古山水冊
蝙蝠圖	絹本水墨	同	同	佐竹光子	聖賢畫像集
月下秋草圖	絹本着色	同	同	同	畫學大全
狸和尙圖	絹本水墨	同	同	相見香雨	畫學大全
鍾馗圖	絹本淡彩	同	島根縣	絲原武太郎	歷代名公畫譜
千岩門圖	絹本著色	一幅	京都市	池坊專啓	歷代名公畫譜
牡丹孔雀圖	同	一幅	京都市	菊本直次郎	松島眞景圖
觀瀑圖	絹本淡彩	一幅	滋賀縣	柴田源七	源客奇勝圖
青綠山水圖	絹本着色	同	兵庫縣	藤本正一	書畫甲觀
竹圖	絹本水墨	同	東京市	佐竹光子	凌烟功臣畫像
風雨渡江圖	絹本淡彩	同	子爵	牧野一成	名山圖譜
梅圖	絹本水墨	同	奈良市	龜田致	歷朝名公歌譜
牧馬圖	絹本着色	同	京都市	荻生規矩夫	寫山樓畫本
花籠圖	絹本着色	二曲屏	東京市	岡田菊次郎	本朝畫纂
團扇散圖	銀地着色	一隻	同	原邦造	畫學叢書
前後赤壁圖	絹本着色	雙幅	兵庫縣	藤本正一	本朝畫纂
秋渚遊禽圖	同	一幅	東京市	牧野一成	寫山樓印譜
枯木寒鴉圖	絹本淡彩	同	子爵	山形縣	文晁書簡
柳桃飛燕圖	絹本着色	同	滋賀縣	阿部孫七	文晁夫妻像
二見ヶ浦圖	同	同	大阪府	西村重郎兵衛	文晁影像并和歌書
風竹圖	絹本水墨	同	大坂市	八田兵次郎	高士聽泉圖
富嶽圖	同	同	明石市	米澤吉次郎	果物圖
龍虎圖	同	同	明石市	松村吉兵衛	
鯉圖	同	同	兵庫縣	山本發次郎	
瀑布圖	絹本淡彩	一幅	同	藤本正一	
竹圖	絹本水墨	同	大阪府	八田兵次郎	
山水圖	同	同	東京市	外山知三	
山水圖	絹本水墨	同	兵庫縣	小網與八郎	
瀑布圖	絹本水墨	同	大阪府	清海復三郎	
林邊齋像	同	同	同	林	
縮圖	絹本着色	同	東京市	加賀豐三郎	
縮圖	同	同	同	同	
畫學齋圖稿	同	同	東京美術學校	同	

古美術展覽會・展覧

日本美術協會第四百回展參考陳列	四月十七日—二十六日	上野・日本美術協會
協会展第四百回(彫刻、工藝)の參考品として古來の		
兜を展覧した。出陳物は帝室博物館、東京美術學校、遊		
就館及び毛利公爵、山内、前田、黒田各侯爵、徳川、酒		
井、伊達、阿部各伯爵、松平子爵、團男爵家其他諸名家		
蒐藏のもので、計四十餘點であつた。		
中川伊作蒐集南蠻陶器特別陳列	四月二十日—五月十五日	恩賜京都博物館

京都市の中川伊作が琉球地方に於て蒐集した南蠻古陶器百餘點を特別陳列した。此等は坏土、製作を概ね等しくする磁器様の一種で、茶碗、水差、茶入、建水、灰器土瓶、急須、酒注、徳利、壺等各種類に互り琉球地方の所産と推定せられるものである。

東京帝室博物館繪畫陳列

四月 中 同館

東京帝室博物館四月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。

文殊菩薩像	本	館
虚空藏菩薩像	同	同
阿彌陀如來像	同	同
熾盛光如來像	同	同
不動明王像	同	同
愛染明王像	同	同
渡海文殊像	同	同
竹四季圖屏風	同	同
扇面散屏風	同	同
天狗草紙繪卷	同	同
(鴨岡・高野・東寺卷)	同	同
花鳥人物扇面畫帖	同	同
櫻山吹圖屏風	同	同
扇面散屏風	同	同
山水人物畫屏風	同	同
玉川喫茶、武陵桃源圖	同	同
四季花鳥圖卷	同	同
狩野松榮筆	本	館
傳狩野元信筆	同	同
傳俵屋宗達筆	同	同
俵屋宗達筆	同	同
瀧和亭筆	同	同
富岡鐵筆	同	同
酒井抱一筆	同	同

奈良帝室博物館繪畫陳列

四月 中 同館

奈良帝室博物館四月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶、△印重要美術品)

○帝釋天像	絹本着色	貞觀	奈良縣	西大寺
(十二天ノ内)	一幅	同	同	同
○兩界曼荼羅圖	絹本着色	貞觀	京都市	教王護國寺
	一幅	同	同	同







古美術展覧會・展觀

藥師如來	藤原時代	本	王	院
龍猛菩薩	傳弘法大師御作	龍	泉	院
毘沙門天王	弘仁時代	普	賢	院
同	鎌倉時代	正	智	院
赤不動尊	弘仁時代	同	同	同
增長天王	傳快慶作	金	剛	院
毘沙門天	弘仁時代	親	王	院
愛染明王	鎌倉時代	金	藏	院
阿彌陀如來	藤原時代	地	藏	院
同	同	同	同	同
持國天王	傳快慶作	同	同	同
阿彌陀如來	藤原時代	同	同	同
大日如來	同	同	同	同
釋迦如來	同	同	同	同
毘沙門天王	傳快慶作	同	同	同
同	弘仁時代	同	同	同
持國天王	同	同	同	同
增長天王	同	同	同	同
廣目天王	同	同	同	同
同	傳快慶作	同	同	同
地藏菩薩	鎌倉時代	成	運	院
銅鐘	承元四年十一月鑄造	金	剛	三昧院
同	弘安三年正月廿五日鑄造	金	剛	三昧院
同	永正元年卯月八日鑄造	同	同	同

毛利公爵家什寶展觀

五月十五日 芝區高輪・毛利公爵邸  
史學會主催。公爵毛利家では史學會々員の爲に高輪の毛利家事務所に於て什寶四十餘點を展觀した。同家の什寶中には國寶重要美術品に指定せられたもの多く、展觀に供されたのは其の一部であるが、繪旨、宸翰を初め、馬寮の御馬具等朝廷よりの御下賜品、其他文書、武具、繪畫等同家關係のものが多くを占めて居た。

加賀古美術展

五月十七日—二十二日 大阪・南海高島屋

戰爭美術展覧會

五月十八日—六月五日 東京府美術館

東京朝日新聞社では同紙創刊五十周年を記念し、非常時局下國民精神の昂揚と美術界への寄與とを目的として同社主催、文部省後援の下にこの展覧會を開いた。蒐むる所我が國上代より現代に亘る繪卷物、屏風、掛幅、武將畫像等繪畫の外、太刀、鎧兜、鎧鞍等の武具、武將の筆蹟、書簡など、凡そ戰爭に因る名品を網羅し、長くも御物六點及び、伏見宮家の御家寶二點の御貸下を賜り帝室博物館其の他諸官廳、社寺、所藏諸家等より什寶を借用、全國三府二十一縣に亘り二百十三點を得て陳列した。史料的にも藝術的にも頗る貴重なものが多く、且つ稀に展觀されたものも少からず、戰爭といふ主題が如何に我が國美術に取扱はれたかを概觀する上に、初めて企てられたものとして極めて興味をひく展觀であつた。左に出陳目錄を掲げる。

陳列目錄 (○印國寶 △印重要美術品)

古畫(繪卷、屏風、幅)

○神功皇后緣起繪卷	二卷	土佐光信筆	大阪 譽田神社
○聖德太子繪卷	一卷	茨城上宮寺	
○聖德太子繪卷	三幅	東京 川合玉堂	
○聖德太子繪卷	一幅	愛知 本證寺	
○將軍探營繪卷	一卷	京都 高山寺	
○前九年合戰繪卷(殘缺)	同	東京 帝室博物館	
○八幡太郎繪詞	三卷	渡邊始興筆	東京 同
△保元平治合戰圖	六曲一双	東京 長尾 欽彌	
△平治物語繪卷	摸本一卷	住吉如慶筆	同
△三條殿打卷	同	帝國圖書館	
源平合戰圖屏風	六曲一双	東京 帝室博物館	
△一谷及宇治川合戰圖	同	兵衛筆	東京 同
宇治川合戰屏風	同	傳矢野三郎	東京 同
同	同	侯爵 細川 護立	文部省

武將像

○平重盛像	一幅	藤原隆信筆	京都 神護寺
○源賴朝像	同	藤原隆信筆	同
○傳名和長年像	同	長谷川信春筆	子爵 福岡 孝紹
○北條早雲像	同	同	同
○北條氏綱像	同	同	同
○北條氏康像	同	同	同
○織田信長像	同	狩野元秀筆	愛知 長興寺
○豐臣秀吉像	同	橫濱 原 富太郎	同
○豐臣秀吉像	同	侯爵 伊達 宗彰	同
○武田信虎像	同	山梨 大泉寺	同
○武田信玄像	同	高野山 成慶院	同
○武田二十四將圖	同	同	同
○上杉謙信像	同	東京 保坂 潤治	同
△大友宗麟像	同	京都 大德寺	同
△淺井長政像	同	高野山 持明院	同

△年禮高松圖

富士卷狩會我物語圖

富士の卷狩會我夜討

宇治川先陣圖

宇治川先陣圖

堀河夜討圖

春日權現靈驗記繪卷

蒙古襲來繪卷

本性坊怪力圖

楠公訣別圖

△太平記合戰圖屏風

△眞如堂緣起

倭寇圖卷

高徳公權扶間奏誠圖

關ヶ原合戰圖

△職人畫譜師

堀江物語繪卷

畫帖

△十二類合戰繪詞



腰刀 奈良 法隆寺  
三寶荒神兜 伯耆伊達 興宗  
秀吉の陣羽織 男爵伊木 忠愛  
葦垣藤繪の鞍轡 東京帝室博物館  
一の谷兜 同  
日本號鑑 侯爵黒田 長成  
清正所用十文字鑑 東京帝室博物館  
古丹波弓 京都 瀬尾 石根  
錦旗 東京帝室博物館

新畫(洋畫)

御物 日清戰爭圖 六面 山本芳翠筆  
吉田少尉部下の二十七勇士を率ゐて金城城壁を登る圖  
旅順總攻撃の前後土城子附近野營の圖  
旅順没落の日敵の地雷火背面二龍山爆發の圖  
敵艦遠退沈没の圖  
威海衛海陸總攻撃の圖  
全軍將校悉く旅順口に集り戰勝を祝する圖  
伏見宮家御所藏

伏見宮家御所藏 一面 山本芳翠筆  
伏見宮威衛御攻撃圖 同 同上  
野戰病院圖 同 五姓田芳柳筆 東京美術學校  
日清役從軍スケッチブック 三冊 黒田清輝筆 美術研究所  
金州城内新聞記者及畫師宿舎内部ペン畫 一面 黒田清輝筆 美術研究所  
戰後の搜索 同 淺井 忠筆 東京帝室博物館  
漢家屯天長節祝宴 同 同 東京 淺井 眞  
碧流河架橋圖 同 同 同  
ベチカのある室 水彩 同 同  
平壤戰爭圖 一面 金山平三筆 東京 作者  
黄海々戰圖 同 太田喜二郎筆 大阪商船株式會社  
旅順攻撃の圖 同 本多錦吉郎筆 東京 佐藤 部隊  
戰の話 同 滿谷國四郎筆 同 加納 百里

八幡緣起 一卷 大阪 村山 長舉  
△大阪合戰圖 一幅 侯爵 黒田 長成  
三島水軍要塞圖 同 愛媛 大山祇神社  
大塔宮出陣圖 一面 横濱 長谷川龜樂

毛利元就像 一幅 公爵毛利 元昭  
本多忠勝像 同 子爵本多 忠昭  
毛利元就書狀 同 公爵毛利 元昭  
大石良雄自筆書狀 同 東京 保阪 潤治  
荒鷲の繪 同 侯爵西郷 從德  
大山君東行饒 勝 海舟筆  
大山元帥書「國光」 西郷南洲筆  
竹園歌贊 同 公爵大山 柏  
山縣元帥書 東京 石井 忠利  
山縣元帥書 同 公爵山縣 有造  
黃海戰捷歌 二幅 伯耆伊東 靖祐  
野津元帥書 伊東元帥筆 侯爵野津鎮之助  
川村元帥書 子爵川村 景敏  
東郷元帥書及日誌 一幅 侯爵東郷 彪  
寺内元帥自畫贊 同 伯耆寺内 壽一  
加藤元帥書 東京 木村甚三郎  
武藤元帥書 同 武藤能雄子  
伊藤博文書狀 同 栗野齊次郎  
日露戰役スケッチ 同 寺崎 廣藏  
太刀(正倉院御物模造) 東京帝室博物館  
龜甲地螺細紋 東京 井上 恒一  
○白綾威大袖 愛媛 大山祇神社  
革褌太刀 公爵毛利 元昭  
毛利元就公旗 同 京都 建勳神社  
信長胸丸 廣瀨 原 良三郎  
鎧兜(脇坂安治着用) 同 廣瀨 原 良三郎  
廣瀨中佐旅順閉塞圖 松岡 壽筆  
日露戰役スケッチ 小杉放庵筆 東京 作者  
朝鮮征伐の圖 東京 島津 忠重  
島津義弘書狀 同 同  
賴三樹橋本左内書 子爵松平 慶民  
八幡 木戸孝允筆 侯爵木戸 幸一  
詩軸 同 同  
日露役仁川の戰 山内偶仙筆 大阪朝日新聞社  
織田信長、徳川家康少年像 菊池契月筆 東京 中村利器太郎  
△源賴朝自筆啓狀 同 關原加久吉  
師賢奉勅赴飯山圖 川邊御橋筆 同 某  
吉田松陰自畫贊 同 吉田茂子  
出動せんとする聯合艦隊 東城鉦太郎筆 同 大阪 三宅那三  
木戸孝允書簡 子爵三浦矢一

釋迦三尊並十六羅漢圖展觀

五月二十一日 美術研究所

美術懇話會の五月例会は美術研究所に於て釋迦三尊並十六羅漢圖十九幅を展觀し、田中喜作の講話を行つた。右は明治年間まで長州の日頼寺に傳來して居たもので、毛利元就寄進の記録がある由で、近年寺から出て、東京の宗像家の所藏となり、更に轉じて某家の有に歸したものである。釋迦三尊十六羅漢が一具として完備する例は尠く、珍重すべき作品であらう。

藝苑巡禮滿十周年記念展觀

五月二十一日 晉羽・護國寺月光殿

藝苑巡禮主催、同社創立十年、七十七回記念として、初めて世に紹介される金剛界大日如來像畫幅を主とし、その他佛像等を展觀、又講演を行つた。

品目

藤原時代金剛界大日如來御繪像 某 藏  
快慶作阿彌陀如來立像 和田 藏  
同胎内納物文書數多 同  
太田近江守鑄造藥師如來立像 中村 不折藏  
同 堀口 蘇山藏  
弘仁時代藥師立像 同  
講 演  
「二階堂信濃守行光に就いて」 龍 肅  
(快慶作彌陀木彫胎内文書) 香 取 眞  
「太田近江守の鑄造に就いて」 關 野 聖 雲  
「快慶作の木彫阿彌陀佛」 同  
「阿闍梨の佛像作風に就いて」 同  
「藤原時代經綢彩色及鍍金法に就いて」 吉村 忠 夫

東京美術研究所展觀

五月二十一日 上野・寛永寺客殿  
東京美術研究所では雑誌畫說會員の爲に小展觀を催し左の陳列を行つた。

畫題

所藏者

傳馬麟筆梅雀圖 山本達雄 玉堂筆山水圖 上野山重太夫  
繪卷物殘興 反町茂作 訥言筆茶筌賣圖 溝口順次郎  
眞康筆布袋圖 有尾佐治 大雅筆演主圖 中島俊司  
墨齋筆山水圖 麻田駒之助 大雅堂畫譜 淺野長武  
鑑貞筆天神圖 田邊武次 大雅名花十二種 三成重敏  
二直庵筆墨圖 萩野伸三郎 薰村新花摘 同  
薰村筆山水圖 齋藤福之助 傳爲恭事刻隨身 藤本樂之軒  
庭騎繪卷

東京帝室博物館繪畫陳列

五月中 同館

東京帝室博物館五月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶)  
○山水屏風 秦致貞筆 敦王護國寺  
御物繪殿聖德太子傳繪屏風 本館  
日月山水圖屏風 傳土佐光信筆 同  
菊花圖屏風 同  
天狗草紙繪卷(延暦寺ノ卷) 同  
東北院職人畫繪卷 同  
唐人人物扇面散屏風 狩野松榮筆 本館  
○職人畫繪屏風 狩野吉信筆 喜多院  
牛圖屏風 森徹山筆 本館  
竹圖屏風 今尾景年筆 同  
寫生畫卷 狩野探幽筆 同  
四條派畫帖 景文、狙仙等筆 同

奈良帝室博物館繪畫陳列

五月中 同館

奈良帝室博物館五月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶)  
○地天像(十二天像ノ内) 絹本着色 貞觀 奈良縣西大寺  
○阿彌陀來迎圖 同 藤原 同 長谷寺  
○閻魔天曼荼羅圖 同 鎌倉 大津市園城寺

○諸神像

○勢至菩薩像

○勢至菩薩像

○扇面法華經

○普賢菩薩騎象像

○十六羅漢圖

○十六羅漢圖

○佛涅槃圖

○長谷寺緣起繪卷

○十六菩薩像

○釋迦三尊像

○地藏菩薩來迎像

○佛鑑、百丈、臨濟像

○十六羅漢像

○佛涅槃圖

○虛空藏菩薩像

○觀月觀音菩薩像

○十六羅漢像

○多武峯緣起繪卷

恩賜京都博物館五月陳列替品目の内主なる國寶は左の通りであつた。

孔雀明王像

龍猛、龍智像

佛眼佛母像

二十五菩薩來迎圖

模倣木板 著色二面 鎌倉 奈良縣藥師寺

法眼發藏 絹本着色 同 渡賀縣長命寺

同 絹本着色 同 奈良縣寶山寺

同 絹本着色 同 大阪市四天王寺

同 絹本着色 同 奈良縣法起寺

同 絹本着色 同 奈良縣藥師寺

同 絹本着色 同 滋賀縣寶嚴寺

同 絹本着色 同 富山縣曼荼羅寺

同 絹本着色 同 奈良縣正磨寺

同 絹本着色 同 同 達磨寺

同 絹本着色 同 同 千光寺

同 絹本着色 同 同 能滿院

同 絹本着色 同 同 島根縣靈雲寺

同 絹本着色 同 同 兵庫縣太山寺

同 絹本着色 同 同 奈良縣幸田彌太郎

同 絹本着色 同 同 同 南法華寺

同 絹本着色 同 同 奈良縣談山神社

同 絹本着色 同 同 京都市高臺寺

同 絹本着色 同 同 奈良縣談山神社

同 絹本着色 同 同 同 安樂壽院

同 絹本着色 同 同 同 教王護國寺

同 絹本着色 同 同 同 高山寺

同 絹本着色 同 同 同 淨福寺

同 絹本着色 同 同 同 同 淨福寺

文殊菩薩像

見沙門天像

僧陳石像 自讚

四季耕作圖

扇面寫經

法然上人繪傳

豐國祭圖

桑實寺緣起

東照權現像

惠果一行像(眞言七祖像ノ内)

十六羅漢像

十六羅漢像

十六羅漢像

十六羅漢像

十六羅漢像

十六羅漢像

十六羅漢像

十六羅漢像

十六羅漢像

十六羅漢像

十六羅漢像

十六羅漢像

十六羅漢像

十六羅漢像

傳野之信筆

同 傳野之信筆

同 傳野之信筆

同 傳野之信筆

同 傳野之信筆

同 傳野之信筆

同 傳野之信筆

同 傳野之信筆

同 傳野之信筆

同 傳野之信筆

同 傳野之信筆

同 傳野之信筆

同 傳野之信筆

同 傳野之信筆

同 傳野之信筆

同 傳野之信筆

同 傳野之信筆

同 傳野之信筆

同 傳野之信筆

同 傳野之信筆

同 傳野之信筆

同 傳野之信筆

同 傳野之信筆

同 傳野之信筆

延曆寺

實藏寺

西芳寺

大仙院

四天王寺

知恩院

豐國神社

桑實寺

輪王寺

教王護國寺

高臺寺

本法寺

知恩院

長谷寺

長樂寺

智積院

相國寺

孤蓬庵

延曆寺

教王護國寺

大仙院

天龍寺

六月一日—十五日 大阪・三越  
後醍醐天皇宸翰拜展  
六月一日—十五日 恩賜京都博物館  
後醍醐天皇崩御遊ばされてより本年は恰も六百年目に相當するので、同館に於ては社寺、個人の所藏に係る後醍醐天皇の宸翰、宸影並びに 後村上天皇宸翰、護良、宗良、懷良各親王の御筆蹟等併せて二十點を奉揚した。宸影は大德寺、廬山寺、吉野神宮、清淨光寺等所藏のものである。



日本民藝館主催宋胡錄展觀

六月七日—八月十四日 駒場・同館

岡野繁藏の蒐集に係る宋胡錄、染附、青瓷等、南方支那系のもの約百五十點を展観した。

朝鮮工藝品展

六月九日—十八日 大阪長堀・高島屋

法隆寺古材展觀

六月十日—十二日 東京美術俱樂部

奈良市の水谷嘉六、松川榮哉の兩名は國寶建造物大和法隆寺の修理に件つて廢棄された多數の古材を、淨財喜藏の捨の代償として同寺より入手し、兩名主催の下に之を賣立に附した。目錄中には同寺中門大料、五重塔の軒隅の雲形肘木、食堂の虹梁等建築史上貴重な資料が含まれてゐた。

新古ギヤマン展

六月十日—十四日 上野・松坂屋

港屋古陶磁展

六月十二日—十四日 兵庫縣御影公會堂

時代美術品展

六月十六日—二十一日 上野・松坂屋

主 催 八 景 會

## 樂陶會主催古陶古美術展

六月二十五日——二十七日 日本橋・東美俱樂部

南蠻古陶器展

六月二十五日—三十日 日本橋・高島屋

東京帝室博物館繪畫陳列

六月中  
同館

東京帝室博物館六月陳列展繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶)

鎌倉、室町時代

御物佛畫貼交屏風  
御物舍利殿障子繪屏風

# 桃山時代

○呂望、商山四皓圖屏風 傳海北友松筆  
山水圖屏風 海北友松筆

## 鑛倉時代

春日驗記繪卷(摹本) 原本 高階隆兼筆

江戸時代

樓閣人物圖屏風	狩野宗信筆
四季花鳥圖屏風	柴田是真筆
唐人物圖屏風	狩野探幽筆
瀟湘八景圖屏風	狩野尚信筆
風俗畫卷	蘆川師信筆
隅田川名所畫卷	細田榮之筆

奈良帝國博物館繪畫陳列

六月中  
同館

奈良帝室博物館六月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶)

恩賜京都博物館六月陳列替品目の内主なる國寶は左の通りであつた。

恩賜京都博物館繪畫陳列

六月中  
同館

毘沙門天像	絹本着色	鎌倉	奈良縣	法隆寺
淨土曼荼羅圖	同	同	同	能滿院
法華曼荼羅圖	同	同	同	下部神社
十二天圖屏風	絹本着色 一隻	室町	同	長谷寺
聖德太子繪傳	絹本着色 二幅	同	同	大藏寺
○十六羅漢圖	絹本着色 四幅	同	同	唐招提寺
長谷寺緣起繪卷	絹本着色 土佐光茂卷	同	同	長谷寺
藤原鎌足像	絹本着色 一幅	同	同	談山神社
不動明王像	同	同	同	寶山寺
彌勒菩薩像	同	同	同	松尾寺
○十二天像	同	同	同	西明寺
融通念佛緣起繪卷	紙本着色 一卷	同	京都市	知恩院

一四〇

聖德太子勝鬘經講識圖	眞濟僧正像	龍猛像	不動明王像	十界圖	普賢十羅刹女像	融通念佛緣起	扇面寫經	藥山李翱問答圖	蓮鷺圖	楊柳觀音像	普賢菩薩像	十六羅漢像	達磨・豐干・布袋像	後奈良天皇宸翰女房奉書
一幅	同	同	同	同	同	同	二卷	一面	一幅	一幅	一幅	同	十六幅ノ	一幅
西來	神護	同	林	林	禪林	禪林	天王	南禪寺	知恩院	大德寺	妙心寺	東海	妙心寺	氣多神社

後宇多天皇宸繪高華  
曼茶羅御修證記

史記

金銅鉢

錫杖

銅鏡

戒體箱

堆朱香盆 張成在銘

同

同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

表面佛像毛彫

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

明、清時代

清明上河圖卷

秋山行旅圖卷

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

奈良帝室博物館繪畫陳列

七月 同館

奈良帝室博物館七月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶)

○羅刹天像 絹本着色 貞觀 奈良縣 西大寺

○不動明王八大童子像 同 藤原 奈良縣 長谷寺

○淨土曼荼羅圖 同 鎌倉 奈良縣 觀音寺

○降三世明王像 同 同 奈良縣 榮山寺

○藤原武智磨像 同 同 奈良縣 總持寺

○阿彌陀三尊像 同 同 奈良縣 四天王寺

○阿彌陀三尊像 同 同 奈良縣 金剛寺

○不動明王像 同 同 奈良縣 法隆寺

○閻魔天曼荼羅圖 同 同 奈良縣 唐招提寺

○繪屏 木板着色 同 同 奈良縣 極樂寺

○阿彌陀如來像 同 同 奈良縣 一乘寺

○普賢菩薩像 同 同 奈良縣 長命寺

○釋迦三尊像 同 同 奈良縣 法隆寺

○十六羅漢像 同 同 奈良縣 南法華寺

○兩界曼荼羅圖 同 同 奈良縣 同

○五百羅漢像 同 同 奈良縣 同

○長谷寺緣起繪卷 同 同 奈良縣 長谷寺

○融通念佛緣起繪卷 同 同 奈良縣 知恩院

○楊柳觀音像 同 同 奈良縣 圓生院

○十王圖 絹本着色 室町 京都市 二尊院

玄奘三藏像 同 同 奈良縣 寶嚴寺

子鹿荒神像 同 同 奈良縣 南法華寺

恩賜京都博物館繪畫陳列

七月 同館

恩賜京都博物館七月陳列替品目の中主なる國寶は左の通りであつた。

孔雀明王像 同 同 奈良縣 智積院

十二天像(水天、風天) 同 同 奈良縣 教王護國寺

釋迦如來金棺出現圖 同 同 奈良縣 長法寺

山越阿彌陀如來像 同 同 奈良縣 禪林寺

釋迦三尊 同 同 奈良縣 斑鳩寺

十六羅漢像 同 同 奈良縣 護國寺

山水圖 同 同 奈良縣 珠光寺

竹石白鶴圖 同 同 奈良縣 眞珠寺

下繪金光明經 同 同 奈良縣 神光寺

佛鬼軍繪傳 同 同 奈良縣 念光寺

善女龍王像 同 同 奈良縣 大通寺

釋迦、文殊、普賢像 同 同 奈良縣 東福寺

蝦蟇、鐵拐圖 同 同 奈良縣 知恩院

五祖像 同 同 奈良縣 二尊院

普賢菩薩像 同 同 奈良縣 眞正寺

十六羅漢像 同 同 奈良縣 長壽寺

御短冊 同 同 奈良縣 柿本寺

大手鑑 同 同 奈良縣 青蓮院

祇園社務日記及記錄 同 同 奈良縣 八阪神社

藥堂高虎同夫人像 同 同 奈良縣 四天王寺

八坂塔圖 同 同 奈良縣 法藏寺

祇園社繪圖 同 同 奈良縣 八阪神社

蒙古美術品展

八月一日―七日 名古屋・松坂屋

高橋蒙古軒の蒐集による蒙古の佛像、曼茶羅、古鏡、古陶の類を陳列即賣した。



○佛涅槃圖 絹本着色 鎌倉 滋賀縣 長命寺  
○十界圖 絹本着色 同 同 來迎寺

唯識曼荼羅圖 同 同 奈良縣 藥師寺  
紅玻璃阿彌陀如來像 同 同 松尾寺  
引接曼荼羅圖 絹本着色 同 同 金剛寺

十六羅漢圖 絹本着色 同 同 岡山縣 賴久寺  
千手觀世音曼荼羅圖 絹本着色 同 同 奈良縣 千光寺  
藤原鎌足像 同 同 談山神社

十六羅漢圖 絹本着色 同 同 北室院  
地藏曼荼羅圖 麻布着色 高麗名古屋市 七寺  
花鳥圖 絹本着色 明 奈良縣 能滿院

○樂田宗廟緣起 絹本着色 京町 大阪府 樂田神社  
高野大師行狀繪卷 (十卷ノ内第十) 紙本着色 奈良縣 大藏寺

善財童子像 絹本着色 京町 奈良市 東大寺  
聖德太子像 同 同 奈良縣 額安寺  
道慈律師像 同 同 談山神社

傳教大師像 同 同 同 同  
恩賜京都博物館繪畫陳列 八月 同館

恩賜京都博物館八月陳列替品目の内主なる國寶は左の通りであつた。

普賢延命像 一幅 青蓮院  
十二天像 一雙 教王護國寺  
聖德太子勝鬘經講圖 一幅 斑鳩寺

山王諸神像 同 同 西教寺  
五百羅漢像 明兆筆 二十幅ノ内四幅ノ 東福寺  
不動明王二童子像 一幅 惠光院

眞如堂緣起 掃部介久國筆 三卷 眞正極樂寺  
巖浪圖 十二幅 禪林寺  
釋迦堂緣起 傳野元信筆 三卷 清涼寺

古美術展覽會・展觀

不空三藏像 五百羅漢像 林庭珪外筆 二十幅ノ内三幅ノ 高山寺  
御消息 傳龜山天皇宸翰 一幅 大德寺  
文覺四十五箇條起請文 藤原忠親筆 一卷 神護寺

附法狀 跋文後白河院宸翰 一卷 泉涌寺  
僧重源文書 後仍筆 一卷 胡宮神社  
醍醐雜事記 二卷 大通寺

九月 蒙古美術展 九月十六日—二十一日 日本橋・白木屋  
日本民藝館特別展觀 九月一日—十一月十八日 駒場・同館

同館では特別展觀として日本諸國の小繪馬、朝鮮石器支那の影繪を陳列した。小繪馬は徳川初期より末期に及ぶ約二百點で、芹澤銈介はじめ同館、小井川潤次郎、小山源次、只野淳一等の所藏のもの、朝鮮石器は同館の藏品五十點で、朝鮮に特有の石製器具である。影戲は同館及び中丸平一郎所藏の影繪及び花様子の類を陳列した。

木版展 九月十九日—二十三日 銀座・松屋  
趣味の時代百枕會 九月二十日—二十四日 日本橋・高島屋

松田權六、羽野禎三の兩名は時代枕を全国的に調査して二百餘種を得、これを研究して圖集「時代枕大觀」を編纂すると共に、自ら時代枕の特質を摸した實用品百種を作製して發表した。

一遍上人繪卷展 九月二十日—十月十日 恩賜京都博物館  
本年は時宗の開祖一遍上人の六百五十年忌に相當するので、之を機として一遍上人繪傳の各本を集めたもので

ある。一遍上人繪傳といへば誰しも歡喜光寺の圓伊本を思ふ。それ程に圓伊本は獨り一遍上人繪各種傳本の上に卓越するのみならず、當代繪卷の中にあつて珍しく詩趣を湛へた作品である。それだけ又他の傳本には美術的價値の乏しいものが多い。併しこの展觀に尙一二の遺漏ありとはいへ、殆んど今日知られてゐる一遍上人繪の傳本の大部分を集め得たことは成功といふべく、かく比較研究の機會を與へられたことは研究者にとり多大の幸福であつた。出品目録は左の通りである。

出品目録 (○印國寶、△印重要美術品)  
品目 所藏者  
○一遍聖繪詞 第三卷 紙本着色 十二卷 京都市 歡喜光寺  
第六卷 紙本水墨 四卷 同  
第七卷 同 御影堂新善光寺  
第八卷 同 (但シ奥一段ハ着色也)

○一遍上人繪傳卷第二 紙本着色 一卷 長野縣 金臺寺  
一遍上人繪傳 同 二十卷 某氏  
○一遍上人繪傳 同 十卷 神戸市 眞光寺  
一遍上人繪傳 同 一卷 某氏

傳後二條天皇宸翰 一遍上人繪傳 同 四卷 京都市 金光寺  
一遍上人繪傳 同 紙本水墨 同 尾道市 常稱寺  
一遍上人繪傳 同 紙本着色 十卷 神奈川縣 清淨光寺  
△一遍上人繪傳 同 同 山形市 光明寺  
一遍上人繪傳 同 紙本着色 五卷 秋田市 辻兵吉

△一遍上人繪傳 同 紙本着色 十卷 帝室博物館  
一遍上人繪傳 同 紙本着色 一幅 京城府 小倉武之助  
一遍上人繪傳 同 紙本水墨 同 京都市 室本印象

參考品 一遍上人畫像 絹本着色 一幅 神奈川縣 清淨光寺  
一遍上人畫像 同 同 京都市 歡喜光寺

一遍上人畫像 紙本着色 一幅 京都市 橋本關雪  
 一遍上人畫像(木版)紙本 一枚 同 禿氏祐祥  
 あみ衣 一箇 同 歡喜光寺  
 十二光菩薩 一箇 愛知縣 稱名寺  
 金磬 同 長野縣 金臺寺

奈良帝室博物館繪畫陳列

九月中 同館

奈良帝室博物館九月陳列繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶)

○火天像 絹本着色 貞觀 奈良縣 西大寺

○持國天像 同 藤原 奈良市 興福寺

○蓮花水鳥圖 絹本着色 鎌倉 奈良縣 法隆寺

○慈恩大師像 絹本着色 同 奈良市 興福寺

○藥師三尊像 絹本着色 同 滋賀縣 觀音寺

○常麻寺繪起 絹本着色 同 奈良縣 當麻寺

○扇面法華經 紙本着色 藤原 大阪市 四天王寺

○延命地藏像 絹本着色 鎌倉 奈良市 海龍王寺

○稚兒文殊菩薩像 絹本着色 同 奈良縣 藥師寺

○阿彌陀如來觀音勢至像 同 同 寶山寺

○十界圖 絹本着色 同 滋賀縣 來迎寺

○觀無量壽經曼荼羅圖 絹本着色 同 奈良縣 龍上寺

○大威德明王像 絹本着色 同 滋賀縣 觀音寺

○金剛夜叉明王像 二幅 同 滋賀縣 觀音寺

○持國天像 同 同 淨信寺

○聖王羅漢曼荼羅圖 絹本着色 同 奈良縣 法隆寺

○譯迦如來十六菩薩圖 同 室町 奈良市 東大寺

○文殊菩薩騎獅像 同 同 奈良縣 當麻寺中之坊

恩賜京都博物館繪畫陳列

九月中 同館

恩賜京都博物館九月陳列替品目の内主なる國寶は左の通りであつた。

不空罽索觀音像 仁王經曼荼羅 佛眼曼荼羅 觀經曼荼羅 十體阿彌陀像 阿彌陀來迎圖 扇面寫經 拾遺古德傳 寶願寺緣起 樓閣山水圖 兩界曼荼羅 藥山李朝問答圖 楊柳觀音像 普賢菩薩像 十六羅漢像 金剛般若波羅蜜教 天台法華宗年分緣起 金光明經 卷第三 法華經 方便品 寂室和尚 遺藏 慧安東嶽證勸書 正觀明天皇宸筆 御消息

絹本着色 室町 奈良縣 西大寺

絹本着色 鎌倉 兵庫縣 津田天滿神社

絹本着色 室町 滋賀縣 寶嚴寺

木版着色 同 奈良縣 金剛山寺

紙本着色 同 奈良市 東大寺

紙本着色 同 同 同

一幅 同 同 同

一幅 同 同 同

一幅 同 同 同

一幅 同 同 同

一幅 同 同 同

一幅 同 同 同

一幅 同 同 同

十月

山中商會主催世界古美術品即賣大展覽會

十月一日—五日 大阪・松坂屋

株式會社山中商會では故山中定治郎が生前蒐集した東西の古美術陶器、繪畫、金石、佛像より屏風、石燈籠、民藝品に至る約八千點を陳列即賣した。

南蠻陶器陳列會

十月五日—十一日 名古屋・松坂屋

時代繪畫展

十月六日—十二日 大阪長堀・高島屋

古備前展

十月六日—十二日 大阪長堀・高島屋

林新助商店主催古美術品展

十月七日—九日 大阪・大丸

平野耕輔蒐集伊萬里染付大皿及本邦やきもの蓋臺展觀

十月八日—十七日 箱根・強羅ホテル

平野耕輔の蒐集に係る伊萬里染付大皿百餘點及び本邦やきもの蓋臺二百餘點を展觀した。陳列品は商工省陶磁器試験所陶磁器研究會編纂の圖録「伊萬里染付大皿」、「本邦やきもの蓋臺小誌」等に掲載のものである。

第三同名寶展

十月九日—二十五日 大阪市立美術館

同館主催の秋季恒例の特別展で、主に京阪地方の個人

山中長俊像 紀益贊 一幅 慈芳院  
 高山寺繪圖 同 神護寺  
 燦變天目茶碗 一箇 龍光院  
 油滴天目茶碗 同 同  
 井戸茶碗 銘筒井筒 同 毘沙門堂  
 青磁鳳凰耳花瓶 同 同



出品目錄

[illegible]

豊千寒山拾得圖

紙本着色 三幅 京都市 佛光寺

富士山三漁父圖

紙本着色 一幅 大阪市 河合氏

老松樓閣圖

紙本着色 一幅 大阪府 小林一三

背振翁像

紙本着色 一卷 同 水落庄兵衛

金銀花矮雞圖

吳春 同 大阪市 清海復三郎

大元舖明王像

朱狩金泥畫 一幅 兵庫縣 津田信吾

秋七草圖

紙本着色 同 京都市 吉居佐助

嫦娥圖

紙本着色 同 大阪市 岸本吉左衛門

花鳥圖

紙本着色 二曲屏 同 山口三郎

千鳥圖

紙本着色 同 京都市 山口三郎

花鳥圖

紙本着色 一幅 大阪市 芝川又四郎

雪中南天圖

紙本着色 同 大阪市 白川朋吉

鶴龜松竹梅圖

同 雙幅 京都市 中山貞

嵐山瀑布圖

紙本着色 同 兵庫縣 村山長舉

人物圖卷

紙本着色 一卷 大阪市 清海復三郎

柳葉小禽圖

紙本着色 同 京都市 寺崎新策

群猿圖

紙本着色 一幅 同 田中宗一

人物圖

紙本着色 同 大阪市 木原忠兵衛

外ヶ濱圖

紙本着色 同 同 豐島久七

秋草小禽圖

紙本着色 同 同 同

深谷松林瀑布圖

同 同 同 水落庄兵衛

各國時代花器展

十月十三日—十七日 上野・松坂屋

花卉魚禽圖

紙本着色 一帖 同 泉吉次郎

古備前燒名作展

十月十四日—十九日 日本橋・高島屋

寒山拾得圖

紙本着色 雙幅 同 增福寺

唐津古陶器名品展觀

十月十五日—十七日 福岡・岩田屋

寶草翁像

紙本着色 一幅 同 花月庵田中格

日本美術協會第百六回展參考品陳列

十月十六日—二十五日 上野・日本美術協會

玉堂雙雞圖

紙本着色 同 京都市 門溪七郎左衛

協會展第百六回(繪畫)の參考品陳列として武人の作

畫を展觀した。御物柳澤洪園筆「正五九花卉圖」、高松宮

鸚鵡圖

紙本着色 同 同 恒夫

畫「竹圖」をはじめ細川護立侯、益田孝所藏の宮本武藏の繪

畫、その他諸家蒐藏の山川道安、曾我蛇足、海北友松等

獨樂圖

紙本着色 一卷 大阪府 岸上善五郎

のものの併せて六十餘點を陳列した。

雲岡石佛スケッチ展觀並映寫會

栢榴尾長鳥色蕉兔圖

紙本着色 雙幅 同 同

十月二十日 下谷區谷中・日本美術院

本欄八〇頁參照

青砥藤桐松圖

紙本着色 一幅 大阪市 森井俊三

協會展第百六回(繪畫)の參考品陳列として武人の作

畫を展觀した。御物柳澤洪園筆「正五九花卉圖」、高松宮

花鳥圖

紙本着色 同 兵庫縣 山内新一

畫「竹圖」をはじめ細川護立侯、益田孝所藏の宮本武藏の繪

畫、その他諸家蒐藏の山川道安、曾我蛇足、海北友松等

調馬圖

紙本着色 同 同 河合氏

のものの併せて六十餘點を陳列した。

雲岡石佛スケッチ展觀並映寫會

貴賤遊樂圖

紙本着色 六曲中 京都市 柏原彌左衛門

協會展第百六回(繪畫)の參考品陳列として武人の作

畫を展觀した。御物柳澤洪園筆「正五九花卉圖」、高松宮

立美人圖

紙本着色 一幅 同 井澤久義

畫「竹圖」をはじめ細川護立侯、益田孝所藏の宮本武藏の繪

畫、その他諸家蒐藏の山川道安、曾我蛇足、海北友松等

弄駒美人圖

紙本着色 同 同 同

のものの併せて六十餘點を陳列した。

雲岡石佛スケッチ展觀並映寫會

藥山浦・小早川蒐集朝鮮古陶器特別展觀

十月二十三日—二十七日 大阪・阪急百貨店

雅陶古丹波燒の會

十月二十五日—二十九日 上野・松坂屋

充美會畫帖と卷物名品大展開

十月二十六日—三十一日 大阪・阪急百貨店

奈良帝室博物館繪畫陳列

十月 同館

奈良帝室博物館十月陳列替繪畫の品目は左の通りであ

つた。(○印國寶)

○吉祥天像

麻布着色 奈良 藥師寺

○月天像

紙本着色 真觀 同 西大寺

○俱舍曼荼羅圖

同 藤原 奈良市 東大寺

○天台高僧像

紙本着色 二幅 同 兵庫縣 一乘寺

○聖觀音像

紙本着色 一幅 同 島根縣 普光寺

○彌勒菩薩像

同 同 奈良縣 寶山寺

○信貴山緣起繪卷

紙本着色 一卷 同 同 朝護孫子寺

○一字金輪曼荼羅圖

紙本着色 一幅 鎌倉 同 南法華寺

○十界圖

紙本着色 一幅 同 滋賀縣 來迎寺

○來迎阿彌陀如來像

紙本着色 一幅 同 同 寶嚴寺

○聖衆來迎圖

同 同 奈良縣 阿日寺

○扇面法華經

紙本着色 四幅 同 大阪市 四天王寺

○八大佛頂曼荼羅圖

紙本着色 一幅 鎌倉 同 大津市 園城寺

○香象大師像

同 同 奈良市 東大寺

○聖德太子繪傳

同 同 奈良縣 橘寺

○施俄鬼圖

麻布着色 高麗 同 神戶市 藥仙寺

一四七

茶器、並に本邦古伊萬里の種類を展觀して、彼の景德鎮窯と我邦肥前窯との流傳進步の跡を窺ふべく陳列に意が用ひられた。

陳列目錄

茶器（支那、高麗、安南）

古染付辻堂香盒	一合	十二箇月花鳥圖	十二幅
古染付哥々鳥香盒	同	絹本着色、西山芳園筆	十二幅
古染付笹繪香盒	同	古伊萬里瓷器	
臺牛香盒	同	松樹葉玉菊紋錦手鉢	一箇
白磁雲鶴香盒	同	文字彫竹筒形花瓶	同
色繪菊兔香盒	同	運鸞繪金欄手平鉢	同
飛青磁茶人	同	雙魚繪錦手鉢	同
太子屋井戸茶盤	一雙	荒磯金欄手大鉢	同
龍川茶盤	一口	漁舟繪錦手小鉢	同
御本手立湯茶盤	同	桃中國基繪錦手小鉢	同
彫三島茶盤	同	八角鳳紋繪錦手小鉢	同
金海茶盤 銘白	同	色銅鳥錦手中鉢	同
大德寺吳器茶盤	同	青磁浮牡丹手指	同
古染付魚耳花瓶	一箇	菊龍紋八角錦手平鉢	一箇
古染附竹繪手指	同	樓閣人物繪錦手向附	五箇
安南絞手花瓶	同	唐子遊繪錦手向付	同
安南絞手耳付手指	同	金欄手其他寄向附	十箇

支那古明器泥像特別陳列

十一月一日—十二月十八日 大阪市立美術館

大阪市立美術館に於ては左記目錄の如く支那の古明器泥像を蒐集の上特別展觀を行つた。

出品目錄

山口謙四郎藏	漢陶笑人俑	六個
三代對立鴛鳥偶	漢奏樂舞人俑	一對
三代象偶	漢綠釉鸞鳥偶	一對
漢彩色仕女俑	漢雞偶	同
同	漢獸神立像	同
漢厨人俑	漢象合子	一對
漢綠釉厨人俑	漢馬頭俑	同
漢髻髮坐人俑	漢神人鎧博山爐	同

漢綠釉人物紐合子

大道弘雄藏

漢綠釉辟邪場

漢胡人俑

漢綠釉有翼井

漢建寧元年銘小瓦壺

漢四獸文井

漢建寧元年銘小瓦壺

三國對立獅子像

漢胡人俑

三國鞍馬像

漢建寧元年銘小瓦壺

三國鞍馬像

漢建寧元年銘小瓦壺

六朝彩色文官俑

漢胡人俑

六朝彩色仕女俑

漢建寧元年銘小瓦壺

六朝舞人俑

漢建寧元年銘小瓦壺

六朝騎獸人物俑

漢建寧元年銘小瓦壺

六朝仕女俑

漢建寧元年銘小瓦壺

六朝騎馬樂人俑

漢建寧元年銘小瓦壺

六朝彩色鳳鳥偶

漢建寧元年銘小瓦壺

六朝彩色叫狼偶

漢建寧元年銘小瓦壺

六朝臥猪偶

漢建寧元年銘小瓦壺

六朝綠釉馬像頭部

漢建寧元年銘小瓦壺

六朝裝飾馬像

漢建寧元年銘小瓦壺

六朝小馬偶

漢建寧元年銘小瓦壺

六朝騎獸獅子像

漢建寧元年銘小瓦壺

六朝舞人俑

漢建寧元年銘小瓦壺

六朝彩色仕女俑

漢建寧元年銘小瓦壺

六朝彩色鳳鳥偶

漢建寧元年銘小瓦壺

六朝彩色叫狼偶

漢建寧元年銘小瓦壺

六朝臥猪偶

漢建寧元年銘小瓦壺

六朝綠釉馬像頭部

漢建寧元年銘小瓦壺

六朝裝飾馬像

漢建寧元年銘小瓦壺

六朝小馬偶

漢建寧元年銘小瓦壺

六朝騎獸獅子像

漢建寧元年銘小瓦壺

東洋古美術展

十一月九日—十二日 日本橋・高島屋

主催、誕生會

東京帝室博物館復興開館陳列

十一月十一日—東京帝室博物館

東京帝室博物館本館は昭和十二年に竣工、復興翼賛會より奉獻せられ、爾來一ヶ年を室内乾燥に費したが、諸般の準備成り、十一月十日早くも聖上陛下の行幸を仰いで目出度く開館し、翌十一日より十四日までを招待日に充て、十五日より一般に公開した。

開館陳列の總點數は凡そ千八百餘點に上り、本館には古美術、工藝品及び考古關係を、表慶館に明治大正の現代美術及工藝品を陳列した。本館陳列室は上下二階に分たれ、一階十三室、二階十二室で、列品の種目及び室別は考古（第一及特別第一室）、宗教（第二室）、服飾（第三）、染織（四）、調度（五）、武具（六）、刀劍（七）、陶器（八）、彫刻（九）、一〇、特別第二、第五室）、（以上階下）、繪畫（第一—一三、一八、一九及び特別三、四室）、金工（一四、一五）、漆工（一六、一七）、書蹟（二〇）（以上階上）の順である。

陳列内容を略記するに、先づ考古は本邦石器—古蹟時代の出土遺物を主とし、特別第一室に各種の埴輪を蒐めた。宗教は經塚遺物、墓誌等に加へ、那智山の發掘品三十餘點、金峯山の發掘遺物が五十餘點纏つて展觀されたのが注目された。服飾は主要なる我國の衣服類の遺品を、染織は飛鳥より江戸時代に至るもの及び東洋諸國の遺品を、調度は本邦各時代の室内調度、武具は平安より室町に至る甲冑及刀劍の外装を主とし、刀劍は古刀、新刀の逸物を揃へた。

陶磁は尾張、京都、九州、加賀等全國諸窯の名品を蒐めて系統的な整然たる陳列が行はれ、仁清の色繪藤壺、色繪月梅壺を初め乾山、木末の逸作は特に精彩を放つた。

が、更に朝鮮李朝の井戸や粉引茶盤の詫びものから漢代の加彩樂舞人俑、唐の三彩や白瓷鳳首壺、また宋代の青瓷瓶、建盞、加彩盤、均窯壺等頗る見るべきものが豊富であつた。

彫刻は飛鳥以降各時代の名作を陳列した。新に出陳されたものの中で廣隆寺の彌勒菩薩半跏像、法隆寺の夢違觀音、興福寺の八部衆、運慶作の無著菩薩像及び圓成寺の大日如來坐像などが彫刻史上有数の作品が擧げられ、又藥師寺の仲津姫像、伊豆山權現の神像なども見落し得ないものであり、又三條公、森村男所蔵の新發見の金銅佛が出陳されたのも目を惹いた。この外に御物四十八體佛中三十餘體が特別室に陳列されたのは特記すべきであらう。

繪畫陳列は階上の主要室を占め、先づ第十一室に奈良平安、鎌倉時代の佛畫及び繪卷、第十二室室町時代、第十三室桃山江戸時代の順で何れもその時代の名作を揃へ、次で第十八室に桃山より江戸時代に至る屏風の名作並びに室町時代の扇面畫、第十九室に浮世繪版畫を陳列し、加ふるに特別第一室には宋元畫、特別第四室に佐竹家舊藏の三十六歌仙繪十四幅を陳列した。佛畫では博物館の普賢菩薩、三井家の虚空藏菩薩を初め、東寺の眞言七祖、西大寺及び東寺の十二天、長法寺の金棺出現圖、藥師寺の吉祥天等の一流品を揃へ、東寺及び神護寺の山水屏風が根津家の那智瀧を中にして併立され、又神護寺の重盛、賴朝の像が併置されたことも研究に資する所大であつた。尙繪卷の中で平治物語繪卷は最近松平伯より寄贈になつたものである。支那畫では高桐院の山水双幅、金地院の傳微宗秋景雪景山水圖等、室町時代の水墨畫室に於ては退藏院の瓢鰓圖、竹齋讀書圖、雪舟の破墨山水等の名品が並び、近世では宗達蓮花水禽圖、光琳の躑躅圖、乾山の草花龍圖、二天の枯木鳴鶴圖、大雅の白雲紅樹、華山の鷹見泉石像などが出色のものであつた。

た。屏風陳列室は智積院の秋草花圖屏風をはじめ傑作を蒐めて繪畫陳列の白眉と稱すべく豪華な展観であつた。金工はやはり時代別に陳列し、鎌倉以前は概ね佛具を集め、中で法隆寺獻納の御物大灌頂幡や同寺の龍首水瓶等の名品があつた。漆工の陳列も我國蒔繪の最高品を時代順に選擇して頗る偉觀を呈した。東大寺の花鳥彩繪油色箱、御物金銀泥繪漆皮箱、仁和寺の三十帖冊子及び寶相華蒔繪寶珠宮等古代漆の深さを示す名品をはじめ、小倉房藏の片輪車螺鈿蒔繪手箱、鶴岡八幡宮の藤菊螺鈿蒔繪箱、高臺寺の秋草蒔繪歌書筆箱、光悅の舟橋蒔繪箱、光琳の八橋の硯箱等工藝の粹を聚めたものである。

書蹟室に於ては御物の道風筆玉泉帖、高松宮家御所藏の行成の白詩卷、佛光國師や大燈國師の手蹟に接し得たことも大いなる喜びとするものである。

表慶館の明治大正美術の陳列は、階上を日本畫、洋畫に、階下が彫刻工藝に充てられた。列品は未だ同館の所藏品が大半を占め、必しも往年の代表作品ではなく、本館の陳列に比べて精彩に乏しい觀を免れ得なかつたが、茲に改めて表慶館が近代美術館として出現し、現代美術の發達に貢献することになつたことを深く慶びたい。左に本館及表慶館陳列の繪畫及彫刻の目錄を掲載する。

### 陳列目錄 (○印國寶 △印重要美術品)

#### 彫刻

#### 品目

#### 所藏者

○誕生釋迦佛立像(銅造)	一軀	奈良	眞	寺
○釋迦如來坐像(銅造)	同	鳥取	米田	眞
○如來立像 傳阿彌陀如來(銅造鍍金)	同	大分	柞原	八幡宮
○觀音菩薩立像(銅造鍍金)	同	滋賀	報恩	寺
○彌勒菩薩半跏像(銅造)	同	東京	京三條	公卿
○觀音菩薩立像(銅造)	同	大阪	金剛	寺
○觀音菩薩立像(銅造)	同	同	觀心	寺
○十一面觀音立像(銅造)	一軀	東京	男爵	森村市左衛門
○觀音菩薩立像(木造漆箔)	二軀	奈良	法隆	寺
○勢至菩薩立像(木造漆箔)	同	同	同	同
○觀音菩薩立像 傳夢達觀音(銅造)	一軀	奈良	本	館
○日光菩薩半跏像(乾漆造漆箔)	同	奈良	法隆	寺
○彌勒菩薩坐像(乾漆造漆箔)	同	同	同	同
○須菩提立像(乾漆造彩色)	同	同	同	同
○沙彌羅立像(乾漆造彩色)	同	同	同	同
○楊柳觀音立像(木造)	同	同	同	同
○觀音菩薩立像(木造)	同	同	同	同
○聖觀音立像(木造彩色)	同	同	同	同
○聖觀音立像(木造彩色)	同	同	同	同
○青面金剛立像(木造彩色)	同	同	同	同
○十一面觀音立像(木造彩色)	同	同	同	同
○地藏菩薩立像(木造彩色)	同	同	同	同
○聖觀音立像(木造)	同	同	同	同
○阿彌陀及諸尊像(木造)	一基	靜岡	醍醐	寺
○胎藏八葉院曼荼羅(木造)	同	東京	安田	一
○釋迦及諸尊像(木造)	一軀	廣島	嚴島	神社
○阿彌陀如來立像(木造)	同	奈良	西大	寺
○吉祥天立像(木造彩色)	同	滋賀	深野	寺
○十一面觀音立像(木造彩色)	同	福岡	觀世	寺
○聖觀音立像(木造彩色)	二軀	京都	廣隆	寺
○十二神將立像(木造彩色)	一軀	奈良	西大	院
○千手觀音立像(木造漆箔)	二軀	福岡	白水	阿彌陀堂
○觀音勢至菩薩立像(木造漆箔)	一軀	京都	淨瑠璃	寺
○吉祥天立像(木造彩色)	同	奈良	興福	寺
○無著菩薩立像(木造彩色)	同	同	同	同
○毘沙門天立像(木造彩色)	同	高知	雪嶺	寺
○十大弟子立像(木造彩色)	二軀	京都	大報恩	寺
○帝釋天立像(木造)	一軀	奈良	興福	寺
○阿彌陀如來立像(木造漆箔)	同	東京	和田	一
○愛染明王坐像(木造彩色)	同	京都	神護	寺
○地藏菩薩立像(木造彩色)	同	東京	原邦	造
○北條時賴坐像(木造彩色)	同	神奈川	建長	寺



○慈惠大師坐像(木造彩色) (弘安九年銘)	一軀	滋賀金剛輪寺	○隆三世明王像 (五大尊像)	絹本着色	一幅	京都醍醐寺	竹齋讀書圖	紙本墨畫	一幅	本館
○惟仙和尚坐像(木造彩色) (嘉應四年銘)	同	長野安樂寺	○大威德明王像	同	一面	奈良唐招提寺	○山水圖	紙本墨畫	同	東京岡崎正也館
○惠仁和尙坐像(木造彩色) (嘉應四年銘)	同	同	○釋迦金棺出現圖	同	一幅	京都長法寺	○山水圖	紙本墨畫	同	東京岡崎正也館
御物金銅四十八體佛像 二具	三四軀	同	○不動明王二童子像 (十二天像ノ内)	同	二幅	同	破墨山水圖	紙本墨畫	同	東京本館
○彌勒菩薩半跏像(木造)	一軀	京都廣隆寺	○水天、梵天像	同	一幅	同	○普羅圖	紙本淡彩	二幅	東京渡邊善十郎
○釋迦如來坐像(木造漆箔)	同	奈良西大寺	○天台高僧像	同	一幅	兵庫一乘寺	松鷹圖	紙本墨畫	同	東京本館
○十一面觀音立像(木造彩色)	同	同	○普賢菩薩像	同	同	同	○臨濟德山像	紙本墨畫	同	京都養德院
○日蓮立像(木造彩色)	同	同	○虛空藏菩薩像	同	同	同	○周茂叔圖	紙本淡彩	三幅	京都小倉房藏
○十二神將立像(乾漆造彩色)	同	滋賀橘師堂	○阿彌陀廿五菩薩來迎圖	同	同	同	△山水圖	紙本淡彩	一幅	東京小倉房藏
○不動明王坐像(木造彩色)	同	京都藥師院	○不動明王像	同	同	同	○瀟湘八景圖	紙本墨畫	四幅	同
○彌勒菩薩坐像(木造彩色)	同	大坂孝恩寺	○法華曼荼羅圖	同	一面	同	○益田兼堯像	紙本墨畫	一幅	京都東海庵
○聖觀音沙門天立像(木造彩色)	同	京都井上三郎	○佛眼佛母像	同	一幅	同	○桃井安直像	紙本墨畫	一幅	山口益田兼施
○釋迦如來坐像(木造漆箔)	同	滋賀常樂寺	○山越阿彌陀如來像	同	三曲一雙	同	東北院歌合	傳光信筆	同	本館
○釋迦如來坐像(木造漆箔)	同	奈良興福寺	○山水屏風	同	一隻	同	清水寺緣起	紙本淡彩	一卷	同
○大日如來坐像(運慶作)	同	同	○山水屏風	同	一幅	同	梅小倉櫃子	紙本墨畫	三卷	同
△持國天立像(木造彩色)	同	東京男爵益田太郎	○源賴朝像	同	同	同	花吹雪鳥圖	紙本墨畫	一幅	同
○增長天立像(木造彩色)	同	同	○平重盛像	同	同	同	○許由巢父圖	紙本墨畫	二幅	東京小倉房藏
○多聞天立像(木造彩色)	同	同	○過去現在因果經	同	一卷	同	柳蔭小禽圖	紙本墨畫	一幅	同
○阿彌陀如來立像(木造彩色) (木仙作)	同	同	○迦陵頻伽圖(牛皮華蓋)	同	二面	同	同	紙本墨畫	一幅	同
○空也上人立像(木造彩色)	同	滋賀賀莊嚴寺	○信貴山緣起	同	一帖	同	同	紙本墨畫	一幅	同
○愛染明王坐像(木造彩色)	同	新調中野忠太郎	○平治物語繪卷	同	三卷	同	同	紙本墨畫	一幅	同
○草駄天立像(木造彩色)	同	岐阜乙津寺	△西行物語繪卷	同	一卷	同	同	紙本墨畫	三幅	同
○女神坐像(木造彩色)	同	奈良藥師寺	御物 春日權現驗記繪卷	同	同	同	同	紙本墨畫	三幅	同
△男神坐像(木造)	同	和歌山佐山傳右衛門	御物 蒙古襲來繪詞	同	二卷	同	同	紙本墨畫	三幅	同
○伊豆山權現立像(木造)	同	大坂田萬清臣	○弘法大師繪傳	同	一卷	同	同	紙本墨畫	三幅	同
繪畫	同	靜岡般若院	○五百羅漢圖	同	二卷	同	同	紙本墨畫	三幅	同
○吉祥天像	絹本着色	奈良藥師寺	○聖一國師像	同	二幅	同	同	紙本墨畫	三幅	同
○龍溪、龍智像	二幅	京都救王護國寺	○白衣觀音圖	同	一幅	同	同	紙本墨畫	三幅	同
○(眞言七祖像ノ内)	同	同	○顯點圖	同	同	同	同	紙本墨畫	三幅	同
○風天、伊舍那天像	同	奈良西大寺	○顯點圖	同	同	同	同	紙本墨畫	三幅	同
○(十二天像ノ内)	同	同	○顯點圖	同	同	同	同	紙本墨畫	三幅	同
○具舍曼荼羅圖	同	同	○顯點圖	同	同	同	同	紙本墨畫	三幅	同

[illegible]

山水圖	狩野芳崖筆 一幅	東京 伯室町公藤館	御物 琉球風景圖 山本芳翠筆 一面	御物 瑞球風景圖 山本芳翠筆 一面
雪中竄圖	森寬齋筆 同	同	御物 和氣清磨圖佐久間文吾筆 同	御物 軍人遺族圖 松井昇筆 同
山水圖	柴田是真筆 同	同	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同	御物 和氣清磨圖佐久間文吾筆 同
山水圖	狩野永恩筆 同	子爵橋本長俊	戰後搜索圖 淺井忠筆 同	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
山水圖	田能村直人筆 同	久通宮家	試鶴圖 曾山幸彦筆 同	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
山水圖	田崎草雲筆 同	同	川上冬庵像 小山正太郎筆 同	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
保津川圖	望月玉泉筆 同	東京 神谷傳兵衛館	洗濯婦圖 川村清雄筆 同	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
虎圖	岸竹堂筆 同	同	風景圖 原田直次郎筆 同	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
振威八荒圖	野口關谷筆 同	同	晚春圖 長原孝太郎筆 一雙	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
雪見圖	守住貫魚筆 同	同	夏夕圖 久米桂一郎筆 一面	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
孔雀圖	瀧和亭筆 同	同	瓶花圖 黒田清輝筆 同	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
秋日田家圖	幸野樸嶺筆 同	同	東海旭光圖 藤島武二筆 同	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
雨中双鷄圖	荒木寛政筆 同	同	磯子より根岸圖 岡田三郎助筆 一面	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
溪山清趣圖	野口小蓺筆 同	同	與秩父妙法ヶ岳圖 和田英作筆 同	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
仲國訪小督圖	山名貫義筆 同	同	彫刻	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
老樹水禽圖	川端玉章筆 同	同	天燈鬼、龍燈鬼 森川杜園作 一具	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
藍猿圖	今尾景年筆 同	同	橋辨慶 同 二個	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
御物 武陵桃源圖	富岡鐵齋筆 雙幅	東京 秩父宮家	十六羅漢圖額 荒川龜齋作 一面	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
白馬山八景	寺崎廣業筆 八幅	東京 秩父宮家	山水圖額 堀田瑞松作 同	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
懸崖春蘭圖	下村欄山筆 一幅	東京 秩父宮家	觀音像額 石川光明作 同	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
經正竹生鳥參籠圖	小堀親吉筆 同	東京 秩父宮家	野塔 同 同	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
御物 義士隱棲圖	山元春舉筆 同	東京 秩父宮家	御物 松樹蟹 高村光雲作 同	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
御物 春の海圖	竹内栖鳳筆 同	東京 秩父宮家	町田久成像 同 一具	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
御物 叭々鳥	横山大觀筆 同	東京 秩父宮家	太平樂 同 一具	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
御物 雨後圖	川合玉堂筆 同	東京 秩父宮家	平治物語圖額 山田鬼齋作 一面	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
山水圖	橋本關雪筆 同	東京 秩父宮家	馬 後藤貞行作 一個	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
朝顔圖	安田叔彦筆 同	東京 秩父宮家	竹取翁 米原雲海作 一輻	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
菊圖	菊池契月筆 同	東京 秩父宮家	營公像 山崎朝雲作 同	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
洋畫	東 京 秩父宮家	東京 秩父宮家	大久保利通像 大熊氏廣作 同	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
御物 北海道茅部嶺之圖	一面	東京 秩父宮家	木戸孝允像 長沼守敬作 同	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
御物 岩倉具視圖	高橋由一筆 同	東京 秩父宮家	近衛忠熙像 同 同	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
御物 櫻島噴火圖	床次正精筆 同	東京 秩父宮家	狩野芳崖像 藤田文藏作 同	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
自書像	國澤新九郎筆 同	東京 秩父宮家	御物 一致 新海竹太郎作 同	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
伊太利風俗圖	百武兼行筆 同	東京 秩父宮家	いづみ 北村四海作 同	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同
運ノ裁判	本多錦章本筆 同	東京 秩父宮家	同	御物 田子ノ浦圖五姓田義松筆 同

燭燧(象牙彫)	旭玉山作 一個	本館
鎌足像(同)	島村俊明作 同	同
小兒愛撫像(同)	朝日明堂作 同	同
賢母誨兒像(同)	相馬仙齡作 同	同
猪(同)	配田知一作 同	同
白鷹(同)	金田兼次郎作 同	同
根津家什寶展觀	十一月十二日 赤坂・根津邸	
美術懇話會の十一月例会は根津嘉一郎家什寶の展觀を以て開催した。陳列品は銅器、佛像類の外左記略目録の通り同家秘藏の名品で、尙當日はドイツ、イタリア、フランス、イギリス大使を初め約三十ヶ國の使節も招かれ藝術を通じての國際交驛に資する所多大なるものがあつた。		
略目録		
牧溪筆瀟湘八景圖	十二因緣繪卷	天狗草子繪卷
牧溪筆竹雀圖	元信筆瀧山水圖	光琳筆燕子花圖屏風
李安忠筆鸚鵡圖	一字金輪圖	慶忍及聖衆九筆
過去現在因果經		
時代茶道具展	十一月十五日―十七日 日本橋・高島屋	
古作茶の湯釜と鐵瓶百趣會	十一月十六日―二十一日 銀座・松屋	
慶應義塾支那調查班將來資料第一次展	十一月十七日―十九日 慶應圖書館記念室	
同大學では本年五月支那に學術調査團を派遣、北、中南支に互る考古學的調査を行つたが、其の將來品を展觀した。目錄によれば學術的發掘による出土品としては杭州古蕩石虎山甌室墓內發掘の瓦壺二個、四ッ耳壺一個を始め七點十個、同墓外出土の宋磁片外四點、同第一公墓		

十一月 中旬 同館  
奈良帝室博物館十  
あつた。(○印國寶)

## 十二月

樂浪漆器と螺鈿漆器陳列

十二月一日—四日 京城・三越

東洋古美術展

十二月二日—四日 大阪長堀・高島屋

朝鮮古陶磁百趣展觀

十二月二日—四日 大阪長堀・高島屋

桑港萬國博覽會日本古美術展覽會出陳品內覽

十二月八日 東京美術學校陳列館、正木記念館

## 東京府美術館

國際文化振興會に於ては桑港萬國博覧に出品を決定せる本邦古美術品の下見を行つた。種目は繪畫、彫刻、工藝品等に互るが、その中繪畫、彫刻の目録を左に掲載する。(但し左記目録の中○印は事情により發送出品に至らなかつた)(本欄一六〇頁參照)

## 繪畫

目 所 藏 者

緝本着色 一帙

新本器畫 三幅

一筆字治蠶符圖

文筆群鹿圖  
同  
同

仙筆山水圖	紙本墨畫	同
-------	------	---

六曲

一、雙  
一、福  
一、本  
一、草  
一、圖

齋筆鐘馗圖  
紙本墨畫  
同

瑞筆白頭翁圖	同	同
--------	---	---

紙本墨畫 同

113

日本陶磁器展

十一月十九日—二十七日 大阪・三越

第二十四回大藏會展觀

十一月二十日 駒場・日本民藝館

京都森屋家所藏の國寶古寫經その他を展觀した。

舊犬山城主成瀨家歷代城主寶物陳列

十一月二十日 岐阜・成瀬家

日本民藝館第十二回特別展觀

十一月二十日—十二月二十五日 駒場・日本民藝館

特別展觀として佛教古版畫百點を陳列した。平安朝よ

徳川時代に及び  
平塚連  
禰氏神社  
智恵院  
民泰

去來上人即多一友、東方志功、

版畫三十五枚を出陳した。

### 第三回日本刀展

十一月二十六日—十二月十日 東京府美術館

支那朝鮮古陶展

十一月二十七日—二十九日 銀座・養生堂

港屋主催。

奈良帝國博物館繪畫陳列

古美術展覽會・展觀

檀園筆馬圖	紙本淡彩 一幅	小倉安之	十二天小屏風	紙本着色 六雙	同	侯爵細川護立
○梅邊筆草花圖	紙本着色 同	金光庸夫	天神緣起繪卷殘缺	紙本着色 一卷	男爵團伊能	一風筆櫻小鳥紅葉小鳥
○具慶筆慈眼大師緣起繪詞	紙本着色 三卷ノ内一卷 下卷	永寺	武藏野圖屏風	金地着色 六雙	同	一風筆櫻に鳥紅葉に小鳥
虛空藏菩薩像	絹本着色 一幅	同	○藍雪筆富士圖	紙本墨畫 一幅	同	同
探策筆鹿圖扇	紙本着色 一本	男爵鴻池善右衛門	○景文筆鶴圖	同	同	同
常信筆馬圖扇	金地墨畫 同	同	○武藏筆藍雁圖	同	同	同
廣尚筆大内酒宴圖扇	紙本着色 同	同	大津繪天神圖	紙本着色 額裝一面	日本民藝館	○芳中筆蝦蟇繪素祖許由圖屏風
廣隆筆源氏圖扇	同	同	泥繪御園圖小屏風	同	同	廣重筆江戶名所兩國納涼版畫
武禪筆美人子供圖扇	同	同	○北野天神緣起繪卷	六卷の内第一卷 三幅	根津嘉一郎	廣重筆東海道五十三次版畫(坂の下、土山)
光琳筆流水に鶴圖扇	金地着色 同	同	○探爾筆中孔子左右鳳凰孔雀圖	絹本着色 對一幅	同	○一逼上人繪傳殘缺
同 公家櫻櫻圖扇	紙本着色 同	同	○雪舟筆真山水墨畫	紙本墨畫 一雙	同	舞樂繪卷
同 抱一筆風神圖扇	金地着色 同	同	○武藏野屏風	金地着色 一雙	同	永德筆中張果老左右孫康及童子籃栗和許真平圖
同 雷神圖扇	紙本着色 同	同	○周文筆秋江漁村圖	紙本淡彩 一幅	同	廣定、廣長筆東照宮御廣隆、廣壽筆緣起繪卷
同 月中秋草圖扇	同	同	光琳筆瀧見樂平圖	絹本着色 同	同	彫刻
同 紅梅圖扇	同	同	源瑞筆美人圖	同	同	增長天像
何留筆水仙圖扇	同	同	一蝶筆花鳥圖	同	同	上下着用人物坐像
光悅筆椿圖扇	同	同	俊滿筆玉川碓打圖	同	同	觀音立像
其一筆秋草に流圖扇	同	同	誰が袖屏風	金地着色 一雙	同	同
師宣筆美人圖扇	同	同	探爾筆文殊像	絹本着色 一幅	遍照光院	善薩形神像
北齋筆美人圖扇	同	同	傳元信筆竹林七賢圖	紙本淡彩 同	同	阿彌陀坐像
國貞筆美人(春)圖扇	同	同	妙澤筆不動圖	紙本着色 三幅對	同	不動明王立像
同 美人(夏)圖扇	同	同	應舉筆狗子圖	同	保阪潤治	木喰上人作不動像
同 美人(秋)圖扇	同	同	同 秋草に雀圖	紙本着色 同	同	大日如來坐像
同 美人(冬)圖扇	同	同	○傳行光筆駿牛圖	同	同	能面小面
夙夜筆山水圖扇	紙本淡彩 同	同	做山筆柳に犬圖屏風	金地着色 二曲一隻	侯爵細川護立	能面大面
嵩溪筆富士遠景圖扇	紙本淡彩 同	同	一風筆中唐婦人左右松孔雀牡丹孔雀圖	絹本金地 三幅	同	藥師如來坐像
應舉筆藍雁圖扇	紙本墨畫 同	同	做山筆孔雀圖	絹本着色 雙幅	同	藥師還城樂面
景文筆紅葉に小鳥圖扇	紙本着色 同	同	文鳴筆中西王母左右白桃紅桃圖	金地着色 對三幅	同	舞樂蘭陵玉面
清長筆曾我兄弟圖扇	同	同	應舉筆雁圖	絹本淡彩 雙幅	同	釋迦如來坐像
兩部愛染明王像	紙本着色 一幅	金剛峯寺	做山筆櫻紅葉鹿圖	絹本着色 同	同	阿彌陀坐像
等韻筆禪宗祖師及山水圖屏風	紙本墨畫 六曲一隻	親王院	一風筆嵐山真景圖	同	同	同
○星曼奈羅	絹本着色 一幅	同	做山筆紅葉櫻鳥雪中鴛鴦圖	同	同	同
綱引文殊菩薩像	絹本着色 同	同	一風筆宇治山水圖	同	同	同



充美會書畫茶器古美術品特別大展觀

十二月十四日—十八日 大阪・阪急百貨店

丹波古陶の會

十二月二十日—二十五日 西銀座・吾八

奈良帝室博物館繪畫陳列

十二月 同館

奈良帝室博物館十二月陳列繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶)

○毘沙門天像

絹本着色 一 幅 藤原 奈良市 海龍王寺

○千手千眼觀世音菩薩像

同 鎌倉 奈良縣 金峯山寺

○寶冠阿彌陀如來像

同 同 滋賀縣 長命寺

○不動明王二童子像

同 同 大津市 園城寺

○阿彌陀如來十六尊像

同 同 奈良縣 松尾寺

○華嚴五十五箇所繪卷

紙本着色 一 卷 藤原 奈良市 東大寺

○東征繪傳

同 鎌倉 奈良縣 唐招提寺

○如意輪觀世音像

絹本着色 一 幅 同 滋賀縣 寶嚴寺

○十六羅漢像

同 同 同 奈良市 極樂院

○淨土曼荼羅圖

絹本着色 一 面 同 奈良市 極樂院

○千手觀音廿八部衆像

絹本着色 一 幅 同 奈良縣 法起寺

○春日曼荼羅圖

同 同 奈良市 興福寺

○春日曼荼羅圖

同 同 奈良縣 寶山寺

○春日淨土曼荼羅圖

同 同 同 能滿院

○東大寺曼荼羅圖

同 同 奈良市 東大寺

○春日宮曼荼羅圖

同 同 同 南市町春日講

○春日神社寺曼荼羅圖

同 同 同 興福寺

○春日鹿曼荼羅圖

同 同 同 同 興福寺

○春日曼荼羅圖

同 同 奈良縣 久度神社

○二月堂曼荼羅圖

同 同 奈良市 稻垣祐義

○生駒宮曼荼羅圖

同 同 江戶 奈良縣 比古神社

花鳥圖

絹本着色 雙明 同 長谷寺

○稻瀨八幡宮緣起

紙本着色 一 卷 室町 和歌山縣 八幡神社

○南山大師像

絹本着色 一 幅 室町 奈良縣 西大寺

○慈恩大師像

同 同 同 毛利喜右衛門

○地藏菩薩像

同 同 奈良市 田村喜保

○赤童子像

同 同 同 岡本安二郎

## 古美術關係彙報

一 月

## 仙厓堂竣工

仙厓和尚の遺品を展観

する仙厓堂が福岡市御供町幻住庵境内に建設され、一月十一日その落成式が舉行された。式には篤志寄附者貴族院議員出光佐三その他名士が参列した。仙厓堂は八間に四間の建物で昨年七月着工したものである。(大朝一・二記事に依る)

## 鳥居博士歸朝

鳥居龍藏博士は昨年

三月ブラジルへの文化使節として外務省文化事業部から派遣されたが、南米各地に研究調査を行ひ、一月二十六日歸朝した。

二 月

## 法隆寺國寶保存協議會開催

二月十

六日文部省に法隆寺國寶保存協議會を開催、昭和十二年度實施せる大講堂、地藏堂、寶藏、夢殿及東院回廊等の工事經過報告及昭和十三年度施行豫定の大講堂、夢殿及東院回廊及寶藏建設工事等の修理計畫を審議し、尙東院回廊現狀變更の件を併せて審議可決した。

## 國寶保存會開催

三月一日文部省に

國寶保存會を開催、建造物兵庫縣西宮神社所有「西宮神社大練塀」外十五件、寶物類東京府男爵團伊能所有「木造觀音立像一軀及絹本着色千手觀音像一幅」外百三十六件の國寶指定の件及建造物京都府「教王護國寺金堂」外七件、寶物類京都府養徳院「絹本着色足利滿詮像一幅」外十四件の維持修理費補助の件並建造物京都府「建仁寺方丈」外三件、寶物類福井縣長源寺「絹本着色大日如來像一幅」外一件の現狀變更許可の件を夫々議決した。

## 海軍館へ黒船來朝圖寄贈

實業家小

林正直は所藏の米人ハイン筆の黒船來朝圖五枚を海軍館に寄贈した。ハインはペルリに隨行して來朝した畫家である。

(報知三・三記事に依る)

## 奈良帝室博物館佛像供養會

奈良帝

室博物館では三月二十一日、東大寺住職鷲尾隆慶を導師として恆例の佛像供養會を執行した。

## 重要美術品等調査委員會開催

三月

二十二日文部省に重要美術品等調査委員會を開催、繪畫東京府公爵近衛文府所有「絹本着色春日鹿曼茶羅圖一幅」外十四件、彫刻二件、建造物九件、文書典籍書蹟七十六件、刀劍四十三件、工藝品及考古學資料五十六件、合計二百一件の重要

美術品等認定の件を議決した。

## 陶棺發掘

奈良縣宇智郡北宇智村の

山林に於て、三月三十一日、異形大型の陶棺を發掘した。この陶棺は全長七尺二寸、口徑二尺、中央、膨らみ下部に至つて細くなり上下に蓋を有するが、棺内に遺骸と共に劍三口、刀一口等の遺物を存せしことは稀な發見として注目を惹いた。尙棺外よりは鐵製斧、土器破片等を檢出した。(大朝四・二記事に依る)

四 月

## 東方文化學院兩研究所の分離

東方

文化學院の東京研究所及び京都研究所は四月一日分離各獨立し、東京は東方文化學院、京都は東方文化研究所と改稱された。

## 東大文學部考古學講座新設

東京帝

國大學文學部に本年四月考古學講座の開設を見るに至つた。尙原田淑人は助教教授より教授に昇進した。

## 禪宗美術研究會創立

妙心寺宗務本

所では禪宗美術研究會を創立、禪宗關係の建築、佛畫、佛像等の美術一般に就て研究を行ふことになつた。(中外日報四・六記事に依る)

## 合口壙發掘

京大文學部考古學教

室の小林行雄の一行は四月上旬滋賀縣阪田郡春照村杉澤勝居神社附近の原始時代遺跡調査を行つた所、畠地の地表から二尺位の所に直徑一尺五、六寸長さ一尺二、

三寸の繩紋式壙棺二個が水平に口を合せて發見された。繩紋の合口式壙棺の發掘は珍らしい例として注意された。(大朝四・一二記事に依る)

## 日本美術幻燈板作製

國際文化振興

會に於ては海外に於ける日本美術研究への資料を提供するため、繪畫、彫刻、工藝、建築、庭園等の各部門に互る古美術の幻燈板計六百枚を作製した。その選擇には藤懸靜也、岸田日出刀、田村剛、松本榮一、津田敬武等が當つた。尙幻燈板には英文の解説付カタログが添へられる。

## 法隆寺國寶保存協議會開催

四月十

三日法隆寺に法隆寺國寶保存協議會を開催、地藏堂の修理竣工狀況、大講堂、夢殿、東院廻廊の修理狀況、寶藏の工事狀況及金堂壁畫保存實驗を視察し壁畫保存に關する打合を行つた。

## 大賀博士の當麻曼茶羅研究

東大農

學部の理學博士大賀一郎は四月植物學會に於て當麻曼茶羅に就ての研究を發表した。博士は該曼茶羅が傳説の藕絲織ではなく、絹であること、所謂刻絲と繪畫とを交へて製したものであること等を説述したが、古美術品に對するその自然科学的な研究が注意を惹いた。(國華四八の五による)

五 月

## 史蹟名勝天然紀念物調査會

五月一

三 月

日文化省に於て史蹟名勝天然紀念物調査會が開催され、史蹟明治天皇盡民行在所外二十一件の指定の件、天然紀念物新宮蘭澤浮島植物群落指定地域追加及名勝向島百花園指定地域一部解除の件その他の事項が審議された。

#### 松平伯家より國寶献上 伯爵松平直亮

亮は東京帝國博物館に同家秘藏の平治物語繪卷中の國寶「六波羅行幸繪卷」を初めとして、圓悟禪師、虛堂禪師、無準禪師、大惠禪師、南堂禪師の墨蹟、その他國寶茶器類十六點を献上した。

#### 伊東忠太博士歸朝 東大名譽教授工學博士伊東忠太は昨年十一月外務省文化事業部より日獨文化交流教授として派遣され、約半歳に亘つてベルリン大學その他で日本文化に關する講演を行ひ五月三十日歸朝した。(部五・三・一記事による)

慶大支那學術調査團の派遣 慶應義塾大學に於ては五月中旬支那に對して學術調査團を派遣した。即ち同學講師大山柏公爵の率ゐる北支考古班及び同じく講師柴田常恵、同教授松本信廣の率ゐる中支班の二班に分ち、北支班は六月下旬迄彰德附近及び張家口、大同方面の遺蹟を調査し、中支班は七月下旬迄北支南支の全面に亘つて考古學的視察を行つた。

雜誌「好古」創刊 小原銀之助經營の日本美術社より書畫骨董を主眼とする月刊雜誌「好古」が五月創刊された。

## 六月

### 古美術關係彙報

#### 李王家美術館開館 李王職では豫て

德壽宮内石造殿に隣接して美術館を建築中であつたが三月三十一日竣工を告げたので、従来の昌慶苑内の李王家博物館の陳列品を移し、古美術並に美術工藝に屬するものを選択陳列して之を古美術館となし、一方石造殿は昭和八年以來毎年買上等によつて蒐集されつゝある館藏品、内地所藏家等よりの借用品等を陳列する日本近代美術館となし新舊兩館を併せて新に李王家美術館と稱することになり、準備全く整つて六月五日盛大な開館式を舉行した。新館は鐵筋コンクリート造三階建近世復興式、延面積三、七三三・〇一平方米、渡廊下によつて石造殿に連接されてゐる。

#### 杉本哲郎歸朝 日本畫家杉本哲郎は

印度アジャンター壁畫模寫の爲、昨年十月外務省文化事業部及び日印協會後援の下に渡印したが、その目的を達成した上更にセイロン島シギリヤ壁畫の模寫をも行つて、六月十日歸朝した。尙模寫畫は全部京都市に寄贈され、恩賜京都博物館に保存されることとなつた。

#### 逸見梅榮博士の滿、北支佛教像の調査

逸見梅榮博士は帝國學士院の推薦により高松宮殿下より御獎勵金を賜はり、北支那及び滿洲に於ける佛教禮拜像の圖像に關する調査研究を行ふこととなり、六月中旬渡滿、十月歸朝した。

#### 古美術自然科學研究會の設立 原田

積善會の後援により昭和九年滿精一、中

村清二、松原行一、柴田桂太、内田祥三諸博士の指導の下に設立された古美術保存研究會は、今回その事業を擴張して古美術の一般自然科學的研究を行ひ、殊に鑑定の爲に必要な研究の實施を行ふこととなり、會の名稱を古美術自然科學研究會と改めた。(國華四八の七號報による)

## 七月

#### 大同石窟調査 東方文化研究所の水

野清一の一行は大同雲崗石窟の調査の爲四月二日神戸を出發し、七月四日歸洛した。四月十四日より約二ヶ月を要して同石窟全般に及ぶ基本的調査、即ち實測、撮影、拓影作業、發掘等を大規模に實施せるもので、同調査の報告は東方學報京都第九冊に掲載されてゐる。

#### 國寶保存會開催 七月十三日文化省

に國寶保存會を開催、建造物青森縣誓願寺所有「誓願寺山門」外三件、寶物類滋賀縣勸學院所有「木造不動明王坐像一軀」外二十八件の國寶指定の件及建造物京都府「仁和寺二王門」外十四件、寶物類京都府妙法院所有「木造千手觀音立像五十八軀」外十四件の維持修理費補助の件並に建造物兵庫縣「姫路城イの渡櫓」外三件、寶物類三重縣慈恩寺所有「木造阿彌陀如來立像一軀」の現狀變更許可の件、獨逸國柏林に於て開催の日本古美術展覽會に出陳の爲京都府觀智院所有「圓庵天像絹本着色掛幅一幅」外二十八件の寶物

類輸出許可の件を夫々議決した。

#### 重要美術品等調査委員會開催 七月

十五日文化省に重要美術品等調査委員會を開催、繪畫東京府男爵山本達雄所有「絹本着色梅雀圖一幅」外四十二件、彫刻三件、建造物六件、文書典籍書蹟九十九件、刀劍三十三件、工藝品及考古學資料四十六件、合計二百三十件の重要美術品等認定の件、並に獨逸國柏林に於て開催の日本古美術展覽會に出陳の爲東京府男爵岩崎小彌太所有「紙本着色榮華物語繪卷一卷」外三十一件の認定物件輸出許可の件を夫々議決した。

#### 和田倉門撤去 麴町區千代田町の和

田倉門は大震災後その櫓門を撤去され、現在は高麗門及び和田倉橋とより成つてゐるが、最近腐朽甚しく、門は傾き橋桁は落ち、崩壊を待つばかりとなつたので宮内省では一先づ之を取り除くことに決定し、七月二十四日その取壊し工事に着手した。(東日七・二五記事に依る)

#### 寺寶の無斷搬出事件 人類學の權威

京都帝國大學部教授清野謙次博士は神護寺を初め洛内諸寺院所藏の經卷古文書の類を無斷搬出し、自宅に蒐藏せる故を以て七月三十日太宰署に檢舉された。

#### 上總管生遺蹟の調査 昨秋より本年

七月にかけて古代聚落遺蹟の大規模な發掘調査が大場磐雄により千葉縣君津郡清川村菅生に於て實施された。右は小櫃川の放水路、沖積層地を南北に横斷して長方形の坑を掘鑿せるもので、現在地表か

ら一・五〇米位迄は黒色有機土層、その下約一米は赤色粘土層、更にその下に青色粘土層があり、青色粘土層より多数の木製品を發掘した。出土品の主要なるものは木製品として、鋏、鋤、杵、田舟等の農具、機織具の一部、弓片数本、槽、下駄、籠、瀝利用容器等の家什、櫛等があり別に建築材料の一部と考へられる多数の木材がある。次には夥しい土器で、即ち土師器、須惠器、彌生式土器片の類が擧げられ其他小玉数個、土鍾、鐵鏃等が檢出され、又多數の動植物の遺骸、種子等が出土した。同遺蹟の調査は今後に於て更に續行される筈である。

### 滿洲國輯安縣高句麗遺蹟の調査

滿洲國民政部に於ては通化省輯安縣城附近一帯に散在する高句麗の遺蹟調査並にその保存事業を現在進捗させつゝある。朝鮮古蹟研究會員小場恆吉は五月より七月にかけて主として新に發見された壁畫古墳の中、第百十二號墳（二室塚、風俗畫）、第六十五號墳（所謂四神塚）、第六十二號墳の三墳の壁畫の摸寫を行つた。尙七田忠志は鐵道工事により破壊せられる古墳並に破壊度の著しい古墳に就ての調査、更に將軍塚玄室の清掃及び古瓦散布地の調査に従事し、種々新事實の發見せらるるものがあつた。（考古學雜誌二八ノ一一彙報による）

### 北方文化の調査

北方民族の民族學的考古學的調査は、昨夏同様、日本民族學會の一事業として男爵三井高陽後援の下に樺太各地に於て實行された。一行は民族學、考古學の二班に分ち、古野清人宮本馨太郎、須田昭義が前者を、馬場修、甲野勇の二名が後者を擔任し、考古學班は八月中旬より約十日間に互り敷香町を中心に發掘調査を實施した。（考古學雜誌二八ノ一二彙報による）

### 志村原史時代堅穴調査

和島誠一は板橋區志村小豆澤町所在の日本輕金屬株式會社構内に於て二十五の原史時代堅穴を認め、二月より八月に互つて之を發掘調査した。この堅穴群は一部を除いては全部が土師器と須惠器とを伴出し、遺蹟の性質、遺物の種類から推して原史時代の農民の聚落と考へられ、右調査は當代の貴族の生活を反映する古墳の研究と相俟つて上代史解明のために寄與する所大なるものとして注目された。（考古學雜誌二八ノ九に依る）

### 東亞文化協議會創立

日支兩國の文化提携を圖るため外務省文化事業部は中華民國臨時政府と協力して「東亞文化協議會」を設立、その發會式が八月三十日北京に於て舉行された。出席の日本側代表は酒井忠正伯を初め、學界、教育界の權威三十四名、支那側は王克敏、湯爾和を初め文教關係學者四十六名で、會長には湯爾和を推戴、研究事業は差當つて人文科學、自然科學の二部門に大別して着

手することとなつた。

### 病草紙新發見

「病草紙」繪卷の殘缺が八月美術研究所長矢代幸雄により京阪地方の某美術商の店頭に於て發見され某家の收藏に歸した。これは關戶家所藏の病草紙に紙質、書體、繪の様式等悉く一致し、その一類をなすものと推定される。大さは堅八寸三分餘、横一尺四寸九分餘で詞及びそれに應ずる繪一段より成り、繪は肥滿した女が侍女二人に支へられ苦しげに歩む姿に路傍の者が呆れてゐるさまが描かれてある。

## 九月

### 東亞研究所設立

東亞の人文並に自然に關する綜合的調査研究の機關として九月一日財團法人東亞研究所が近衛文麿公を總裁として創立された。内閣總理大臣監督の下に企畫院之が事務を處理し、政府補助金二百萬圓及び民間寄附金を以て經營される。調査研究、出版、學者の研究助成等の事業を行ふ。

## 十月

### 向島百花園市へ寄贈

向島區寺島町の名勝向島百花園の所有主小倉のぶ子は九月二十八日東京市へ同園の寄附を申出たので、市では十月三日公園常設委員會を開いて正式受理することとなつた。

（中商九・三〇記事に依る）

### 重要美術品等調査委員會開催

十月十四日文部省に重要美術品等調査委員會を開催、繪畫東京府男爵益田太郎所有「絹本着色釋迦如來像一幅」外二十二件、彫刻六件合計二十九件の重要美術品等認定の件並に獨逸國柏林に於て開催の日本古美術展覽會に出陳の爲右二十九件及認定物件東京府根津嘉一郎所有「絹本着色愛染明王像一幅」外五件の輸出許可の件を夫々議決した。

### 六義園公開

江戸の名園としての面影を今に遺す本郷區駒込上富士前の「六義園」は、本年四月岩崎久彌男が東京市に寄附して以來市公園課で開園準備を急いでゐるが、十月十五日開園式を舉行、翌日から一般に公開された。（東日一〇・一三記事に依る）

### 史蹟名勝天然紀念物調査會開催

十月二十八日文部省に於て史蹟名勝天然紀念物調査會が開催され、史蹟 明治天皇藥原御小休所外二十件の指定の件、名勝堀切小高園指定地域一部解除その他の事項が審議された。

### 國華創刊五十年

美術雜誌「國華」は明治二十二年十月、岡倉覺三、高橋健三等により創刊され、本年を以て滿五十年に達した。

### 文部省科學研究獎勵金交付

文部省に於て昭和十三年度科學研究獎勵金交付を決定したものの中、美術に關するものは左の通りであつた。

東洋ニ於ケル藝術理論ノ實證的研究

九州帝國大學教授 矢崎 美盛  
日本美術ニ於ケル民族性、風土性ノ研究

東京高等師範學校教授 木代 修一  
日本精神史ノ研究特に日本藝術並ニ藝術  
論ト聯關シテ

第七高等學校造士館教授 佐伯延次郎  
日本美術ノ本質研究

京都市立繪專學校教授 中井宗太郎  
藝術及ビ美意識ノ日本的特質

同志社大學教授 園 頼三

## 十一月

「雪舟會」創立 畫聖雪舟の遺德顯彰  
を目的とする「雪舟會」が新に朝野の名  
士多數を會員として組織され、その發會  
式が十一月六日雪舟に緣故の深い岡山縣  
吉備郡總社町寶福禪寺に於て、雪舟忌大  
法要を兼ねて舉行された。同會の役員は  
總裁平沼麒一郎男、會長原澄二、副會長  
岡田天亨である。

「畫聖堂」竣工 田能村竹田の百年  
祭協賛會は記念事業の一として竹田の生  
地大分縣直入郡竹田町竹田莊内に畫聖堂  
竝に記念碑の建設を竣へ、十一月六日そ  
の落成式を舉行した。畫聖堂は平家で建  
坪三十六坪、萱葺の草庵である。

東京帝國博物館本館の開館 今上陛  
下御即位大禮奉祝記念として復興翼賛會  
より奉獻の東京帝國博物館本館は、昭和  
七年十二月起工、昨年十一月を以て建築  
落成を告げたもので、室内乾燥の爲一ヶ

年を費し、本年十一月に至り愈々その開  
館を見るに至つた。同館は博物館として  
の近代科學的設備を施して古美術の保  
存に十分の意を用ひ、建築の大きは間口  
約六十間、奥行約四十間、高さ約十六間  
で、總面積六千五百二十二坪に及ぶ大建  
築である。

十一月十日には長くも 聖上陛下の行  
幸を仰ぎ、更に十一日より十四日までを  
招待日とし、十五日より公開の運びとな  
つた。開館の陳列はその總數凡そ千八百  
餘點で、階下の諸室には考古學資料及び  
陶磁器、彫刻等、階上の諸室には繪畫、  
漆器、刀劍、版畫、書蹟等を陳列した。  
(二四八頁參照)

帝室博物館顧問設置 帝室博物館で  
は左記の如く新に顧問を設けることとな  
り同時に從來の評議員を廢止した。  
帝室博物館顧問  
昭和十三年十一月七日  
宮内省令第八號

宮内省ニ帝室博物館顧問ヲ置ク顧問ハ  
帝室博物館ニ關スル重要ナル事項ニ付宮  
内大臣ノ諮問ニ應ズ  
顧問ハ二十五人以上トシ宮内大臣ノ奏  
請ニ依リ之ヲ命ス  
附則

本令ハ昭和十三年十一月十日ヨリ之ヲ  
施行ス

國寶保存會常務委員會開催 十一月  
十八日文部省ニ國寶保存會常務委員會を  
開催、青森縣「弘前城」外四件現狀變更

許可の件を議決した。

日本文化大觀編纂 皇紀二千六百年  
奉祝事業の一として總額六十五萬圓の豫  
算を以て日本文化大觀を編纂出版するこ  
ととなり、紀元二千六百年奉祝會の委嘱  
により文部省教學局で諸般の準備を進め  
てゐるが、十一月十九日前文部次官河原  
春作を委員長とし、監修八名、執筆十名  
編纂十七名の分擔その他の全計畫を決  
定、十一月二十一日學士會館で初顔合せ  
を行ひ、事業に着手することとなつた。

新京大總長 故濱田耕作博士の後任  
總長は京大教授羽田亨博士に決定し、十  
一月二十五日その旨發令された。(大毎一  
一・二六記事に依る)

帝室博物館復興翼賛會解散清算結了  
財團法人帝室博物館復興翼賛會は昭和  
三年九月今上天皇御即位奉祝記念として  
東京帝國博物館本館等の復興事業に着手  
したが、昭和十二年十二月を以てその事  
業を完了した。仍て直ちに解散、爾來專  
ら清算執行中であつたが、十一月二十六  
日清算人男爵郷誠之助、萩野伸三郎、川  
地喜三郎、監事小倉正恆、串田萬藏及び  
金子堅次郎六名の名義を以て、同會の解  
散並清算結了を各新聞紙上に公告した。  
その内本事業費收支總決算は左記の通り  
である。

事業費收支總決算  
收入總額 九、〇八七、〇七八・二五<sup>円</sup>

内 譯  
政府補助金 三、五〇〇、〇〇〇・〇〇

寄附金收入 三、四三六、九〇八・五〇<sup>円</sup>  
預金利息收入 二、一三六、七六二・五八  
雜收入 一三、四〇七・一七  
支出總額 九、〇八七、〇七八・二五

東京帝國博物館本館等復興造營費  
七、二一七、九六五・八二

帝室博物館特別資金中へ献納  
第一回 一、一〇、〇〇〇・〇〇  
第二回 二一八、七八五・九一

事務費 四八五、〇〇八・〇一  
雜 費 五五、三一八・五一  
金提出 政府に金を賣却する國民的  
運動が起りつゝある折柄、八月前田侯爵  
家では秘藏の能面箱を初め合計約五貫に  
上る金製美術品を提出、又十一月に徳川  
義親侯は徳川美術館蒐藏に係る總計四十  
二個の美術品を、何れも買戻し條件附で  
日本銀行へ納入した。(讀賣一一・一記事  
に依る)

## 十二月

重要美術品等調査委員會各部主任者會  
開催 十二月十三日文部省に重要美術  
品等調査委員會各部主任者會を開催、繪  
畫東京府寛永寺所有「紙本著色慈眼大師  
緣起三卷」外三件、彫刻一件、工藝品及  
考古學資料二件、合計七件の重要美術品  
等認定の件並に北米合衆國サンフランシ  
スコ市に於て開催の日本古美術展覽會に  
出陳の爲右七件の輸出許可の件を夫々議



金門萬國博に古美術品出品經過

具、茶器、蒔繪、服飾品、印刷（版木）  
文房具、上代美術、其他民藝品、朝鮮、  
琉球、臺灣、アイヌ等の各地方民族美術  
が豊富に蒐集された。（二三頁參照）

**伯林日本古美術展開催準備經過** ド

イツ政府では日獨兩國の親善を趣旨とし  
て數年前より伯林日本古美術展覽會の開  
催を計畫しつゝ、あつたが、昨秋國立博物  
館總長オットー・キュンメル博士がその  
準備使節として來朝した。依つて我が國  
に於てはその開催に努むべく、昨年十一  
月外務、文部兩大臣の幹旋で、大久保利

することとなり、同委員會の中に更に實行委員會が設けられ、東北帝大教授福井利吉郎、文部省國寶鑑査官丸尾彰三郎、帝室博物館鑑査官秋山光夫の三名がその委員となつて出品物の選定に従つた。その結果決定せる貸出物品は總數百二十六點に及び、その中に國寶二十九件、重要美術品三十二件が含まれてゐる。これらの國外搬出に關しては別記開催の國寶保存會及び重要美術品等調査委員會に於て原案通り可決されたので、右寶物は東京に於て荷造りの上十二月一日委員會の派

遣員たる福井教授及び丸尾國寶鑑査官附添のもとに日本郵船淺香丸に搭載して、パナマ經由ドイツへ發送した。尙以上二名の他に奈良帝室博物館の龜田孜、荷造の専門家として山中商會の赤尾が同伴した。委員會の派遣員とは別に、政府は文化使節として侯爵井上三郎を展覽會を期としてドイツに特派することとなり、又東大助教兒島喜久雄、美術研究所囑託山田智三郎はその使節隨員として同行し一行は十二月二十二日東京を出發した。尙右貸出品目は左の通りである。

◎僧形(傳平清盛)坐像

○觀音立像	銅造	一軀	奈良	法隆寺	伎樂面	同	四面	同	原富太郎	○阿彌陀廿五菩薩來迎圖	同	額面裝	福井	安養寺
○觀音立像	同	同	兵庫	鶴林寺	二ノ舞、陵王、 披頭、還城樂、 納分利	同	四面	同	廣島嚴島神社	○如意輪觀音像	同	一額面裝	東京團	伊能男
○藥師如來坐像	木心、斂漆	同	京都	高山寺	○鄉樂面	同	五面	同	廣島嚴島神社	○如意輪觀音像	同	一額面裝	東京團	伊能男
○釋迦如來坐像	木造	同	奈良	室生寺	能及狂言面(衣裳共)	同	十五面	同	東京細川護立侯	十王(變成王、都帝王)	同	二額面裝	同	三井高陽男
○十一面觀音立像	同	同	京都	新藥師寺	佛畫	同	同	同	佛眼曼奈羅圖	佛眼曼奈羅圖	同	一額面裝	京都	敦王護國寺
○吉祥天立像	同	同	京都	觀音寺	同	同	同	同	普賢延命菩薩像	普賢延命菩薩像	同	一額面裝	同	觀音院
○如意輪觀音坐像	同	同	大阪	觀音寺	同	同	一額面裝	同	京都觀智院	密教圖像	同	一額面裝	同	醍醐寺
○不動明王立像	同	同	京都	橋山觀音	釋迦如來像	同	一額面裝	同	東京益田太郎男	密教圖像	同	一額面裝	同	醍醐寺
○毘沙門天立像	同	同	京都	橋本關雪	同	同	一額面裝	同	東京益田太郎男	密教圖像	同	一額面裝	同	醍醐寺
○大威德明王像	同	同	同	大覺寺	毘沙門天像	同	一額面裝	同	山形上杉神社	十二天像	同	一額面裝	同	高山寺
○廿八部衆像(二十八 攝)ノ内	同	同	同	妙法院	○兩界曼奈羅圖	紫綾金泥	二額面裝	同	同	觀音菩薩像	同	二額面裝	同	原屋壽
帝釋天立像	同	同	同	同	○不動明王及二童子像	絹本着色	一額面裝	同	兵庫瑠璃寺	觀音菩薩像	同	一額面裝	同	同
金剛力士(昨形)立像	同	同	同	同	盧宗藏明王三尊像	同	同	同	東京三井高陽男	觀音菩薩像	同	一額面裝	同	同
十二神將立像	同	同	東京	益田太郎男	華嚴五十五所圖	同	四額面裝	同	奈良東大寺	十二天像	同	二額面裝	同	同
釋迦如來立像	同	同	兵庫	野田吉兵衛	華嚴五十五所圖	同	四額面裝	同	奈良東大寺	十二天像	同	二額面裝	同	同
○渡海文殊菩薩及眷屬 像	同	五軀	新潟	中野忠太郎	○華嚴五十五所圖	同	同	同	東京根津嘉一郎	淨土曼奈羅圖	同	五額面裝	同	同
○地藏菩薩立像	同	一軀	東京	新津恆吉	四天王像	紙本白描	四額面裝	同	東京益田太郎男	文殊菩薩及八童子像	同	一額面裝	東京	井上三郎侯
四臂十一面觀音立像	同	同	東京	井上三郎侯	五大力士金剛吼、十力 吼、無量力吼、菩薩像	同	五額面裝	同	山和普賢院	○文殊菩薩像	同	一額面裝	京都	守屋孝藏

○愛染明王像 絹本着色 一幅 東京 根津嘉一郎  
○明光筆 五百羅漢圖 同 二幅ノ 同 同  
○春日宮曼荼羅圖 同 一幅 京都 湯淺七左衛門  
○傳若宮八幡神像 同 同 東京 加藤正治

大和繪

御物 北野天神緣起 紙本着色 六卷  
繪卷 北野天神緣起 紙本着色 六卷  
繪因果經 同 一卷 東京 久通宮家  
地獄草子 同 一幅 神奈川 原 屋壽  
慶忍・聖衆九筆 紙本着色 一卷 東京 益田太郎男  
繪因果經 紙本着色 同 京都 高山 寺  
將軍探道營繪卷 紙本着色 同 東京 岩崎小彌太  
○榮花物語(駒娘行幸) 繪卷 紙本着色 同 東京 岩崎小彌太  
○住吉物語繪卷 同 二卷 同 同  
一遍上人繪傳 同 一幅 同 同  
一遍上人繪傳 同 七卷ノ 同 同  
長谷雄草子 同 一卷 同 同  
○小野雪見御幸繪卷 同 同 東京 美術學校  
○法然上人繪傳 同 同 同 伊能男  
前九年合戰繪卷 同 同 同 同  
○是害房繪卷 同 同 兵庫 住友吉左衛門男  
北野天神緣起繪卷 同 六卷ノ 東京 根津嘉一郎  
執金剛神繪卷 同 一卷 奈良 東大寺  
○建保六年中殿御會繪卷 紙本淡彩 同 東京 九條道秀公  
後宇多法皇御影 紙本着色 一幅 京都 大覺寺  
夢窓國師像 紙本着色 同 兵庫 武藤金太

水墨畫及墨畫系裝飾屏風

榮賀筆 布袋圖 紙本墨畫 一幅 東京 益田太郎男  
○默庵筆 布袋圖 同 同 同 加藤正治  
傳周文筆 山水圖 同 同 兵庫 住友吉左衛門男  
傳周文筆 山水圖 同 同 同 同  
雪舟筆 夏冬山水圖 紙本淡彩 同 東京 山本達雄男  
雪舟筆 琴棋書畫圖 紙本着色 二幅 同 帝室博物館  
雪舟筆 琴棋書畫圖 紙本着色 六曲屏 同 三井高陽男

狩野派(江戸)

○雪村筆 風濤圖 紙本淡彩 一幅 京都 野村德七  
○同 岸浪圖 紙本墨畫 二幅 兵庫 武藤金太  
元信筆 花鳥圖 紙本着色 六曲屏 東京 三井高陽男  
同 雲雲觀桃圖 紙本淡彩 一幅 同 帝室博物館  
傳永德筆 松慶圖 金地著色 六曲屏 同 東京 美術學校  
○友松筆 花卉圖 同 同 京都 妙心寺  
○等伯筆 山水圖 紙本淡彩 同 東京 藤瀬新一郎  
○等伯筆 竹林猿猴圖 紙本墨畫 同 京都 相國寺  
直庵筆 花鳥圖 紙本着色 八曲屏 東京 帝室博物館  
○二天筆 鷲圖 紙本墨畫 一幅 同 細川護立侯  
御物 鹿圖 紙本着色 六曲屏 同 兵庫 武藤金太  
○天神緣起意參內圖 同 六曲屏 同 同  
○日月山水圖 同 六曲屏 大阪 金剛寺  
洛中洛外圖 同 六曲屏 東京 三條公孫公  
宇治川及屋島合戰圖 同 同 同 文部省  
○傳三郎兵衛筆 宇治川及一谷合戰圖 同 同 東京 細川護立侯  
○雪溪筆 紅楓圖 紙本着色 同 京都 醍醐寺  
狩野派(江戸) 同 同 同 同

狩野派(江戸)

○守信筆 四季松樹圖 金地著色 六曲屏 京都 大德寺  
同 草花寫生書卷 紙本着色 二卷 東京 帝室博物館  
尙信筆 瀟湘八景圖 紙本墨畫 六曲屏 同 同  
尙信筆 寶聖圖(太公望、何薺、房玄齡) 紙本着色 三幅 同 近衛文曆公  
守景筆 舞樂圖 紙本着色 六曲屏 同 根津嘉一郎  
光悅筆 詩卷(木蓮下繪) 紙本着色 一卷 東京 大倉喜七郎  
○宗達筆 西行物語繪卷(詞光廣筆) 紙本着色 六卷ノ 同 渡邊昭伯  
○宗達筆 舞樂圖 金地著色 二曲屏 京都 三寶院  
同 扇面散圖 紙本着色 同 同

宗達筆

○宗達筆 鳥類寫生帖 金地著色 二曲屏 神奈川 原 屋壽  
○光琳筆 鳥類寫生帖 紙本着色 二帖 東京 渡邊善十郎  
○孔雀立葵圖 金地著色 一基立 神奈川 原 富太郎  
○同 引瀧圖(左右) 紙本着色 三幅 東京 岩崎小彌太  
同(中)伊勢物語布 紙本着色 同 同  
紫式部(石山)圖 同 一幅 同 馬越恭一  
雪竹圖 金地著色 二曲屏 東京 大倉喜七郎  
風神雷神圖 同 二曲屏 同 同  
○同 卅六歌仙圖 同 二曲屏 同 同  
○同 白梅圖繪子小袖 墨畫 二曲屏 同 小坂順造  
抱一筆 紅白梅圖 紙本着色 六曲屏 同 同  
同 燕子花圖 金地著色 六曲屏 同 同  
○華山筆 目黒詣圖 紙本着色 一卷 同 長尾欽彌  
應舉筆 群鶴圖 紙本着色 六曲屏 東京 三井高陽男  
○同 美人圖(左右) 紙本着色 三幅 大阪 尾張德川家  
○同 四季遊樂圖 同 二卷 東京 尾張德川家  
○同 寫生圖卷 紙本着色 一卷 京都 西村總左衛門  
○同 寫生圖卷 同 一卷 同 同  
浮世繪 同 一卷 同 同  
舞妓圖 金地著色 六曲屏 京都 賜賜京都博  
懷月堂筆 婦女圖 紙本着色 一幅 東京 帝室博物館  
長春筆 美人圖 同 同 同 清野暢一郎  
○華章筆 十二月月風 紙本着色 十幅 新調 中野忠太郎  
俗圖 同 同 同 同  
○清長筆 矢根五郎圖 板面著色 一繪馬 東京 成就院  
歌麿筆 更衣美人圖 紙本着色 一幅 神奈川 原 壽枝  
北齋筆 雪中美人圖 同 同 東京 小坂順造

## 藤原京發掘彙報 日本古文化研究所

に於て實施中の藤原京遺蹟調査は、前年に引續いて大宮土壇南方東側の發掘を續し六棟の大殿堂址を發見した。此等は既に發掘せる西側の殿堂址とすべて對照の位置にある。かくして今日迄に發見された建物の遺址は既に十九棟の多きに上つてゐる。今此等の殿堂の配置を見るに大宮土壇より發見されたる大殿堂址を中心とし、その左右及び南方に多くの殿堂が左右對照に整然として相ならび、その配置は平城宮や平安宮の朝堂院とまことによく一致してゐる。これらの點から考へると高殿の遺跡は藤原宮朝堂院址と認むべきものであつて、大宮土壇上の大殿堂址は即ち大極殿にあたり、その南方に於ける十二棟の殿堂は所謂「十二堂」に該當するものである。よつて今回の發掘により藤原宮址の正確な地點を決定し得たと共に又その朝堂院の規模をも知り得たのである。この藤原宮朝堂院の規模は頗る大きく、南北約五丁、東西約三丁の範圍にわたり二十數棟の殿堂、門、廻廊等が布置されてゐたのであつて、平城宮、平安宮の朝堂院よりも一層大きい。又個々の殿堂も頗る大規模で、大極殿は正面一一四尺、側面六〇尺、又十二堂の中には正面二〇五尺、側面三九尺にも及ぶものが六棟もある。尙今後續いて朝堂院一角を發掘調査の豫定である。

## 橿原神宮神域擴張地域内出土の考古學的遺構及び遺物 紀元二千六百年祝典

事業の一として橿原神宮神域の擴張作業が行はれつゝあるが、その面積三十一萬七千坪に上る土工作業により各種の考古學的遺物及遺構を檢出してゐる。作業は五月八日から着手され、その當初より全地域に互り點々として土器や古瓦乃至は若干の土製品等を檢出した。現在作業は宮内省、内務省、奈良縣の三つの所管によつて行はれてゐる。九月中旬末永雅雄は發掘品の調査に着手したが、それ以前各作業場に於ては祝部土器、土師器、土馬、古瓦等の遺物並井戸が全面散佈的に出土してゐた所、その後從來の神宮の東方耕地より多彩な繩紋式土器關係の遺物が急速度に出土するに至つた。この遺跡は約一千坪以上の面積に互る包含層及び一部住居跡と推定すべき現狀を呈してゐて、その資料は

繩紋式土器・土製品・土偶・土猪・耳飾・其他不詳品・石器・骨角製品・獸骨角類・珠玉類・乾漆製品・埋木

等より成る。繩紋式土器は無文のものが大半を占有するも、極めて僅かではあるが龜ヶ岡式土器があつたり、赤く彩つた土器の妙なやうなことは注目に値する。尙右の外に上代末期の聚落を示す井戸の散布とその構造、竝に内容遺物の有力なる資料を檢出しつゝあるが、これは大體奈良時代末期から平安時代の初期を前後するものと見てよい様に思はれる。聖地の作業は今後多數の時日と人力に依つて土の移動を行ふのであつて、考古學的調査も今後に引續いて繼續される筈で

ある。(考古學雜誌二九ノ一彙報に依る)

## 清岩里廢寺址の調査 昭和十三年度

に於ける朝鮮古蹟研究會の調査計畫の一として平壤府清岩里の遺蹟が選定された。同遺蹟は大正の初頭故關野博士に依り最初の踏査が試みられた處で、大同江岸に近い臺地上に一面高勾麗時代の瓦片散亂し、附近の部落内にこの地點から發掘したと稱する大小各種の礎石の保存されてゐる點等から、或は長壽王遷都の平壤城王宮址に當る處ではないかと假定されつゝあつた處であるが、未だ何人も發掘調査の手を染めず現在に及んだものである。朝鮮古蹟研究會に於ては昭和十一年度以來高勾麗時代遺蹟の調査を始め、平壤附近に於ける主要な古墳地帶の調査が略一段落を告げたので、十三年度からは寺址宮殿址等の調査に着手し、先づ其手初めとして本遺蹟の調査を開始したのであるが、遺蹟の範圍數千坪に及ぶ廣大なものである關係から、初年度に於ては遺蹟の南端より中央部に互つて調査し、爾餘の地域は十四年春に持ち越し、同年七月末に及んで略調査を完了するに至つたものである。

本遺蹟の全般は既に早くより開墾されてゐるのでかなりの破壊を蒙り、最近に於ては古瓦や礎石の探掘の爲に更に大なる擾亂を受けつゝあつた爲、各建物址には殆んど礎石の現存するものなく、僅かに北方の廻廊の一部にや、整然たる礎石列を認めたに過ぎない。しかし各建物の基礎及其周圍の歩道等は比較的深處に存在してゐる關係から比較的破壊を免れ、從つて其周圍の地域には尙瓦層に混じて多少の金屬製遺物の包含されるものがあつた。

發掘の結果に基き先づ建物址の配置状態を見ると、本臺地の南端大同江岸に面して門址と思しきもの及び其の左右東西に互つて廻廊の基石横はり、門址より通ずる河原石敷の歩道を経て八角形の殿址がある。基壇は地山の岩塊を切り出したもので四方に作出しの石段があり、其壇の周圍には幅約一米餘の河原石敷の歩道が同じく八角に繞らされて居る。一邊十米に及ぶ大きなものである。この歩道と基壇の中間には一邊に四個計二十七個の礎石が配置されて居り各々上部に柱穴と思しき方孔が穿たれてゐるので元來基壇の周圍には勾欄が繞らされてあつたことが窺はれる。本八角殿址の北方十五米を距てて南北に長い一大殿堂の基壇があり八角殿の北方階段より通ずる河原石敷歩道で相連つてゐる。本殿の幅は三十米に及び本遺蹟中最大の殿堂であると云へよう。この殿址の北方には東西に並んで三つの殿址がある。中央のものは破壊甚しく詳細不明であるが、其左右に位する二つの建物は共に床上には方形の礎を敷き礎石の遺存するものもあつて略その舊狀を窺ふことが出来た。次で八角殿址の左右の状態を見るに、その東西の階段より通ずる河原石敷歩道を以て連る南北に

長い建物址が、八角殿を中心として左右シムメトリカルに配置されてゐる。以上は本遺蹟の中央部に存在する建物であるが、尙是等の建物を圍繞する廻廊址と思しき基壇が遺蹟の東方に長々と存在してゐた。以上の各建物址の構造及出土遺物に就いて見ると、前部門址及八角殿址やその左右東西に位する建物址は高勾麗時代の建造に成ることは明瞭なるに反して、八角殿址より以北の建物址は何れも高麗時代に改築されたものの如く、高麗時代古瓦を多く出し、特に大殿堂址の如きは基壇の下部にや、噴達つて高勾麗時代の基壇外郭が比較的整然として遺存せるを確めることが出来た。

以上本遺蹟の建物配置を見るに、遺蹟の最も中心をなす處でしかも門より入つた正面に八角殿址が存在し、これを中心として南北一列に重要建物が配置されてあつたことが明瞭に看取され、これを當時の王宮址と考へるよりも寧ろわが四天王寺式の伽藍配置を髣髴たらしめるものがあり、附近古老に依つて傳へられてゐる金剛寺の遺址と見做すことが妥當の様に思はれる。金剛寺は三國史記に依れば高句麗文咨明王七年七月(西曆四九八年)の創建に成る巨刹で、東國輿地勝覽には金剛寺遺址在府東北八里とあり、然して同書の酒岩の説明を見ると酒岩在府東北十里とあつて、兩者が同一方向に在つて然もその距離二里(朝鮮里邦里の約二丁)と云ふことになり、現在酒岩山と本遺蹟

との關係に全く符合する。以上の點より本遺蹟上の建物配置を解釋すれば南端の門址は中門に當り、八角殿址は塔、大殿堂は金堂、次で其北の三つの殿堂は講堂と其附屬の建物と見ることが出来、爾餘の建物址は僧房等に相當するものと見ることが出来て附近數千坪に亘る一大伽藍の壯觀を髣髴たらしめるものがある。出土遺物は多年の盜掘に依り比較的見るべきものはなかつたが、夥しい高勾麗特有の模様を有する瓦當をはじめ土器、鐵器の外に金銅鈴、花形透彫の金具に碧、白二色の玻璃を嵌入した金銅飾具や飛天の金銅小像等で、寺の刻字ある瓦片を見出した以外には、佛像、佛具等の確實な佛教的な遺品の見出されなかつたことは残念である。(圖版一〇六頁參照)

(尙本遺蹟の發掘に引續き昭和十四年夏酒岩西方に當る上五里に於て建物址の一部を發掘し、本遺蹟の八角殿址其の他建物と同様な建物址と共に石佛寺の遺物を發見し、本遺蹟の伽藍設を更に有力ならしめることが出来た。) 調査員 小泉顯夫、米田美代治、小野忠明、羅淳寬

### 十三年度國寶建造物維持修理

十三年度維持修理竣工建造物 十三年度に於て維持修理竣工せる國寶建造物は左の通りである。(竣工順)

名稱	所在府縣	總工費
聖神社本殿	大阪	一九、七六、六六

### 觀心寺書院

ヲノ櫓	大阪	一九、四八、九二
スノ櫓		
化粧櫓		
ヲノ櫓		
レノ櫓	兵庫	三六、五六、〇〇
タノ渡櫓		
ヨノ渡櫓		
カノ渡櫓		
土堀、石垣其ノ他		

石津寺本堂	滋賀	三三、〇八、八九
觀崎神社表門	同	一、九三、六一
瑞龍寺法堂、佛堂	富山	一、九三、六一
總門	高知	五、四四、〇五
藥師堂	山口	一、九七、〇〇
平清水八幡宮本殿	京都	一五、三九、〇六
寶塔寺塔婆、四脚門	京都	一四、四〇、三八
大聖寺不動堂	千葉	一七、三三、五七
宮崎宮本殿	福岡	八、三八、五三
國城寺大門、新羅善	滋賀	三三、〇〇、八三
妙成寺書院、鎮守堂	石川	(自費)
如庵附露地	神奈川	(同)
岡山城西丸西手櫓	岡山	四六、四七、三〇
仁和寺二王門	京都	二九、三七、八三
法隆寺大講堂	奈良	八三、七四、一五
五社神社社殿	静岡	

前表の各建造物は昭和十年より同十三年にわたり修理に着手し、同十三年一月から十二月迄の間に竣工を見たものであつて、破損の程度に應じ根本的或は部分的維持修理が加へられたものである。

聖神社本殿	大阪府泉北郡信太村	聖神社、大正十三年
-------	-----------	-----------

四月十五日指定、構造形式・桁行三間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、檜皮葺。當社創立の年月は不詳であるが一に白鳳三年八月の勅建と稱する。今の社殿は豊臣秀頼の再興にかゝると傳へられ、桃山式の豊麗な建物である。修理中、内部宮殿屋根母屋桁に「泉州南郡海塚の御坊大工業 慶長九年」の銘及び内陣左側柱間の腰羽目に「慶長九年二月廿七日」云々の墨書銘を發見し、再興の年次が明らかとなつた。國費の補助を受け昭和十二年修理に着手、工期一ヶ年を以て竣工を見ものである。

### 觀心寺書院

(圖版一〇一頁參照) 圖は修理竣工後の本殿内部を示したものである。

大阪府南河内郡川上村 觀心寺、大正十二年三月二十八日指定、構造形式・桁行四間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、銅板葺。修理の經過は年鑑十三年版に詳細報告済、圖は昭和十三年一月竣工當時の撮影にかゝるもので、東北から眺めた外觀である。

### 姫路城西ノ丸

兵庫縣姫路市本町、昭和六年十二月十四日指定。修理の經過及び竣工の寫眞等は年鑑十三年版に掲載済みに付省略する。

### 石津寺本堂



滋賀縣栗太郡老上村 石津寺、明治四十年八月二十八日指定、構造形式・桁行五間、梁間四間、單層、屋根四注造、本瓦葺

寺は江州矢橋の湖畔にあり、元天台宗寺院であつたが中世眞言宗となつたもので、本尊は藥師如來である。當寺の草創については明徴がないけれども、延暦七年僧最澄の創建と稱し又古堂は元暦の兵火に罹り焼失し、延文四年足利義詮の再建したものが現存の堂であると稱する。

後明徳二年及應永廿一年前參河守藤原直親當寺に置文し寺堂修造のことを記してゐる。その後天正六年（隅鬼板銘）寛文五年（本多俊次本堂修理寺田寄附狀）元祿十二年（大棟鬼瓦銘）等の修理を経た。この中元祿の改變最も著しく爾來數次の小修理を経たが、漸次荒廢し近年特に腐朽破損が甚しかつた。昭和十二年二月根本的修理に着手、十三年四月完成した。

（圖版一〇一頁参照）圖は修理成つた本堂正面の姿である。修理のため建物を取解の際發見した舊手法に付嚴密に考證し、修理前一重であつた軒を二重に改め、これに伴ひ屋根の形を整へ、また柱間裝置即ち建具や壁及び廻縁を舊風に復したため、室町時代初期の堂本來の姿に復した。

### 經崎神社表門

滋賀縣栗太郡老上村 經崎神社、大正十三年四月十五日指定、構造形式・高麗門、屋根本瓦葺

當表門は舊膳所城の城門で、明治三年

同城毀却の際現地に移し今日に及んでゐる。高麗門でその手法に慶長年間同城造營の際のものと思ひべき特徴を存する。

修理前柱根腐朽し、柱と控柱を繋ぐ貫は本柱の腐朽のため用をなさず、その上風害を被り軸部に歪みを生じ、屋根瓦も大破の状態であつたため根本的修理が行はれた。修理前は欄も蹴放もなかつたが、今回復舊、又欄間に堅格子を補つた。（圖版一〇一頁参照）

### 瑞龍寺法堂、佛殿、總門

富山縣高岡市下關瑞龍寺、佛殿明治四十二年四月五日指定、法堂及總門昭和三年四月四日指定、構造形式・佛殿、桁行五間、梁間五間、重層、屋根入母屋造、鉛板葺、法堂、桁行十一間、梁間九間、單層、屋根入母屋造、桧瓦葺、向拜、桁行二間、梁間一間、屋根向唐破風、柿葺、總門、藥師門、屋根桧瓦葺

建造物の創建沿革及修理の經過、現狀變更等は年鑑十三年版に報告したのでここに再び繰返すことを避ける。保存工事は順調に進行し、總門は昭和十二年三月、佛殿は同年七月、法堂は十三年四月に夫々竣工した。（圖版一〇一頁参照）

### 豐樂寺藥師堂

高知縣長岡郡西豐永村 藥師堂、明治三十七年八月二十九日指定、構造形式・桁行五間、梁間五間、單層、屋根入母屋造、柿葺

寺は神龜元年僧行基の草創にかゝると傳へられる。現存の堂は其の構造形式からは藤原時代末期の建立にかゝるものと認められ、仁平元年中興の寺傳に該當してゐる。總圓柱舟肘木、軒一重疎樑四周に縁勾欄を廻した簡素な堂ながら手法は

極めて優雅且秀美で、能く藤原時代の特徴を發揮してゐる。明治四十年大風のたに境内の大大轉倒し建物を破壊したため、同四十二年古社寺保存法に依る根本的修理を受けた。その後約三十年を経て屋根葺材が腐朽したため、今回屋根の柿葺を主とし、壇上地盤及龜腹の修理が併せ行はれた。

（圖版一〇二頁解説）圖は昭和十三年五月修理成つた藥師堂の左側面（南側）外觀である。

### 平清水八幡宮本殿

山口縣吉敷郡平川村 平清水八幡宮、明治四十年五月二十七日指定、構造形式・三間社流造、屋根銅板葺

當社は社傳大同四年創立、再建の年代は不詳であるが、構造手法から南北朝時代と推定され、各部構造裝飾は何れもよく當初の儘を保存してゐる。本殿に狛犬一對あり、足裏に應安六年の墨書があり、再興の年代推定の參考となる。但し本殿はこれよりは尙幾分測るのではないかと考へられる。建物は三間社流造、屋根茅葺、構造簡潔雄渾で、製作優秀なる葺葺手挾を有する。尙今同の修理に際して茅葺の假屋根を廢し、流造銅板葺に改められた。（圖版一〇二頁参照）

### 寶塔寺塔婆（多寶塔）

### 四脚門（總門）

京都府京都市伏見區深草寶塔寺山町 寶塔寺、明治三十九年四月十四日指定、構造形式・塔婆 三間二層塔婆、屋根本瓦葺、四脚門 四脚門、屋根切妻造、本瓦葺

寺傳によると當寺はもと極樂寺と稱し藤原照宜の創立せしところといふ。塔婆の再建年代は不詳であるが、形狀よく整ひ手法亦美しく、拳鼻、葺葺の刳形彫刻蓋し室町初期に屬する好標本であらう。四脚門の創立に關しては塔婆に同じく、これ亦再建年代は不詳であるが、虹梁、拳端、大瓶束等の手法から考へると、室町中期を下るものでないと思へられる。形狀美しく手法亦佳、室町時代四脚門の佳作といふべきもの。多寶塔は從前屋蓋椽廻等の修理を受けてゐるが、その原狀をよく保持し來つた。近年建物の地盤傾斜漸く甚しく、昭和十二年九月全體の修理に着手したものである。

### 大聖寺不動堂

千葉縣夷隅郡大原町 大聖寺、大正五年五月廿四日指定、構造形式・桁行三間、梁間三間、單層、屋根四注造、茅葺

本堂はもと千葉縣千葉郡中根村鴨根清水寺に在つた觀音堂で、寶永の頃現地へ移建したものと推定される。創建後、元和、貞享、寶永、明和、天明、弘化、明治等數次の修理を経てゐることが墨書銘で判明した。室町初期の建築で、桁行梁間共三間、四注造茅葺である。後世向拜を附し多小内部を變改したが、主要部は大體當初の面目を存してゐる。近年軸部傾斜し屋根葺材の腐朽も甚しかつた爲、昭和十二年國庫の補助を得て根本的修理を加へ、十三年七月末竣工を見た。工事に際し、地盤盛土、柱間裝置、化粧材等



に随所現狀變更が行はれた。(圖版一〇二頁参照)

### 宮崎宮本殿

福岡縣糟屋郡箱崎町 宮崎宮、明治四十年五月二十七日指定、構造形式・九間社流造、屋根枡皮葺

現本殿は天文十五年太宰大貳大内義隆の再建したものにかゝる。昭和十三年一月屋根葺替を主とする修理に着手、同年八月竣工したが、修理中本殿東側車寄昇階段地覆下端に「天文十四年六月十八日大工源貞保小工十五人」の墨書銘を発見した。明治三十三年屋根葺替以來部分的修理を施し來つたが、昭和十一年七月の颱風に正面流れ中央部を剝損し、今回の修理となつたものである。

### 園城寺大門、新羅善神堂

滋賀縣大津市別所 園城寺、大門 明治三十三年四月七日指定、新羅善神堂 明治三十四年三月二十七日指定、構造形式・大門 三間一戸樓門、屋根人母屋造、枡皮葺、新羅善神堂 三間社流造、屋根枡皮葺

大門は慶長六年家康の寄附により、伏見城より移築再興されたものといふ。傳ふる所では、建物は享徳四年の建立で、はじめ甲賀郡石部町宇西寺常樂寺にあつたものを秀吉が伏見城に移建したものといふ。明治三十七年古社寺保存法により根本的修理を加へられ今回は主として屋根修理が行はれた。竣工は昭和十三年七月、工期半ヶ年であつた。

新羅善神堂は園城寺五社鎮守の一つ貞觀二年開祖圓珍勅を奉じて創建、其後數

次の兵火を受け、現在の建物は延元の回祿後、曆應三年足利尊氏之を再建したと傳へる。形式またその頃のものとして適當と認められる。各所欄間の彫刻は頗る精巧で、鎌倉末から室町初期へかけての特色を持つた優秀作である。明治三十七年根本修理を受け、今回の屋根葺替、他小破箇所の修理で、工事は大門と併せて行はれた。(圖版一〇二頁参照)

### 妙成寺書院、鎮守堂

石川縣羽咋郡上甘田村 妙成寺、大正六年八月十三日指定、構造形式・書院 桁行七間、梁間五間、單層、屋根切妻造、柿葺(現今極瓦葺)・今同梁間七間、屋根四柱造となつた。鎮守堂 桁行五間、梁間五間、單層、屋根人母屋造、柿葺(現在極瓦葺)

當寺は遠く永仁二年の開基と傳へるが現存する堂宇は何れも桃山末期から江戸時代初期にかけて造營されたもので、當時に於ける日蓮宗御藍の制度を見るべき好個の實例である。本堂、開山堂、鎮守堂、祈願堂(番神堂)五重塔、鐘樓、經堂、書院、樓門が棟を並べて配置され、何れも國寶に指定されてゐる。

書院は前田利常が先代の菩提並に生母壽福院、女浩妙院の冥福を祈らん爲、御靈屋を營み併せて参拜の際の御座所に當つるために建てたものと傳へられる。修理中發見した史料によると、萬治二年即ち利常逝去の翌年綱紀の代に竣工したもののらしい。中央に佛間を設け兩脇之間を配した整然たる平面から成り、宛然禪宗寺院の客殿のやうである。全體の意匠極

めて簡素、欄間、書院等よく時代の特色を表し、軒の出極めて尠く、屋だるみや軒反りがないのも特徴である。明治以來荒廢甚しきを加へ、大正元年遂に東側の二室及北側の入側等を撤去すると共に屋根を切妻にし、棧瓦葺にする等の改造を行つた。今回の修理は鎮守堂と共に昭和十二年六月起工し、東側二室北側の入側を證據に基き復舊した屋根を四柱造に改める等の現狀變更を行ひ、同十三年十月竣工した。

鎮守堂は元和九年の造營にかゝるものと傳へられ、堂内には大日、大月、明星の三天子を祀つてゐるので、三光堂ともいふ。工期等書院に同じ。工事に當り正面階段の木造切込式であつたのを石造本式に改め、右側面中央の柱間の板壁を揚部に、背面中央開放であつたのを板壁とし同間後方に突出した箱佛壇を撤去した。(圖版一〇三頁参照)圖は修理成つた書院の外観(南面)及内部(誦經所より御座之間を見る)と、鎮守堂の正面面外観である。

### 如庵附露地

神奈川縣中郡國府村所在、東京市麻布區今井町男爵三井高公所有、昭和十一年四月二十日指定、構造形式・茶室 二疊半臺目、水屋ノ間 三疊等ヨリ成ル、單層、屋根人母屋造、柿葺

如庵は元和年間織田有樂によつて建仁寺塔頭正傳院内に建てられた茶室である。明治初年正傳院が舊永源院の地に移つた後は有樂館となつて保存されてゐた

が、明治末年男爵三井家の有に歸し、茶室、内露地等何れも舊型に則つて麻布區今井町の同邸に移築された。内外の意匠極めて優秀なる茶室で、昭和十一年四月國寶の指定を受けた。同年七月、茶室が人家稠密の東京市中にあり且邸内母屋に接近せるため、その完璧の保存を期し難しとし、神奈川縣中郡國府村同家別邸内に新に敷地を撰定して移建することとなり、文部大臣の許可を得、昭和十二年三月着工、主要部を解體せず内外に假設枠を取付け荷造りの上建物を持ち上げ、同年五月七日より九日に至る迄、舊位置より現位置に運搬、引續き荷造解體、建方、屋根、雜作、左官等の諸工程を経、露地と共に同十三年十月竣工したものである。

(圖版一〇三頁参照)圖は移築なつた如庵側面外観である。左方に椽と軒が少し見えるのが舊正傳院の書院で、正傳院にあつた折はこの書院に接して如庵が設けられてゐた。今井町に移された折、この二棟は相當離れて所在してゐたが、今回共に移築せられたものである。

### 岡山城西九西手櫓

岡山縣岡山市内山下、東京府東京市芝區高輪南町 侯爵池田宣政所有、昭和八年一月二十三日指定、構造形式・二層櫓、屋根本瓦葺

西手櫓は舊西丸櫓内西側にあり、上層に櫓窓を開き、下層外面に軒唐破風を造れる割合に單純なる二層櫓で、内部の手法は頗る丁寧であり、上層に入側を附した床之間附疊敷の室が設けてゐるのは特

異である。本櫓の建立に就いては記録の徴すべきものなく詳かでないが、その形式手法から桃山時代の建立にかゝるものと認められ、沼城或は富山城から移建したものと認められる節がある。修理は池田家に於て工費全額を支出し、文部省指導の下に昭和十二年十一月起工、十三年十月竣工を見た。その間建物解體の結果所々に後世變更を加へた場所あるを發見し、手續を経て下記の現狀變更を行つた。即ち初層周壁の窓廻りの後世改變の場所を舊に復し、痕跡により狭間を増し東面北より第四及第六間が塗籠壁であつたのを格子窓に改め、北面東より第二間の塗籠壁であつた所を格子窓に變へ、また上層に於ては東面中央三間塗籠壁であつた所を肘掛窓に改め、西及南入側の床を下げ、地長押附疊敷に改めた。

(圖版一〇三頁参照) 圖は修理成つた西手櫓の西北面全影である。

### 仁和寺仁王門

京都府京都市右京區御室大内町 仁和寺、昭和六年一月十九日指定、構造形式・五間三戸、樓門、屋根母屋造、本瓦葺

寛永十四年から正保元年に至る間、徳川家光の命により伽藍を再建した際に成つたもので、規模宏壯、手法亦雄大、純然たる和様の大樓門として稀な實例である。破損大なりしたため根本的修理を施し、昭和十三年十月竣工した。(圖版一〇四頁参照)

### 法隆寺大講堂

奈良縣生駒郡法隆寺村 法隆寺、明治三十二

年四月指定、構造形式・桁行九間、梁間四間、單層、屋根母屋造、本瓦葺

昭和十年八月起工した大講堂の根本的修理工事は前後四ヶ年にわたる日子を閲し、昭和十三年十一月末に滞りなく竣工した。修理經過及工事中の發見物等に就ては、年鑑十二、十三年版に報告済であるから茲には省略する。

(圖版一〇四頁解説) 圖は修理竣つた大講堂の正側面影及び内部(正面外陣)の有様を示す。三斗虹梁大瓶束組であつた妻飾が椽首組に改められ、正面中央五間の扉構等が舊規に改められたこと、内陣大虹梁下方中央に補入してあつた三ヶ所の柱及斗拱、貫等が撤去された狀態の一部を窺ふことが出来る。なほ再興當時の舊規を考證して、模様が製作せられた。圖は、出来上つたその模様の全姿である。

### 五社神社社殿

靜岡縣濱松市 五社神社、大正三年四月十七日指定、構造形式・本殿 桁行五間、梁間四間、幣殿 桁行三間、梁間一間、拜殿 桁行五間、梁間三間、權現造、屋根柿葺

寛永十一年徳川家光再興を劃し、濱松城主高力攝津守を普請奉行とし、大工木原木工允 藤原義久を棟梁として造營、同十八年辛巳雪月上棟したものが現在の社殿である。爾來延寶、延享、元文、文政、安政等に修理を受けたが、主要部は完全に遺存してゐる。江戸初期に於ける規模や、大なる權現造であつて、手法裝飾の一部には桃山時代の餘韻を止め、雄麗華美を極めた建物である。昭和十一年八月修理に着手し、十三年十二月竣工した。その際屋根の柿葺を防火及耐久のため、柿葺型銅板葺に改めた。(圖版一〇三頁参照)

麗華美を極めた建物である。昭和十一年八月修理に着手し、十三年十二月竣工した。その際屋根の柿葺を防火及耐久のため、柿葺型銅板葺に改めた。(圖版一〇三頁参照)

### 十三年度維持修理中建造物

十三年度に於て維持修理を續行し或は維持修理に着手した建造物は左表の通りである。

#### 名 稱

(着工順)

所在府縣

建仁寺方丈

京都

○法隆寺夢殿及東院廻廊

奈良

○大傳法院多寶塔(大塔)

奈良

○興福寺東金堂

奈良

○唐招提寺禮堂

奈良

○定光寺佛殿

愛知

○西明寺本堂、塔婆

滋賀

○姫路城イ、ロ、ハ、ニ、ホ及ヘ各渡櫓

兵庫

○弘前城辰巳櫓、丑寅櫓及追手門

青森

○高倉神社社殿

三重

○教王護國寺金堂

京都

○普門院本堂

福岡

○邊津宮拜殿

福岡

○神明宮社殿

長野

○天滿神社樓門

和歌山

○妙成寺經堂

石川

○相國寺本堂附玄關廊

京都

○金剛寺塔婆及鐘樓

大阪

○法隆寺舍利殿、繪殿及傳法堂

奈良

前表中○印を附したる建造物に關する解説、特に現狀變更及發見物等のあつたものに付きその報道を以下に掲載する。

ものに付きその報道を以下に掲載する。

### 法隆寺夢殿及東院同廊

奈良縣生駒郡法隆寺村 法隆寺、夢殿明治三十年十二月廿八日指定、同廊明治三十三年四月七日指定、構造形式・夢殿 八角圓堂、單層、屋根本瓦葺、同廊 桁行延長四十二間、梁間一間、單層、屋根本瓦葺

昭和十二年六月修理工事に着手した夢殿及東院同廊は年鑑十三年版既報の如く精密な實測及調査をなしつつ解體をつづけ、同十三年三月には同廊基礎掘方を始め、併行して同廊木拵へを行つた。その掘方中、東院舊趾空洞等を發見、續いて東同廊外側北より三本目柱の位置に柱根一本を發掘した。七月夢殿の基礎取解、八月再び組立に着手し同月六日側柱下納經竝に同廊立柱式を舉行した。又十月には夢殿の組立に着手、同月同廊上棟、貫主墨書の棟札銘に曰く「奉修理上棟東院同廊東棟(西棟)一字 維時昭和十三年戊寅十月十五日大吉祥日 法隆寺法主大僧正定胤敬白」。十二月末には夢殿の隅木、地極、木負まで取付を了り、同廊は榎打化粧裏板を打終つた。工事は十四年初夏の頃竣る豫定である。其の間同廊には左の現狀變更が行はれた。

一、西同廊西側面中央一間ノ開放ナルヲ扉裝置トス。

一、西同廊南隅ニ於ケル隅虹梁下方ノ實附木ヲ撤去スルト共ニ、同所ノ大斗ノ形ヲ整備ス。

一、東同廊南隅ニ於ケル隅虹梁ノ形ヲ改ム。

# 興福寺東金堂

奈良縣奈良市登大路町奈良公園地 興福寺、明治三十年十二月二十八日指定、構造形式・七間四間、單層、屋根四柱造、本瓦葺

堂宇、修理經過及本章座の内部から銅造佛頭及銀造佛手が發見されたことに就ては年鑑十三年版にすでに報告した。工事の進捗に伴ひ、次々と發見物及銘文の發見があつた。即ち昭和十三年九月中旬から内部須彌壇及外部基壇の一部解放を行つたが、須彌壇側廻りに塗つてあつた漆喰を剝脱して調べたところ、その下から花崗岩造の焼損せる石築須彌壇の遺構を發見、又須彌壇底部及前面石階下より松香石敷石の遺構、基壇北側石階の下から松香石造りの舊基壇遺構、北側舊基壇地覆石より直角に北方へ舊回廊基壇の遺構に達する加工松香石を以て構築せる遺構等を發見した。又八月には北側一段通肘木上の付料に應永廿一年九月十一日の墨書銘を發見した。又證據に基き、内部左右右入側の間の假床を撤去し、布石敷に、また、背面左方より第三間の潜戸口を直壁に改め、内部入側東北隅の中二階を撤去する等の現状變更が行はれた。十三年末には軸部組立を終り、すでに小屋組野地取付にかかつてゐる。

## 唐招提寺禮堂

奈良縣生駒郡跡村五條 唐招提寺、明治三十七年二月十八日指定、構造形式・桁行十九

間、梁間前三間、後四間、單層、屋根入母屋造、本瓦葺

禮堂が唐招提寺の舊東室であることは古圖記錄に徴し、又その平面の性質及び伽藍配置の上から明かに考へられ、その建立の年代は不明であるが、東西兩室對稱に整然たる規模を以て建立されてゐたことは明かである。招提千歲傳には馬道以南を禮堂、以北を舍利殿及講坊と稱してゐるが、この禮堂は鎌倉形式に成り、後方舍利殿 講坊の部に鎌倉時代の手法が見え舊僧坊を大改造した形跡が見える。恐らく弘安年間の工作にかかると認められる。この鎌倉時代に於けるこの大改造以後大小修理を受け來たつたが、先年來特にその破損甚しく今回の根本的修理となつたものである。解體の結果鎌倉改造時の規模が判然したので、慎重調査の上、次の如き重要な現状變更が國寶保存會の慎重の議を經、文部大臣許可の下に加へられることになつた。

- 一、禮堂、舍利殿講坊柱下後補ノ根繼石ヲ撤去シ腰貫及椽ノ高サヲ變更ス
- 二、禮堂後補ノ柱七本ヲ撤去シ、中古撤去セシ柱十一本ヲ補入シ各柱間ノ裝置ヲ舊ニ復シ平面ヲ整備ス
- 三、禮堂ノ回椽、梁間ヲ變更シ、天井、床ヲ整備ス
- 四、馬道ヲ變更ス
- 五、舍利殿講坊ノ桁行十間、梁間南面三間北面四間ナルヲ南面梁間ヲ四間ニ改メ且内部ノ後補ノ圓柱十一本ヲ除

去シ方柱十五本ヲ補入シ、佛壇間仕切ヲ撤去シ内部全體ヲ開放セル一室ニ改メ、床、天井ヲ整へ、北妻ノ東立ヲ叔首組ニ且ツ懸魚ノ形ヲ改ム

## 定光寺本堂(佛殿)

愛知縣春日井郡品野町 定光寺、大正十五年四月十九日指定、構造形式・桁行五間、梁間五間、重層、上層假屋根、切妻造、柿葺

當堂は寺藏の「年代記」に依れば、曆應三年創立、明應二年の再建にかかり、永正七年八月地震のため大破し、天文三年再興せしものといふ。純唐様に成るその構造形式は室町中期の優れた特質を表はして居り、大體明應二年の再建にかかると見られ、内陣厨子に「奉造立(中略)宮殿一字……時明應九稔集庚申五月念四日」の墨書銘がある。本堂と手法近似せるより見て、一層その感を深くする。上層の斗拱以上は舊構を存せず、中古いつの頃からか假屋根を架し現在に及び、辛うじて雨露を凌ぐ有様であつたため大に外觀を損してゐた。近年全體の破損特に軸部の蟻害甚しく、辛うじて舊態を保てるに過ぎなかつたため根本的修理を計畫し、國庫の補助を得て昭和十三年二月修理に着手した。

(圖版一〇四頁解説) 本堂の屋根は本來唐様の佛殿として入母屋造の屋根扇様の軒を持つてゐたことは他例で推察出来るが修理前は圖の如き假屋根であつた。

## 姫路城イ、ロ、ハ、ニ、ホ及への各渡櫓

兵庫縣姫路市本町(國有)、昭和六年十二月十

四日指定、構造形式・イ、ロ、ハ、ニの各渡櫓單層渡櫓、屋根本瓦葺、ホの渡櫓二層櫓、屋根本瓦葺、への渡櫓單層渡櫓、兩端疊折、屋根本瓦葺

姫路城本丸北郭の所謂鹽櫓一帯、表記の各棟は造替以來既に三百餘年を経過し、近年腐朽破損を加へ、下方石垣の一部又弛緩し來たつたため、工期一ヶ年の豫定を以て昭和十三年四月修理工事に着手した。然るに同年七月豪雨のため「ろノ門」西南方土塀(西ノ丸東側土塀)の中央部が石垣と共に崩壊し、損傷擴大の虞があつたので、之が修理の計畫をも併せ請じ工費總額約九萬四千五百圓を以て上記各渡櫓計百九十二坪餘、塀三十八間石垣百二十面坪の修理を行つた。尙後世の變更にかかると認めらるる部分は適確なる資料に據り復原することに成つた。

一、イの渡櫓 土間であつたのを床板張に改め之に伴ひ出入口を整へること。

一、への渡櫓 東西二室が土間であつたのを床板張に改め之に伴ひ各一ヶ所の出入口を整へること。

## 教王護國寺金堂

京都府京都市下京區九條町 教王護國寺、明治三十年十二月二十八日指定、構造形式・桁行七間、梁間五間、重層、屋根入母屋造、本瓦葺

文明十八年焼失の後、慶長四年秀頼が

再建に着手し同十一年落成した堂々たる大建築で桃山時代遺構中の傑作である。

再建以後三百三十餘年を経、地盤は高低を生じ爲に大圓柱の或るものは甚しく傾斜し、四隅の隅木亦垂下し、(享保十一年支柱を立てて危険を防ぐ)加ふるに昭和九年の颱風に遭ひその程度を増しつつあつた。昭和十三年七月工費總額十三萬五千圓、二期二年三ヶ月の豫定を以て修理に着手した。

(圖版一〇四頁參照)圖は金堂四周に修理假設物建設中の有様を示す。

### 普門院本堂

福岡縣朝倉郡志波村 普門院、大正二年四月十四日指定、構造形式・方三間、單層、屋根寶形造、本瓦葺

當堂は指定當時觀音寺本堂なる名稱であつたが大正十一年現名稱に變更した。

寺傳に依ると本堂は元中島(今浮羽郡千年村)の地にあつたのを、領主志波時勝の室志波の禪尼が、その地が千年川(筑後川)の邊であり、水害を憂ひ、亡夫の供養のため今の地に移したと稱する。本堂の様式は鎌倉時代中期の風をあらはし斗栱、拳鼻、佛境天井の制等穩健で、和様の構造に唐様の細部を折衷した形式に成る。修理は同十三年九月に着手した。(圖版一〇五頁參照)本堂はその敷地濕潤のため腐朽が甚しかつた。修理に當り、現本堂の位置が創建當初よりのものでなく、又排水にも困難があつたので、境内後方の乾燥せる高地に移建される豫定、

圖は移建修理前の側背面外觀である。

### 神明宮社殿

長野縣北安曇郡社村 神明宮、昭和十一年九月十八日指定、構造形式・本殿 桁行三間、梁間二間、神明造、屋根檜皮葺、中門(前殿)四脚門、單層、屋根切妻造、檜皮葺、附釣屋屋根兩下造、檜皮葺

神明宮の創祀は皇大神宮御領たる仁科御厨鎮護のため勸請されたのによることは明かに推定されるがその年次は仁科御厨設置の年代と共に不明である。然し現存國寶棟札(永和二年より安政三年に至る二十七枚)の銘文によつて、永和二年以來二十年毎に式年造營の儀厳に行はれて今日に至つてゐること、現存の社殿が寛永十三年松本藩主松平直政式年造營を奉仕し、藩士池田吉久を奉行とし、古式を尊重して造營し爾來屢々大小の修理を受け來つたものなる事がわかる。社殿屋根葺材の腐朽が甚しかつたので、本殿は軒桁以上を解体、中門、釣屋は建物全部を解体修理した。工事は昭和十三年九月着工、其の間

- 一、社殿屋根柿葺を檜皮葺に復原
- 一、中門前面柱位置の一尺後退せるを原位置に復原
- 一、中門鯉木三本なりしを四本に復原なる現状變更が行はれた。

(圖版一〇五頁解説)圖は修理前の社殿の全影である。

昭和十三年度國寶指定

建造物之部

古美術保存

閑谷黌講堂

繪畫彫刻之部

紙本著色狩野探幽像	傳桃田柳菴筆	品目	紙本著色狩野探幽像	傳桃田柳菴筆	所有者
紙本著色西行法師行狀繪詞	繪野村宗達筆 詞鳥丸光廣筆		紙本著色西行法師行狀繪詞	繪野村宗達筆 詞鳥丸光廣筆	
寛永七年鳥丸光廣ノ奥書アリ			寛永七年鳥丸光廣ノ奥書アリ		
絹本著色十王像	陸仲熲筆 關羅王、泰山王、五道轉輪王		絹本著色十王像	陸仲熲筆 關羅王、泰山王、五道轉輪王	
紙本淡彩山水圖	雲谷等類筆 六曲屏風		紙本淡彩山水圖	雲谷等類筆 六曲屏風	
金地著色春夏山水圖	傳雲谷等類筆 六曲屏風		金地著色春夏山水圖	傳雲谷等類筆 六曲屏風	
紙本著色山王靈驗記			紙本著色山王靈驗記		
紙本墨畫蓮花水禽圖	野村宗達筆		紙本墨畫蓮花水禽圖	野村宗達筆	
紙本淡彩一休和尚像	墨齊筆ノ一休自贊語アリ		紙本淡彩一休和尚像	墨齊筆ノ一休自贊語アリ	
一幅	東京府東京市之區 金杉深町		一幅	東京府東京市之區 金杉深町	
四卷	同高輪南町		四卷	同高輪南町	
三幅	同		三幅	同	
一雙	同麻布區水坂町		一雙	同麻布區水坂町	
一雙	同		一雙	同	
一卷	同宮村町		一卷	同宮村町	
一幅	同北日ヶ窪町		一幅	同北日ヶ窪町	
一幅	同本村町		一幅	同本村町	
			岡崎正也		
			馬越恭一		
			侯爵井上三郎		
			藤瀬新一郎		
			男爵森村市左衛門		
			公爵毛利元昭		
			狩野守久		



十三册 楞木縣 足利市

三十册

二册

二十五册

二十五

二十五册

二十一册

八卷 同是列市家富丁 嬰

万卷 同是利己害富同

七卷  
群馬縣新田郡世良  
田村  
長

三占  
新瀉縣中蒲原郡金

津村

一卷  
富山縣東礪波郡井波町  
瑞

一幅 石川縣金澤市中町 內

東京府東京市麹町

一 幅  
區永田町二丁目

一幅

同

二帖

一帖  
町同赤坂區青山高樹  
杉

丁巳年

一卷 同四名區屏亞聯

一幅 同仲町三丁目 子

一帖  
同小石川區雜司ヶ  
谷町  
保

一冊 同本郷區森川町 井

一帖 同品川區大井林町 伯

紺紙金字後奈良天皇宸翰般若心經(遠後國)  
 紺紙金字法華經(御願經)(保延六年七月十一日藤原基  
 綏本墨書明王贈豐太閤冊封文(萬曆二十三年  
 正月二十一日)  
 紙本墨書金槐集  
 奧二建曆三年十二月十八日トアリ  
 紙本墨書歌仙歌合  
 紙本墨書陽光院御筆御消息(七十三通)  
 紙本墨書世繼物語卷第廿七、第廿八  
 紙本墨書成唯識論卷第五  
 安和元年十月十六日眞興寺了ノ奥書アリ  
 紙本墨書正嘉三年北山行幸御會歌(金澤文庫本)  
 紙本墨書嚴島御幸記並高倉院昇霞記(金澤文庫本)  
 紙本墨書後深草天皇宸翰御消息(御花押)  
 紙本墨書五部心觀  
 「傳教大阿闍梨手中主持本特分付弟子智惠金剛、此圖珍法  
 號也、六會具足也、大中九年」ノ奥書アリ  
 紙本墨書五部心觀  
 圓珍ノ奥書アリ  
 紙本墨書梵焚(十九葉)  
 紙本墨書三乘淨戒示(八通)  
 紙本墨書德園印信之類  
 圓珍ノ加筆アリ  
 紙本墨書德園三種悉地印信  
 手鑑(月鑑)(七十八葉)  
 紙本墨書陳書列傳卷第十二  
 紙本墨書註楞伽經卷第一  
 紙本墨書大光義品第十一殘闕  
 紙本墨書觀世音寺公驗(保安元年六月廿八日)  
 著色繪料紙墨書扇面法華經殘闕  
 紙本墨書高倉天皇宸翰御消息(十一月十三日)  
 附守覺法親王御消息(同日)一卷  
 紙本墨書後醍醐天皇宸翰御消息  
 紙本墨書金剛頂瑜伽經卷第一、第二、第三  
 各卷二弘仁六年六月十八日ノ願文アリ  
 紙本墨書明惠上人筆入解脫門義上下  
 下卷二承久二年九月三十日ノ奥書アリ

一卷	東京府東中市品川區大井山中町	伯齡 上杉 靈章	紙本墨書明惠上人筆華嚴信種義 承久三年九月廿一日ノ奥書アリ	一帖	京都府京都市右京區同梅ヶ畑尾町	高山寺
十卷	同目墨書中目黒二丁目	子爵 石川 成秀	紙本墨書新譯華嚴經音義 安貞二年四月廿四日書寫ノ奥書アリ	一帖	同	同
一卷	同目墨書田園調布三丁目	松岡 忠良	紙本墨書華嚴孔目章卷第一、第二、第三、第四 建久五年成書書寫ノ奥書アリ	一帖	同	同
一卷	同世田ヶ谷區深澤町四丁目	長尾 欽彌	紙本墨書華嚴孔目章卷第一、第二、第三、第四 建久五年成書書寫ノ奥書アリ	一帖	同	同
三卷	同淺谷區大和田町	小林 正直	紙本墨書俱舍論中不染無知斷位料簡 建久二年四月十五日成書書寫ノ奥書アリ 紙背ニ久安七年仁年二年ノ具注曆アリ	一卷	同	同
一帖	同豐島區長崎東町一丁目	桂 五十郎	紙本墨書釋迦五百大願經上下 嘉祿三年尼明行書寫ノ奥書アリ	二帖	同	同
一卷	同神奈川縣久良岐郡逗子町	安藤 翔一	紙本墨書古華嚴經(黑漆函入) 貞永元年尼眞覺等書寫ノ奥書アリ 貞應元年說定等書寫ノ奥書アリ	五十四帖	同	同
一帖	三重縣桑名市矢田町	竹内 文平	紙本墨書明惠上人筆草 紙背ニ正嘉祿四年四月ノ記アリ	三十八卷	同	同
一卷	滋賀縣大津市別所	園 城	紙本神尾一切經藏領古圖 紙背ニ正嘉祿四年四月ノ記アリ	二枚	同	同
一卷	同	同	紙本墨書義天錄卷第一、第二、第三 各卷二安元二年明空書寫ノ奥書アリ 紙背ニ春記斷簡記ニ文書アリ	二卷	同	同
一笈	同	同	宋刊本齊民要術卷第五、第八	二册	同	同
一卷	同	同	紙本墨書明惠上人筆大唐天竺里程書	一幅	同	同
一卷	同	同	紙本墨書梵天火羅圖 文治五年玄證書寫ノ奥書アリ	一帖	同	同
一卷	東京府東京市澁谷區南平盛町 京都府京都市中京區東洞通九太町 南二本木町	山田 勝一	紙本墨書後宇多天皇宸翰御寄進狀(嘉元四年十二月十日)	一幅	同梅ヶ畑高雄町 同嵯峨大澤町	神護寺
一卷	同	守屋 孝藏	紙本墨書後宇多天皇宸翰灌頂私注上 正和三年五月十四日ノ御奥書アリ 附同灌頂私注上下二卷ノ奥書アリ 下卷三德二年十一月廿六日ノ奥書アリ	一卷	同	同
一卷	同	同	紙本墨書後宇多天皇宸翰灌頂印明 兩界許可作法	六卷	同	同
一卷	同	同	德治三年八月十四日ノ御奥書アリ	一	同	同
一卷	同	同	許可中川宗親記行宴傳 石山觀祐記 德治三年八月十三日ノ御奥書アリ	一	同	同
一幅	同左京區南禪寺草川町 同右京區御室大内町	染谷 寛	金界水明加歸命句事 德治三年六月廿一日ノ御奥書アリ	一	同	同
一卷	同	仁 和	灌頂印明(隆)愚 德治三年五月十二日ノ御奥書アリ	一	同	同
一通	同	同	灌頂印明(勝)愚 德治三年六月廿一日ノ御奥書アリ	一	同	同
三通	同梅ヶ畑尾町	高山 寺	灌頂印明(源)愚 德治三年七月一日ノ御奥書アリ	一	同	同
二帖	同	同	同	一	同	同

紙本墨書後宇多天皇宸翰寶珠抄 應長元年七月廿一日ノ御書アリ	一帖	京都府京都市石京區嵯峨大澤町	大覺寺
紙本墨書後宇多天皇宸翰護摩口決	一卷		同
紙本墨書後宇多天皇宸翰奧砂子平口決 應長二年三月十七日ノ御書アリ	一卷		同
紙本墨書後宇多天皇宸翰(悉曇印信口決) 附後宇多天皇宸翰御紙 二枚	二帖 五帖		同
紙本墨書後宇多天皇宸翰傳法灌頂作法 附深守筆傳法灌頂注 一卷 貞治二年八月十一日書寫ノ御書アリ	一卷		同
紙本墨書後宇多天皇宸翰傳流抄目錄並禪助消息三通	一卷		同
紙本墨書後宇多天皇宸翰傳法灌頂初後供養法次第	二帖		同
紙本墨書全剛界傳法灌頂作法 德治三年禪助傳授ノ御書並二正和二年後宇多天皇宸翰御傳授ノ御書等アリ	一卷		同
紙本墨書契梵印禪助筆 後宇多天皇御傳授ノ御書アリ	一卷		同
紙本墨書秘鈔(青裏(百二十八卷)) 阿彌陀釋迦等ノ十七卷ニ後宇多天皇ノ御書アリ	二十三結		同
紙本墨書大般若經卷第五十六 (天平十九年十一月八日唐僧善意願經)	一卷	兵庫縣武庫郡住吉村	武藤金太寺
色紙墨書千手眼陀羅尼經 元久二年三月加臨ノ御書アリ	一卷	和歌山縣日高郡矢田村	道成寺
紙本墨書仲文章殘卷 正安二年六月八日書寫ノ御書アリ	一卷	徳島縣勝浦郡小松島町	西野嘉右衛門
紙本墨書五條文書(三百六十五通) 中ニ後醍醐天皇御旨、後村上天皇内勅、長慶天皇勅書案、征西將軍宮御消息、後征西將軍宮御消息等アリ	十六卷	福岡縣八女郡大瀬村	男爵 五條頼次

刀 劍 之 部

太刀 銘 長光	一口	東京府京都市牛込區市谷河田町	男爵 徳川義恕
短刀 銘 兼氏	一口	同小石川區高田老松町	侯爵 細川護立
太刀 銘 包水	一口	同品川區五反田五丁目	齋藤茂一郎
太刀 銘 包水	一口	同大井林町	伯爵 伊達興宗
短刀 無銘 傳貞宗	一口	同日墨區駒場町	同
短刀 無銘 傳富藤	一口	同大森區田調布	侯爵 前田利爲
太刀 銘 貞繼	一口	同世田谷區深澤町四丁目	條原三千郎
太刀 銘 國宗	一口	同世田谷區深澤町四丁目	長尾欽彌

工 藝 之 部

刀 無銘 傳則重	一口	東京府京都市澁谷區豐分町	伯爵 伊東治正
太刀 銘 備州長船住景光 正和五年十月日	一口	同千駄ヶ谷一丁目	公爵 徳川家達
太刀 銘 備州長船住景光	一口	同北多摩郡武藏野町吉祥寺	赤星鐵馬
太刀 銘 兼永	一口	新潟縣新潟市本町通七番町	風間要吉
短刀 無銘 傳貞宗	一口	石川縣金澤市田丸町	石黒久呂
短刀 銘 國光	一口	京都府京都市上京區馬口鳥丸西人上ル小山中溝町	新村出
短刀 朱銘 貞宗 本阿(花押)	一口	京都府京都市天王寺區上本町八丁目	黒川福三郎
太刀 銘 國安	一口	兵庫縣武庫郡精道村	瀬戸保太郎
太刀 銘 來國光	一口	岡山縣岡山市下ノ町	小林種次
瑞花蝶鳥八稜鏡 鏡面ニ千手觀音ノ線刻アリ 鏡背ニ佛師僧崇紹大趣具主延曆僧仁祐ノ銘アリ	一面	秋田縣仙北郡豐川村	水神社
瑞花雙八稜鏡 鏡面ニ佛像ノ線刻アリ 鏡背ニ寛弘四年五月廿九日ノ銘アリ	一面	富山縣高岡市御馬出町	菅池貞夫
色繪法螺貝香爐 野村仁清作	一口	愛媛縣越智郡鈍川村	奈良原神社
伊豫國奈良原山經塚出土品			
一 銅寶塔	一基		
一 銅經筒	一面		
一 銅鏡	二面		
一 內殘片	二柄		
一 檜扇	二柄		
一 青白磁盒子	二口		
一 金銅斧	一口		
一 銅鈴	二十口		
一 鐵鈴	一口		
一 銅鏡	二百七十七枚		
一 瑠璃丸玉	二顆		
一 其他伴出物一切	二分		

彫刻之部

彫刻之部

彫刻之部

彫刻之部

彫刻之部

青白磁六花形皿 一  
銅塊 一  
長方形鐵器 五  
以上第三經塚 本

陶製甕 一口  
陶製片口 一口  
土製花瓶 一口  
以上第四經塚 一口

土製經筒 一口  
銅製經筒 一口  
青白磁盒子 一口  
青白磁壺形盒子 一口  
以上第五經塚 二

銅製御正體 一枚  
以上第六經塚 一面  
草花雙鳥鏡 一面  
片輪車雙鳥鏡 一面  
以上第八經塚 一面

金銅裝眉底付鐵冑(和泉國淡輪西小山陵古墳出土) 一  
石製經筒 一  
仁平三年五月二日書寫法華經一部安置齋齋山金剛藏王窟ノ銘アリ 一  
附 湖州鏡 一面  
藏王窟奉施人仁平二年六月十日ノ銘アリ 村

銅鐘 一口  
伯耆大日寺上院之鐘壽永二年五月十九日ノ銘アリ 大  
金銅寶塔 一基  
天神寶前安置承安二年二月廿九日ノ銘アリ 山

昭和十三度國寶所有者變更

文部省告示第十九號 昭和十三年二月一日

左記國寶ハ昭和十二年十月二十八日其ノ所有者變更セリ  
指定告示 品 目 新所有者 舊所有者

昭和三十三號 金地著色太公望圖(二曲屏) 一隻 東京府東京市澁谷區鉢山町 彰小倉

同 片輪車蒔繪螺鈿手篋 一口 東京府東京市澁谷區鉢山町 彰小倉

昭和三十三號 紙本淡彩周茂叔圖「正信」ノ印アリ 一幅 東京府東京市赤坂區永田町 上同

同 上 紙本墨畫許由巢父圖傳狩野永徳筆 二幅 東京府東京市赤坂區永田町 上同

昭和十二年文部省告示第二十一號 紙本著色三十六歌仙切(通昭) 一幅 東京府東京市澁谷區鉢山町 彰小倉  
昭和三十二年文部省告示第二十二號 佐竹家傳來 彰小倉

左記國寶ハ昭和十二年八月十二日其ノ所有者變更セリ  
指定告示 品 目 新所有者 舊所有者  
昭和九年文部省告示第二十三號 紙本墨書大御記本(永保元年具注歷) 一卷 東京府東京市澁谷區九段四丁目 伯耆勸修寺末雄  
古寫本 五卷 伯耆勸修寺末雄  
上 紙本墨書永昌記 六卷 上同

文部省告示第二十三號 昭和十三年二月十四日  
左記國寶ハ昭和十二年九月十日其ノ所有者變更セリ  
指定告示 品 目 新所有者 舊所有者  
昭和八年文部省告示第十五號 太刀 銘 正恆 一口 東京府東京市世田谷區深澤町 村  
長尾欽彌末次 喬

文部省告示第二十四號 昭和十三年二月十四日  
左記國寶ハ昭和十二年十一月二十七日其ノ所有者變更セリ  
指定告示 品 目 新所有者 舊所有者  
昭和九年文部省告示第二十三號 太刀 銘 備前國長船住守家遺文永九年壬申二月二十五日 一口 東京府東京市澁谷區野雄太郎 伯耆伊東治正

文部省告示第二十五號 昭和十三年二月十四日  
左記國寶ハ昭和十二年十二月二十五日其ノ所有者變更セリ  
指定告示 品 目 新所有者 舊所有者  
昭和十年文部省告示第七十二號 太刀 銘 助真 一口 兵庫縣武庫郡本山村 東京府東京市牛込區矢來町 松谷豐次郎

文部省告示第三十四號 昭和十三年二月十八日  
左記國寶ハ昭和十二年十二月二十五日其ノ所有者變更セリ  
指定告示 品 目 新所有者 舊所有者  
昭和十年文部省告示第七十二號 太刀 銘 助真 一口 兵庫縣武庫郡本山村 東京府東京市牛込區矢來町 松谷豐次郎

文部省告示第三十六號 昭和十三年二月二十二日  
左記國寶ハ昭和十二年十二月二十一日其ノ所有者變更セリ  
指定告示 品 目 新所有者 舊所有者  
昭和十年文部省告示第七十二號 紙本墨書金光明最勝王經註釋 一卷 東京府東京市赤坂區四條通堀町東人立賣中町 土橋嘉兵衛

文部省告示第三十六號 昭和十三年二月二十二日  
左記國寶ハ昭和十二年十二月二十一日其ノ所有者變更セリ  
指定告示 品 目 新所有者 舊所有者  
昭和十年文部省告示第七十二號 紙本墨書金光明最勝王經註釋 一卷 東京府東京市赤坂區四條通堀町東人立賣中町 土橋嘉兵衛

文部省告示第三十六號 昭和十三年二月二十二日  
左記國寶ハ昭和十二年十二月二十一日其ノ所有者變更セリ  
指定告示 品 目 新所有者 舊所有者  
昭和十年文部省告示第七十二號 紙本墨書金光明最勝王經註釋 一卷 東京府東京市赤坂區四條通堀町東人立賣中町 土橋嘉兵衛

文部省告示第三十六號 昭和十三年二月二十二日  
左記國寶ハ昭和十二年十二月二十一日其ノ所有者變更セリ  
指定告示 品 目 新所有者 舊所有者  
昭和十年文部省告示第七十二號 紙本墨書金光明最勝王經註釋 一卷 東京府東京市赤坂區四條通堀町東人立賣中町 土橋嘉兵衛

文部省告示第三十六號 昭和十三年二月二十二日  
左記國寶ハ昭和十二年十二月二十一日其ノ所有者變更セリ  
指定告示 品 目 新所有者 舊所有者  
昭和十年文部省告示第七十二號 紙本墨書金光明最勝王經註釋 一卷 東京府東京市赤坂區四條通堀町東人立賣中町 土橋嘉兵衛

文部省告示第三十六號 昭和十三年二月二十二日  
左記國寶ハ昭和十二年十二月二十一日其ノ所有者變更セリ  
指定告示 品 目 新所有者 舊所有者  
昭和十年文部省告示第七十二號 紙本墨書金光明最勝王經註釋 一卷 東京府東京市赤坂區四條通堀町東人立賣中町 土橋嘉兵衛



指定告示

品

目

昭和十一年文部省告示第百二十六號

太刀 銘 光忠

新所有者 京都府京都市中京區鳥丸通三條上ル六之町

一口

鹿 輝 彦

末 次

喬

文部省告示第百六十一號

昭和十三年四月十四日

左記國寶ハ昭和十二年十一月八日其ノ所有者變更セリ

指定告示

品

目

昭和十一年文部省告示第百二十六號

紙本著色三十六歌仙切(重光) 佐竹家傳來

一幅

加 藤 正 治

白 金 山 一 清

文部省告示第百七十號

昭和十三年四月十九日

左記國寶ハ昭和十三年三月十一日其ノ所有者變更セリ

指定告示

品

目

昭和十一年文部省告示第百二十六號

太刀 銘 一助成

新所有者 兵庫縣神戸市灘區船等通一丁目

一口

中 塚 秀 次

河 瀬 ミ ツ

文部省告示第百七十一號

昭和十三年四月十九日

左記國寶ハ昭和十三年三月二十二日其ノ所有者變更セリ

指定告示

品

目

昭和十一年文部省告示第百二十六號

紙本淡彩船窓小戲帖田能村竹田筆 天保元年ノ自序並同四年ノ自跋アリ

一帖

大 阪 府 大 阪 市 東 區 安 土 町 田 村 駒 治 郎

水 原 金 兵 衛

文部省告示第百八十八號

昭和十三年四月三十日

左記國寶ハ昭和十三年三月二十五日其ノ所有者變更セリ

指定告示

品

目

大正十一年文部省告示第百六十八號

太刀 銘 國宗(二代) 附井伊直忠寄進狀一通

一口

滋 賀 縣 彦 根 市 古 澤 井 伊 神 社

佐 和 山 神 社

文部省告示第百九十六號

昭和十三年五月九日

左記國寶ハ昭和十二年十一月二十日其ノ所有者變更セリ

指定告示

品

目

昭和六年文部省告示第九號

木造聖觀音立像

新所有者 東京府京都市麻布區廣尾町

一 軀

小 泉 經 一

小 泉 策 太 郎

同 木造愛染明王坐像

一 軀

上 同

上 同

上 同

同 紙本墨書大唐三藏玄奘法師表啓

一 卷

上 同

上 同

上 同

古美術保存

昭和六年文部省告示第百三十二號

木造阿彌陀如來坐像 胎内ニ久安三年十一月十二日遺立ノ銘アリ

一 軀

小 泉 經 一

小 泉 策 太 郎

昭和十年文部省告示第百七十二號

紙本墨書造東大寺司請經牒(天平勝寶七歲四月廿一日)

一 卷

上 同

昭和六年文部省告示第九號

木造聖觀音立像

一 軀

神 奈 川 縣 横 濱 市 中 區 尾 崎 町 中 村 房 次 郎

小 泉 經 一

文部省告示第百九十七號

昭和十三年五月九日

左記國寶ハ昭和十三年一月二十日其ノ所有者變更セリ

指定告示

品

目

昭和六年文部省告示第九號

木造愛染明王坐像

一 軀

上 同

同 紙本墨書大唐三藏玄奘法師表啓

龍朔三年十一月二十二日ノ本奥書アリ

一 卷

上 同

同 木造阿彌陀如來坐像

胎内ニ久安三年十一月十二日遺立ノ銘アリ

一 軀

上 同

昭和十年文部省告示第百七十二號

紙本墨書造東大寺司請經牒(天平勝寶七歲四月廿一日)

一 卷

上 同

昭和六年文部省告示第百三十二號

木造阿彌陀如來坐像

一 軀

上 同

文部省告示第百二十九號

昭和十三年五月三十一日

左記國寶ハ昭和十三年三月六日其ノ所有者變更セリ

指定告示

品

目

昭和十年文部省告示第百七十二號

短刀 銘 來國俊

一 口

兵 庫 縣 武 庫 郡 鳴 尾 村 伊 藤 文 一

末 次 喬

文部省告示第百三十號

昭和十三年五月三十一日

左記國寶ハ昭和十三年三月八日其ノ所有者變更セリ

指定告示

品

目

昭和六年文部省告示第九號

太刀 銘 備前國長船住左近將監長光造

一 口

京 都 府 與 謝 郡 石 川 村 末 次 喬

河 瀬 眞 作

文部省告示第百三十一號

昭和十三年五月三十一日

左記國寶ハ昭和十三年三月十日其ノ所有者變更セリ

指定告示

品

目

昭和六年文部省告示第九號

太刀 銘 備前國長船住左近將監長光造

一 口

兵 庫 縣 武 庫 郡 鳴 尾 村 伊 藤 文 一

末 次 喬

同 紙本墨書大唐三藏玄奘法師表啓

龍朔三年十一月二十二日ノ本奥書アリ

一 卷

上 同

同 木造阿彌陀如來坐像

胎内ニ久安三年十一月十二日遺立ノ銘アリ

一 軀

上 同

文部省告示第百三十二號

昭和十三年五月三十一日



[illegible]

基	京都府與謝郡加悅町 天満神社	同中郡周枳村 大宮賣神社
基	京都府與謝郡加悅町 天満神社	同中郡周枳村 大宮賣神社境内

大阪府中河内郡八尾  
大阪府中河内郡

岡村 晋吉  
區墓地内

滿願寺  
滿願寺境內

基  
村  
村  
七番地

一幅  
東京府東京市麴町  
區永田町二丁目  
公爵近衛文麿

一 帳 同三番同  
山 屯 程 二

二、三、四、五

一名 國門國門

一畝 司世田 谷 粟 麦 成 丁 高 木 八 尺

同遊谷區千歌ヶ谷

三番 同杉並區馬橋三丁 反町 川井 佳

一幅 同西高井戸二丁目 川崎與惣次

一幅 同瀧野川區中里町 林 莊 治

上 同 一 帖 取 有

三卷  
區小松町  
堂本三之助

朝町  
村  
山  
長  
尊

六軒町 格才屋二良

昭和十三年五月十日

## 所有者

新正之序

山崎種二

内田孝藏

水野増八

七海兵吉

高木 久

成  
漸  
澄

包田和村

林庄台

司  
上

堂本三之助

村山長舉

橋本辰二郎

同上

彫刻之部

木造阿彌陀如來坐像  
木造神像

文書典籍書蹟之部

紙本墨書神皇正統記 上中下

紙本墨書職原鈔聞書 上下

紙本墨書後陽成天皇宸翰御消息(青蓮院宛 御花押)

彩箋墨書宇治拾遺物語(近衛家藏筆 各卷ニ繪アリ)

紙本墨書入楞伽經卷第五(敦煌出土)

紙本墨書瑜伽師地論卷第十(天平十二年五月一日光明皇后御願經)

紙本墨書法集經卷第三(天平十二年五月一日光明皇后御願經)

紙本墨書法集經卷第一(天平十二年五月一日光明皇后御願經)

紙本墨書大般若經卷第四百六十九(藥師寺ノ朱印アリ)

紙本墨書伊勢集斷簡(石山切) (ひたすらに)

色紙墨書伊勢集斷簡(石山切) (いかになる)

色紙墨書貫之集下斷簡(石山切) (あさひさす)

彩箋墨書貫之集下斷簡(石山切) (てにむすふ)

紙本墨書伊勢集斷簡(石山切) (秋月ひとつに)

料紙ニ破綴重綴アリ

紙本墨書伊勢集斷簡(石山切) (もかりたるあま)

料紙ニ破綴重綴アリ

彩箋墨書伊勢集斷簡(石山切) (すみを人に)

彩箋墨書大色紙(いにしへに)

紙本墨書釋梵次第傳藤原定家筆

中ニ室題以下ノ指圖五枚アリ

紺紙銀字華嚴經卷第卅一殘卷(二月堂焼經)

紙本墨書古今集卷第十(了佐切本)

元和七年鳥丸光廣ノ跋アリ

紙本墨書光源氏系圖傳藤原爲家筆

紙本墨書光源氏物語(鈴虫巻 傳藤原俊成筆)

紙本墨書源氏物語(葵巻)

片假名註ノ書人及ヒ裏書アリ

古美術保存

一軀	靜岡縣田方郡江間村	北條寺	紙本墨書源氏物語 <small>(帚木巻 傳藤原爲家筆)</small>	一帖	七海兵吉
一軀	大阪府大阪市西區松島町一丁目	川万清臣	紙本墨書源氏物語 <small>(少女巻 傳二條院讀破筆)</small>	一帖	同
三冊	栃木縣上野郡賀那日町	輪王寺	紙本墨書詞華和調集傳阿佛筆	一帖	同
二冊	埼玉縣見沼郡本庄町	橋本錄郎	紙本墨書詞花和調集傳藤原爲氏筆	一帖	同
五卷	東京府東京市麹町區永田町二丁目	公爵近衛文麿	紙本墨書法華經卷第四 <small>(敦煌出土)</small>	一卷	有尾佐治
一卷	同趣町一丁目	中村竹四郎	紙本墨書正親町天皇御點九條兼孝詠草	一幅	小津秋平
一卷	同趣町一丁目	加藤正治	紙本墨書後水尾天皇宸翰御消息 <small>(詠松上殿和哥)</small>	一幅	小林正直
一卷	同赤坂區青山南町一丁目	内川孝藏	紙本墨書後水尾天皇宸翰御消息 <small>(廿二日 御花押 詠望、幽徑書)</small>	一幅	同
一卷	同六丁目	杉本九八郎	紙本墨書後水尾天皇宸翰御消息 <small>(十一月晦日 曼珠院宛)</small>	一幅	同
一幅	同	福井菊三郎	紙本墨書後西天皇宸翰懷紙 <small>(ちりうせて 花落花滿庭)</small>	一幅	同
一幅	同	同	紙本墨書後西天皇宸翰懷紙 <small>(ちりうせて 花落花滿庭)</small>	一幅	同
一幅	同	同	紙本墨書最勝王經註釋斷簡 <small>(飯室切) (無傳方懸腕)</small>	一幅	同
一幅	同	同	紙本墨書藤原俊成筆古今集卷第二斷簡 <small>(昭和切) (たちとよりて)</small>	一幅	同
一幅	同	同	紙本墨書藤原俊成筆古今集卷第三斷簡 <small>(昭和切) (うたをよみて)</small>	一幅	同
一幅	同	同	紙本墨書和漢朗詠集卷上斷簡 <small>(戊辰切) (若菜)</small>	一幅	同
一幅	同	同	紙本墨書和漢朗詠集卷下斷簡 <small>(戊辰切) (晴)</small>	一幅	同
一幅	同	同	紙本墨書後陽成天皇宸翰二首和歌御 <small>(依傳侍人 開詞増懸)</small>	一幅	同
一幅	同	同	紙本墨書豐臣秀吉自筆書狀 <small>(四日 くら宛)</small>	一幅	同
一幅	同	同	彩箋墨書貫之集下斷簡 <small>(石山切) (人めをたひと)</small>	一幅	同
一幅	同	同	紙本墨書後柏原天皇宸翰御詠草 <small>(山霞)</small>	一幅	同



紙本墨書徳川家康自筆日課念佛

中ニ慶長十七年子六月二日アリ

紙本墨書後宇多天皇院宣(八月廿日)

(吉田定房奉)

紙本墨書看到懷紙(八音)

中ニ後柏原天皇宸翰アリ

紙本墨書後西天皇宸翰御懷紙(千早振)

紙本墨書古今集卷第十八斷簡(高野切)(貞觀御時に)

色紙墨書古今集卷第二斷簡(傳行成重)(はるのうたと)

紙本墨書古今集卷第十五斷簡(大江切)(あしへより)

彩箋墨書三寶繪斷簡(東大寺切)(てすさひの)

紙本墨書藤原俊成筆千載集卷第十五斷簡

(日野切)(藤原隆親、おちひる)

紙本墨書曾根好忠集斷簡(八月上)

紙本墨書和漢朗詠集卷上斷簡(皮辰切)(前裁)

紙本墨書和漢朗詠集卷下斷簡(皮辰切)(親身岸額)

紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙(詠落葉和哥)

紙本墨書最勝王經註釋斷簡(徹室切)(露味大正)

紙本墨書古今集卷第二十斷簡(通切)(ひたちうた)

彩箋墨書伊勢集斷簡(石山切)(われさへうきに)

料紙ニ破綴アリ

紙本墨書後陽成天皇宸翰御消息(三陽十又七家、中)

(院通勝宛、御花押)

紙本墨書明正天皇宸翰御消息(御製の一巻云々)

紙本墨書靈元天皇宸翰御消息(御花押)

紙本墨書靈元天皇宸翰御消息(御花押)

彩箋墨書伊勢集斷簡(石山切)(いなりやま)

紙本墨書後西天皇宸翰御懷紙(山櫻)

紙本墨書拾遺和歌集 上

紙本墨書日本紀竟安歌 上下

## 刀 劍 之 部

太刀折返銘永徳(一年壬戌八月日寶壽)

刀銘 以南壁藏於駿州盛前唐繼

瀧州所生藤原野小利部自珍

愛知縣海部郡南陽

三重縣桑名市矢田

京都府京都市中京

京大阪材木町

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

加藤仙壽

竹内文平

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

太刀銘 包永

刀銘 肥前國住人忠吉作

刀無銘 傳義弘

刀無銘 傳左

刀銘 出羽大接藤原國路

太刀銘 雲生

太刀銘 爲次

刀銘 生國日の住井上和泉守藤原國貞

寬永二十一年二月吉日

太刀銘 來國光

短刀銘 則重

短刀無銘 傳法城寺

太刀銘 包永

太刀銘 一

太刀銘 一

太刀銘 傳一文字(號山鳥毛)

太刀銘 附一刀拵

太刀銘 附長光(號高木)

太刀銘 附打刀拵

太刀銘 長谷部國信ノ銘アリ(號唐柏)

短刀銘 國光

太刀銘 舌青江

太刀銘 助綱

刀銘 奥州仙台住山城大接藤原國包

寬永五年八月吉日

短刀銘 備州長船住兼長

貞治五年十月日

太刀銘 來國俊

刀銘 武藏大接藤原忠實

此忠實埋忠明壽皇子

寬永六年九月廿四日

刀無銘 傳恆次

太刀無銘

太刀銘 延吉

刀無銘 傳來國光

太刀銘 國宗國宗

茨城縣新治郡土浦

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

石川清晴

伯爵奥平昌恭

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同



古美術保存

銅造阿彌陀三尊立像

正中二年乙丑二月一日於奥州菊田庄龍泉庵奉鑄之云々  
ノ刻銘アリ

土俣

神奈川縣横濱市神奈川區三ツ澤出土

土俣

神奈川縣足柄上郡山田村出土

木板彩畫懸佛

各裏面ニ建治元年九月九日願主祐禪ノ墨書アリ

陶製法花人物文壺

蒔繪松竹圖沱宮

磁製古九谷色繪漁舟圖八角皿

銅製四神四獸鏡

靜岡縣磐田郡御厨村古墳出土

滋賀縣滋賀郡和通村大塚山古墳出土品

石冠形土製品

宮城縣宮城郡七ヶ濱村出土

土製獸

茨城縣稻敷郡高田村榎塚貝塚出土

角製裝飾品

宮城縣桃生郡宮戸村里澤貝塚出土

鬼瓦

木造厨子

長祿四年庚辰十二月十一日ノ墨書銘アリ

嵌玉怪獸形黃金帶鉤

傳河南省洛陽金村古墓出土

磁製素三彩龍文花瓶「大明萬曆年製」ノ銘アリ

玉製馬首

銅製鳥形甬

傳河南省彰德府古墓出土

鑲金花鳥文八曲銀製長杯

鑲金花鳥文六花形臺附銀杯

鑲金花鳥文八花形臺附銀杯

鑲金禽獸文花形臺附銀杯

鑲金花鳥文花形銀杯

三驅

福島縣石城郡植田町

一箇

神奈川縣横濱市神奈川區岡野町

一箇

同足柄上郡山田村

六面

石川縣羽咋郡西増磯村

一箇

同江沼郡大聖寺町

一合

同橋立村

一枚

靜岡縣磐田郡御厨村

一面

滋賀縣滋賀郡和通村

一箇

同坂田郡長濱町

一箇

同

一箇

京都府京都市下京區四塚通大宮西人九條町

一箇

大阪府大阪市天王寺區生玉町

一基

同小宮町

一箇

兵庫縣武庫郡精道村

一箇

同

一箇

同住吉村

一箇

一箇

藥師堂

石野瑛

小宮柳太郎

高爪神社

大聖吉次

同

酒谷長作

蓮城寺

小西武三郎

財團法人下郷共濟會

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

銅鐘(熊野新宮大雄禪寺鐘)

正中二年十月ノ銘アリ

綠釉唐草瓦

奈良縣奈良市法華寺町出土

名

建造物之部

石造寶篋印塔上杉寧方造修塔

永和五年己未五月十三日ノ刻銘アリ

木造五輪塔

石造鳥居

石造鳥居(伴氏社鳥居)

石造燈籠

石造燈籠

石造十三重塔

石造燈籠

俗ニ西園堂型ノ稱アリ

品

繪畫之部

文部省告示第三百七號

昭和十三年九月五日

品

繪畫之部

絹本着色梅雀圖「舞華室印」ノ印アリ

紙本着色十二ヶ月風俗圖

紙本着色風俗圖「若々兵衛筆」

絹本着色毛元就像天正十九年親喜ノ贊アリ

絹本着色洞山渡水圖「傳馬遠筆」

紙本着色扇面流圖六曲屏

絹本着色愛染明王像傳後醍醐天皇宸翰御贊アリ

絹本着色五百羅漢圖傳明兆筆

絹本着色華嚴五十五所繪

絹本着色鴛鴦圖「傳李安忠筆」

絹本着色夕陽山水圖「馬脈筆」

絹本着色夕陽山水圖「馬脈筆」

一口

兵庫縣飾磨郡英賀保村

一箇

奈良縣奈良市奈良坂町

所有者

所在地

神奈川縣鎌倉郡鎌倉町大字鎌倉寺上町十七番地

金剛寺

同中郡東野村

一基

京都府京都市上京區御苑内

一基

同馬喰町

一基

同相樂郡川西村

一基

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

英賀神社

鈴木信吉

鈴木信吉

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

紙本墨畫漁村夕照圖 <small>傳收漢筆 道有ノ印アリ</small>	一幅	東京府東京市赤坂區青山南町六丁目	根津嘉一郎	紙本墨畫三保松原圖	六幅	大阪府豐中市新免町	平尾喜三郎
紙本墨畫蒲雀圖 <small>傳收漢筆 楚石ノ印アリ</small>	一幅	同	同上	紙本墨畫漁樂圖池大雅筆	一幅	兵庫縣武庫郡精道村住吉村	松山與兵衛
紙本墨畫布袋圖 <small>因陀羅筆 楚石ノ印アリ</small>	一幅	同	同上	紙本著色是害坊繪	一卷	同	男爵住友吉左衛門
絹本着色渡邊龜山像 <small>椿山筆 卷止ニ、龜山先生四十五歲像癸丑十月十一日稿</small>	一幅	同四谷區石京町	渡邊元一	絹本着色兩頭愛染明王像	一幅	同	油谷遼
紙本着色婦女遊樂圖六曲屏	一雙	同生込區二丁騎町	平尾贊平	絹本着色武田信玄像 <small>長谷川信春筆</small>	一幅	和歌山縣伊都郡高野町	成慶院
絹本着色美人若衆圖喜多川歌麿筆	一幅	同	同上	塑造婦女坐像	一軀	京都府京都市中京區東洞院通丸太町南人三木町	守屋孝藏
絹本着色夏姿美人圖喜多川歌麿筆	一幅	同小石川區高田老松町	同	木造阿彌陀如來立像	一軀	京都府京都市中京區東洞院通丸太町中ノ島七丁目	尼崎伊三郎
紙本墨畫琴棋書畫圖六曲屏	一雙	同金富町	子爵細川護立	木造地藏菩薩立像	一軀	大阪府大阪市北區	同上
絹本着色傳名和長年像 <small>長谷川信春筆</small>	一幅	同世田谷區深澤町四丁目	長尾欽彌	像内文書ニ仁治元年十二月十六日遺立ノ記アリ	一軀	同	同上
絹本墨畫月夜山水圖 <small>長澤蘆雪筆</small>	一幅	同杉並區阿佐ヶ谷二丁目	青柳瑞穂	文書典籍書蹟之部	一帖	東京府東京市麹町區永田町二丁目	公爵近衛文麿
絹本着色藤原信盈像 <small>尾形光琳筆 信盈自贊跋信逸及元祿十七年元仲ノ贊アリ</small>	一幅	同	原富太郎	紙本墨畫後西天皇宸翰小倉山庄色紙和哥	一帖	同	同上
絹本着色騎馬武者圖 <small>小野通玄筆</small>	二幅	同	鈴木まゝ	紙本墨書華手經卷第十一 <small>延寶二年正月三日、御吳書アリ</small>	一卷	同	同上
紙本墨畫訪瓊錄 <small>渡邊華山筆 天保三年ノ自序アリ</small>	三冊	同	早川猪太郎	紙本墨書尊圓親王御筆御消息 <small>二月五日</small>	一幅	同	同上
紙本金地著色婦女舞蹈圖 <small>四枚貼付 六曲屏</small>	一隻	同	同上	紙本墨書古今集傳爲相筆	二色	同	同上
紙本着色本間孫四郎遠矢圖 <small>岩佐又兵衛筆</small>	一幅	同	同上	紙本墨書後拾遺和詩抄上傳爲家筆	一帖	同	同上
紙本着色詠歌彈琴圖 <small>鳥居清長筆</small>	一幅	同	同上	紙本墨書和漢朗詠集上下	二帖	同	同上
紙本着色一掃百態圖 <small>渡邊華山筆 文政元年ノ自序アリ</small>	一冊	同	同上	各帖ニ元應元年書寫ノ吳書アリ	二卷	同	同上
絹本着色渡邊龜山像 <small>稿椿山筆</small>	一幅	同	同上	紙本墨書近衛基熙筆一資抄	七十四冊	同	同上
絹本着色日堯上人像 <small>長谷川信春三十四歲筆</small>	一雙	同	同上	附 近衛家久筆目錄一冊	一帖	同	同上
紙本金地著色四季松樹圖 <small>狩野探幽筆 六曲屏</small>	一幅	同	同上	紙本墨書明惠上人筆夢記 <small>同十一日復夢云</small>	三十三冊	同	同上
絹本着色木村兼葭堂像 <small>谷文晁筆 享和二年ノ年記アリ</small>	一幅	同	同上	紙本墨書古今集卷第二斷簡 <small>高野切、よしのかはの</small>	一卷	同	同上
絹本着色夏冬山水圖 <small>吳春筆</small>	二幅	同	同上	色紙墨書萬葉集卷第四斷簡 <small>梅尾切、吾妻奈未</small>	一葉	同	同上
絹本着色秋草圖 <small>松村景文筆</small>	二幅	同	同上	彩箋墨書傳道濟集斷簡 <small>あるやうありて</small>	一幅	同	同上
絹本着色永源寺秋景圖 <small>畫名海屋筆 自贊アリ</small>	一幅	同	同上	彩箋墨書古今集卷第四斷簡 <small>傳俊賴筆、卷首</small>	一幅	同	同上
	一幅	同	同上	紙本墨書古今集 <small>傳爲家筆</small>	二帖	同	同上

紙本墨書後奈良天皇宸翰御詠草(簾座稿以下九首)	一幅	東京府東京市芝區高輪南町	公卿毛利元昭	紙本墨書三千句梅全元保筆 天正六機端日殿寫ノ藏語アリ	一册	東京府東京市日黒區上目黒二丁目	石井光雄
紙本墨書正親町天皇宸翰三十六人歌合	一帖	同	同	紙本墨書澤庵筆五逆人聞雷(臨濟錄抄)	一册	同	同
紙本墨書毛利元就教誡狀 <small>(指月廿五日 隆元陸景元春宛)</small>	一卷	同	同	紙本墨書論語義疏	四册	同	同
紙本墨書伏見天皇宸翰斷簡 <small>(廣澤切(潮以下八首)</small>	一幅	同三田綱町	伯爵德川達孝	紙本墨書文選集注斷簡 <small>(萬里結變云々)</small>	一幅	同	同
紙本墨書東山天皇宸翰御懷紙 <small>(詠菊有新花和歌)</small>	一幅	同	同	紙本墨書文選集注斷簡 <small>(卷第六十)</small>	一卷	同	同
紙本墨書古今集卷第一斷簡 <small>(宮野切(ゆきのふりけるを)</small>	一幅	同麻布區赤町	遠山元一	刊本北朝詩集 卷第九ニ應安七年祖應ノ刊記アリ	七册	同	同
紙本墨書古今集卷第九斷簡 <small>(宮野切(きたへくらす)</small>	一幅	同	同	刊本五燈會元 貞治五年ノ刊記アリ	二十册	同	同
紙本墨書和漢朗詠集上卷斷簡 <small>(伊豫切(三月鑑)</small>	一幅	同	同	元刊扶宗顯正論	一册	同	同
紙本墨書和漢朗詠集上卷斷簡 <small>(伊豫切(應付歸屬)</small>	一幅	同	同	元刊坡仙集 一册ニ貞和四年乾筆土曼讀了ノ記アリ	六册	同	同
紙本墨書貫之集下斷簡 <small>(石山切(おとばやの)</small>	一幅	同	同	刊本東明惠日和尙語錄 <small>(至德二年刊)</small>	一册	同	同
紙本墨書金葉集	一帖	同小石川區雜司ヶ谷町	保坂隣三郎	元刊注法華經卷第四釋尊偷撰 大德十年ノ刊記アリ	一帖	同	同
紙本墨書源氏物語 <small>(源氏物語卷 權卷(晴雲本)</small>	一帖	同	同	宋刊華嚴經 <small>(卷第七、八、九、十 卷第六十七、六十八 卷第六十六、六十七、六十八 十無盡院ノ朱印アリ)</small>	三帖	同	同
紙本墨書むぐら卷第三	一帖	同	同	宋刊華嚴經疏卷第一百一十五淨源注 「十無盡院」ノ朱印アリ	一帖	同	同
紙本墨書大毗盧遮那成佛神變加持經蓮華胎藏廣大成就儀軌卷上	一卷	同	同	宋刊事抄科下元照撰 「十無盡院」ノ朱印アリ	一帖	同	同
仁安四年二月六日書寫ノ奥書アリ				宋刊佛祖宗派圖	一帖	同	同
紙本墨書小品般若經卷第一 <small>(天平十二年五月一日光明皇后御願經) 「東大寺印」ノ朱印アリ</small>	一卷	同日黒區上目黒一丁目	石井光雄	宋刊一切經目錄上下 <small>(湖州思溪版)</small>	二帖	同	同
紙本墨書根本說一切有部毗奈耶頌卷第一 <small>(天平十二年五月一日光明皇后御願經)</small>	一卷	同	同	宋刊衆經目錄	五帖	同	同
紙本墨書大般若經卷第二百五十五 <small>(藥師寺經)</small>	一卷	同	同	「唐招提寺」ノ朱印アリ	一册	同大森區山王二丁目	德富猪一郎
紙本墨書大般若經卷第二百九十八 <small>(藥師寺經)</small>	一卷	同	同	紙本墨書王注周易殘卷 <small>(自鑒詳) 永正六年三條西實隆書寫ノ奥書アリ 「龜橋院」ノ朱印アリ</small>	二帖	同	同
紙本墨書大般若經卷第五百三十五 <small>(藥師寺經)</small>	一卷	同	同	紙本墨書金剛經若波羅密經殘卷 <small>(敦煌本)</small>	一卷	同	同
紙本墨書大般若經卷第三百八十六殘卷 <small>(貞觀十三年三月三日安倍小水磨願經)</small>	一卷	同	同	紙本墨書承久二年具注曆殘卷	一册	同	同
紙本墨書大般若經卷第五百廿八 <small>(七寺經)</small>	一卷	同	同	紙背ニ聖教目錄アリ	一册	同	同
承安五年七月十八日書寫ノ奥書アリ				宋刊文選 <small>(李善注 自卷第一至第十二 「寶勝院」ノ朱印アリ)</small>	六册	同	同
紺紙金字大集口藏經卷第八 <small>(神護寺經)</small>	一卷	同	同	宋刊國朝諸臣奏議 <small>(元修本)</small>	三十册	同	同
紺紙金字地藏十輪經卷第二 <small>(神護寺經)</small>	一卷	同	同	宋刊大明藏 <small>(釋教弘撰 卷上缺)</small>	三册	同	同
紺紙金字金剛頂超勝三界經說文殊師利菩薩說秘密心眞言 <small>(神護寺經)</small>	一卷	同	同	「普門院」ノ朱印アリ	三册	同	同
紙本墨書金剛般若波羅密經殘卷 <small>(敦煌本)</small>	一卷	同	同	大永七年點了ノ奥書アリ			
紙本墨書維摩詰經卷下 <small>(敦煌本)</small>	一卷	同	同				
紙本墨書金波海 <small>(從翁是英和尚語錄)</small>	三册	同	同				
紙本墨書天隱龍澤筆翠竹眞如頌	二册	同	同				



紙本墨書後水尾天皇宸翰年賀御消息 誠にたちかへり候  
紙本墨書後西天皇宸翰土佐光起筆柿本人麿像御賛

紙本墨書豊臣秀吉自筆茶器覺書

紙本墨書後陽成天皇宸翰御消息 (仲秋初四) (右大臣宛)

紙本墨書寶龜四年文書 簀付

紙本墨書徳川家康自筆書狀 (ちよは宛)

紙本墨書伊勢集斷簡 (石山切) (秋ふくかせに)

紙本墨書千載集卷第十七斷簡 (日野切) (良通法し)

紙本墨書明月記斷簡 (正治元年八月五日六日)

紙本墨書寂室元光墨蹟 (貞治癸卯至冬) (前缺)

紙本墨書豊臣秀吉自筆茶會覺書

紙本墨書著到御懷紙 (千鳥鳴鳴)

紙本墨書藤原基俊筆和漢朗詠集卷上斷簡 (多賀切) (九月盡)

紙本墨書楠木正儀書狀 (正平廿年十二月廿九日) (玉井右京宛)

紙本墨書刀繪圖

紙本墨書新古今集卷第六傳家陸筆

紙本墨書後水尾天皇宸翰年賀御消息 (大聖寺宛)

紙本墨書齋宮女御集斷簡 (小島切) (しをとおはにいて)

紙本墨書道濟集斷簡 (紙燃切) (みやこのことを)

紙本墨書家集斷簡 (針切) (あるところの)

紙本墨書貫之集下斷簡 (石山切) (玉粹の)

紙本墨書伊勢集斷簡 (石山切) (これはきさきの)

紙本墨書古今集卷第七斷簡 (昭和切) (僧正遍照、ちはやふる)

彩箋墨書寸松庵色紙 (ちはやふる)

彩箋墨書古今集卷第五斷簡 (傳俊頼筆) (兼豐王)

彩箋墨書三寶繪斷簡 (東大寺切) (はちこく王に)

一幅 東京府京都市澁谷區大和田町 小林 正直 上

一幅 神奈川縣横濱市中區本郷町三丁目 須藤 金作 上

一幅 同鎌倉郡鎌倉町大町 佐佐木 文綱 上

一卷 同足柄下郡小田原町万年町 鈴木 英雄 上

一幅 同宮山縣西磯波郡石動町字福町 岡本 吉次郎 上

一幅 靜岡縣武儀郡岡町 深川 淳一 上

一幅 同岡縣濱名郡結志村 高林 兵衛 上

一通 同 同 上

一幅 愛知縣名古屋市中區矢場町一ノ切 山本 權次郎 上

一幅 京都府京都市上京區大宮玄塚北町 土橋 嘉平治 上

一幅 同 同 上

一卷 同中京區越屋町姉小路 岸本 貫之助 上

一卷 同姉小路鳥丸東人 善田 喜一郎 上

一幅 同左京區南禪寺下河原町 野村 徳七 上

一幅 同南禪寺草川町 染谷 寛治 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

彩箋墨書伊勢集斷簡 (石山切) (こなたてまつり)  
色紙墨書貫之集下斷簡 (石山切) (くもてくる)

紙本墨書家事分阿毗曇卷第六 (天平寶字六年光聖親經) (法隆寺一切經ノ黒印アリ)

紙本墨書大般若經卷第一百五十七 (婆伽寺經)

紙本墨書正親町天皇宸翰覺想法親王御筆渡唐天神像御賛

紙本墨書十誦徒卷第五十九 (天平十二年五月一日光明皇后御願經) (東大寺印ノ朱印アリ)

刀 劍 之 部

太刀銘 包永

刀無銘 傳一文字

太刀銘 恆光

太刀銘 嗣後州正 傳正廣

刀銘 長曾福興里人通庸徹

脇指銘 長曾福興里彫物同作

刀無銘 傳正宗

薙刀直シ折返銘 大和尻懸住則長

太刀銘 眞恆

刀金象嵌銘 吉貞本阿花押

刀無銘 傳景安

太刀銘 眞恆

刀銘 津田越前守助廣

太刀銘 包永

太刀銘 正恆

刀無銘 傳行光

刀無銘 傳包永

刀銘 傳國俊

一幅 京都府京都市左京區南禪寺草川町 染谷 寛治 上

一卷 同 同 上

一卷 同 同 上

一幅 大府府大阪市東區高麗橋五丁目 富田 仙助 上

一卷 同天王寺區上木町九丁目 嶋田 定知 上

一口 山形縣鶴岡市家中町 伯爵 酒井忠良 上

一口 同大寶寺町 酒井 忠純 上

一口 同福島縣相馬郡飯豊町 熊川 明 上

一口 東京府京都市麴町區永田町二丁目 公爵 近衛文麿 上

一口 同芝區高輪南町 伯爵 奥平昌恭 上

一口 同四谷區南町 犬養 健 上

一口 同牛込區中里町 久保 威夫 上

一口 同矢來町 大橋 不二雄 上

一口 同小石川區大塚仲町 若杉 繁一郎 上

一口 同下谷區上野櫻木町 檜山 トメ 上

一口 同品川區五反田五丁目 齋藤 茂一郎 上

一口 同澁谷區宇田川町 蒲地 政司 上

一口 同豊田一丁目 松本 吉晴 上

一口 同杉並區井荻一丁目 磯部 覺太 上

一口 同新潟縣新潟市木町通七番町 風間 要吉 上

一口 同 同 上

一口 同 同 上

一口 同 同 上

一口 同 同 上

一口 同 同 上

短刀附吉光、木阿彌光甫書狀(五月二十五日千宗盛宛)  
外三通、一巻

刀額銘 信國

太刀銘 助則

刀無銘 傳法城寺

刀無銘 傳三原正廣

太刀銘 家忠

太刀銘 長光

太刀銘 一

太刀折返銘 備州長船住景光

刀銘 備前國住長船与三左衛門尉祐定作  
天文四年二月吉日

鹿角製刀裝具

青磁鎗水指

螺鈿龜甲地鞍黃漆九三引兩紋後補

鐵地高彫象嵌一輪牡丹圖撫角形鐙銘夏雄

磁製五彩唐草文壺有蓋

赤銅地高彫色繪三生果圖木瓜形鐙

赤銅地高彫色繪象嵌高砂欄小柄

銘 慶應一寅季上巳後一日夏雄(花押)

磁製五彩龍鳳牡丹文盒子

「大明憲曆年製」銘アリ

陶製黑花牡丹文餅

袈裟襷文銅鐙

黑漆五十四間緋威五枚袖星兜

物置輪臺埴付肩庇吹返敷子包、三鐵形前立

袈裟襷文銅鐙

傳教王護國寺境内出土

工藝品及考古學資料之部

一口	京都府京都市中京區勸學院町	吉田	由道
一口	大阪府大阪市東區清水谷西之町	加	鳥
一口	同港區九條中通四丁目	岡	田
一口	同港區三丁目	桑	名
一口	兵庫縣神戸市須磨區大手町八丁目	崎	山
一口	同西宮市中昭和町	三	矢
一口	同武庫郡住吉村	濱	田
一口	福岡縣小倉市京町十二丁目	岩	崎
一口	同市千防町四丁目	宮	下
一口	熊本縣熊本市大江町	落	合

陶製線袖骨壺	附巴瓦片	五箇	京都府京都市伏見區深草極樂寺町	木村捷三郎
唐草瓦片	三箇	京都府京都市中京區勸學院町	同愛宕郡鞍馬村	鞍馬寺
銅印文「遠景福印」	一箇	同愛宕郡鞍馬村	同	同
鞍馬寺境内出土	一箇	同	同	同
銅製水瓶	一口	同	同	同
鞍馬寺境内出土	一口	同	同	同
銅製半圓方形帶神獸鏡吳寶鼎元年ノ銘アリ	一面	大阪府	同	同
傳浙江省紹興古墓出土	一面	大阪府	同	同
銅製四神鏡唐永徽元年ノ銘アリ	一面	同北區中之島七丁目	尼崎伊三郎	上
袈裟襷文銅鐙	一箇	同	同	同
大阪府南河内郡磯長村出土	一箇	同	同	同
袈裟襷文銅鐙	一箇	同	同	同
銅製瑞花双鸞八稜鏡	一面	同泉北郡高石町	山川七左衛門	上
三重縣阿山郡稻植出土	一面	同	同	同
銅製松喰鶴鏡	一面	同	同	同
銅製菊枝双雀鏡	一面	同	同	同
銅製鸞鴛牡丹唐草八稜鏡	一面	同	同	同
銅製牡丹唐草尾長鳥鏡	一面	同	同	同
銅製葵薄扇面双雀鏡	一面	同	同	同
銅製蓬萊山鏡	一面	同	同	同
銅製桐竹鳳凰鏡	一面	同	同	同
帽形壇輪	一箇	奈良縣南葛城郡葛城村	木村宗七郎	上
奈良縣南葛城郡出土	一箇	同	同	同
銅印印文「真」寺印	一顆	山口縣山口市野田町	弘津史文	上
豐前國分寺出土	一箇	同	同	同
漆漆四脚盤	一箇	同	同	同
底裏三上山切縁端御口堅	一箇	同	同	同
文明天十年施人寄添ノ朱漆銘アリ	一箇	同	同	同
木造三重小塔	一基	同	同	同
基壇底裏二周防州上野寺應永十三年閏六月一日ノ墨書アリ	一基	同	同	同
周防國瀦田廢寺出土品	一揃	同	同	同
土器、和同開珎、無文銅錢、無文土錢、刀子殘片其他一切	一口	同	同	同
隆ノ鎔出銘アリ	一口	同	同	同

建造物之部

所有者

所在地

石造十一重塔	一基	大阪府京都市北區東野田町二丁目	京都府綴喜郡大住村十九番地	安倉清太郎邸内
--------	----	-----------------	---------------	---------

文部省告示第三百三十一號 昭和十三年十月十日

繪畫之部

品目

繪畫之部

所有者

紙本墨畫遠寺晚鐘圖單施筆

典籍之部

宋拓輿地圖

刀劍之部

太刀 銘 蟬枝八幡宮藤原國廣造  
附 慶長四年八月被岸  
絲卷太刀拵傳後水尾天皇御寄通

刀 銘 小野繁慶  
奉納接州住吉大明神御寶前

工藝品及考古學資料之部

銅製山水圖鏡

銅製變形四神四獸鏡小破アリ

大阪府豐中市  
市柴原待兼  
山出土品

木貽黑漆金銅釧彩畫壺

夾紵漆金銅飾盒

金銅釧四葉座飾漆盒

金銅釧四葉座飾漆小匣

瓦製墨樣彩畫壺

金銅透雙獸形隅金具

銅製金銀錯文禽獸形飾金具及同鏡

金銅禽獸形飾金具及金銅花形飾金具

銅製金銀錯文怪獸飾軸金具

銅製神人畫象鏡

銅製野口  
奉寄進今八幡大菩薩大檀那多々良義隆天文三年卯月  
上旬大工葺屋釜屋大江宣秀ノ鑑銘アリ  
銅製巴文雙雀鏡  
一宮玉祖社奉施人僧命俊正平十一年ノ鑑銘アリ

建造物之部

石造寶篋印塔

石造寶篋印塔  
永和二年丙辰十一月ノ刻銘アリ

石造寶篋印塔  
元亨癸亥云々ノ刻銘アリ

石造寶塔  
正和五年十月ノ刻銘アリ

石造燈籠  
永享五ノ二月ノ刻銘アリ

石造燈籠  
弘長ノ刻銘アリ

文部省告示第三百四十三號 昭和十三年十月二十二日

繪畫之部

品目

絹本着色釋迦如來像

紙本墨畫四天王像  
建長六年二月二十七日書寫了執筆良快云々ノ奥書アリ

絹本着色繪因果經卷第四慶忍及聖衆九衆

絹本着色一過上人繪傳斷簡

絹本着色紫式部圖尾形光琳筆

絹本着色文殊菩薩八童子圖

紙本着色北野天神緣起繪卷

絹本着色佛涅槃圖

絹本着色虛空藏明星毘沙門像

紙本着色一過上人繪傳卷內四卷著色ナシ

所有者

所在地

山口市上宇野令町

今八幡宮

一面 同佐渡郡石田村

玉祖神社

一基 埼玉縣比企郡南吉見村

同大同村

光福寺

一基 滋賀縣蒲生郡苗村

八幡神社

一基 京都府綴喜郡三山木村

白山神社

一基 奈良縣吉野郡小川村

丹生川上神社

一基 埼玉縣比企郡南吉見村

同大同村

光福寺

一基 滋賀縣蒲生郡苗村

八幡神社

一基 京都府綴喜郡三山木村

白山神社

一基 奈良縣吉野郡小川村

丹生川上神社

一基 埼玉縣比企郡南吉見村

同大同村

光福寺

一基 滋賀縣蒲生郡苗村

八幡神社

一基 京都府綴喜郡三山木村

白山神社

一基 奈良縣吉野郡小川村

丹生川上神社

一基 埼玉縣比企郡南吉見村

同大同村

光福寺

一基 滋賀縣蒲生郡苗村

八幡神社

一基 京都府綴喜郡三山木村

白山神社

一基 奈良縣吉野郡小川村

丹生川上神社

絹本着色春日宮曼茶羅圖傳龜山天皇宸翰御授アリ

持紙三正安二年十月被國之繪師觀舞法橋云々アリ

絹本着色佛眼曼茶羅圖

絹本着色普賢延命像

絹本着色尊勝曼茶羅圖

絹本着色美人圖中懸舉、左右源氏筆、左春海右千藤ノ賛アリ

絹本着色山水圖傳周文筆

絹本着色華嚴五十五所繪

絹本着色五大尊像

紙本墨畫五大力菩薩像

各幅表背元和八年ノ修理記ニ建久八年四月日豐前五郎爲廣筆トアリ

彫刻之部

木造十二神將立像

木造四臂十一面觀音立像(厨子入)

木造能面般若

木造能面白色尉傳日光作

木造伎樂面

木造(大威德明王像

(軍荼利明王像

文部省告示第三百六十三號

昭和十三年十二月二十一日

繪畫之部

紙本着色十二因緣繪卷

紙本着色天狗草紙

紙本着色地藏緣起

紙本着色駿牛繪詞斷簡

紙本着色慈眼大師緣起(住吉屋筆、延寶八年ノ年記アリ)

紙本着色一遍上人繪傳斷簡

絹本着色星曼茶羅圖

彫刻之部

木造藥師如來坐像

一幅 同京都市下京區鹽竈町 湯淺七左衛門

一幅 同九條町 敦王護國寺

一幅 同 觀智院

一幅 同 同上

三幅 大阪府大阪市東區今橋二丁目 男爵鴻池善右衛門

一幅 兵庫縣武庫郡精道村 男爵佐友吉左衛門

十幅 奈良縣奈良市錦司町 東大寺

五幅 和歌山縣那賀郡粉河町 粉河寺

五幅 同伊都郡高野町 普賢院

一幅 東京府東京市麹町區平河町二丁目 男爵益田太郎

一幅 同麻布區宮村町 侯爵井上三郎

一面 同小石川區高田老松町 侯爵細川護立

一面 同 同上

四面 神奈川縣橫濱市中區本牧町 原富太郎

二幅 京都府京都市右京區嵯峨大澤町 大覺寺

工藝品及考古學資料之部

手錫杖寶德庚午ノ刻銘銘柄ニ康正元年正月ノ刻銘アリ

銅製鏡及甌

傳朝鮮平安南道大同郡樂浪遺蹟出土

鍍金裝笈(本尊五佛、附錫杖及數珠)

建造物之部

名 稱

石幢

嘉元三年十一月ノ刻銘アリ

一基

同山縣上房郡上有漢村

一基

同山縣上房郡上有漢村

一基

同山縣上房郡上有漢村

一基

同山縣上房郡上有漢村

一基

同山縣上房郡上有漢村

一基

同山縣上房郡上有漢村

一基

同山縣上房郡上有漢村

一基

同山縣上房郡上有漢村

一基

同山縣上房郡上有漢村

一基

同山縣上房郡上有漢村

一基

同山縣上房郡上有漢村

一基

同山縣上房郡上有漢村

一基

同山縣上房郡上有漢村

一基

同山縣上房郡上有漢村

一枝 栃木縣上都賀郡日光町 輪王寺

一組 東京府東京市本郷區湯島三組町 小島安之

一具 新潟縣佐渡郡赤泊村 勝浦孟

所有者

所在地

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

同山縣上房郡上有漢村

文部省告示第二百五十七號

昭和十三年七月四日

重要美術品等認定物件中左記ハ國寶保存法第一條ニ依リ本日國寶ニ指定セラレタルヲ以テ其ノ認定物件タル資格ハ消滅セリ

認定告示

同上品目

紙本墨畫蓮花水禽圖野村宗達筆

紙本墨畫金桃和歌集

紙本墨畫芭蕉夜雨圖(寛文等十六、十八、二十二年トアリ)

紙本墨畫芭蕉夜雨圖(寛文等十六、十八、二十二年トアリ)

紙本墨畫芭蕉夜雨圖(寛文等十六、十八、二十二年トアリ)

紙本墨畫芭蕉夜雨圖(寛文等十六、十八、二十二年トアリ)

紙本墨畫芭蕉夜雨圖(寛文等十六、十八、二十二年トアリ)

紙本墨畫芭蕉夜雨圖(寛文等十六、十八、二十二年トアリ)

紙本墨畫芭蕉夜雨圖(寛文等十六、十八、二十二年トアリ)

紙本墨畫芭蕉夜雨圖(寛文等十六、十八、二十二年トアリ)

紙本墨畫芭蕉夜雨圖(寛文等十六、十八、二十二年トアリ)

紙本墨畫芭蕉夜雨圖(寛文等十六、十八、二十二年トアリ)

紙本墨畫芭蕉夜雨圖(寛文等十六、十八、二十二年トアリ)

紙本墨畫芭蕉夜雨圖(寛文等十六、十八、二十二年トアリ)

紙本墨畫芭蕉夜雨圖(寛文等十六、十八、二十二年トアリ)

紙本墨畫芭蕉夜雨圖(寛文等十六、十八、二十二年トアリ)

紙本墨畫芭蕉夜雨圖(寛文等十六、十八、二十二年トアリ)

紙本墨畫芭蕉夜雨圖(寛文等十六、十八、二十二年トアリ)

紙本墨畫芭蕉夜雨圖(寛文等十六、十八、二十二年トアリ)

紙本墨畫芭蕉夜雨圖(寛文等十六、十八、二十二年トアリ)

紙本墨畫芭蕉夜雨圖(寛文等十六、十八、二十二年トアリ)

一幅 東京府東京市麻布區霞町 酒井正吉

一幅 同赤坂區新町五丁目 内田良平

一口 同品川區大井町 伯爵伊達興宗

一口 同澁谷區千駄ヶ谷町一丁目 公卿德川家達

一帖 同大森區田園調布三丁目 松岡忠良

一幅 同中野區千光前町 大塚庄近

一口 同麹町區永田町 伯爵伊東巳代治

一口 同平河町六丁目二 赤星鐵馬

一口 同三松方町六丁目二 根津嘉一郎

一口 同赤坂區青山南町六丁目 黒川福三郎

一口 同大塚區大塚町天王寺 瀬戸保太郎

一口 同兵庫縣武庫郡精道村 中野忠太郎

一口 同新潟縣中蒲原郡金津村 篠原三千郎

三幅 東京府東京市芝區高輪南町 篠原三千郎

三幅 同大森區田園調布四丁目 篠原三千郎

三幅 同大森區田園調布四丁目 篠原三千郎

三幅 同大森區田園調布四丁目 篠原三千郎

三幅 同大森區田園調布四丁目 篠原三千郎

三幅 同大森區田園調布四丁目 篠原三千郎

三幅 同大森區田園調布四丁目 篠原三千郎

三幅 同大森區田園調布四丁目 篠原三千郎

三幅 同大森區田園調布四丁目 篠原三千郎

三幅 同大森區田園調布四丁目 篠原三千郎

三幅 同大森區田園調布四丁目 篠原三千郎

三幅 同大森區田園調布四丁目 篠原三千郎

昭和九年文部省告示 第二百三十二號	紙本墨畫湛碧齋圖傳周文筆 愚極ノ賛アリ	一幅	村山長舉
同	紙本著色病草紙斷簡	一幅	同
同	紙本墨畫瀟湘八景圖傳周文筆	一雙	同上
同	短刀 無銘 (名物太渡鐵貞宗)	一口	伯爵伊達興宗
同	太刀 銘 包永	一口	高島辰之助
昭和九年文部省告示 第三百五號	紙本著色狩野探幽傳桃田柳榮筆	一幅	狩野探道
同	紙本著色西行法 野村宗達筆 永第七季秋上 年記アリ	四卷	侯爵毛利元昭
同	師行狀繪詞	一卷	安藤達二
同	彩箋墨書正嘉三年北山行幸歌 御會序鼓歌 (金澤文庫本)	一帖	同
同	紙本墨書嚴島御幸記鼓高倉院 昇霞記 (金澤文庫本)	一帖	同
同	筆刀無銘傳當麻	一口	侯爵前田利爲
昭和十年文部省告示 第二百一號	紙本墨書近代秀歌藤原定家筆 冷泉爲秀今川貞世ノ奥書アリ	一帖	有賀長文
昭和十年文部省告示 第二百六十九號	陶製色繪雄香爐江清作	一箇	山川庄太郎
同	紙本墨畫八仙圖雪村筆	三幅	原善一郎
同	紙本墨畫蓮花飛禽圖野村宗達筆	一幅	同
同	紙本著色花籠圖尾形乾山筆	一幅	西郷春子
昭和十年文部省告示 第四百二十一號	紙本著色山王靈驗繪卷	一卷	侯爵井上三郎
同	太刀 銘 長光	一口	男爵德川義恕
同	太刀 銘 來國光	一口	小林種次
昭和十一年文部省告示 第三百二十一號	紙本金地著色薄鴉圖六曲屏	一雙	伯爵伊達興宗
同	紙本墨書古今集藤原定家筆 永仁二年京極爲兼就ノ冷泉爲相ノ 奥書アリ	一帖	同上
同	手鑑月臺七十九葉 中二法輪寺切(戀、同(金谷、針切 ものゝみ、香紙切(けねは切 丸、鳥丸切(あつさめ、民部切 は、むはしき、尼崎切(らむいも を、東大寺切(みもと、山名 切(懷徳、中院切(くるとき 同(おやくなりて、廣澤切 (除夜言志、物部常石解(寶龜五年 八月九日、下鎗經切(辭時大工ア リ	一帖	土橋嘉兵衛
同	紙本墨書無學祖元墨蹟	一幅	大坂府大阪市東區 大見三丁目

昭和十三年度史蹟指定、改稱、解除



昭和十三年五月三十日

地 域

原城址

同字北三ノ丸

武田氏館陞

同字中鳥  
同字茶白山

山梨縣西山梨郡相川村  
大字古府中字樑翁

同字駒崎  
同大江名  
同字三崎

自一五九番至一六一番、一六三番  
字三ノ丸、二ノ丸、桐ノ木谷、東二  
ノ丸、西二ノ丸、平、鳩山  
丸、打越、蓮池、本丸、明神及  
天草丸全部

同字逍軒屋敷

[illegible]

同字三崎

一番第一、二番第一、自三番至八番九番ノ一、九番ノ三、一〇番、一一番ノ二、自一二番至二三番

同字高塀

八四二自三六二番二二自  
〇八一七二三六七番一〇番  
番番番番番番番番番番

二五番一二五番至二二  
番一至二番至二二番  
自二二七七四九番至二  
二二七七四九番至二二

同字先釜蓋

六第一、一二九番イ、一二九番ロ  
一三〇番第一、一三〇番第二  
三一二番、三一三番第一、三一三番第二、自三一四番至三一五番

同字簽蓋

自三四二番至三四六番、三四七番  
イ、三四七番ロ、自三四八番至三  
五六番、三五七番イ一、三五七番

同字三角

[illegible][illegible]

名  
稱  
地

地名

明治天皇御小休所舊神戶稅關監視部址及建物

兵庫縣神戸市神戸區海岸通二丁目

一四番內實測三十二坪

明治天皇  
御乘艦地  
丸龜御上陸竝

香川縣丸龜市西平山町

二七〇番  
右地先護敷岸敷及荷揚場敷

文部省告示第二百八十號  
昭和十三年八月二日

昭和十三年八月二日

史蹟名勝天然紀念物保存法第一條ニ依リ昭和八年文部省告示第三百十三號ヲ以テ指定シタル史蹟舊芝離宮趾ノ一部左記地域ノ指定ヲ解除ス

舊芝離宮址

東京府東京市芝區濱松町

番ノ六内實測八十七坪七合一勺

文部省告示第二百九十二號  
昭和十三年八月八日

昭和十三年八月八日

第一類 史蹟

同足柄村大字谷津字小松原

同字油田

二四六番ノ二、自二四七番至二五

一九三三

敷  
右地域内ニ介在スル道路敷及水路  
四番  
二〇一番ノ二、自二〇二番至二〇  
九九番、二〇〇番、二〇一番ノ一  
一九五番ノ一、一九五番ノ二





第二七九號	信川明倫堂	一棟	黃海道信川郡信川邑信川文廟境內	信川郡學校財產
第二八〇號	慈惠寺大雄殿	一棟	黃海道信川郡南部慈惠寺境內	慈惠寺
第二八一號	弘濟町五層石塔	一基	京畿道京城府弘濟町二九六番地	國
第二八二號	古阜隱仙里三層石塔	一基	全羅北道井邑郡永元面隱仙里四三番地	國
第二八三號	慶州千軍里三層石塔	二基	慶尙北道慶州府東面千軍里五四九番地、五五〇番地	國
第二八四號	鳳巖寺三層石塔	一基	慶尙北道開慶郡加恩面鳳巖寺境內	鳳巖寺
第二八五號	金藏庵址獅子三層石塔	一基	江原道淮陽郡長湍面長湍里八番地	長安寺
第二八六號	金藏庵址石燈	一基	江原道淮陽郡長湍面長湍里八番地	長安寺
第二八七號	雙峯寺激鑿禪師塔	一基	全羅南道和順郡梨陽面雙峯寺境內	雙峯寺
第二八八號	雙峯寺激鑿禪師塔	一基	全羅南道和順郡梨陽面雙峯寺境內	雙峯寺
第二八九號	鳳巖寺靜真大師圓悟塔	一基	慶尙北道開慶郡加恩面鳳巖寺境內	鳳巖寺
第二九〇號	鳳巖寺靜真大師圓悟塔	一基	慶尙北道開慶郡加恩面鳳巖寺境內	鳳巖寺
第二九一號	望海寺址石造浮屠	二基	慶尙南道蔚山郡靑良面栗里山一六番地	國
第二九二號	長谷寺鐵造藥師如來坐像附石造台座	一軀	忠清南道靑陽郡大峙面長谷里長谷寺	長谷寺
第二九三號	長谷寺鐵造毗盧舍那佛坐像附石造台座	一軀	忠清南道靑陽郡大峙面長谷里長谷寺	長谷寺
第二九四號	松廣寺經牌	四十三箇	全羅南道順天郡松光面新坪里松廣寺	松廣寺
第二九五號	松廣寺金銅搖鈴	一箇	全羅南道順天郡松光面新坪里松廣寺	松廣寺
第二九六號	南普賢寺址木造小塔	四基	江原道淮陽郡長湍面長湍里長安寺	長安寺

指定番號	名稱	所在地	所在地域	土地所有者
第七一號	慶州金尺里古墳群	慶尙北道慶州郡西面金尺里	金尺里一九二番ノ一田 二五七坪	慶州郡西面金尺里 韓錫遠

金尺里一九三番ノ一田 八三六坪	慶州郡西面金尺里五五六	李鍾文
金尺里一九四番ノ一田 九三六坪	慶州郡內南面月山里二〇六	韓錫重
金尺里一九七番ノ三田 七七六坪	慶州郡西面金尺里	李鍾昊

金尺里一九八番ノ二田 九四八坪	慶州郡西面金尺里	李孝生
金尺里一九九番ノ一田 八六坪	慶州郡西面金尺里	李孝生
金尺里二〇〇番ノ一田 二二三坪	慶州郡西面金尺里	李孝謙
金尺里二〇一番ノ一田 五七坪	慶州郡西面金尺里	李龍植
金尺里二〇二番ノ一田 一〇八四坪	慶州郡西面金尺里	李孝奎
金尺里二〇四番ノ一田 九一坪	慶州郡西面金尺里八〇六	都慶仁
金尺里二〇五番ノ一田 六七一坪	慶州郡西面金尺里	韓鎮東
金尺里二〇六番ノ一田 六八坪	慶州郡西面金尺里三四一	慶州郡西面金尺里
金尺里二〇七番ノ一田 四〇坪	慶州郡西面金尺里	韓鎮東
金尺里二〇八番ノ一田 七〇坪	慶州郡西面金尺里四七八	李鍾祐
金尺里二〇九番ノ一田 一八坪	慶州郡西面金尺里三六〇	李慶道
金尺里二一〇番ノ一田 三二坪	慶州郡西面金尺里三九一	李鍾植
金尺里二一一番ノ一田 二四坪	慶州郡西面金尺里	李孝奎
金尺里二一二番ノ一田 七二坪	慶州郡西面金尺里八〇六	都慶仁
金尺里二一三番ノ一田 二六坪	慶州郡西面金尺里	李慶鳳
金尺里二一四番ノ一田 七六坪	慶州郡西面金尺里二〇六	安洛鐘
金尺里二一五番ノ一田 八三三坪	慶州郡西面金尺里	李顯壽
金尺里二一六番ノ一田 五九一坪	慶州郡西面金尺里	李魯原
金尺里二一七番ノ一田 六二坪	慶州郡西面金尺里	林野一
金尺里二一八番ノ一田 七八坪	慶州郡西面金尺里	田一〇
金尺里二一九番ノ一田 〇九坪	慶州郡西面金尺里	林野七
金尺里二二〇番ノ一田 八三坪	慶州郡西面金尺里	林野三

月巖里支石群

[illegible]

第七六號 明活山城

慶尙北道慶州郡  
內東面千軍里

毛火里山八番ノ三 林野 慶州郡內東面黃祖里  
一町三段七畝 李 文 赫  
毛火里山一一番 林野 八 釜山府佐川町五八一  
町三段 宋 台 觀  
毛火里山二一番ノ一 林野 慶州郡內東面黃祖里  
六町二畝 李 文 赫  
毛火里山二一番ノ二 林野 國  
毛火里山二一番ノ三 林野 國  
四段八畝 國  
千軍里山三三四番 林野 國  
一九町三三〇步 國  
千軍里山三三五番ノ一 林 慶州郡內東面普門里三四〇  
野 一町九六〇〇步 李 錫 重  
千軍里山三三五番ノ二 林 慶州郡慶州邑西部里一五二  
野 一町六四〇〇步 藤 井 助 次  
千軍里山三三六番 普門里 慶州郡慶州邑城東里二八六  
町 三町一二〇〇步 李 在 先  
千軍里山三三七番 林野 慶州郡慶州邑城東里三〇八  
一町九六〇〇步 孫 亨 祖  
普門里山七番 林野 八町 慶州郡慶州邑城東里三三一  
九二〇〇步 喪 磬 燦  
普門里山八番 林野 一町 慶州郡內東面普門里  
六八〇〇步 盧 景 先  
普門里山九番 林野 七町 慶州郡內東面普門里三〇一  
八四〇〇步 李 道 久  
普門里山一〇番 林野 七 內東面  
二〇〇步 慶州郡內東面普門里三〇一  
普門里山一一番 林野 八 朴 南 伊  
四〇〇步 國  
普門里山二一番 林野 三 國  
三町二〇〇〇步 慶州邑城東里三〇八  
町五六〇〇步 孫 亨 祖  
外東面毛火里山一二番 慶州邑路東里  
林野二畝 張 仁 讚  
外東面毛火里山一二三番 國  
外東面毛火里山一二四番ノ  
一 林野五町七段九畝 國  
外東面毛火里山一二四番ノ  
三 林野二畝四畝 國  
慶尙南道蔚山郡  
農所面泉谷里 農所面泉谷里山二番ノ二  
林野一町五段一畝 國

第七八號

信川土城里  
土城

慶尙南道蔚山郡  
凡西面斗山里

農所面泉谷里山九番ノ二 慶州郡內東面普門里三四〇  
林野二段五畝 李 錫 重  
農所面泉谷里山二一番ノ二 釜山府佐川町五八一  
林野五畝 宋 台 觀  
農所面泉谷里山七一一番ノ二 慶州郡內東面黃祖里  
林野九町四段五畝 李 文 赫  
農所面達川里山一七一一番ノ二 慶州郡內東面黃祖里  
二林野二町三畝 國  
農所面達川里山二〇五番ノ  
二 林野一町二畝 國  
凡西面斗山里山一一番ノ二 慶州郡內東面普門里三四〇  
林野五段五畝 李 錫 重  
凡西面斗山里山二一番 林 慶州郡慶州邑西部里一五二  
一段三畝 藤 井 助 次  
凡西面斗山里山三番 林野 慶州郡慶州邑城東里二八六  
一段三畝 李 在 先  
凡西面斗山里山四番 林野 慶州郡慶州邑城東里三〇八  
八畝 孫 亨 祖  
凡西面斗山里山八番ノ二 慶州郡慶州邑城東里三三一  
林野一町二段五畝 喪 磬 燦  
凡西面斗山里山四八一一番ノ 慶州郡內東面普門里  
二 林野二段九畝 盧 景 先  
北部面土城里六九番 慶州郡內東面普門里三〇一  
地 四八坪 李 道 久  
北部面土城里七〇番 慶州郡內東面普門里三〇一  
一〇六二坪 孫 亨 祖  
北部面土城里七一一番 慶州郡內東面普門里三〇一  
地 四六三坪 喪 磬 燦  
北部面土城里七二番 慶州郡內東面普門里三〇一  
一六八七坪 盧 景 先  
北部面土城里七七番ノ三 慶州郡內東面普門里三〇一  
田 一九〇〇坪 李 道 久  
北部面土城里七八番ノ三 慶州郡內東面普門里三〇一  
田 二一五二坪 朴 南 伊  
北部面土城里七九番ノ四 慶州郡內東面普門里三〇一  
田 八四八坪 國  
北部面土城里八〇番 慶州郡內東面普門里三〇一  
三、一六二坪 孫 亨 祖  
北部面土城里八一一番 慶州郡內東面普門里三〇一  
一、一〇〇坪 張 仁 讚  
北部面土城里八二番 慶州郡內東面普門里三〇一  
二、五一六坪 國  
北部面土城里八三番 慶州郡內東面普門里三〇一  
二、四四坪 國  
北部面土城里八四番 慶州郡內東面普門里三〇一  
三、七八坪 國

第七七號 關門城

慶尙北道慶州郡  
外東面毛火里

慶尙北道蔚山郡  
農所面泉谷里 農所面泉谷里山二番ノ二  
林野一町五段一畝 國

黃海道信川郡北部面青山里

北部面新郷里三〇六番ノ一 田一五・六坪	信川郡北部面土城里	祚
北部面新郷里三〇七番ノ一 田一五・二坪	安岳郡安岳面碑石里	林
北部面新郷里三〇八番ノ一 墳地七・〇五坪	信川郡北部面新郷里	亨
	金柱	

北部面青山里五二七番 一、四〇八坪ノ内六八坪	田	信川郡北部面新郷里
北部面青山里五二八番 六九九坪ノ内四〇坪	田	李溫全、李明祚
	平壤府館後里	
	襄	
	順	

北部面青山里五二九番田  
三・七四三坪ノ内一・一八四坪  
目一  
東京市麴町區内山下町一丁  
東洋拓殖株式會社  
信川郡北部面土城里

一、五五六坪	白正洛	信川郡信川面校塔里	北部面青山里五三一番田	一、一一九坪
			田	
			金安成	

北部面青山里五三三番ノ一 田三、一二〇坪	信川郡山内川内里	範
北部面青山里五三三番 田二五六七坪	信川郡北部面青山里	興
	尹益	
	吳道	

平壤府平川里八九番田ノ 西方ニ隣接スル部分ノ堤防	平壤府平川里九一番ノ二 田ノ西方ニ隣接スル部分ノ堤防
國	國

平壤府平川里一三番ノ七	國
堤防一二九三坪	
平壤府平川里一一三番ノ七、 一一三番ノ八堤防ノ南方ニ 隣ル江岸堤防ノ内九五二坪	國

平安南道平壤府  
堂上里

平壤府西城里五番	堡	三	平壤府上需里三三二
八坪			趙明
平壤府西城里六番	堡	二	平壤府西城里五
九坪			李宗
平壤府西城里二三番	堡	一	平壤府
四〇坪			

仁國

平壤府西城里一二〇番田ノ  
西方及南方ニ隣接スル部分  
ノ堤防

平壤府西城里一二四番ノ三  
坪

平壤府壽町九七  
金子

寛

平壤府堂上里三番 一、二、三〇坪	雜種地	平壤府
平壤府堂上里四番 六、二六七坪	雜種地	平壤府

平壤府新陽里二番 堡四 平壤府新陽里  
平壤府新陽里二番 堡四 平壤府新陽里

平壤府新陽里二番ノ一	堡
五五坪平	
平壤府新陽里三番	堡二
七坪	
	國
	平壤府新陽里
	金在實

平壤府新陽里二六番ノ二一  
堡二二六四七九坪ノ内五  
一一〇坪

法蘭西國耶蘇教北長  
老派朝鮮宣教會維持團

京城府連進町一六六  
財團米國耶蘇教北長  
法人朝鮮宣教會維持  
團





新城里七四番 田 七九六	新城里	李 權	新城里	新城里五二四番 林野 二、	新城里	李 廷
新城里七五番 田 五七一	新城里	崔 末	新城里二六七	新城里五二五番 田 二七	新城里	孫 守
新城里七六番 田 七五坪	光陽郡光陽面邑內里	金 基	順	新城里五九八番 田 七二	新城里	鄭 漢
道(七五番田ト七六番田ニ)接スル所				新城里五九九番 田 四九	新城里二七八	朴 東
新城里七七番 畝 八八六	新城里	李 權	淑	新城里六〇〇番 田 一三	麗水郡麗水邑西町	株式會社 高瀬農場
新城里七八番 田 一、五九	新城里	金 小	卜	新城里六〇一番 田 二八	麗水郡麗水邑西町	株式會社 高瀬農場
新城里八一番 田 三五五	新城里	鄭 奉	元	新城里六〇三番 田 三二	新城里	金 道
新城里八二番ノ二 田 八	新城里	孫 斗	宣	新城里六〇五番 田 五七	寶城郡筏橋面筏橋里五九三	金 谷
新城里八三番 田 三二九	麗水郡麗水邑西町	株式會社 高瀬農場		新城里六〇八番 田 九五	新城里	徐 斗
新城里八六番 田 一一坪	新城里	李 星	淑	新城里六〇九番 田 七一	新城里一七四	李 粉
新城里一〇〇番 田 一三	新城里二八九	金 采	其	新城里六一三番 田 一、	東京市麹町區有樂町一丁目	東洋殖産株式會社
新城里一〇二番 田 三〇	新城里二二六	姜 恩	實	新城里六二二番 田 二二	新城里	郭 鍾
新城里一〇三番 田 五六	新城里	徐 光	巖	新城里六二五番 田 二二	新城里一九八	金 銀
新城里一〇五番 田 三六	新城里	李 宗	太	新城里六二六番 田 二二	寶城郡筏橋面筏橋里五九三	金 谷
新城里一〇九番 田 八二	順天邑大手町	金 柱	洙	新城里六二七番 田 四一	新城里一八七	金 東
新城里一一〇番 田 六三	新城里	李 元	祚	新城里六二八番 田 二四	麗水郡麗水邑西町	株式會社 高瀬農場
新城里一一一番 田 一九	新城里	李 權	淑	新城里六三〇番ノ四 林野	新城里一八七	金 東
新城里一五〇番 田 二〇	光陽郡鳳岡面紙谷里	尹 周	鳳	新城里六四八番ノ一 田	順天郡海龍面船月里三七	許 贊
新城里一五九番ノ一 林野	新城里	金 慶	元	新城里七一〇番 林野 一一	國	國
新城里一五九番ノ二 林野	新城里	李 基	煥	新城里七一〇番 林野 二町	國	國
新城里一五九番ノ三 田	新城里	金 慶	元	新城里七一〇番 林野 二町	新城里	廉 應
新城里一五九番ノ三 田	新城里	金 慶	元	新城里七一〇番 林野 二町	新城里	廉 應

第八一號  
泗川船津里  
慶尙南道泗川郡  
龍見面船津里

新城里山八番	林野 一町	國
七六〇步		
新城里山九番	林野 一町	順天郡龍見面船津里
一〇〇〇步		
新城里山一〇番	三 林野	順天郡龍見面船津里
六七〇〇步		
船津里四〇二番	墳墓地	泗川郡龍見面船津里
一〇〇〇坪		
船津里七〇八番	田 四〇	泗川郡龍見面船津里
九坪		
船津里七一一番	田 四五	泗川郡龍見面船津里
二坪		
船津里七二三番	田 一〇	泗川郡龍見面船津里
五坪		
船津里七一四番	林野 二	泗川郡龍見面船津里
八六八坪		
船津里七二五番	墳墓地	泗川郡龍見面船津里
三二八坪		
船津里七三一番	田 二五	泗川郡龍見面船津里
五坪		
船津里七三五番	田 一九	泗川郡龍見面船津里
〇坪		
船津里七三六番	田 三九	泗川郡龍見面船津里
一坪		
船津里七三九番	田 三八	泗川郡龍見面船津里
六坪		
船津里七四〇番	田 四六	泗川郡龍見面船津里
五坪		
船津里七四一番	墳墓地	泗川郡龍見面船津里
五六坪		
船津里七四二番	田 七九	泗川郡龍見面船津里
坪		
船津里七四九番	墳墓地	泗川郡龍見面船津里
三八三坪		
船津里七五四番	田 二四	泗川郡龍見面船津里
九坪		
船津里七六七番	一 林野	泗川郡龍見面船津里
二三四二坪		
船津里七六七番	二 林野	泗川郡龍見面船津里
一三坪		
船津里七七〇番	林野 八	泗川郡龍見面船津里
六四坪		

船津里七七一番	田 一九	泗川郡龍見面船津里
四坪		
船津里七七二番	田 八三	泗川郡龍見面船津里
坪		
船津里七七三番	田 五二	泗川郡龍見面船津里
二坪		
船津里七七四番	一 田	泗川郡龍見面船津里
一三〇坪		
船津里七七四番	二 田	泗川郡龍見面船津里
一九五坪		
船津里七七五番	田 二六	泗川郡龍見面船津里
一坪		
船津里七七六番	田 一四	泗川郡龍見面船津里
九坪		
船津里七七七番	田 二七	泗川郡龍見面船津里
坪		
船津里七七八番	田 一四	泗川郡龍見面船津里
五坪		
船津里七七九番	墳墓地	泗川郡龍見面船津里
四五坪		
船津里七八〇番	二 田	泗川郡龍見面船津里
九九坪		
船津里七八一番	二 田	泗川郡龍見面船津里
七坪		
船津里七八二番	林野 二	泗川郡龍見面船津里
〇八坪		
船津里七八三番	一 墳墓	泗川郡龍見面船津里
地 四三四坪		
船津里七八五番	三 田	泗川郡龍見面船津里
三三四坪		
船津里八〇六番	田 四三	泗川郡龍見面船津里
〇坪		
船津里八五〇番	田 五五	泗川郡龍見面船津里
六坪		
船津里八五一番	田 七一	泗川郡龍見面船津里
三坪		
船津里八五二番	田 三九	泗川郡龍見面船津里
四坪		
船津里八五三番	田 四八	泗川郡龍見面船津里
〇坪		
船津里八五四番	田 四九	泗川郡龍見面船津里
四坪		
船津里八六八番	田 七六	泗川郡龍見面船津里
一坪		

船津里八七一番 八坪	田五四	酒川郡中南面蓮漕河	尹正吉
船津里八七二番 一〇五坪	墳墓地	酒川郡龍見面船津里	李成忱
船津里八九九番 八坪	田二五	酒川郡龍見面船津里一〇二	申斗仁
船津里九〇〇番 三坪	田一六	酒川郡龍見面船津里六九六	藤井仁兵衛
船津里九〇二番 〇坪	田五八	晉州郡晉州邑水晶町三九六	金牧丹
船津里九一三番 坪	田八〇	酒川郡龍見面船津里	崔聖洛
船津里九一七番 一五七坪	墳墓地	酒川郡龍見面船津里	金南世
船津里一〇二番 三九坪	田三	酒川郡龍見面船津里	李平雨
船津里一〇四番 七坪	田六	酒川郡龍見面船津里一〇一	申桂仁
船津里一〇六八番 八八坪	田四	忠清南道禮山郡禮山面禮山	藤井薰
船津里一〇七二番 三五六坪	林野	國	
船津里一〇七五番 一〇五坪	林野	國	
船津里一〇七六番 四一四坪	林野	國	
船津里一〇七七番 地六七坪	社寺	國	
船津里一〇七八番 四二坪	一田	酒川郡龍見面通津里	金聖玉
船津里一〇七九番 八一坪	一田	忠清南道禮山郡禮山面禮山	藤井薰
船津里一〇八〇番 〇五三坪	田一	酒川郡龍見面船津里	朴仲海
船津里一〇八一番 五一坪	田二	酒川郡南面竹川里	崔尙希
船津里一〇八二番 地二〇三坪	墳墓地	酒川郡南面竹川里	崔尙希
船津里一〇八三番 一八六坪	林野	國	
船津里一〇八四番 六九六坪	林野	國	
船津里一〇八五番 四五二坪	林野	國	

第八二號 金海竹島城

慶尙南道金海郡  
駕洛面竹林里

船津里一〇八六番 三坪	田六	酒川郡龍見面船津里	申光道
船津里一〇八八番 野一、九六二坪	一林	酒川郡龍見面船津里	朴南政
船津里一〇八八番 野二三坪	二林	國	朴南鎮
竹林里七四二番 八九坪	林野三	廣島縣尾道市土堂町	天野春雄
竹林里七五六番 坪	田九六	竹林里	宋三洛
竹林里七五七番 一九五坪	墳墓地	竹林里	金丕夢
竹林里七五八番 二二一坪	墳墓地	廣島縣尾道市土堂町	天野春吉
竹林里七五九番 坪	田四九	廣島縣尾道市土堂町	天野春雄
竹林里七六〇番 七〇坪	墳墓地	廣島縣尾道市土堂町	天野春吉
竹林里七六一番 七坪	田三〇	廣島縣尾道市土堂町	天野春雄
竹林里七六二番 五坪	田一七	廣島縣尾道市土堂町	天野春雄
竹林里七六九番 一〇五坪	墳墓地	竹林里	金希喆
竹林里七七〇番 二九七坪	墳墓地	竹林里	金元執
竹林里七八七番 五、一八坪	墳墓地	竹林里	
竹林里七八九番 八坪	田一八	釜山府大廳町二丁目	磯谷喜三郎
竹林里七九〇番 坪	田四六	風林里	文和周
竹林里七九七番 一坪	田三九	風林里	文命周
竹林里七八八番 四坪	田一七	風林里	文永錫
竹林里八〇〇番 二坪	墳墓地九	國	
竹林里八〇一番 坪	田四〇	竹洞里	金益千
竹林里八〇二番 坪	田九〇	風林里	文由周

慶尙南道金海郡  
駕洛面鳳林里

竹林里八三九番 ○坪	竹林里八四〇番 一坪	竹林里八四一番 一四七坪	竹林里八四二番 八坪	竹林里八四三番 一四七坪	竹林里八四四番 坪	竹林里八四五番 二五坪	竹林里八四六番 一坪	竹林里八四七番 九坪	竹林里八四八番 八八坪	竹林里八五〇番 三坪	竹林里八五四番 一五七坪	竹林里八五五番 二〇四坪	竹林里三七〇番 三〇五坪	竹林里三七一番ノ一 地 二五一坪	竹林里三七二番 ○坪	竹林里三七四番 八〇坪	竹林里三七五番 一四八坪	竹林里三七六番 七五坪	竹林里三七七番 八一二坪	竹林里三九三番 七坪
田 一八	田 一四	墳墓地	田 四二	墳墓地	田 八四	墳墓地	田 一四	田 六一	墳墓地	田 三六	墳墓地	墳墓地	墳墓地	墳墓地	田 三九	墳墓地	墳墓地	墳墓地	墳墓地	田 一四
鳳林里	竹林里	竹林里	金海郡智落學校組合	竹洞里	竹洞里	竹洞里	竹林里	山口縣熊毛郡麗里府村大字 磯谷喜三郎	鳳林里	竹林里	竹林里	竹林里	鳳林里	鳳林里	鳳林里	鳳林里	鳳林里	鳳林里	鳳林里	釜山府大廳町二丁目 磯谷喜三郎
廉 伊	鄭 達	卞 文 伯		金 仁 植	金 轍 植	金 仁 植	朴 寶 蓮	磯 谷 喜 三 郎	河 定 權	黃 泰 仁	黃 景 善	文 錫 賢	河 東 彦	張 獬 魯	金 斗 沂	宋 致 烈	金 載 鉉	李 桂 榮	文 載 顯	

慶尙南道金海郡  
駕洛面竹洞里

鳳林里三九四番	田 五九	竹洞里	徐秀甲
鳳林里三九五番	田 八七	釜山府大廳町二丁目	磯谷喜三郎
鳳林里三九六番	田 一七	濟島里	吳鍾煥
鳳林里三九七番	墳墓地	鳳林里	金載元
鳳林里四三一番	田 二六	鳳林里	文留周
鳳林里四三二番	田 四二	竹林里	文榮周
鳳林里四七九番	田 一七	鳳林里	文永錫
鳳林里四八〇番	墳墓地	鳳林里	文載尙
鳳林里四八一番	田 一五	漁防里	張守明
鳳林里四八二番	田 五一	竹洞里	徐秀甲
鳳林里四八三番	田 三八	竹洞里	金轍植
鳳林里四八四番	田 一二	竹洞里	金正壽
鳳林里四八五番	田 九九	鳳林里	文渭順
鳳林里四八六番	田 四九	鳳林里	金日善
竹洞里二四七番	田 七五	竹洞里四二八	金遠伊
竹洞里二四八番	田 一九	鳳林里	文鍾萬
竹洞里二四九番	墳墓地	鳳林里	文進鎭
竹洞里二五〇番	田 四〇	竹洞里	文襄鍾爽
竹洞里二五一番	田 三〇	釜山府西町四丁目	文淺谷治助
竹洞里二五二番	田 一〇	鳳林里	文渭錫
竹洞里二五三番	田 三一	竹洞里	河周泛

第八三號  
機張竹城里  
慶尙南道東萊郡  
機張面竹城里

竹洞里二五四番	田 九九	竹洞里	金正壽
竹洞里二五五番	田 二九	竹洞里	金日善
竹城里四六番	田 五八九	機張面竹城里七三四	洪淳榮
竹城里五一番	林野一、四	機張面竹城里七三四	洪淳榮
竹城里二七三番	林野一、〇二二坪	竹城洞(竹城里)	崔鶴來
竹城里五七三番	田 三八	機張面竹城里三七一	崔鶴來
竹城里五九七番	林野一、二四一坪	竹城洞(竹城里)	張己順
竹城里五九八番	田 一〇	機張面竹城里二二六	張己順
竹城里五九九番	田 二二	機張面竹城里二二七	劉尙得
竹城里六〇〇番	田 九〇	機張面竹城里三七坪	金修根
竹城里六〇一番	林野一、〇五四坪	竹城洞(竹城里)	金禹敬
竹城里六〇二番	田 一六	機張面竹城里一九一	金禹敬
竹城里六〇三番	田 一九	機張面竹城里	金宗必
竹城里六〇四番	田 八〇	機張面竹城里一六一	朴今采
竹城里六〇五番	田 四三	機張面竹城里二六七	金啓東
竹城里六〇六番	田 二四	機張面竹城里二二六	張己順
竹城里六〇七番	田 五六	機張面竹城里一九六	崔吉天
竹城里六〇八番	田 四一	機張面竹城里五八五	金洙鳳
竹城里六〇九番	田 四一	機張面竹城里三一	盧翼彥
竹城里六五四番	田 七〇	機張面竹城里三七	張律伊
竹城里六五五番	田 九二	機張面竹城里七二八	洪淳元



第八四號  
熊川安骨里  
慶尙南道昌原郡  
熊東面安骨里

竹城里六六一番 田 五七	機張面竹城里	林	學	贊
竹城里三二番ノ一 林野	國			
竹城里三二番 林野四、	機張面竹城里	金	綠	葉
八〇〇步	安骨里	朴	基	信
安骨里山二七番 林野五、	熊東面龍院里	鄭	兌	好
七〇〇步	安骨里	尹	泰	秀
安骨里山三〇番 林野三、	安骨里	金	日	弘
四〇〇步	安骨里	尹	泰	秀
安骨里山三二番 林野三、	安骨里	金	日	弘
九〇〇步	安骨里	尹	泰	秀
安骨里山三二番 林野一	安骨里	尹	永	守
町一五〇〇步	國			
安骨里城塚	安骨里二四二	許	末	連
安骨里六二番 田 三四六	安骨里	安	容	道
二坪	安骨里	金	子	煥
安骨里一二三番 田 一一	安骨里	金	子	煥
一坪	安骨里	金	子	煥
安骨里一二九番 田 五五	安骨里	裴	太	古
九坪	安骨里	裴	太	古
安骨里二三〇番 田 一六	安骨里	朴	泰	翌
安骨里三二番 田 一九	安骨里	姜	璣	昊
八坪	安骨里	姜	璣	昊
安骨里一五〇番 林野 四	國			
七坪	安骨里	朴	來	祐
安骨里一五一番 田 一八	安骨里	朴	來	祐
八坪	安骨里	裴	昌	信
安骨里一五二番 田 八〇	安骨里	裴	昌	信
五坪	安骨里	姜	吉	奉
安骨里一五三番 田 一三	安骨里	姜	吉	奉
坪	安骨里	裴	龍	八
安骨里一五四番 田 六一	安骨里	裴	龍	八
五坪	安骨里	裴	龍	八
安骨里一五五番 田 一〇	安骨里	明	尙	斤
八坪	安骨里	明	尙	斤
安骨里一五六番 田 一九	安骨里	朴	敬	植
一坪	安骨里	朴	敬	植

第八五號  
西生浦城

慶尙南道蔚山郡  
西生面西生里

安骨里一六二番 田 二一	安骨里	朴	周	楊
四坪	安骨里	明	周	一
安骨里一七二番 田 一一	安骨里	明	周	一
〇番	安骨里	朴	潤	業
安骨里一七二番 田 四三	安骨里	朴	來	佑
坪	金海郡金海邑陰法里	朴	來	佑
安骨里一七三番 田 二六	安骨里	南	順	其
一坪	安骨里	南	順	其
安骨里一七四番 田 八一	安骨里	南	順	其
坪	安骨里	南	順	其
安骨里一七五番 田 三八	安骨里	朴	周	楊
二坪	安骨里	朴	周	楊
安骨里一七六番 田 三三	熊東面龍院里	崔	珍	祥
一坪	安骨里	崔	珍	祥
安骨里一七八番 田 六〇	安骨里	姜	芑	明
四坪	安骨里	姜	芑	明
安骨里一八九番 田 七〇	安骨里	姜	芑	明
坪	安骨里	姜	芑	明
安骨里一九六番 田 三二	金海郡龜山面生谷里二一七	李	尙	振
六坪	安骨里	金	世	元
安骨里一九七番 田 一六	安骨里	金	世	元
二坪	安骨里	金	世	元
安骨里一九八番 田 一六	安骨里	金	世	元
八坪	安骨里	金	世	元
安骨里二〇〇番 田 五二	熊川面水島里	金	世	重
一坪	安骨里	梁	其	奉
安骨里二〇一番 田 二七	安骨里	梁	其	奉
一坪	安骨里	梁	其	奉
西生里二二三番 田 一四	西生里	朴	允	杓
坪	西生里	朴	允	杓
西生里二四番 番 三七	西生里	韓	用	甲
坪	西生里	韓	用	甲
西生里二七番 番 二九	西生里	李	景	浩
坪	西生里	李	景	浩
西生里二九番 番 三八	西生里	張	仁	相
六坪	西生里	張	仁	相
西生里二九番 番 三二	西生里	金	得	洙
二坪	西生里	金	得	洙
西生里二七〇番 田 四三	鎮下里	申	大	允
坪	西生里	申	大	允
西生里二七一番 田 五九	西生里	張	應	斗
坪	西生里	張	應	斗

西生里二七二番 田 九六	西生里	韓	小	丕
西生里二七四番 田 三一	西生里	崔	祥	和
西生里二八二番 番 八三	西生里	姜	文	象
西生里二八三番ノ一 田	國			
西生里二八四番 堡 一一	西生里	鄭	順	泳
西生里二九五番 田 一八	西生里	鄭	滿	朝
西生里三〇四番 堡 一一	西生里	張	南	壽
西生里三〇五番 田 一二	西生里	金	生	水
西生里三二三番 田 二九	西生里	鄭	鳳	祚
西生里三二六番 堡 二一	西生里	金	淳	鎬
西生里三二六番ノ一 堡	國			
西生里三二七番 田 一一	西生里	鄭	東	朝
西生里三二八番 田 二〇	西生里	鄭	德	朝
西生里三三三番 堡 八	西生里	韓	小	丕
西生里三三六番 雜種地	國			
西生里三七七番ノ一 堡	西生里	金	龍	得
西生里三七七番ノ二 堡三	西生里	朴	大	吉
西生里三八番 田 二二坪	西生里	張	容	汎
西生里三三九番 田 一三	西生里	朴	斗	燦
西生里三四〇番 田 一五	西生里	朴	萬	苗
西生里三四一番 田 六四	西生里	朴	甲	戌
西生里三四二番 堡 一三	西生里	韓	且	丕

西生里三七二番 田 一四	西生里	崔	春	鳴
西生里三七三番 田 二一	西生里	張	仁	相
西生里四四七番 田 二	鎮下里	申	泰	用
西生里四四七番ノ一 社寺	國			
西生里四四四番ノ一 番	蔚山郡西生面不亭里	都	邦	佑
西生里四五五番 田 三三	西生里	姜	文	象
西生里四五六番 田 六〇	西生里	鄭	錫	來
西生里四五七番 田 七四	西生里	鄭	錫	友
西生里四八八番 田 二八	西生里	尹	錫	伯
西生里四八九番 田 二八	西生里	鄭	德	海
西生里四六〇番 墳墓地	府内面牛亭洞	金	正	基
西生里四六一番ノ一 田	鎮下里	李	根	守
西生里四六二番 田 六四	西生里	鄭	順	泳
西生里四六三番 田 一八	西生里	金	連	玉
西生里四六四番ノ一 田	西生里	朴	永	春
西生里四六四番ノ二 道	西生里	朴	永	春
西生里四七五番 田 二九	鎮下里	申	大	允
西生里四七七番 堡 八八	西生里	金	弘	達
西生里四八三番 田 三五	鎮下里	李	奎	玟
西生里四八四番 田 二五	西生里	張	應	斗
西生里四八五番 田 七九	西生里	申	泰	淙
西生里四八六番 田 二八	西生里	金	有	基

西生里四八七番 田 一一	西生里	鄭	錫	南	西生里六二〇番 田 二六	西生里	鄭	東	朝
西生里四八八番 田 五九	西生里	鄭	琪	伯	西生里六二二番 田 三一	西生里	張	應	斗
西生里四九〇番 田 七八	西生里	朴	在	環	西生里六二番 田 四六	西生里	李	海	宗
西生里四九一番 田 三七	西生里	朴	在	環	西生里六二三番 田 二一	西生里	金	支	平
西生里四九二番 田 一一	鎮下里	申	大	允	西生里六二六番 田 三三	西生里	鄭	晚	運
西生里四九三番 田 二番	西生里	鄭	淳	朝	西生里六二八番 田 二二	西生里	韓	用	甲
西生里四九四番 田 九九	西生里	崔	喜	鳴	西生里六三三番 田 九八	西生里	鄭	淳	朝
西生里四九五番 番 三七	西生里	吳	道	文	西生里六三四番 田 二七	西生里	金	正	潯
西生里四九六番 田 二五	西生里	宋	今	石	西生里六三五番 田 二六	鎮下里	李	奎	煥
西生里五〇四番 田 四五	西生里	鄭	順	泳	西生里六四〇番 田 二三	西生里	朴	大	根
西生里五〇五番 林野 三	鎮下里	宋	祥	奎	西生里五一番 林野 三	鎮下里	李	珍	雨
西生里五〇八番 田 一一	西生里	張	應	斗	西生里五一〇番 林野 三	鎮下里	李	珍	雨
西生里五五九番 田 二九	西生里	金	正	潯	西生里五二〇番 林野 一	國	鄭忠朝外二人		
西生里五九四番 田 二九	西生里	金	正	潯	西生里五五番 林野 一	國	鄭忠朝外二人		
西生里五九五番 田 一〇	西生里	金	永	善	西生里城環	西生里	鄭忠朝外二人		
西生里五六〇番 田 二林野	西生里	鄭忠朝外二人			西生里城環	西生里	鄭忠朝外二人		
西生里五七七番 田 一九	西生里	李	景	浩	西生里城環	西生里	鄭忠朝外二人		
西生里六一六番 番 一六	西生里	鄭	河	朝	西生里城環	西生里	鄭忠朝外二人		
西生里六一七番 番 二七	西生里	李	海	宗	西生里城環	西生里	鄭忠朝外二人		
西生里六一八番 田 四四	西生里	金	敦	洽	西生里城環	西生里	鄭忠朝外二人		
西生里六一九番 田 四四	西生里	洪	淳	俊	西生里城環	西生里	鄭忠朝外二人		

鳳山鶴山城  
黃海道鳳山郡文井面

弘西洞五五四番	田六九	養州邑弘西洞
弘西洞五五五番	堡五七	國金斗衡
坪八		國
弘西洞五六六番	田一二	養州邑弘西洞
弘西洞五五五番ノ二 南ニ接シ弘西洞四四五番田ノ 西ニ接スル城壕四四五坪		宋明洙
文井御領澤里五七番	田	江原道鐵原府外村里
五二九坪		河在崑

文井面訛潭里二五八番 二坪	文井面訛潭里二五八番 壹	江原道鐵原郡鐵原邑外村里 四八五ノ一	河在崑
文井面訛潭里二五七番 七六〇坪	文井面訛潭里二五七番 壹	江原道鐵原郡鐵原邑外村里 四八五	河在崑
文井面訛潭里二五六番 七〇坪	文井面訛潭里二五六番 壹	黃海道鳳山郡文井面訛潭里 二四七	秋用默
文井面訛潭里二五五番 一〇三坪	田	鳳山郡鄉校財産	
文井面訛潭里二五四番 三六坪	壹	鳳山郡鄉校財産	

[illegible]

野 五段八畝	文井面龍潭里山五五番林	江原道鐵原郡鐵原邑外村里 四八五ノ一	河 在 崑
野 三段三畝	文井面龍潭里山五六番ノ一	江原道鐵原郡鐵原邑外村里 四八五ノ一	河 在 崑
林野	文井面龍潭里山五六番ノ二	石川縣金澤市西町一	河 在 崑
林野	一段六畝	朝鮮興業株式會社	河 在 崑
野	文井面龍潭里山五七番林	江原道鐵原郡鐵原邑外村里 四八五ノ一	河 在 崑
野	一町三段六畝	黃海道沙里院邑北里	河 在 崑
林野	文井面龍潭里山五九番ノ二	國	河 在 崑
文井面龍潭里山六〇番林	三町四段五畝	國	河 在 崑
文井面龍潭里山六一番林	一町一段二畝	沙里院邑北里	河 在 崑
野	文井面龍潭里山六二番林	沙里院邑北里	河 在 崑

黃海道鳳山郡洞仙面桃林里  
四三九  
李鉉三外二人

土城面武井里四〇三番 堡  
二一九坪 四八五ノ一  
河 在 嶺

慶尙南道昌原郡  
內西面山湖里

(以下二四頁)



## 美術市場

美術市場に現はれた重要な新古美術品及び其の市價の記録として、我が國の四大美術市場たる東京、大阪、京都、名古屋の各美術俱樂部に於て昭和十三年中に行はれた主なる賣立に就き、二千圓以上の高値表を以下に記載する。

## 昭和十三年度新古美術品賣立高値表 (金二千圓以上)

## 東京美術俱樂部

## 某大家並某家賣立 二月七日

玉堂溪村春色双幅	二、九五〇
溪山人洛東華頂山	二、六〇〇
百穂新竹文鳥	三、五〇〇
春草春宵	六、五〇〇
平目地唐山水蒔繪冠卓	三、四〇〇
百穂六景畫册	二、一〇〇
白砥鳳凰笛吹觀音置物	三、〇八九
春草柳鶯	三、一九八
大觀五浦の月	三、七〇〇
春舉三社	四、五八九
平目地紅葉山水料紙硯箱	三、五三〇
雅邦紅梅早鶯	二、六六〇
春舉裾野の春	六、〇八〇
春草黃昏	二、二二〇
雅邦雪中富岳	三、八〇〇
龍子明王鳥二枚折半双	二、八八八
玉堂溪村春色	四、三九八

雅邦溪流漁釣	三、一九〇
川之邊一朝初音蒔繪料紙硯箱	六、六九八
春草春曙	二、六八九
百穂明麗	四、一一〇
春草大觀華邨三幅對	三、七一八
春草武藏の月	五、三九八
雅邦人丸作歌	六、七二〇
白砥共蓋遊環獅子摘香爐	三、五一〇
雅邦龍虎双幅	八、一〇〇
吳洲赤繪金欄手赤玉見込麒麟平鉢	二、〇〇〇
和田英作夕映油繪額	二、三九三
百穂柏蔭雛雀	六、〇〇〇
栖鳳梅ニ稻東喜雀六曲	三、一一〇
御舟竹生	一、〇〇〇
觀山蓬萊山六曲一双	三、五五〇
大觀秋雨	三、〇八〇
春草月下飛鴨	二、八九〇
桃山時代名所繪六曲一双	二、一五〇
玉堂水郷積雪	二、六六九
栖鳳柳鶯	九、二八〇
雅邦眞山水秋谿暮靄	三、三一〇
雅邦噴翠遊獵	五、五八〇
栖鳳三保春色	七、八九八
栖鳳山村永日	四、三〇〇
花雨翠居某大家賣立 三月七日	
玉堂櫻花小禽双幅	四、五一〇
百穂秋草	二、三五〇
百穂蓬萊春曉双幅	一、二五〇

春舉不老長生	二、七二〇
大觀松竹梅	二、五八〇
栖鳳竹雀	五、五三九
玉堂花さく山路双幅	二、二二八
百穂牡丹文鳥	二、二五〇
雅邦春江曉景	三、三六〇
大觀滿歲松碧	二、三八八
雅邦雪中山水	二、一九八
平八郎勇鯉	二、一九八
古徑白梅	二、四一九
雅邦中川釣舟	三三、五九〇
溪山人近護十二趣畫册	二、八八〇
百穂栗鼠	二、八八八
溪山人八重山櫻車返シ	三、三九八
百穂荒鷺	二、一〇〇
春舉潯峽の初夏	三、一八〇
春鳳溪間吟秋	四、五六八
栖鳳富嶽	四、五八八
栖鳳熊笹鶯	四、五八〇
玉堂春山行旅	二、二五九
栖鳳朝陽	二、一五〇
御舟海老	七、一八八
古徑鶴鶴	三、三六〇
栖鳳春淺シ	二、六五〇
春草朝陽	三、五八八
龍子菊双幅	三、一八八
玉堂山家淺春	二、八三〇
御舟山椿	二、〇八〇
大觀菖蒲	三、〇九八
御舟甘藷	三、四四八

## 〇〇家賣立 三月十四日

栖鳳松魚	二、九〇〇
御舟鳥骨鷄	一〇、五八〇
栖鳳麥秋	二、六〇〇
百穂筑波峰	二、〇〇〇
御舟丘	九、六八〇
御舟冬	四、六六〇
百穂竹ニ梟	二、〇五九
松園夕涼	四、五〇〇
景年臘月杜鵑	三、二三九
大觀神州第一峰	三、五八八
玉堂山路の春双幅	二、二九〇
玉堂風立浦	四、七九〇
玉堂夏江漁舟	二、三〇〇
百穂竹ニ雀	二、三四〇
溪山人花の寺	二、〇九八
大觀黃菊白菊	三、〇八〇
某家刀劍賣立 三月十七日	
刀 秀光	三、六九〇
拵付大小 師光、祐定	六、六八八
刀 兼光	三、三九八
衛府太刀 法光	二、八八〇
拵付大小	二、八〇〇
鞘卷太刀	二、三九八
刀 直綱	二、五八八
松寶山莊賣立 三月二十八日	
鐵齋葛儒移居	七、〇〇〇
五雲雪田宿鴨	二、二三九
關雪雨後新月	二、二五八
栖鳳新箱子	二、三八八
雅邦江郊晚秋	三、二八〇
松園古代美人	二、三五〇
雅邦秋景水墨山水風呂先	二、五八〇

松園初秋の夕	一〇、〇〇〇	春草月下の波	六、三八九	芳園笛	五、六九八	春草春ノ朝	五、六九〇
印象手鞠	四、一九〇	御舟初霜	一五、一〇〇	玉堂裏見秋色	三、二〇〇	雅邦並木富士	六、四一〇
栖鳳夏夕	二、一三〇	雅邦山莊觀月	三、二八〇	松園櫻狩	三、一八〇	雅邦華嚴龍	二、三〇〇
栖鳳雄姿千年	一三、八〇〇	關雪飼馬	三、五九〇	岸傍梅鶴猛虎二枚折	四、八九〇	雅邦夏流牧童	一一、一〇〇
青磁瓶子形花生	二、一九三	德川田安家寶立 四月十八日		一鳳曉の雁	二、〇〇〇	雅邦玉兔	六、八九〇
白磁獅子乘文殊置物	二、七八八	弘定大内繪八枚折一雙	二、三九八	是真漆繪畫帖	一四、三〇〇	雅邦墨堤の春雙幅	三五、三〇〇
青磁三足香爐	二、八五〇	雪村花鳥六曲一雙	七、三〇〇	磁青磁袴腰香爐	五、六〇〇	雅邦雪中金閣寺	四一、八〇〇
景年月下芒双鶴	二、三〇八	金地源平合戰六曲一雙	二、二五一	藥綯宿木	四、八九〇	蕎麥花生	一九、〇〇〇
雅邦張果老	四、一〇〇	さや形桐鳳凰蒔繪文臺硯箱	三、六一〇	雪鼎十二ヶ月畫帖	一一、〇〇〇	雅邦秋景山水	二六、三〇〇
時代團扇蒔繪小書棚	四、七五〇	探幽中布袋三幅對	二、一三九	光琳浪鶴蒔繪硯箱	四三、八〇〇	某兩家寶立 五月三十日	
榮川院下繪十二ヶ月印籠	四、一八〇	山陽山水畫贊	二、七〇〇	連山雪中雙鴨	二、一五〇	素明金地四季草花六曲	二、一一五
黑地三保松蒔繪三ツ揃	四、一二〇	吉野山蒔繪組硯箱	六、一〇〇	守一月ニ芋	二、六一九	觀山壽老	二、三四〇
玉堂柳櫻双幅	二、〇〇〇	桃山衣裳六枚折一雙	六、一九〇	草雲武陵春色	二、三六九	湖東鑑錦手臺子揃	二、三一八
栖鳳五月霽	二、三三九	高僧武家短冊帖	三、〇九八	是真青海盆	三、五〇〇	抱一秋草	二、一九三
春草春夏秋冬四幅對	二、二四〇	卒翁布袋	四、五〇〇	華山鍾馗嫁妹	一四、三〇〇	栖鳳水江晚歸	二、八九〇
栖鳳猿橋秋露	二、〇〇〇	武家短冊帖	二、七九八	古赤繪獅子蓋香爐	三、一一〇	大雅堂飲中八仙屏風	二、三八九
玉堂春溪歸牧双幅	五、〇〇〇	一蝶中馬上壽老三幅對	二、三〇〇	若冲松鶴	二、三〇〇	玉堂閨家全慶	三、一三九
玉堂五月晴	四、一九〇	友松布袋	二、一九〇	應震芭蕉双兔	二、九〇〇	芳崖春江漁樂双幅	二、〇二八
春舉海邊ノ夏	二、三五〇	某家寶立 五月二十日		北齋山川双幅	三、〇〇〇	雅邦廬山觀瀑	二、四三〇
梨子地吉野山蒔繪料紙硯箱	一六、〇〇〇	古赤繪羅漢端反皿	三、一一〇	文人諸大家張交六枚折	四、三九八	東山時代錫線香合	二、三五〇
景年喬松青楓	二、七六〇	蘆雪藤花鷹	二、二九〇	寧寧三耳花生	二、九〇〇	文晁東海道紀行卷	三、五八九
景年松鶴延齡	五、二〇〇	梅逸嵐山秋景	六、二一〇	時代金地蒔繪料紙硯箱	一〇、八〇〇	重要美術品四家山水四卷	二、一六六
龍子海鶴	四、一八八	寬齋旭日靜波双幅	四、〇九〇	玉章梅花書屋	三、一九〇	重要美術品柿右衛門色繪草花大皿	八、九一〇
松園虫の音	一一、九八〇	唐物青貝樓閣人物六足中央卓	四、八八〇	雅邦霜臺公賦詩	一〇、八〇〇	同	二、〇八〇
栖鳳朝陽	二、六三九	歌麿美人錦繪七枚	二、五九〇	栖鳳春園	四、八九八	某家並鈴木秀嶺寶立 六月六日	
雅邦蓬萊山	八、〇〇〇	竹堂池邊ノ狐	六、五〇〇	杏所盧ニ鴨双幅	六、二二〇	栖鳳春寒	二、三六〇
景年蓬萊仙境	三、六〇〇	訥言寶舟	二、〇〇〇	是真中南極壽星三幅對	一八、九〇〇	大觀神州第一峰	二、五三〇
雅邦夏景山水	三、八六九	松園しぐれ	四、三九〇	景文極彩色花鳥六枚折	四五、九〇〇	平八郎鯉	二、三九〇
雅邦秋山觀瀑	二一、八八〇	始興中壽老三幅對	二、一九〇	蕪村秋郊歸馬	一一、一〇〇	溪山人修學院春雪	二、三八九
景年蓬萊双鶴	六、二五〇	一鳳松鯉	三、六〇〇	春草中紅葉瀑布三幅對	八、五九八	栖鳳富嶽	三、二七三
雅邦夏景山水	一三、五〇〇	春草飛泉遊猿	二、七〇〇	道八雲錦針	六、九〇〇	大觀飛泉	三、五九〇
景年松間紅葉小禽	一一、三一〇	秋暉孔雀	四、三九〇	抱一枯野畫贊	三、六九八		

龍子月櫻双幅	二、二七三	蕪村翠山碧樹	四、一九〇	希望鐵線花	二、九一〇	元人郭天錫雲壑陶居	二、六三〇
百穗嵐峽雨意	二、六〇〇	大觀湖	二、七八〇	南京赤繪花鳥繪四方水指	二、六五〇	玉堂山家雪霽	二、〇五六
溪山人梅林歸鶴	二、二八九	嶺山秋景山水	三、三三〇	翡翠佛手柑大香爐	二、六七〇	大觀龍膽	二、八〇〇
大雅堂蘭亭曲水	二、三九五	山陽雲華竹田應酬觀梅詩	三、三九八	拈付小脇差廣光	二、二五〇	古徑百合	二、二三〇
溪山人嵐峽雨罷	四、八〇〇	蕪村寒林陶居	三、五八〇	大觀富士額	二、五九三	大觀空林曉靄	二、五八〇
溪山人鑿を渉る鹿	五、〇〇〇	山陽浚江歸舟	三、八九八	雅邦江山漁艇	二、五一〇	栖鳳谿村春耕	二、四〇〇
栖鳳遊鹿	二、二七三	松岡映丘並小林錄太郎兩家賣立	十月十一日	雅邦秋山歸雁	四、一一九	五雲四季花鳥圓窓張交六曲一双	二、五九三
溪山人園中春暖	四、五三八	春草杜鵑	二、三八〇	雅邦富嶽	四、〇三〇	某家賣立 十二月六日	
大雅堂米法山水畫贊	四、七〇〇	平日地扇面蒔繪十種香皆具	二、六三九	白鞘刀包平無銘	四、八九九	大觀旭日靜波	四、三九〇
古徑菊	四、三九二	玉堂春江秋溪双幅	二、八〇〇	白鞘刀來國次	四、八八八	大觀紅梅鶯	三、二三〇
栖鳳柳上稚雀	三、九〇〇	舊大名賣立 十一月八日	二、一〇〇	五雲秋野	五、一〇〇	栖鳳春朝	二、五九八
栖鳳喜雀	二、二九五	探幽蹴鞠	二、一〇〇	白鞘刀青江次吉	四、一一一	御舟木瓜	三、一五〇
伊東子爵並某兩家賣立	六月二十一日	吉田家並某舊家賣立 十一月十四日	四、五〇〇	玉堂山村春晴	二、五七九	春草大觀旭日靜波三幅對	三、三三三
景年春景樓閣山水	五、〇〇〇	白鞘刀國行	二、八九八	磁青磁袴腰小香爐	七、五〇〇	嶺山秋錦成章	六、六九八
玉堂山笑ふ	二、七八八	白鞘短刀行光	二、六〇〇	雅邦上代風俗双幅	九、五〇〇	雅邦中壽老三幅對	一八、〇〇〇
竹田山徑連鑣	五、八三〇	白鞘刀寶壽	二、六〇〇	衛府太刀吉用	三、五〇〇	景年老松群禽	六、八九〇
雅邦秋暮山郊	三、一八九	白鞘短刀三條	四、〇〇〇	御舟桐果	二、五八九	雅邦蓬萊山水	二、八八〇
應舉撫子花双兔	五、六八〇	黑漆太刀行平	三、八〇〇	觀彦佗助	二、六三九	觀山郭子儀	二、一八〇
五雲春泥	三、〇八〇	拈付大小	五、五一〇	百穗早春	九、三〇〇	龍子春寒	二、三九〇
翡翠方鼎共蓋遊環香爐	三、八八〇	白鞘刀西連	七、八五〇	拈付刀包永	四、五八〇	龍子春麗	二、三三八
木米秋景山水	三、九二〇	拈付刀國吉	一一、五〇〇	白鞘短刀左	四、五六〇	銀牡丹唐草彫臺子揃	三、五〇〇
是真四季花鳥双幅	三、一九五	白鞘刀義弘	二、八八八	白砥遊環三足香爐	二、三八〇	抱一双鶴	三、〇八八
玉堂雪景山水双幅	二、六二八	白鞘刀順慶	四、五八八	大觀春潮	三、八八〇	雅邦湖上投網	二、六九八
靈華樹下說法	二、二一〇	鞘卷太刀政光	二、一〇〇	雅邦深山櫻花時雨紅葉双幅	一〇、〇〇〇	觀山春秋双幅	
磁青磁竹節三足香爐	四、七五〇	拈付刀顯國	二、一二〇	御舟トマト	二、五〇〇	深山某家並市川藩美藏賣立	
靈華趙真人	二、一八八	白鞘刀吉光	四、三八〇	林雲影並某家賣立 十一月二十一日	四、六九〇	來章中東方朔三幅對	二、六五八
百穗松嶺泉聲	六、三八八	白鞘短刀行平	四、一五〇	松園秋ばれ	四、八〇〇	蕪村春の海畫贊	三、六〇〇
秋暉不老榮華	七、三九三	拈付半太刀國光	四、六〇〇	栖鳳殘楓小禽	二、三二〇	長壽莊並某名家賣立 十二月十九日	二、五二〇
雅邦夏景山水	九、一〇〇	拈付刀無銘	三、六八〇	鐵齋青綠卷二卷	六、五〇〇	栖鳳凰	二、四三〇
文晁谿山疊嶂	四、五六〇	百穗梅鶯翠竹双幅	三、一八九	栖鳳山村密雲	二、五〇〇		
雅邦魚籃觀音	一〇、〇〇〇						
龍山風竹畫贊	二、七〇〇						

大觀蜜柑

三、四一〇

本形志野曆手茶盤銘年男

五、〇〇〇

玉溪月前飛雁

二、四六〇

銀蜀江模樣彫茶子揃

二、〇〇〇

繪萩松竹梅茶盤

二、一〇〇

開庵庵賣立 十二月九日

四〇、〇〇〇

磁青磁酒會壺共蓋水指

七、一〇〇

古徑朝顔

四、八九〇

一入墨茶盤銘萩原

二、六一九

因陀羅齋王問答之圖

二四、〇〇〇

元伯判野藥罐水指

一、一八六

古徑紅梅

三、五八〇

交趾柘榴香合

五、〇〇〇

紀貫之興風集切七行

三、九〇〇

青磁四方細水指

二、一八九

春草海邊ノ月

三、三九三

堆黒林和靖彫香合

七、〇〇〇

一休二行物一聲

二、五八八

南蠻横繩水指

三、九〇〇

春草月下靜波

二、九八八

唐物袖香合

四、〇〇〇

如心齋二行物奉入千林

三、六九〇

オランダ小水指

四、三〇〇

春草溪流初夏

六、三三〇

祥瑞吉ノ字共蓋茶入

三、九六五

如心齋一行なんても

二、一九〇

古備前緋澤水指

五、〇〇〇

廣業羅浮仙

二、八八九

大名物松島眞壺

三、三〇〇

半庵宗巴一行松風

二、六一〇

古伊賀細水指

二、二〇〇

大阪美術俱樂部

井上梅軒並田村家賣立

三月二十九日

定家卿狂歌三首

一六、〇〇〇

不昧公共筒茶杓銘鴨立澤

二、七〇〇

澤庵和尚細字一行物

二、二〇〇

宗全作鯉籠花入原斐銘栴

二、五〇〇

雪舟面壁達磨

二、六九〇

唐物青貝松下人物平卓

三、三九〇

瀬戸文琳茶入覺々齋銘寒翁

四、〇〇〇

了々齋置窓花入銘巖松

二、四〇〇

一休應無所住云々一行

二、八九〇

硯青磁輪花鉢

四、四〇〇

呂宋茶入

二、五〇〇

古蘆屋立田川紅葉地紋富士釜

二、三三〇

玉舟心隨萬境轉一行

二、三九八

吳州赤繪魁鉢

三、四〇〇

又隱策

三、八一〇

淨琳鯉ノ紋釜

二、三九〇

不昧公月自畫贊

二、七〇〇

金欄手丸紋付捻入子杯

三、六〇〇

宗長策銘ナテシコ

二、五一〇

利休形木地爐椀了々齋菊桐畫

三、二一〇

春草曉ノ海

六、五〇〇

江原警陣庵並某家賣立

五月五日

井戸茶碗銘曲水

一、一〇〇

利休時代鉈緣爐椀

二、六〇〇

觀山嵐山

二、七二〇

梅逸老松壽帶鳥梅長春雀双幅

三、二〇〇

御本淺黄藥茶碗

二、〇〇〇

吳州赤繪兜鉢

二、六九〇

景年月下狸腹鼓

二、一三〇

伊川院中福祿壽三幅對

三、二〇〇

堅手茶碗如心齋銘桃花

二、五一〇

萬曆赤繪小掛鉢

二、六九〇

景年江郎歸漁

三、八〇〇

燕村金地雪中喜鴉屏風一双

五、一〇〇

祥瑞團紐詩入茶碗

七、四一〇

慶入作菊置上振出

二、三六〇

景年不老長春壽帶鳥

七、三九〇

清暉金地日月屏風一双

二、一〇〇

織部茶碗銘ヤマサト

二、九〇〇

京都美術俱樂部

三月二十二日

景年田舎春

二、二八九

一風海邊老松屏風一双

二、四〇〇

長二郎黒茶碗如心齋銘面影

二、三〇〇

藤井家賣立

三月二十二日

景年松下牧童

二、一三〇

白水庵賣立 五月十四日

七、五三〇

慶入黒茶碗銘々齋銘いく春

二、五〇〇

吳春遠山溪流

五、〇〇〇

竹邨松陰養鶴

三、五九〇

景年松間櫻花小禽

五、八六〇

染付柏子木香合

九、三一〇

景文柳蔭丹遊

六、〇〇〇

關雪一畝香雪橫物

二、一三〇

景年朝陽雙鶴

三、八九八

織部はじき香合

三、六五〇

蘆雪臘月

四、八〇〇

竹邨萬嶺梅花

二、四五〇

景年老松群禽

三、〇六〇

染付玉章香合

三、一〇〇

景文紅白牡丹小禽

三、一九三

竹邨千林楓葉

二、八九〇

景年田家早梅

四、四三九

宗全共筒茶杓銘すみれ

五、一〇〇

清暉秋野七草

三、三九〇

名物大井戸茶盤呼銘シコロ

五、〇〇〇

景年月下擲衣

二、一一〇

原叟共筒茶杓銘よろこび

三、六一〇

寬齋溪山歸樵

三、三九〇

曜變天目茶盤

六、〇〇〇

景年紅檣遊兔

二、一一〇

原叟共筒茶杓銘撫子

三、三九八

來章鶴

二、一〇〇

本手立鶴茶盤

二九、三六〇

景年溪流上鮎

三、二一〇

普齋共筒二本入茶杓銘夫婦

二、一〇〇

清曠燕子花水禽

二、四九八

釘彫伊羅保茶盤

一六、〇〇〇

景年柳蟬

二、三〇〇

如心齋北野三十本内茶杓銘福つく

二、一〇〇

双石朝顔蜻蛉

四、一〇〇

朝日燒茶盤

五、一〇〇

玉溪紅葉水禽秋江鸞鶯双幅

三、八三〇

梅嶺稚兒拜大士 二、四三〇

竹堂青楓双鹿 五、三九〇

竹堂蓮小禽双幅 二、五三九

双石雪中松翡翠 二、七一〇

松園夕 一、二〇〇

梅逸豐泉密竹 一六、〇〇〇

山陽書一行 五、三〇〇

山陽不識庵詠史 二、一九三

山陽兒鳥高德詠史 二、〇〇〇

山陽實盛詠史 二、二五八

燕村俳句張交二枚折 二、八〇〇

南蠻切溜花生 三、三九〇

唐物青貝馬香合 二、三一九

唐物龍手付花生 二、四〇〇

青磁端反鉢 三、〇〇〇

保全祥瑞寫水指 三、二三〇

大雲竝某家賣立 六月十三日 二、五八八

源平時代金小札白糸威大鎧 六、四一〇

來章立田紅葉大橫物 三、四三〇

某家賣立 十二月二十日 四、〇〇〇

玉舟天室一溪三筆夢ノ字 四、〇〇〇

曾文金地竹雞紅葉鹿屏風 四、六〇〇

景年臘月櫻花 三月五日 三、〇〇〇

松田松籟軒竝某家賣立 三月五日 二、〇〇〇

來章桃花小禽 二、〇〇〇

斗々屋茶碗 四、五〇〇

某家賣立 三月二十五日 四、五〇〇

班唐津茶碗 四、五〇〇

黃伊羅保茶碗 二、〇〇〇

彫釘伊羅保茶碗 二、〇〇〇

景文松双鶴 三、〇〇〇

掬水庵竝某家賣立 六月十八日 二、五〇〇

松園享保美人 二、五〇〇

一摘庵竝某家賣立 十月二十八日 三、五〇〇

蕉川多賀茶碗 二、〇〇〇

了入四方茶碗 二、〇〇〇

(二〇九頁ヨリ)

第六二號 馬山日本城 慶尚南道昌原郡 內西面山湖里

山湖里一七〇番 田 九二 本浦府海岸通一丁目十三

坪 山湖里一七一番 田 四〇八 本浦府海岸通一丁目十三

坪 山湖里三九七番ノ二 林野 本浦府海岸通一丁目十三

坪 山湖里三九七番ノ三 本浦府海岸通一丁目十三

坪 山湖里三九八番 田 一〇 本浦府海岸通一丁目十三

坪 山湖里四〇一番 田 五一 本浦府海岸通一丁目十三

坪 山湖里四〇二番 田 二二 本浦府海岸通一丁目十三

坪 山湖里四三四番 田 九二 本浦府海岸通一丁目十三

坪 山湖里五二六番 田 三三 本浦府海岸通一丁目十三

坪 本浦府海岸通一丁目十三 南北棉業株式會社

坪 本浦府海岸通一丁目十三 南北棉業株式會社

坪 本浦府海岸通一丁目十三 南北棉業株式會社

坪 本浦府海岸通一丁目十三 南北棉業株式會社

坪 本浦府海岸通一丁目十三 南北棉業株式會社

坪 本浦府海岸通一丁目十三 南北棉業株式會社

坪 本浦府海岸通一丁目十三 南北棉業株式會社

坪 本浦府海岸通一丁目十三 南北棉業株式會社

坪 本浦府海岸通一丁目十三 南北棉業株式會社

坪 本浦府海岸通一丁目十三 南北棉業株式會社

坪 本浦府海岸通一丁目十三 南北棉業株式會社

坪 本浦府海岸通一丁目十三 南北棉業株式會社

坪 本浦府海岸通一丁目十三 南北棉業株式會社

坪 本浦府海岸通一丁目十三 南北棉業株式會社

坪 本浦府海岸通一丁目十三 南北棉業株式會社

坪 本浦府海岸通一丁目十三 南北棉業株式會社

坪 本浦府海岸通一丁目十三 南北棉業株式會社

坪 本浦府海岸通一丁目十三 南北棉業株式會社

坪 本浦府海岸通一丁目十三 南北棉業株式會社



# 昭和十三年度美術文獻目錄

## 凡 例

一、ここに採録する美術文獻は我が國に於て昭和十三年中に發行された單行本、定期刊行物及び諸新聞掲載のものに限つた。

一、東洋古美術文獻採録の範圍は原則として美術關係のものに限つたが、考古學、歴史地理その他のものについても美術に關係あるものは適宜採録した。

一、現代美術文獻目錄は東洋古美術關係を除き、明治大正以後の現代美術及び美術一般に關するものを輯めた。

一、西洋美術に關する文獻は便宜上現代美術文獻目錄中に西洋現代美術及びその他外國美術の二項を設けて採録した。

一、建築に關しては、本書本文の凡例に記した範圍に限定した。竣工建築物報道の記事は工事概要のみを記したるもの、或は寫眞のみを載せたるものは省略し、紹介批評の記事あるもののみを採録した。

一、物語作家及美術關係者の項は本年度中に歿した人々の記事に限つた。

一、現代美術文獻目錄に於て各項目内の配列は、單行本にあつては書名による五十音順、定期刊行物所載文獻にあつては所載雜誌名による五十音順とした。同一雜誌の配列はその發行順である。但し展覽會批評及昭和十三年度物語作家評傳は雜誌別によらずして題目別にまとめた。

一、本目錄に採録せる定期刊行物及び新聞紙は左の通りである。

### 現代美術關係

ア	トリエ	浮世繪界	漆と工藝	畫說
改	造	學校美術	教育美術	建築雜誌
建	築	世界工藝	工藝ニュース	國華
國	際	建築思想	新建築	茶わん
中	央	公論	圖畫と手工	帝國工藝塔影

### 同新聞

南	畫鑑賞	日本建築士	汎工藝	美	育
美	之國	美術街	美術研究	美	之國
大	阪朝日	大阪毎日	京城日報	新愛知	
中	外商業	東京朝日	東京日日	福岡日日	
報	知	毎夕	都讀賣		

### 古美術關係

ア	トリエ	以可留我	浮世繪界	漆と工藝
鴨	台史報	瓜茄	畫說	建築雜誌
建	築世界	工藝	考古學	考古學雜誌
考	古學論叢	國華	古典研究	史學雜誌
史	淵	史蹟と古美術	史蹟と古美術	史蹟と古美術
支	那學	史蹟と古美術	史蹟と古美術	史蹟と古美術
書	わん	神社協會雜誌	人類學雜誌	大日本窯業協會雜誌
茶	わん	圖畫と手工	塔影	陶磁
東	方學報	東洋學報	東洋史研究	東洋建築
東	洋美術	南畫鑑賞	日本國寶全集	日本美術協會報告
俳	句研究	汎工藝	美術研究	美術研究
寶	雲	星岡	滿蒙	燒もの趣味
夢	殿	立正史學	龍谷史壇	林泉
歷	史教育	歷史公論		

# 目次

## 現代美術關係文獻 (定期刊行物所載)

### 論文及隨筆

總說	雜誌別五十音順	二一七
日本畫	〃	二一七
洋畫	〃	二一七
彫刻	〃	二一七
工藝	〃	二一七
建築	〃	二一八
作家論	〃	二二〇
物故作家及美術關係者	人名別五十音順	二二一
時評	雜誌別五十音順	二二二
身邊雜記	〃	二二三
雜	〃	二二四
明治大正以降美術	〃	二二五
外國現代美術	〃	二二五
繪畫	〃	二二七
彫刻	〃	二二七
工藝	〃	二二七
建築	〃	二二七
其他外國美術	〃	二二七

### 展覽會記事及批評

### 行政及教育

綜合展覽會	題目別五十音順	二二七
日本畫展覽會	〃	二二九
洋畫展覽會	〃	二三〇
彫刻展覽會	〃	二三一
工藝展覽會	〃	二三一
官展	雜誌別五十音順	二三二
教育	〃	二三二
總說	書名五十音順	二三三
日本畫	〃	二三三
洋畫	〃	二三三
彫刻	〃	二三三
建築	〃	二三三
工藝及圖案	〃	二三三
教育	〃	二三三
外國美術	〃	二三三
雜	〃	二三三
補遺	〃	二三三

## 古美術關係文獻 (定期刊行物所載)

總說・綜錄	二三六
繪畫	二三六
書蹟、印、文書	二四一
彫刻	二四二

建築及庭園	二四三
工藝	二四五
雜	二四八
其他	二四八
考古學・金石關係	二四八
宗教及歷史關係	二四八

## 古美術關係單行圖書

總記	二四九
繪畫	二四九
彫刻	二五〇
建築及庭園	二五〇
書道	二五〇
工藝	二五〇
考古學	二五一
其他	二五一
歷史	二五一

現代美術關係文獻(定期刊行物所載)

論文及隨筆

總說

「寫實」論

作家としての覺悟  
レアリズムに就て  
新寫實主義繪畫論

新しいレアリズム

「寫實」論

レアリズムとアブストラ  
クトアート

藝術と社會

日本美術の或る特徴  
日本藝術に於ける時間的  
質的なもの

藝術と社會

内容と形式の分裂  
美術・工藝の現實と夢に  
就ての座談會

古典復興の問題  
作家と精神力  
時代への認識と藝術觀  
堀空隨筆

安井曾太郎  
中村研一  
中村一政  
等

中村一政  
等

内山 義郎

相良 德三

フエルナン・  
レジェ

植村騰千代譯

川島理一郎  
磯 伊之助

内田 巖等

植村騰千代

山際 靖

ハーパー・  
ソード

瀧口 修造譯

長谷川如是閑

山際 靖

植村騰千代

内田 巖

伊東 深木

高村 豐周

谷口 吉郎等

淺野 晃

佐波 市

中河 興一

兒島喜久雄

アトリエ 一五〇一

同

同

同

一五〇一

一五〇一

一五〇二

同

同

一五〇三

一五〇三

一五〇三

一五〇五

一五〇六

同

同

一五〇七

一五〇九

同

同

一五〇一〇

一五〇一二

一五〇一四

美術の改革

武將と美術  
藝術は何時發見された歟  
藝術的表現  
戦争と美術  
戦争畫への期待  
日本美術の精神  
我が國藝術の調和的性格  
に就いて  
繪畫精神の再建  
藝術に於ける日本の認識

日本畫

戦争と日本畫  
現畫壇の人々と書  
時局下の美術雜感  
水墨、色、形  
日本畫發展の方向  
日本畫の現段階に就て

日本精神と日本畫

日本畫私感

春陽會水墨畫の希望

洋畫

古畫を對照した油繪具と  
色彩關係について  
テンペラ畫技法  
PAPIER GILLOT  
油繪保存の研究  
制作態度としての日本主  
義の再檢

荒木 十畝

正木 直彦

森田龜之助

内山 遼水

三輪 達郎

橋山 大觀

佐波 市

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

中央公論 五三ノ九

塔 影 一四ノ三

南畫鑑賞 七ノ六

同

美之國 一四ノ九

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

洋畫に於ける傳統の誕生

構成法一考  
寫眞と繪畫の出會ふところ  
主張  
現下の繪畫問題  
離散する「日本の洋畫」  
文人畫と現代西洋繪畫  
南畫以前の心  
カゼイン・テンペラに就て  
素描に就て

傑作「或る日の深井英五」  
「肖像」を仕上げるまで  
ヒューマニズムとレアリ  
ズム

前衛藝術の諸問題  
建築家と壁畫  
繪畫のモチーフとしての  
戦争畫について  
繪畫保存上より見たる繪  
畫の病氣の原因  
繪畫の保存一修復の實際  
繪畫保存上より見たる材  
料論  
繪畫の保存・修復に就いて

原始彫刻の省察

工藝

世界工藝の實情と日本工  
藝の將來  
染草雜筆  
友禪攷  
漆器の生産調査

植村騰千代

川口 軌外

瀧口修造

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

アトリエ 一五〇一二

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

アトリエ 一五〇一二

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同



古澤氏の畫室(吉田五十八設計)	建築世界	三二ノ一	東京回教禮拜堂(吉本與志雄設計)	建築世界	三二ノ六	東北地方民家の探光及至内温度狀況に於て	木村幸一郎	建築世界	三二ノ一〇
鐵道省新廳舎(鐵道省工務局建築設計)	同	三二ノ二	山崎市廳舎(川崎市役所建築課設計)	同	三二ノ七	秋季展覽會報告	早稻田大學理工學部建築科學生	同	三二ノ一一
帝室林野局(佐藤功一設計)	同	同	名古屋逓信局(逓信省營繕課設計)	同	同	越後の木地屋部落	高橋文太郎	同	同
貝島邸(藏田周忠設計)	同	同	白雲樓(大林組住宅部設計)	同	同	朽木縣廳舎(佐藤功一建築事務所設計)	同	同	同
以氏邸(竹中工務店設計)	同	同	小澤邸(千北研一設計)	同	同	長柄輝儀所(大阪市役所營繕課設計)	同	同	同
民家建築と協同作業	小倉 強	三二ノ三	某氏邸(石間桂造設計)	同	同	日東チーガーデン(竹中工務店設計)	同	同	同
航空計器工場(戸田組設計)	同	同	大和棟の家	同	同	工務店設計)	同	同	同
帝國ミシン株式會社工場(松田建築事務所設計)	同	同	白毫寺民家實測記	藤島玄治郎	同	N氏邸(高橋建築事務所設計)	同	同	同
三島邸(渡邊仁建築工務所設計)	同	同	北京再見	同	同	鈴木ビル(竹下真太郎、猪野勇一設計)	同	同	三二ノ一二
掛札邸(石間桂造設計施工)	同	同	奈良の民家スケッチ集	今 和次郎	同	某氏邸(三菱倉庫建築課設計)	同	同	同
北海道大博覽會	同	三二ノ四	不二屋(レームンド建築事務所設計)	同	同	第一生命保險相互會社(渡邊仁、松本與作設計)	同	同	同
不動貯金銀行淺草支店(關根栗太郎設計)	同	同	W氏邸(坂本鎮雄、岡田大設計)	同	同	根岸尋常小學校(東京市土木局建築課設計)	同	同	同
グリーンコートスタヂオアパート(齋藤誠一設計)	同	同	某氏邸(與志田徹郎設計)	同	同	聖母學院講堂及雨天體操場(レームンド建築事務所設計)	同	同	同
佐々木研究所(土岐達人設計)	同	同	東京帝國博物館(宮内省內匠寮臨時造營課設計)	同	同	本年の建築	牟田口九紫	同	同
M氏別邸(ベッオールド建築事務所設計)	同	同	昭和醫學專門學校(三井建築事務所設計)	同	同	アイヌの住居	棚橋 諒	同	同
吉田邸(巨勢利雄設計)	同	同	日本電力株式會社黒部川第二發電所(山口蚊象建築事務所設計)	同	三二ノ九	B氏の住宅	葦田 哲郎	國際建築	一四ノ一
「日本民屋地理」に就て	竹内芳太郎	三二ノ五	同 第二堰堤(山口蚊象建築事務所設計)	同	同	O邸計劃斷想	山脇 巖	同	同
熱河畫行	藏田 周忠	三二ノ五、六	同 王家美術館(中村典資平建築事務所設計)	同	同	現代住宅の本	藏田 周忠	同	一四ノ二
東京中央電話局高田分局(逓信省營繕課設計)	同	三二ノ五	岩田屋デパート(岩田屋設計部早良俊夫設計)	同	同	岸田氏の二圖集と隨筆集	明石 信道	同	同
前橋郵便局電話事務室(逓信省營繕課設計)	同	同	藍塚氏アトリエ(藍塚建築事務所設計)	同	同	百貨店・椿二森屋的設計	杉山 雅則	同	一四ノ三
廣島貯金支局(逓信省營繕課設計)	同	同	トレッドソン邸(レームンド建築事務所設計)	同	同	池上に代へて	山脇 巖	同	同
熊本貯金支局(逓信省營繕課設計)	同	同	大西邸(大西幸雄設計)	同	同	S邸雜記	藏田 周忠	同	一四ノ四
日本橋俱樂部(久野節建築事務所設計)	同	同	日輪社を主題として	岸田林太郎	同	ドイツ版「日本住宅」	同	同	同
松本邸(石間桂造設計)	同	同	強羅ホテル(土浦龜城建築事務所設計)	同	三二ノ一〇	ジャパニタイムス版「建築日本」	板垣 廣穂	同	一四ノ五
民家・飯坂の温泉宿	今 和次郎	三二ノ六	山川邸(堀口捨巳設計)	同	同	東京女子大學の新堂	杉山 雅則	同	同
伊豆數齋莊(白井晟一設計)	同	同	東京地下鐵道バス江東營業所(東京地下鐵技術部工務課設計)	同	同	東京女子大學の校舎	藏田 周忠	同	同
聖智寮(高島司郎設計)	同	同				「アントニン・レームンド建築詳細圖譜」	杉山 雅則	同	同
						聖母女學院の建築	板垣 廣穂	同	一四ノ七
						建築傍觀日記	同	同	同





福澤一郎	米倉 壽仁	アトリエ	一五ノ六	中川一政の隨筆世界	古谷 綱武	南畫鑑賞 七ノ一一	小野竹齋	大村 廣陽	美之國 一四ノ九
青山義雄	宮田 重雄	同	同	梅原龍三郎論	志賀 直哉	同	田中昭哉	信樂 新三	同
村井正誠	山口 薫	同	一五ノ七	長與善郎	武者小善	同	山本丘人	今井繁三郎	同
中村節也	能谷登久平	同	同	荒城義三	淺井 滿夫	同	櫻本千花俊	淺井 滿夫	同
野田英夫	寺田 竹雄	同	同	青里見勝藏	岩田正巳	同	岩田正巳	穴山 勝堂	同
梅原龍三郎と安井會太郎	今泉 篤男	同	一五ノ七、	伊藤 慶等	藤森 順三	美術評論 七ノ三	幸松春浦	水田 祝山	同
島崎雅二	村井 正誠	同	一五ノ九	藤森 順三	神崎 憲一	同	川崎水樺	小堀 安雄	同
德岡神泉	三輪 晃勢	同	同	森 白市	美之國 一四ノ一	同	山口華楊	山口 華楊	同
芹澤銈介	木村 和一	同	同	岩田 正巳	同	同	德岡神泉	山口 華楊	同
宮本三郎と小磯良平	尾川 多計	同	同	江川 和彦	同	同	奥田殿三	兒玉希望	同
内田巖	佐藤 敬	同	一五ノ一〇	日本畫家オールスケッチ	同	同	森戸果香	吉田 暢	同
本郷新	山内 壯夫	同	同	奧村 土牛	同	一四ノ二	秋野不矩	川崎 小雄	同
三谷十糸子	笛見 西人	同	同	望月 春江	同	同	橋本昭治	服部 有恒	同
重野重之	加山 四郎	同	一五ノ一二	羽黒 泉	同	同	龍子と蒙古	三輪 鄰	同
向井潤吉	高岡總太郎	同	同	山本 丘人	同	同	里見勝藏論書き	伊藤 慶	同
裕伊之助	福吉 一郎	同	同	加藤 榮三	同	同	物故作家及美術關係者	荒城 季夫	アトリエ 一五ノ一五
曾宮一念	鈴木信太郎	同	一五ノ一四	今井繁三郎	同	同	青柳喜兵衛追悼	丸山 義二	みつゑ 四〇五
酒井亮吉	水谷 清	同	同	大藏 雄夫	同	同	一木隼二郎追悼	小寺 健吉	美 眼 二ノ七
坂口一草	加納 三樂	同	同	野口謙次郎	同	一四ノ三	岩倉具方追悼	小早川篤四郎	美術 一三ノ一
中西利雄	三田 康	同	一五ノ一五	村雲大槩子	同	同	加藤一也追悼	木島櫻谷追悼	圖畫と 二二九
水谷 清	酒井 亮吉	同	同	北野 以悦	同	同	上田萬秋、德美大容堂、吉副頼	年表	同
畦地梅太郎氏の版畫	橋崎 宗重	同	同	今井繁三郎	同	一四ノ四	小林福太郎追悼	略歴及作品	同
松尾醇一郎君の版畫	小野 忠重	同	三ノ一	大藏 雄夫	同	同	小村大雲追悼	林 文雄	日本建 二二ノ二
畑野織藏君の版畫	同	同	三ノ七	今井繁三郎	同	同			美之國 一四ノ四
水船君の版畫	同	同	三ノ八	大藏 雄夫	同	同			
畫壇新人論	同	同	三ノ九	今井繁三郎	同	同			
吉田環也論	柳 亮	同	二〇ノ五	三谷十糸子	同	同			
作麼生魯山人	河井寛次郎	工 藝	九二	松久 休光	同	同			
水虎畫人芋餡	外村吉之介	同	同	加藤 信也	同	同			
水墨の永井久晴氏	式場隆三郎	同	同	小笠原秀實	同	一四ノ六			
入江波光論	神崎 憲一	塔 影	一四ノ一	野口謙次郎	同	同			
小野竹齋論	廣瀬 憲六	同	同	堀井 香坡	同	同			
小杉放庵論	橫川毅一郎	同	同	大藏 雄夫	同	同			
堂本印象論	同	同	同	畠山 錦成	同	同			
金島桂華論	同	同	同	田澤 田軒	同	同			
玉堂の作品其他	同	同	同	今井繁三郎	同	一四ノ七			
本間 久雄	同	同	同	東山 魁夷	同	同			

デュー・エッチ・モーガン追悼

略歴・作品

日本建 二二ノ五  
影 一四ノ三

關如來追悼

塩田力藏、漆田達樹、神崎憲一  
黒田龍心、廣瀬慈六塔 影 一四ノ三  
美之國 一四ノ四

曾福達藏追悼

曾福武、阿部章藏、秋保安治、  
内村達次郎、内田祥三其他建築雜誌 六三五  
同 同

年譜、作品表

同 同  
日本建 二二ノ三

略歴及作品

武田五一追悼  
萩野伸三郎、大熊喜邦、大倉三郎、  
大澤三之助、太田喜二郎其他建築雜誌 六三九  
帝國工藝 一四ノ四、  
五

年譜、作品表

同 同  
建築雜誌 六三九

津端道彦追悼

八木岡春山、今井爽邦

美之國 一四ノ五  
建築雜誌 六三六

長野宇平治追悼

石井柏亭、今井兼次、大澤三之助、  
岡野清豪其他同 同  
日本建 二二ノ四

年譜、作品表

西村五雲追悼

同 同  
日本建 二二ノ四

略歴、作品

石崎光瑤、小野竹喬、下店靜市、  
山口華楊アトリエ 一五ノ一五  
塔 影 一四ノ一二竹内福鳳、川崎克、菊池契月、  
安田叔彦、鍋木清方、西山翠美 眼 二ノ一〇  
美術評論 七ノ四

田哲、加藤英舟、神崎憲一、勝

西山翠

美之國 一四ノ一〇  
美術評論 七ノ四

鍋木清方、安田叔彦、菊池契

月其他

美之國 一四ノ一〇  
美術評論 七ノ四

鍋木清方、竹内福鳳、西山翠

安田叔彦、吉副順三

塔 影 一四ノ一二  
美術評論 七ノ四

制作略年表

年表

橋本獨山追悼

濱田耕作追悼

木村 樓雲

塔 影 一四ノ一〇  
國 華 四八ノ九

福井謙三追悼

尾川 多計

みづ 五 四ノ四

松岡映丘追悼

鍋木清方、川路柳虹、吉村忠夫

アトリエ 一五ノ五  
影 一四ノ四

井上通泰、柳田國男、結城素明

鍋木清方、兒玉希望、漆本一洋

川路柳虹、坂東襄助、漆田達樹

神崎憲一、小村雪岱、杉山寧

長谷川路可

中山貞夫

吉村忠夫

松本一洋、菊池契月、吉田秋光

吉村忠夫、黒田龍心

制作年表

塔 影 一四ノ四

松平四郎追悼

小泉 素彦

森村宜稻追悼

喜多村麥子

山内貞追悼

鈴木民次郎

渡邊公觀追悼

上田萬秋、廣田百登

時 評

美之國 一四ノ九

日本書壇縱横記

橋川毅一郎

統制と自由

佐波 市

人札會に表れた新畫の人

田澤 田軒

美術學生ばかりの座談會

川端 龍子

大博覽會に對する青龍社

同 同

三月の入札會

同 同

松岡映丘氏の長逝と山口

同 同

蓬春君に就て

同 同

松寶山莊所藏品人札會の結果

同 同

美術批評の諸問題を語る  
座談會植村千代  
荒城修  
瀧口定夫  
瀧口亮  
柳 亮軍事繪畫の展覽會出品に  
就て

柴野 中佐

「美術季節」座談會

同 同

美術近情

同 同

復興帝室博物館の開館

同 同

畫壇越境

同 同

戰時美術統制と文展

同 同

戰時下の美術

同 同

一水會の趣旨

同 同

「丹青」の創刊に就て

同 同

美術雜誌報

同 同

展覧よ何處へ行く

同 同

最近の鑑賞界を觀る

同 同

戊辰會を座軸としての畫

同 同

界の動勢展望

同 同

湖落の巴里畫壇と新興日

同 同

本美術

同 同

巴里に於ける日本美術

同 同

新制作派協會の現状

同 同

旺玄社の自慢

同 同

新世紀美術家同盟へ寄せる

同 同

昭和十三年の畫壇

同 同

現代日本畫壇談話

同 同

現代美術展の旗幟

同 同

京都畫壇を語る

同 同

時局と美術

同 同

「現代美術展」へ寄せる

同 同

事變下文展の使命

同 同

日伊文化交流の姿を觀て	有島 義馬	美術	一三ノ三	陶枕山水	小杉 放庵	アトリエ	一五ノ三	枇杷の木の子	鈴木信太郎	教育美術	四ノ六
從軍畫家座談會	金子 義男	同	一三ノ四	藤田嗣治氏を圍む女流作家座談會	同	同	一五ノ五	事變勃發前後に據る	等々力巳吉	同	同
現畫壇鳥瞰圖	清水 登之	美術評論	七ノ一	北支に見る	堤 寒三	同	同	正面	板垣 鷹穂	思想	一八九
臨牀座談	村雲 大樸子	美術評論	一四ノ一	東漸の道	長谷川 春子	同	一五ノ六	百貨店	同	同	一九六
時局と美術	川端 龍子	美之國	一四ノ二	マナー、ピカソ、ゴンチヤロバなど	福原 信三	同	一五ノ六	學校	同	同	一九八
日本畫壇の回顧と現狀	林 達郎	同	同	水戸觀梅など二日の小旅行記	田澤 田軒	同	同	停車場	同	同	同
一九三八年度の洋畫壇を考へる	黒田 勵心	同	同	パリイ島の裸女達	上野 春香	同	一五ノ一〇	戰線點描	中川 紀元	圖畫と工	二二四
時局下に於ける美術界の動向	尾川 多計	同	同	覺書披露	伊藤 康	同	一五ノ一〇	愛陶雜稿	田邊 至	茶わん	八ノ七、八
京都畫壇の近況	江川 和彦	同	同	支那雜景	川島 理一郎	同	一五ノ一二	調和の美	岡部 長景	中央公論	八ノ一二
日本畫界最近の傾向	辻本 和一	同	一四ノ四	岩陰の裸女	中村 善策	同	一五ノ一二	遠征會時代	小穴 隆一	同	五三ノ一
無題錄	川路 柳虹	同	一四ノ七	旅の手帖から	北川 民次	同	同	從軍始末報告記	向井 潤吉	同	同
花鳥畫の上から	田澤 田軒	同	同	十八の頃	東郷 青兒	同	同	河上博士と私	津田 青楓	同	同
京都畫壇日記抄	金井 紫雲	同	同	生ひたちの記	中村 研一	同	一五ノ一五	悲しい敵	中川 一政	同	五三ノ八
今年上半期の關西美術	辻本 和一	同	同	獨立するまで	木村 莊八	同	同	藝武者・下關	向井 潤吉	同	同
夜明け前の洋畫壇	加藤 紫雲	同	同	黃河上流を渡る	長谷川 春子	改	一五ノ一七	中華門外・敗殘兵に出會はす	同	同	同
彫刻界の上半期	須山 亮一	同	同	諏訪の森	川合 玉堂	同	同	天壇・景山	川島 理一郎	同	同
美術界に贈る	大藏 雄夫	同	同	瀟湘にて	安井 曾太郎	同	同	京の四季	西村 五雲	同	五三ノ九
事變下日本の美術の秋を語る(海外放送A・K)佛語	藤森 成吉	同	一四ノ一一	畫房點彩	川端 龍子	同	同	白雲莊放談	山本 發次郎	同	五三ノ一二
十三年度の美術界願望	川路 柳虹	同	一四ノ一二	從軍拾ひ書	向井 潤吉	同	同	もの、あはれ断片	松岡 映丘	塔	一四ノ一
梅原龍三郎氏と事變下の美術を語る	神崎 憲一	同	同	山西江南七首	小杉 放庵	同	同	古典と自分	川端 龍子	同	同
	吉崎 達朗	同	同	河南省最前線	長谷川 春子	同	二〇ノ二	古典と現代	中村 岳陵	同	同
	林 達朗	同	同	李守信と蒙軍幹部印象	同	同	二〇ノ四	河童の話その他	小川 芋羹	同	同
	佐波 武久	同	同	筆前筆後	中川 一政	同	二〇ノ五	朝鮮遊記	山村 耕花	同	同
	鈴木 大藏	同	同	臆想錄	藤田 嗣治	同	二〇ノ六	北支戰線より	小早川 秋聲	同	同
	渡邊 素舟	同	同	京洛初夏(繪と文)	笠本 印象	同	二〇ノ八	風景を語る	鈴木 清方	同	一四ノ二
	佐波 市	同	同	シャボタン博士の癖	東郷 青兒	同	同	工房閑談	飛田 周山	同	同
	みづゑ 三九七	同	同	ヴィンヤン傳弄筆	鈴木 信太郎	同	同	支那へ支那へ	藤井 浩新	同	同
		同	同	墨東畫帖	繪木村 莊八	同	同	大阪より	青木 大乗	同	同
		同	同	死人のお祭り(メキシコ物語)	文武田 麟太郎	同	二〇ノ一〇	江南の戰線より	田中 榮山	同	同
		同	同	自畫像	北川 民次	同	二〇ノ一一	椿花	吉田 堯文	同	同
		同	同	戰場のたべもの	小絲源 太郎	同	二〇ノ一二	續を飼つた話その他	西村 五雲	同	一四ノ三
		同	同	漢口六題	伊原 宇三郎	同	同	雪中珍客	相馬 御風	同	同
		同	同	寺田寅彦博士の畫	藤田 嗣治	同	同	大場鎮にて	小松 均	同	一四ノ四
		同	同	北支を觀る	津田 青楓	同	同	蒙古行を前に	川端 龍子	同	一四ノ五
		同	同		鶴田 吾郎	同	同	北支の言葉	川島 理一郎	同	同

花卉雜稿	辻 永	塔 影	一四ノ五	ナボリの思出	梅原龍三郎	美術	一三ノ二	慶州追憶	平塚 運一	美之國	一四ノ五
浪を描く	堅山 南風	同	同	羅馬の思ひ出	田邊 至	同	同	印度旅行	園部 香峰	同	同
制作雜感	田中龍哉州	同	同	アツシジの想出	渡邊 浩三	同	同	夜の上海	小松 均	同	同
酒と野球	牧野 虎雄	同	一四ノ六	アレツツオの一日	伊原宇三郎	同	同	關西風物點描	須田國太郎	同	一四ノ六
中支戰線雜感	藤島 武二	同	一四ノ七	バトバの記憶	山崎 省三	同	同	畫家と病氣	小林 和作等	同	同
蒙疆雜記	川端 龍子	同	同	ヴェネツィヤ滞在記	別府貫一郎	同	同	汚れざるタレント	式場隆三郎	同	同
高千穂峰	青木 六乘	同	同	ミラノにて	中村 研一	同	同	佐渡四趣	北川 民次	同	一四ノ七
時局と花鳥畫	荒木 十畝	同	一四ノ八	イタリイ紀行	有馬 生馬	同	一三ノ三	軍鶏のみを描いて来た馬	平塚 運一	同	一四ノ八
能登の旅	川合 玉堂	同	同	自分の考へて居る事	池部 鈞	同	同	鹿者のくり言	山下 繁雄	同	同
北京雜記	川島環一郎	同	同	伊太利亞日記抄	森田龜之助	同	一三ノ三、	パール・ホワイトの死	鍋木 清方	同	一四ノ九
水を描く	中村 岳陵	同	同	歐洲大戰當時	齋藤 素巖	同	一三ノ八	夏のよまい言	倉田 白羊	同	同
畫室の感想	伊東 深水	同	同	繪になるところ文になる	長谷川春子	同	同	本能	坂本繁二郎	同	一四ノ一〇
制作雜記	長野 草風	同	一四ノ一〇	戦地便り	笹岡 了一	同	同	温泉宿の泥棒	津田 青楓	同	同
近頃の感想	奥村 土牛	同	同	上海の宿	中村 研一	同	同	流水を聴ふて	西村 五雲	同	同
美術と戦争	藤井 浩祐	同	同	從軍畫家私義	向井 潤吉	同	同	花菖蒲と銀杏返し	鍋木 清方	同	同
赤日銘谷	中川 紀元	同	同	徐州↓開封	栗原 信	同	同	裸形への郷愁	太田 敬三	同	一六ノ一五
小杉放庵邸を訪ねて	小野 竹喬	同	同	蘆溝橋の支那守備兵	中澤 弘光	同	同	エスバリオンの想出	小山 敬三	同	同
兩器漫語	高橋 桂二	同	一四ノ一一	南開大學スケッチ	川島環一郎	同	同	樺太の土人	田口 省吾	同	同
支那へ行く氣持	伊東 深水	同	同	徳王會見	中村 直人	同	同	フエノロサ先生	平田 禿木	同	同
畫室餘語	田中龍哉州	同	同	八ヶ月の從軍	鈴木榮二郎	同	同	カイゼルのお孫さん	高岡徳太郎	同	一六ノ一七
制作雜記	高木保之助	同	同	有無談	中村 岳陵	同	同	枕を語る	荒木 十畝	同	同
文展前後	森 白帝	同	同	嵯峨、友松	池田 聰雨	同	同	山日記	小早川秋聲	同	一六ノ一九
本年の回顧	川端 龍子	同	一四ノ一二	京都の一シーズン	向井 潤吉	同	同	温突	足立源一郎	同	一六ノ二一
小室翠雲邸を訪ふ	高橋 桂二	同	同	大同三日記	山口 薫	同	同	神戸風景	小松 益喜	同	四〇二
描いて見たい日本畫	中川 紀元	同	同	土の中	北川 民次	同	同	邯鄲の古城	長谷川春子	同	四〇三
サイパン島紀行	國光 興	同	一四ノ一三	ヘログリフィア・メヒカナ	三輪 鄰	同	一四ノ二	巴里通信	猪熊弦一郎	同	四〇六
類白	金原 省吾	同	一四ノ一〇	上海南京—新戰場とところ	同	同	同	華道とオブジェ(對談)	勅使河原蒼風	同	一五ノ一〇
日洋畫觀	里見 勝藏	同	二ノ一	日本變	鍋木 清方	同	同	滿洲ならでは(漫畫報告)	福澤 一郎	同	二〇ノ一二
今の氣持	小林 三季	同	二ノ四	我君看	渡邊 義知	同	同	日本民族・生理と感覺	新漫畫派集團	同	改 造 二〇ノ一五
別家女房	寺島 紫明	同	二ノ八	ドイツと伊太利の思ひ出	東山 魁夷	同	同	希望氏作演曲大橋公	朝倉 文夫	同	文藝春秋 一六ノ一五
軍隊生活・バリ・從軍	向井 潤吉	同	二ノ九	「どん底」の監督とカイ	黒田重太郎	同	同	京都美術俱樂部創立三十週年祝賀會記	川崎 克	同	塔 影 一四ノ二
南京攻撃の畫稿	瀨野 覺藏	同	同	感胃雜稿	貴慶館執事	同	同	戯曲 ヴァン・ゴッホ	式場隆三郎	同	美 術 一三ノ一〇
從軍八ヶ月	鈴木榮二郎	同	同	關東風物點描	同	同	同	伊東深水氏裝置の「黒」	原田 信造	同	美之國 一四ノ七
奈良放言	山崎 豐	同	二ノ一〇								
田無莊夜話	堅山 南風	同	二ノ一二								
決死隊突撃を觀るの記	小早川篤四郎	同	一三ノ一								
伊太利の中の希臘	伊藤 康	同	一三ノ二	仔猫とペンキ	中村 善策	同	一四ノ五				

## 雑

明治大正以降美術

鐵齋翁の書翰	庄司 淺水	アトリエ	一五ノ六
麥僊回想	里見 勝藏	同	一五ノ九
概説 院展二科、青龍社	田澤 田軒	同	一五〇、一二
曉齋と末期浮世繪	吉野 建雄	浮世繪界	三ノ三、一七
甲府に於ける芳年の書業	楢崎 宗重	同	九、一一
林忠正未亡人懷古談	玉林 晴明	同	三ノ九
故人麥僊を語る	三成 重敬	同	三ノ一二
陶工鈴木彌三吉の事	熊谷 宣夫	畫 説	一二
ワグネル先生	高草 藍山	茶わん	八ノ二
わが國の文化とイタリヤの協力	太田 能壽	同	八ノ四
明治洋畫の黎明期	武藤 智雄	中央公論	五三ノ五
新聞美術記者今昔新	彰城 貞徳	同	五三ノ八
日本畫會四十年回顧	田澤 田軒	塔 影	一四〇、一
美術家舊宅の想ひ出	添田 達嶺	同	一二
「回想の麥僊」覚え	同	同	一四ノ二
岡倉天心の東洋主義	神崎 憲一	同	一四ノ五
勝沼學校の洋風建築	清見 陸郎	同	一四ノ九
二長町市村座の建築に就いて	小瀧 文七	南畫鑑賞	七ノ五、
是真點描	關根要太郎	日本建築士	六、一一
故土田麥僊論	相見 香雨	同	二二ノ四
楠公銅像製作の由來	安田 寂彦	日本美術	二二ノ六
廣業筆溪四題(圖版解説)	海原龍三郎	美術 報告	五〇
從軍畫家としての寺崎廣業	鍋木清方	同	一三ノ七
川上冬崖と洋風畫	山口蓬春	美術研究	七三
富岡鐵齋の旅行記に就いて	須賀 利雄	同	七五
	小高根太郎	同	同
	隈元謙次郎	同	七九
	小高根太郎	同	八二

外國現代美術

日露戦争の頃	木村 莊八	美之國	一四ノ一	スウラの素描	ビエル・マ アトリエ	一五ノ二
一九三〇年協會時代	小島善太郎	同	一四ノ二	ブラツサイを語る	大島博光譯	ビエル・マ 一五ノ二
楓風畫伯の「戀猫の句」	德美大容堂	同	一四ノ三	エルンストの博物學	金丸 重嶺	同
楓風畫伯の「室ぎみ評」	同	同	一四ノ四	マチス小論	荒城 季夫	同
岸田劉生忌十周展に際して	椿 貞雄	同	一四ノ六	的はづれ	アシリ・マ 同	同
楓風畫伯と京名勝	德美大容堂	同	一四ノ七	畫家の手記	大森啓助譯	同
楓風畫伯の支那ばなし	同	同	一四ノ八	マチス師のこと	アンリ・マ 同	同
戊辰會史	原田 信造	同	一四ノ九、 一〇、一二	マチスのパレット	内山義郎譯	同
二科二十五年の或る回想	鍋井 克之	同	一四ノ一〇	わが木版畫	青山 義雄	同
川村清雄と橋本雅邦の握手	金子 薰園	文藝春秋	一六ノ一三	魔術者ボンナール	カンデイン 同	同
抱一の墓	結城 素明	同	一六ノ一七	植村鷹千代譯	ビエル・マ 同	同
土田麦僊の藝術	荒城 季夫	みづゑ	四ノ一		大島博光譯	同
二科二十五年思ひ出し記	鍋井 克之	同	四〇三、 四〇六		ゲガン	同
戦争美術雜考	大川 亘	同	四〇四			同

繪  
畫

アメリカの洋畫家	木村 莊八	アトリエ	一五ノ一	アメリカの壁畫	同	一四ノ六
ピカソの作品(ゲルニカ)に就て	クリスチャン・セルボス	同	同	自由の手(詩)	同	三九七
アメリカ美術―野田英夫氏に聽く	●	同	一五ノ二	説明的繪畫の典型―ベター・ブルームの象徴的作品―	同	同
民衆畫家グワタル・ベボサダ	北川 民次	同	同	ピカソの光畫と或學術寫眞	同	三九八
アンチ・アカデミズムの美術研究所	アンドレ・ロート	同	同	サルウアドル・ガリの形態學	同	四〇〇
シュザンヌ・ヴァラドン	藤田 嗣治	同	一五ノ六	ナルシスの變貌	同	同
リーバアマン抹殺その他	仲田定之助	同	一五ノ七	「博物誌」序文	同	四〇三
超現實主義國際展	レイモン・コニア	同	同	フランスの新しい壁畫	同	同
具象繪畫	カンデインスキ	同	同	マルセル・デュシヤン	同	四〇四
繪畫	大島博光譯	同	一五ノ九	アブリケ	同	四〇五
ル・コルビュジエ	大島博光譯	同	同	彫刻	同	同
大河内信敬	同	同	同			

女 ル	●マイヨール・ルノワ	木下	了子	アトリエ	一五ノ九
モデルに向ふ	マイヨール	ジュデイド・ クラデル	同	同	同
ブルーデルは如何に創造 したか	ブルーデルの言葉	植村廣千代譯 ルネ・ユイゲエ	同	同	一五ノ一
ブルーデルの書翰	ブルーデルの彫刻と その藝術觀	大島博光譯 岡見 富雄	同	同	同
ヘンリー・ムアの彫刻と	その藝術觀	清水多嘉示 瀧口 修造	同	同	一五ノ一
バ・バア・ヘツプウアー スの彫刻	同	同	同	同	一五ノ一
原始ネグロ藝術の現代へ の關心	同	江川 和彦	同	美之國	一四ノ九

工  
藝

[illegible]建  
筑

洪牙利の工藝	齋藤 信治	ユースニ	七ノ八
瑞典の工藝	同	同	同
和蘭の一瞥	同	同	同
白耳義の印象	同	同	同
新しい「木の時代」	同	同	七ノ八、九
英國の工藝	齋藤 信治	同	七ノ九
佛蘭西に於ける工藝展の觀記	同	同	七ノ一、二
フランス第五回住宅展に於ける新材料別のモデルルーム	同	新建築	一四ノ六
新興ドイツに於ける手工業統制、藝術統制を語る	帝國工藝	一二ノ二	
滿鐵が巴里にて募集せる瀋洲國宜揚ボスター	同	一二ノ四	

新バウハウスと空間の相關性	モホリ・ナ	アトリエ	一五ノ九
巴里博覽會に就て	藏田周忠譯		
歐米の木造建築近況	池部 宗薫	建築雜誌	六三七
近年相次で行はれた歐米	十代田三郎	同	六三八
中歐銀行の大建築工事	尾崎 久助	同	六四〇
國都新京建設の概觀	建築學會新	同	六四二
ソヴィエト聯邦建築家大會	京支部	建築世界	三二一〇一
巴里博に於けるコルビュジエの新作品	同	同	同
ドイツの民家	藏田 周忠	同	三三ノ二
デュセルドルフの展示構成	同	同	六、一一
新興バウハウスと空間の關係性	モホリ・ナ	同	三三ノ二
第九號館	ギ―	同	三三ノ三
ロツクフェラーセンター	ワルター・グロピウス	同	同
生活建築を目指して	小池 新二	同	三三ノ四
MARS 展報告	河村 五朗	同	同
上海郊外の民家	白鳥義三郎	同	三三ノ五
新興イタリー建築	小池 新二	同	三三ノ六
ゼンデルケルの實驗住宅	同	同	同
ニューヨーク博の住宅建築センター	同	同	同

## 建築の機械化

エムパイア博覽會	建築世界	三二〇七
滿洲民家點々	同	三二〇八
北滿の民家	同	同
ロイド ライトの新作作品	同	同
アムステルダムの更生施設	同	三二〇九
第十九回ミラノのフイエラ	同	三二一〇
國際情報	國際建築	一一四〇一
奉天監獄の寫眞に添へて	同	一一四〇二
カアル・モーザア (一八六〇—一九三六)	同	同
博覽會建築	同	同
牧野 正己	同	同
藏田 周忠	同	同
中島 俊夫	同	同
モホリ・ナ	同	同
ギロ	同	同
グロピウス	同	一四〇三

ル・コルビュジェの巴里 博「住宅の國際展」計畫 と「新時代館」	松村正恆譚	同	一四ノ四
巴里博のアメリカ館	同	同	同
イタリー現代建築	Bruno Finato	同	同
MARS グループ展覽會	ル・コルビュ ジェ	同	一四ノ五
ヘルセンタ―	フランク・ケ サフオード	同	一四ノ六
裝飾としての音響學的型 態	松村正恆譚	同	同
プロチダの家	ベルナルド・ ルドフスキ―	同	同
マロルカの民家	民家研究會編	同	一四ノ七
ヒットラー・ユーゲントの 合宿道場	藏田 周忠	同	一四ノ九
ハンガリーの民家	同	同	一四ノ一
一九三八年グラスゴー博 覽會	J.M. Richards 松村正恆譚	同	同
巴里博のサン・コパン館	石村 篤譚	同	同
ハンガリーivas 地方の 民家	藏田 周忠	同	一四ノ一
英國MERS展覽會	工藝ニ ユース	同	七ノ六
建築統制とドイツの現狀	柳 亮	同	一四ノ一



新しきバウハウスと空間 関係	エル・モホ リ・ナギー	新建築	一四ノ二
生きた建築へ	ワルター・ グロピウス	同	一四ノ三、 四
ソヴィエト建築特輯	リチャード・ ノイトラ	同	一四ノ四
一九三七—三八年のアメ リカ建築意匠の動向に對 する影響を中心として	同	同	一四ノ五
新しき工場建築への指針	R.A. Cordingley	同	一四ノ六
グラスゴー博建築	同	同	一四ノ九
アルバート・カーン紹介	同	同	一四ノ一〇
一九三七年後期歐米新建 築特輯	日本建 士	同	二二ノ二
一九三八年前期歐米新建 築特輯	同	同	二三ノ三
黒崎幹男等	同	同	同

## 其他外國美術

ゴヤ素描	植村鷹千代	アトリエ	一五ノ五
中世藝術とヒューマニズ ム	柳 亮	同	一五ノ六
インカ帝國とその文化	島井 龍藏	同	一五ノ九
ル・ネン兄弟	荒城 季夫	同	一五ノ一〇
ゾラに宛たセザンヌの手 紙	大森 啓助	同	一五ノ一四
エークスに残るセザンヌ の面影	アドリアン・ シヤビユイ	同	同
ルノアルの彫刻	今泉 篤男	同	一五ノ一五
ジオットウ	團 伊能	同	同
イペリア彫刻を見る	須田國太郎	同	同
ウイスラーとツオルン	西田 武雄	同	同
ローゼンベルク的美術革 新論	江川 和彦	同	一五ノ一七
ポール・ゴーガン小論	荒城 季夫	同	同
美術品の説明	ヴェルフリ ン	同	同
ルネサンス建築の理論に 就て	守屋謙二譯	同	同
日本美術及び印象派繪畫 とテオドル・デユレ	建築世界	同	三二ノ一、 六、一〇、 一二
歐洲繪畫に於ける日本影 響の端緒	小林太市郎	同	四八ノ六、 七八ノ一〇

## 現代美術關係文獻

近代フランス繪畫に影響 した日本の要素	柳 亮	南畫鑑賞	七ノ一、五
テイントレット回顧展	有島 生馬	美術	一三ノ二
シエナの美術	新 規矩男	同	同
シエナ派と東洋畫	G・スト ラ	同	同
ゴッホの人物と作品の精神	式場隆三郎	同	一三ノ一〇
ゴッホの最後の手紙	同	同	同
病理解説	同	同	同
ゴッホの最後の手紙	同	同	同
ホ文獻解説	同	同	同
ゴッホ回顧展	同	同	同
ゴッホ雜記	同	同	同
ブルデールの言葉抄	成田 重郎	美之國	一四ノ八
ブルデールについて	加藤 顯清	同	同
上代の文化潮流に見る裸 體造型現象	太田 三郎	みづゑ	三九五
ヒラノニマス・ボツシュ	野田 英夫	同	三九六
フランドルの都市と畫家	荒城 季夫	同	同
反セザンヌ論	森口 多里	同	三九六
シヤルダン	佐波 市	同	三九七
聖フランシスの美しき生 涯	荒城 季夫	同	三九七
レンブラントの筆技	伊原宇三郎	同	同
グレコ訪問	伊藤 康	同	三九八
ピーターブリュッゲル論	荒城 季夫	同	同
近代都市生活の畫家—コ ンスタンタン・ゲイス	同	同	三九九
ゴッホの宮廷壁掛下繪	伊藤 康	同	同
マチヤス・グリユ—ネワ ラルメツサン	佐波 市	同	同
フランシスコ・ゴッパ評傳	小野 忠重	同	同
イタリア日記	荒城 季夫	同	四〇〇
スーラーの素描	伊藤 康	同	四〇一
モディリアニ	佐波 市	同	四〇二
オギユスト・ルノール	大森 啓助	同	同
ゴッギヤンの足跡を探ね て	荒城 季夫	同	同
クラナツハと獨逸的なも の	柳 亮	同	同
セザンヌの誤謬	佐波 市	同	四〇三
森口 多里	同	同	同

## 展覽會記事及批評

### 綜合展覽會

京都市美術展	神崎 憲一	塔	影一四ノ六
第三回京都市美術展	古山 順一	同	同
京都市展評	吉副 頼三	美之國	一四ノ六
現代美術展	鳥居 一正	塔	影一四ノ七
現代美術第一回展	中山 貞夫	美	眼二ノ七
第一回現代美術展を終 へて	同	同	同
國畫會展	宮本 三郎	アトリエ	一五ノ六
國展彫刻批評	加藤 顯清	同	同
國展の繪畫	久保 守	美	眼二ノ五
國展評	福島繁太郎	美	術一三ノ五
國展・春陽會展	寺田 竹雄	美之國	一四ノ五
彫刻各展評(主線美術、 國展、日本木彫會)	大藏 雄夫	同	同
國展と春陽會を觀て	内山 義郎	みづゑ	三九九
國展評	富永 惣一	東	朝四・七一八
國展と春陽會	一氏 義良	東	日四・一一
春陽會と國展	富澤有爲男	都	四・四一七
國展評	荒城 季夫	讀	四・四一五
國展評	木下 義謙	報	知四・二二
春陽會と國畫會	鈴木新太郎	新	愛知四・二二
自由美術展	同	同	同

自由美術第二回展	瀧口 修造	アトリエ 一五ノ九	二科展寸評	富永 惣一	美之國 一四ノ一〇	院展を見る	藤森 順三	美術評論 七ノ三
自由美術展を見る	林 達郎	美之國 一四ノ七	二科會展評	野田 英夫	同	院展評	橋川毅一郎	みつゑ 四〇四
第二回自由美術展入選作評	長谷川三郎	同	第三部會、院展、二科	鈴木 武久	同	○		
自由美術展評	四宮 潤一	同	二科會繪畫評	森口 多里	みつゑ 四ノ四	院展評	木下 李太郎	東 朝 九・七、八
第二回自由美術展評	内山 義郎	みつゑ 四ノ一	二科事變室雜感	三輪 鄰	同	院展評	相良 德三	同 朝 九・〇一三
主線美術展	植村 騰千代	アトリエ 一五ノ五	○	兒島 喜久雄	東 朝 九・五、六	美術院青龍社展評	水谷 清	都 朝 九・〇一三
主線美術協會展評	高間 惣七	美 術 一三ノ五	二科展洋畫評	相良 德三	都 朝 九・六一八	青龍社と院展	森口 多里	東 朝 九・一一
彫刻各展評(主線美術、國展、日本木彫會)	大藏 雄夫	美之國 一四ノ五	二科畫評	福澤 一郎	中 商 九・七一九	院展を觀る	木村 莊八	東 日 九・三一七
春台美術展	内山 義郎	アトリエ 一五ノ三	二科を觀る	森口 多里	東 日 九・九一一	三部會、院展、二科の彫塑	藤森 成吉	福岡日々 九・七一二三
白日會、光風會、春台展を見る	耳野 卯三郎	美 眼 二ノ四	(二科展)彫刻評	福澤 一郎	東 朝 九・一〇	日本美術院同人展	渡邊 義知	同 九・元、三〇
春台展寸感	三村 英一	美之國 一五ノ一	二科展評	春山 武松	大 朝 九・三、二四	第五回院展同人展	三輪 鄰	塔 影 一四ノ五
新構造社展(十三年十二月)	園部 香峰	美之國 一五ノ一	二科展評	渡邊 義知	福岡日々 九・元、三〇	白日會展	内山 義郎	アトリエ 一五ノ三
新構造社展一般出品作家評	倉本 七郎	美之國 一五ノ一	三科會、院展、二科の彫塑	橋川毅一郎	每 夕 九・元一〇・二	文部省展	鈴木 仁一	浮世繪界 三ノ一二
新興美術協會展(十三年十二月)	寺田 竹雄	美之國 一五ノ一	二科展を觀る	橋川毅一郎	同	文展の版畫	橋崎 宗重	漆と工藝 四四九
新協展評	植村 騰千代	アトリエ 一五ノ五	院展のをかしつつある誤謬	今泉 篤男	同	文展評(各新聞批評轉載)	西澤 笛吹	塔 影 一四ノ一一
主線美術・太平洋畫會	奥瀬 英三	美 術 一三ノ四	新秋彫刻雜感(二科、院展、三部會)	田中 倉琅子	畫 設 二二	文展の人形批判と希望	木村 莊八	美 眼 二ノ一一
太平洋	江川 和彦	みつゑ 三九八	美術院と青龍社の繪を語る	三 成 重敬	同	文展の彫塑	今泉 篤男	同
朝鮮美術展	酒井 亮吉	アトリエ 一五ノ九	院展評	金井 紫雲	塔 影 一四ノ一〇	文展を觀る	大島 隆一	同
東海美術展	杉浦 冷石	塔 影 一四ノ六	院展評	川路 毅一郎等	同	文展第四部を觀る	長興 善郎	美 術 一三ノ一一
東海美術廿七回展	春日部たすく	みつゑ 四〇一	院展評(各新聞批評轉載)	山井 耕花	美 術 一三ノ九	文展洋畫評	兒島 喜久雄	同
童林社展	佐波 市	アトリエ 一五ノ一四	院展—自分の作品に就て	堅山 南風等	同	文展評	田中 錦一	美之國 一四ノ一一
二科會展	今泉 篤男	同	院展評	望月 春江	美之國 一四ノ一〇		廣瀬 六	同
新秋彫刻雜感(二科、院展、三部會)	中川 紀元	美 眼 二ノ一〇		黒木 本紀元	同		吉路 柳虹	同
二科人選畫短評	栗原 信	美 術 一三ノ九		神崎 蕨心	同		金井 紫雲	同
二科展—自分の出品作に就て	坂本 繁二郎	同		河野 桐谷	同		遠田 信造	同
	藤田 嗣治等	同		川路 柳虹	同		向井 達郎	同
		同		竹の臺の秋	同		難波 龍起	同
		同		第三部會、院展、二科	同			同

日本畫展覽會

小川 鶴郎	美之國 一四ノ一一	新實會第三回展	神崎 憲一	塔 影 一四ノ八
明田 孝次	同 同	新興南畫院一回展	大森 富平	同 同
大田 雄一	同 同	新興美術院展	多田 信一	アトリエ 一五ノ六
渡邊 素舟	同 同	日本畫展一東	豐田 豐	アトリエ 一五ノ六
荒城 季夫	同 同	新興美術院展評	江川 和彦	美之國 一四ノ五
江川 和彦	同 同	第一回新興美術院展評	荒城 季夫	アトリエ 一五ノ九
今井 繁三郎等	同 同	新興美術人協會展	鈴木 武久	美之國 一四ノ七
內山 義郎	同 同	新興美術人協會展を觀る	佐波 市	美之國 一四ノ七
四宮 潤一	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ四
菊池 武月	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ四
藤島 朝雲	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ四
板谷 波山	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ四
青山 義雄	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ四
森山 白市	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ四
藤森 順三	美術評論 七ノ四	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ四
荒城 季夫	みつゑ 四ノ五	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ四

森口 多里	中 商 一〇・三・二七	如月會展	神崎 憲一	同 同	青甲社第十回展	神崎 憲一	同 同
碓 伊之助	都 朝 一〇・三・二五	如月會展	吉副 賴三	美之國 一四ノ四	青甲社素描展	金井 紫雲	同 同
兒島 喜久雄	東 朝 一〇・三・二五	九阜會展	多田 信一	アトリエ 一五ノ七	青甲社第一回展	三輪 憲一	同 同
松林 桂月	讀 賣 一〇・二・二五	九阜會第四回展	鳥居 一正	同 同	青龍社展(春季)	神崎 憲一	同 同
日名子 實三	報 知 一〇・二・二五	同	神崎 憲一	同 同	日本畫展一東	多田 信一	アトリエ 一五ノ六
中川 一政	東 日 一〇・二・二五	京都美術俱樂部創立卅周年紀念展	三品 照子	同 同	青龍社春季展	神崎 憲一	同 同
長興 善郎	福 日 一〇・二・二五	久保田金僊從軍畫展	豐田 豐	同 同	春の青龍社展評	淺野 利眞	美之國 一四ノ五
文展各都評	中 商 一〇・二・二五	栗田九品展	江川 和彦	同 同	青龍社展(秋季)	村雲 六橋子	美之國 一四ノ五
文展各都評	木村 莊八	兒玉畫塾第二回展	三輪 憲一	同 同	十年を迎へた青龍社美術院と青龍社の給を語る	田中倉垣子	アトリエ 一五ノ一四
文展洋畫評	木村 莊八	同	三輪 憲一	同 同	美術院と青龍社の給を語る	三輪 憲一	同 同
文展洋畫評	山下 新太郎	小松均氏從軍畫展	神崎 憲一	同 同	青龍社展評	金井 紫雲	同 同
文展の工藝作品	須田 國太郎	坂口一草個展	神崎 憲一	同 同	青龍社展評	金井 紫雲	同 同
文展評	三輪 鄭	早苗會小品畫展	神崎 憲一	同 同	青龍社展評	金井 紫雲	同 同
陸軍從軍畫展	同 同	細々會第四回展	神崎 憲一	同 同	青龍社展評(各新聞批評轉載)	金井 紫雲	同 同
陸軍從軍畫展を觀て	同 同	縹木社第十三回展	神崎 憲一	同 同	青龍社展(各新聞批評轉載)	金井 紫雲	同 同
六潮會展	同 同	七絃會展	神崎 憲一	同 同	青龍社展(各新聞批評轉載)	金井 紫雲	同 同
六潮會展	同 同	春虹會第四回展	神崎 憲一	同 同	青龍社展(各新聞批評轉載)	金井 紫雲	同 同
六潮會第七回展	同 同	春陽會日本畫展(十二年十二月)	神崎 憲一	同 同	青龍社展(各新聞批評轉載)	金井 紫雲	同 同
	同 同	尙美展	神崎 憲一	同 同	青龍社展(各新聞批評轉載)	金井 紫雲	同 同
	同 同	煥土社展・尙美展評	神崎 憲一	同 同	青龍社展(各新聞批評轉載)	金井 紫雲	同 同

文展鑑査後感	同 同	煥土社展・尙美展評	多田 信一	アトリエ 一五ノ二	新美術人協會展	荒城 季夫	アトリエ 一五ノ九
文展の印象	同 同	煥土社第四回展	三輪 鄭	塔 影 一四ノ九	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
文展を觀る―第二部批評	同 同	第十四回煥土社展評	鈴木 武久	美之國 一四ノ九	新美術人協會展	佐波 市	美之國 一四ノ七
	同 同	大村廣陽氏個展	神崎 憲一	塔 影 一四ノ六	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	國墨光堂新作畫展	同 同	塔 影 一四ノ八	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	川端龍子氏大阪展	同 同	塔 影 一四ノ九	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	軌線美術第二回展	今井繁三郎	美之國 一四ノ二	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	如月會展	神崎 憲一	塔 影 一四ノ八	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	如月會第五回展	神崎 憲一	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	如月會展	吉副 賴三	美之國 一四ノ四	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	九阜會展	多田 信一	アトリエ 一五ノ七	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	九阜會第四回展	鳥居 一正	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	京都美術俱樂部創立卅周年紀念展	神崎 憲一	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	久保田金僊從軍畫展	三品 照子	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	栗田九品展	豐田 豐	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	兒玉畫塾第二回展	江川 和彦	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	同	三輪 憲一	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	小松均氏從軍畫展	神崎 憲一	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	坂口一草個展	神崎 憲一	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	早苗會小品畫展	神崎 憲一	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	細々會第四回展	神崎 憲一	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	縹木社第十三回展	神崎 憲一	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	七絃會展	神崎 憲一	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	春虹會第四回展	神崎 憲一	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	春陽會日本畫展(十二年十二月)	神崎 憲一	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	尙美展	神崎 憲一	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七
	同 同	煥土社展・尙美展評	神崎 憲一	同 同	新美術人協會展	島居 一正	美之國 一四ノ七









# 現代美術關係單行圖書

## 總說

書名	編著者名	發行所
圖倉天心全集 上下(普及版)	圖倉一雄編	聖文閣
圖倉東洋の理想	淺野 晃譯	創元社
圖倉理想の再建	圖倉一雄編	河出書房
財團法人帝室博物館 昭和十二年度 復興費會計業務報告	同 會 編	同 會
商業美術講座 第五卷 常識篇	廣田 增治	アトリエ社
東京朝日新聞創刊五十周年記念戦争美術展覽會目錄	朝日新聞社編	同 社
戦争美術展覽會圖錄 乾坤	朝日新聞社	便利堂
大日本畫家名鑑 昭和十三年版	木田 寛策	大日本繪畫講習會代理部
大禮記念京都美術館年報 昭和十二年度	同 館 編	同館(京都)
帝國議會議事堂建築報告書	營繕管財局	同 局
同 附圖	同 局 編	同 局
帝國博物館年報 昭和十二年度	同 館 編	同 館
帝國美術院展覽會圖錄(第八回)	同 院 編	同 院
日本美術院展覽會圖錄(第二五回)	齊藤隆三編	大塚巧藝社
日本美術年鑑 昭和十三年版	美術研究所	同 所
美術の秋(週刊朝日臨時増刊)	朝日新聞社	朝日新聞社
文展號(週刊朝日臨時増刊)	朝日新聞社	朝日新聞社
文部省美術展覽會原色畫帖(第二回)	美術工藝會編	同 會
文部省美術展覽會圖錄(第二回)	文 部 省 編	巧藝社
第一部 繪畫(日本畫)	同 會 編	同 會
六潮一海(第六回、第七回展圖錄)	六 潮 會 編	同 會

## 日本畫

一筆畫法	神山 白士	神書房
御瀝端	鋼木 清方	雙雅房
河童百圖(小川芋鐵畫)	島田 勇吉編	俳畫堂

現代美術關係文獻

## 洋畫

原色 現代日本畫大全集 別一—四	アトリエ社編	同 社
現代日本畫壇人物論	芳川 赴	同 社
現代日本畫展覽會圖錄	美術評論社編	同 社
現代俳畫集	前橋 芭水	同 社
秋庭畫譜	草上文庫編	同 文庫
十歌作品集	後藤 秋庭	同 文庫
如洋畫集 第三卷	荒木 十歌	同 文庫
翠光花鳥 八	中山 忠直編	同 人
菅原白龍	福田 翠光	同 人
精神 國民百人一首	添田 達嶺	同 人
興揚 國民百人一首	橋本 關雪	同 人
橋風逸品集 五—一〇	竹内 橋風	同 人
泰明會作品集	結城 泰明	同 人
大日本魚類畫集 第一輯六一—一二	大野 泰風	同 人
多聞洞展圖錄	多聞 洞編	同 洞
土田孝悌回顯號「美術」一三〇七	岩佐 新編	美術發行所
富岡鐵齋	アトリエ社編	同 社
堂本印象作品集 櫻雲亭所藏	高橋・龍造	同 人
日本南畫實習帖	岸浪百舞居	アトリエ社
第一卷 蔬菜篇	第三卷 花卉篇	同 社
第四卷 果實篇	第五卷 鳥類篇	同 社
第七卷 獸類玩具篇	第九卷 山水篇	同 社
第一卷 樹石篇	第二卷 山水篇	同 社
東山魁夷澤歐スケッチ展圖錄	東山 魁夷	同 社
美術大講座 一一五	福山福太郎	同 社
夜江人作畫展觀集	大河内夜江畫	同 社
石川寅治畫集 第三輯	美術工藝會編	同 會
茨城洋畫展覽會圖錄 第一回	新開 社編	同 社
故岩倉具方從軍畫集	岩倉 綾子	同 會

## 建築

梅原龍三郎小品版畫集 第二	梅原龍三郎畫	加藤 潤二
梅原龍三郎新作號「美術」一三〇六	岩佐 新編	美術發行所
エツチング技法	武藏 完一編	同氏(大分)
女十題 第三—第七	竹久 夢二	加藤 潤二
外國作家水彩畫特別陳列圖錄 (日本水彩畫會二十五週年紀念)	日本水彩畫會編	同 會
川西治男遺作畫集	佐田 勝編	同 人
藝苑 第二輯 構圖の研究	川路 柳虹	同 社
原色版 現代洋畫コレクション 第四—一三卷	アトリエ社編	同 社
現代大家クレパス畫選集	佐武 林藏編	教育美術研究會
兒島善三郎畫集 一九三八年作品	美術工藝會	美術工藝會
新作洋畫選 (アトリエ臨時増刊)	上卷、下卷	アトリエ社
素描石版畫集	佐藤 章	東京漫畫研究所
曾宮一念作品集 三	美術工藝會編	美術工藝會
辻永作品集 第一輯	辻 永	美術工藝會
手摺 近江八景と琵琶湖風景	德力富吉郎	美術工藝會
寺内萬治郎畫集 第四輯	寺内萬治郎	美術工藝會
獨立展集(第八回)	朝日新聞社編	同 社
中村研一作品集 第二輯	中村 研一	美術工藝會
松平四郎遺作集	小泉 素彦	同書刊行會
龍駿介畫集	龍 駿介	同 人
獨習 木彫教室	潮田 晴哉	東學社
技法	同 社	同 社
Antonio Raymond: Architectural Details	アントニオ・レイモンド	國際建築協會
1937年後期歐米新建築紹介 號(日本建築士第二二〇二)	神坂三郎	日本建築士會
1938年前期歐米新建築紹介 號(日本建築士第二二〇三)	藏田周忠	日本建築士會
1938年前期歐米新建築紹介 號(日本建築士第二二〇三)	藏田周忠	日本建築士會
1938年前期歐米新建築紹介 號(日本建築士第二二〇三)	藏田周忠	日本建築士會

教育

紀元二千六百年記念日本萬國博覽會 建築寫真類案 第一〇期 第四輯 新興住宅の室内構成 (二) 第五輯 寢室の構成 第六輯 住宅外装集 第七輯 和風天井集 第八輯 趣味の敷寄屋住宅 第九輯 敷寄屋趣味の料亭 (二) 第一〇輯 茶室建築 (四) 第一輯 陶製モザイクと彫刻 建築年鑑 昭和十三年版 現代住宅設計百圖及臺所詳細圖三十種 最新建築計畫 新住宅讀本 支那事變 建築經濟關係法令集 ニ關スル 新興住宅圖譜 東京府橋梁設計圖集 第二輯 日本建築 放送會館建築	日本萬國博覽會 洪洋社 近代家具裝飾展覽會 第一六輯 新設計室内裝飾展集 第一七輯 趣味の和家具展集 第一八輯 歐米家具作品集 第一九輯 洋家具逸品會展觀集 第二〇輯 工精會家具展集 第二輯 歐米家具作品集 第四 桂友同機會 (第二四回) 染織秋帶 圖案集 約染會展觀作品集 (第一八回) 試作工藝品圖錄 第四 室内工藝建築彫刻作品集 信濃堂に就いて 手藝と染色圖案 第二輯 長紅會圖錄 (第一七回) 染織美術展覽會目錄 (第二四回) 染織美術展覽會圖錄 (第二六回) 染織美術標準圖案 展覽會作品圖錄 (第一四回) 染織寶典 木材工藝 (園部・三浦實用 林業叢書二) 竹の利用と其加工 丹心畫帖 朝鮮現在の民藝 工藝第八二號 陶磁器業界總觀 昭和一三年 研究 陶磁界 栃木縣工業試驗場編 中島染色辭典 美の國と民藝 (限定私版本) 標準調和色カード 木材工藝叢書 第五輯 食事室家具 第二八輯 家具の金物	竹内 四期編 九物美術部 (京都) 略畫と圖案 柳選 第一八輯 六人の村圖錄 第一八 六人の村圖錄 第一九 新しい想畫の指導 京都市立繪畫專門學校 (第二八回) 京都市立美術工藝學校 (第四五回) 卒業製作品圖錄 手工教授學 (現代教育學大系第二 國定クレヨン畫指導の實際 準據 手工教育原義 手工教育方法學と實踐 小學校に於ける手藝教材竝に その指導法の研究 小學校に 廢材利用の手工 第五 圖畫教授法原論 發達心理 一年の圖畫教育 に基く 海外工藝事情ニ關スル報告書 第一、二 近代藝術 西洋美術文庫 第一二卷 ゴッホ 第一四卷 ルノアル 第一七卷 マチス 第一八卷 ビカソ 吉見 誠 山本金三郎 西臺 正美 河野 薫 柳選 會編 中安 栗堂編 野々口克己編 中西 良男 教育美術 振興會 伊藤信一郎 上田 二郎 伊藤信一郎 三苦 正雄 齊田 コト 山下 俊三 小林 萬吾 小林 節藏 弘學社 明治圖書 株式會社 成美堂 明治圖書 株式會社 東洋圖書 株式會社 春陽堂 啓文社 明治圖書 株式會社 中文館 株學社	京百景圖繪展覽會 近代家具裝飾展覽會 第一六輯 新設計室内裝飾展集 第一七輯 趣味の和家具展集 第一八輯 歐米家具作品集 第一九輯 洋家具逸品會展觀集 第二〇輯 工精會家具展集 第二輯 歐米家具作品集 第四 桂友同機會 (第二四回) 染織秋帶 圖案集 約染會展觀作品集 (第一八回) 試作工藝品圖錄 第四 室内工藝建築彫刻作品集 信濃堂に就いて 手藝と染色圖案 第二輯 長紅會圖錄 (第一七回) 染織美術展覽會目錄 (第二四回) 染織美術展覽會圖錄 (第二六回) 染織美術標準圖案 展覽會作品圖錄 (第一四回) 染織寶典 木材工藝 (園部・三浦實用 林業叢書二) 竹の利用と其加工 丹心畫帖 朝鮮現在の民藝 工藝第八二號 陶磁器業界總觀 昭和一三年 研究 陶磁界 栃木縣工業試驗場編 中島染色辭典 美の國と民藝 (限定私版本) 標準調和色カード 木材工藝叢書 第五輯 食事室家具 第二八輯 家具の金物	竹内 四期編 九物美術部 (京都) 略畫と圖案 柳選 第一八輯 六人の村圖錄 第一八 六人の村圖錄 第一九 新しい想畫の指導 京都市立繪畫專門學校 (第二八回) 京都市立美術工藝學校 (第四五回) 卒業製作品圖錄 手工教授學 (現代教育學大系第二 國定クレヨン畫指導の實際 準據 手工教育原義 手工教育方法學と實踐 小學校に於ける手藝教材竝に その指導法の研究 小學校に 廢材利用の手工 第五 圖畫教授法原論 發達心理 一年の圖畫教育 に基く 海外工藝事情ニ關スル報告書 第一、二 近代藝術 西洋美術文庫 第一二卷 ゴッホ 第一四卷 ルノアル 第一七卷 マチス 第一八卷 ビカソ 吉見 誠 山本金三郎 西臺 正美 河野 薫 柳選 會編 中安 栗堂編 野々口克己編 中西 良男 教育美術 振興會 伊藤信一郎 上田 二郎 伊藤信一郎 三苦 正雄 齊田 コト 山下 俊三 小林 萬吾 小林 節藏 弘學社 明治圖書 株式會社 成美堂 明治圖書 株式會社 東洋圖書 株式會社 春陽堂 啓文社 明治圖書 株式會社 中文館 株學社	京百景圖繪展覽會 近代家具裝飾展覽會 第一六輯 新設計室内裝飾展集 第一七輯 趣味の和家具展集 第一八輯 歐米家具作品集 第一九輯 洋家具逸品會展觀集 第二〇輯 工精會家具展集 第二輯 歐米家具作品集 第四 桂友同機會 (第二四回) 染織秋帶 圖案集 約染會展觀作品集 (第一八回) 試作工藝品圖錄 第四 室内工藝建築彫刻作品集 信濃堂に就いて 手藝と染色圖案 第二輯 長紅會圖錄 (第一七回) 染織美術展覽會目錄 (第二四回) 染織美術展覽會圖錄 (第二六回) 染織美術標準圖案 展覽會作品圖錄 (第一四回) 染織寶典 木材工藝 (園部・三浦實用 林業叢書二) 竹の利用と其加工 丹心畫帖 朝鮮現在の民藝 工藝第八二號 陶磁器業界總觀 昭和一三年 研究 陶磁界 栃木縣工業試驗場編 中島染色辭典 美の國と民藝 (限定私版本) 標準調和色カード 木材工藝叢書 第五輯 食事室家具 第二八輯 家具の金物	竹内 四期編 九物美術部 (京都) 略畫と圖案 柳選 第一八輯 六人の村圖錄 第一八 六人の村圖錄 第一九 新しい想畫の指導 京都市立繪畫專門學校 (第二八回) 京都市立美術工藝學校 (第四五回) 卒業製作品圖錄 手工教授學 (現代教育學大系第二 國定クレヨン畫指導の實際 準據 手工教育原義 手工教育方法學と實踐 小學校に於ける手藝教材竝に その指導法の研究 小學校に 廢材利用の手工 第五 圖畫教授法原論 發達心理 一年の圖畫教育 に基く 海外工藝事情ニ關スル報告書 第一、二 近代藝術 西洋美術文庫 第一二卷 ゴッホ 第一四卷 ルノアル 第一七卷 マチス 第一八卷 ビカソ 吉見 誠 山本金三郎 西臺 正美 河野 薫 柳選 會編 中安 栗堂編 野々口克己編 中西 良男 教育美術 振興會 伊藤信一郎 上田 二郎 伊藤信一郎 三苦 正雄 齊田 コト 山下 俊三 小林 萬吾 小林 節藏 弘學社 明治圖書 株式會社 成美堂 明治圖書 株式會社 東洋圖書 株式會社 春陽堂 啓文社 明治圖書 株式會社 中文館 株學社	京百景圖繪展覽會 近代家具裝飾展覽會 第一六輯 新設計室内裝飾展集 第一七輯 趣味の和家具展集 第一八輯 歐米家具作品集 第一九輯 洋家具逸品會展觀集 第二〇輯 工精會家具展集 第二輯 歐米家具作品集 第四 桂友同機會 (第二四回) 染織秋帶 圖案集 約染會展觀作品集 (第一八回) 試作工藝品圖錄 第四 室内工藝建築彫刻作品集 信濃堂に就いて 手藝と染色圖案 第二輯 長紅會圖錄 (第一七回) 染織美術展覽會目錄 (第二四回) 染織美術展覽會圖錄 (第二六回) 染織美術標準圖案 展覽會作品圖錄 (第一四回) 染織寶典 木材工藝 (園部・三浦實用 林業叢書二) 竹の利用と其加工 丹心畫帖 朝鮮現在の民藝 工藝第八二號 陶磁器業界總觀 昭和一三年 研究 陶磁界 栃木縣工業試驗場編 中島染色辭典 美の國と民藝 (限定私版本) 標準調和色カード 木材工藝叢書 第五輯 食事室家具 第二八輯 家具の金物	竹内 四期編 九物美術部 (京都) 略畫と圖案 柳選 第一八輯 六人の村圖錄 第一八 六人の村圖錄 第一九 新しい想畫の指導 京都市立繪畫專門學校 (第二八回) 京都市立美術工藝學校 (第四五回) 卒業製作品圖錄 手工教授學 (現代教育學大系第二 國定クレヨン畫指導の實際 準據 手工教育原義 手工教育方法學と實踐 小學校に於ける手藝教材竝に その指導法の研究 小學校に 廢材利用の手工 第五 圖畫教授法原論 發達心理 一年の圖畫教育 に基く 海外工藝事情ニ關スル報告書 第一、二 近代藝術 西洋美術文庫 第一二卷 ゴッホ 第一四卷 ルノアル 第一七卷 マチス 第一八卷 ビカソ 吉見 誠 山本金三郎 西臺 正美 河野 薫 柳選 會編 中安 栗堂編 野々口克己編 中西 良男 教育美術 振興會 伊藤信一郎 上田 二郎 伊藤信一郎 三苦 正雄 齊田 コト 山下 俊三 小林 萬吾 小林 節藏 弘學社 明治圖書 株式會社 成美堂 明治圖書 株式會社 東洋圖書 株式會社 春陽堂 啓文社 明治圖書 株式會社 中文館 株學社	京百景圖繪展覽會 近代家具裝飾展覽會 第一六輯 新設計室内裝飾展集 第一七輯 趣味の和家具展集 第一八輯 歐米家具作品集 第一九輯 洋家具逸品會展觀集 第二〇輯 工精會家具展集 第二輯 歐米家具作品集 第四 桂友同機會 (第二四回) 染織秋帶 圖案集 約染會展觀作品集 (第一八回) 試作工藝品圖錄 第四 室内工藝建築彫刻作品集 信濃堂に就いて 手藝と染色圖案 第二輯 長紅會圖錄 (第一七回) 染織美術展覽會目錄 (第二四回) 染織美術展覽會圖錄 (第二六回) 染織美術標準圖案 展覽會作品圖錄 (第一四回) 染織寶典 木材工藝 (園部・三浦實用 林業叢書二) 竹の利用と其加工 丹心畫帖 朝鮮現在の民藝 工藝第八二號 陶磁器業界總觀 昭和一三年 研究 陶磁界 栃木縣工業試驗場編 中島染色辭典 美の國と民藝 (限定私版本) 標準調和色カード 木材工藝叢書 第五輯 食事室家具 第二八輯 家具の金物	竹内 四期編 九物美術部 (京都) 略畫と圖案 柳選 第一八輯 六人の村圖錄 第一八 六人の村圖錄 第一九 新しい想畫の指導 京都市立繪畫專門學校 (第二八回) 京都市立美術工藝學校 (第四五回) 卒業製作品圖錄 手工教授學 (現代教育學大系第二 國定クレヨン畫指導の實際 準據 手工教育原義 手工教育方法學と實踐 小學校に於ける手藝教材竝に その指導法の研究 小學校に 廢材利用の手工 第五 圖畫教授法原論 發達心理 一年の圖畫教育 に基く 海外工藝事情ニ關スル報告書 第一、二 近代藝術 西洋美術文庫 第一二卷 ゴッホ 第一四卷 ルノアル 第一七卷 マチス 第一八卷 ビカソ 吉見 誠 山本金三郎 西臺 正美 河野 薫 柳選 會編 中安 栗堂編 野々口克己編 中西 良男 教育美術 振興會 伊藤信一郎 上田 二郎 伊藤信一郎 三苦 正雄 齊田 コト 山下 俊三 小林 萬吾 小林 節藏 弘學社 
---	--	--	--	--	--	--	--	--	--	---

二三五

# 古美術關係文獻(定期刊行物所載)

## 總説・綜録

古美術の鑑定	瀧 精一	説	一七
古美術品鑑識の光學的硏究	中根 勝	學校美術	一二ノ六
書畫鑑定講座「時代」鑑別法	狩野 探道	繪畫教習	六ノ一
書畫鑑定講座「紙」鑑別法	同	同	六ノ二
書畫鑑定講座「墨」鑑別法	同	同	六ノ三
書畫鑑定講座「筆」鑑別法	同	同	六ノ四
書畫鑑定講座「印」鑑別法	同	同	六ノ五
書畫鑑定講座「装」鑑別法	同	同	六ノ六
書畫鑑定講座「作」鑑別法	同	同	六ノ七
書畫鑑定講座「鑑」鑑別法	同	同	六ノ八
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ九
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ一〇
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ一一
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ一二
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ一三
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ一四
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ一五
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ一六
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ一七
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ一八
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ一九
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ二〇
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ二一
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ二二
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ二三
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ二四
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ二五
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ二六
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ二七
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ二八
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ二九
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ三〇
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ三一
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ三二
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ三三
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ三四
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ三五
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ三六
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ三七
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ三八
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ三九
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ四〇
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ四一
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ四二
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ四三
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ四四
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ四五
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ四六
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ四七
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ四八
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ四九
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ五〇
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ五一
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ五二
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ五三
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ五四
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ五五
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ五六
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ五七
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ五八
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ五九
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ六〇
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ六一
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ六二
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ六三
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ六四
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ六五
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ六六
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ六七
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ六八
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ六九
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ七〇
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ七一
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ七二
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ七三
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ七四
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ七五
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ七六
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ七七
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ七八
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ七九
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ八〇
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ八一
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ八二
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ八三
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ八四
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ八五
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ八六
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ八七
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ八八
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ八九
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ九〇
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ九一
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ九二
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ九三
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ九四
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ九五
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ九六
書畫鑑定講座「考」鑑別法	同	同	六ノ九七
書畫鑑定講座「論」鑑別法	同	同	六ノ九八
書畫鑑定講座「評」鑑別法	同	同	六ノ九九
書畫鑑定講座「集」鑑別法	同	同	六ノ一〇〇

曼荼羅と印度的なものとの關係	上野 照夫	實	二三
美術行脚と法身說法	叔山半三郎	好	古
慈氏菩薩大日如來不二論	同	同	一ノ八
不動尊非常時の構へ	同	同	九ノ二
鐘馗の話	新谷 設々	史	九ノ二
東洋藝術と湯布	島田 墨仙	繪	六ノ五
東洋藝術と猿	金井 紫雲	塔	一四ノ八
藝術上の馬	同	同	三ノ三
狸の作品	同	同	三ノ五
ライオン・唐獅子・狛犬考	渡邊 素舟	塔	一四ノ一
鬼の戸籍調べ	相原 知佑	茶	八四
東洋の虎	渡邊 素舟	塔	一四ノ一
日本藝術に於ける特殊性の一、二に就て	重森 三玲	林	四二
日本美術の或る特色に就て	武者小路 篤	アトリエ	一五ノ三
日本美術の明暗性に就て	肥後 和男	畫	一三
モンデアリズム	柳 亮	アトリエ	二五ノ二
日本美術史考	同	同	二五ノ二
日本全美術年表	原田 信造	繪	六ノ一
全日本美術年表	同	同	六ノ二
飛鳥時代の藝術	東伏見邦英	史	二ノ三
奈良朝文化と書籍	内藤 湖南	藝	三ノ七
天平の美術	金原 省吾	同	三ノ五
特色に就て	高橋順次郎	同	三ノ九
天平時代に於ける日印文化の交渉	大河内定雄	圖	三ノ三
近畿古美術巡禮	手 工	工	三ノ三
美術の京都	原 杉太郎	三田評論	四七

奈良の美術行脚	中村 亮平	學校美術	三ノ二七
上州長樂寺行	熊谷 宜夫	畫	二〇
武藏野見學	田中 信行	同	二一
長母寺詣	香取 秀真	同	二二
信州に遊ぶ	田口 信行	同	二三
大山詣	中村 亮平	茶	九五
平泉	筑波 藤磨	藝	三六
正倉院の價值	菅原 安男	畫	二〇
或る日の法隆寺	小倉 豊文	史	一〇ノ一
不動院の沿革と國寶に就て	同	同	一〇ノ一
龍角寺緣起(公刊)	同	同	一四ノ三
武將と美術	正木 直彦	塔	一四ノ三
武人の作品	竹内 梅松	董	三六六
挾芳園殘香錄	緒方 梅歌	同	三六六
戦争美術展を觀る	相原 知佑	茶	八九
法然上人の御影	望月 信成	美術研究	七九
今様輦聯錄	白 山 生	圖	二二二
可無流知(十・十一)	東伏見邦英	實	二二、二三
(慶州とくろく)	同	同	二二、二三
海印寺考	上野 直昭	畫	一三
支那雜話	後藤朝太郎	歷史地理	七二ノ二
北支美術遺跡を觀る	一氏 義良	みつゑ	三九九
熱河布達拉の印象	藏田 周忠	アトリエ	一五ノ一〇
繪畫鑑賞講座	鎌倉芳太郎	茶	八九ノ九
古畫鑑賞の知識	溝口順次郎	美	一三ノ一
東洋畫構圖法の基礎概念	下店 靜市	藝	二
繪畫の支那的形式と「三・三」	土方定一	南	七ノ二
日本の形式(一・三)	同	同	七ノ二
一樂居閑話―畫と詩と禪―	今關 天彰	同	七ノ三
畫家の畫師難	米澤 嘉園	同	同
古畫法解説	齋藤黄葉郎	同	七ノ一
鈎皴擦染法	同	同	七ノ一
水墨、色、形	清水多嘉示	同	七ノ一
水墨畫と筆意	松谷 壺	同	同

水墨畫と濃繪	熊谷 宣夫	南畫鑑賞	七ノ一	日本畫と刷毛描	瀧 拙庵	國 華	五七三	不動明王の藝術的意味	植田 壽藏	寶 雲	六ノ一
構成法としての破墨の法	伊藤 卓治	同	同	日本水墨畫小觀	谷 信一	南畫鑑賞	七ノ一	「特に青蓮院青不動像に就いて」	同	同	同
破墨濃墨論の輪廓	鈴木 進	同	同	關山の風物と本邦山水畫の様式	下店 靜一	美之國	一五七	瀧海筆不動明王二童子圖解	國 華	五七六	
南畫とコスモロジー上、下	山際 靖	同	七ノ一三	法隆寺に見る山石圖	小杉 一雄	考古學雜誌	二八ノ四	不動明王二童子像 解説	美術研究	七三	
南畫夜話 八ノ一一	河野 桐谷	同	七ノ二二三	寧樂朝繪畫に就いての一考察 一、二	中井宗太郎	藝術日本	三四、三六	不動明王像 東京侯爵井上三郎氏藏	日本國全集	八四	
南北分宗の再吟味 一—三	八幡關太郎	同	七ノ四六、二	正倉院御物中の繪畫に就きて	溝口順次郎	同	三七	不動明王及三童子像 和歌山五坊寂靜院藏	同	八〇	
南畫と構圖	古川 北華	藝 苑	二	天平瓦の戲畫	田澤 金吾	畫 說	一五	愛染明王像 橫濱原善一郎氏藏	同	八一	
山水觀に於ける南宗北宗上・下	佐藤 良	南畫鑑賞	七ノ五、六	平安鎌倉時代の風景畫上、中	藤懸 靜也	國 華	五四、五七	護法善神圖繪扉 奈良興福寺藏	同	八二	
枯山水に就て	森 蘊	繪畫教習	六ノ二	東山時代畫の構圖	金原 省吾	藝 苑	二	羅漢圖 大阪藤田德次郎氏藏	同	八〇	
畫題辭典	同	同	六ノ一七	桃山時代障壁畫說補記	田中 喜作	美術研究	七八	十六羅漢像 京都清涼寺藏	同	八二	
畫題解説 一—四	同	同	六ノ一七	當代洋風畫の金地繪に就て	同	繪畫教習	六ノ一	金剛峯寺藏狩場丹生明神像 解説	美術研究	八一	
戰爭の繪	赤堀又次郎	畫畫誌	三六二	袖珍日本繪畫史(德川時代)	同	畫 說	二三	新羅明神像 滋賀園城寺藏	日本國全集	八〇	
動物畫雜感	金井 紫雲	塔 影	一四ノ三	法隆寺金堂壁畫(名品小解)	大賀 一郎	國 華	五三、五五	笠置曼荼羅圖 橫濱原富太郎氏藏	同	八三	
「八方睨み」の一考察	西田 正秋	畫 說	一八	當麻曼荼羅原本の研究 上、下	大岡 實	畫 說	二四	醍醐清瀧權現像(名品小解)	畫 說	二二	
爬蟲文様から山岳圖へ	小杉 一雄	南畫鑑賞	七ノ二	傳鳳凰堂屏斷片に就て	豐岡 益人	美術研究	七五	日蓮聖人註畫識の研究	鯨尾 順敬	立正史學	一〇
繪畫に表れたる河童	川端 正光	好 古	二ノ一六	富貴寺壁畫	同	國 華	五七二	日本畫の肖像に就て	野田 九浦	塔 影	一四ノ九
雁の畫題	同	藝術資料	二ノ一一	彌勒來迎圖解 東京美術學校藏	同	美術研究	七五	肖像畫の素描に就て	正木 直彦	同	同
山鳥の繪	同	同	二ノ一二	大日如來像 和歌山金剛峯寺藏	同	日本國全集	八二	畫人の肖像畫談	田中 一松	同	同
畫論の虎	同	同	三ノ一	大日如來像(解説)	同	美術研究	八四	御佛聖德太子御像の風俗に就て	相見 香雨	同	同
牛の名畫	同	同	三ノ二	最近美術界の怪名畫	同	國 華	五七二	仁和寺藏聖德太子像 解説	江馬 務	以可留我	八〇
猫の畫題、風物	同	同	三ノ六	金剛界大日如來繪像に就て	同	美術研究	八四	聖德太子及高僧像 兵庫一乘寺藏	同	日本國全集	八〇
鼠の繪	同	同	三ノ七	紅玻璃阿彌陀如來像 京都知恩院藏	同	日本國全集	八三	鳥羽上皇御影 滿願寺藏	同	國 華	二二
狐の繪畫	同	同	三ノ八	智吉祥釋迦像 神奈川圓覺寺藏	同	同	八四	鑑真和尚像解	同	美術研究	七九
千支に因みて虎の繪を語る	三成 重敏	畫 說	一三	大隨求像 大阪觀心寺藏	同	同	八二	大德寺藏大燈國師像 解説	同	日本國全集	八四
所謂「唐の原」に就て	熊谷 宣夫	考古學雜誌	二八ノ五	千手觀音像 東京男爵團伊能氏藏	同	國 華	五六七	一休和尚像 東京岡崎正也氏藏	同	國 華	一ノ三
畫笠新講 菖蒲旗	西澤 笛韻	繪畫教習	六ノ一	地藏菩薩圖解 福井田中政一氏藏	同	日本國全集	八三	岡崎家藏の一休宗純像に就いて	谷 信一	國 華	一ノ三
畫笠新講 人體	同	同	六ノ二	地藏菩薩像 東京男爵團伊能氏藏	同	國 華	五七五	墨齋贊一休和尚像解	同	國 華	五七七
裝畫表具の話 一—六	岩田 秀雄	美 育	四ノ一六	普賢十羅刹女圖解	同	國 華	五七五	一休和尚の像に就て	裏辻 憲道	畫 說	一九
「餘技」を読む	樂之軒 生	畫 說	一八	東京根津嘉一郎氏藏	同	國 華	五七五	覺慧筆法燈國師像 解説	同	美術研究	七五
日本畫の特質とその發展の方向	川路 柳虹	藝 苑	一	來迎寺十二天中の六天圖解	同	國 華	五七五	澤庵宗彭自畫像解	同	國 華	五七二
日本畫に於ける感覺問題	長谷川 如是	同	同	滋賀來迎寺藏	同	國 華	五七五	金澤男爵本多政樹氏藏	同	國 華	五七二
日本畫の描線	金原 省吾	同	同	吉祥天女圖	井澤 蘇水	好 古	一ノ六	武田道逸軒筆武田信虎像解	同	國 華	五七三
	同	同	同	焰魔天像 滋賀園城寺藏	同	日本國全集	八一	山梨大泉寺藏	同	國 華	五七三

藤堂高虎像 三重西蓮寺藏	日本全集	八二	華嚴緣起詞書(校刊)	八百谷孝保	畫說	一六	雲谷等顏筆山水圖解	國華	五七〇
前田利家の畫像に就いて —重要美術品の疑點—	日本全集	八二	當麻曼茶羅繪卷 神奈川光明寺藏	八百谷孝保	畫說	一六	東京藤堂新一郎氏藏	國華	五七〇
狩野探幽像 東京狩野守久氏藏	日本全集	八三	兒獨音緣起繪詞に就て	內藤 堯實	好古	八二	雲谷等顏筆春山夏山圖屏風解	同	五七五
狩野探幽の肖像	日本全集	八三	天狗草紙考案	梅津 次郎	美術研究	七四	金地院藏等益筆鳥圖 解說	美術研究	八二
南山澄照法善圖に就て	國華	五七一	フリーア畫廊地緣緣起	矢代 幸雄	同	七六	清水寺の長谷川久藏	美術研究	九〇七
白樂天像解 兵庫武藤金太氏藏	同	五七二	神功皇后緣起畫卷解	虹衣生	清國	五七五	花鳥圖 京都大仙院藏	日本全集	八一
大和繪の概	繪畫教育	六〇四	漫筆戰爭と繪卷その他	矢代 幸雄	國華	五七五	花鳥圖 京都大仙院藏	同	八一
法華經 兵庫武藤金太氏藏	日本全集	八一	後三年合戰繪詞	虹衣生	清國	二	大覺寺藏牡丹圖 解說	美術研究	八一
一宗蓮臺法華經普賢勸發品解	國華	五六八	東京侯爵池田仲博氏藏	矢代 幸雄	畫說	二二二四	久遠寺本堂の襖繪に就て	清國	八一
横濱原富太郎氏藏	國華	五六八	蒙古襲來繪詞の性格一三	萩野三七彦	畫說	二二二四	長壽堂の佛像と宗仙寺模繪	古美術	二〇一
佐竹侯爵家舊藏三	美術研究	七七	京都榮本印象氏藏	矢代 幸雄	美術研究	八二	聚樂屏風と桃山百雙	清國	五七三
十六歌仙繪卷雜考	畫說	二〇	病草紙の新發見その他	矢代 幸雄	畫說	二四	奈良飯田眞作氏藏	同	五七三
「歌仙歌合」について	清國	三	病草紙(名品小解)	梅津 次郎	國華	一五一	秋草鶴圖屏風解	日本全集	八三
歌仙像の一例	日本全集	八〇	慶忍公慶恩公	梅津 次郎	國華	一五一	秋草鶴圖 東京伯爵伊達興宗氏藏	同	八三
三十六歌仙切 小町	同	八〇	新名所繪歌合の繪卷	渡邊 一	美術研究	七七	子女遊樂圖屏風に就いて	浮世繪界	三〇八
岐阜渡邊甚吉氏藏	同	八〇	豐明繪新紙解	渡邊 一	美術研究	七七	舞妓圖屏風に就て	畫說	二〇
三十六歌仙切 忠岑	同	八〇	東京侯爵前田利爲氏藏	渡邊 一	美術研究	七七	師崎附近の模繪	美術研究	七九
東京原安三郎氏藏	同	八〇	如拙文清(東洋美術總目 錄中ノ一項目)	渡邊 一	美術研究	七七	靈洞院藏友松筆琴棋書圖 解說	同	七九
繪卷物寺院緣起の成立	同	八〇	周文(東洋美術總目 錄中ノ一項目)	渡邊 一	美術研究	七七	二天筆蓋圖 解說	同	七九
一、二	同	八〇	雲舟と日本の自覺	西堀 一三	古美術	二〇三	宮本武藏のことなど	同	七九
信貴山緣起の内容	同	八〇	雲舟入明難事	田中倉根子	美術研究	八一	蘆雁圖 東京侯爵細川護立氏藏	日本全集	八四
信貴山緣起小解	同	八〇	雲舟等楊梅拾遺	谷 信一	美術研究	八一	近衛家藏松花堂の畫狀	同	八四
酒井家本道成寺緣起考	同	八〇	東京美術學校藏山水圖 解說	谷 信一	美術研究	八一	其六、尾張中納言のこと	同	八四
眞如堂緣起畫卷解	同	八〇	水月觀音圖解	谷 信一	美術研究	八一	松花堂の畫狀と茶味	同	八四
弘法大師繪傳 東京池田成彬氏藏	日本全集	八三	山水圖 東京岡崎正也氏藏	谷 信一	日本全集	八二	松花堂詩歌小屏風	同	八四
池田家藏大師繪傳と	美術研究	七八	雲舟圖 東京岡崎正也氏藏	谷 信一	日本全集	八二	當藏寺中坊書院二	同	八四
高祖大師密緣緣起	同	七八	雲舟圖 東京岡崎正也氏藏	谷 信一	日本全集	八二	直庵筆應機張付畫解	同	八四
地藏院本高野大師行狀圖畫	同	八三	雲舟圖 東京岡崎正也氏藏	谷 信一	日本全集	八二	狩野派の概	同	八四
東寺本弘法大師繪傳の成立	同	八三	雲舟圖 東京岡崎正也氏藏	谷 信一	日本全集	八二	狩野休伯長信墓所記	同	八四
國寶一遍上人繪詞傳解	同	八三	雲舟圖 東京岡崎正也氏藏	谷 信一	日本全集	八二	傳狩野元信筆花鳥圖解	同	八四
一遍聖繪	同	八三	雲舟圖 東京岡崎正也氏藏	谷 信一	日本全集	八二	大德寺と狩野松榮	同	八四
北野天神緣起斷簡	同	八三	雲舟圖 東京岡崎正也氏藏	谷 信一	日本全集	八二	狩野元秀筆織田信長像解	同	八四
新潟新津恆吉氏藏	同	八三	雲舟圖 東京岡崎正也氏藏	谷 信一	日本全集	八二	探幽と寅藏	同	八四
酒淵八幡社の白描緣起	同	八三	雲舟圖 東京岡崎正也氏藏	谷 信一	日本全集	八二		同	八四
善財童子參詣圖殘缺解	同	八三	雲舟圖 東京岡崎正也氏藏	谷 信一	日本全集	八二		同	八四
東京男爵岡田能氏藏	同	八三	雲舟圖 東京岡崎正也氏藏	谷 信一	日本全集	八二		同	八四
華嚴緣起繪卷(名品小解)	同	八三	雲舟圖 東京岡崎正也氏藏	谷 信一	日本全集	八二		同	八四
華嚴緣起繪詞と	同	八三	雲舟圖 東京岡崎正也氏藏	谷 信一	日本全集	八二		同	八四
この錯簡に就て	同	八三	雲舟圖 東京岡崎正也氏藏	谷 信一	日本全集	八二		同	八四



狩野探幽筆橋公談見圖解	國	五六九	彭百川藏記	窪田	五雲	書畫骨	三六三	池大雅筆岳陽圖解	國	五七一
東京侯爵前田利爲氏藏	同	五六七	彭百川に就いて	竹内	梅松	同	同	大阪太田佐七氏藏	同	同
東京山中清兵衛氏藏	同	五六八	大雅堂に就いて	河野	桐谷	同	同	洞庭赤壁圖 東京小西幸寛氏藏	日本	八四
久岡守景筆四季耕作圖解	同	五六八	大雅の藝格	河野	通勢	南畫鑑賞	七一九	洞庭諸勝圖卷	田中	喜作
金澤商品陳列所藏	同	四一〇	大雅	此木	喬	同	同	池大雅參考文獻	鈴木	進
守景の九谷若畫に就いて	青木	爲吉	池大雅評傳(諸言)	梅原龍三郎	同	同	同	(大正昭和年間)要目	宮田	戊子
勝田竹翁と其遺作	添田	達嶺	池大雅評傳(一一五)	人見	少華	同	同	蕪村の「俳諧もの、	同	直己
狩野昌運と其遺作	同	塔	大雅堂遺事瑣錄	相見	香雨	同	同	蕪村の「俳諧もの、	同	直己
琳派の八重櫻の描法	高木保之助	繪畫教習	大雅堂餘話	同	香雨	同	同	草畫」について	同	直己
依屋宗達	古川	修	大雅堂斷章	森	鉄三	同	同	蕪村山水圖屏風(名品小解)	同	直己
宗達筆松島屏風	矢代	幸雄	大雅の日本らしき	河野	桐谷	同	同	奉與蕪村書	同	直己
御物宗達保元平治合戦扇面	同	書	大雅堂遺墨の再檢討	森	繁夫	同	同	蕪村筆秋山孤鹿圖解	同	直己
ちらし屏風(名品小解)	同	書	書家大雅堂師承考(上、下)	黒田重太郎	同	同	同	兵庫村岡金一氏藏	同	直己
蓮花水禽圖 東京馬越恭一氏藏	佐藤	良	大雅のユーモア	山本	展一	同	同	與謝蕪村筆山村會友、清溪放棹圖解	同	直己
光琳畫を論ず 一一三	菅沼	貞三	池大雅の没み入	兒島善三郎	南畫鑑賞	七〇八	同	米山人のことゝも	同	直己
光琳筆藤原信盛像に就いて	荒川	散步	れた米點畫法	三村清三郎	同	同	同	廣瀬臺山	同	直己
街で拾つた光琳と抱一の話	東	美	大雅とその時代	加藤	一雄	同	同	廣瀬臺山の遺墨に就いて	同	直己
乾山筆花籠圖 解説	國	寶	大雅堂私見	棟方	志功	同	同	廣瀬臺山筆梅花書屋圖解	同	直己
下馬將軍の舍弟抱一	市島	春城	大雅堂遺墨の再檢討	西村	南岳	同	同	青森佐々木嘉太郎氏藏	同	直己
抱一について	同	畫	(上、下)	小笹	喜三	同	同	竹田の印章と作品	同	直己
抱一の手紙(校刊)	同	同	書家大雅堂師承考(上、下)	小川	雪夫	同	同	竹田増々錄	同	直己
相説宗雪と宗仙	相見	香雨	大雅と我孫子文長	山本	展一	同	同	「山人饒舌」譚義八一九	同	直己
關山應舉	石田	誠齋	池大雅の壽宴に關	高橋	竹送	同	同	田能村竹田筆水西草堂圖解	同	直己
松花堂の畫風に新味を出し	山本	辰一	する松雨亭の記文	渡邊	刀水	同	同	福岡石橋徳次郎氏藏	同	直己
た圓山應舉	國	華	大雅堂と風外禪師	孝橋	謙二	同	同	田能村竹田筆清溪深窓圖解	同	直己
長澤蘆雪筆神鹿群遊圖解	裏辻	憲道	大雅筆吳服屋の看板	市島	春城	同	同	山口胸谷晋三氏藏	同	直己
廣島保田七兵衛氏藏	史	二〇	大雅の三岳紀行	菅沼	貞三	同	同	亦復一樂帖兵庫中村準策氏藏	同	直己
吳春傳小孝	史	九一	大雅の雲州行	相見	香雨	同	同	竹田亦復一樂帖(名品小解)	同	直己
岸駒の虎	德川	義知	岳南に於ける大雅堂の畫迹	今關	天彰	同	同	野呂介石傳の研究一一三	同	直己
玉潤の遠浦歸帆と	藤森	成吉	大雅筆十二月離合山水圖 解説	大雅筆十二月離合山水圖 解説	今關	天彰	同	頼山陽の繪と野呂介石	同	直己
光友の臨摹畫	逸木	盛照	大雅小懷錄	龍村	謙	同	同	文晁と壽庵	同	直己
冷泉爲恭研究	添田	達嶺	十便を主題として	直己	同	同	同	文晁板畫總目錄	同	直己
爲恭の板畫	杉浦	冷石	遍照光院の大雅に就て	同	同	同	同	谷文晁筆連山一望松圖解	同	直己
冷泉爲恭筆「皇帝御童	同	美之國	上、下	同	同	同	同	大阪池戸宗三郎氏藏	同	直己
形御肖像」に就て	同	三ノ一	同	同	同	同	同	麻谷に與へた竹潤の畫簡	同	直己
冷泉爲恭筆大樹寺模繪考	同	同	同	同	同	同	同	渡邊華山小記	同	直己
蕪齋筆和藤内虎狩	同	同	同	同	同	同	同	田原國義以後の華山	同	直己
蕪齋職人畫繪詞	同	同	同	同	同	同	同	同	同	直己

古美術關係文獻

華山の檢屍に就て	杉浦 冷石	美之國	一五八	大窪詩佛の竹の繪に就て	小川 雪夫	書畫誌	三五八	江戸に於けるお多福圖に就て	岡 直己	浮世繪界	三ノ一
華山の盡忠報恩の意義「就環録」の内容に就て	同	塔 影	一四ノ六	大窪天民に就て	河野 桐谷	同	三六〇	浮世繪師と虎	忍 杜太郎	同	同
渡邊華山と高野長英 一、二	竹内 梅松	書畫誌	一四ノ六	高橋草坪筆山水花卉畫乾解	杉浦 冷石	塔 影	一四ノ一	二枚鑑長繪と其筆者「シタ實」印の正解	佐藤章太郎	同	三ノ一二
全樂堂記傳解題	森 銑三	日本美術協會報告	四七	香積障子「虎」物語	同	同	一四ノ二	墨堤女遊之圖	石井 研堂	同	三ノ三
全樂堂記傳 一—三	松岡 臺川	協同會報告	四七—五〇	足助風外の興法利生時代	桑原 雙蛙	同	一四ノ二	樣式史的に見たる享保實曆期の浮世繪 一—六	而 立 秋	同	三ノ四
華山の書は李北海からか	外務省心庵	アトリエ	一五ノ一	觀三法師の墨戲	岡田 章雄	畫 說	一五	世繪畫工姓名之事	森 銑三	浮世繪界	三ノ六
華山の書に就て 上、下	富永 謙治	南畫鑑賞	七ノ五、六	初期洋畫の傳來に關する一資料	古川 修	藝術日本	三四	世繪畫工姓名之事	同	同	三ノ一
華山筆瀧澤參藏像	菅沼 貞三	美術研究	八三	繪畫史に於ける洋畫派の運動	鮎澤信太郎	歷史地理	七二ノ三	夢川を稱する人々	古堀 榮	同	三ノ八
華山の四君子名蹟に就いて	西村 南岳	南畫鑑賞	七ノ四	泰西地理學による司馬江漢の啓蒙活動	竹内 梅松	書畫誌	三五五	近藤勝信	同	同	三ノ九
華山の故郷へ 一—三	鈴木 進	茶わん 說	九一—九四	司馬江漢筆富嶽遠望圖解	同	藝術研究	七八	春信の肉筆畫	藤懸 靜也	美術研究	八四
華山の故郷	大口 環夫	畫 說	二〇	長崎橋本辰二郎氏藏	同	同	同	雪鼎筆言徳功容圖	同	浮世繪界	三ノ一一
高久齋と野呂介石 上、下	古川 北華	南畫鑑賞	七ノ二、三	山田右衛門作のこと	西村 貞	同	八一、八二	歌麿の肉筆畫鑑賞	松村 喜八郎	同	同
高隆古	池上幸二郎	同	七ノ三	騎士圖 解説	同	同	同	歌麿の肉筆畫鑑賞	木村 晴三	同	同
棒々山を語る	市島 春城	藝術日本	三六	瑪利亞十五玄義圖の研究	同	同	同	歌麿の肉筆畫鑑賞	同	同	同
淺野梅堂漱芳閣書畫記 三	玉林 晴則	茶わん 說	八八	レデュー氏著日本版畫論 上、下	石井 柏亭	好 古	一ノ一	歌麿肉筆畫の傑作	藤懸 靜也	同	三ノ一
神田宗庭の話	龍 拙庵	國 華 說	五六六	長崎版畫切支丹繪の報告	藤懸 靜也	畫 說	一三	長喜の研究(傳記編)	同	同	三ノ二
貞雲の畫と岩佐派に就いて	鈴木 進	畫 說	一五	瓦版	同	同	同	長喜傳道遺	同	同	三ノ六
畫僧古洞と人物草畫	岡本かの子	美術 一三ノ五	同	余の觀たる浮世繪	宮尾しげを	同	三ノ四	清長に就て	同	同	三ノ一
白隱の畫禪に就いて	武者小路實篤	同	同	浮世繪雜論	野口米次郎	藝 苑	一	細田榮之の研究	玉林 晴則	同	三ノ六
白隱の繪	森 銑三	畫 說	一五	浮世繪落穂話 一、二	木村 拾三	浮世繪界	三ノ一	鳥文齋榮之の研究 上、下	同	同	三ノ四
尾張畫人内藤東市	今關 天彰	日本美術協會報告	四七、四八	浮世繪と西洋畫	桑原羊次郎	同	三ノ九	白蛾の錦繪と機繪に就て	近藤市太郎	同	三ノ四
天壽壽 上、下	河野 通暢	書畫誌	三五七	小林文七氏の所藏	同	同	三ノ九	歌川國九傳 一、二	津金巨摩雄	同	三ノ一、四
竹林上人に就て	同	同	同	浮世繪肉筆 上、下	松木喜八郎	同	三ノ八	廣朝	古堀 榮	同	三ノ一
續竹林上人研究 一—三	同	同	同	歐米諸國の肉筆浮世繪	同	同	同	英泉の役者繪	同	同	三ノ一
竹林上人	同	茶わん 說	九三	山を描いた浮世繪版畫	藤井 康夫	同	三ノ九、一〇	北齋の畫狂人號	同	同	三ノ一
銅雲泉小記	森 銑三	南畫鑑賞	七ノ一二	版畫に現れた郷土の山川 一、二	高橋誠一郎	茶わん 說	九三	北齋の畫狂人號	同	同	三ノ一
龜田鵬斎と銅雲泉	古川 修	書畫誌	三五八	浮世繪版畫の稀少	同	同	同	北齋の畫狂人號	同	同	三ノ一
南岳の四季草花圖卷	裏辻 敦子	畫 說	一六	漆器に描かれた浮世人物	岡田 讓	漆と工藝	四四三	北齋の畫狂人號	同	同	三ノ一
長谷川雪且を語る	市島 春城	藝術日本	三五	福祿壽三星	菊地 政藏	浮世繪界	三ノ七	北齋筆雪中美人圖	同	同	三ノ九
長谷川雪且の俳句	山中保之輔	茶わん 說	九四	馬鹿にならぬ一枚物	廣瀬 菊雄	好 古	一ノ八	北齋豆繪不二三十	同	同	同
畫僧仙厓和尚 上、下	山下 一雄	美 育	二ノ二、三	古浮瑠璃本に現れし武者繪の展開	木村 拾三	浮世繪界	三ノ五	北齋の漆繪	同	同	同
大窪天民百年祭と化政度の書畫會 一、二	河野 桐谷	南畫鑑賞	七ノ四、六	押繪の疑義	山田徳兵衛	同	三ノ三	北齋の漆繪	同	同	同
				七福神と浮世繪	餅田 突醒	同	三ノ一				

[illegible]

後二條殿記

東京公爵近衛文曆氏藏

臨王義之尺牘と秋萩帖

本邦に於ける王義之の研究

本朝臨王義之十二帖

行成臨王義之尺牘に就ての興味

時朝願經

清水寺假名緣起の草

稿に就て

江戸書家評判記贅註一四

大橋龍慶とその書流

山陽の藏書印

皇殿夫妻の手紙

鵬齋の於ての逸書

龜田鵬齋と銅雲泉

風外の遺墨

風外の二面觀

狩谷披瀝の書

書家大雅堂師承考 上、下

大雅堂の千字文

華山の書に就て 上、下

華山の書は李北海からか

扁額 京都龍神社藏

多胡碑談 解説

多胡碑 解説

支那、朝鮮

三國時代

谷則碑と諱書

谷則碑寸評

細組たる谷則碑

谷則碑の感味

谷則碑と古法

谷則碑に就て

陸機平復帖について

魏晉の書道

日本國 八二

寶全集 道 七〇七

尾上 柴舟 書 同

相澤 春洋 同 同

野本 白雲 同 同

神郡 晚秋 同 同

大口 環夫 畫 一三

中村 直勝 寶 二二

杉原 夷山 書 道 七〇四二

田中 塊堂 史 八六

神郡 晚秋 好 古 一〇八

外狩素心庵 アトリエ 一五〇五

市島 春城 好 古 一〇七

古川 修 書 畫 三五八

高瀬 誠吾 同 三五九

同 誠吾 同 三六一

高野 辰之 書 道 七〇三

小佐 喜三 南畫鑑賞 七〇七八

孝橋 謙三 同 七〇八

富永 謙治 同 七〇六

外狩素心庵 アトリエ 一五〇一

實本集 八〇

相川 龍雄 寶全集 九五

茶わん 一〇六

國寶 一〇六

高子 溫書 道 七〇二二

鳥海 鶴洞 同 同

諸家 同 同

桑原 江南 同 同

大澤 雅然 同 同

恒川 植谷 同 同

須羽 水雅 同 同

須羽 源一 同 同

西川 學 同 同

同 同 七〇六

魏晉の時代相と鑒寶子碑

漢晉墨蹟の鑑賞學

習に關する小見

晉人の法書三種

晉人の墨蹟

書道博物館所藏晉人墨寶

鑒寶子碑に就て若干の考察

鑒寶子碑を訪ふ

東晉の驚異たる鑒寶子碑

鑒寶子碑の精微について

鑒寶子碑の臨書に就いて

鑒寶子碑に就て

鑒寶子碑の印象

鑒寶子碑私見一斑

鑒寶子碑に就ての一考察

王鐔と錢謙益

武臣傳中の入

王鐔の風貌

王文安公の劇蹟に就て

褚遂良小傳

褚遂良の諸碑帖に附いて

褚遂良の特色

褚遂良寸評

褚遂良と其一統

茶詩人、蔡襄の小楷

無學祖元墨蹟

京都守屋孝藏氏藏

無學祖元墨蹟

金澤内山豊男氏藏

董其昌小傳

董其昌の評法書

董其昌と董齋

董其昌の書道と評境

董華亭を語る

北支戰線の古碑

恒川 樵谷 書 道 七〇一〇

大澤 雅然 同 七〇六

野本 白雲 同 同

西川 寧 同 同

中村 環樹 同 同

須羽 水雅 同 七〇一〇

相澤 春洋 同 同

林 祖洞 同 同

大澤 雅然 同 同

江川 碧潭 同 同

須羽 水雅 同 七〇二一

恒川 樵谷 同 同

桑原 江南 同 同

大澤 雅然 同 同

高田 青梧 同 同

恒川 樵谷 同 同

江川 碧潭 同 同

八幡關太郎 同 七〇八

須羽 水雅 同 同

高田 竹山 同 同

野本 白雲 同 同

諸岡 存 同 一〇八

日本國 古 八二

寶全集 八四

同 同 八四

光村 韻松 書 道 七〇五

高野 辰之 同 同

高田 青梧 同 同

恒川 竹山 同 同

西川 樵谷 同 同

高田 青梧 同 同

同 同 七〇一

彫刻

總記

佛像の表現 上、下

佛像の口

佛像を見るに就て

佛教尊像譯話 一五二一

佛像彫刻通俗譯話 一三

一木造の限界 中、下

桐材の彫刻

板御光から飛天光へ

日本

日本彫刻とその量感

止利佛師彫刻源流考

奈良朝時代の彫像に就いて

白鳳彫刻試論 上、下

東國にある白鳳佛と萬葉集

白鳳時代の佛像

佛像の見方 二

藤原時代の佛師 上

佛工系諸新考の一

東大寺大佛の佛身

をめぐる諸問題

中尊寺一字金輪像

釋迦如來及兩脇侍像 奈良法隆寺藏

深大寺藏釋迦如來像 解説

釋迦如來像 高知藥師堂藏

洛西常樂院の本尊

釋迦如來像に就て

彌勒菩薩像 大阪孝恩寺藏

釋迦如來像 滋賀西明寺藏

釋迦如來像 奈良菩提寺藏

誕生釋迦像 大日 環夫 書 道 八〇

誕生釋迦像 同 同

藥師寺金堂藥師三尊像 解説

同 同 八四

逸見 梅榮 國華 五六、五八

大口 環夫 畫 一九

田中 主水 清 同 一

吉祥 眞雄 史 九〇、一二

中野 楚溪 同 九〇、八

九尾彰三郎 國華 五八、五九

大口 環夫 畫 二二

九尾彰三郎 同 一三

熊谷 宣夫 畫 一九

内藤 一郎 以可留我 八

清水 龜藏 藝 三、四

石井 庄司 文 六〇、二

田中 主水 清 同 三

米山 德馬 史 九〇、二

家永 三郎 史 四九、二

金森 道 國寶 一〇一

日本國 八二

美術研究 八三

日本國 八二

望月 信成 清 同 二

日本國 八一

同 同 八〇

同 同 八四

同 同 一七

同 同 一五

藥師如來像 和歌山明王院藏	實全集國	八四	寶菩提院菩薩半跏像 廣隆寺講堂脇侍 菩薩像に就て	國資	一ノ四	深田の石佛を見る	田中 主水	史述と美術	九ノ九
藥師如來像 奈良妙圓寺藏	同	八三	五大尊像 京都教王護國寺藏	實全集國	八二	大和の石佛 一五	土井 實	史蹟名勝 天然紀念物	三ノ五二
藥師如來立像 阿彌陀如來像	國寶	一ノ三	愛染明王像 新鴻中野忠太郎氏藏	同	八四	本邦最大の塑像 口遊に見えろ三大佛	足立 康	實全集國	二八ノ一二
阿彌陀如來像 大分天念寺藏	實全集國	八〇	持國天像 奈良東大寺藏	同	八三	名著「顯凡」の佛像詩譚	八橋徳次郎	實全集國	六ノ一
仁和寺阿彌陀如來三尊像に就て	實全集國	二二	兜跋毘沙門天像 東京侯爵井上三郎氏藏	同	八二	民間の佛體	同	實全集國	六ノ一
伯耆大日寺の阿彌陀坐像	史述と美術	九ノ七	天王像 解説 横濱下村仙氏藏	美術研究	八四	裸形像	R U 生	工藝	八八
阿彌陀如來及兩脇侍像 和歌山不動院藏	實全集國	八一	善水寺仁王像に就て	史述と美術	九ノ八	新羅陵墓外飾の石彫像に就て	齋藤 忠	實全集國	二八ノ五
泉州輝寂寺址發掘の塑像佛座	實全集國	八一	金剛力士像 奈良法隆寺藏	日本美術全集	八〇	北支那石窟造像論	水野 清一	實全集國	二八ノ一〇
興福寺東金堂發見佛頭佛手拜禮の記	史述と美術	九ノ三	迷金羅大將(十二神將の内)	日本美術全集	一ノ二	六朝石窟寺院に於る佛龕の消長	大口 理夫	實全集國	二八ノ一〇
興福寺佛頭拜觀	實全集國	一五	東光院十二神將に就て	日本美術全集	四九	北魏の造像	木下李太郎	實全集國	二八ノ一〇
古佛頭保存の話	實全集國	一四	闇黒童子像 俱生神像	日本美術全集	八三	北魏大昭光背の一考察	大口 理夫	實全集國	二八ノ一〇
興福寺發見の佛頭に就いて	同	一三	詞聖帝母像 奈良東大寺藏	同	八〇	雲崗石窟隨想	水野 清一	實全集國	六ノ一
夢殿觀音の精神史的意義	國寶	一ノ三	長講堂の佛像と宗仙寺模輪 木村捷三郎	史蹟と美術	二〇ノ一	雲崗石窟像の塑造的傾向	大口 理夫	實全集國	一四
如意輪觀音像	同	一ノ六	屏風本尊 和歌山龍光院藏	日本美術全集	八〇	張家口から雲崗へ	三上 次男	同	二〇
觀心寺如意輪觀音像	同	二八ノ八	五重塔安置像 奈良法隆寺藏	日本美術全集	八四	雲崗石窟調査報告	水野 清一	同	二四
平田寺の聖觀音像	考古學	二八ノ八	童女像 解説	美術研究	八二	支那銅鑲像	矢代 幸雄	美術研究	七八
十一面觀音像 奈良新藥師寺藏	實全集國	八〇	不空羼索觀音像實展 解説	日本美術全集	一ノ六	唐鑒金七佛像	同	同	八一
十一面觀音像 奈良光明寺藏	同	八二	中尊寺金色堂木造透彫天蓋 解説	日本美術全集	八二	傳長汝出土の木彫怪獸像	梅原 末治	實全集國	六ノ一
十一面觀音像 大阪長圓寺藏	同	八四	傳大津皇子像 奈良藥師寺藏	日本美術全集	八二	總記	田中 豐藏	實全集國	二二
千手觀音像 滋賀園城寺藏	同	八三	法華寺維摩居士像放	實全集國	二二	建築及庭園	同	同	二二
千手觀音像 新鴻中野忠太郎氏藏	同	八一	鑑真和尚の肉身像	史蹟と美術	一四	建築史研究の態度に就て	足立 康	東洋建築	二ノ二
地蔵菩薩像 長野清水寺藏	同	八二	説と朱樞入定説	史蹟と美術	一四	建築探訪に就て	乾 兼松	漆と工藝	四四一
地蔵菩薩像 新鴻中野忠太郎氏藏	史述と美術	九ノ一〇	弘法大師木像 大波羅密寺藏	古美術	二ノ三	日本	同	同	同
聖觀音菩薩像 大阪孝恩寺藏	實全集國	八一	智證大師像 京都若王寺藏	日本美術全集	八四	建築の日本らしさ	岸田日出刀	アトリエ	一五ノ六
盧舍那菩薩像 奈良北僧坊	同	八三	慈惠大師像 三重觀音寺藏	同	八一	日本建築技法講座	二本松孝藏	東洋建築	二ノ一
日光像 奈良秋篠寺藏	同	八二	僧形像 京都六波羅密寺藏	同	八三	三、棟簀の研究	同	同	同
菩薩像 東京美術學校藏	同	八一	傳源賴朝像 横濱原善一郎氏藏	同	八〇	佐藤 吉次	同	同	同
菩薩像 東京郷誠之助氏藏	同	八三	奈良の佛像	茶わん	八六	同	同	同	同

古美術關係文獻

日本建築技法講座 四、明神鳥居の一考察 我が國に於ける 小塔供養の推移 眞屋と東屋とを論じて 神社佛寺の建築に及ぶ 所謂掘立柱根と 土居桁式建築 山城國葛野郡の 條理について 林泉百態 鷗尾順禮 卯建の起原とそ の變遷に就いて 木瓦葺なる名稱に就いて 大工山上善右衛門嘉廣 藤原宮御井考に就いて 崇徳天皇御廟所と御影堂 春日神社南門の 成立に關する疑 嚴島神社々殿 解説 御香宮神社私考 大徳原神社本殿 紅葉山の東照宮について 法隆寺建築の修理に就いて 法隆寺御藏建築の特色 「法隆寺建築」私観 實物調査から得 た法隆寺再建論 名建築解説 法隆寺食堂 法隆寺の修理に就いて 四天王寺五重塔の礎上、下 元興寺塔婆の焼失に就いて 拙文への質問としての足立 康氏の「大安寺の位置と移 轉年代」への自分の答	廣江 文彦 東洋建築 二ノ三 日野 一郎 史 觀 一七 喜田 貞吉 寶 雲 六ノ一 同 歴史地理 七ノ一四 福山 敏男 同 同 重森 三玲 アトリエ 一五ノ一 榎山半三郎 茶わん 九五 三田 克彦 東洋建築 二ノ三 福山 敏男 史 觀 一八 藤島亥治郎 國 寶 一ノ五 足立 康 史蹟名勝 一三ノ一 史蹟紀念物 柳山 淳 古美術と 二ノ三 黒田 昇義 國 寶 一ノ二 同 同 一ノ六 木村捷三郎 史蹟と 二ノ二 古美術と 九ノ六 高階 成章 國史學 三五 足立 康 以可留我 八 吉村 孝義 同 同 岸田日出刀 同 同 喜田 貞吉 同 同 大瀧 正雄 東洋建築 二ノ一 杉山 信三 以可留我 八 足立 康 國 寶 一ノ三 喜田 貞吉 歴史地理 七ノ三、三 太田 静六 建築世界 三ノ三 加藤 泰 東洋建築 二ノ一	大安寺の建築に關し 一六 武藏國分寺復原考 上、下 太田 静六 武藏國分寺塔婆考 同 名建築解説 室生寺五重塔婆 實相寺三層石塔婆の解析 金剛寺塔婆 多寶塔 備後國海藏寺址に於 ける塔の中心礎石 猪名寺塔心礎の小孔と遺瓦 八坂法觀音寺塔心礎 の形狀に關する疑 東大寺千手院の位置に就いて 野寺の位置に就いて 野寺移建に就いて 一乘寺護法堂、妙見堂、辭天堂 大講堂見學 海住山寺文殊堂 備後明王院の國寶建築 寶臺院大方丈(神殿)解説 寶臺院靈廟 解説 芝徳川家廟所 自證院靈廟建築考 大正覺寺金剛寶座 重要美術の木造建築 里内裏と校倉 東大寺本坊の校倉について 校倉造と蒸籠組 初期書院造 四、五 鎌倉武士の館に就いて 講堂、茶席の構造 三、四 孤蓬庵書院及茶室の研究 鮑石亭に就いて 加藤 泰 建築世界 三ノ四一三 考 古學 三ノ五二〇 同 史蹟名勝 一三ノ三 史蹟紀念物 服部 勝吉 東洋建築 二ノ三 同 同 三ノ二、二 杉山 信三 國 寶 一ノ四 猪原 薫一 史 觀 九ノ七 美 術 九ノ一〇 吉田哲治郎 同 九ノ一二 黒田 昇義 同 九ノ一二 史蹟名勝 一三ノ四 天然紀念物 足立 康 史 觀 九ノ二 同 同 九ノ四 足立 康 國 寶 一ノ七 小田 冷泉 茶わん 八七 國 寶 一ノ二 史 觀 九ノ九、一〇 若井 富藏 史蹟と 一ノ一 國 寶 一ノ一 同 同 一三ノ九 阪谷良之進 史蹟名勝 一三ノ九 天然紀念物 藤岡 通夫 書 說 一四 東洋建築 二ノ二 田邊 泰 史 觀 九ノ七 美 術 九ノ七 太田 静六 東洋建築 二ノ二 足立 康 國 寶 一ノ一 三田 克彦 建築世界 三ノ三 同 史 觀 九ノ四 藤原 義一 史 觀 七ノ五 奥田 眞啓 歴史地理 七ノ五 重森 三玲 林 泉 四〇、四二 澤島英太郎 史 觀 九ノ一六 美 術 九ノ一六 柴田 芳郎 林 泉 三九	名建築解説 夕顔亭 天守閣建築概説 一六 歴史上より見た る備中松山城 上 備中松山城天守閣に就いて 松本城天守閣 名建築解説 仙臺城大手門 桶狭間古戰場傳説地と大高 城址 附丸根鷲津兩營址 美濃路大垣宿の本陣 中山道赤坂宿と其の本陣 大崎御邸中大櫓について 尾張に於ける古農民建築 震、震子、震子敷 東亞の古瓦に就いて 古瓦新講 一二、一九 古瓦に表はれた 藤原時代の動向 天平瓦の戲書 軒瓦の名稱に就いて 飛鳥時代の軒瓦に就いて 鬼瓦考 平城宮址發見の古瓦に就いて 平安宮都前の寺址 と其出土瓦に就いて 法隆寺瓦一組の年代に就いて 法隆寺防火工事に據 る出土古瓦の種々相 法隆寺瓦と四天 王寺瓦の比較 四天王寺出土飛鳥期瓦 東天王寺發見古瓦の一考察 東北地方發見の重瓣蓮花文 鏡瓦に就いての一考察 下 最勝寺址發堀の古瓦 伏見城址出土の遺瓦に就いて 日本庭園研究の 一般的方論 庭園文獻資料集成 川上 邦基 東洋建築 二ノ三 藤岡 通夫 書 說 六、三、三、四 永山卯三郎 史蹟名勝 一三ノ二 天然紀念物 一三ノ二 田邊 泰 同 一三ノ一〇 同 國 寶 一ノ三 服部 勝吉 東洋建築 二ノ一 古谷 清 史蹟名勝 一三ノ一 大熊 喜邦 東洋建築 二ノ三 同 建築雜誌 六四五 桑原 雙蛙 茶わん 八八 城戸 久 建築雜誌 六四五 關野 貞 國 寶 一ノ四 梅原 末治 史 觀 一八 大脇 正一 史 觀 九ノ二、三 石田 茂作 史 觀 一八 田澤 金吾 書 說 一五 足立 康 夢 殿 一八 小杉 義一 同 同 藤原 文和 同 同 溝邊 文和 同 同 田中 重久 同 同 藤澤 一夫 同 同 上田 三平 同 同 池田谷久吉 同 同 大脇 正一 同 同 出口 常順 同 同 内藤 政恒 寶 雲 二二 小川 金三 史 觀 九ノ一 同 美 術 九ノ一 鍋島 雄男 同 同 同 同 同 清 水 同 三、八、四〇
---	---	--	--



作庭記解説 一一	重森 三玲	林 泉	四三	手水鉢とつばひ	赤堀又次郎	書畫誌	三六四	燭臺と手燭	香取 秀眞	好古	一ノ一
寧樂時代の庭園に就いて上	清水 卓夫	同	同	鯉魚石の一考察	福井 典	林 泉	四二	水滴鳥獸	小野賢一郎	茶わん	九〇
神泉苑の事ども	栗野 秀穂	史蹟と古美術	二〇ノ二	寶篋印塔の形式の進展	川勝政太郎	史蹟と美術	九ノ一二	美術工藝上より見たる小堀遠州	山村 耕花	同	同
武學流庭園紹介	重森 三玲	林 泉	四五	新聖定の三寶陀造寶篋印塔	同	同	九ノ五	陶 磁 工	高橋 箒庵	同	八八、九〇
庭園講座石組の築造と觀賞	重森 三玲	同	四〇—四六	西垂水寶印塔	同	史蹟名勝と天然紀念物	一三ノ一二	陶磁文明の古今の通觀	鹽田 力藏	藝術日本	三四
鶴龜庭園の變遷に就いて	同	同	三七	青石製の國寶	同	國寶	一ノ七	世界古陶磁銘款集	小林 一三	茶わん	九〇
北攝津の庭園	清水 卓夫	同	四〇	庭園と石幢	佐々木利三	林 泉	四四	南洋古陶磁の戸籍	齋藤 正雄	同	八六
修學院離宮の庭園に就いて	外山 英策	國 華	五七—五七	資料 舊丹後正法寺の石幢	川勝政太郎	史蹟と美術	九ノ八	帝室博物館復興開館紀念陳列陶磁器品目録	伊東 祐淳	同	一〇ノ五
名月の銀閣寺庭園	重森 三玲	林 泉	四七	特色ある石塔三基	同	同	九ノ六	故後藤牧太博士蒐集陶磁の紹介	同	同	同
西芳寺の庭園	田中倉聖子	畫 說	一四	基光塔 重觀塔 覺賢塔	阪谷良之進	同	九ノ一一	博物館の日本陶磁を觀る	瀧岡 忠成	同	同
夢窓國師と黃梅院の庭園	外山 英策	同	一六	田中邸石造七重塔に就いて	川勝政太郎	同	九ノ六	歐洲で見た日本の陶器	岡登 貞治	茶わん	八四
龍安寺の庭石	脇本十九郎	同	一三	丸之内出土の板碑	西村 眞次	史 觀	一五	一九三七年東洋陶磁研究會々報を讀む	小山富士夫	畫 說	一六
本園寺の諸庭園に就いて	清水 卓夫	林 泉	三八	保木野板碑考	服部清五郎	史蹟名勝と天然紀念物	一三ノ二	最近指定の國寶及び重美の陶磁	同	の趣味	四ノ一〇
紫屋寺の庭園	龍居松之助	國 寶	一ノ七	山田莊光明寺板碑と極樂寺梵鐘	吉村豐次郎	史蹟と美術	九ノ四	陶磁器の名稱の由來	播摩 龍城	茶わん	八六
稱名寺庭園	吉永 義信	史蹟名稱と天然紀念物	一三ノ九	支那、朝鮮、其他	同	同	同	陶磁地の文化差	知 足生	の趣味	四ノ一一
保國寺庭園に就いて	重森 三玲	林 泉	三九	朝鮮古建築雜信	杉山 信三	史蹟と美術	九ノ九	陶磁器雜談	後藤 牧太	茶わん	八八
酬恩庵の庭園	西堀 一三	古美術と畫 說	二一ノ二	第四信扶餘五層石塔婆	藤島亥治郎	夢 殿	一八	古陶磁器の取扱ひ方	みつをか生	同	四ノ一二
小石川の後樂園	外山 英策	畫 說	二一	朝鮮出土の古瓦に就いて	齋藤 忠 同	同	同	裏日本の陶家に聽く上、下	前田幾千代	茶わん	八九、九〇
徳島城址子秋園庭園に就いて	重森 三玲	林 泉	三八	慶州附近出土の單瓣蓮華文古瓦の一型式	藤島亥治郎	史 觀	一五	無釉陶器の通觀	鹽田 力藏	同	九三
北畠國司館址庭園に就いて	同	同	四一	支那建築の展望	田邊 泰	建築雜誌	六四〇—六四三	陶器の名稱 完	高橋 龍雄	同	八六
荒手屋敷と伊木三遠齋	同	同	四一	北支の名建築 一一三	齋藤 忠 同	同	同	千手の花水「七寶」	杉浦 冷石	同	同
久門氏庭園に就いて	鍋島 雄男	林 泉	三九	漢華文瓦瑤考	藤島亥治郎	史 觀	一五	色給皿をめぐる茶話 一一三	木賀 士隱	同	八八—九〇
庭園講座石燈籠觀賞の要	川勝政太郎	同	三八—四六	北京で見た庭園	駒井 和愛	史 觀	二ノ三、四合	煎茶式と煎茶器 一、二	高橋 森松	同	八七、八八
住吉神社境内の石燈籠群	猪原 薫一	史蹟と美術	九ノ四	滿洲に於ける古瓦に就いて	龍居松之助	史蹟名勝と天然紀念物	一三ノ一	焼物印籠及び根付	小林太市郎	の趣味	四ノ二
石清水八幡宮の石燈群	佐々木利三	林 泉	三八	印度の建築雜見	村田 治郎	夢 殿	一八	土器の美	小野賢一郎	茶わん	九三
慶長廿年の織部燈籠	川勝政太郎	史蹟と美術	九ノ一一	工 藝 總 記	谷 一東	建築雜誌	六四二	須惠器	後藤 守一	同	同
慶長在銘の織部燈籠	小宮山修康	林 泉	四八	工 藝 總 記	同	同	同	髹漆の考證	新屋 茂樹	同	八八
其後の石燈	天沼 俊一	史蹟と美術	九ノ三	工 藝 總 記	同	同	同	酒杯、茶碗などの變化	赤堀又次郎	畫 說	三五五
八角燈籠	坂 重吉	史蹟と美術	九ノ四	中世の工藝史的諸問題	比木 喬 工 藝 夢 殿	八九	道元禪師の骨壺	鹽田 力藏	同	茶わん	九〇
所謂切支丹潜伏墓標及び切支丹燈籠説に就いて	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

正倉院の陶器	バシナル	陶	一〇ノ一	樂燒名物茶碗の三大特徴	高橋 梅園	茶わん	九四	紀州男山窯の新文獻	石村賢次郎	やきも	四ノ二
藤原時代中期の大甕釜	井澤 惟一	好	一ノ六	樂茶わんものがたり	栗田有聲庵	同	同	島根縣陶磁器の銘款に就て	桑原 雙蛙	茶わん	九〇
資料 犬泉抄 四	經 緯 生	の	四ノ二	樂燒私記	吉田 堯文	同	同	周平と九郎次と	森 銃三	やきも	四ノ一
壺飾傳(校刊)	龜本十九郎	畫	一五	光悅茶釜の美に就て	小林太市郎	同	同	初期備前茶碗の再吟味	多田 利吉	同	四ノ九
陶器往來(校刊)	樂之軒生	同	二三	五段莊隨筆 仁清 一、二	滝川 第一	清	三、四	備前燒と丹波燒と	同	茶わん	九三
續々珠慶抄	同	茶わん	八八	仁清論の一部	經 緯	の	四ノ四	備前種壺と茶器	桂 又三郎	同	同
神屋宗滿日記 完	喜田 貞吉	同	八四	仁和寺藏仁清作色繪瑠璃文花生 解説	同	美術研究	八三	備前燒瑠璃	多田 利吉	同	九〇
唐津と瀬戸物と茶碗	杉村松之助	同	九五	仁清藤の壺(名品小解)	畫 說	一八	五五六	備前燒の壺	桂 又三郎	同	八四
湯本窯業史	太田 一彩	同	九五	野村仁清作色繪法螺貝形香爐解	國 華	五五六	備前辨機考	備前茶入について	桂 又三郎	同	同
八面燒と雲母山燒	杉村松之助	同	九五	東京男爵岩崎小彌太氏藏	日本全集	八四	八四	松谷久重茶湯日記の備前燒	鈴木知足堂	同	同
古瀬戸の美	料治 朝鳴	好	一ノ五	法螺貝香爐 高岡菅池貞夫氏藏	佐藤 吉次	茶わん	八四	「津田宗及茶湯日記」を中	大村 正夫	同	九ノ六
後室時代の瀬戸燒	鹽田 力藏	董	三六一	乾山燒に就て	田中 喜作	畫 說	一七	任部土に就て	伊部 義三郎	同	同
白岩瀬戸の今昔	武藤 鐵城	茶わん	九三	習靜堂補記	緒方 梅歌	の	四ノ一	伊部陶の鑑賞に就て	伊部 義三郎	同	同
瀬戸白根出土陶片	竹中 久七	同	九四	諸家對照木米年表	同	同	同	關谷燒窯跡を掘る	伊部 義三郎	同	同
瀬戸民吉の青磁花瓶	藤岡 幸二	畫 說	二一	木米と鶴翁	石村賢次郎	同	同	伊部燒窯跡を掘る	伊部 義三郎	同	同
瀬戸の名工早梅亭を中心に	小田 冷劍	の	四ノ七	紀州の木米	同	同	同	安藝の古陶磁の二三	吉向祖先の系譜	土佐の尾戸燒	下
藤四郎、伊勢天目	赤堤 十三	茶わん	八九	大綱和尚と永樂保全	永樂善五郎	清	二	肥前小田志堂と	其の分窯に就て	日本上繪附の恩人	東島德右衛門
後藤才次郎論	松本佐太郎	同	九四	永樂十一世保全に就て	一方堂燒と仁阿彌道八	同	同	高取燒始末記	高取燒始末記	下	肥前小田志堂と
熱田奉行津金胤臣	鹽田 力藏	の	四ノ七	一方堂燒と仁阿彌道八	同	同	同	關谷燒窯跡を掘る	伊部 義三郎	同	同
織部陶片錄	高木 康一	茶わん	九四	三浦男爵家の一方堂燒	同	同	同	關谷燒窯跡を掘る	伊部 義三郎	同	同
無釉の常滑燒に就て	寺内 信一	同	九三	及仁阿彌陶器に就て	同	同	同	關谷燒窯跡を掘る	伊部 義三郎	同	同
古九谷色繪竹呷々鳥文様大皿	青木 外吉	の	四ノ一〇	修學院燒及び野	神燒遺品の紹介	有爾(ウニ)窯について	同	關谷燒窯跡を掘る	伊部 義三郎	同	同
守景の九谷著書に就て	杉浦 冷石	茶わん	九四	有爾(ウニ)窯について	同	同	同	關谷燒窯跡を掘る	伊部 義三郎	同	同
金谷燒の作者と皿山の難	小山富士夫	陶	一〇ノ三	古伊賀の壺	丹波の記録	同	同	關谷燒窯跡を掘る	伊部 義三郎	同	同
仁和寺出土の越州	同	アトリエ	一五ノ一五	丹波の壺	同	同	同	關谷燒窯跡を掘る	伊部 義三郎	同	同
室盒子と影青盒子	越澤 宗見	茶わん	九四	無釉の丹波燒	同	同	同	關谷燒窯跡を掘る	伊部 義三郎	同	同
越州窯について	同	同	同	丹波の壺	同	同	同	關谷燒窯跡を掘る	伊部 義三郎	同	同
樂茶碗に就て	田中 仙樵	同	同	續丹波の古窯に就て	同	同	同	關谷燒窯跡を掘る	伊部 義三郎	同	同
樂茶碗の製作に就て	宮島 榮	同	同	丹波山の壺色	同	同	同	關谷燒窯跡を掘る	伊部 義三郎	同	同
樂茶碗私考	山村 宗謙	同	同	大阪高原燒一資料發見	同	同	同	關谷燒窯跡を掘る	伊部 義三郎	同	同
樂茶碗について	大崎長左衛門	同	同	高原燒の研究	同	同	同	關谷燒窯跡を掘る	伊部 義三郎	同	同
樂燒と大樋燒	半田 洞	同	同	善妙寺燒	同	同	同	關谷燒窯跡を掘る	伊部 義三郎	同	同
樂燒あれこれ	同	同	同	同	同	同	同	關谷燒窯跡を掘る	伊部 義三郎	同	同
更生木守茶碗と樂茶碗	同	同	同	同	同	同	同	關谷燒窯跡を掘る	伊部 義三郎	同	同

南賢燒覺え書	勝飾 曜七	茶わん	九〇	平壤と焼き物	八田 實	茶わん	八六	銅鏡 大阪山七左衛門氏藏	田澤 金吾	日本全圖	八〇
井戸茶碗小考	鈴木知足堂	のやきも	四ノ三	平壤の壺	同	同	八八	菊櫻雙雀鏡	小栗 次郎	史説	一六
井戸茶碗の名稱	藤田 幸之	同	同	博物館の支那古陶磁	尾崎 海盛	陶 磁	一〇ノ六	三河國鳳來寺の奉納鏡に就て	香取 秀真	史説	九ノ二
井戸茶碗鑑賞の成立に就て	小林太市郎	同	同	支那説を駁す	小山富士夫	同	一〇ノ一	鏡に現はれたる瑞祥文様	鎌倉 秀太郎	茶わん	一三
井戸	赤堤 十三	同	同	支那陶工傳 完	坂東 貫山	のやきも	四ノ四	琉球紅型と柄鏡	山田 萬吉郎	同	八六
茶道より見た井戸茶碗	西堀 一三	同	同	支那の陶磁製に就て	小林太市郎	同	四ノ九	薩洲出土の多鈕銅鏡について	駒井 和愛	考古誌	二八ノ二
弧蓬庵藏喜左衛門井戸茶碗	解説	國 寶	一ノ五	宋代の陶磁說話	同	同	四ノ一〇	歴史考古學第三講「佛器」	水原 堯榮	美術と	九ノ五
紀州發掘の井戸茶碗	村田 泥庵	のやきも	四ノ六	宋の大色窯瓷	中尾 萬三	同	四ノ六	秘法大師入唐御請來	弘津 史元	考古誌	二八ノ八
井戸の徳利	山田 萬吉郎	同	四ノ三	邪説と定竈に就て	同	同	四ノ六	五鈴鈴の發見	田口 海三郎	畫 說	二二
朝鮮古陶磁の美に就いて	小林太市郎	同	四ノ五	天啓三年製造の銘ある壺に就て	穂積 重威	茶わん	九三	梵鐘の研究	瀧 遼一	東方學報	八
實技から見た朝鮮陶磁の一考察	山田 萬吉郎	同	四ノ五	康熙時代の磁器	ボルデル・ボンデ	同	九五	鐘の歴史的考察	吉村 豊次郎	美術と	九ノ四
朝鮮古窯調査報告	八木 契三郎	陶 磁	一〇ノ二	支那青花(染附)雜考	中尾 萬三	のやきも	四ノ七一	山田莊光明寺板碑と極樂寺梵鐘	赤松 俊秀	史 林	二二ノ四
北鮮古陶斷想	泰沼 古觀山人	のやきも	四ノ七	飛青磁花瓶 大阪山崎一保氏藏	協本 十九郎	畫 說	一六	若狹太良莊に於る鑄鐘	木村 捷三郎	古美術と	二〇ノ三
朝鮮の古陶磁	河合 山田	同	四ノ四	飛青磁を眺めて	ジェームス・ブラー・マール	陶 磁	一〇ノ三	東福寺藏傳西寺鐘考	篠崎 四郎	畫 說	一八
朝鮮發安刷毛目の室趾(海際面月里室)	山田 萬吉郎	同	四ノ八	サマラ出土の青磁片の源流に就て	梅澤 彦太郎	のやきも	四ノ一一	乳無し鐘	香取 秀真	同	一五
青磁集嵌の八角皿	同	茶わん	八八	古染付雜考	同	同	四ノ八	鐘につく撞木	同	同	一四
高麗集嵌青磁發達の經路について	河野 俊男	のやきも	四ノ一二	日本から注文した古染付	同	茶わん	一三ノ二	鐘に彫銘が数々ござる	同	同	一四
三島の發達に就て	松原 美明	茶わん	九一	遼三彩の話	齊藤 菊太郎	同	一三ノ二	越前記内の歴代	大熊 喜邦	茶わん	九一
三島刷毛目の變遷	山田 萬吉郎	陶 磁	一〇ノ六	遼三彩と鶏冠壺	津田 信夫	美術	一三ノ二	西本願寺白書院茶明の間	同	國 寶	一〇二
三島手の一つの銘款	笠井 周一郎	同	一〇ノ三	鶏冠壺に就て	宮川 次郎	茶わん	八八	帆臺飾金具の一例	篠崎 四郎	史蹟名勝天然紀念物	一三ノ一〇
藤袴三島茶碗と三島の名稱に就て	奥平 武彦	同	九一	安南燒交趾燒とはどんなものか	永末 篤庵	同	同	上總笠森寺の金工品	同	同	同
李朝分院に關する記錄	渡邊 爲吉	のやきも	四ノ八一	交趾燒漫談	齋藤 正雄	アトリエ	一五ノ三	建築裝飾に就て	乾 兼松	漆と工藝	四四一
分院室趾紀行 上、下	笠井 周一郎	茶わん	九〇、九一	東印度遺存の古陶磁	同	同	同	漆塗に就いて	同	東洋建築	二ノ二
李朝白磁の香爐	山田 萬吉郎	のやきも	四ノ一一	金 工	同	同	同	漆器に描かれた浮世人物	同	漆と工藝	四四三
李朝白磁の美	梅澤 彦太郎	同	四ノ一二	古鐔の鑑賞に就て	古鐔の鑑賞に就て	二、三 桑原 半次郎	塔 影	二四ノ一、二	同	同	同
李朝鐵砂を語る	同	同	四ノ一〇	滿洲國新出の古銀銅面及二三の青銅遺物に就て	島田 貞彦	雜考 古學	二八ノ二	漆藝に現れた風俗圖樣	同	同	同
李朝染附の松竹梅	山田 萬吉郎	工 藝	四ノ二	銅魚考	駒井 和愛	東方學報	八	蒔繪鑑賞の目安	伊藤 甲子之助	茶わん	八六
李朝の水滴	大曲 美太郎	のやきも	四ノ二					蒔繪の蒔繪	吉野 富雄	漆と工藝	四四六
釜山窯御茶碗造所考	同	のやきも	四ノ二								

給の蒔繪 吉野 富雄 茶わん 九三

蒔繪と螺鈿の關係 同 漆と工藝 四四八

龜岡寺三寶院座床框の蒔繪 國寶 一ノ二

蒔繪調度 京都高台寺藏 寶全集 八三

螺鈿蒔繪手箱(名品小帳) 畫說 一五

北海道より將來の蒔繪手洗に就て 吉野 富雄 漆と工藝 四四〇

樂浪の漆器 八田 實 茶わん 八七

時代碗の文様 羽野 頼三 清 九五

漆繪と漆匠長寛 西村 要亮 清 三

如泥の美など 富樫 木人 清 一六〇

軍鞍の事など 小野賢一郎 茶わん 八七

鏡鞍 東京御嶽神社藏 寶全集 八二

近衛豫樂院の茶杓簞笥 水谷川紫山 清 四

紅匣 大隅 爲三 茶わん 八四

伏魔に就て 都筑 幸哉 漆と工藝 四四七

香枕の話 同 茶わん 八八

扇一、二 中村 亮平 同 八九、九〇

根付の起原 上田 合吉 同 一

根付の意匠 同 同 二

根付のはなし 同 同 三

根付漫譚 同 同 四

染織工

蠟染と「更紗」の語源 齋藤 正雄 茶わん 八六

友禪衣 長瀧阿貴羅 アトリエ 一五〇、一四

古友禪からの想念 破 眞次郎 好 古 一〇七

黒革威胸丸 奈良春日神社藏 寶全集 八二

國寶春日神社赤塗城大鏡 米袋 生 清 二

竹虎文大袖 解説 山田 葉光 同 四

藤森神社の大鏡 同 同 八九

「經糸」の意味 四 史 苑 二ノ三、四合

漢代絹の一名「鮮支」に就て 原田 淑人 史 苑 二ノ三、四合

其 他 西堀 一三 同 四ノ二

紹興時代茶具値段付 同 同 四ノ二

武器の奉納に就て 永 雅雄 考古學 二八ノ一

甲冑の話 山下 八郎 アトリエ 一五ノ三

甲冑の變遷に就て 關 保之助 茶わん 八七

櫛引八幡宮の菊一文字の甲冑に就て 棚田 曉山 藝術日本 六ノ四二

櫛引八幡宮藏甲冑菊桐文考 杉山壽榮男 茶わん 八七

兜の時代相 山上 八郎 日本美術 四九

日本刀と其の沿革 一、二 本阿彌光遜 東 美 四

陰尾吉光の脇差と加藤清正の兜に就て 徳川 義知 日本美術 四七

我國の「玉」及びその渡來傳播についての考 樋口 清文 國史學 三三

紙漉外傳考 同 工 藝 八七

雜

墨と硯との關係の物理的研究 中谷宇吉郎 畫 說 一三

古硯美の鑑賞 井上 源太 藝術日本 三四

古硯因縁 山中 蘭徑 アトリエ 一五ノ七

陶硯雜考 小林太市郎 やきもの趣味 四ノ四

日本古陶硯種々相 鈴木知足堂 同 同

神澤貞幹と荒磯硯 坂東 貫山 同 同

支那の硯 同 茶わん 九三

武田氏の印判に關する研究 相田 二郎 歴史地理 三ノ三、五

珍らしい落款印章と作者 中村 寒村 藝術日本 三九

池大雅の篆刻 市島 春城 好 古 一ノ六

山陽の藏書印 神郡 晚秋 同 一ノ八

寶相華文様の考察 渡邊 素舟 塔 影 一四ノ六

土紋に就て 明珍 恆男 畫 說 二二

鏡に現れたる瑞祥文様 香取 秀眞 同 一三

鍍金に就て 井關 英品 清 二

寶塔を據した泉州大藏寺納經 平林 悅治 星 圖 九二

朝鮮に於ける銅活版の發展 佐藤 致孝 海外本 一二ノ七

漢の石經に就て 中村 不折 書畫誌 三六五

石經の種類について 西 正一 立正史學 一〇

其 他 服部 有恒 繪畫教習 六ノ三、七

上代日本の服飾 中村 亮平 浮世繪界 三ノ四

奈良時代の女裝 高橋 健自 藝術日本 三九

王朝風俗雜考 櫻井 秀 文 學 六ノ一二

藤原時代の女性美の表現について 岡 直己 美之國 一五三

室町時代武家兒童の風俗 櫻井 秀 史 苑 二ノ三、四合

武裝と太刀 一、二 吉村 忠夫 茶わん 八七、八八

應仁前後の武裝 伊東 紅雲 史 苑 二ノ四

七五三の祝 江馬 務 古美術 二ノ四

朝鮮に於ける冕服の傳來に就て 宮本勝太郎 史 苑 二ノ三、四合

御物聖德太子御像の風俗に就て 江馬 務 以可留我 八

古名畫の女裝に就て 河崎 實英 塔 影 一四ノ八

奈良佛教行事の概観 橋本 凝胤 以可留我 特七

南部佛教行事の一考察 田島 隆聖 同 同

南部七佛寺行事句抄 野田別天樓 同 同

法隆寺の修正會及び修正會に就て 古谷 明覺 同 同

法隆寺西園一堂の修正會に就て 吉田 覺胤 同 同

藥師寺の花會式に就いて 橋本 凝胤 同 同

唐招提寺團扇之由來 北川 行戒 同 同

西大寺大茶盛式に就いて 佐伯 快龍 同 同

東大寺お水取行法に就いて 北河原公海 同 同

興福寺の文殊會に就いて 淺野 行照 同 同

足利義滿の北山第と金閣寺 岩橋小彌太 史 苑 二ノ三、四合

義堂和尚 辻 善之助 同 同

五山の宗派圖に就て 玉村 竹二 歴史地理 七二ノ六

日本最古の典籍 江部 鴨村 好 古 一ノ八

鹿苑日錄雜話 野村 常重 史學雜誌 四九ノ七

天正記の成立とその傳本 桑田 忠親 同 同

一太閤記研究の一部 同 同

(以下二五頁)

古美術關係單行圖書

總記

品目

對照 世界美術年表 中村亮平 雲卿堂

東亞美術史綱 日本文化 フエノロサ 創元社

東洋美術名鑑 名著選 大阪毎日新聞社 便利堂

世界文化史大系 二一ノ一九 小沼勝衛 誠文堂新光社

東洋文化史大系 清代之アジア 小沼勝衛 誠文堂

一ノ四 宋元時代 平凡社 平凡社

二ノ一 古代支那及ビインド 同 同

三ノ二 漢魏六朝時代 同 同

五ノ三 隋唐の盛世 同 同

六ノ六 清代之アジア 同 同

東洋歷史大辭典 七ノ七 ナーホキ 同 同

東洋美術大展覽會圖錄 大阪毎日新聞社 便利堂

重要美術品等認定物件目錄 文部省宗教局保存課編 同課

第二輯 昭和十一年二月六日—同十三年一月廿日 藝苑聚芳 刊行會 雲卿堂

藝苑聚芳 九—一四 書畫骨董普及會 大洋社

古今趣味の書畫骨董 中野楚溪 臨濟學院中

禪宗美術 田中一彦 誠文堂

日本文化史大系 五ノ一、七ノ七 矢部良策 創元社

原始文化、吉野、室町時代 帝室博物館 帝室博物館

日本美術略史 美術研究所 美術研究所

日本美術資料 第一輯 小川晴陽編 飛鳥園

日本美術史圖版 東京朝日 便利堂

戰爭美術展覽會圖錄 新開社 大塚巧藝社

南都十六大鏡 二八 大塚巧藝社 大塚巧藝社

總目次、分類索引(附南都七大寺大鏡) 三 重縣

三重縣國寶調查書 三 重縣

古美術關係文獻 三 重縣

帝室博物館年報昭和十二年度 帝室博物館 帝室博物館  
帝室博物館圖錄 四ノ一一 帝室博物館 帝室博物館  
博物館列品圖鑑 十二、三輯 帝室博物館 帝室博物館  
天平地寶 朝鮮總督府 朝鮮總督府  
佛國寺と石窟庵 朝鮮總督府 朝鮮總督府  
朝鮮寶物古蹟圖錄第一 朝鮮總督府 朝鮮總督府  
十竹齋畫譜 複製 朝鮮總督府 朝鮮總督府  
第四册 墨華 朝鮮總督府 朝鮮總督府  
十竹齋畫譜 墨華 朝鮮總督府 朝鮮總督府

目錄 (十一月) 於東京美術俱樂部 舊大名賣立  
(同) 於高島屋 東洋古美術展  
(同) 於東京美術俱樂部 吉田家、某舊家賣立  
(同) 於東京美術俱樂部 林雲影莊 某家賣立  
(同) 於高島屋 三友會展觀  
(同) 於大阪美術俱樂部 閑樂庵賣立  
(同) 於東京美術俱樂部 某家賣立  
(同) 於東京美術俱樂部 深山某家、市川壽美藏文  
(同) 於東京美術俱樂部 長壽莊、某名家賣立  
(同) 於京都市俱樂部 當市某家賣立

繪畫

目錄 (二月) 於東京美術俱樂部 某大家、某家賣立  
(三月) 於名古屋美術俱樂部 松田松嶺軒、某舊家賣立  
(同) 於東京美術俱樂部 花雨翠居、某大家賣立  
(同) 於東京美術俱樂部 ○○家賣立  
(同) 於東京美術俱樂部 某家刀劍賣立  
(同) 於京都市俱樂部 當市藤井家賣立  
(同) 於名古屋美術俱樂部 市內某家賣立  
(同) 於東京美術俱樂部 松寶山莊賣立  
(同) 於大阪美術俱樂部 井上梅軒、田村家賣立  
(同) 於金澤美術俱樂部 故大垣昌訓家、某家賣立  
(同) 於東京美術俱樂部 德川田安家賣立  
(五月) 於大阪美術俱樂部 江原靜庵、某家賣立  
(同) 於大阪美術俱樂部 白水庵賣立  
(同) 於東京美術俱樂部 某家賣立  
(同) 於東京美術俱樂部 某兩家賣立  
(同) 於高島屋 古美術品展覽會  
(六月) 於東京美術俱樂部 某家、鈴木秀嶺翁賣立  
(同) 於京都市俱樂部 大雲畫伯、某家賣立  
(同) 於名古屋美術俱樂部 拘木庵、某舊家賣立  
(同) 於東京美術俱樂部 伊東子爵、某兩家賣立  
(同) 於高島屋 朝鮮工藝展覽會  
(同) 於大阪新明月 富岡文庫御藏書賣立  
(同) 於東京美術俱樂部 松岡映丘、小林鐵太郎賣立  
(同) 於名古屋美術俱樂部 一揃庵、某舊家賣立

畫道集(大日本文庫藝道篇ノ内) 瀧 精一 春陽堂  
古今著聞集畫圖章 君台觀左右帳記 本朝畫史  
續本朝畫史 畫乘要略 竹田莊師友畫錄  
玉洲畫趣 富貴寺壁畫 往生寺法然上人圖錄  
金剛界大日如來繪像 原版 盛岡城模圖書 尼三精華畫帖  
三十番神繪像說 松花堂昭乘附記 長閑堂 廣瀨臺山遺墨集  
文晁遺芳 東洋美術文庫一ノ三二 華山 井上昇三  
肉筆浮世繪選集 浮世繪名作百版畫 一二 高見澤木版社  
浮世繪二百五十年 浮世繪風景五十版 三十七、九 高見澤木版社  
北齋富嶽三十六景一五一八 同 高見澤木版社

彫刻

日本建築史圖錄

二二ノ二 上 鎌倉、吉野朝時代

九二ノ二七 王義之投若心聖

三筆三蹟選集

10.  $\frac{1}{2}$

九州陶磁 木むん編輯部 寶雲



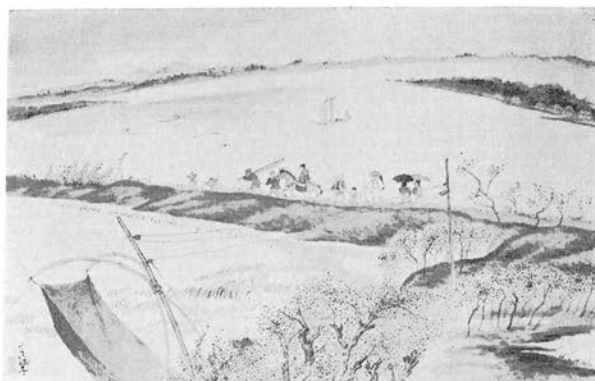


插

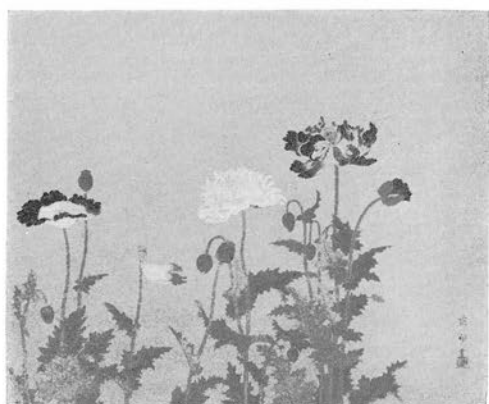
圖



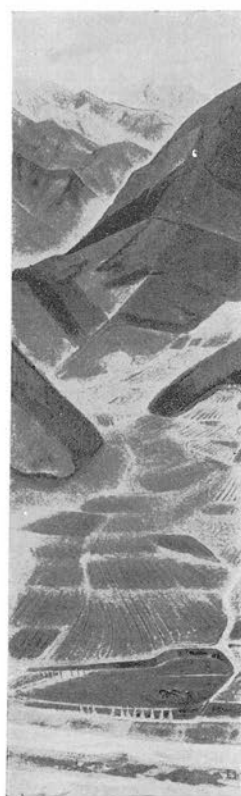
峰紫原櫛 (展會虹春) 鶏骨烏 四



錢 芋 川 小 (展畫本日代現莊來矢) 堤春 一



郎 萩 田 宇 (展會虹春) 花の子芥 五



二 冬暖 (清尙會展) 加藤榮三



七 冬の娘 (清尙會展) 谷口富美枝



六 秋の娘 (清尙會展) 谷口富美枝



三 霖春 (春虹會展) 金島桂華



男光子曲 (展會月如) ソウワカ 一



八  
う  
つ  
ら  
う  
春 (春虹會展) 上村松園



勢晃輪三 (展會月如) 雪園 二一



畝十木荒 (展會畫讀) 春淺 九



良三井酒 (展人同院術美本日) (内ノ題三) 豆伊 三一



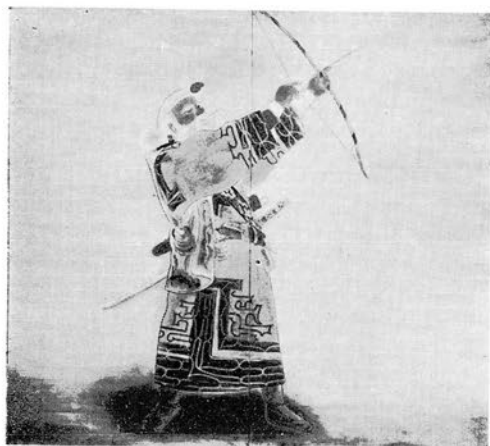
夷南原老海 (展會畫讀) 二ノ其場工灰貝 〇一



池田の風景 (展社青葱) 尾高のちも 七一



村山の實 (展社青葱) 村山の實 八一



一九日蝕 (一) (青甲社展) 樋口富麻呂



一五 少女 (日本美術院同人展) 中村 貞以



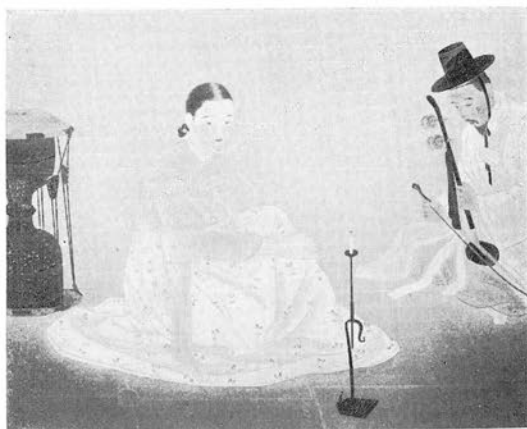
院術美本日) 音観 四一  
方寛井荒 (展人同)



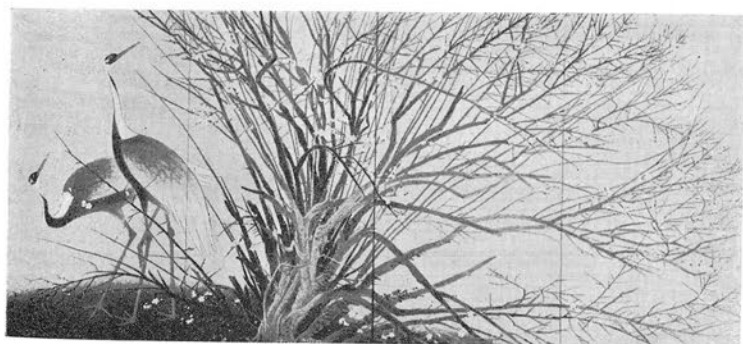
寛 耕 藤 佐 (展友院) ひよつ待春 六一



二三 野兔 (戊辰會展) 島春潮



二〇 夏宵調音 (青甲社展) 北野以悦



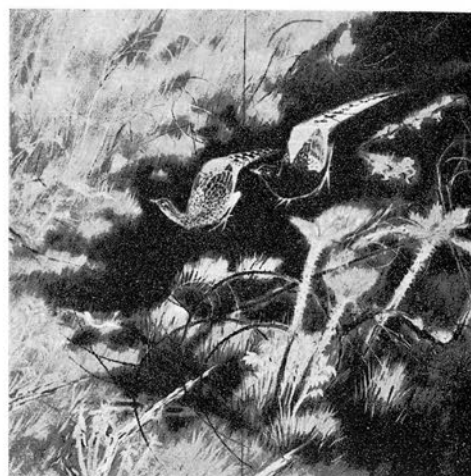
水姿本松 (展會辰戊) 香清 四二



嶺翠山西 (展社甲青) 餘雨 一二



子樸大雲村 (展會辰戊) 春早臺武相 五二



二二 末黒野 (戊辰會展) 藏部草丘

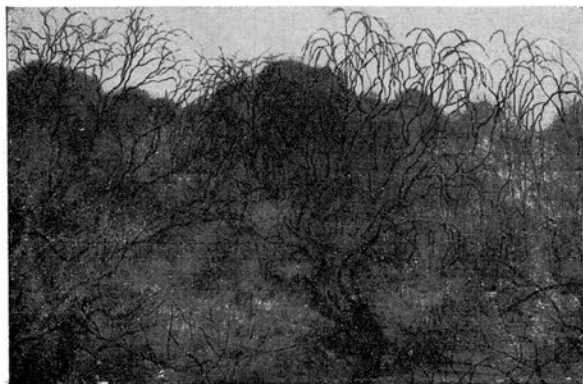




園竹田水 (展會莪菁) 堤家 九二



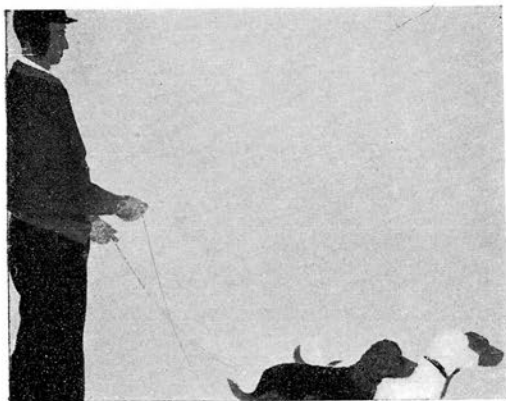
堂玉谷川 (展會展戊) やも朝 六二



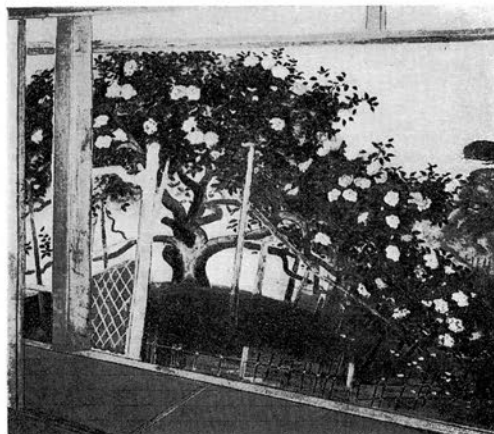
岳華上村 (展裝表作新家名西東) 春早柳梅 〇三



二七 蘆雁 (戊辰會展) 兒玉希望

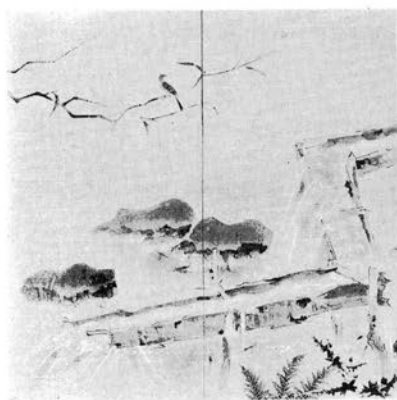
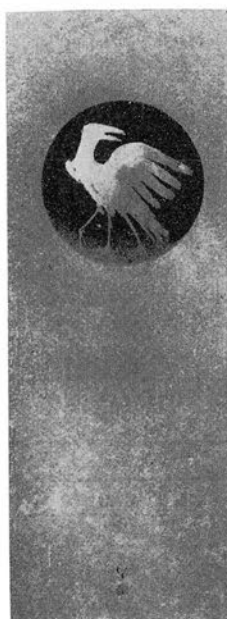


一 正田 奥 (展社龍青の春) イーボ犬 一三



二八 棒寺の庭 (白御會展) 中島菜刀

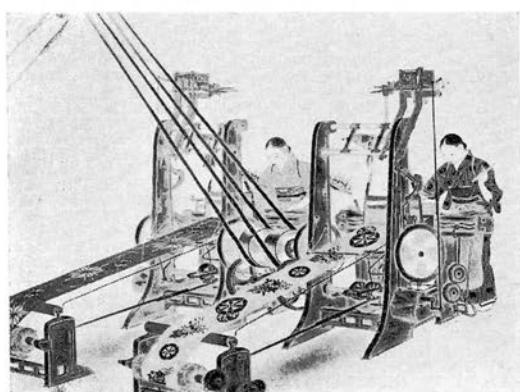
三二 戦捷の春(春の青龍社展) 川端 龍子



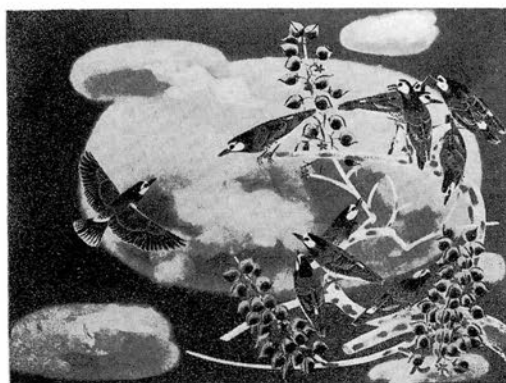
子山 案 中田 (展院術美興新) 覧 五三



草一口坂(展社龍青の春) 風潮 三三



俊 素 原 鬼 (展院術美興新) 織機 六三



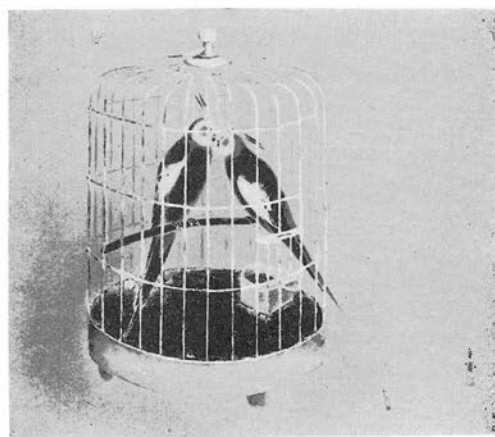
三四 良栢(春の青龍社展) 市野 亭



四〇 山春（九皇會展）  
福田豊四郎



觀江城古（展チツクス家畫軍從軍海）クーリク州蘇 七三



三八 春光（九皇會展）  
森 白市



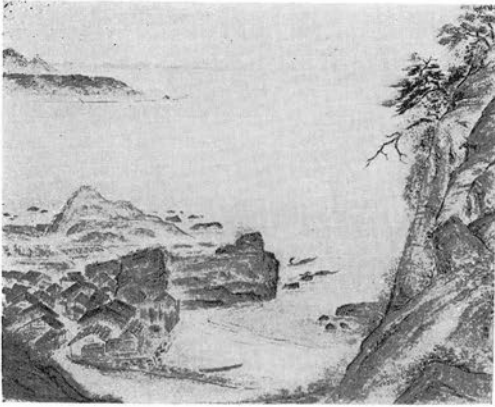
籠遊上講（展會阜九）女童 一四



已勝津會（展術美市都京）春 二四



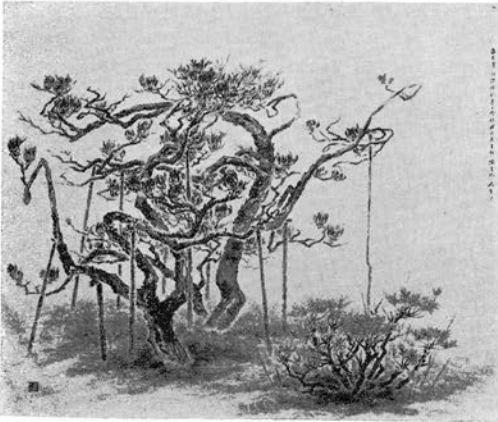
楊華口山（展會阜九）苑春 九三



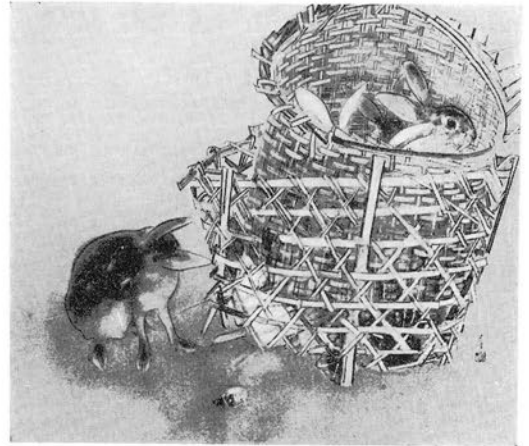
田 蘭 上 村 (展院畫南興新本日) 風 六四



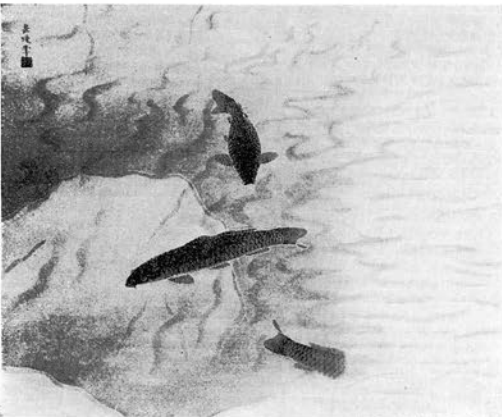
四三 兄弟(京都市展) 秋野不矩



雲 凌 瀬 渡 (展院畫南興新本日) 律春 七四



雲 五 村 西 (展市都京) 興卽裡園 四四



陵 岳 村 中 (展會湖六) 淙露 八四

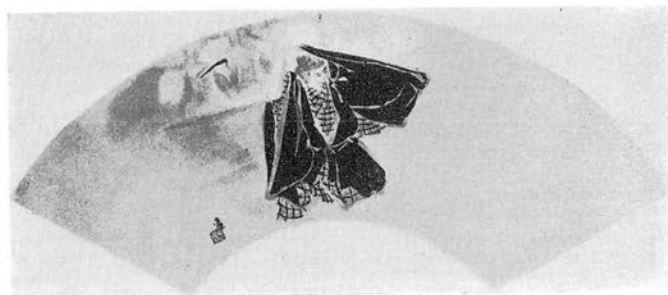


青 放 原 直 (展院畫南興新本日)(春甞)省西山 五四





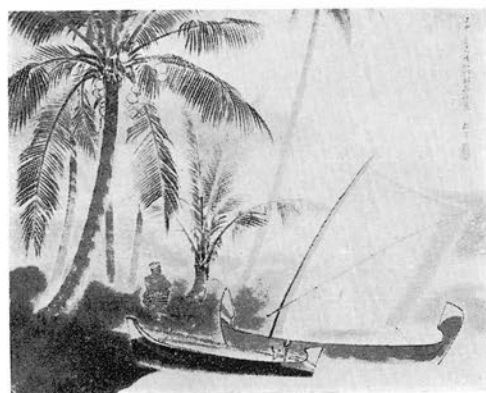
五二 風市 (明則試作展) 田代寛哉



八 莊 村 木 (展會潮六) 蛛蜘蛛 九四



春 蓬 口 山 (展會潮六) 藥芍 ○五



可 路 川 谷 長 (展個) 春夕 三五



魔 放 杉 小 (展家作五) 鶴羽姉 四五

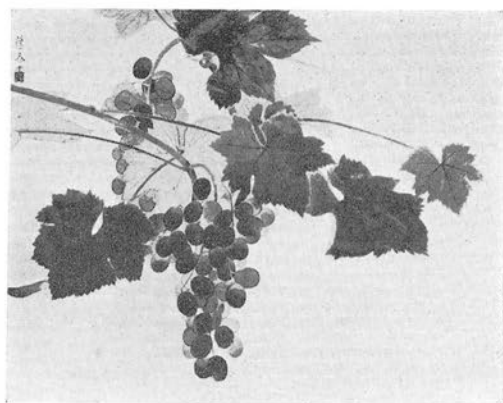


五一 林間二題 早春 (青樹社展) 横山 葩生





司幸澤 猿 (展院術美日大) (見所宮照東) 八五



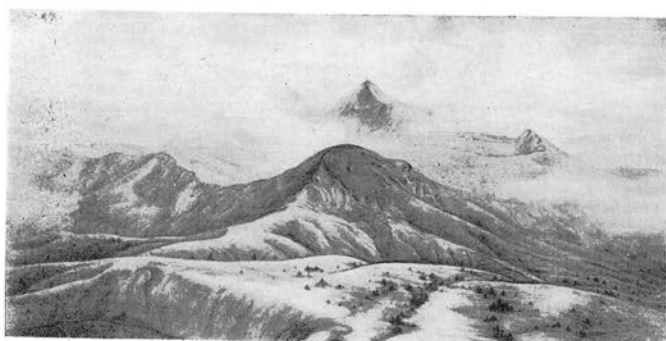
春 葡萄 (展家作五) 五五



五九 伐木 (大日美術院展) 結城素明



五六 猫 (五作家展) 橋本關雪



乘 大 木 青 (展院術美日大) 穂千高 〇六

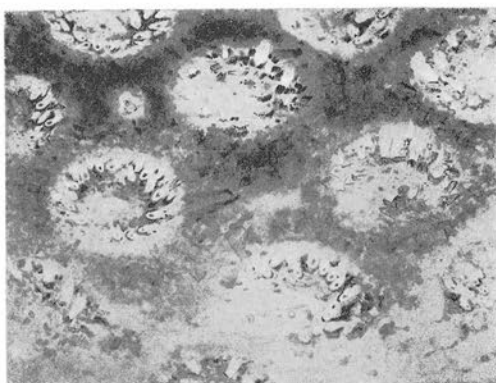


五七 二枚給 (五作家展) 鍋木清方





男 文 柳 (展會協人術美新) 丘砂 四六



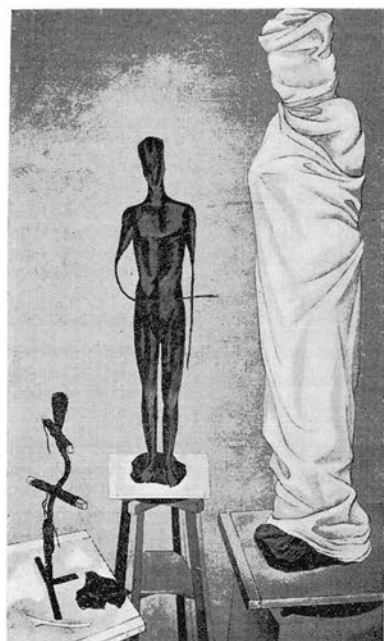
龜 文 常 (展院術美日大) 土の春 一六



郎四豐田福 (展會協人術美新) 濤 五六



虎 小 崎 川 (展院術美日大) 葵日向 二六



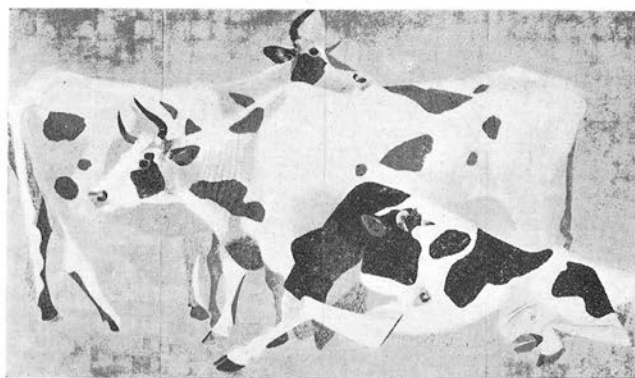
六六  
アトリエ (新美術人協會展) 藤田復生



治 隆 田 藤 (展會協人術美新) ドンパカニモーハ 三六



七〇 うさぎ (清光會展) 安田 毅彦



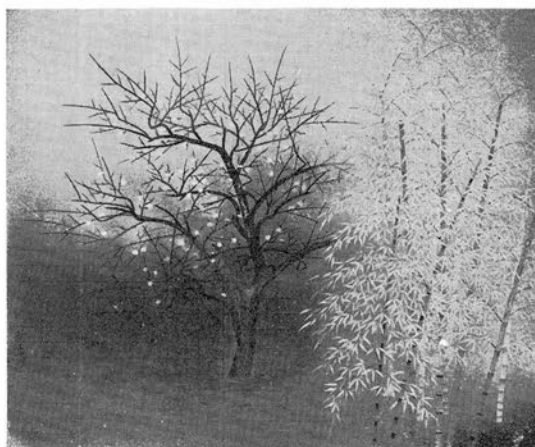
二 堅 岡 吉 (展會協人術美新) 牛乳 七六



六八 花 (新美術人協會展) 柴田安子



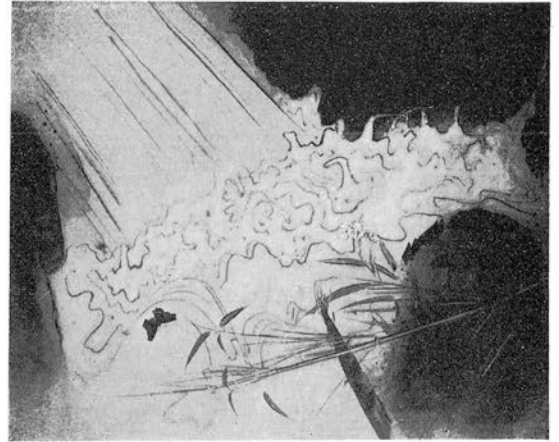
七一 宵の春 (瑞々會展) 西山翠嶺



後 古 林 小 (展會光清) 花梅 九六



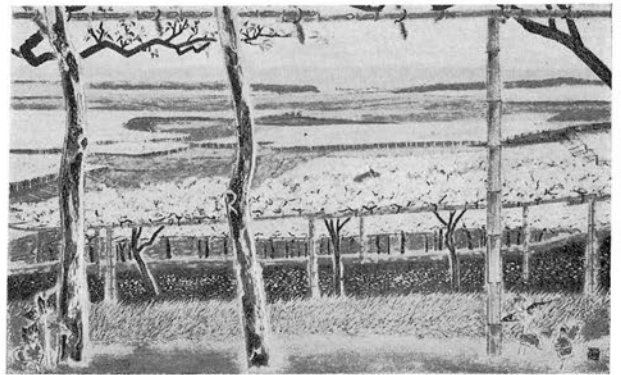
(展家大西東念記曆還莊竹山本) 姿雄 五七  
畝 秀 上 池



雲 五 村 西 (展會々珊) 潭清 二七



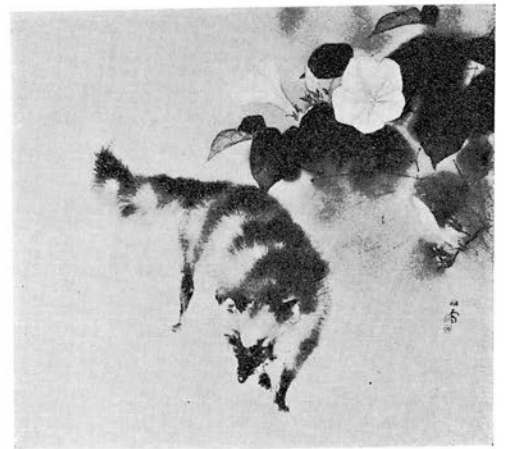
七六 秋山飛瀑 (本山竹莊還曆記念東西大家展) 川合玉瑩



彩 光 村 河 (展社暢三) 花梨 三七



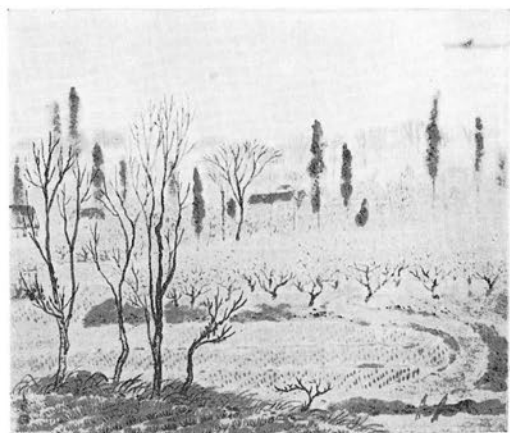
七七 大原風景十二題ノ内水泳の少女  
(墨人會展) 小松 均



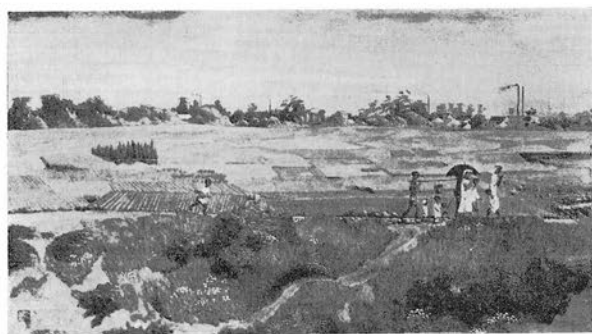
(展家大西東念記曆還莊竹山本) 宵涼 四七  
雪 關 本 橋



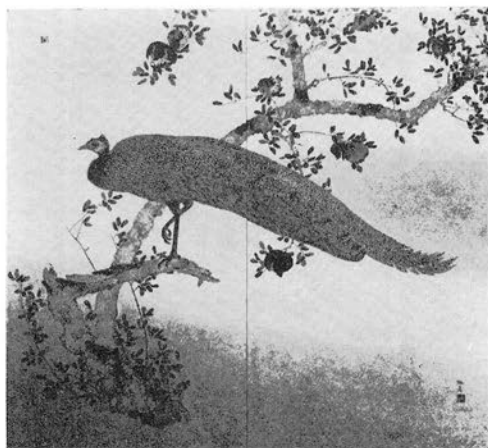
人丘本山 (展社畫爽瑠) 景風月三 一八



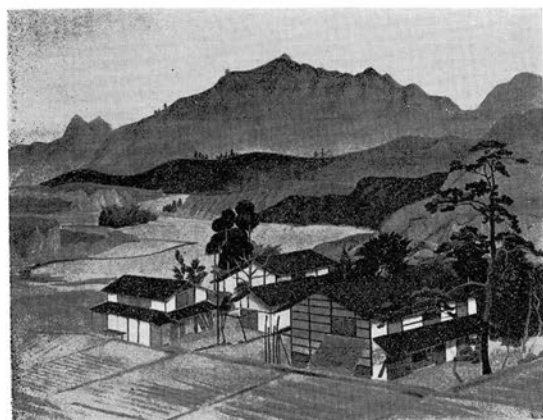
虛大邊渡 (展會人墨) 村桃 八七



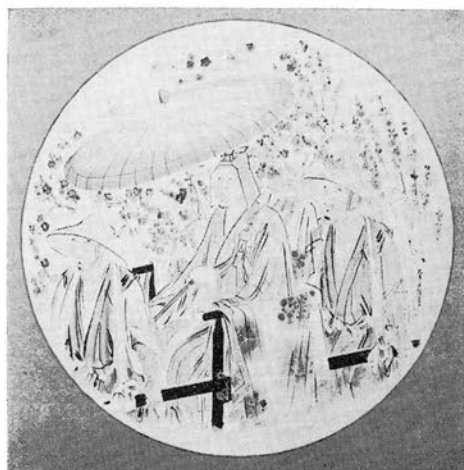
雄辰山高 (展社畫爽瑠) り盛日 二八



庵放杉小 (展會人墨) 鸞青 九七



之憲中田 (展社畫爽瑠) 原野上州甲 三八



八〇一休禪師 (墨人會展) 菅 楯彦

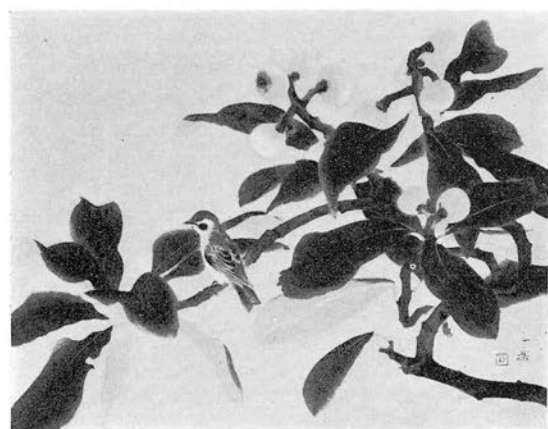




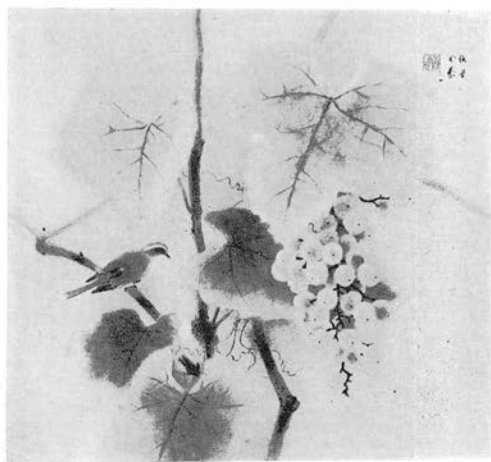
雨 聽 田 太 (展美術) 樹翠 五八



郎三吉口山 (展社畫爽瑠) 景風るあの池 四八



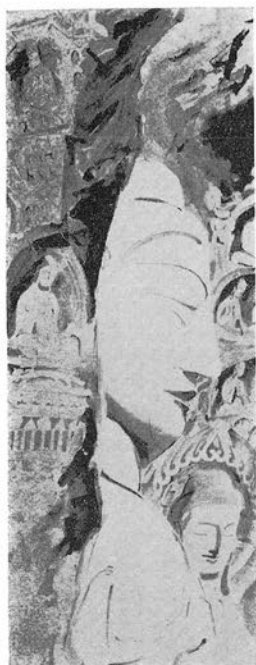
樂三納加 (展美術) 把枇 七八



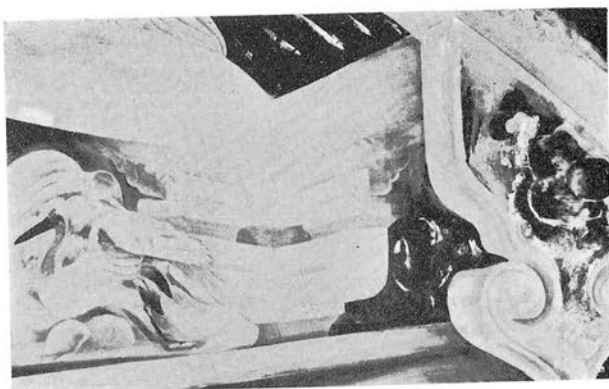
象印本堂 (展美術) 果夏 六八



八八 山莊に於ける廣業先生 (煥土社展) 野田九浦



九二 大同石窟(大露佛)(青龍社展) 川端龍子



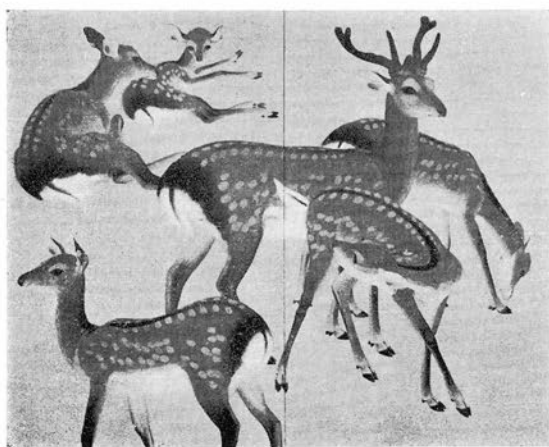
樂三納加 (展社龍青)右(欄鳥)廟彩山晃 九八



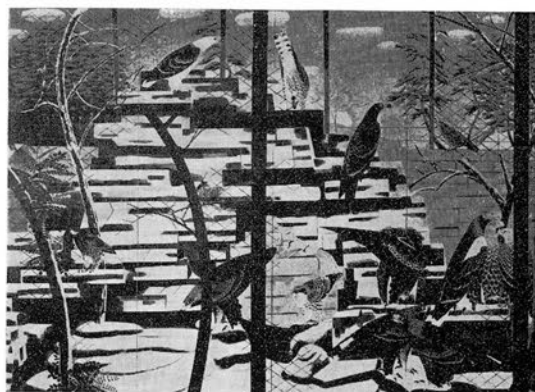
豐崎山 (展社龍青)(堂華法)良奈 三九



九〇 明惠傳(一)(青龍社展) 福岡青嵐



九四 鹿 (青龍社展) 佐藤本草

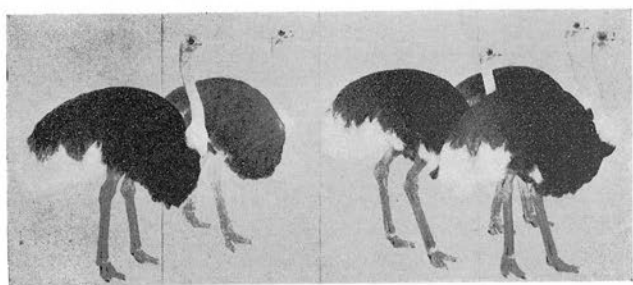


亭野市 (展社龍青) 舍禽猛 一九





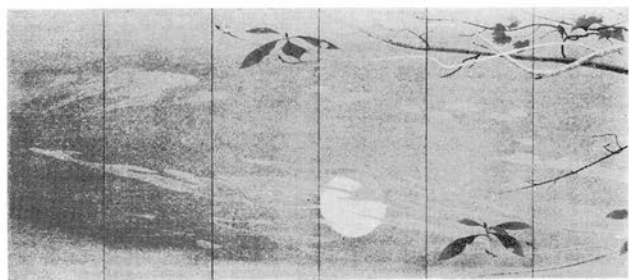
草一口坂 (展社龍青) 牧放原高 五九



助之鹿村木 (展社龍青) 風屏鳥 六九



子龍端川 (展社龍青) 經義源 作二第作連「策陸六」七九  
シラ スギ シジ



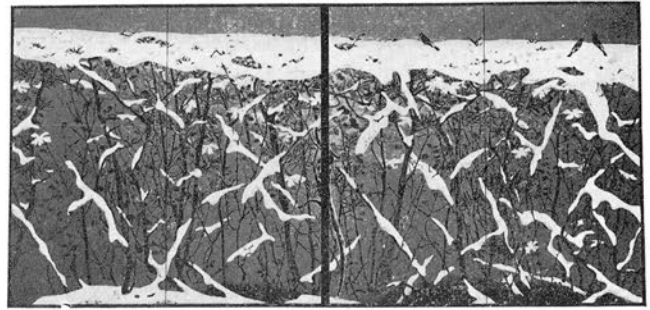
九八 山の夜 (院展)

郷倉千親





郵 青 田 前 (展院) 佛石同大 二〇一



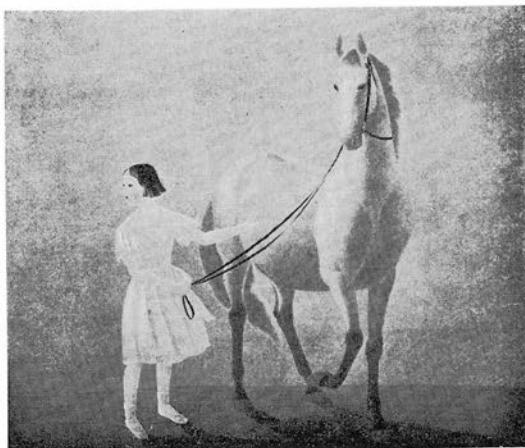
穂 光 野 佐 (展院) 雪初 九九



観 大 山 横 (展院) る薫花梅 三〇一



花 耕 村 山 (展院) 々悠地大 〇〇一



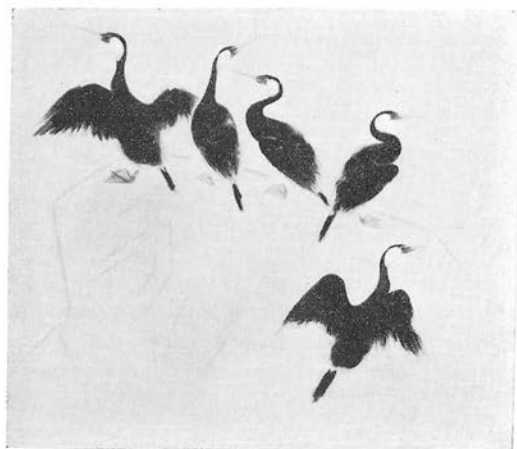
一〇四 爽風(院展) 中村岳陵



明 晨 藤 加 (展院) 女少二 一〇一



月大山大 (展院) 内ノ意大野蘇武 八〇一



牛土村奥 (展院) 鶴 五〇一



龜遊上溝 (展院) 女浴 九〇一



良三井酒 (展院) 飼鶴 六〇一

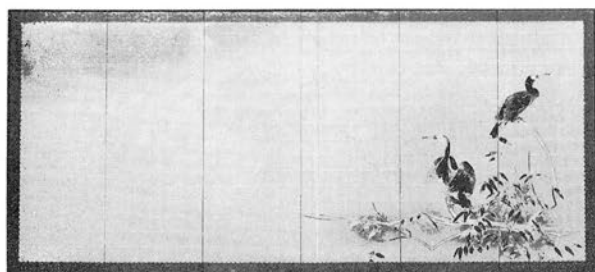
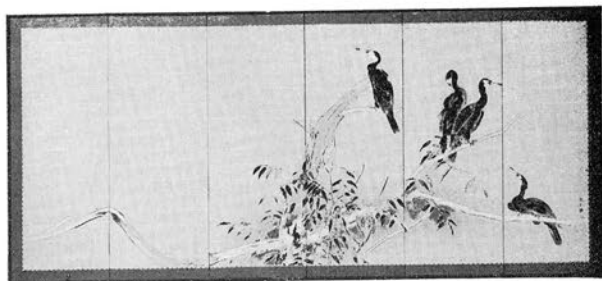


白柯林小 (展院) 磯 〇一一

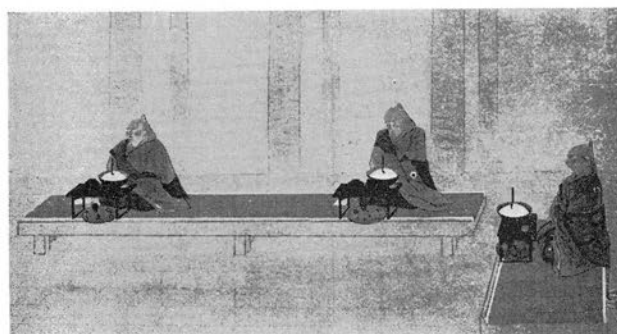


方寛井荒 (展院) 平和地天 七〇一

一一一 殘照(院展)  
堅山南風



明黎道真(展院)内ノ題三巖靈嶺雲 二一一



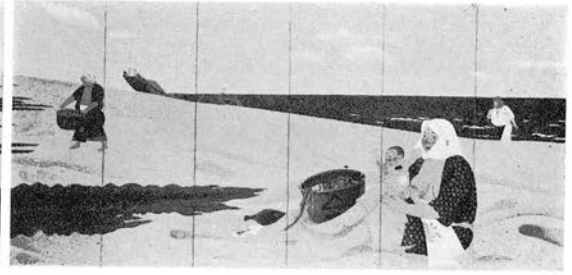
利勝井新(展院)(二其)取水堂月二 四一一



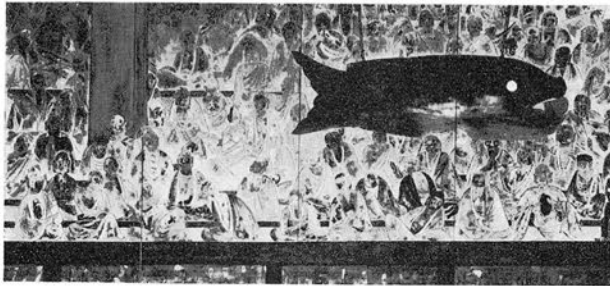
觀勝智大(展院)陰椿 五一



一一三 浴後(院展) 中村貞以



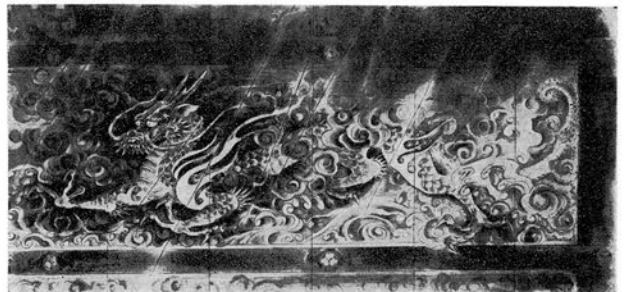
爾則留久伊 (展則明念記年周五) 幸の海北 六一一



一一七 五百羅漢 (五周年  
記念明則展) 東條光高



一一八 靈廟龍虎 (五周年  
記念明則展) 川口春波





一一九 上宮太子（白日莊現代大家展） 安田靉彦



一二二 月清の空（白日莊現代大家展） 鍋木清方



一二〇 芙蓉花（白日莊現代大家展） 結城靉明



三二一 朝冬（日本美術協会展） 森梅溪



四二一 苑仙（文展） 田中黠哉



一二一 見書（白日莊現代大家展） 上村松園





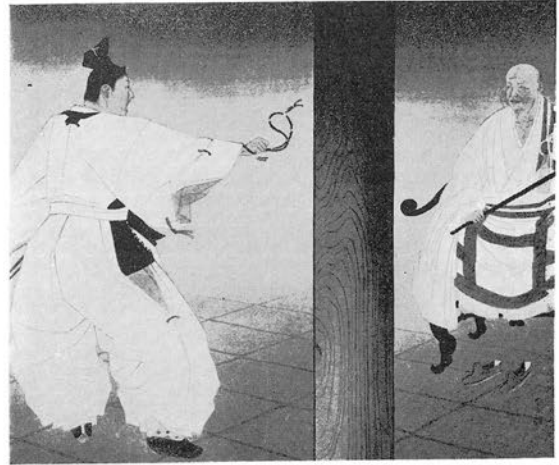
子人南谷森 (展文) 村開春初 八二一



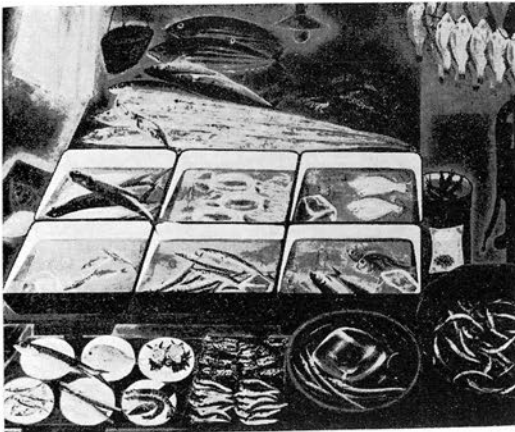
一二五 椎茸取り(文展) 遠山唯一



一二九 庭園(文展) 山本丘人



一二六 時宗と祖元(文展) 服部有恆



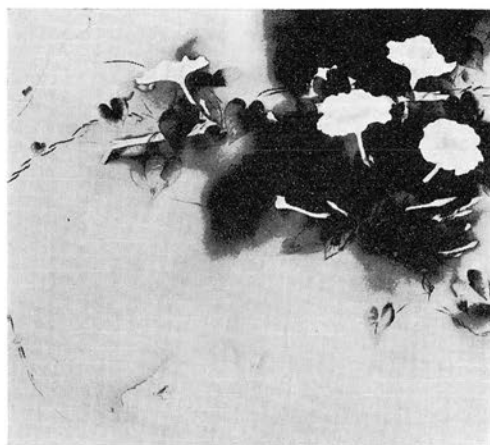
光清倉濱 (展文) 魚店 〇三一



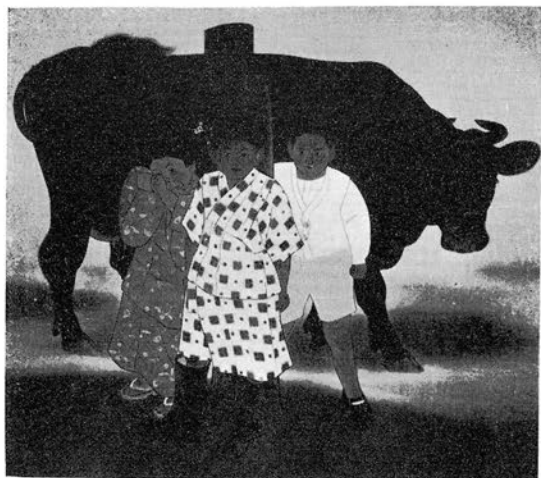
二 健合河 (展文) 雪に埋もる 七二一



一三四 後雨 (文展) 西村卓三



風南山堅 (展文) 後雨 一三一



一三五 牛と子供 (文展) 伊東深水



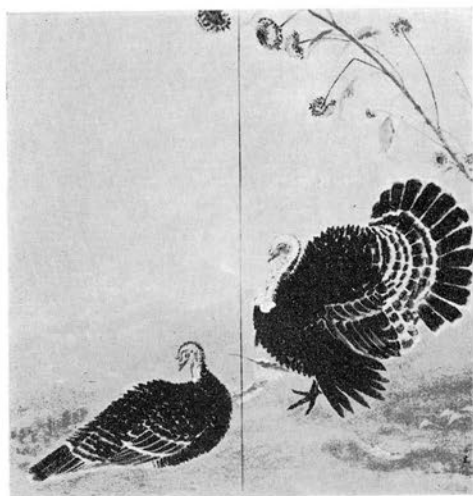
一三一 禪苑清規 (文展) 河原悦人



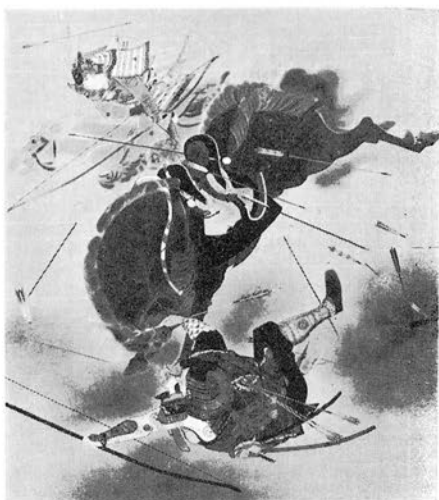
一三六 京洛三女 (文展) 不二木阿古



一三三 祖先と俱に在り (文展) 鴨下晃湖



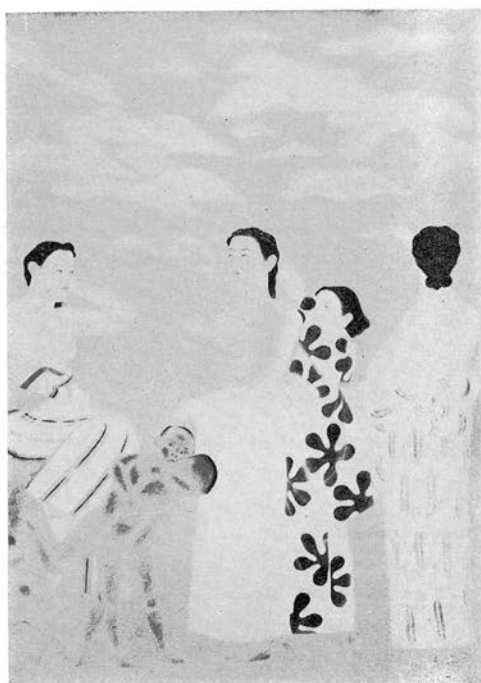
一三九 七面鳥 (文展) 川崎小虎



香果戸森 (展文) び叫矢 七三一



一四〇 紅紫 (文展) 秋野不矩



治明本橋 (展文) 雲和夕 八三一



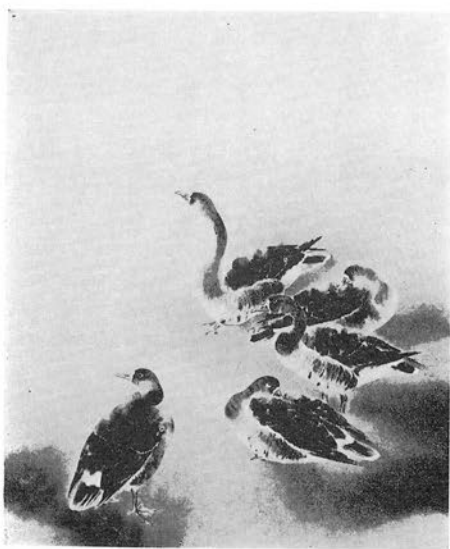
郎八平田福 (展文) 柿青 一四一



觀大山橫 (展文) 宮神太皇 四四一



一四二 碯 (文展) 上村松園



一四五 黎明 (文展) 八木岡春山



一四三 盲女と花 (文展) 奥田元宋



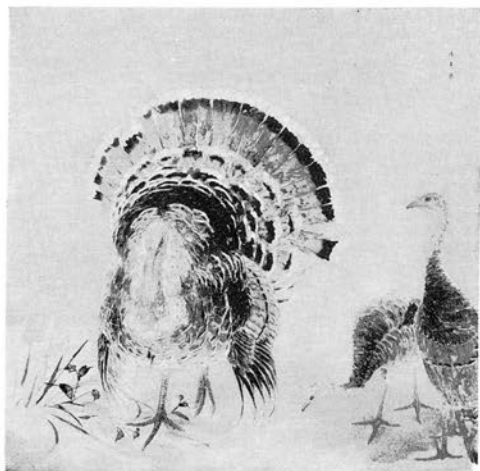
一四六 時雨る、山湖 (文展) 川村曼舟



一五〇 千代尼(文展) 太田 聰 雨



彦 毅 田 安 (展文) 兵姫勲子孫 七四一



一五一 七面鳥(文展) 兒玉 希望



堂 玉 合 川 (展文) 蔭の樹一 八四一



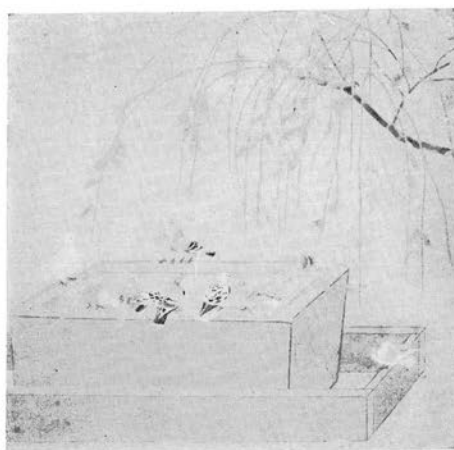
雲 翠 室 小 (展文) 犬軍 二五一



一四九 凱陣交歡(文展) 菊池 契 月



一五三 神橋(文展) 宇田 萩 郵



一五四 齒くろめ(文展) 伊藤 小 坡



一五五 一致對敵(文展) 西澤 信 畝



一五六 郊外風景(文展) 村雲 大 樸子



一五七 池上秀畝(文展) 香國 七五一



一五八 古事記(游能甚呂島)(文展) 鈴木 朱 雀

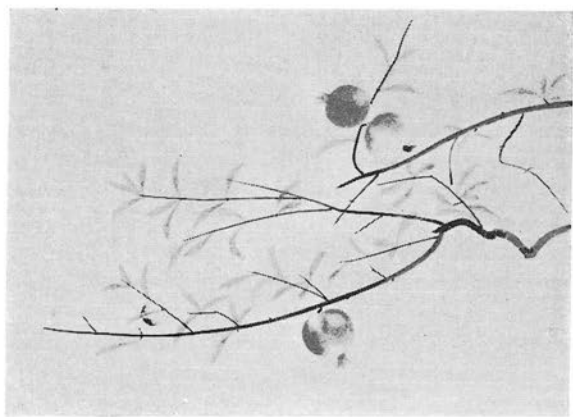




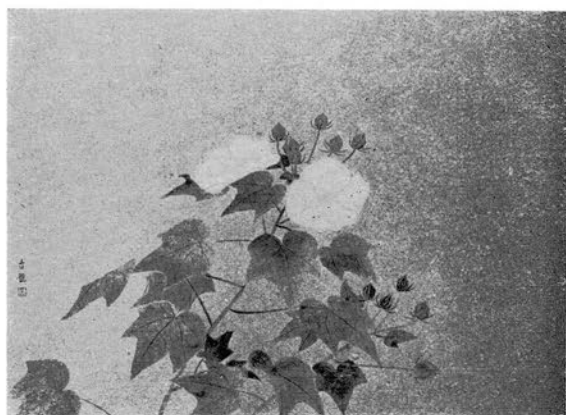
一五九 夕立雲（個展） 川端 龍子



一六〇 實と花（双幅）（七絃會展） 小林 古徑



上同 一六一

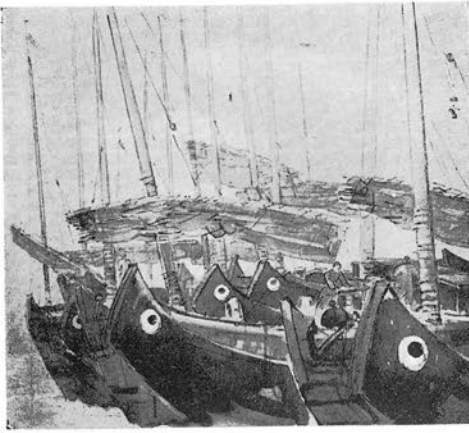


一六二 大楠公（七絃會展） 前田 青邨

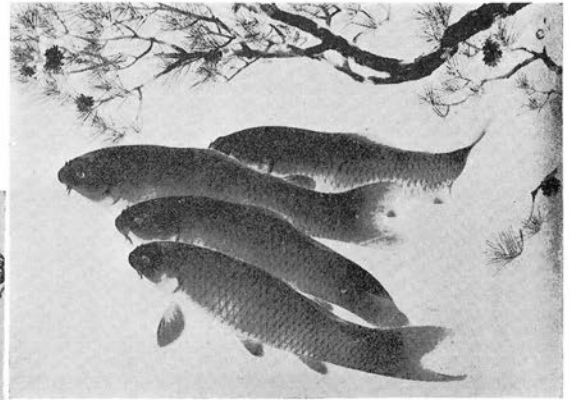


一六三 歌舞伎の始（七絃會展） 鍋木 清方





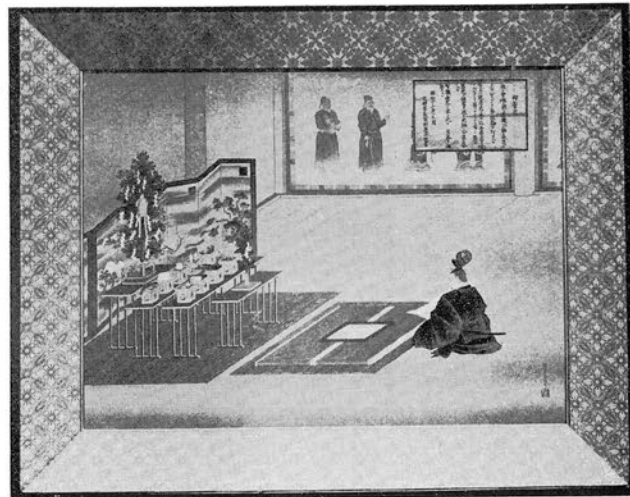
(浦六十海上) 舟泊 五六一  
雪關本橋 (展個)



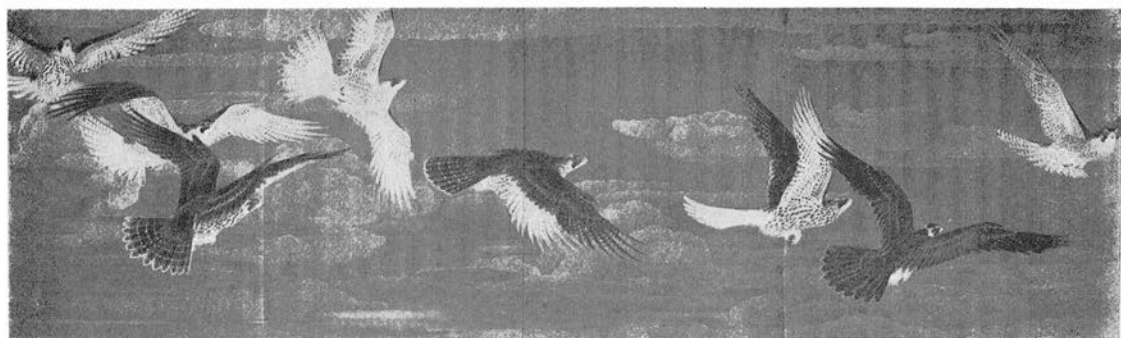
子 龍 端 川 (畫命下御中宮) 圖鯉松 六六一



子 龍 端 川 (畫命下御所御宮大) 巴鯉 七六一



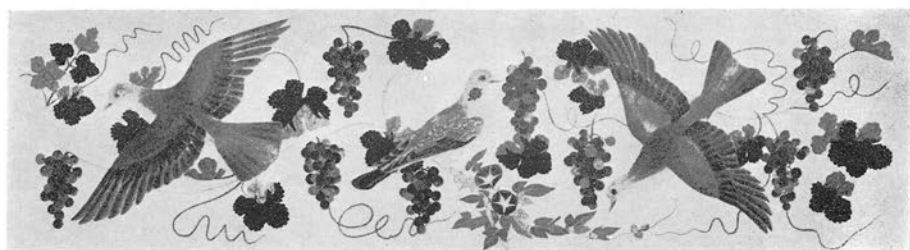
一六八 五箇條御雪文奉戴之圖  
(京都市崇仁隣保館掲揚記念畫)  
猪飼 晴谷



光 翠 田 福 (畫壁カスラノルビ日朝京東) 内ノ作部三「慈八威武振」 九六一



象 印 本 堂 (畫壁塔大本根山野高) 内ノ畫飾裝部下像祖八宮眞 〇七一



上同 一七一



一七二  
アジアの女 (京都丸物壁畫)  
杉本哲郎



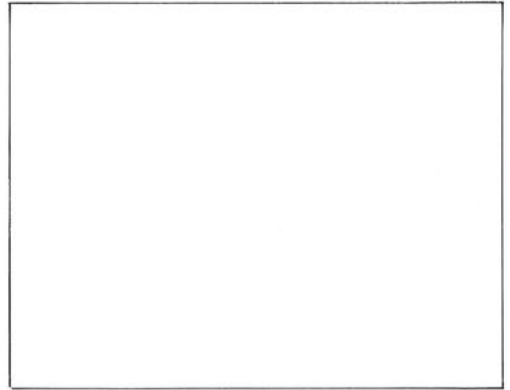
造 薫 南 (展個) る薫風 六七一



彦 美 岡 熊 (展個) (島大) 道樺 三七一



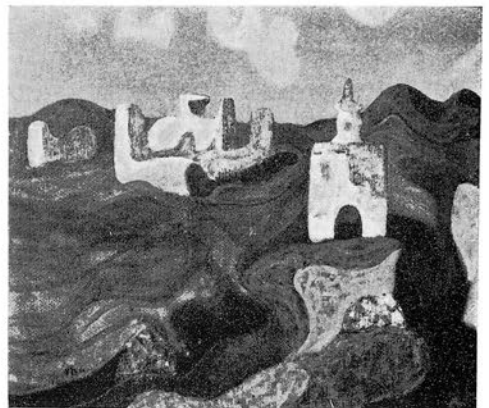
一七七 裸婦 (個展) 長谷川 昇



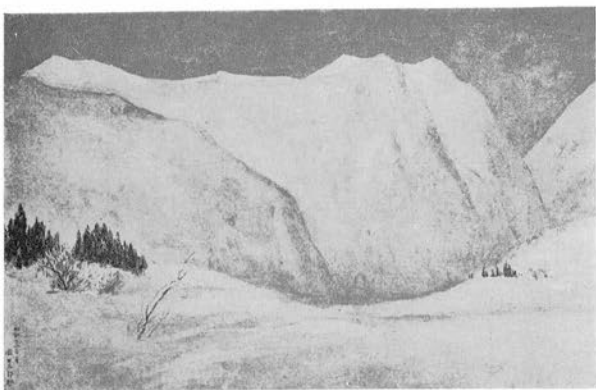
三 良 木 鈴 (展個) 蹟遣のルーメク 四七一



一七八 櫻島 (白日會展) 萩野 康 兒



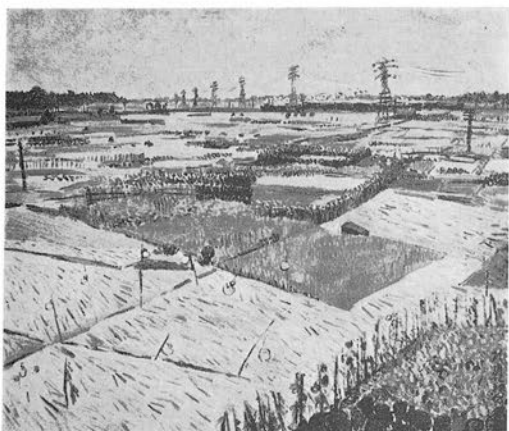
彰 尾 中 (展會行四) 上丘 五七一



助郎三田岡 (辰台春) 境國越岩 二八一



一七九 夏の海(白日會展) 池部 鈞



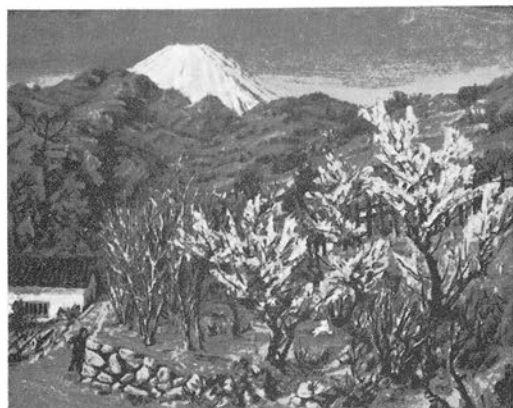
根仁間野 (展入二谷熊間野) 田稻る實 三八一



一八〇 椿(白日會展) 富田温一郎



藏勝見里 (展個) 椿寒 四八一

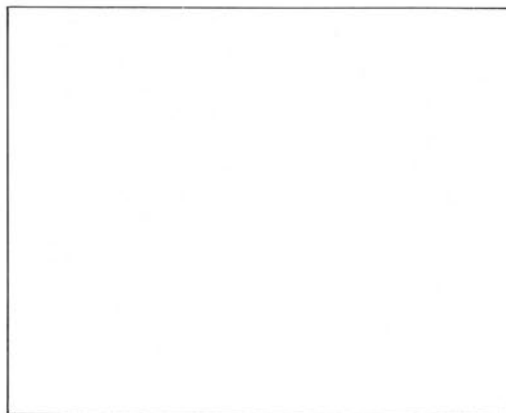


土堅嶋矢 (辰台春) 春早 一八一





一 研 村 中 (展會風光) 地據根 八八一



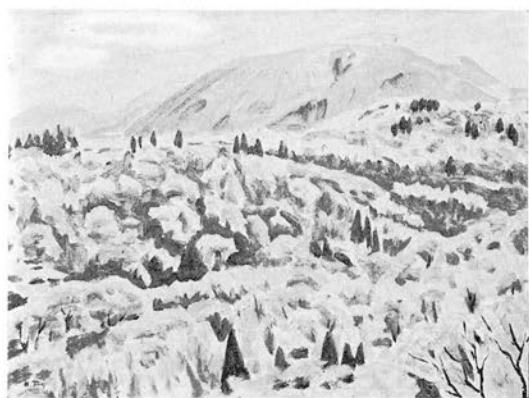
彦 滋 川 石 (展會風光) 々人のテツユヒ 五八一



之 重 野 島 (展會風光) 内室 九八一



一八六 放浪者 (光風會展) 朝井 閔右衛門



永 辻 (展會風光) 秋 〇九一



一八七 薔薇 (光風會展) 清水 良雄





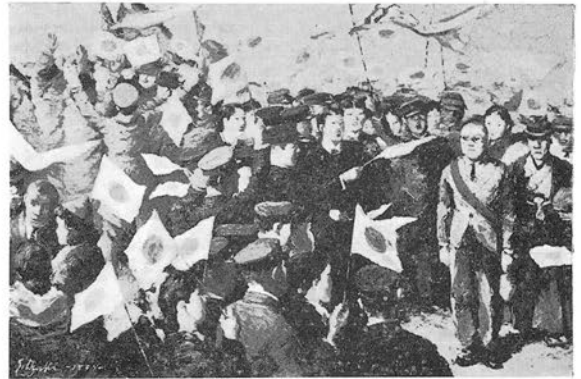
新 家 古 (展會協家術美新) 場魚養 四九一



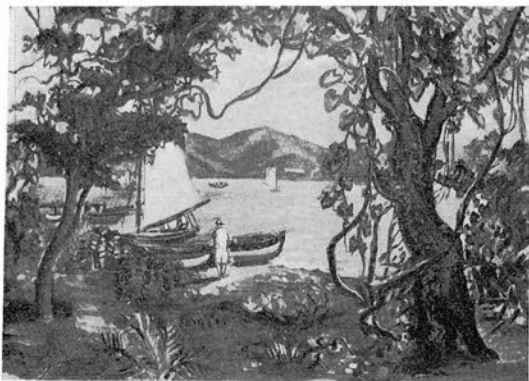
一九一 畫室にて (光風會展) 大河内信敬



一九五 青帽子 (新美術家協會展) 近藤光紀



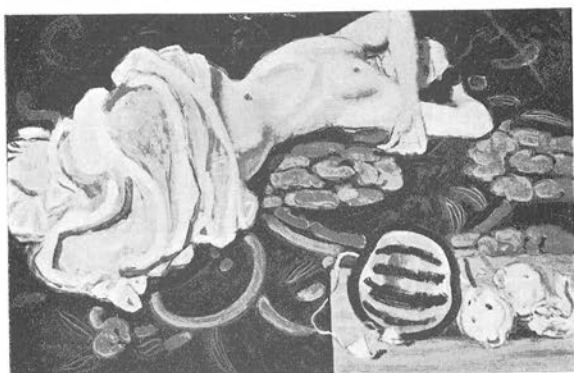
郎 三 崎 尾 (展社玄旺) てれら送に聲の呼歡 二九一



彦 國 川 早 (展會協家術美新) 畔湖 六九一



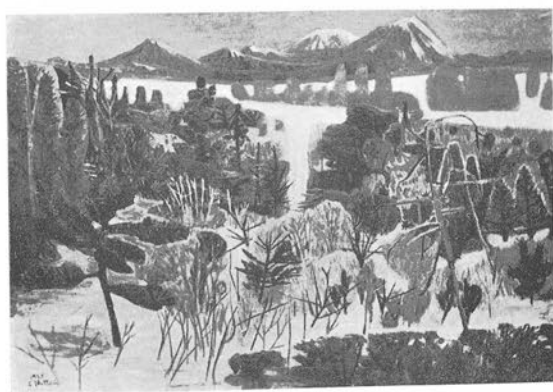
一九三 玩具のクマと人物 (旺玄社展) 田澤八甲



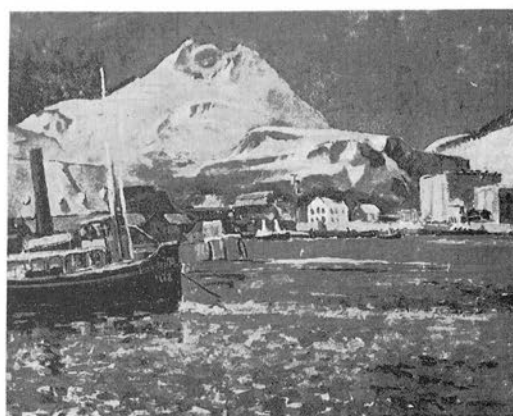
郎 三 本 宮 (展會協家術美新) 物敷い青 〇〇二



一九七 雪晴れの小みち (新美術家協會展)  
田 邊 三 重 松



郎 一 正 部 服 (展會協家術美新) 原高春早 一〇二



策 善 村 中 (展會協家術美新) 港の冬 八九一



二〇二 自分の顔を見る鏡 (個展) 伊 藤 織 郎

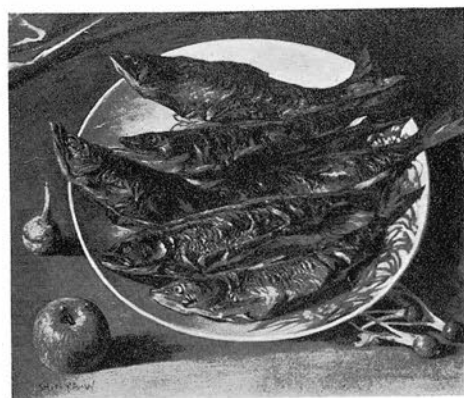


雄 竹 田 寺 (展會協家術美新) ムーゲーロボ 九九一

二〇三 紅茶 (太平洋畫會展) 高村 眞夫

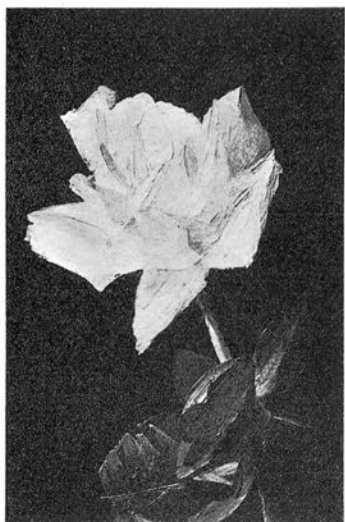


霞晚山丸 (展會畫洋平太) 黒石紅口 四〇二

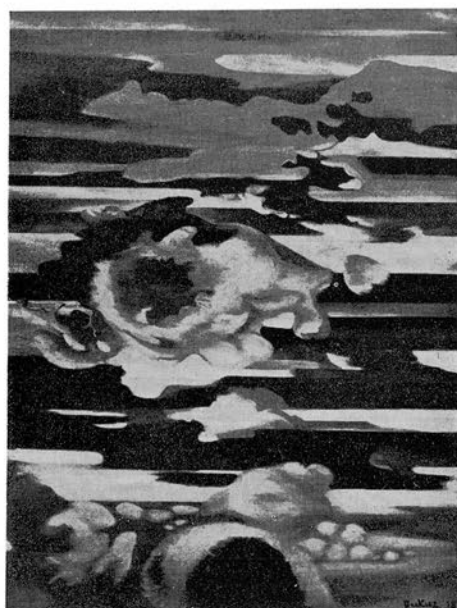


也 審 部 渡 (展會畫洋平太) 物静 五〇二

二〇六 ばら (サムホール個展) 山本 鼎



二〇七 雲(夕) (獨立展) 福澤 一郎

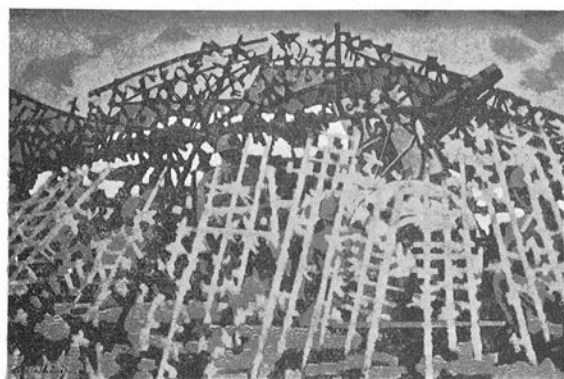




助之喜原老海 (展立獨) 浴沐 一一二



外軌口川 (展立獨) 鳥群 八〇二



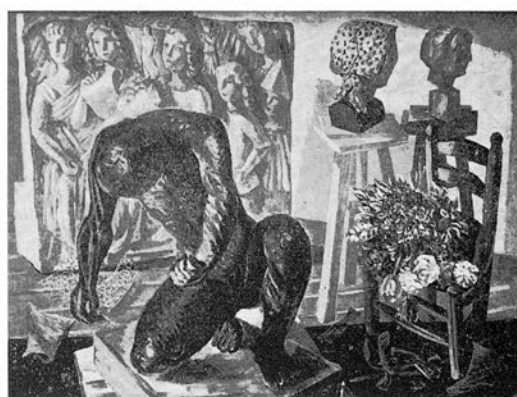
之登水清 (展立獨) 裝擬 二一二



二〇九 蕃人 (獨立展) 野口彌太郎

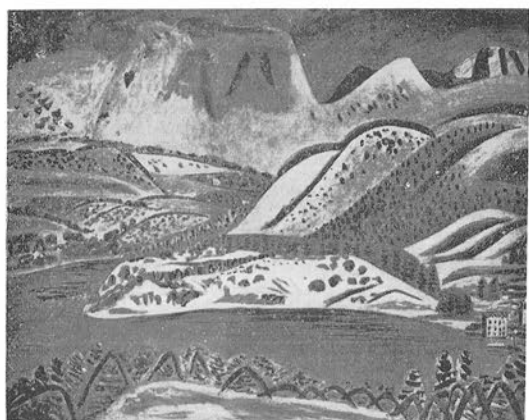


郎太國田須 (展立獨) 田水 三一二

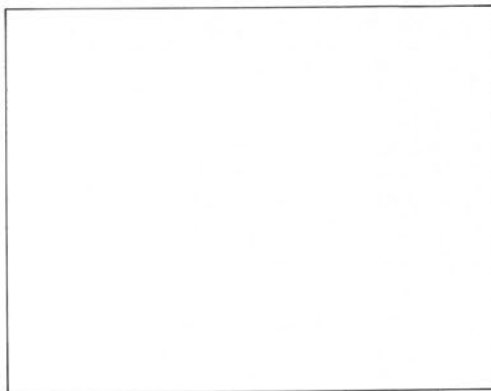


郎四達島高 (展立獨) 室剗彫 〇一二





郎三善島兒 (展立獨) 根箱 七一二



郎一佐中田 (展立獨) 土邊 四一二



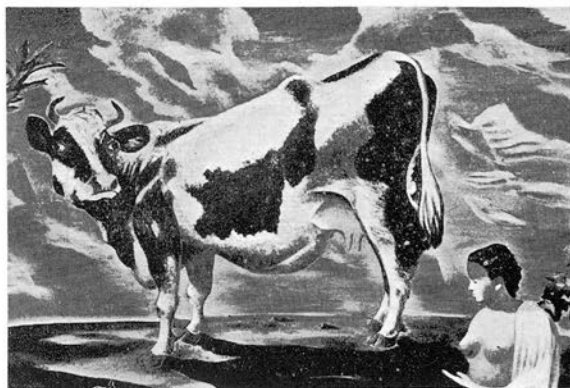
作和林小 (展立獨) 中山 八一二



二一五 丘の上(獨立展) 鈴木 亞夫



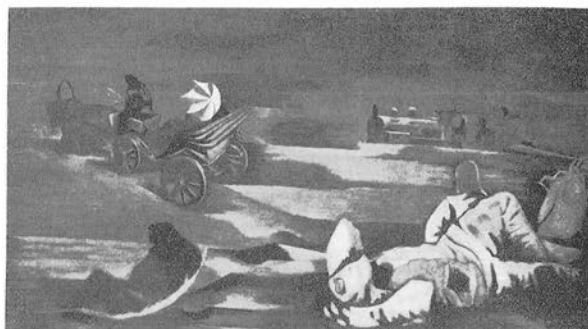
二一九 女の肖像(獨立展) 林 武



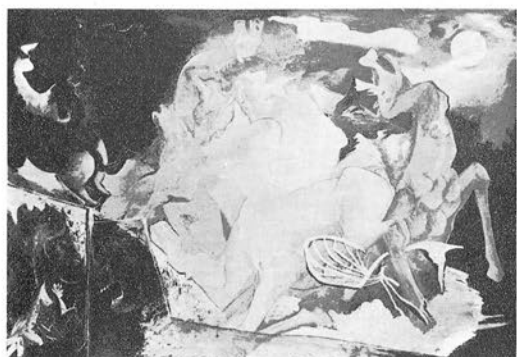
二一六 乳牛(獨立展) 松島 一郎



(展會協術美線主) 内室るえ見の線平水 三二二  
七 惣 間 高



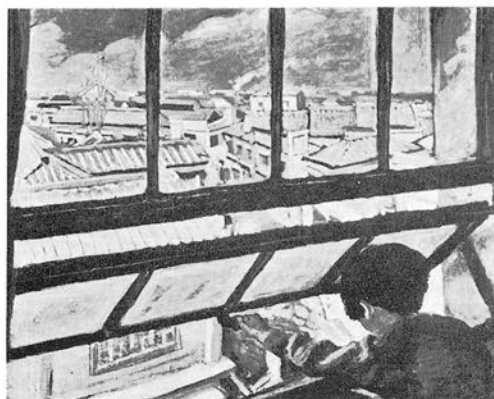
德 保 木 鈴 (展立獨) 々人の陸大 〇二二



治 清 田 堀 (展會協術美線主) 光夜 四二二



巍 山 中 (展立獨) (念記洲滿) A 土樂道王 一二二



信 博 子 金 (展會袖連) 窓 五二二



二百八本橋 (展會協術美線主) 島松 二二二





蔵 謙 口 野 (展會光東) リドヨヘ 九二二



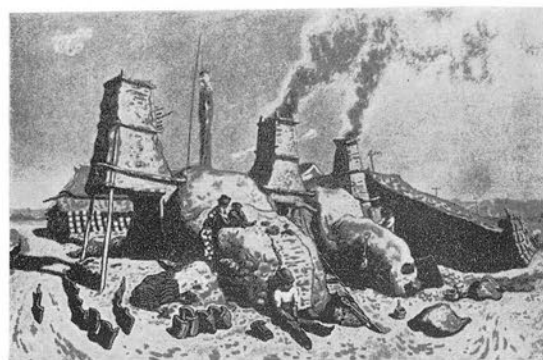
郎 太 曾 井 安 (展會袖連) 薇 薔 六二二



二  
三  
〇 柘 榴 (展會光東) 熊 岡 美 彦



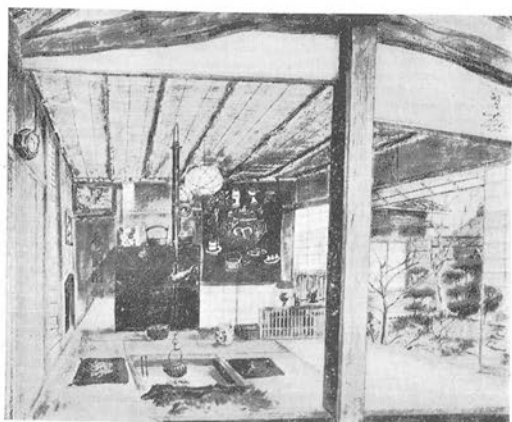
彦 文 井 金 (展會朝白) スーコ士富 奈 川 七二二



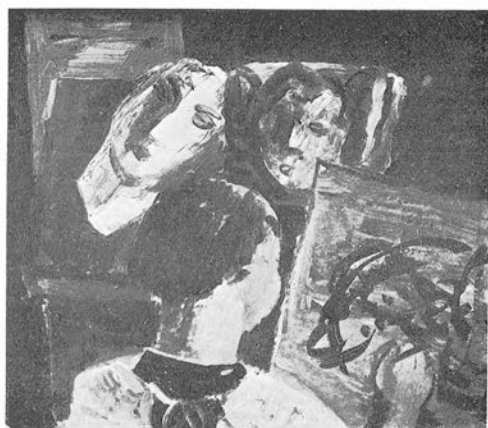
之 憲 島 牛 (展會杜上) 月 五 一三二



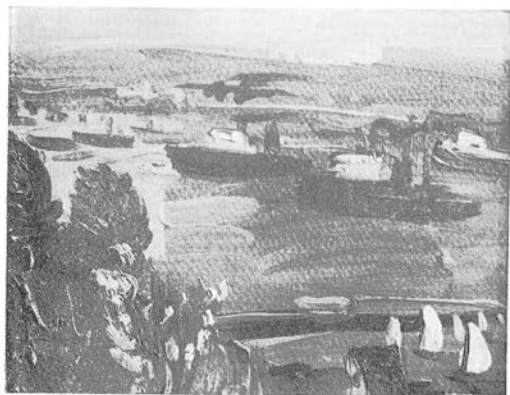
章 一 藤 佐 (展會光東) 雪 の 山 八二二



治 嗣 田 藤 (展品小會科二) 室畫の私 五三二



郎 四 達 島 高 (展品小立獨) 品小 二三二



元 紀 川 中 (展品小會科二) 景風 六三二



二三三 散形(獨立小品展) 中山 巍



二三七 犢(國畫會展) 庫田 蒙



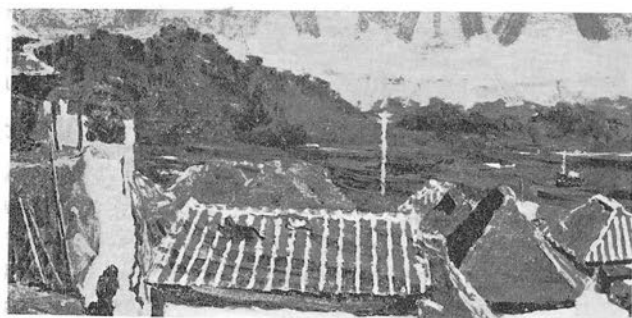
三省 崎 山 (展個) 景風 四三二



別府一郎 (國畫會展) 大山 一四二



河野通勢 (國畫會展) 女子奏樂圖 八三二



青山義雄 (國畫會展) 太海風景 二四二



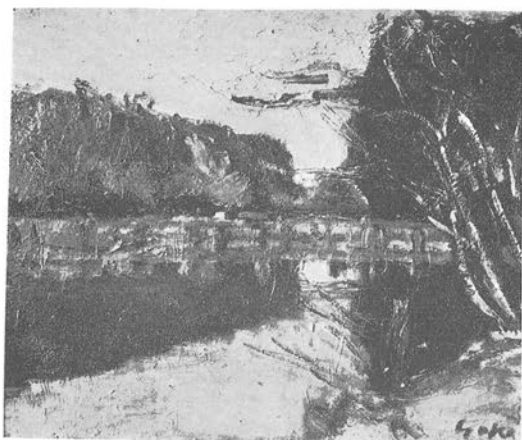
梅原龍三郎 (國畫會展) 竹窓裸婦 九三二



田英夫 (個展) 移民 三四二



二四〇 晴子 (國畫會展) 梅 貞雄



二四七 早春の池(井頭)(春陽會展) 横堀角次郎



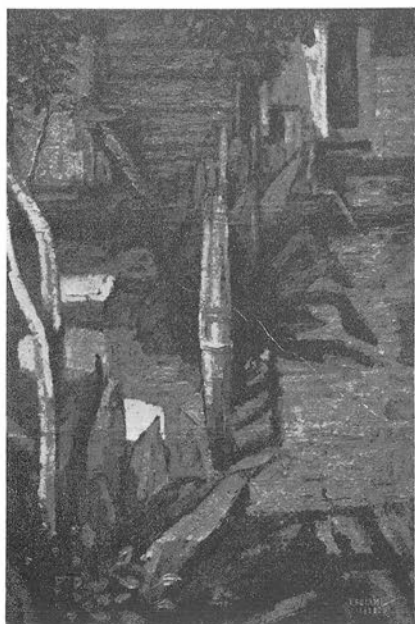
助之善中田 (展會陽春)(門厦)港の春早 四四二



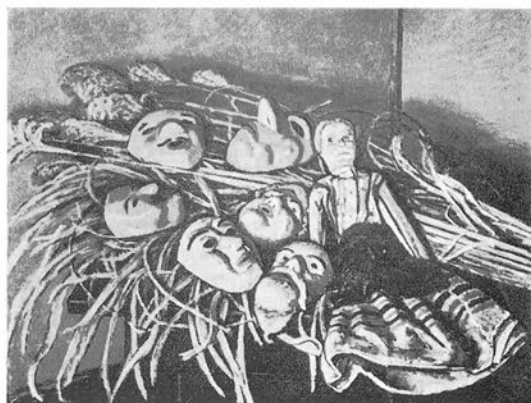
三 鷄井石 (展會陽春)趾城 八四二



二四五 枯蓮池(春陽會展) 吉田達磨



二四九 庭(春陽會展) 二見利節



郎四山加 (展會陽春)等面と薄 六四二





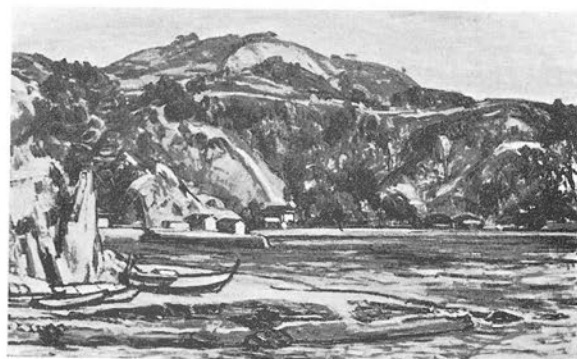
一郎源立足 (展會陽春) 嶽街曾木と鞍乗 三五二



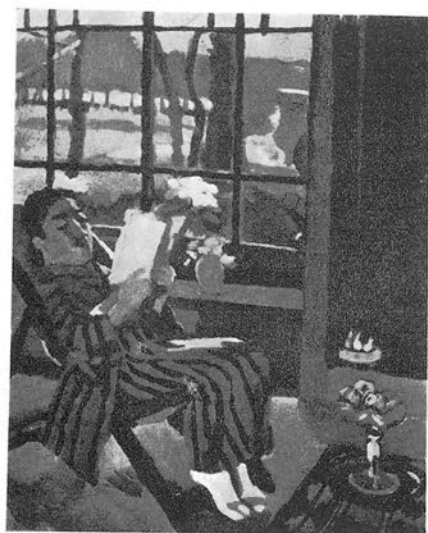
二五〇 緑衣の婦人(春陽會展) 水谷 清



八 莊 村 木 (展會陽春) (二)談綺東澄 四五二



雄 田 栗 (展會陽春) 津久鹽の冬 一五二

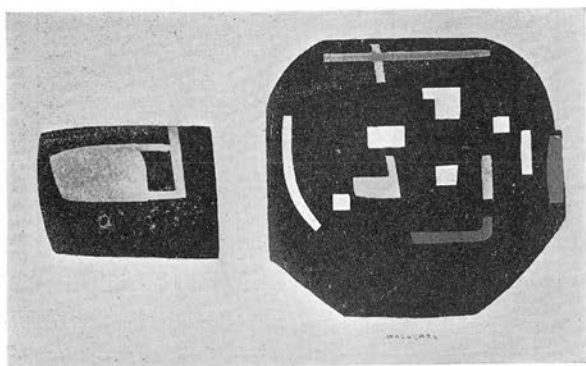


二五五 小憩 (春陽會展) 小林徳三郎

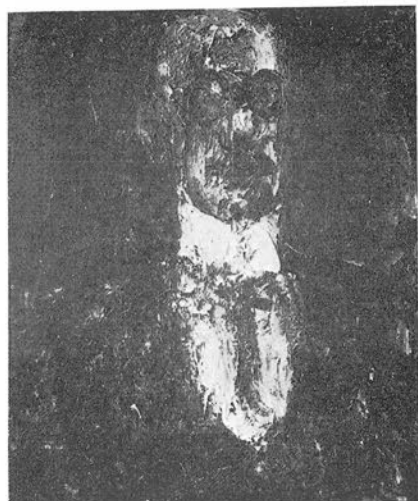


二五二 母子像(春陽會展) 中谷 泰

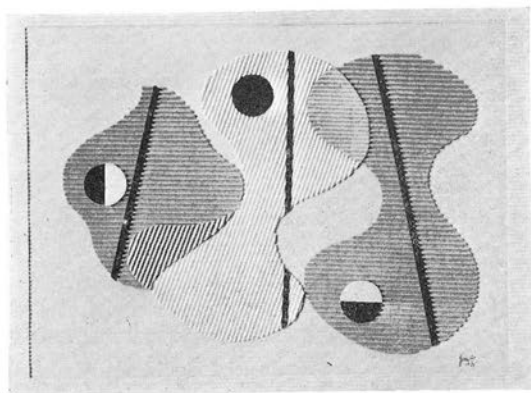




誠正井村 (展會協家術美由自) 廟靈百 九五二



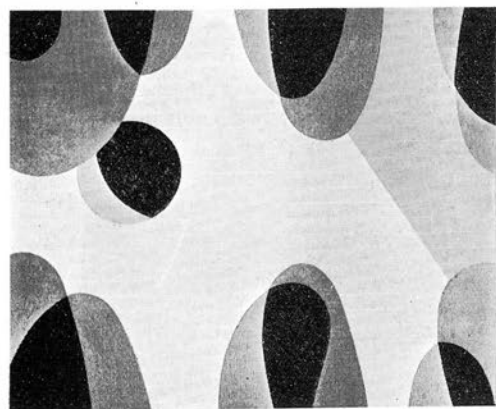
二五六 高カラの男(春陽會展) 島海青兒



潤岡平 (展會協家術美由自) 成構 〇六二



政一川中 (展會陽春) 江入 七五二



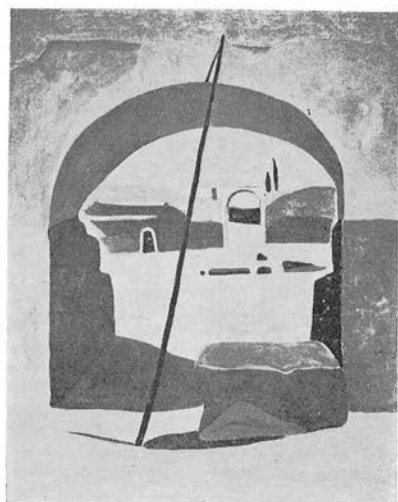
基煥金 (展會協家術美由自) 鵜白 一六二



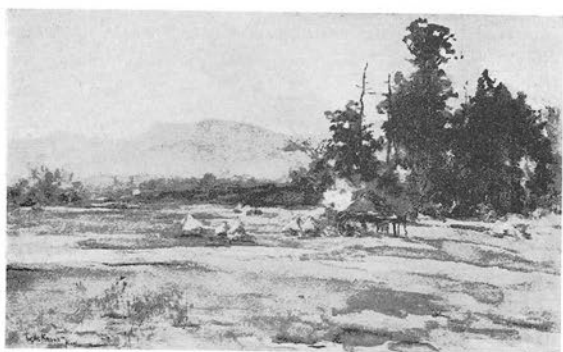
太典藤遠 (展會陽春) スウハットヨ 八五二



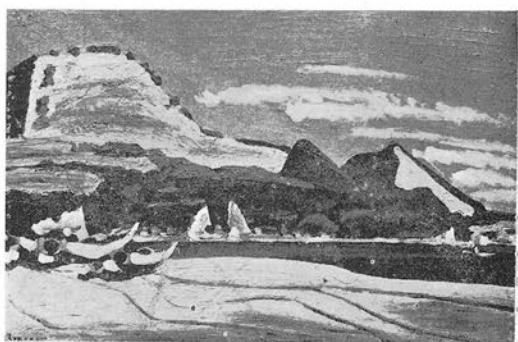
之克井鍋 (展畫洋西關全) 物靜上草 五六二



二六二 風景 (自由美術家協會展) 矢橋六郎



郎一欽川石 (展會畫彩水本日) 摩多奧の春 六六二



郎太徳岡高 (展畫洋西關全) 豆伊 三六二



亭柏井石 (展會畫彩水本日) 圖樂行春晚 七六二



二卓出小 (展畫洋西關全) 景風瀟江 四六二



二七一 花中の人(六潮會展) 中川紀元



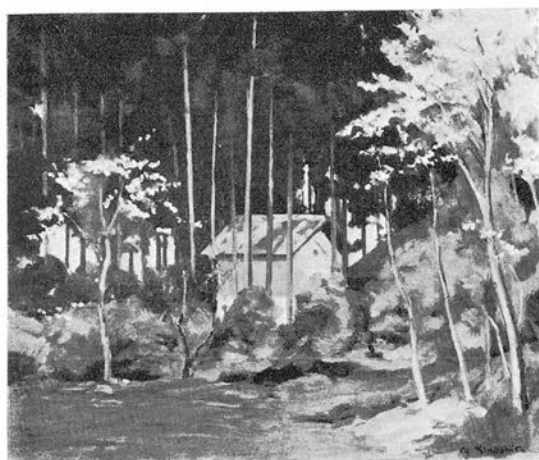
二六八 雪後(京都市展) 黒田重太郎



二七二 庭の牡丹(六潮會展) 牧野虎雄



作製同共人同 (展社林董) 畫壁變事念記悼義信城 九六二



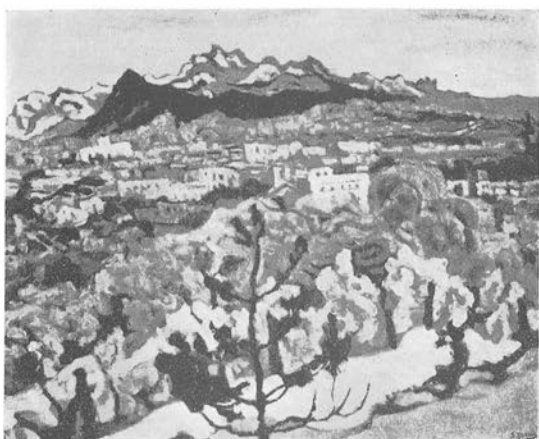
二七三 櫻と桃(一水會會員展) 木下義謙



二七〇 こでまり(個展) 島崎鶏二



(展念記年周二派作制新) 書讀 七七二  
郎一 熊 猪



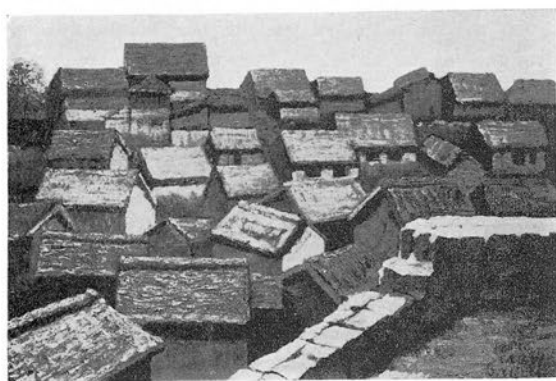
二七四 京城府(清光會展) 安井曾太郎



年周二派作制新) ムーホ線省の夏 八七二  
夫英田野 (展念記



郎三龍原梅 (展個)(一のそ)山崎高 五七二



巖 田 内 (展念記年周二派作制新) 家 九七二



二七六 顔(春台大阪特別展) 有馬さとえ

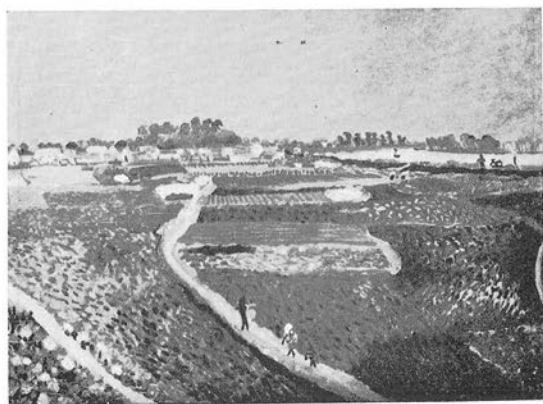




二八三 花売り (二科展) 藤井二郎



吾省倉粳 (展科二) 景風 ○八二



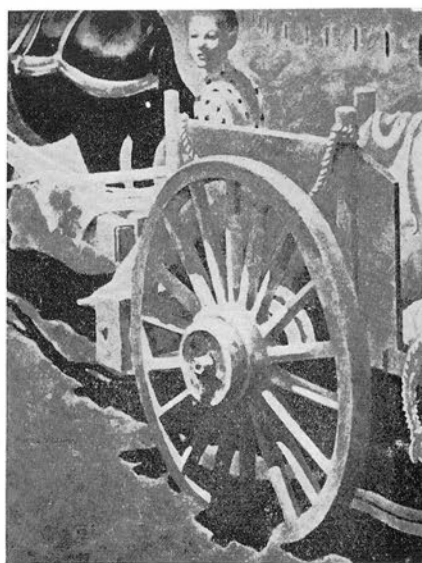
根仁間野 (展科二) 園田 四八二



郎三本宮 (展科二) 女の根式 一八二



吾省口田 (展科二) 族家の人士 五八二



二八二 夏の晝 (二科展) 大澤昌助





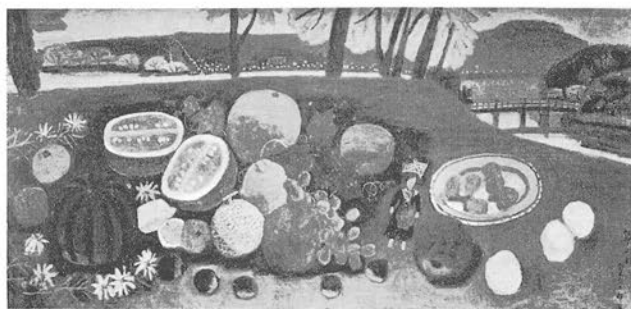
三 金枝國 (展科二) 草夏 九八二



二八六 草原(二科展) 島崎鶏二



三 謙田 闊 (展科二) 合衆 〇九二



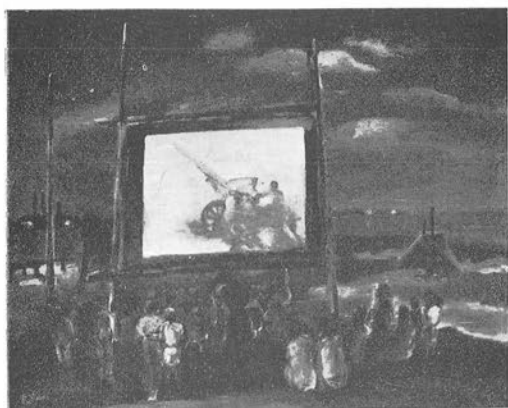
郎太信木鈴 (展科二) 趣情會都 七八二



治嗣田藤 (展科二) (新那) 前の室 一九二



二八八 建設(二科展) 寺田竹雄



之克井彌 (展科二) スーユニ況戦 五九二



郎三得宗正 (展科二) 丘砂 二九二



治嗣田藤 (展科二) (新那)別訣の島 六九二



介之孝村田 (展科二) 婦護看 三九二



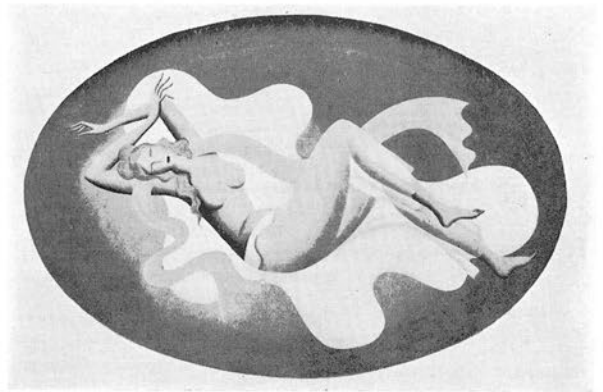
二九七 突撃 (二科展) 向井潤吉



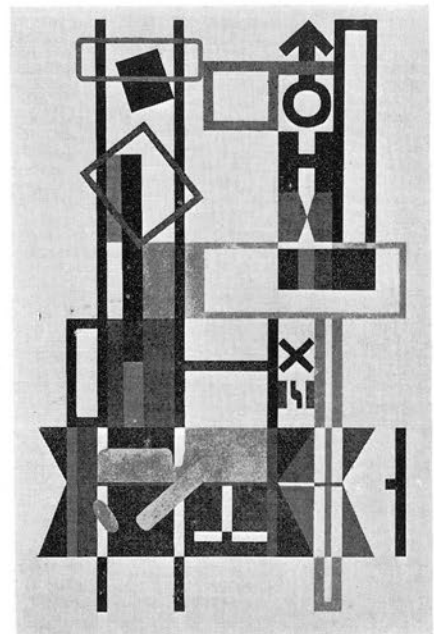
信原栗 (展科二) (戦撃追ノ方西州徐)分五十止休小 四九二



北川民次 (展科二) 静物 八九二

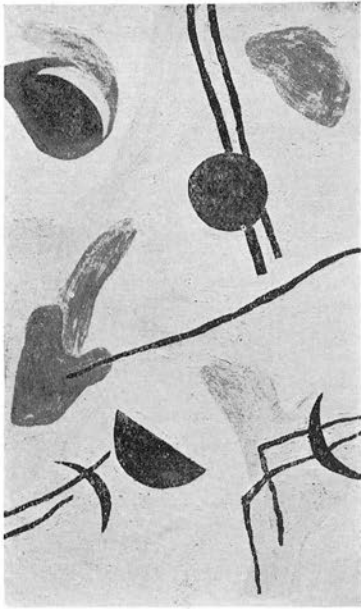
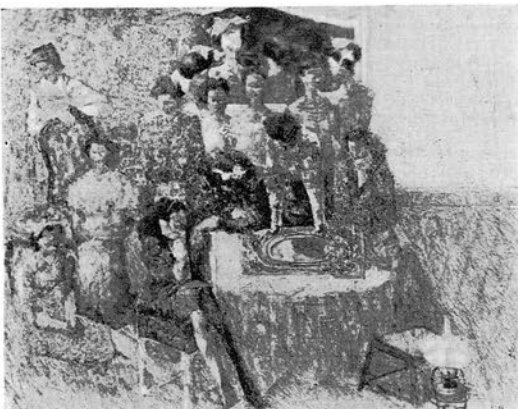


東郷青児 (展科二) 女 九九二

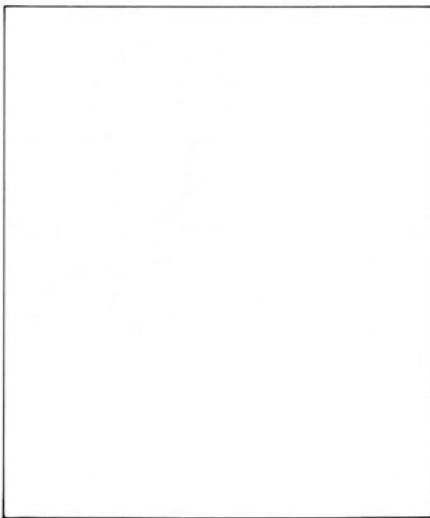


三〇〇 設定一九三八 (二科展) 廣幡 憲

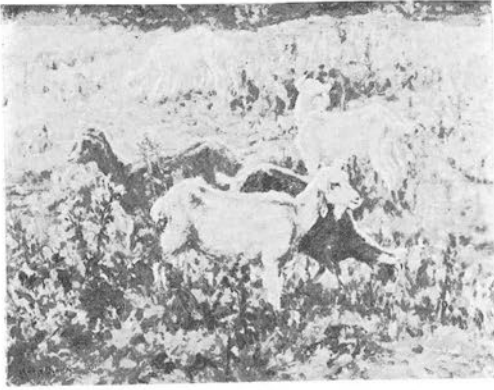
三〇三 占 (二科展) 伊藤 織郎



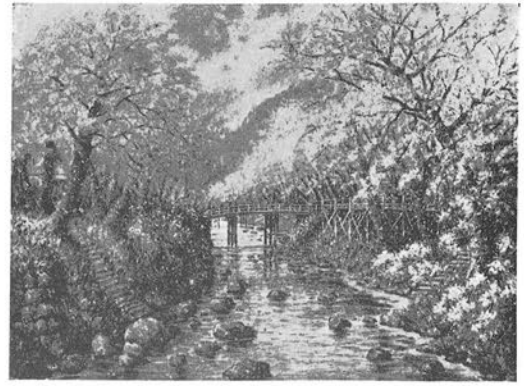
三〇一 象(D) (二科展) 山口長男



三〇二 100-x-83 (二科展) 山本敬輔



大澤海蔵 (展文) 草はら 七〇三



彰城貞徳 (展個) 桜花 四〇三



三〇八 春 (展文) 鈴木千秋馬



三〇五 秋の音 (展個) 林重義



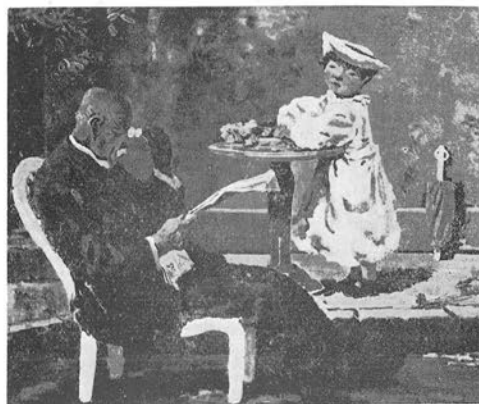
安斎信 (展文) 室に 九〇三



三〇六 麗日 (展文) 森田元子



三一〇 O先生と孫(文展) 大貫松三



三一三 曉の金剛山(文展) 齋藤興里



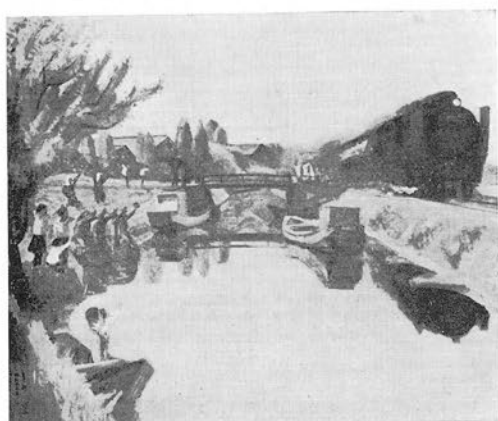
三一四 金藏獅子(文展) 森田茂



三一二 運動場に於ける偉(文展) 中野和高



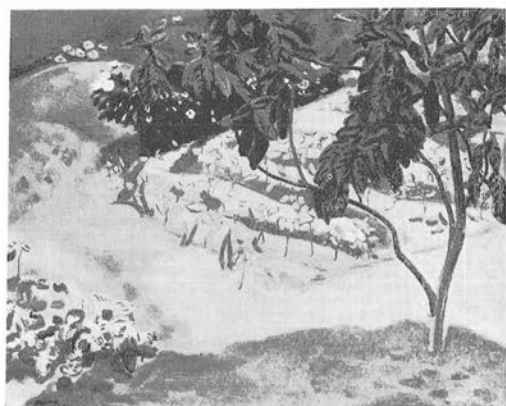
三一五 征軍(文展) 太田喜二郎







三一九 松卜竹(文展) 黒田 翠



三一六 庭後(文展) 阿以田 治修



衛 俊 林 (展文) 景小峽山 〇二三



な は 本 橋 (展文) 境静 七一三



三二一 室内(文展) 中村 研一



勝 武 垣 眞 (展文) 樺白と湖山 八一三



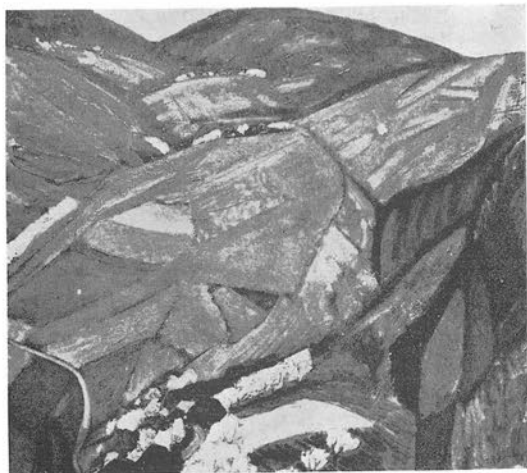
八萩村木 (展文) 戦作 五二三



雄義山青 (展文) 北洋落日 二二三



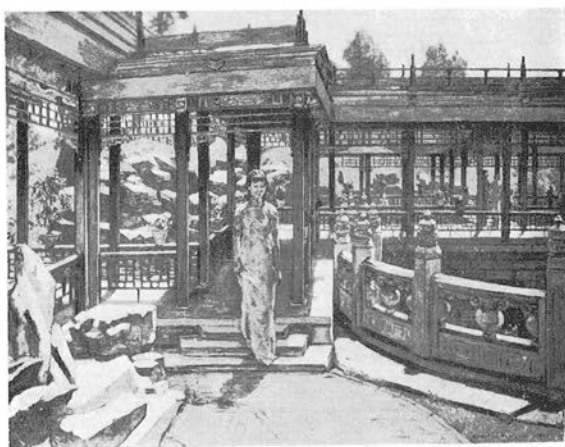
郎一理島川 (展文) 九龍壁(京北) 六二三



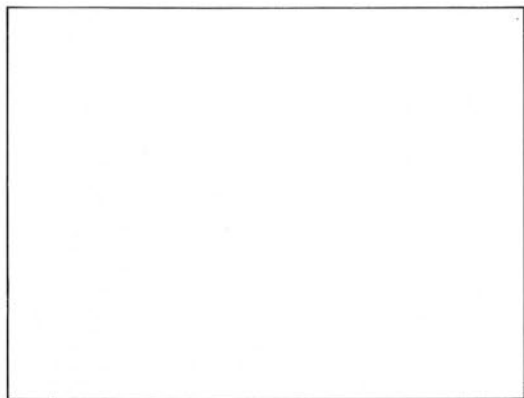
二武島藤 (展文) 天到耕 三二三



三二七 嫁婦扇(文展) 梅原龍三郎



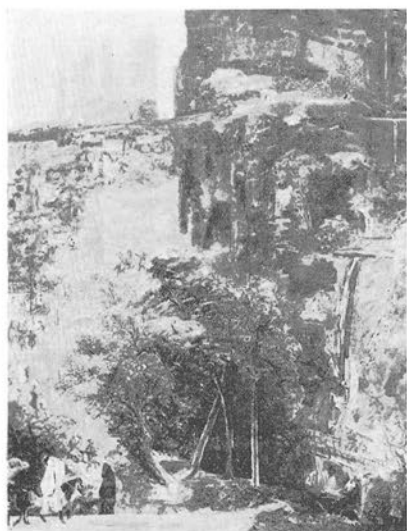
光弘澤中 (展文) 京万字樓 四二三



彦 滋 川 石 (展文) 屋治鍛の濃信 一三三



苗 香 田 和 (展文) 景風封開 八二三



三三二 草蘆三顧(文展) 河野通勢



治 寅 川 石 (展文) 港 九二三



郎次作保久大 (展文) 里九十九 三三三



三三〇 沈黙(文展) 中村不折



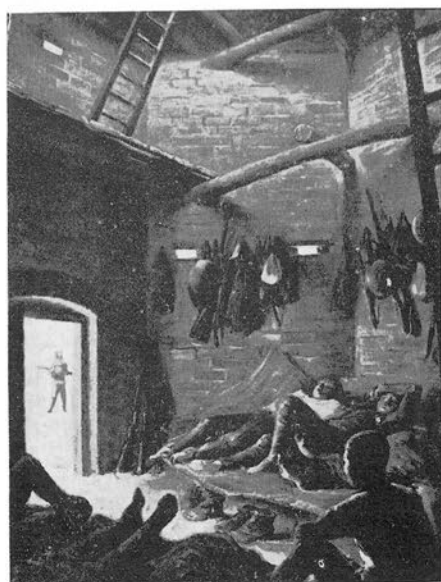
三三七 樹下棋戦圖 (文展) 横藤種男



七 惣間高 (展文) 朝 四三三



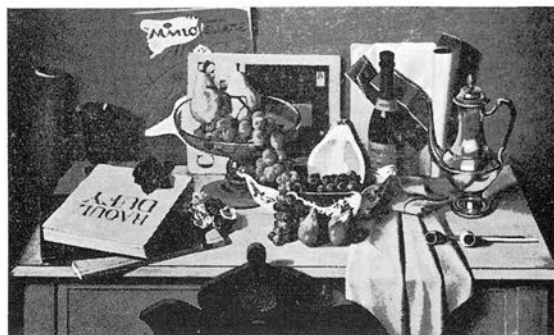
己 克宅三 (展文) 岸海の豆伊 八三三



三三五 粉河を護る (文展) 伊原宇三郎



三三九 敵地へ出發 (文展) 鶴田吾郎



郎太真達安 (展文) 物静 六三三





三三三 溪流(奈良にて)(個展) 和田 英作



造 薫 南 (展文) 羊 緬 〇四三



三四一 アネモネ(個展) 児島 善三郎



三四四 風景(個展) 福澤 一郎



三四二 花(個展) 菅野 圭介

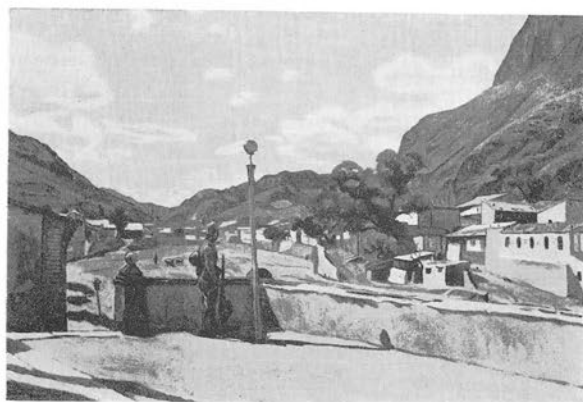




三四八 江南の春（一水會展） 有島生馬



作善村中（展會水一）湖山 五四三



亭柏井石（展會水一）穩平疆蒙 九四三



三敬山小（展會水一）（佛南）望遠コナモ 六四三



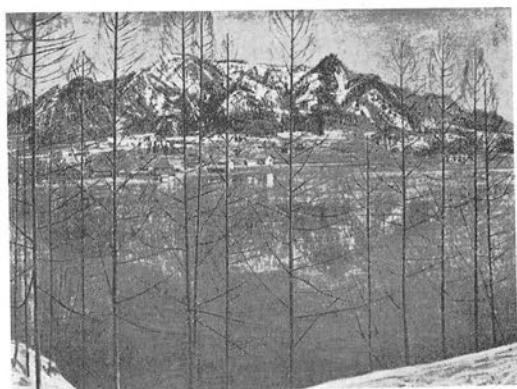
謙義下木（展會水一）てに下のらくざじふ 〇五三



三四七 母と子（一水會展） 池部 鈞



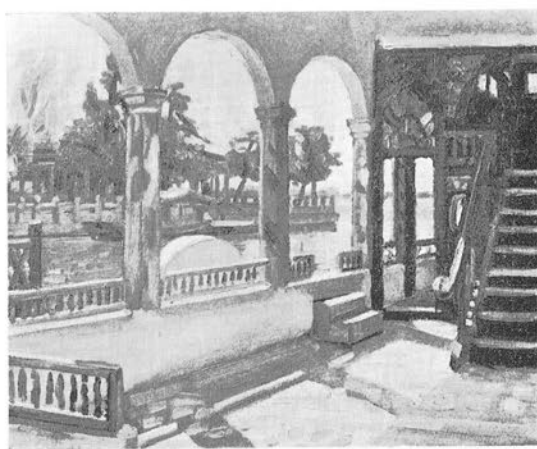
三五四 樹蔭 (新制作派協會展) 鵜田 和



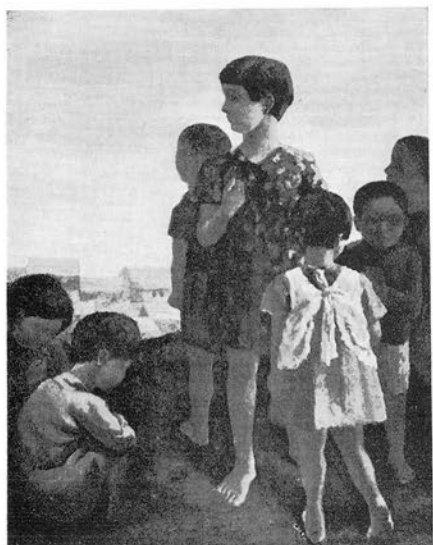
誠 田 高 (展會水一) 湖の中 一五三



喜 益 松 小 (展會協派作制新) 家の板着壁 五五三



助之伊 裕 (展會水一) (山壽萬京北) 湖明昆 二五三



三五六 丘 (新制作派協會展) 内田 巖



三五三 少女林泉 (一水會展) 山下新太郎



三六〇 雪 (新制作派協會展) 佐藤 敬



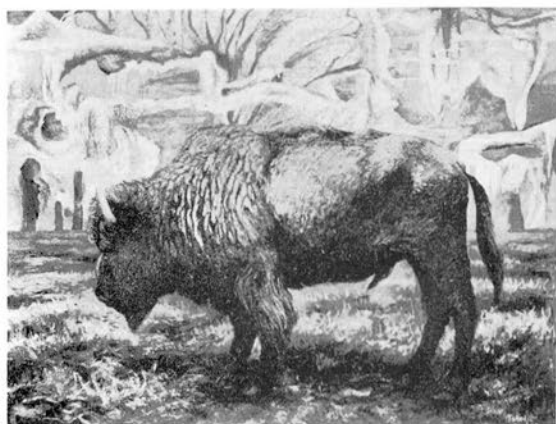
康 田 三 (展會協派作制新) 庭 七五三



雄 利 西 中 (展會協派作制新) 葉紅 一六三



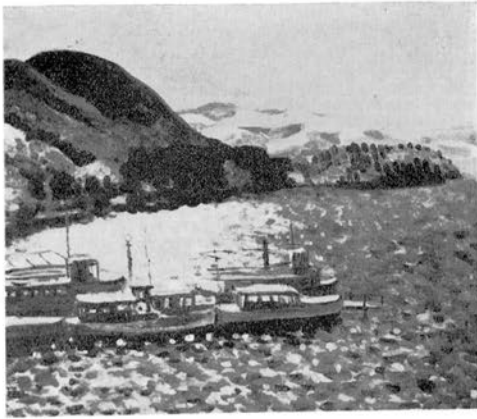
三五八 母達 (新制作派協會展) 伊勢 正義



三六二 野牛 (新制作派協會展) 内田武夫



三五九 習作第一 (新制作派協會展) 鈴木 誠



三六六 午前光 (上弦會展) 和田三造



三六三 魚子達 (新制作派協會展) 小磯良平



二 武島藤 (展個) 出の日の山 七六三



作英田和 (展會弦上) 流細 四六三

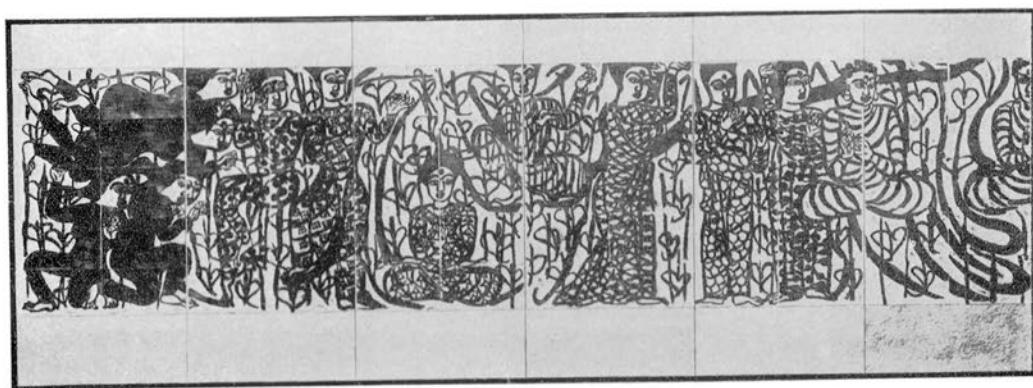


三六八 乳兒 (個展) 海老原喜之助

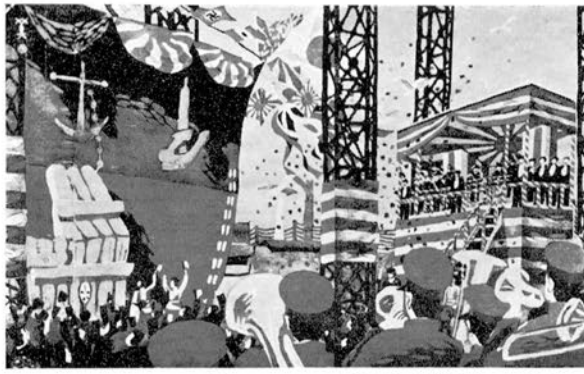


助郎三田岡 (展會弦上) 柳楊 五六三





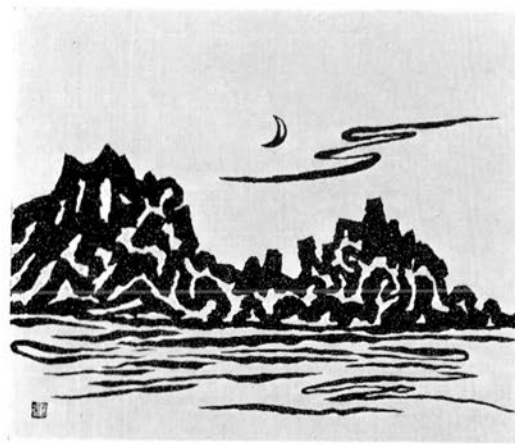




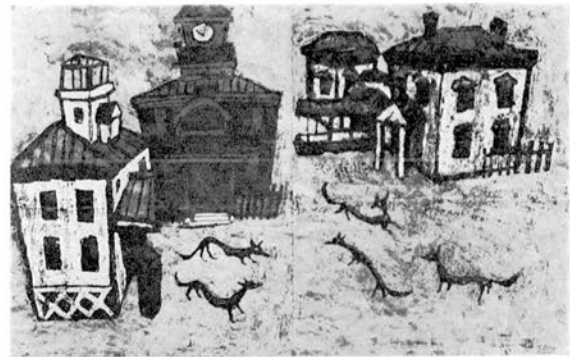
英 西 川 (展文) 水進艦軍 六七三



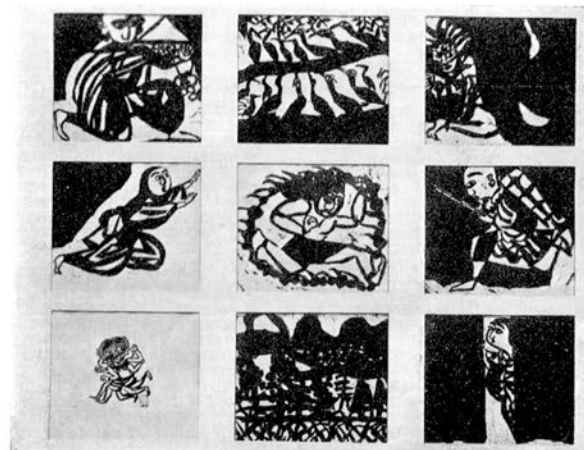
三七三 女大生 (國畫會展) ブブノワ



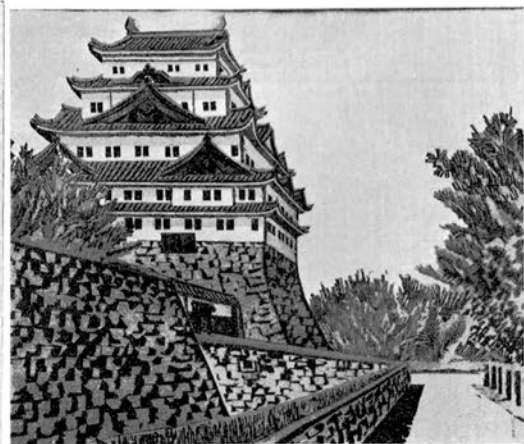
一 蓮 塚 平 (展文) 灣闊尖渡佐 七七三



重 思 野 小 (展會協畫版型造) 街市都 四七三



功 志 方 棟 (展文) 羅茶曼畫版鳥知弄・譜變勝 八七三



帆 千 川 前 (展文) 城屋古名 五七三



三八二 秋田風俗鹿島流し (日本版畫協會展) 勝平得之



郎義瀬永 (展文) クツニクビ 九七三



三八〇 北齋の肖像 (日本版畫協會展) 織田一磨



三八三 日本文化中央鑑賞選ボスター 沖原 薫



雄真木黒 (展會協畫版本日) 島青 一八三



三八七 猫 (院展) 石井 勲三



(展舎心木) 幸の山氏 I 四八三  
嶺 白 田 吉



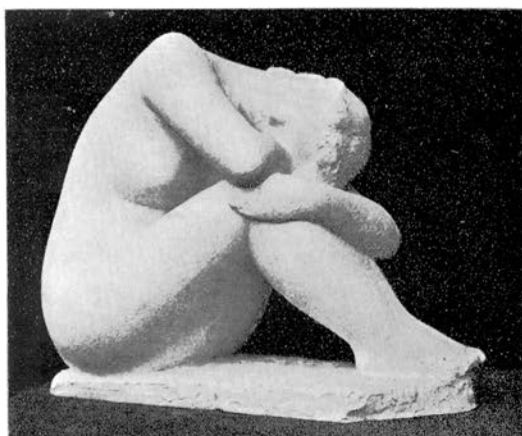
三八八 みづく (院展) 松原 松造



三八五 女立像 (主観美術協會展) 岸崎 猪之助



三八九 七生 (國畫會展) 山内 壯夫



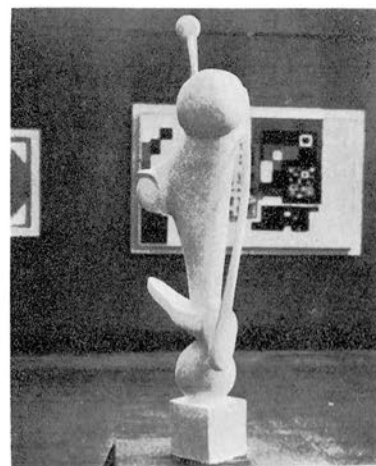
照 藤 安 (展會協術美練主) 作試 六八三



三九〇 記念碑「海の荒蕪」の一部（國畫會展） 清水多嘉示



三九一 オリンピック記念像「冬に寄す」（國畫會展） 本郷新



三九二 作品（自由美術家協會展） 植木茂



三九三 作品（自由美術家協會展） 小野里利信



三九四 少女（構造社展） 萩島安二



三九五 誘惑（構造社展） 齋藤素巖



三九九 庭園風俗コンポジション  
其三人の子供達 (構造社展) 安本良徳



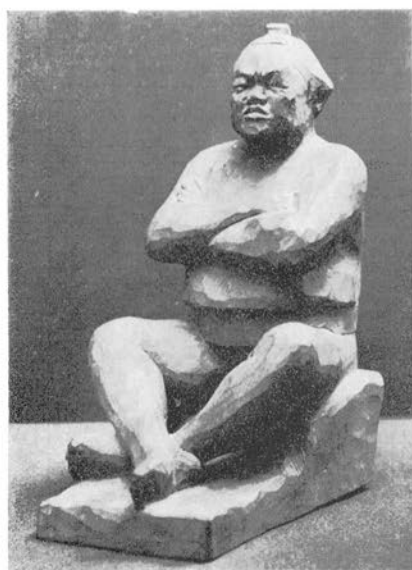
三九六 S子の首 (構造社展) 原田新八郎



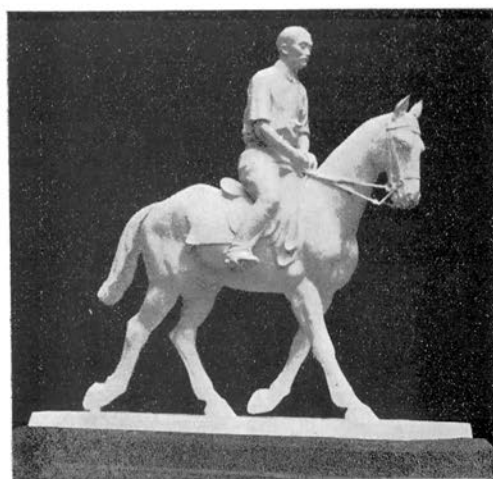
三〇四 石井 鶴 (展品小彫形換相) るまき投手上



三九七 ラグビー (構造社展) 野村公雄



四〇一 力士 (相撲彫刻小品展) 新海竹藏



八三九 李氏騎馬像 (展社造構) 後藤泰彦



四〇二 女（日本彫刻家協會展） 畠村 直久



四〇三 友田若助氏之像（日本彫刻家協會展） 加藤 顯清



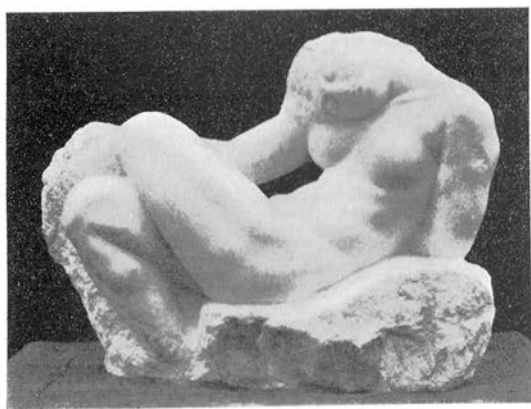
四〇四 腰掛けた女（日本彫刻家協會展） 早川 純一郎



四〇五 氏夫人の顔（日本彫刻家協會展） 片山 義郎



四〇六 まどろむ女（日本彫刻家協會展） 武井 直也



四〇七 五郎犬（本彫會展） 本田 徳義



四〇八 粧（木彫會展） 三木 宗策



四〇九 春（木彫會展） 山脇 敏男



四一一 漲生（木彫會展） 内藤 伸



四一二 猛進（第三部會展） 永原 廣



四一三 座像（第三部會展） 大木 芳朗



三 實 子名日（展會部三第）（りたあの橋楓）る歸民難 ○一四



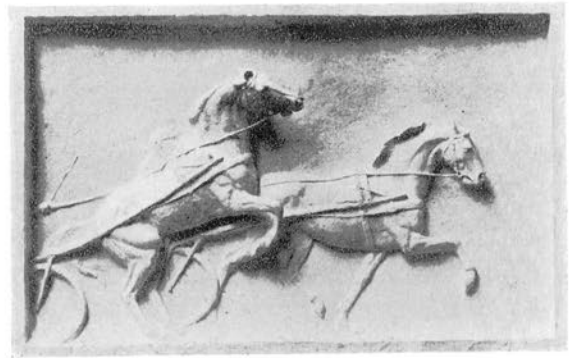
四一七 習作(舞女)(第三部會展) 石川 隼治



四一四 (一番乗り) エスキース (第三部會展) 畑 正吉



四一八 蹶起(第三部會展) 名久井十九三



八一四 池田 勇 (第三部會展) 走馬 五一四



四一九 踞る女(二科展) 上田 暁



四一六 山羊親子(第三部會展) 上田 直次

四二〇 勤勞少年（二科展） 笠置 季男



四二三 少女（院展） 山本 豊市



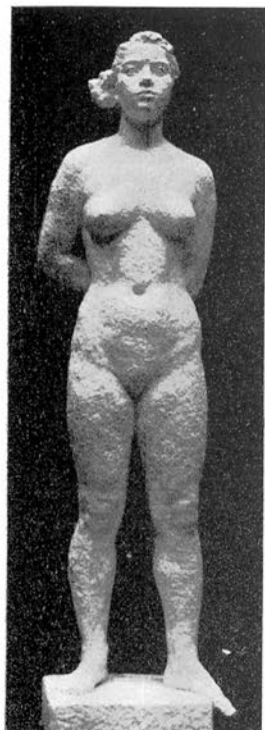
四二四 高濱氏像（院展） 石井 鶴三



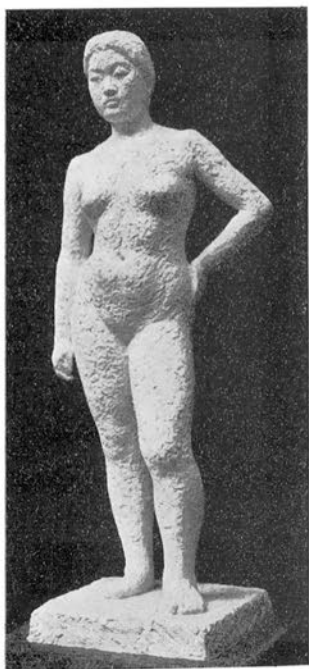
四二一 無名戦士のモニウマン（二科展） 長谷川 八十



四二二 立てる女（二科展） 水野 欣三郎



四二五 女立像（院展） 村田 徳次郎





四二八 能姿(院展) 入江 美法



四二六 蓮月尼(院展) 吉田 白嶺



四二九 鏡獅子試作(院展) 平橋 田中



四二七 S彫刻家ノ像(院展) 松原 松造



四三〇 曉の進軍(院展) 中村直人





四三三 鐵拐（院展） 松村 秀太郎



四三一 葦鷺圖（院展） 新海 竹藏



良重 本宮（展院）神風の冬 一三四



四三六 戦争（三部作 二、望郷）（文展） 中村 直人



四三五 渡河戦（文展） 野々村 一男



關 清 内 大（展院）佛壽量無 四三四



四四一 不動明王(文展) 關野 聖雲



四三七 孔雀明王(文展) 佐崎 礎村



四三九 武勳(文展) 安 一



四三八 燎原(文展) 森 大造



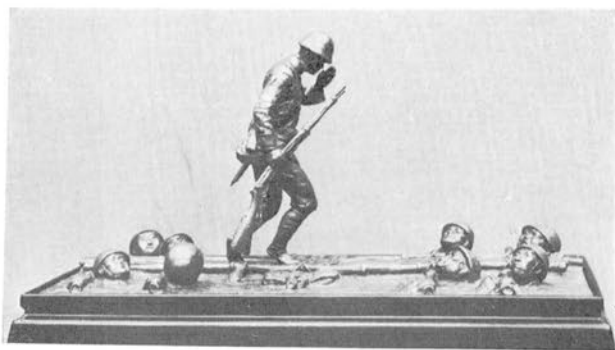
四四二 無敵の境を行く(文展) 梁川 剛一



望西村北 (展文) 動發意神 ○四四



正 峰 野 藤 (展文) り護の場王夜銃 六四四



郎一右倉小 (展文) 橋入 三四四



雲朝崎山 (展文) 秋の峯々鷹 四四四



四四七  
みのる秋(展文)  
日下 寛 治

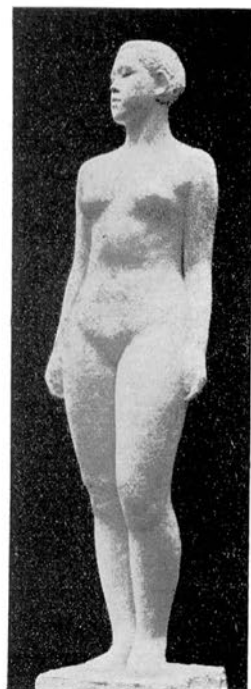


穀 三 田 稔 (展文) 誠赤 八四四

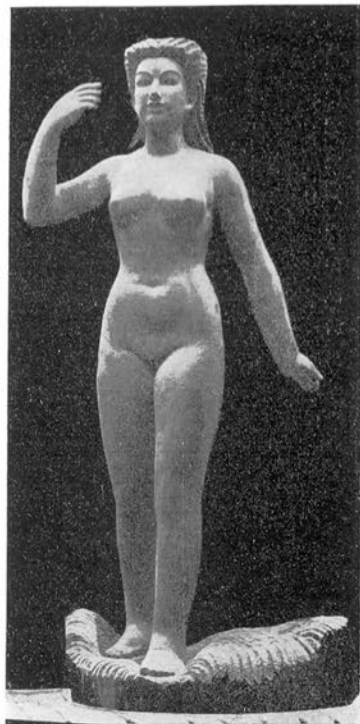


邦 文 倉 朝 (展文) 伴の忠筆 五四四

四四九 秋の作(文展) 安藤 照



四五〇 朝(文展) 西田 明史



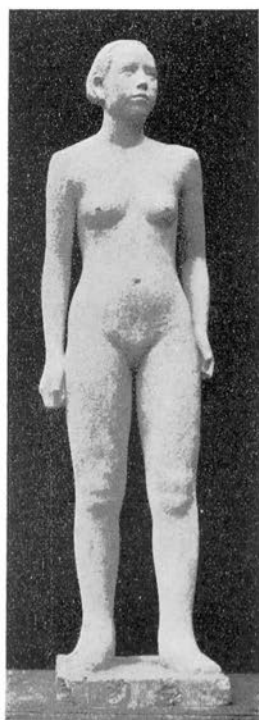
四五一 女(文展) 大塚 茂樹



四五二 母子(文展) 田畑 阿利一



四五三 自然観察によれる(文展) 堀江 桂

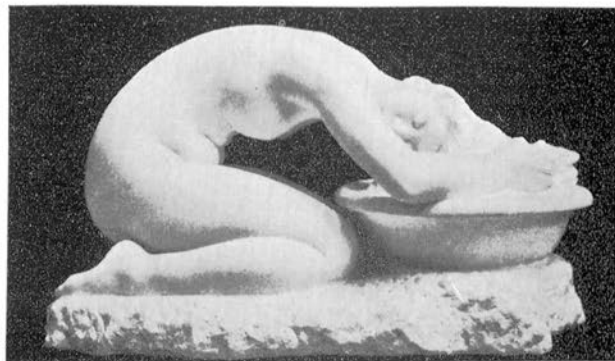


四五四 幸ちやん(文展) 建品 大夢





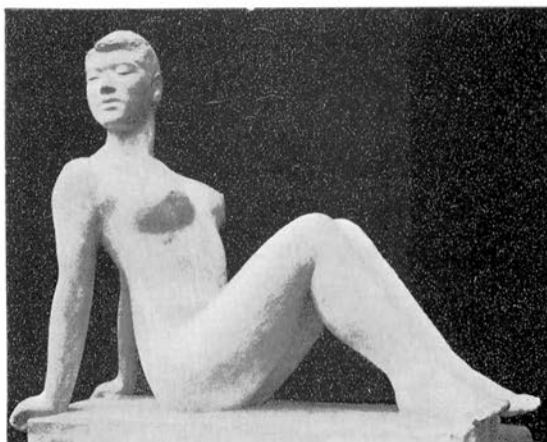
四五八 鏡(文展) 藤井 浩祐



信 正 村 北 (展文) 女ふ洗を髪 五五四



四五九 滿鐵教育塔「合唱」(奉天) 北村 西望



亮 徳 居 荒 (展文) 女 六五四

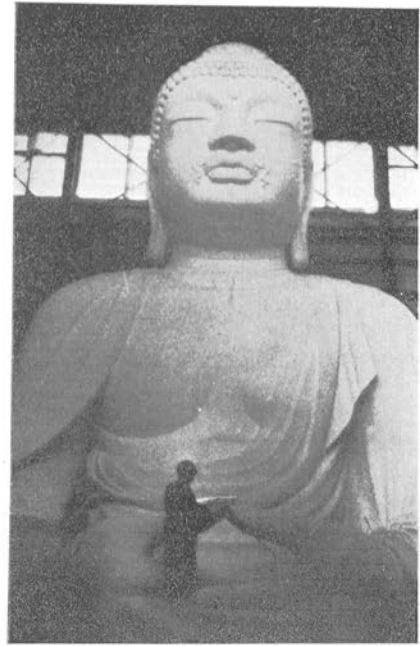


四六〇 兒玉源太郎大將馬上像(新京) 北村 西望



四五七 大虚連作の内(谷風)(文展) 富永 朝堂





四六一 釋迦大佛像原型（埼玉縣朝霞） 松田 尚之



四六二 小村侯像（大連市） 朝倉 文夫



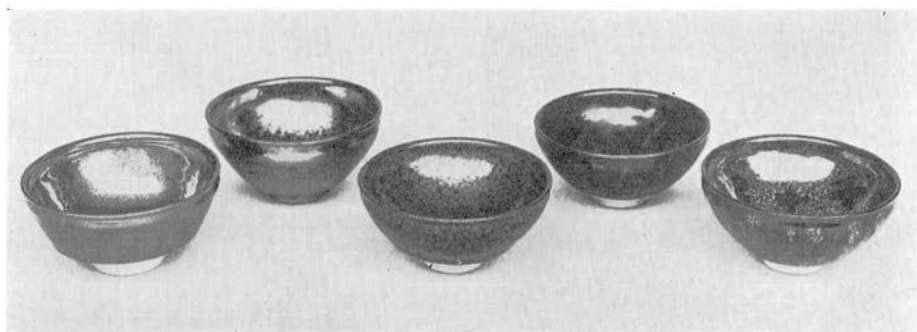
四六三 伊藤公銅像（帝國議會議事堂） 建畠 大夢



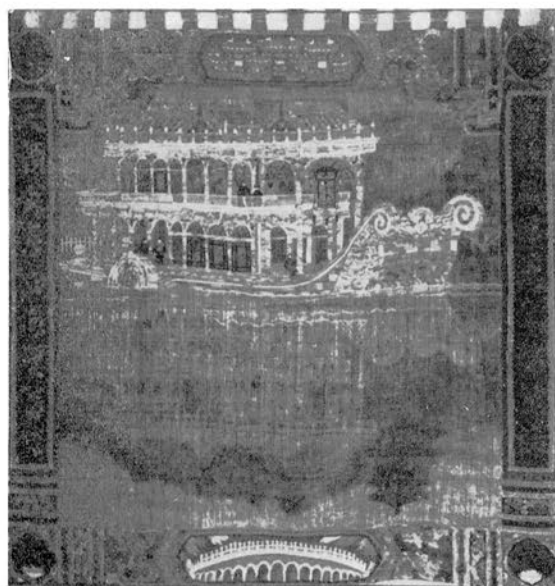
四六四 板垣伯銅像（帝國議會議事堂） 北村 西望



四六五 大隈侯像（帝國議會議事堂） 朝倉 文夫



衛兵六水漬 (展京東院藝工都京) 種五日天 六六四



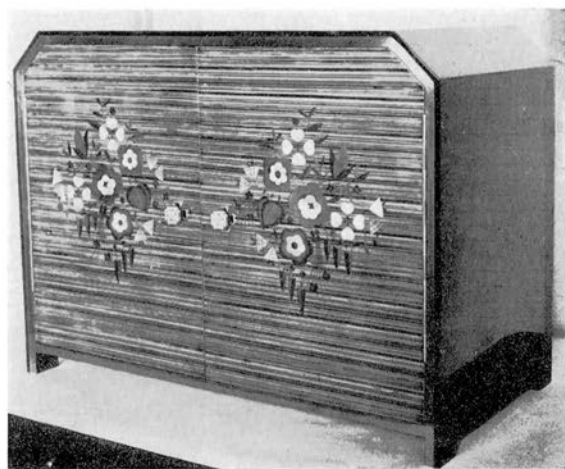
華清鹿山 (展院藝工都京) 圖助景清掛壁錦織手 九六四



六晉辻 (展院藝工都京) 瓶花文蟹 七六四

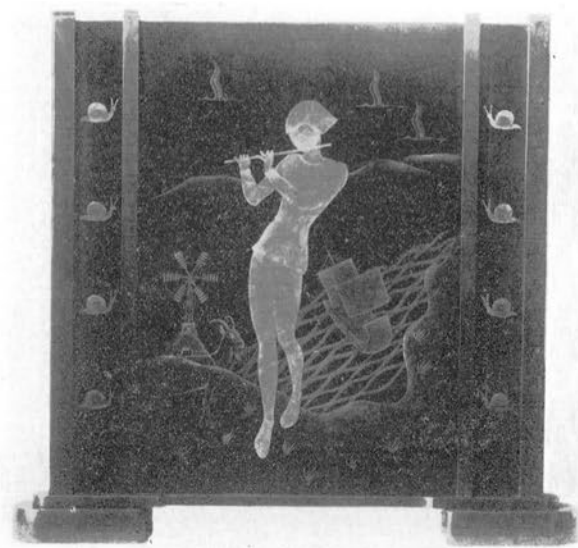


吉憲本富 (展會畫國) 皿大繪色 〇七四



雄貞村岩 (展都京院藝工都京) 棚一ヒコ器漆 八六四

四七一 衝立（實在工藝展） 山崎學太郎



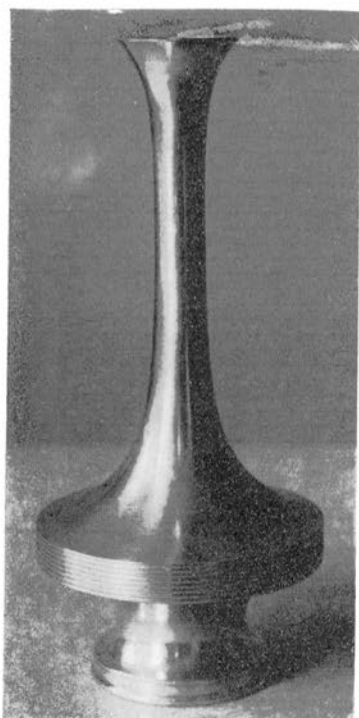
四七二 盛器A（實在工藝展） 豐田勝秋



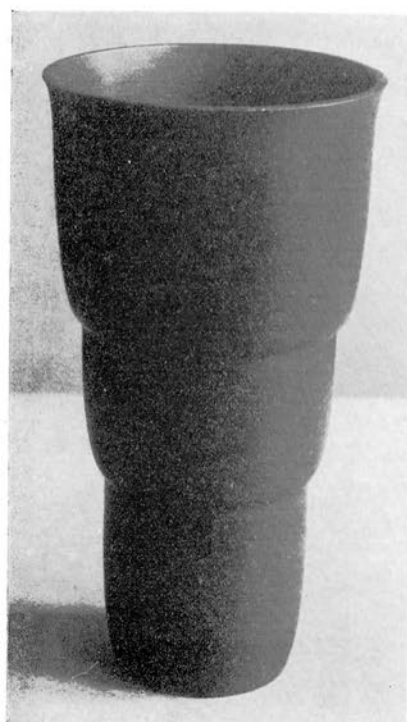
四七三 花瓶（實在工藝展） 内藤春治

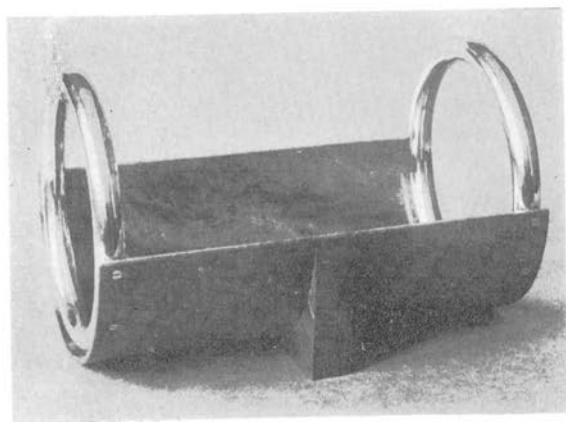


四七四 一輪插（實在工藝展） 丸山 不忘

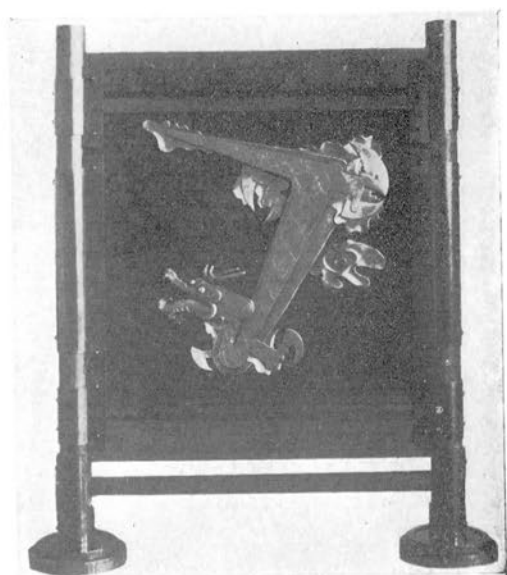


四七五、花插（實在工藝展） 高村 豊周

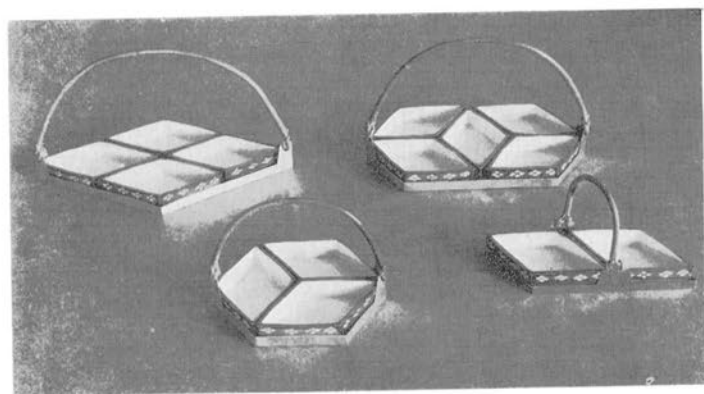




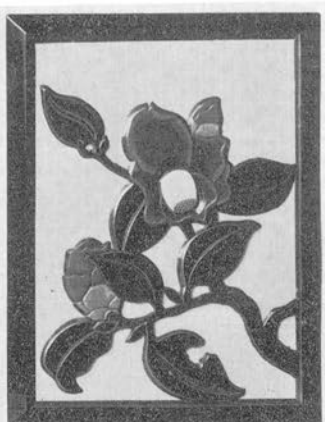
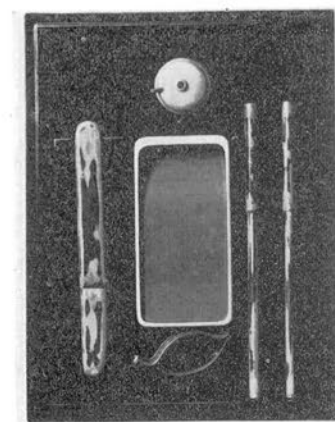
邦勝場稻 (展藝工在實) A 盛物果 八七四



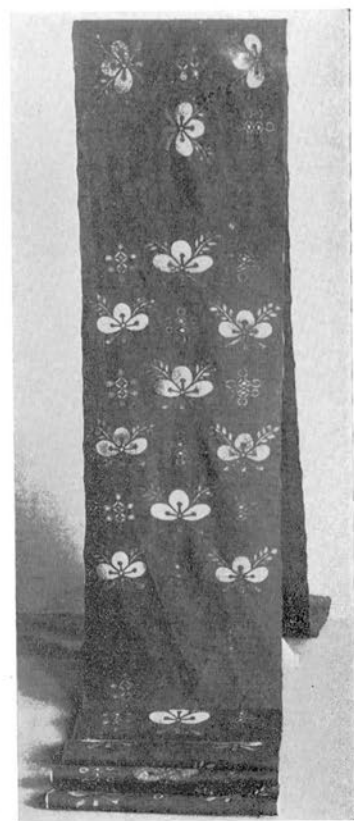
郎吾崎田 彦 (展藝工在實) 立衝班龍 六七四



郎太喜村河 (展藝工在實) 種四人塞前 九七四



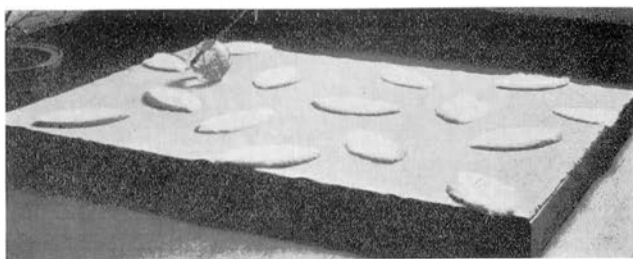
四八〇 彫漆硯箱 (實工藝展) 佐藤陽雲



帶の朱麻亞 七七四  
一和村木 (展藝工在實)



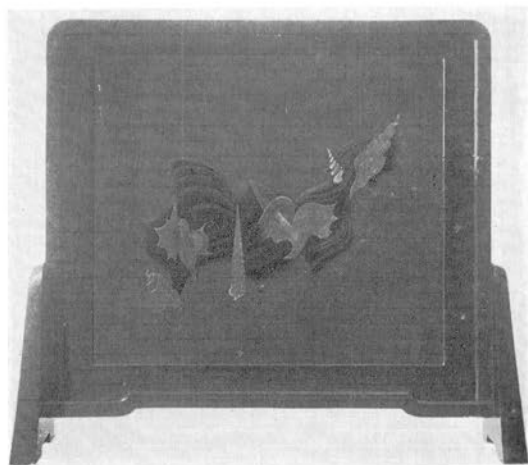
瓶花文柳猪釉戸瀬黄 四八四  
仙 華 藤 加 (展會陶東)



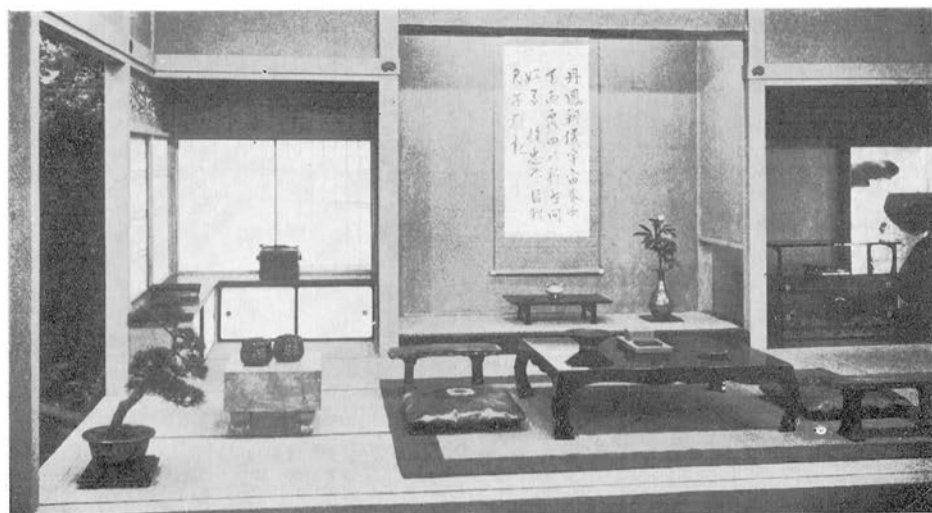
子 道 脇 山 (展藝工在實)(用間客)物敷 一八四



怒 川 谷 長 (展會陶東)物置駝駱 五八四



夫 文 田 吉 (展藝工在實)立衝 二八四

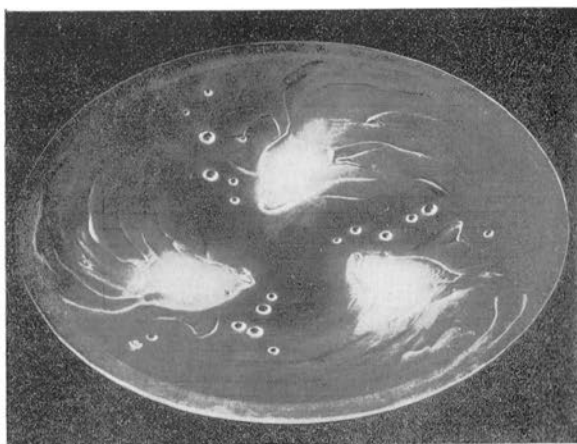


四八三 客間セット (日本漆藝院展) 同人合作

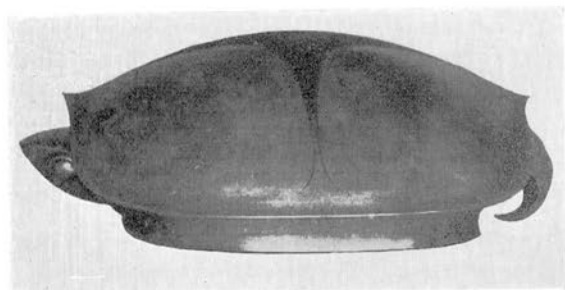




一 葵 庭 大 (展會陶東) 物置子硝板剝影 九八四



平 雄 川 小 (展會陶東) 皿文魚金 六八四



二 洋 脇 山 (展文) 物置筆之文龍銀 〇九四



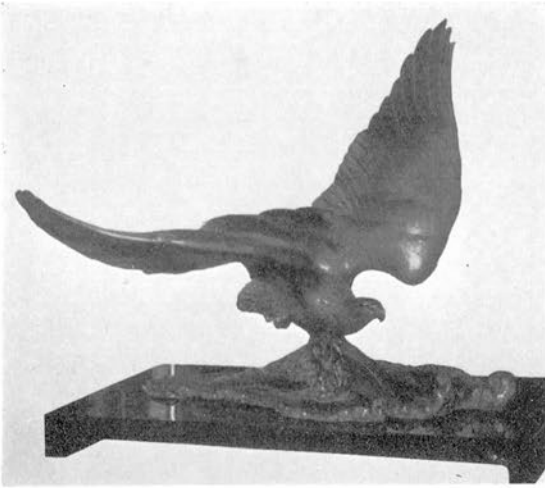
山 波 谷 板 (展會陶東) 瓶花文花草彩 七八四



四九一 銀鍍花瓶(文展) 海野 清



明 喜 原 安 (展會陶東) 爐香器 八八四



夫 信 田 津 (展文) 天衝波鷗銅鑄 五九四



雄 龍 田 寺 (展文) 瓶花文鱗基出打銀 二九四



四九六 硝子花瓶 (文展) 佐藤潤四郎



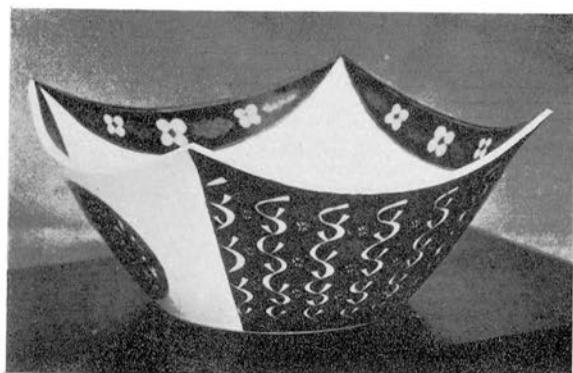
人 壽 萬 林 (展文) 盤水文鷗銅青 三九四



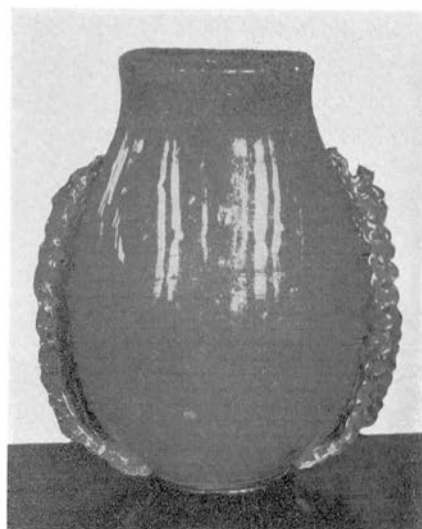
四九七 黃銅吳竹玉蘭文箱 (文展) 桂 信 春



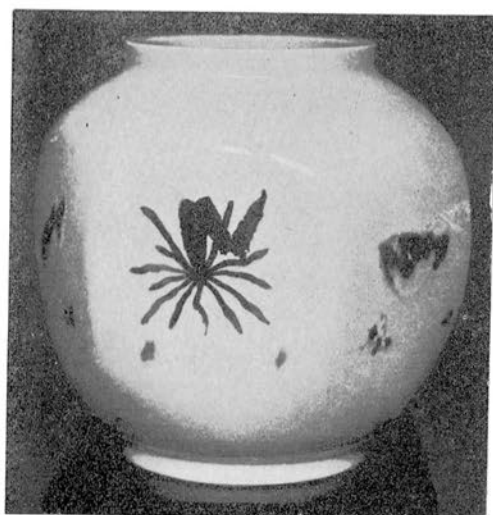
四九四 鑄銅花瓶 (文展) 香取正彦



寺池匂炆 (展文) 四方形赤錦鉢 一〇五



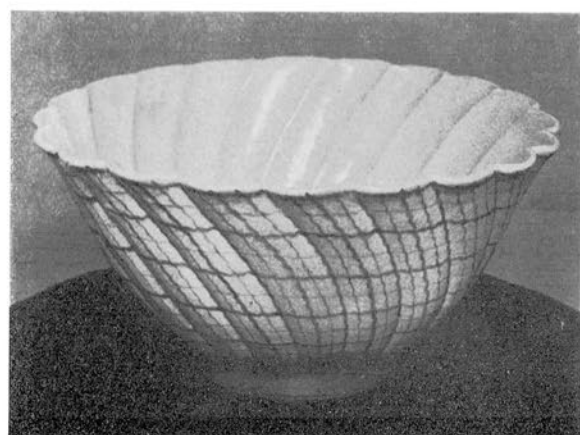
四九八 琅玕巧玉鉢 (展文) 岩田藤七



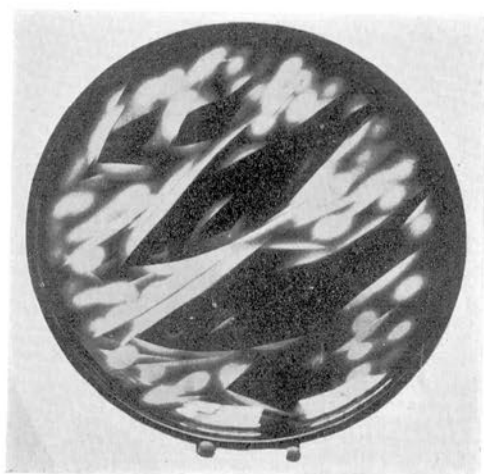
五〇二 瓶花六角裏釉 (展文) 中後茂守



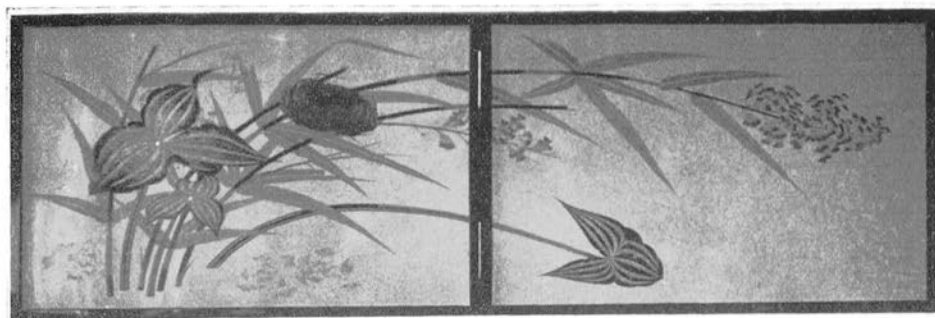
清水正太郎 (展文) 陶器甜瓜壺 九九四



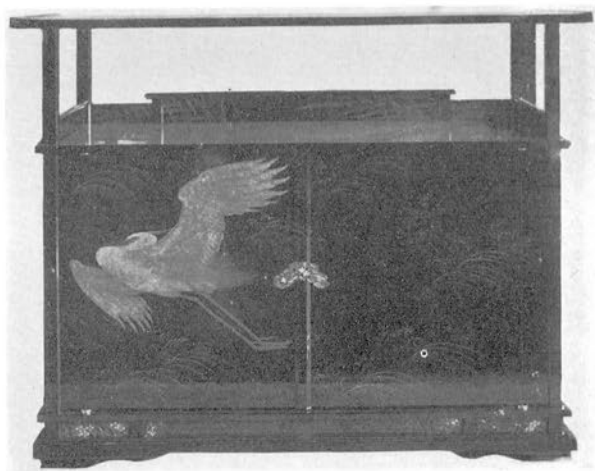
大森光彦 (展文) 陶製草鉢文鉢 三〇五



各務鎖三 (展文) 硝子飾皿 〇〇五



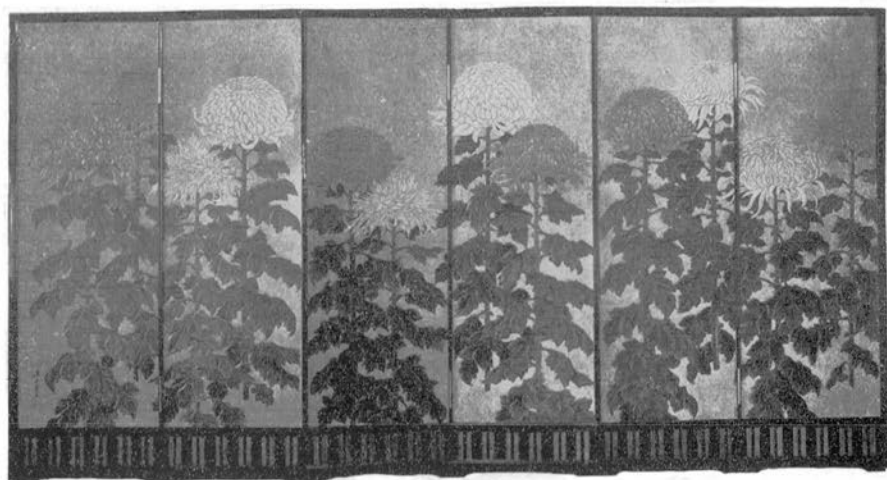
五〇四 漆器湖畔小景小屏風  
(文展) 小松 芳光



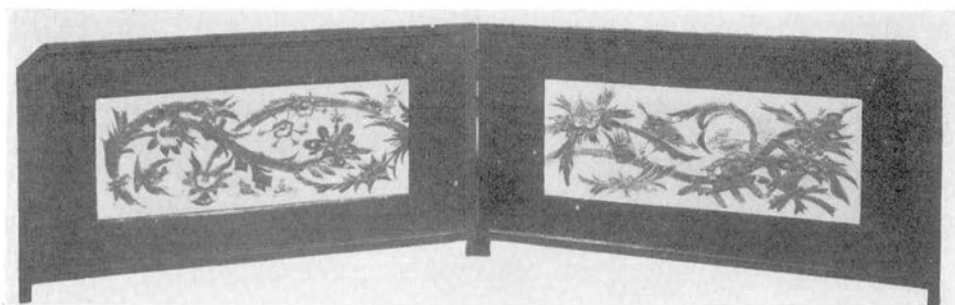
六 權田 松 (展文) 柳繪蒔鴛器漆 五〇五



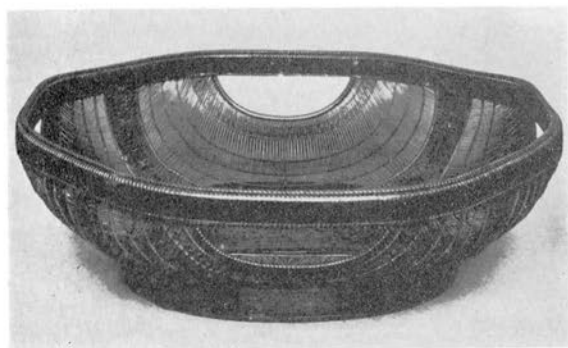
山 松 野 高 (展文) 箱石寶文蝶花漆 六〇五



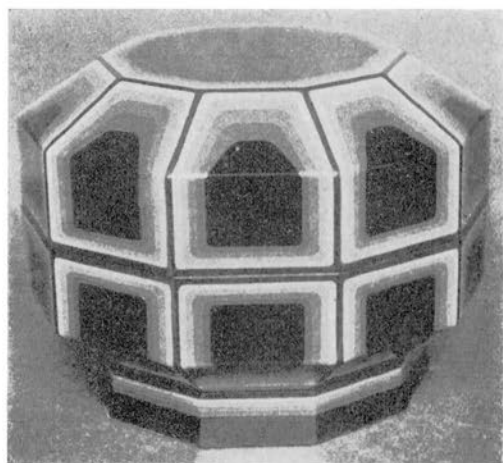
五〇七 漆菊の屏風(文展) 吉田源十郎



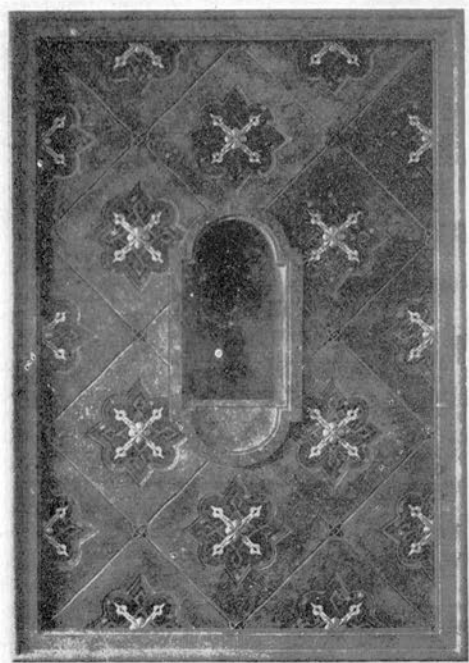
郎五松川廣 (展文) 風屏先呂風革染 八〇五



齋雲宗口販 (展文) 器盛製竹編し透 一一五



哉哲川中 (展文) 籠喰漆乾 九〇五

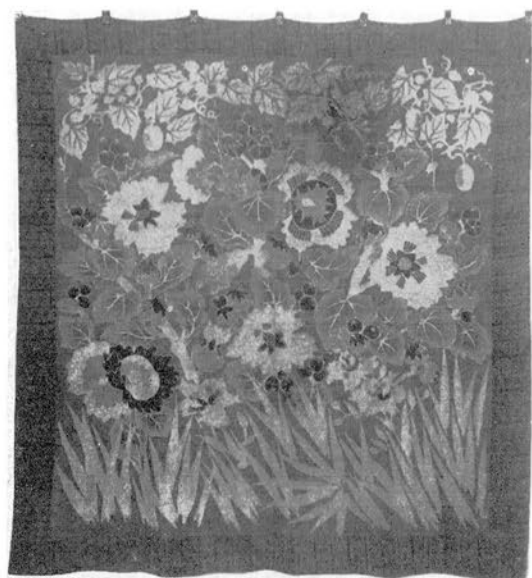


五二 壁面裝飾(文展) 板谷梅樹

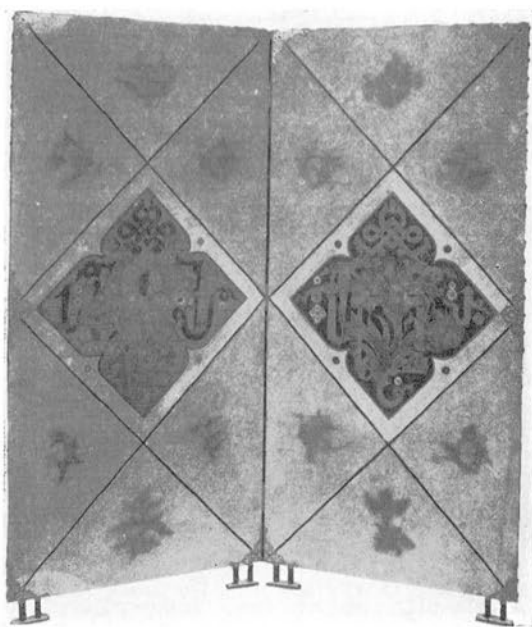


眞如井磯 (展文) 箱千圖の花南石漆彫 〇一五





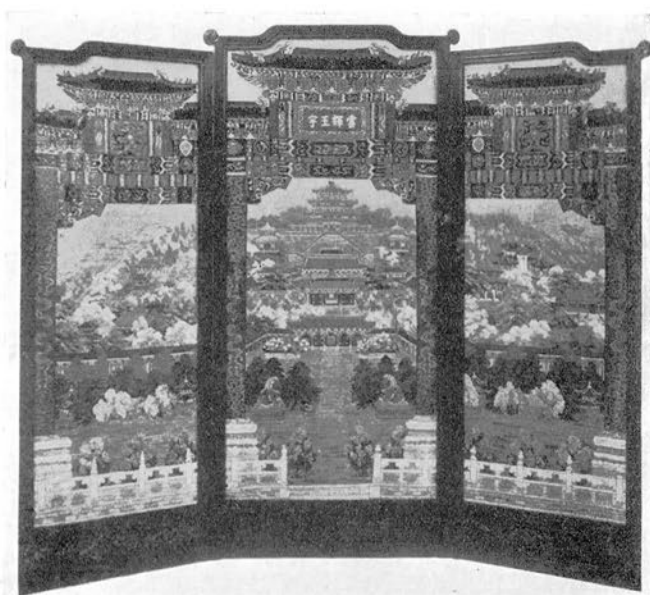
郎太重濱長 (展文) けか壁染和さぐらみ 五一五



周重坪大 (展文) 風屏革染文花草折枝二 三一五



五一六 練上角壺(個展) 河井寛次郎



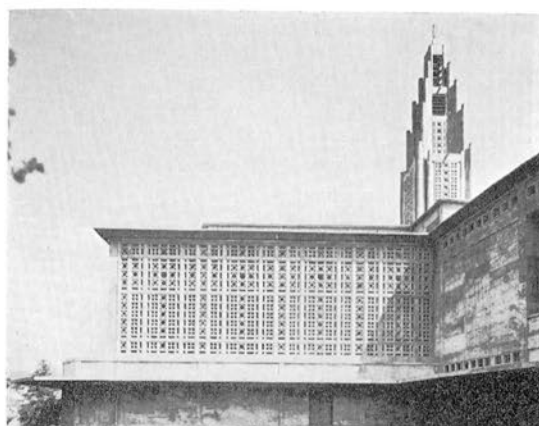
華清鹿田 (展文) 風屏春の山詩萬錦織手 四一五



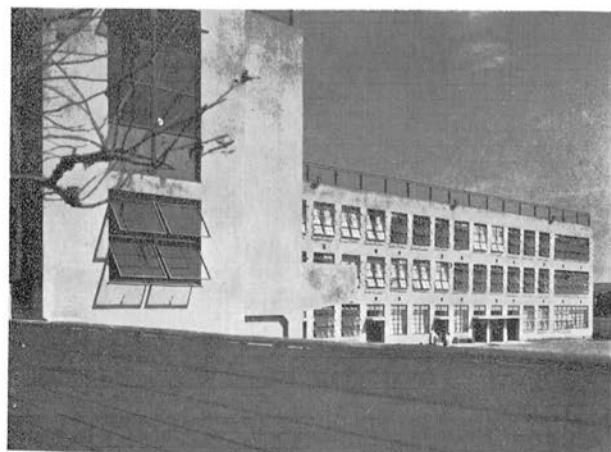
聖母學院體育操場西側外觀 ○二五  
 設計事務所建築ドンモレ



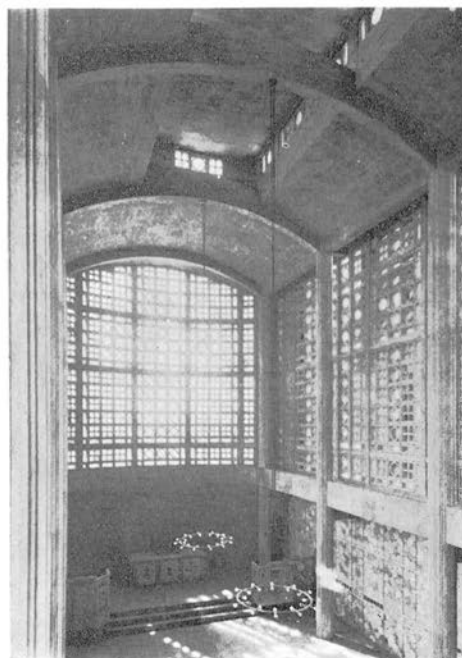
東京女子大學講堂正面 面 建築事務所設計 七一五



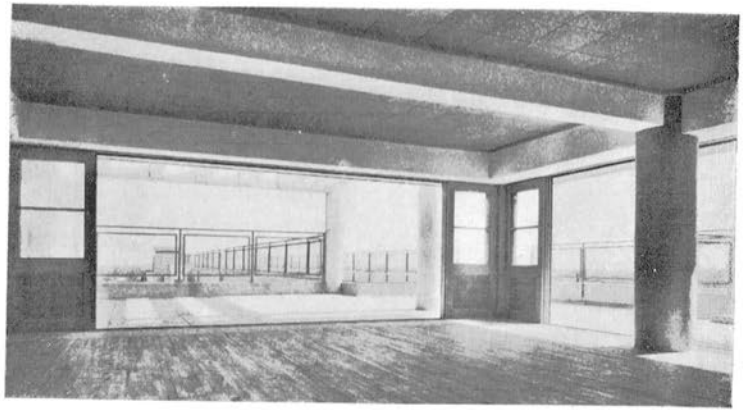
同一側面 八一五



東京市建築部第一營設計 新建築社寫眞 根岸小學南側外觀 一二五



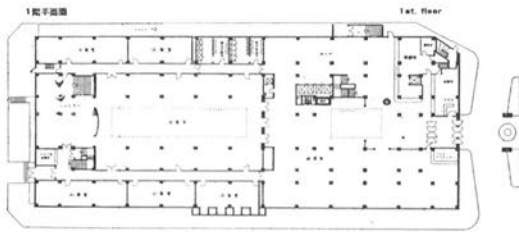
同一チヤルル内 九一五



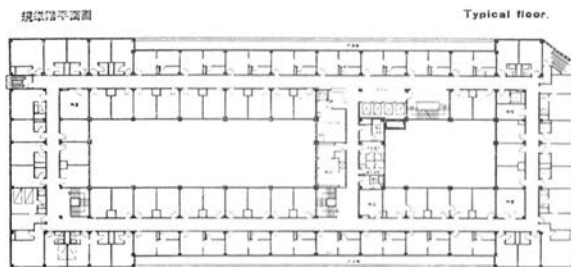
眞宮社築建新 宗教外前同 二二五



眞宮社築建新 計設組水清 観外ルテホ一第 三二五



載轉りよ六ノ四一築建新 圖面平階一上同 五二五



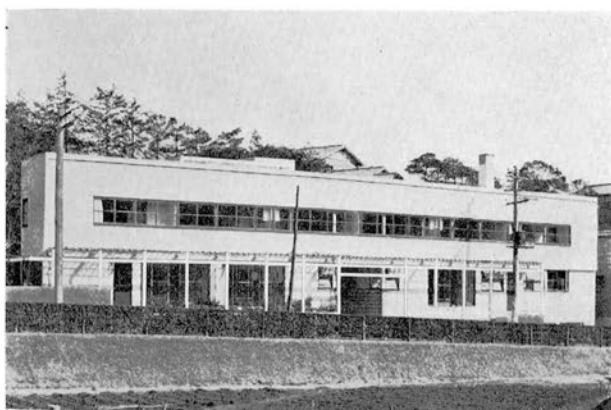
上同 圖面平階準規上同 六二五



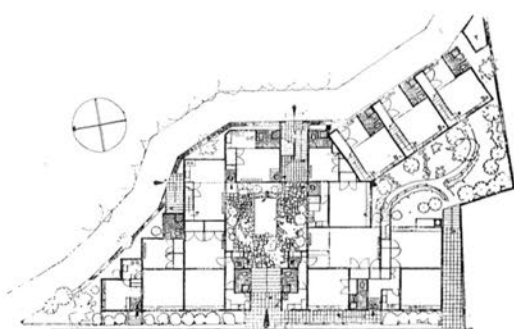
眞宮社築建新 堂食大上同 四二五



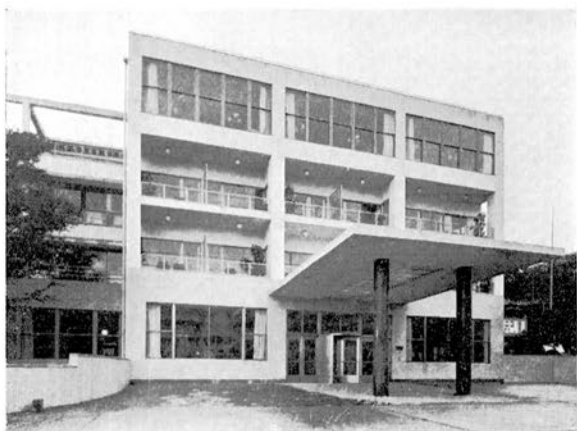
眞寫社界世築建 關玄面正右同 八二五



景全トーバアオヂラストーコンリゲ 七二五  
眞寫社界世築建 計設一誠原齋



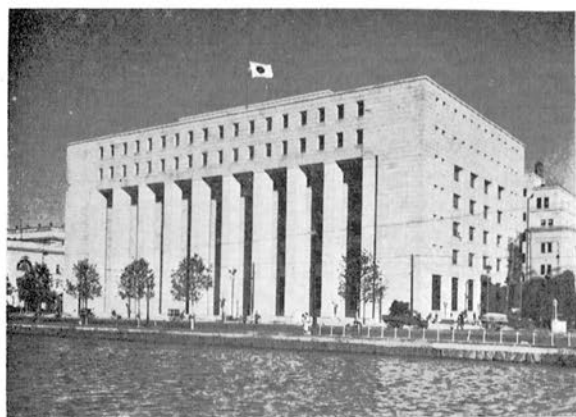
載轉りよ四ノ二三界世築建 圖面平階一上同 九二五



眞寫會協築建際開 計設威能浦土 面正ルテホ羅強 ○三五



五三一 同上ホールよりロビーを望む  
國際建築協會寫眞



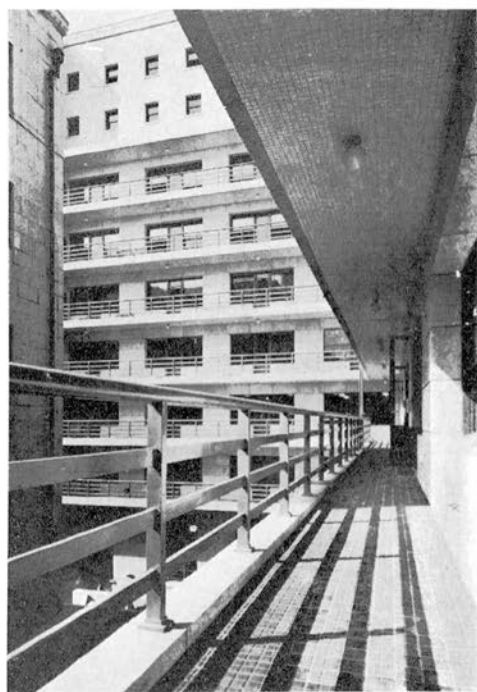
計設作與本松・仁逸渡 景全社會互相險保命生一第 三三五  
眞寫社築建新



計設社會式株木土倉大 面正館會日東 二三五  
眞寫會協築建際國



室業營上同 四三五

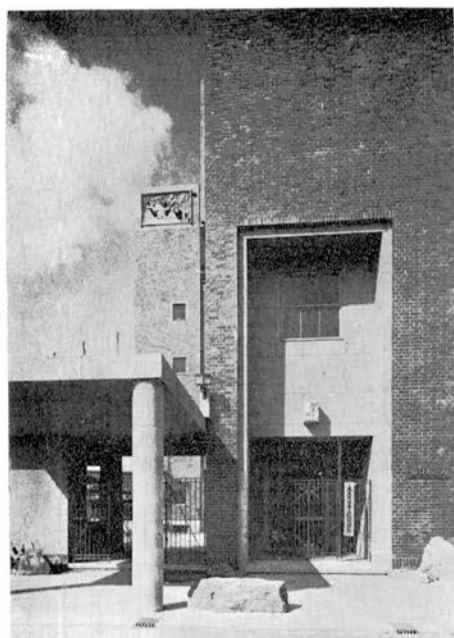


廊迴面背互相一第 五三五

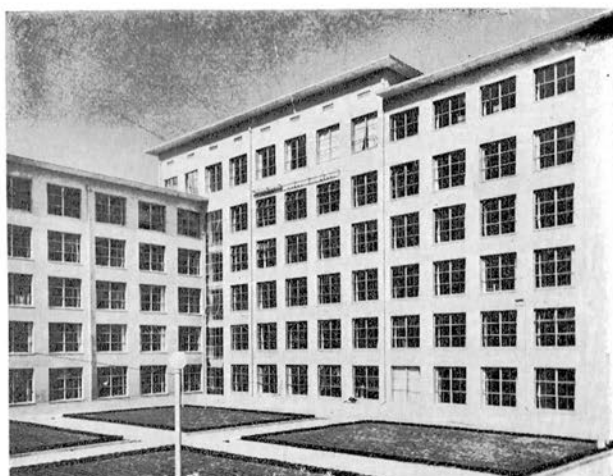


五三六 名古屋逓信局西側外觀 逓信省營繕課設計





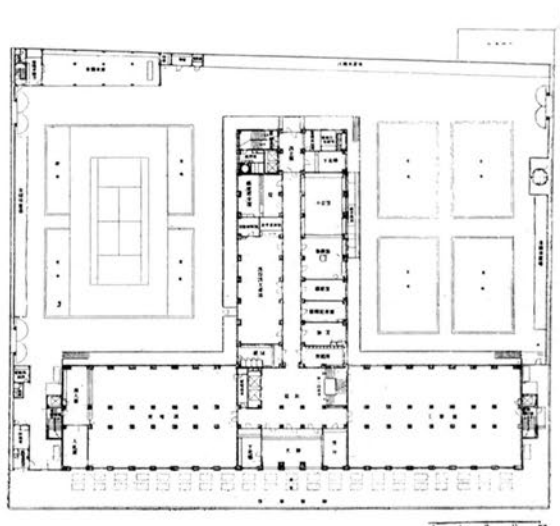
五四〇 大庄村役場正面玄関



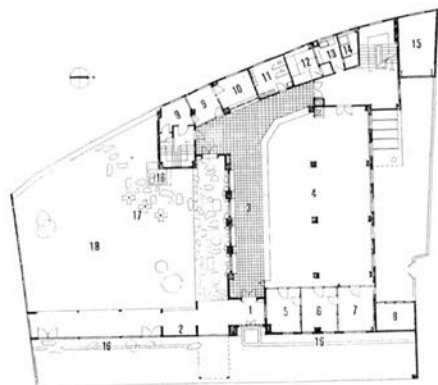
圖庭中局信遞屋古名 七三五



五四一 同上塔屋屋上



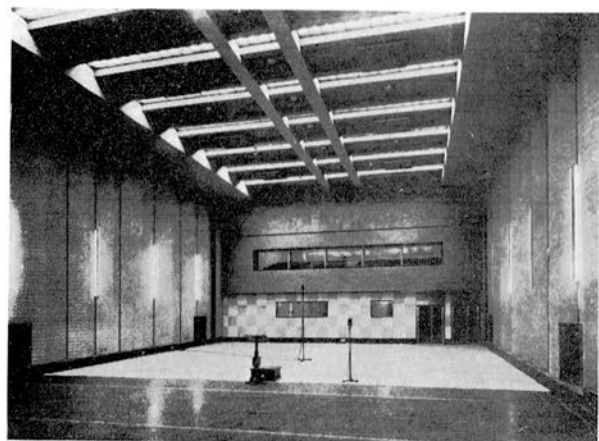
載轉りよ七ノ二三界世築建 圖面平階一上同 八三五



五四二 同上一階平面圖 國際建築一四ノ一より轉載



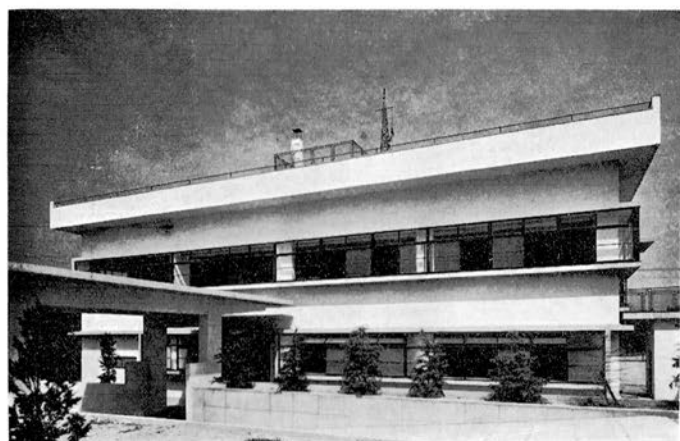
計設吾藝野村 觀外場役村庄大 九三五



室奏演一第右同 四四五



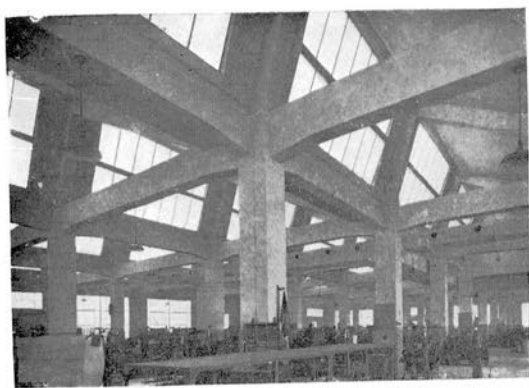
計設所務事築建郎壽下山 景全館會送放本日 三四五



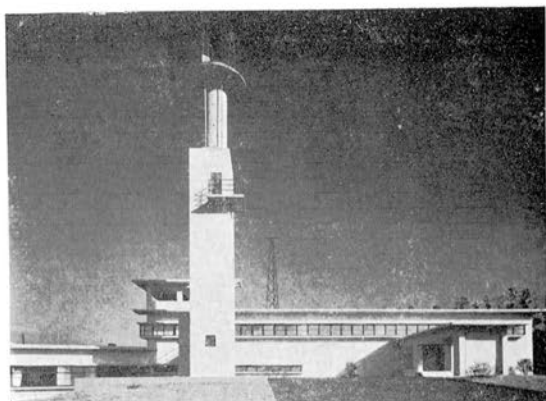
筑寫會協築建際國 計設已檢口堀 面正南所究研學科害災阪大 五四五



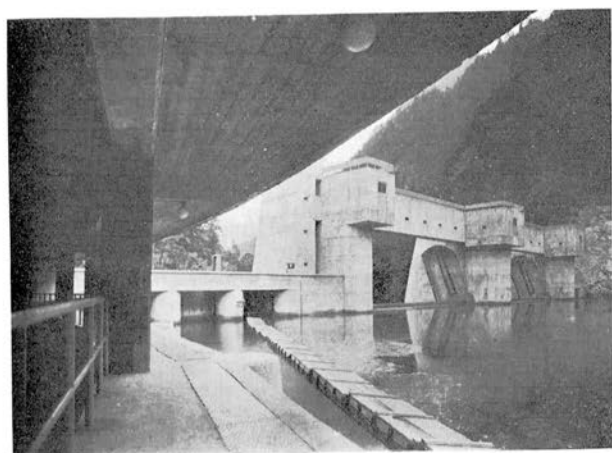
五四六 同上北面 國際建築協會寫真



計設組田戸 部内場工機工場工器計空航 九四五  
眞寫社界世築建



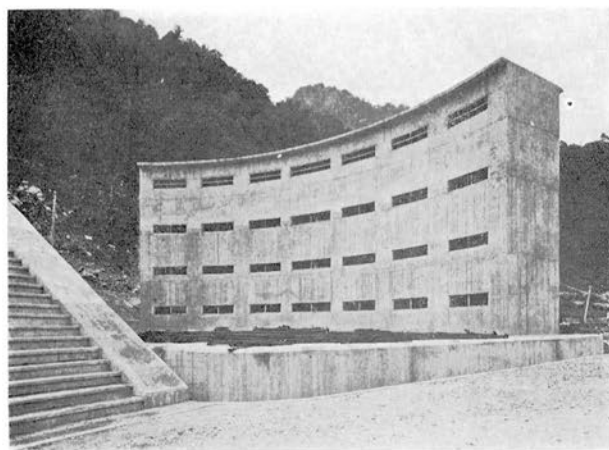
眞寫會協築建際國 計設已捨口堀 面正南舍廳所候湖島大 七四五



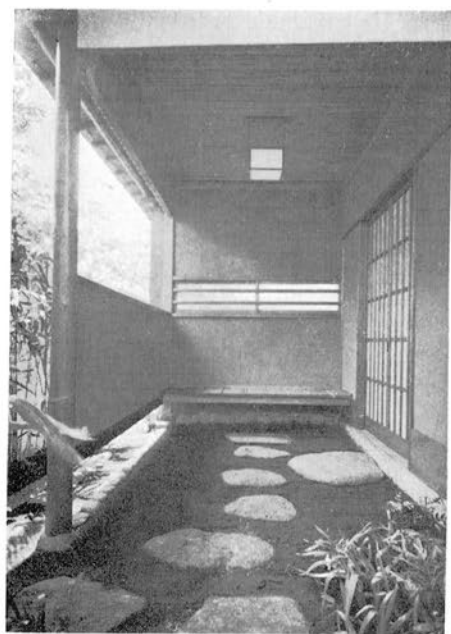
堤前 部内の口水取堤堰二第川部黒力電本日 ○五五  
眞寫會協築建際國 計設象蛟口山及社會式株氣電本日



五四八 同上廳舍西側 國際建築協會眞寫



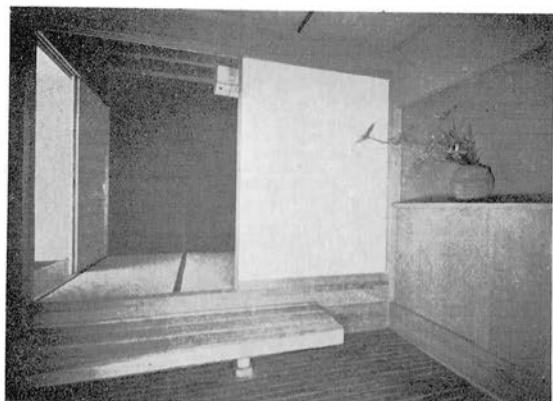
眞寫會協築建際國 物建門水ノ地砂沈上同 一五五



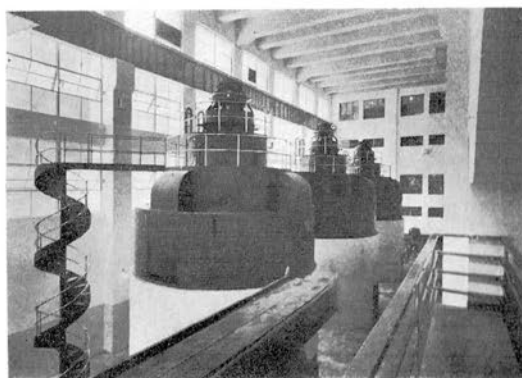
五五四 東京戸氏住宅 平手 山口敬象設計 建築世界社寫眞



眞寫社築建新 景全所電發前同 二五五



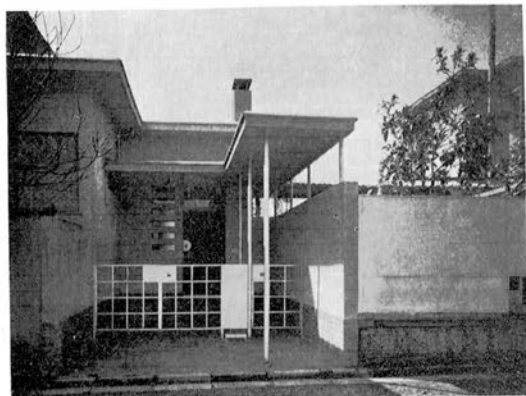
眞寫社界世築建 關玄上同 五五五



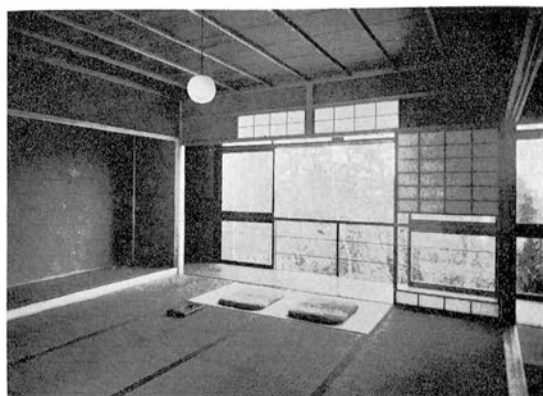
眞寫社築建新 室機電發上同 三五五



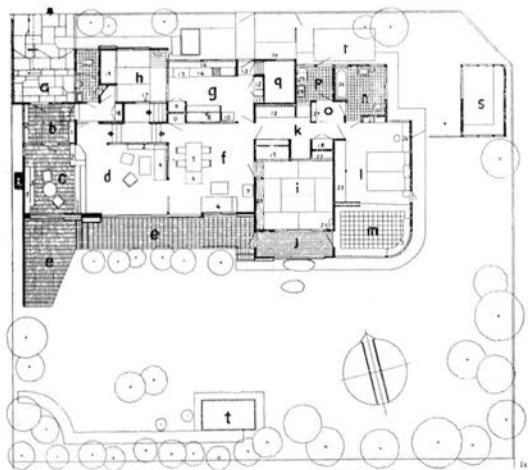
五五六 西ノ宮・山川邸表玄関車寄  
堀口捨巳設計 建築世界社寫眞



計設展臨山 口入關玄邸N・野中京東 八五五  
眞寫會協築建泰國



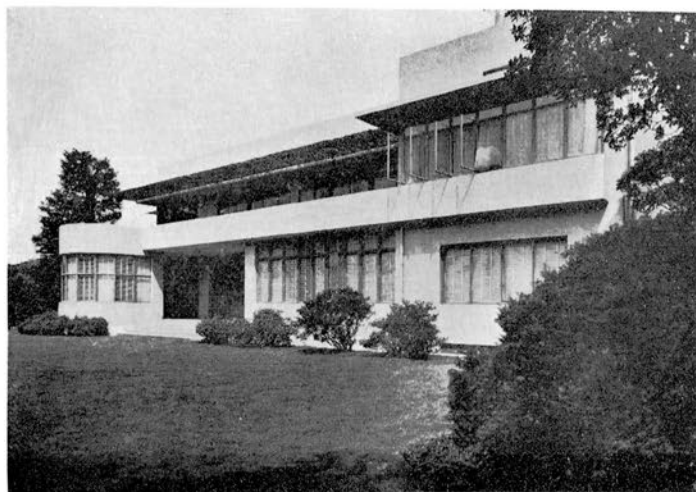
眞寫社界世築建 間疊八階二邸川山・宮ノ西 七五五



載轉りよ〇一ノ四一築建際國 圖面半階一上同 〇六五



眞寫會協築建際國 間居前同 九五五

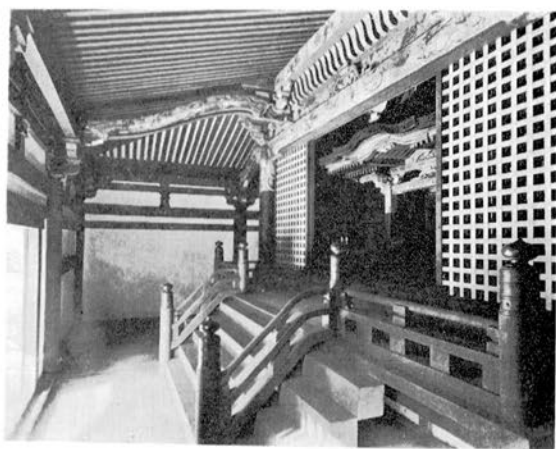


五六一 徳川公爵邸南面外觀 土浦鎮城設計  
新建築社寫眞





(照參頁四六一欄本) 門表社神崎轡 五六五



(照參頁三六一欄本) 殿本社神聖 二六五



五六六 瑞龍寺佛殿 (本欄一六四頁參照)



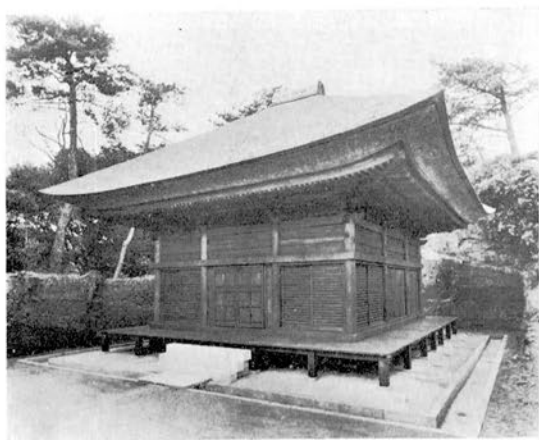
(照參頁三六一欄本) リヨ北東後理修 院書寺心觀 三六五



堂法上同 七六五



(照參頁三六一欄本) 堂本寺津石 四六五



(照參頁四六一欄本) 堂動不寺聖大 一七五



(照參頁四六一欄本) 門總寺龍瑞 八六五



(照參頁五六一欄本) 後理修 門大寺城園 二七五



(照參頁四六一欄本) 觀外堂師藥寺樂豐 九六五



(上同) 堂神善羅新寺城園 三七五



(照參頁四六一欄本) 殿本宮幡八水清平 〇七五



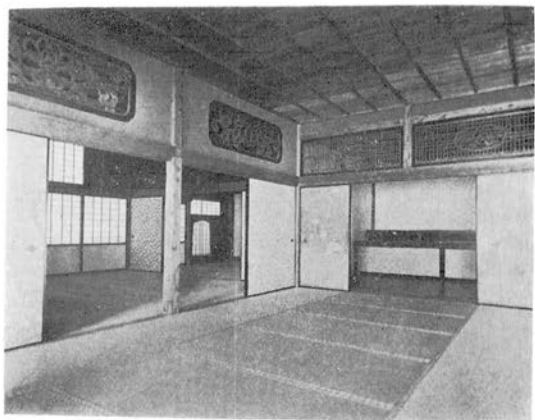
(照參頁五六一欄本) 庭如 七七五



(照參頁五六一欄本) 院書寺成妙 四七五



(照參頁五六一欄本) 櫓手西丸西城山岡 八七五



(上同) 部内上同 五七五



(照參頁六六一欄本) 敷々社神社五 九七五



(上同) 堂守鑑寺成妙 六七五



型模原復堂講大寺隆法 三八五



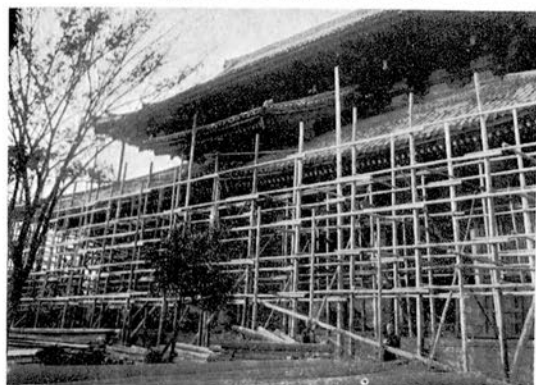
(照參頁六六一欄本) 殿々社神五 〇八五



(照參頁六六一欄本) 門王仁寺和仁 四八五



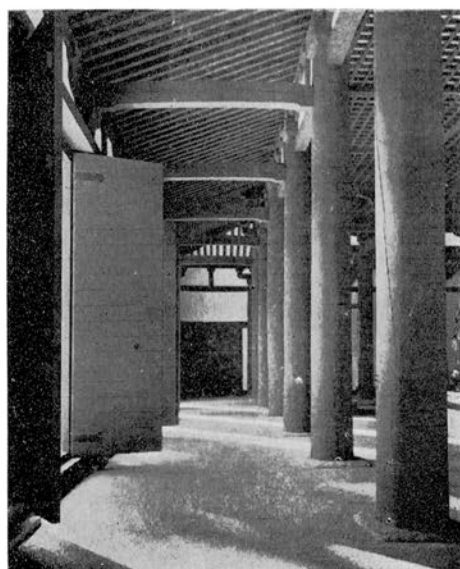
(照參頁六六一欄本) 堂講大寺隆法 一八五



(照參頁七六一欄本) 態狀ノ中理修堂金寺國護王教 五八五



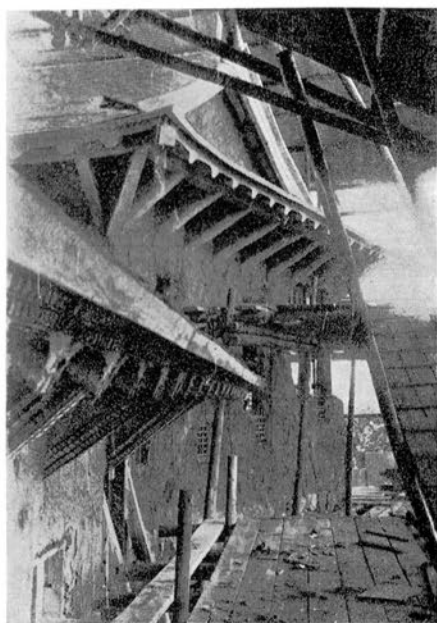
五八六 定光寺本堂 修理前  
(本欄一六七頁參照)



(上同) 部内上同 二八五



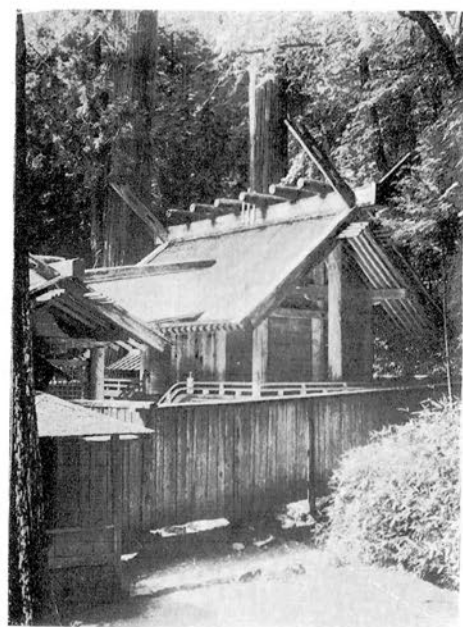
五八七 姫路城イノ渡櫓（本欄一六七頁参照）



五八九 普門院本堂 修理前（本欄一六八頁参照）

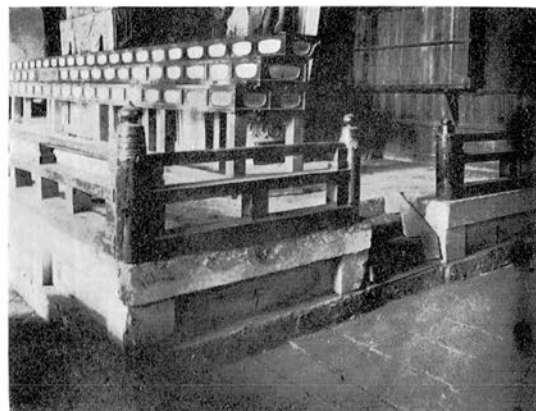


五九〇 神明宮社殿（本欄一六八頁参照）



棉渡ノホ 棉渡ノニ 棉渡ノハ 上同 八八五

（照參頁七六一欄本） 構造の壇須築石るせ見發中體解理修堂金東寺福興

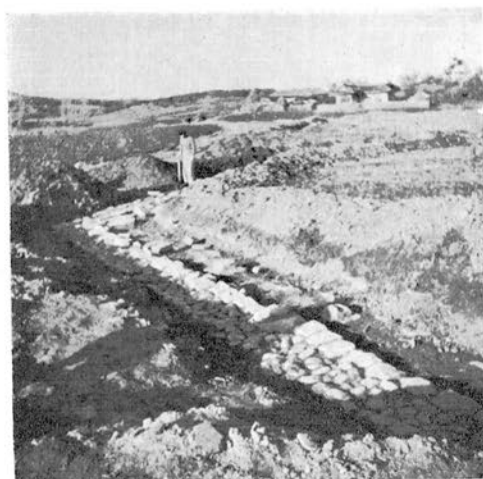


前體解 一九五



部一壇須築石るせ見發 二九五





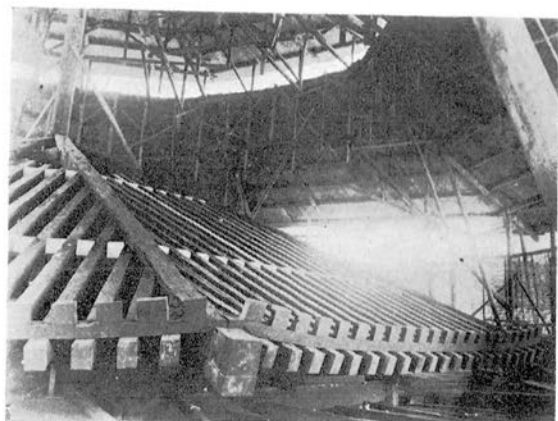
五九六 同上(其ノ二) 八角殿址西方部  
(本欄一六二頁参照)



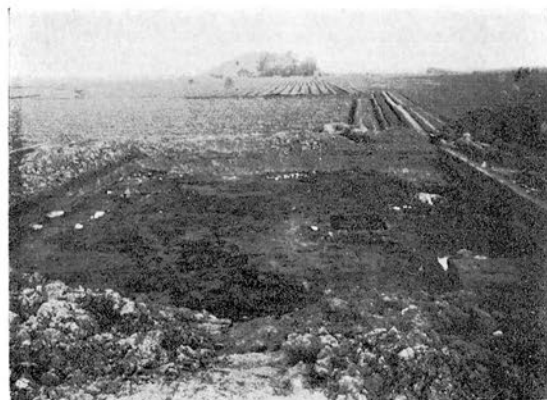
(照參頁六六一欄本) 影全面側正前理修 堂法傳寺隆法 三九五



五九七 藤原京發掘狀態(其ノ二) 十二堂附近の瓦包含層  
(本欄一六二頁参照)



(照參頁六六一欄本) 殿夢寺隆法の中立組 四九五



(照參頁二六一欄本) 況狀堀發の址門南 (二ノ其) 上同 八九五



殿角八 (一ノ其) 態狀堀發址寺廢里岩清鮮朝 五九五  
(照參頁二六一欄本) 道歩ルズ通ニ門中及段階面正址

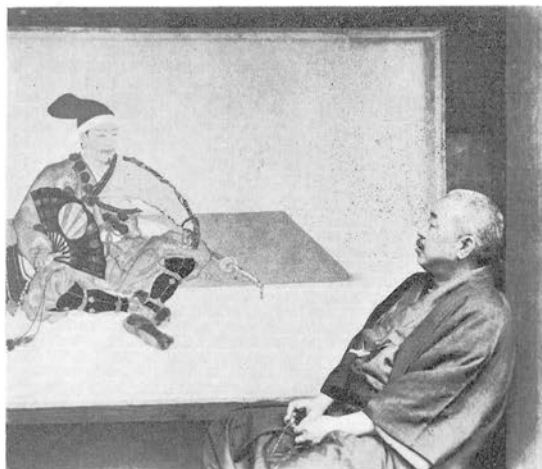
五九九 武田五一 昭和十三年二月五日逝去



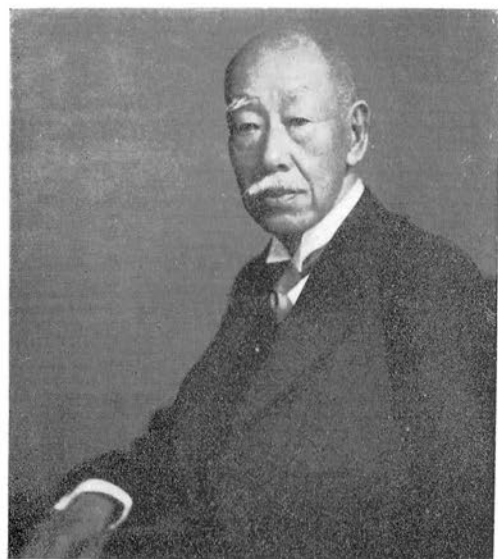
六〇二 津端道彦 昭和十三年四月三日逝去



六〇〇 小村大雲 昭和十三年二月二十日逝去



六〇三 金田 清 昭和十三年五月六日逝去



六〇一 松岡映丘 昭和十三年三月二日逝去

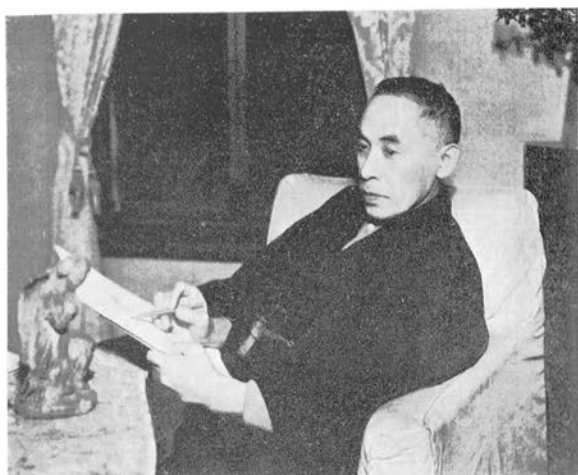


六〇四 濱田耕作 昭和十三年七月二十五日逝去





六〇八 倉田白羊 昭和十三年十一月二十九日逝去



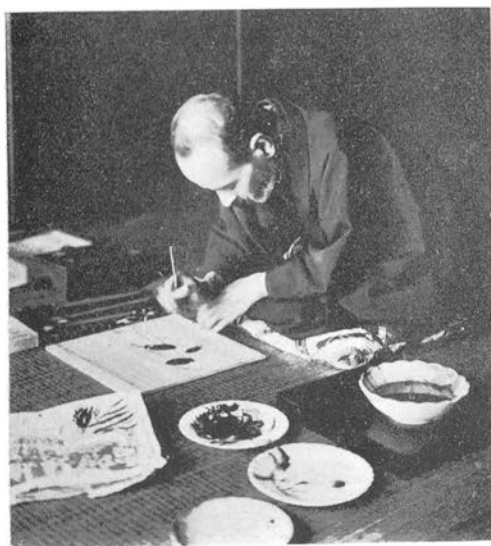
去逝日六十月九年三十和昭 雲五村西 五〇六



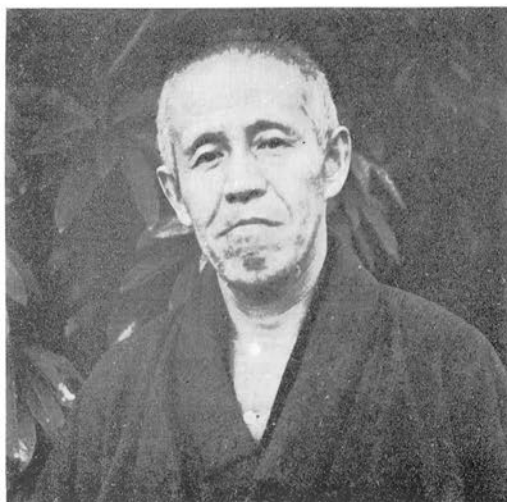
六〇九 長尾建吉 昭和十三年十二月三日逝去



六〇六 森村宜麿 昭和十三年十月四日逝去



六一〇 小川幸銭 昭和十三年十二月十七日逝去



去逝日三月一十年三十和昭 谷櫻島木 七〇六

附

錄

# 國寶保存會

國寶保存會官制

昭和四年六月二十九日  
勅令第二百一十一號

第一條 國寶保存會ハ文部大臣ノ監督ニ

屬シ其ノ諮問ニ應ジテ國寶保存法第一

條、第五條、第十一條、第十三條及第

十四條ニ規定スル事項其ノ他國寶保存

ニ關スル重要ノ事項ヲ調査審議ス

國寶保存會ハ國寶保存ニ關スル事項ニ

付文部大臣ニ建議スルコトヲ得

第二條 國寶保存會ハ會長一人、副會長

一人及委員三十人以内ヲ以テ之ヲ組織

ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アル

トキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長、副會長、委員及臨時委員

ハ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之

ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議

ヲ文部大臣ニ具申ス

副會長ハ會長ヲ輔佐シ會長事故アルト

キハ其ノ職務ヲ代理ス

會長及副會長共ニ事故アルトキハ文部

大臣ノ指名シタル委員其ノ職務ヲ代理

ス

國寶保存會ノ會長及副會長並ニ國寶保  
存會ノ委員ニシテ文部大臣ノ指名シタ  
ル者十人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

第七條 文部大臣ハ必要ニ依リ又ハ國寶

保存會ノ要求アルトキハ文部省高等官

其ノ他適當ト認ムル者ヲシテ會議ニ出

席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得

第八條 國寶保存會ノ議事ニ關スル規則

ハ文部大臣之ヲ定ム

第九條 國寶保存會ニ幹事ヲ置ク文部大

臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

幹事ハ會長及副會長ノ指揮ヲ受ケ庶務

ヲ整理ス

第十條 國寶保存會ニ書記ヲ置ク文部大

臣之ヲ命ズ

附 則

本令ハ國寶保存法施行ノ日ヨリ之ヲ施行

ス（昭和四年七月一日ヨリ施行）

古社寺保存會規則ハ之ヲ廢止ス

## 國寶保存會職員

會長 後細川 護立

委員 三矢 宮松

溝口 積次郎

福井 利吉郎

奥田 誠一

德富 猪一郎

田中 豐藏

伊東 忠太

香取 秀治郎

山田 準次郎

荻野 伸三郎

子大河内 正敏

藤懸 靜也

杉 榮三郎

山田 孝雄

三上 參次

瀧 精一

黒板 勝美

神津 伯

藤島 亥治郎

武内 義雄

常盤 大定

新納 忠之介

兒玉 九一

松尾 長造

土屋 純一

辻 善之助

芝 葛盛

青戸 精一

阪谷 良之進

丸尾 彰三郎

## 重要美術品等調査委員會

重要美術品等調査委員會規程

昭和八年四月十一日  
文部省訓令第九號

第一條 重要美術品等調査委員會ハ文部

大臣ノ監督ニ屬シ重要美術品等ノ保存

ニ關スル法律（以下單ニ法ト稱ス）第

一條ノ規定ニ依ル輸出及移出ノ許否並

ニ法第二條ノ規定ニ依ル認定（以下單

ニ認定ト稱ス）及其ノ取消ニ關スル事

項ヲ調査審議ス

第二條 重要美術品等調査委員會ハ會長

一人及委員二十五人以内ヲ以テ之ヲ組

織ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アル

トキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長、委員及臨時委員ハ文部大

臣之ヲ依嘱シ又ハ之ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議

ヲ文部大臣ニ具申ス

會長事故アルトキハ文部大臣ノ指名シ

タル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 會長ハ會議ニ於テ意見ヲ陳述シ

可否ノ數ニ加ハルコトヲ得

第六條 文部大臣ハ必要ニ依リ文部省高

等官其ノ他適當ト認ムル者ヲシテ會議

ニ出席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得

第七條 重要美術品等調査委員會ノ議事

ニ關スル規則ハ別ニ之ヲ定ム

第八條 重要美術品等調査委員會ニ幹事

若干名ヲ置キ文部大臣之ヲ命ズ

幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第九條 重要美術品等調査委員會ニ書記

若干名ヲ置キ文部大臣之ヲ命ズ

書記ハ會長及幹事ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ

従事ス

第十條 文部大臣ニ於テ必要ト認ムルト

キハ會長、委員、臨時委員又ハ其ノ他

ノ者ヲシテ認定及其ノ取消其ノ他重要

美術品等ニ關スル調査ヲ爲サシムルコ

トヲ得

國寶保存會・重要美術品等調査委員會



帝室技藝員・帝國藝術院

重要美術品等調査委員會職員

會長  
委員

文部次官

大村 清  
伊東 忠太  
子大河内正敏  
三矢 宮松  
黑板 勝美  
辻 善之助  
荻野伸三郎  
溝口積次郎  
奥田 誠一  
原田 淑人  
藤懸 靜也  
神津 伯  
香取秀治郎  
佐佐木信綱  
阪谷良之進  
丸尾彰三郎  
關 保之助  
和川 英作  
梅原 末治  
天沼 俊一  
松尾 長造  
角南 隆  
脇本十九郎  
本間 順治  
田中 一松  
青戸 精一  
阪谷良之進  
丸尾彰三郎

帝室技藝員の制度は明治二十三年十月

我が皇室におかれられて、明治維新以來  
藝術的に衰退し經濟的に困窮してゐる當  
時の我が美術界振興の思召しから制定せ  
られたもので、帝室技藝員には人格藝術  
共に後進の師表と仰がるべき大家を、特  
にその爲に選ばれたる委員をして銓衡せ  
しめ任命せられるものである。

(帝室技藝員銓衡委員) 清水澄、大谷正  
男、瀧精一、侯廣幡忠隆、侯細川護立、  
正木直彦

帝室技藝員名簿

拜命年月

日本畫	竹内 栖鳳	大正二年三月
同	川合 玉堂	同六年六月
同	横山 大觀	昭和六年六月
同	橋本 關雪	同九年十二月
同	安田 叔彦	同
同	菊池 契月	同
同	藤島 武二	同
洋畫	(逝去)岡田三郎助	同
同	和川 英作	同
同	彫刻 山崎 朝雲	同
同	工藝 板谷 波山	同
同	香取 秀眞	同
同	清水 龜藏	同

帝國藝術院

帝國藝術院官制

昭和十二年六月二十三日  
勅令第二百八十號

第一條 帝國藝術院ハ文部大臣ノ管理ニ  
屬シ藝術ノ發達ヲ圖リ文化ノ向上ニ資

スルヲ以テ目的トス

第二條 帝國藝術院ハ藝術ニ關スル重要  
ノ事項ヲ審議ス

帝國藝術院ハ藝術ノ發達ニ資スル爲必  
要ナル事業ヲ行フコトヲ得

帝國藝術院ハ藝術ニ關スル重要ノ事項  
ニ付文部大臣ニ建議スルコトヲ得

第三條 文部大臣ハ藝術ニ關スル重要ノ  
事項ニ付帝國藝術院ニ諮問スルコトヲ  
得

第四條 帝國藝術院ハ院長一人及會員八  
十人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

第五條 院長及會員ハ藝術ニ關シ識見闊  
歷卓越スル者ノ中ヨリ文部大臣ノ奏請  
ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

院長及會員ハ勅任官ノ待遇ヲ受ク

第六條 院長ハ院務ヲ總理ス

院長事故アルトキハ文部大臣ノ指名ス  
ル會員其ノ職務ヲ代理ス

第七條 帝國藝術院ニ主事ヲ置ク文部部  
内ノ高等官ノ中ヨリ文部大臣ノ奏請ニ  
依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

主事ハ院長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第八條 帝國藝術院ニ書記ヲ置ク文部部  
内ノ判任官ノ中ヨリ文部大臣ノ命ズ  
書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

帝國美術院官制ハ之ヲ廢止ス

本令施行ノ際現ニ帝國美術院長又ハ帝國  
美術院會員タル者別ニ辭令ヲ發セラレザ  
ルトキハ夫々帝國藝術院長又ハ帝國藝術

院會員ヲ命ゼラレタルモノトス

帝國藝術院職員

院長

會員

清水 澄	(五十番順)
朝倉 文夫	
荒木悌二郎(十畝)	
有馬壬生馬(生馬)	
石井 滿吉(柏亭)	
板谷 嘉七(波山)	
泉 鏡太郎(鏡花)	(昭・四九・三七通)
伊東 忠太	
井上 通泰	
梅原龍三郎	
梅若万三郎	
多 忠龍	
岡田三郎助	(昭・四九・三七通)
岡本 敬二(綺堂)	(昭・一四・三一・通)
尾上 八郎(柴舟)	
香取秀治郎(秀眞)	
鍋本 健一(清方)	
河井 又平(醉茗)	
川合芳三郎(玉堂)	
川端昇太郎(龍子)	
川村 萬藏(曼舟)	
菊池 寛	
菊池 完爾(契月)	
北村 西望	
清水六兵衛	
幸田 成行(露伴)	
幸田 延	
國分 高胤(青厓)	

(昭・四・八・三・通)

小杉國太郎(放庵)  
小林 茂(古徑)  
小室貞次郎(翠雲)  
齋藤 茂吉  
齋藤 知雄(素巖)  
佐佐木信綱  
佐藤 清藏(朝山)  
清水 龜藏  
高濱 清(虛子)  
竹内 恆吉(栖鳳)  
橋 糸重  
建昌彌一郎(大夢)  
谷崎潤一郎  
千葉 胤明  
津田 信夫  
徳田 末雄(秋聲)  
徳富猪一郎(蘇峰)  
富本 憲吉  
内藤 伸  
中澤 弘光  
中村 不折  
西山卯三郎(翠嶂)  
橋本 關一(關雪)  
比田井 鴻(天來)  
平櫛倬太郎(田中)  
藤井 浩祐  
藤島 武二  
豊 時義  
寶生朝太郎  
前田 康造(青邨)  
松林 篤(桂月)  
南 薰造

主事

文部省書記官

本田 弘人

### 文部省美術展覽會

文部省美術展覽會は、明治四十年制定された美術審査委員會官制に基き同年第一回を開催、爾來毎年開催して十二回に及んだが、大正八年同官制を廢止して帝國美術院規程を制定、同年以後帝國美術院美術展覽會を開催し來り昭和九年第十五回に至つた。昭和十年帝國美術院を改組し新に帝國美術院官制を制定、同十一年春第一回帝國美術院展覽會を開催したが繼續されず、同年秋臨時に昭和十一年文部省美術展覽會を開催、同十二年六月帝國美術院を廢止して帝國藝術院官制が公布されるに及び、展覽會は舊の如く文部省の主催として同年第一回展覽會を開催、以後繼續することとなつた。

### 文部省美術展覽會規則

昭和十二年九月十一日  
文部省告示第三百十九號  
昭和十三年八月三十一日  
文部省告示第三百三十三號

### 第一章 總 則

第一條 文部省美術展覽會ハ本規則ノ定ムル所ニ依リ毎年一回之ヲ開催ス會場、會期及事務所ハ其ノ都度之ヲ公告ス  
第二條 本會ハ作品ノ種別ニ依リ之ヲ左ノ四部ニ分ツ  
第一部 繪畫  
第二部 繪畫(油繪、水彩畫、バステル畫、素描、創作版畫等)  
第三部 彫塑  
第四部 美術工藝  
第三條 陳列スベキ作品ハ鑑査ヲ經ベキモノトス  
前項ノ規定ニ拘ラズ出品人ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ專門技術ニ依ル作品ニ限リ無鑑査ニテ陳列スルモノトス但シ第四部ニ於ケル綜合製作ニ依ル作品ハ總テ鑑査ヲ經ベキモノトス  
一 帝國藝術院會員  
二 文部省美術展覽會審査員  
三 無鑑査ト認メラレタル者  
第四條 本會ハ各部ノ綜合展覽會トシ鑑査作品及無鑑査作品ヲ同時ニ陳列ス  
第五條 鑑査、審査及陳列ノ事務ヲ處理スル爲審査員長及審査員ヲ置ク  
審査員長ハ文部次官ヲ以テ之ニ充ツ  
審査員ハ文部大臣之ヲ依屬ス  
第六條 鑑査ハ提出セル作品ニ付陳列スベキモノヲ定メ審査ハ陳列品ニ付優秀ナルモノヲ選定ス  
第七條 審査員ハ審査員長ノ定ムル所ニ依リ第一部乃至第四部ノ各部ニ分屬ス  
審査員長ハ各部ノ審査員主任ヲ任命ス  
審査員ハ各部ニ付鑑査及審査ヲ行フ  
第二章 出 品  
第八條 出品スベキ作品ハ自己ノ製作シタルモノニ限ル  
故人ノ製作ニ依ルモノハ其ノ相續人ニ於テ之ヲ出品スルコトヲ得  
第九條 第三部ノ作品ニシテ原型製作者ト實

材製作者ト其ノ人ヲ異ニスルトキハ原型製作者ヲ以テ其ノ出品人ト爲ス  
第四部ノ作品ニシテ綜合製作ナルトキハ其ノ代表製作者一名ヲ以テ出品人ト爲ス但シ代表製作者ハ共同製作者ノ氏名ヲ附記スルコトヲ得  
第十條 出品スベキ作品ハ同一人ニ付各部共一點トス  
第十一條 形狀裝束等ノ如何ニ拘ラズ同一意匠ニ依レル一箇ノ作品ト認メ得ベキモノハ二箇以上ニ分離セルモノト雖モ之ヲ一點ト看做ス  
第十二條 同一意匠ニ依ラザル數箇ノ作品ト雖モ一箇ニ合裝セルモノハ之ヲ一點ト看做ス  
第十三條 出品スベキ作品ノ大サハ左ノ各號ニ依ル  
一 第一部ハ縱十尺以内(裝飾設備ヲ含ム)トス  
二 第二部ハ五十號以内トス  
三 第三部ハ制限ナシ  
四 第四部ハ立體ニ在リテハ六尺平方以内ノ場所ニ陳列シ得ルモノトシ其ノ他ニ在リテハ横六尺以内(裝飾設備ヲ含ム)トス  
第十四條 作品ノ搬入受付期間ハ毎年展覽會開催ノ都度之ヲ公告ス  
第十五條 左ニ掲グルモノハ之ヲ出品スルコトヲ得ズ  
一 製作後五年以上ヲ經タルモノ  
二 既ニ帝國美術院美術展覽會及文部省美術展覽會ニ陳列シタルモノ  
三 風教ニ害アリト認ムルモノ  
第十六條 鑑査ヲ受クベキ作品ヲ出品セントスル者ハ金一圓ノ手数料ヲ納付スベシ既納ノ手数料ハ如何ナル事由アルモ之ヲ還付セズ  
第十七條 出品セントスル者ハ所定書式ノ申込書ト共ニ作品ヲ本會事務所ニ差出スベシ

文部省美術展覽會

故人ノ作品ヲ出品セントストキハ申込書  
中解説書欄ニ製作者ノ氏名及履歷ヲ記入ス  
ベシ

作品ニハ命題及出品人氏名ヲ記シタル紙片  
ヲ裏面ニ貼附スベシ

第十八條 本會事務所ニ於テ作品ヲ受理シタ  
ルトキハ直チニ受領證ヲ交付ス

第十九條 受理シタル作品ハ撤回スルコトヲ  
得ズ但シ審査員長ノ許可ヲ得タルトキハ此  
ノ限ニ在ラズ

第二十條 第一部第二部ノ作品ハ額面ト爲シ  
枠線ヲ附ス等出品人ニ於テ適當ノ裝飾設備  
ヲ爲スベシ

第二十一條 出品人ハ陳列品ノ位置、配列等  
ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第二十二條 作品ノ荷造及運送費ハ總テ出品  
人ノ負擔トス但シ遠隔ノ地ニ在ル出品團體  
ニ對シテハ文部省ヨリ特ニ其ノ費用ノ一部  
ヲ補助スルコトアルベシ

第二十三條 文部省ハ作品ノ保管ニ關シ充分  
ノ注意ヲ爲スト雖モ紛失、毀損、其ノ他ノ  
損害ニ對シ一切責任ヲ負フ

第二十四條 作品ノ撮影又ハ模寫ハ出品人ノ  
承諾ヲ得且文部省ノ許可ヲ受クルニ非ザレ  
バ之ヲ爲スコトヲ得ズ

前項ノ許可ヲ受ケタル者會場ニ於テ作品ノ  
撮影又ハ模寫ヲ爲サントストキハ許可證  
ヲ掛員ニ提示シ其ノ指揮ヲ受クベシ

文部省ハ作品ノ撮影若ハ模寫シ又ハ之ヲ刊  
行スルコトアルベシ

第三章 鑑査及審査

第二十五條 鑑査及審査ノ方法ハ審査員長及  
各部ノ審査員ニ於テ之ヲ定ム

鑑査及審査ノ議事ハ之ヲ秘密トス

第二十六條 鑑査ヲ經タル陳列品ハ總テ特選  
ノ査定ヲ受クルモノトス

第二十七條 鑑査及審査ノ結果ハ審査員主任  
ヨリ之ヲ審査員長ニ報告スベシ

第二十八條 出品人ハ鑑査及審査ニ對シ異議  
ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第四章 賣約及搬出

第二十九條 陳列品ハ本會事務所ニ於テ其ノ  
賣買契約ヲ取扱フモノトス但シ開會後五日  
間陳列品ノ賣買契約ヲ取扱ハズ

第三十條 陳列品ヲ購買セントスル者ハ代金  
ヲ添ヘテ本會事務所ニ申出ヅベシ

第三十一條 即時ニ代金ヲ支拂ハザルトキハ  
手附ヲ以テ賣買契約ヲ爲スコトヲ得手附ノ  
金額ハ代價ノ三分ノ一以上トス

前項ノ買主ガ會期中ニ殘餘代金ノ支拂ヲ爲  
サザルトキハ手附ハ之ヲ拋棄シタルモノト  
看做ス但シ拋棄シタル手附ハ當該出品人ノ  
所得トス

第三十二條 第三十條ニ依ル代金及第三十一  
條第二項ニ依ル手附ハ展覽會終了後拂渡ヲ  
爲スモノトス

第三十三條 賣買契約ヲ爲シタルトキハ作品  
ニ其ノ旨ヲ貼紙ス

第三十四條 出品人ニ於テ陳列品ノ代價ヲ變  
更セントストキハ本會事務所ニ届出ヅベ  
シ

第三十五條 出品人ニ於テ作品及代金受領等  
ノ爲特ニ代理人ヲ置キタルトキハ其ノ住所  
及氏名ヲ本會事務所ニ届出ヅベシ

第三十六條 陳列品ハ展覽會終了後三日以內  
ニ出品人ニ於テ之ヲ搬出スベシ

前項ノ期間內ニ搬出セザルトキハ文部省ニ  
於テ相當ノ處置ヲ爲スベシ

第三十七條 陳列品ノ決定シタル作品  
以外ノモノハ展覽會開會後五日ヲ經過シタ  
ル後十日間以內ニ出品人ニ於テ之ヲ搬出ス  
ベシ

前項ノ期間內ニ搬出セザルトキハ文部省ニ  
於テ相當ノ處置ヲ爲スベシ

第三十八條 陳列品中賣約済ノモノハ展覽會  
終了後買主ニ於テ之ヲ搬出スベシ

前項ノ場合ニ於テハ代金受領證ヲ提出シ自  
己ノ買主タルコトヲ證スルヲ要ス

第三十九條 展覽會終了後陳列品ノ搬出運送  
等ニ關シ買主ノ依頼アルトキハ本會事務所  
ハ買主ノ費用ヲ以テ之ニ應ズルコトアルベ  
シ

第五章 觀覽

第四十條 觀覽時間ハ開會中毎日午前九時ヨ  
リ午後五時迄トス但シ都合ニ依リ之ヲ伸縮  
シ又ハ觀覽ヲ停止スルコトアルベシ

第四十一條 觀覽人ハ陳列品ニ觸ルコトヲ  
得ズ

觀覽人ハ靜肅ヲ旨トシ且掛員ノ指揮ニ從フ  
ベシ

第四十二條 觀覽人ニシテ秩序風俗ヲ紊ルノ  
虞アリト認ムルモノハ入場ヲ禁ジ又ハ退場  
セシムルコトアルベシ

第二回同展覽會會場及出品期限

今般文部省ニ於テ第二回文部省美術展覽  
會會場及出品期限其他左ノ通定メタリ

(文部省) (昭和十三年七月三十日官報)

一、第二回文部省美術展覽會ヲ東京市上野公  
園内東京府美術館ニ於テ開催ス

二、本會ノ開期ハ昭和十三年十月十六日ヨリ  
同十一月二十日迄トス

三、十月十六日ヲ招待日トシ招待狀又ハ優待券  
ヲ所持スル者ノ觀覽ニ供シ其ノ翌日ヨリ一  
般公衆ノ觀覽ニ供ス

四、本會事務所ハ昭和十三年九月三十日迄ハ  
文部省專門學務局學藝課十月一日以後十一  
月二十四日迄ハ會場內ニ之ヲ置ク

五、本會ハ第一部、第二部、第三部及第四部  
ノ綜合展覽會トシ鑑査作品ト無鑑査作品ヲ  
同時ニ陳列ス

六、本會ハ作品ノ種別ニ依リ之ヲ左ノ四部ニ  
分ツ

第一部 繪畫

第二部 繪畫(油繪、水彩畫、パステル畫  
素描、創作版畫等)

第三部 彫塑

第四部 美術工藝

第五部 鑑査及陳列ノ事務ヲ處理スル爲審査  
員長及審査員ヲ置ク

第六部 審査員ハ文部次官ヲ以テ之ニ充ツ

第七部 審査員ハ文部大臣之ヲ委嘱ス

第八部 陳列品ニシテ出品ハ鑑査ヲ經タルモノニ限  
リ之ヲ陳列ス但シ出品人ニシテ左ノ各號ノ  
一ニ該當スルトキハ其ノ專門技術ニ依ル出  
品ニ限リ無鑑査ニシテ陳列シ得ルモノトス第  
四部ニ於ケル綜合製作ニ依ル出品ハ總テ鑑  
査ヲ經ベキモノトス

第九部 帝國藝術院會員

(一) 第二回文部省美術展覽會審査員

(二) 第一回文部省美術展覽會ニ於テ招待ヲ受  
ケタル者

(三) 第一回文部省美術展覽會ニ於テ文部大臣  
實ヲ受ケタル者(但シ本年度ニ限ル)

(四) 出品ハ同一人ニ付各部共一點トス

(五) 出品ハ同一人ニ付各部共一點トス

(六) 出品ハ同一人ニ付各部共一點トス

(七) 出品ハ同一人ニ付各部共一點トス

(八) 出品ハ同一人ニ付各部共一點トス

(九) 出品ハ同一人ニ付各部共一點トス

(一〇) 出品ハ同一人ニ付各部共一點トス

(一一) 出品ハ同一人ニ付各部共一點トス

一、本會開會後左ノ條件ニ依リ第一部、第

二部、第三部及第四部ノ陳列品ハ之ヲ京都  
市主催ノ第二回文部省美術展覽會京都陳列  
會ニ陳列スルモノトス

(一) 陳列品ノ荷造運搬ハ京都市之ヲ負擔ス

(二) 京都市ハ陳列品ヲ昭和十三年十二月二十  
二日迄ニ各出品人又ハ買主ニ送付スベシ

(三) 京都市ハ文部省ヨリ陳列品ノ引渡ヲ受ケ  
タル時ヨリ前項ノ送付ヲ完了スル迄陳列  
品ノ亡失其ノ他損害ニ對シ賠償ノ責ニ任  
ズ但シ賠償ノ額ハ文部省ノ定ムルトコロ  
ニ依ル

(四) 京都市ハ無手数料ニテ陳列品ノ賣買契約  
ヲ取扱ヒ代金ハ京都市ヨリ直接出品人ニ  
送付スベシ

一三、第二回文部省美術展覽會京都陳列會ノ  
會期ハ昭和十三年十二月一日ヨリ同十二月  
十五日迄トス

一四、出品人ニ於テ京都陳列會ヘ陳列スルコ  
トヲ希望セザルトキハ其ノ旨出品申込書所  
定ノ欄中「承諾」ノ二字ヲ抹消スベシ

一五、出品人ニ於テ京都陳列會ヘ陳列スルコ  
トヲ希望スルト雖モ會場其ノ他ノ都合ニ依  
リ陳列セザルコトアルベシ

第二回同展覽會審査員 ○印主任

第一部

○菊池 契月 服部 有恆 西山 翠嶺  
德岡 神泉 鍋木 清方 川村 曼舟  
堅山 南風 金島 桂華 安田 秋彦  
山口 華楊 松林 桂月 前田 青郎  
兒玉 希望 廣島 晃甫 森 白甫

第二部

○藤島 武二 石川 寅治 伊原宇三郎  
太田喜二郎 川島理一郎 田邊 至  
辻 永 中川 一政 中村 研一  
梅原龍三郎 小林 萬吾 阿以田治修  
青山 義雄 齋藤 興里 木村 莊八

輸出工藝振興委員會・貿易局工藝品輸出振興展覽會

第三部  
○山崎 朝雲 堀 進二 小倉右一郎  
加藤 顯清 吉田 三郎 建昌 大夢  
中村 直人 安藤 照 雨宮 治郎  
齋藤 素殿 佐々木大樹 北村 正信  
三木 宗策 關野 聖雲

第四部  
○板谷 波山 沼田 一雅 香取 正彦  
鹿島 英二 各務 鎮三 高野 松山  
推朱 楊成 海野 清 山本 安藝  
松田 權六 清水六兵衛 北原 千鹿  
宮之原 謙 廣川松五郎 杉田 禾堂

輸出工藝振興委員會

輸出工藝振興委員會官制

昭和十四年七月十九日  
勅令第四百八十七號

第一條 輸出工藝振興委員會ハ商工大臣  
ノ監督ニ屬シ其ノ諮問ニ應ジテ輸出工  
藝ノ振興ニ關スル重要事項ヲ調査審議  
ス

委員會ハ前項ノ事項ニ付關係各大臣ニ  
建議スルコトヲ得  
第二條 委員會ハ會長一人及委員二十人  
以內ヲ以テ之ヲ組織ス  
特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アル  
トキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得  
第三條 會長ハ商工大臣ヲ以テ之ニ充ツ  
委員及臨時委員ハ商工大臣ノ奏請ニ依  
リ左ニ掲グル者ノ中ヨリ内閣ニ於テ之  
ヲ命ズ

一 關係各廳高等官  
二 學識經驗アル者  
前項第二號ニ掲グル者ノ中ヨリ命ゼラ

レタル委員ノ任期ハ二年トス但シ特別  
ノ事由アル場合ニ於テハ任期中之ヲ解  
任スルコトヲ妨ゲズ  
第四條 會長ハ會務ヲ總理ス  
會長事故アルトキハ商工大臣ノ指名ス  
ル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 委員會ニ幹事ヲ置ク商工大臣ノ  
奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ  
幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス  
第六條 委員會ニ書記ヲ置ク商工大臣之  
ヲ命ズ

書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス  
附 則  
本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス  
工藝審査委員會官制ハ之ヲ廢止ス

輸出工藝振興委員會職員

會長 商工大臣 伍堂 卓雄  
委員 外務省通商局長 松島 鹿夫  
商工次官 村瀬 直養  
商工省化學局長 永田彦太郎  
貿易局長官 寺尾 進  
貿易局局長 堀 義臣  
工藝指導所技師 國井喜太郎  
國際觀光局長 片岡 諤郎  
永井 松三  
岸田日出刀  
有吉 忠一  
立石 信郎  
團 伊能  
津田 信夫  
矢代 幸雄

從來開催され來つた商工省工藝展覽會  
及び貿易局輸出工藝展覽會は昭和十四年  
八月廢止せられ、同年度より貿易局工藝  
品輸出振興展覽會が開かれることになつ  
た。

貿易局工藝品輸出振興展覽會

幹事

商工書記官 白井 義三  
貿易局書記官 奥田 新三  
同 齋藤 吉臣

第一回貿易局工藝品輸出振興展覽會ノ  
會期會場出品申込期日等ニ關スル告示  
昭和十四年八月二十五日  
商工省告示第二百八號

一 會期 自 昭和十四年十月十一日  
至 同 年十二月四日  
二 會場及展示期間  
イ 東京會場 東京市麹町區九ノ内三丁目  
府立東京商工獎勵館内 自十月十一日  
至十月十六日(六日間)  
ロ 大阪會場 大阪市中ノ島公園 大阪市  
中央公會堂内 自十月三十日 至十一月  
三日(五日間)  
ハ 京都會場 京都市岡崎公園大禮記念京  
都美術館内 自十一月十四日 至十一月  
十八日(五日間)  
ニ 名古屋會場 名古屋市中區御幸本町通  
愛知縣商工館内 自十一月三十日 至十  
二月四日(五日間)

和田 三造  
兒玉 謙次  
飯野 逸平  
有島壬生馬  
淺間 龍藏  
末高興次郎  
白井 義三  
奥田 新三  
齋藤 吉臣

貿易局輸出工藝圖案展覽會

- 三 本會ノ事務ハ左ノ通之ヲ行フ  
イ 九月二十三日迄及十二月八日以降 貿易局第一部施設課  
ロ 自九月二十四日 至十月二十日 東京會場内  
ハ 自十月二十一日 至十一月七日 大阪會場内  
ニ 自十一月八日 至十一月二十一日 京都會場内  
ホ 自十一月二十二日 至十二月七日 名古屋會場内  
古屋會場内  
イ 陶磁器及硝子製品  
ロ 漆器  
ハ 金屬製品  
ニ 染織物及其ノ製品(刺繍、編組物ヲ含ム)  
ホ 木竹製品  
ヘ 以上各種ノ綜合工藝品及其ノ他ノ工藝品  
五 貿易局工藝品輸出振興展覽會規程第二十條ノ規定ニ依ル賞金ノ金額左ノ如シ  
一等賞 三百圓 三人  
二等賞 百圓 五人  
三等賞 五十圓 十人  
六 出品人ハ出品物ノ種類毎ニ別紙ニ認メタル出品申込書ヲ九月一日ヨリ九月二十日迄ニ貿易局第一部施設課ニ差出スベシ  
七 出品物受理期間ハ九月二十三日ヨリ九月二十七日迄トス  
八 出品物ハ右期間内毎日午前九時ヨリ午後四時迄ニ東京會場内ニ搬入スベシ  
出品申込書ノ提出ナキ搬入物、貯留荷物及消費稅未納織物ハ之ヲ受理セズ  
出品物ハ各一點毎ニ内装内ニ必ず出品申込書ニ記載シタル同一ノ番號、品名、箇數、價格及出品人住所氏名ヲ記載シタル荷札一葉ヲ同封スベシ  
組合々品ニ各箇毎ニ必ず當該番號及出品

- 人氏名ヲ記載シタル小札ヲ附スベシ  
九 出品申込書提出後出品物ノ變更ハ之ヲ許サズ但シ事情已ムヲ得ザル場合ニ於テ豫メ承認ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラズ  
出品申込書提出後出品物中止セントスル場合ハ遲滞ナク之ヲ貿易局ニ届出ツベシ  
十 出品物及出品人ノ會場ヘノ往復ニ對シテハ官設鐵道ニ於テ運賃割引ノ特典アルヲ以テ必要ノ向ハ貿易局ニ對シ割引證ノ交付ヲ請求スベシ  
十一 各會場ニ於ケル初日ハ招待日トス  
十二 陳列品ノ購買申込ハ十月十一日ヨリ受付ケ賣約ハ申込順ニ依ル  
十三 大阪會場、京都會場及名古屋會場ニ於テ展示スル爲移送スル場合ニ於テハ左ノ條件ニ依ルモノトス  
イ 移送ノ荷造費及運搬費ハ貿易局之ヲ負擔ス  
ロ 移送ノ爲生ジタル損害ニ付テハ貿易局之ヲ賠償ノ責ニ任ゼズ但シ事情酌量スベキモノアリト認メタル場合ニ於テハ貿易局ニ於テ相當ト認ムル程度ノ賠償ヲ爲スコトアルベシ  
十四 出品物又ハ賣約品ハ會期終了後左ノ條件ニ依リ之ヲ發送シ又ハ直接引渡スモノトス  
イ 發送スル場合ニ於テハ荷造費及運搬費ハ出品人又ハ買主ノ負擔トス  
ロ 直接引取ヲ希望スル場合ニ於テハ東京又ハ名古屋ノ別ヲ出品申込書又ハ購買申込書ニ記載スルモノトス  
十五 貿易局工藝品輸出振興展覽會規程第二十三條ノ規定ニ依リ選定セラレタル陳列品ハ日本輸出工藝聯合會ガ海外ニ於テ開催スル日本工藝品陳列會ニ左ノ條件ニ依リ出陳セシムルモノトス  
イ 移送ノ荷造費、運搬費其ノ他ノ經費ハ日本輸出工藝聯合會之ヲ負擔ス  
ロ 出陳物ノ亡失其ノ他ノ損害ニ付テハ日

- 本輸出工藝聯合會之ヲ賠償ノ責ニ任ズ  
ハ 出品物ハ購買ノ申込ニ應ズルモノトシ購買申込ハ日本輸出工藝聯合會ニ於テ之ヲ取扱フモノトス  
陳列會終了後出品物又ハ其ノ賣却代金ハ東京ニ於テ出品人ニ發送シ又ハ直接引渡スモノトス  
發送スル場合ニ於テハ爲替料金、荷造費及運搬費ハ出品人ノ負擔トス  
第一回同展覽會審査員  
〔委員長〕貿易局長官寺尾進〔委員〕國井喜太郎、秋月透、岸田日出刀、霜島正三郎、木村智一、宮下孝雄、六角注多良和田三造、海野清、杉田精二、高村豐周松田權六、山崎覺太郎、飯野逸平、丹波恆夫、富本憲吉、豐泉益三、各務鑽三、岡田友次、明石國助、日野厚  
貿易局輸出工藝圖案展覽會  
第一回貿易局輸出工藝圖案展覽會ノ會期、會場、出品申込期間、賞金等ニ關スル告示  
昭和十四年四月商工省告示第八十三號  
會期 自昭和十四年五月三十日  
至同 年六月三日  
二 會場 東京市麹町區丸ノ内三丁目南立東京市工藝館内  
三 本會ノ事務ハ左ノ通之ヲ行フ  
イ 五月十七日迄及六月四日以降 貿易局第一部第三課  
ロ 自五月十八日至六月三日 東京會場内出品物ハ左ニ掲グル種類及品種ノモノトス  
(一)服飾用品(イ 染織物及布帛加工品、裝身具、ハ 携帶品、ニ 其ノ他ノ服飾用品)  
(二)家庭用品(イ 飲食器、ロ 化粧用具、ハ 裁縫用具、ニ 其ノ他ノ家庭用品)  
(三)室内調度品(イ 家具、ロ 照明器、ハ 文房具、ニ 喫煙具、ホ 其ノ他ノ室内調度品)  
(四)趣味遊戲具(イ 玩具、ロ 運動用具、ハ 趣味遊戲具、ニ 圖藝用品、ホ 其ノ他ノ趣味遊戲具)  
(五)其ノ他ノ工藝品  
貿易局輸出工藝圖案展覽會規程第二十條ノ規定ニ依ル賞金ノ金額左ノ如シ  
一等賞 二千圓 一人  
二等賞 千圓 二人  
三等賞 三百圓 五人  
褒狀 百圓 十人  
一等賞ニ當當スベキ受賞者無キ場合ハ其ノ賞金ヲ二等賞ニ充當スルコトアルベシ  
出品人ハ出品物ノ種類毎ニ別紙ニ認メタル出品申込書ヲ昭和十四年五月五日ヨリ同年五月十五日迄ニ貿易局第一部第三課ニ差出スベシ  
七 出品物ノ受理期間ハ昭和十四年五月十八日ヨリ同年五月二十日迄トス出品物搬入セントスル者ハ前項ノ期間内毎日午前九時ヨリ午後四時迄ニ會場内ニ之ヲ爲スベシ  
出品申込書ノ差出ナキ搬入物、貯留荷物又ハ送料未納ノモノハ之ヲ受理セズ  
八 出品物ニ對スル諸注意  
イ 出品物ハ畫用紙又ハ強靱ナル紙ヲ使用シ其ノ大サハ日本標準規格A列零番(210×297mm) A列一番(297×361mm)又ハA列二番(420×594mm)トシ額縁、表裝等ヲ要セズ  
但シ用紙ハA列零番、A列一番又ハA列二番ノ代リトシ畫用紙、畫用紙全紙又ハ畫用紙半裁ヲ夫々使用スルモ妨ゲナシ  
ロ 圖案ハ原寸又ハ適當ノ縮尺ヲ用ヒ描法



及着色ハ自由トス  
ハ 用材、仕上、加工法其ノ他ニツキ特記  
スベキ必要アルモノハ説明書其ノ他ヲ添  
附スルコト

ニ 出品物ハ考案者一人ニ付五點以内トシ  
詳細圖ハ一點ニツキ成ルベク五枚以内ト  
ス

ホ 圖案ハ正面圖、平面圖及見取圖ヲ要ス  
ヘ 維形、模型又ハ立體圖案ハ之ヲ受理セ  
ズ

ト 出品人ハ出品番號及氏名住所ヲ圖案ノ  
裏面ニ記載スベシ

九 出品人又ハ考案者ノ會場ヘノ往復ニ對シ  
テハ官設鐵道ニ於テ運賃割引ノ特典アルヲ  
以テ必要ノ向ハ貿易局第一部第三課ニ對シ  
割引證ノ交付ヲ請求スベシ

### 第一回同展覽會審査委員

〔委員長〕貿易局長官寺尾進〔委員〕本  
野精吾、國井喜太郎、宮下孝雄、畑正吉  
和田三造、水町和三郎、高村豐周、廣川  
松五郎、山崎覺太郎、堀口捨巳、齋藤佳  
三

### 美術研究所

東京市下谷區上野公園  
電下谷三四八七

當所は故黒田清輝子爵の遺志に基きそ  
の遺産を以て開始されたもので、昭和五  
年開設の準備成ると共に同子爵遺言執行  
人より建物、諸設備及事業の一切を政府  
に寄附移管し、同年六月政府は之を帝國  
美術院附屬として設置した。昭和十年六  
月帝國美術院改革に伴ひ新に美術研究所  
官制を制定、文部省所管、帝國美術院に  
附置され、次で昭和十二年六月官制改正

美術研究所・東京美術學校

を見、文部大臣直接監督の下に獨立して  
既定の事業を進めることとなつた。その  
目的は美術に關する事項の學術的調査研  
究に在り、傍ら美術に關する研究資料を  
蒐集して美術圖書館的な貢獻をなさんと  
し、又調査研究の結果を出版、展覧、講  
演等に依つて發表せんとするものである。  
現在著手しつゝある事業は大略次の  
如くである。

#### 一、研究資料蒐集

美術品の寫眞其の他の複製、模寫模造  
等の標本、圖書雜誌其の他の資料

#### 一、古美術に關する調査研究

東洋及日本美術に關する美術史的調査  
研究、東洋美術總目錄、落款印譜、東  
洋美術家辭典、美術關係史料、美術關  
係文獻目錄等の編纂

#### 一、明治大正時代美術の調査研究

明治大正美術史の編纂

#### 一、現代美術に關する調査研究

現代美術及美術界に關する調査、日本  
美術年鑑の編纂

一、其他美術行政及教育並に美術の技法  
及材料に關する調査研究

#### 一、刊行物頒布

「美術研究」月刊、「日本美術年鑑」「日  
本美術資料」毎年一回刊行、其の他隨  
時「美術研究資料」、「研究報告」を刊  
行頒布する

#### 一、研究資料閲覧及展覧

研究者の爲に當所蒐集の圖書、寫眞、  
其の他の研究資料の閲覧を許可する、

又隨時陳列室に於て特殊なる資料を展  
觀して一般に觀覽せしめる

#### 一、黒田清輝作品陳列

所内に黒田子爵記念室を設け、其の作  
品を陳列して定時（毎週木曜日午後）  
に公開する。

〔所長〕矢代幸雄〔所員〕矢代幸雄、和  
田新、正木篤三〔助手〕中川千咲、豐岡  
益人、倉田平吉〔書記〕木下龍也〔囑託〕  
田中喜作、菅沼貞三、大給近清、丸尾彰  
三郎、富永惣一、堀井三友、田中豐藏、  
中根勝、岩淵幸左衛門、望月信成、渡邊  
一、隈元謙次郎、福井利吉郎、兒島喜久  
雄、西村敬二郎、山田智三郎、梅津次郎  
小高根太郎、須賀利雄、筒崎謙齋、白畑  
よし、林眞彦

#### 美術研究所官制

昭和十年六月一日勅令第四百四十八號  
改正昭和十二年勅令第二百八十一號

第一條 美術研究所ハ文部大臣ノ管理ニ  
屬シ美術ニ關スル事項ノ調査研究ヲ掌  
ル

#### 第二條（削除）

第三條 美術研究所ニ左ノ職員ヲ置ク

#### 所長

所員 專任三人 奏任

助手 專任三人 判任

書記 專任一人 判任

第四條 所長ハ所員ノ中ヨリ文部大臣之  
ヲ補ス

第五條 所長ハ文部大臣ノ命ヲ受ケ所務ヲ掌ル  
所員ハ所長ノ命ヲ受ケ所務ヲ掌

ル

第六條 助手ハ上司ノ指揮ヲ承ケ所務ニ

従事ス

第七條 書記ハ上司ノ指揮ヲ受ケ庶務ニ

従事ス

#### 附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

#### 東京美術學校

東京市下谷區上野公園  
電下谷八〇二〇—二

東京美術學校は明治二十年十月勅令を  
以て設置せられ、同二十二年二月授業を  
開始した。翌年初代校長濱尾新に代つて  
岡倉覺三學校長となつたが同三十一年退  
官し、彼と共に教授橋本雅邦以下多數の  
教授、助教が辭職した。高嶺秀夫、久  
保田鼎に次いで同三十四年正木直彦學校  
長となり、昭和七年和田英作之に代り、  
次いで同十一年芝田徹心學校長に任ぜら  
れて現在に及ぶ。

本校の學科を本科（豫科、研究科を置  
く）と圖畫師範科（研究科を置く）とに  
分ける。尙選科、聽講生の設備あり。

（本科）日本畫科、油畫科、彫刻科（塑  
造部、木彫部）、工藝科（圖案部、彫金部  
鍍金部、鐫金部、漆工部）及び建築科に分  
つ。修業年限四年。入學資格豫科修了者。  
授業料年額八十圓。在學中特定の學科目  
を修了したる者に中等教員無試験檢定の  
特典あり。

（豫科）修業年限一年。入學資格中學  
校四年修了者、高等學校尋常科修了者、

高等學校高等科入學資格試験合格者。授業料年額八十圓。實技及學科の入學試験を行ふ。検定料五圓。

〔圖畫師範科〕修業年限三年。入學資格中學卒業程度。授業料を徴收せず。入學試験を行ふ。検定料五圓。

〔研究科〕實技、學術の二部に分つ。

修業年限二年以内。入學資格實技は本校卒業後二年を経過せず且卒業成績八十點以上の者、學術は本校卒業者。授業料年額五十圓。

〔選科〕本科入學資格を有せざる者にして本科各科の實技のみを學習せんとする者を銓衡の上入學を許可す。近年募集せず。授業料年額八十圓。

〔聽講生〕聽講料一學年一科目に付二十圓、一科目を増す毎に十圓。

昭和十四年四月末に於ける各科豫科及師範科一年の生徒数は左の如くである。

日本畫科	二〇名
油繪科	三七名
彫刻科	一五名
同 木彫部	七名
工藝科圖案部	一六名
同 彫金部	五名
同 鍛金部	四名
同 鑄金部	八名
同 漆工部	六名
建築科	七名
圖畫師範科	一五名

又本校には文庫があつて圖書標本を收藏し、陳列館及正木記念館があつて諸種

の展觀を試み、何れも生徒學習の參考に資する。

〔校長〕芝田徹心

〔名譽教授〕正木直彦、和田英作

〔教授〕岡田三郎助(通志)、藤島武二、森井健介、結城貞松、多賀谷健吉、六角注多良、佐々木卓、小林萬吾、津田信夫、清水龜藏、矢代幸雄、建昌彌一郎、朝倉文夫、北村西望、南薰造、和田三造、香取秀治郎、石田英一、田邊至、森田龜之助、小泉勝爾、海野清、關野金太郎、高村豐周、廣川松五郎、松田義之

〔生徒主事〕佐々木卓、森田龜之助  
〔助教〕松垣蠶雄、水谷武彦、松田權六、山田康、岡四郎、森田武、野口六三、山崎覺太郎、金澤庸治、常岡文龜、伊原宇三郎、西田正秋、丸山義男、内藤春治、羽下修三、深瀬嘉臣、磯矢陽

〔講師〕杉田精二、大澤三之助、村田良策、澤口悟一、小場恆吉、齋藤幸晴、岡田捷五郎、鎌倉芳太郎、正木篤三、小塚新一郎、比田井鴻(通志)、白川一郎、鈴川信一、羽野禎三、入谷昇、田宗次、比田井元子、石澤正男、矢澤貞則、川崎隆一、沼田勇次郎、木村得三郎、富永惣一、平野茂、關野克、加藤鬼頭太、大峽秀榮、新規矩男、菊池白、豊田朝一郎

### 東京高等工藝學校

東京市芝區新芝町  
電三田一一五六―八

本校は大正十年十二月の設置に係り、松岡壽初代の校長に任せられ翌十一年開校された。同十二年吉武榮之進代つて校長となる。同十三年東京高等工業學校附屬職工徒弟學校を本校に移管、附屬工業實業學校として設置した。同十四年松岡壽再び校長となり、翌年東京美術學校寫真科を本校に移管し寫真部として設置した。昭和三年安田祿造が校長に任せられて現在に及ぶ。

本校の學科を工藝圖案科(工藝彫刻部を含む)、金屬工藝科、精密機械科、木材工藝科及印刷工藝科(寫真部を含む)に分ち、他に、研究生、選科生、聽講生、木材工藝別科を設置す。

尚昭和十二年十月一日より工業學校實習指導員養成科を設置した。

〔本科〕修業年限三年。入學資格中學卒又は專檢合格者。授業料年額八十圓。

〔研究生〕修業年限二年以内。入學資格本校又は實業專門學校卒業者。授業料年額八十圓。

〔選科生〕修業年限三年以内。入學資格中學校、工業學校卒業者は一年以上、學歷なき者は五年以上志望學科の工藝に従事せる者。授業料年額八十圓。

〔聽講生〕聽講料一學課一學期十圓。  
〔木材工藝別科〕修業年限二年。入學資格中等程度工業學校卒業者、又は志望學科に關する經驗を有する者。授業料年額五十圓。

〔工業學校實習指導員養成科〕修業年限六ヶ月。入學資格縣立工業學校機械科卒又は中等學校卒業後六ヶ月間以上實地經歷を有する者。學資は毎月金四十圓宛補給せられ授業料は徴收せず。

本科生徒數  
工藝圖案科 七〇名  
工藝彫刻部 一七名  
金屬工藝科 四八名  
精密機械科 一三六名  
木材工藝科 七五名  
印刷工藝科 六〇名  
寫真部 二〇名  
木材工藝別科 二七名  
工業學校實習指導員養成科 四〇名

〔校長〕安田祿造  
〔生徒主事〕教授 三橋達吉  
〔工藝圖案科〕教授 宮下孝雄、永地秀太、杉山豐治  
〔工藝彫刻部〕教授 畑正吉、寺畑助之丞  
〔金屬工藝科〕教授 豊田勝秋、益田森治、講師 神矢敦親  
〔精密機械科〕教授 竹屋金太郎、永澤謙三、橋本宇一、長谷川一郎  
〔木材工藝科〕教授 木槍想一、西海幸一郎、野村茂治 助教 鈴木太郎  
〔印刷工藝科〕教授 鎌田彌壽治、伊東亮次、岡利亮、長口富吉 助教 畑保之  
〔寫真部〕教授 鎌田彌壽治、伊東亮次、岡利亮、長口富吉 助教 畑保之

〔木材工藝別科〕教授 木楡恕一、築島棟吉

〔共通學科〕教授 江崎敬藏、永地秀太  
岡田楠次郎、三橋達吉、和田香苗、馬場秋次郎、助教 鈴木豐次郎

### 京都高等工藝學校

京都市左京區松ヶ崎御所海道町  
電上五七、五〇三、五七七〇

明治三十五年三月設置。中澤岩太初代校長となり、大正七年七月鶴谷鶴一之に代り更に大正十五年四月、村上宇一校長に任せられ現在に至る。

〔學科〕色染科、機械科、圖案科、窯業科を置く。尙昭和十四年四月より精密機械科、人造纖維科の二學科を新設した。

〔本科〕修業年限三年。入學資格、中學校卒、實業學校卒及其と同程度。授業料年額八十圓。

〔研究生〕本校又は他の實業專門學校卒業者が既修の學科目を更に研究しようとする場合合議の上二箇年以内在學を許可されるもの、授業料年額八十圓。

〔選科生〕修業年限三年以内、授業料一科目に付年額十圓。

〔校長〕村上宇一〔名譽教授〕中澤岩太  
〔教授〕村上宇一、本野精吾、會田龍雄、古城鴻一、霜島正三郎、松村晋、小島幸三郎、目賀田廉一、山上操、藤野清久、向井寛三郎、都島英喜、田中隆吉、平岡尙、青武雄、荒木長次、湯淺南海男、山川隆、河村正義、青木一郎、淺尾健次、鹿野治助、菊池武勝〔助教〕川森日出

壽、田邊武夫、飯田秀夫、山崎實、美和正忠、足利滿義、田中三郎、寺前皓介、白木小三郎

〔本科生徒數(定員)〕

色染科 九〇名 機械科 九〇名  
圖案科 一二〇名 窯業科 九〇名

### 京都市立繪畫專門學校

京都市東山區今熊野日  
吉町 電祇園一五八

明治四十二年三月創立。同校は「專門學校令」に據り日本畫及圖案ヲ攻究セントスル者又ハ圖畫教員タラントスル者ニ必要ナル教育ヲ施ス」ことを目的とする。

初め京都市立美術工藝學校の西隣に校舍を營んだが大正十五年六月現地に移轉した。創立以來多數の日本畫家を輩出して今日に及ぶ。

〔學科〕日本畫科、圖案科に分ち各科に豫科及本科を置き、別に研究科及選科を置く。

〔豫科〕修業年限日本畫科二年。圖案科一年。入學資格中學卒、專檢合格者。授業料年額五十圓(京都市内に居住せざる者は六十七圓五十錢)

〔本科〕修業年限日本畫科、圖案科共三年。入學資格同校豫科修了者。授業料豫科に同じ。

〔研究科〕在學期間五年。入學資格同校各學科又は他の專門學校卒業者。授業料年額四十五圓(京都市内に居住せざる者は六十二圓五十錢)

〔選科〕入學資格高等小學卒業者及之

と同等以上の學力を有する者。授業料年額四十圓(京都市内に居住せざる者は五十五圓五十錢)

〔校長〕川村曼舟〔教授〕入江波光、堂本印象、宇田萩郎、室本一洋、中村大三郎、石崎光瑤、柳原紫峰、宇都谷誠太郎、中井宗太郎、原興作〔助教〕山口華揚、上村松篁、松元道夫、池田遙邨、三宅風白、大橋建、加藤一雄〔講師〕太田喜二郎、猪熊淺磨、久世欽十郎、河野通一、清水光繁、千野光茂

### 京都市立美術工藝學校

京都市東山區今熊野日  
吉町 電祇園一五八

明治十三年七月の創立で、元京都府畫學校と稱し本邦最初の畫學校である。初め普通畫學のみの教授をしたが、同二十一年應用畫學科を併置したのを初めに同二十七年には校則を改正、繪畫科、彫刻科、工藝圖案科を置くに至り、同三十四年には名稱を京都市立美術工藝學校と改めた。大正十五年現地に校舍を移轉した。同校は工業學校規程に據り、美術及び美術工藝に従事せんとする者に必要なる技能を授くるを目的とし、學科を繪畫科、圖案科、彫刻科の三科とし、修業年限を五箇年とす。入學資格は尋常小學卒とし、授業料は京都市内に在者は一箇年四十圓、其他の者は五十五圓五十錢である。

〔校長〕川村曼舟〔實習科受持〕〔繪畫科〕入江波光、藤田哲、谷内徹笑、西村

卓三、金島桂華、菊池隆志、徳岡神泉、辻字佐雄、前田萩郎、猪原大華〔圖案科〕千熊宇平、山鹿清華、田村春曉、山田江秀、片山行雄、森守明、太田喜二郎〔彫刻科〕松田尙之、矢野判三、建畠大夢、北村西望、太田喜二郎

### 工藝指導所

仙臺市甘人町通  
電三七六〇

「本邦固有の工藝を改善し之が全國工業化を圖り現代民衆生活の要求に合致せしむる」と共にその海外輸出の振興を圖る目的を以て昭和三年政府により設置され、はじめ商工省内に假事務所を設けたが同年十一月仙臺市の廳舍竣工と共に事務所を移轉し事業を開始して現在に至つた。其後事業の進展上東京に於ける調査研究の必要を認め昭和八年五月商工省内に工藝指導所出張員事務所を設け當時所員を駐在せしむる事となつた。尙第七十帝國議會の協賛を経て東京に中央機關を設置し大阪に關西支所を設け仙臺の本所は東北支所となし夫々各地方に適應せる指導を行ふこととなり取敢へず昭和十四年度よりそれ〴〵の地に工場の一部を造營し業務を開始する事となつた。當所は〔第一部〕木工、洋塗工、漆工〔第二部〕鑄造、板金、金屬化學、彫塑〔第三部〕圖案設計、展示、寫眞、印刷〔庶務課〕庶務及會計、其他調査係、傳習生係、編纂係等を設置し其事業に當つてゐるが、その業務一觀を要覽によつて記せば左の

通りである。

業務一般

一 調査研究

内外工藝に關する意匠圖案設計材料

技術、生産工藝各般に關する調査研究及參考資料の蒐集をなす

二 試験研究

主として木、金、漆工藝に利用すべき原料、材料、意匠圖案、又は機械器具及製作技術に關する試験研究、各種工藝品の規範原型の研究をなす

三 製作研究

主として木、竹工品、金工品、漆工品、其他各種工藝品を研究的に試作し、一般業者の參考に供すると共に適當の産地又は業者に實施せしめ工業化する

四 製品、圖案及參考品の貸與及展示

本所の研究試作品、設計圖案又は參考品は申請により之を貸與し或は展示會、展覽會、博覽會等に出品する

五 製作加工圖案調製應需

當所では木工、金工、漆工に關する製作加工又は之が圖案的調製依頼に應じ其他當所研究による試作品及圖案の配布をする

六 傳習生及研究生の養成

當所に於ける傳習生の養成は全國斯業の發達向上を目的とし主として木工、金工、漆工業者及其子弟並に工場従業者に對し其實務に必要な技術及知識を短期間に修得せしめる。研

究生は工藝の學理又は技術に關して經驗を有し特に特別の研究を希望する者を入所せしめ専任所員が指導する

七 講習、講演及審査

當所の調査研究に基き工藝に關する講習、講演を開催し又は申請により講習、講演又は審査のため當所職員を派遣し、實地の指導をする

八 質疑應答

木工、金工、漆工に關する材料技術意匠、其他工藝各般に關する質問に對し口答又は文書を以て應答し業者を啓發する

九 設備貸與

當業者の試験研究又は製品加工のため申請のあるときは當所作業に支障のない限り設備を貸與し便宜を圖る

十 刊行物頒布

本所の試験研究及調査に基き工藝ニュースを編輯し、之を工政會から發行させ又隨時工藝に關する小冊子及圖録を編纂し關係各方面に頒布する

工藝指導所官制

昭和十二年八月十二日  
勅令第四百二十七號改正

第一條 工藝指導所ハ商工大臣ノ管理ニ屬シ工藝ノ指導ヲ爲ス爲左ノ事務ヲ掌ル

一 工藝品ニ關スル試験及研究

二 工藝品ノ原料及材料ノ品質ノ鑑定

三 工藝品製作ニ關スル傳習及講話  
四 試験研究ノ爲製作シタル工藝品、加工シタル其ノ材料並ニ調製シタル其ノ意匠圖案ノ配付

第二條 工藝指導所ハ工藝ノ改善ニ必要アリト認ムル場合ニ限り工藝品ノ製作並ニ其ノ意匠圖案ノ調製ノ依頼ニ應スルコトヲ得

第三條 工藝指導所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長 技師 專任 六人 奏任

屬 專任 一人 判任

技手 專任 五人 判任

所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ

第四條 所長ハ商工大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理ス

第五條 技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌ル

第六條 屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第七條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ従事ス

第八條 商工大臣ハ必要ト認ムル地ニ工藝指導所ノ支所ヲ置キ本所ノ事務ヲ分掌セシムルコトヲ得

附則 本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

商工省内臨時職員設置制拔萃

昭和八年勅令第三十六號改正

第六條ノ三 工藝振興ニ關スル事務ニ従事セシムル爲工藝指導所ニ左ノ職員ヲ置ク

技師 專任 二人  
技手 專任 四人  
同所處務規程拔萃

一、工藝指導所ニ第一部第二部第三部及庶務課ヲ置ク

一、第一部ニ於テハ木工品並ニ木工用原料及材料ニ關スル事務ヲ掌ル

一、第二部ニ於テハ金屬工品並ニ金屬用原料又材料ニ關スル事務ヲ掌ル

一、第三部ニ於テハ意匠及圖案ニ關スル事務ヲ掌ル

一、庶務課ニ於テ庶務及會計ニ關スル事務ヲ掌ル

職員

技師 所長兼第三部長事務取扱 國井喜太郎

技師 商工技師 佐藤釜太郎

技師 中井武雄

技師 谷内治橋

技師 齋藤信治

技師 寺坂毅

技師 阿久津保太郎

技師 古谷豐吉

技師 鈴木道次

技師 松崎福三郎

技師 西川友武

技師 藤井左内

技師 豐口克平

技師 安部郁二

技師 劍持勇

技師 八井孝二

技師 政田辰三郎

陶磁器試験所

京都市伏見區深草正覺町  
電話 祇園一四七八

當所は本邦陶磁器工業の改善進歩並にその輸出増進を圖る爲の國立研究指導機關である。大正八年京都市より、元京都市立陶磁器試験場の敷地、諸設備及事業の一切を政府に寄附移管し、時の農商務省所管としたもので後に商工省の所管となり現在に至つて居る。而して昭和八年度、政府に於て國策として工藝振興に關する經費を新に支出することになつたが、この際偶々瀬戸市に計畫された市立窯業試験所の土地、建物その他諸設備一切を擧げて當所に移管し、同所を陶磁器試験所瀬戸試験場として當所に於て經營することになつた。

陶磁器試験所官制

大正八年四月五日  
勅令第八十三號

第一條 陶磁器試験所ハ商工大臣ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル

- 一 陶磁器ニ關スル試験及研究
- 二 陶磁器ノ原料及材料ノ品質ノ鑑定
- 三 陶磁器製作ニ關スル傳習及講話
- 四 試験研究ノ爲製作シタル陶磁器及加工シタル其ノ材料ノ配付

第一條ノ二 陶磁器試験所ハ試験研究成績ノ普及促進ニ必要アリト認ムル場合

陶磁器試験所

ニ限り陶磁器ノ製作ノ依頼ニ應スルコトヲ得

第二條 陶磁器試験所ニ左ノ職員ヲ置ク

- 所長  
技師 專任七人 奏任  
屬 專任二人 判任  
技手 專任十人 判任
- 第三條 所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ商工大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理ス  
(第四條以下略)

同所處務規程抜萃

- 一、陶磁器試験所ニ第一部、第二部、第三部及庶務課ヲ置ク
- 一、第一部ニ於テハ陶磁器ニ關スル基礎的研究並陶磁器ノ原料、材料ノ品質ノ鑑定ニ關スル事務ヲ掌ル
- 一、第二部ニ於テハ陶磁器製作ニ關スル事務ヲ掌ル
- 一、第三部ニ於テハ陶磁器ノ意匠及圖案ノ研究ニ關スル事務ヲ掌ル
- 一、所長ハ必要ト認ムル地ニ試験場ヲ置キ陶磁器試験所ノ事務ノ一部ヲ分掌セシムル事ヲ得

同所製品配付及受託製作規則抜萃

- 一、陶磁器試験所ノ試験研究ニ依リ製作シタル陶磁器及加工シタル陶磁器材料ノ配付ヲ受ケントスル者又ハ陶磁器ノ製作ヲ依頼セントスル者ハ別記所定様式(中略)ニ依リ陶磁器試験所所長ニ出願

スヘシ

- 一、前條ノ出願ヲ許可セントスル場合ニ於テハ陶磁器試験所所長ハ左ニ掲クル事項ヲ定メ之ヲ出願人ニ通知スヘシ
- 一 品種及數量
- 二 代金又ハ製作費及其ノ納付期限
- 三 引渡豫定期日

出願人前項ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ五日以内ニ配付ヲ受クヘキ旨又ハ製作ノ依頼ヲ爲スヘキ旨ヲ申出テサルトキハ出願ハ其ノ效力ヲ失フ

一、陶磁器試験所所長必要アリト認ムルトキハ道府縣市立商品陳列所規程ニ依ル商品陳列所又ハ學校ニ對シ無償ヲ以テ製品ヲ配付スルコトヲ得

同所傳習生規程抜萃

- 一、陶磁器試験所ハ陶磁器ノ製作ニ關スル技術ヲ修得セントスル者ノ爲傳習ヲ行フ
- 一、傳習生ノ傳習期間ハ五箇月トシ傳習開始ノ期日ハ毎年四月一日及十月一日トス 前項ノ期間及期日ハ陶磁器試験所ノ都合ニ依リ之ヲ變更スルコトアルヘシ

一、傳習事項、傳習生ノ定員、傳習期間及傳習開始ノ期日ハ豫メ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

一、傳習生ハ陶磁器ノ製作ニ經驗アル十八歳以上三十五歳以下ノ男子ニシテ官公署、學校、組合其ノ他ノ團體又ハ工場主ノ推薦ニ係ルモノタルコトヲ要ス

一、傳習料及傳習ニ要スル費用ハ之ヲ徴セス

附 瀬戸試験場

瀬戸市大學瀬戸  
電話 瀬戸二四五六

京都本所の基礎的研究よりなる中間試験の結果を更に進んで實地的製作に移し以て陶業者と相互に聯絡を保ち、益々事業の發展を圖らんとするものであつて、當場には技術科、圖案科、及び庶務係を置く。

技術科 研究品の試作、製造、技術上の改善、研究、指導及各種の調査を行ひ、成形係、原型彫塑係、着畫係、窯係、調査係があり相互に事務の聯絡を行ふ。

圖案科 意匠圖案研究、調査及依頼調製

陶磁器試験所職員

技師	所長	秋月 透
同	第一部長心得	磯松 嶺造
同	第三部長	水町和三郎
同		藤井 兼壽
同		滑川 正雄
同		井本米次郎
同		飯田 利平
同		馬淵 利貞
同		田川 基一
同		岡部 國正
技手		

工藝振興ニ關スル事務ニ従事スル臨時職員



# 東京帝室博物館

技師 瀨戸試験場長 赤塚 幹也  
 屬 遠藤 芳門  
 技手 澤村 滋郎  
 日根野作藏

陶磁器新製品製造ノ試験ニ關スル  
 事務ニ従事スル臨時職員

技師 第二部長 小川新一郎  
 技手 石塚信太郎

## 東京帝室博物館

東京市下谷區上野  
 公園電下谷六、一九  
 九〇、四六〇一

同館の創立は明治五年正院に於ける博覽會事務局の設置に始まり、其後同局を博物館と改稱し内務省の管轄に付したが、同十四年農商務省へ移管となり、事務所(當時博物館と稱す)を上野の舊寛永寺本坊跡に移轉し翌十五年同所に新築の本館を開いた。十九年宮内省管理となり、二十二年帝國博物館と改められ、歴史、美術、美術工藝、工藝、天産の五部を設け、三十三年現稱に改められた。天産部は大正十四年文部省に移管された。昭和十二年從來の歴史課、美術課を廢し列品課に改め、別に學藝課を新設した。陳列本館は震災に大破し、其の後表慶館を列品陳列に充てたが、今上陛下の御即位記念の事業たる帝室博物館復興翼賛會の復興大工事が六年を閲して昭和十二年に竣工し、同年獻上せられ、同十三年十一月開館された。建物は地上二階、地下

二階、總面積六千五百二十二坪、鐵骨鐵筋コンクリート造りの東洋風大建築である。館内を約二十室に分ち陳列は概ね第一、二室考古、第三、四室染織、第五、六、七室金工、第八室陶磁、第九、十室彫刻、第十一、十二、十三、十四及十八室繪畫、第十五、十六、十七室漆工、第十九、二十室書蹟等に區分し、尙特別第一室に考古、特別第二、五室に彫刻を陳列する。以上の中繪畫、書蹟は毎月陳列替を行ふ。尙本館開館と共に從來の表慶館には明治以降の日本畫、洋畫、彫刻、工藝を陳列し、近代美術館の機能を果すことになつた。

尙構内には公卿九條道秀及益田孝より夫々寄贈され、昭和十一年開館された九條公卿記念館及應舉館がある。前者はもと東京赤坂なる九條公卿邸内の前公卿道實の居室で昭和九年道秀が宮内省に先考の記念として獻納したもの、總坪凡そ四十四坪、二室、廻廊下附で一の間、二の間の通じて床張付、襖、腰障子に傳山樂山雪筆の四季著色樓閣山水圖が描かれ、これはもと京都御所内九條邸にあつたのを東京邸に應用したものである。後者はもと舊尾張國海部郡大治村明眼院の書院で寛保二年の建立、明治二十二年男爵益田孝により東京御殿山の邸内に移築され、昭和八年宮内省に獻納された。總坪凡四十三坪、書院造、二室、廻廊下附、一の間には松梅菴稚松が、二の間には蘆雁圖が共に墨畫で壁張付、襖、腰障子等に描かれ、何れも圓山應舉の筆である。又構内の茶室六窓庵は金森宗和の建立にかかり、もと奈良興福寺の慈眼院に在つたものである。何れも毎週一回晴天の日に公開する。尙外に校倉があり、奈良十輪院から移した奈良時代の遺構で、扉に四天王を、内部壁板に般若十六善神を畫き、石臺には十六善神の彫刻がある。

〔總長〕渡部信〔事務官〕藤井宇多治郎〔鑑査官〕溝口禎次郎、秋山光夫、後藤守一、三條西公正、石田茂作、伊藤越、矢島恭介、小林剛、野間清六〔御用掛〕都築誠〔鑑査官補〕高橋勇、鷹巢豐治、尾崎元春、田中作太郎、蓮實重康、金森通、關根龍雄、堀江知彦、近藤市太郎、藤岡了一、岡田讓、伊東卓治、藏田藏、松下隆章、神林淳雄、澁江二郎〔顧問〕郷誠之助、清水澄、徳川家達、正木直彦、芝田徹心、羽田亨、池内宏、石黒英彦、徳川義親、細川護立、松平直亮、三谷隆信、中野與吉郎、松尾長造、辻善之助、瀧精一、伊東忠太、黒板勝美、根津嘉一郎、大倉喜七郎、團伊能、杉榮三郎、大橋新太郎、横河民輔〔學藝會員〕奥田誠一、藤懸靜也、香取秀治郎、關保之助、入田整三、吉野富雄、北原大輔

(觀覽日) 一月三日より十二月廿五日迄午前九時より午後四時迄、但し季節により多少伸縮す。(觀覽料) 大人十錢、小人五錢、廿人以上の團體は大人五錢、小人三錢、教員引率の學生生徒の團體は無料。

附 則  
 本令ハ昭和十三年十一月十日ヨリ之ヲ施行ス

第一條 帝室博物館ハ宮内大臣ノ管理ニ屬シ古今ノ美術品ヲ蒐集シテ公衆ノ觀覽ニ供シ美術ノ發達ニ資スル事業ヲ行フ所トス

第二條 帝室博物館ハ之ヲ東京及奈良ニ置ク

第三條 帝室博物館ニ左ノ職員ヲ置ク  
 總長、事務官、鑑査官、鑑査官補、屬技手

第四條 總長ハ勅任トス各帝室博物館及正倉院ニ關スル事務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス

第五條 事務官ハ專任二人奏任トス庶務ヲ分掌ス

第六條 鑑査官ハ專任九人奏任トス美術品ノ鑑査解說陳列及保存ノ事務ヲ分掌ス

第七條 鑑査官補ハ判任トス鑑査官ヲ助ク

第八條 屬ハ判任トス庶務ニ従事ス

第九條 技手ハ判任トス技術ニ従事ス

第十條 奈良帝室博物館ニ館長ヲ置ク  
 館長ハ事務官ヲ以テ之ニ充ツ館務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス

帝室博物館顧問

昭和十三年十一月七日  
宮内省令第八號

宮内省ニ帝室博物館顧問ヲ置ク  
顧問ハ帝室博物館ニ關スル重要ナル事項ニ  
付宮内大臣ノ諮問ニ應ス  
顧問ハ二十五人以上以内トシ宮内大臣ノ奏請ニ  
依リ之ヲ命ス

附則

本令ハ昭和十三年十一月十日ヨリ之ヲ施行ス

帝室博物館社寺寶物受託規程

昭和十一年十一月三十日  
宮内省令第十二號

第一條 帝室博物館ニ於テ陳列ニ供スル爲社  
寺寶物ノ寄託ヲ受クルハ本規程ノ定ムル所  
ニ依ル

第二條 寺社其ノ寶物ヲ帝室博物館ニ寄託セ  
ムトスルトキハ寄託期間ヲ定メ書面ヲ以テ  
帝室博物館館長又ハ奈良帝室博物館館長ニ申  
出ツヘシ寄託期間ヲ更新セムトスルトキ亦  
同シ

第三條 帝室博物館寄託ノ目的物ヲ受領シタ  
ルトキハ附錄様式ノ受託證書ヲ交付シ返還  
スルトキハ之ト引換フヘシ

受託期間ヲ更新シタルトキハ受託證書ニ其  
ノ期間ヲ明記シ繼續ノ印ヲ押印ス  
第四條 受託物ハ受託期間内ト雖モ之ヲ返還  
スルコトアルヘシ

受託物ハ祭典法要修理其ノ他ノ事由ニ因リ  
寄託者ヨリ願出アリタルトキハ三十日ヲ限  
リ之ヲ返還スルコトアルヘシ  
前項ノ期間ハ修理其ノ他已ムコトヲ得サル  
事由アルトキハ之ヲ延長スルコトヲ得  
第五條 寄託社寺ニ對シテハ毎年十二月ニ社  
寺交附金ヲ交付ス

第六條 寄託又ハ受託物ノ返還ニ要スル荷造

恩賜京都博物館

我及運搬費ハ帝室博物館ニ於テ之ヲ負擔ス  
第七條 寄託期間六年以上ニ互ル受託物ニ付  
テハ特別ノ事情アル場合ニ限リ寄託者ノ申  
出ニ依リ帝室博物館ニ於テ其ノ修繕費ノ全  
部又ハ一部ヲ負擔スルコトアルヘシ

第八條 前條ニ依リ費用ヲ負擔スル受託物ノ  
修繕ハ帝室博物館内又ハ指定ノ場所ニ於テ  
之ヲ行フモノトシ帝室博物館館長(奈良帝  
室博物館ニ在リテハ同館長)之ヲ監督ス  
室博物館館長(奈良帝室博物館ニ在リテハ  
同館長)ト協議スヘシ

第九條 受託物ハ帝室博物館ニ於テ保管ノ責  
ニ任ス但シ天災地變其ノ他不可抗力ニ因リ  
滅失紛失又ハ毀損シタルトキハ此ノ限ニ在  
ラス

第十條 本令施行ニ關スル細則ハ宮内大臣ノ  
認可ヲ經テ帝室博物館館長之ヲ定ム

附則

本令ハ昭和十一年十二月一日ヨリ之ヲ施行ス  
明治二十八年宮内省達第七號ハ之ヲ廢止ス  
(附錄様式)省略

帝室博物館出品規則

第一條 所藏ノ物品ヲ本館ニ出陳センコトヲ  
望ム者ハ口頭若ハ書面ヲ以テ申出ツヘシ、  
但シ書面ヲ以テ申出ツルトキハ其ノ品名形  
狀傳來等ヲ詳記シ且略圖ヲ添付スヘシ

第二條 物品ノ出品ヲ承認シタルトキハ物品  
ト引換ニ預證書ヲ交付スヘシ

第三條 出品ハ本館ニ於テ保管ノ責ニ任ス但  
シ天災其ノ他不可抗力ニ因リ紛失毀損シタ  
ルトキハ此ノ限ニ在ラス

第四條 出品ノ輸送費用ハ所有者ニ於テ支辨  
スヘシ

第五條 出品ヲ寫真模造若ハ攝影センコトヲ  
請フ者アルトキハ所有者ノ承諾ヲ得タル後  
之ヲ許可スヘシ但シ各種列品集合全體ノ形

狀ヲ撮影スルハ此ノ限ニアラス

第六條 出品ニシテ當時手入ヲ要スルモノハ  
本館ニ於テ之ヲ爲スヘシ但シ修繕ハ此ノ限  
ニアラス

第七條 出品ノ預期間ハ三箇年トシ預期間ノ  
計算法ハ現品ノ領收力六月以前ナルトキハ  
其ノ年ノ一月ヨリ起算シ七月以後ナルトキ  
ハ其ノ年ノ七月ヨリ起算ス

第八條 預期間満了シタルトキハ書面ヲ以テ  
之ヲ所有者ニ通知ス 所有者前項ノ通知ヲ  
受領シタルトキハ速ニ物品ノ引渡ヲ受クヘ  
シ

第九條 出陳ヲ繼續スル場合ニ於テハ本證書  
ノ裏面ニ繼續ノ印ヲ押シ期限ヲ延長スルモ  
ノトス

第十條 出品預期間内ト雖所有者ノ希望ニ因  
リ物品ヲ返付スルコトアルヘシ

第十一條 返付スヘキ物品ハ執務時間中何時  
ニテモ預證書ト引換ニ之ヲ引渡スヘシ  
引渡ヲ受ケタルトキハ本人又ハ代理人ハ證  
書ノ裏面ニ受領ノ旨ヲ記載シ記名捺印スヘ  
シ

第十二條 出品預期間満了ノ場合ニ於テ所有  
者ノ所在不明ナルトキハ官報及三種以上ノ  
新聞紙ニ五日間之ヲ廣告スヘシ此ノ場合ニ  
於テハ其ノ末日ニ於テ通知ヲ受ケタルモノ  
ト看做ス

預期間満了ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ三ヶ年  
ヲ經過スルモ引渡ヲ申出サルトキハ預證書  
ハ無効トシ現品ハ本館ニ於テ隨意ニ之ヲ處  
分ス

第十三條 出品預證書ヲ紛失若ハ毀損シタル  
トキハ速ニ本館ニ届出證書ヲ再交付若ハ引  
換ヲ請求スヘシ但シ紛失シタルトキハ官報  
又ハ新聞紙ニ廣告シ三箇月ヲ經過スルモ發  
見セザル場合ニ於テ再ヒ證書ヲ交付スヘシ  
第十四條 紛失若ハ毀損ニヨリ再ヒ預證書ヲ  
交付シ若ハ引換ヲ爲ストキハ其ノ理由ヲ證  
書ニ摘記ス

恩賜京都博物館

京都市東山區七條通大和  
大路東入 電報圖五四

明治廿二年五月宮内省達ヲ以テ圖書寮  
附屬博物館ガ廢止され、帝國博物館、帝  
國奈良博物館と同時に帝國京都博物館ガ  
設置された。廿五年四月本館の工事に着  
手し廿八年竣工、三十年五月開館した。  
卅三年官制の改革により京都帝室博物館  
と改稱。大正十三年一月、今上陛下の御  
成婚に際し恩召を以て宮内省より京都市  
に下賜せられ、同年二月一日より恩賜京  
都博物館と改稱し、京都市の經營に屬す  
ることとなつた。

本館は京都其他各地社寺の國寶什寶及  
び個人所藏の優品を蒐集して之を受託陳  
列し、一般の觀覽に供してゐる。陳列品  
を大別して歴史部、美術部、美術工藝部  
の三部とし、更に之を細分して左の如く  
部門を別けて居る。歴史部(一、圖書二、  
古代遺品 三、祭祀宗教關係品 四、武器  
五、禮式風俗關係品 六、貨幣、度量衡、信  
印)、美術部(一、繪畫二、書蹟三、彫刻  
四、建築)、美術工藝部(一、金屬品二、  
窯製品 三、漆器 四、織物品 五、玉石甲  
角竹木品 六、紙草品 七、寫眞並圖繪)。  
現在の列品點數三千四百六十二點。繪  
畫、文書、書蹟は毎月陳列替を行ひ、又  
年に數度特別展覽會及夏季講演會等を開  
催する。

本館は佛國ドリツク式建築にして建坪  
一千二百一坪、内列品館坪數九百十二坪

餘。館内は十六の陳列室に區分され、他に中央室あり、臨時陳列又は講演會場に充ててゐる。

〔館長〕川口知雄〔學藝委員〕猪熊淺磨、小山源治、猪熊信男〔囑託〕水町和三郎、明石國助〔主事〕高市二〔鑑査員〕加藤修、松本聰二郎、土居次義、神田松之助

〔觀覽日〕一月五日より十二月二十五日迄。一月、二月、三月、十月、十一月、十二月〔午前九時—午後四時〕、四月、九月〔午前八時—午後五時〕、五月、六月、七月、八月〔午前八時—午後五時半〕〔觀覽料〕大人十錢、子供五錢、〔特別觀覽料〕一人五十錢、團體〔二十人以上〕大人一人五錢、小人三錢

## 大阪市立美術館

大阪府天王寺區茶臼山町天王寺公園内電天王寺六〇〇、六〇一

古美術品の常設展觀と一般美術展のギャラリーとしての設備を兼ね、大阪市の工事に多年を費し昭和十一年五月落成した。同月帝展作品の陳列を以て開館し、古美術の常設展觀は同年九月より正式に開館した。建物に鐵筋コンクリート造、三階建て地階を加へ、建坪一二二二坪、延坪三八五五坪。陳列室、展覽會室、講堂、圖書閱覽室等より成り、陳列室は同館の蒐集保存に係る古美術品—繪畫、彫刻、美術工藝、書蹟、考古學資料等を常設展觀し、展覽會室及講堂は一般美術展並美術講演會、講習會等の開催希望者に

貸館し、又圖書閱覽室に於て同館所藏の圖書を規定に従つて一般の閱覽に供する。

〔館長事務取扱〕菅野和太郎〔主事〕高津滿、望月信成〔囑託〕今井貫一、荻野伸三郎、松本文三郎、廣瀬治兵衛、伊勢專一郎、上田令吉、藤井源一、片山喜之前田泰治〔學藝員〕小林太市郎、堂谷憲男

## 奈良帝國博物館

奈良市奈良御料地

明治二十二年奈良帝國博物館設置せられ同二十八年四月開館。三十三年官制の改革と共に現稱に改められた。陳列品は主に奈良及近縣の古社寺所有の國寶にして政府の命令出陳に依るもの、及社寺、個人その他よりの寄託品等にして、概して佛像、佛畫が多く、殊に彫刻は上古より鎌倉期に至る優秀品が多數陳列されてゐる。出陳物を歴史品、美術品、美術工藝品の三種類に分ち、彫刻繪畫等の美術品は各室別、時代參考順に陳列し、歴史品及美術工藝品は箱別とし、類聚陳列をしてゐる。館内は十三室に分れ、第一室より第三室まで彫刻、第四室より第七室迄歴史工藝品、第八室は歴史品、第九室より第十二室迄繪畫、第十三室書蹟の順に陳列し、この中第一室より第八室に至る彫刻及歴史工藝品は六月、十二月の二回に定期の陳列替を行ひ、第九室以降の繪畫、書蹟は毎月陳列替を行ふ。尙、毎

月第一、第三土曜日の午後陳列品に即しての解説的講座が開かれる。官制、社寺寶物受託規程等は東京帝國博物館の項參照。

〔館長〕山口巍〔御用掛〕大宮武磨〔鑑査官補〕龜田孜、松島順正〔學藝委員〕中村雅真、新納忠之介、梅原未治〔觀覽日〕一月三日より十二月二十五日まで、午前九時より午後四時迄、但し季節により多少伸縮する〔觀覽料〕大人十錢、小人五錢

## 朝鮮總督府博物館

京城府光化門通景福宮内電光化門六六一

大正四年、施政五周年記念朝鮮物產共進會の開催に際し、京城舊王宮景福宮構内に新築した美術館を中心とし、同構内の舊宮殿をも併せ利用して同年十二月開館に及ぶ。本館陳列品は、朝鮮石器時代金石併用時代の遺物、樂浪帶方郡發掘品、三國時代、新羅統一時代の遺物、高句麗時代の古墳壁畫、高麗時代の陶器、李朝時代の書畫、陶器、漆器及び中央亞細亞の發掘品等で、朝鮮各時代に互る美術考古資料約一萬三千八百餘點が蒐集されてゐる。

〔主任〕藤田亮策〔觀覽日〕月曜日、大祭祝日の翌日、自十二月二十六日至一月三日期間を除き毎日開館〔觀覽料〕一人五錢、引率者を有する學校生徒並軍人は無料

## 李王家美術館

京城府貞洞町五ノ一電光化門七五

朝鮮に於ける美術獎勵の思召を體し、昭和八年十月德壽宮を公開し、宮内の石造殿を改裝して日本近代美術の陳列館とし、日本畫、洋畫、彫刻、工藝の優秀作品を陳列するに至つたが、更に内鮮の古美術をも一堂に陳列すべき美術館建設の適切なを認め、昭和十一年八月新館の工事に着手、同十三年三月工を竣へた。新館は石造殿に接近し渡廊下を以て連絡する近世復興式の三階建て、從來昌慶苑内にあつた李王家博物館は之を廢し、同館の藏品中古美術品のみを移管陳列して同十三年六月五日開館し、茲に名稱を改めて李王家美術館と總稱するに至つた。新館は内鮮の陶磁器、工藝品、繪畫、古瓦、彫像等を陳列し、石造殿は從來通り近代日本美術を陳列して居る。

〔觀覽日〕一月四日より十二月二十八日まで毎日開館〔觀覽料〕宮苑、新、古陳列館共大人二十錢、小人十錢、宮苑のみは五錢、學生團體は割引あり

# 美術家團體一覽 (五十音順)

**愛知縣工藝協會** 名古屋市中區御幸

本町一丁目愛知縣商工館内電本二一五六

愛知縣に於ける工藝の振興並にその産業的進出を圖り、意匠圖案の調査研究、講習會、展覽會の開催、宣傳等を行ふ。

工藝通報(月刊)、工藝叢書(年刊)刊行。

〔總裁〕愛知縣知事 〔會長〕高野源造

〔理事長〕菅原省三 〔理事〕岩村新、木村德壽、中川貞三、赤塚幹也

**愛知社(綜合)** 東京市瀧野川區田端町六一二 朝蔭其明方

大正七年創立。愛知縣出身の在京美術家を以て組織。毎年公募展開催。

〔會員〕日本畫(川崎小虎、服部有恆、清水有聲、太田一彩、森田沙夷、森村稻門)

(洋畫)山本鼎、加藤靜兒、渡邊正太郎、水野義正(彫塑)毛利教武、加藤顯正、朝蔭其明(工藝)藤井達吉、長野埜志

**愛知商業美術協會** 名古屋市中區御幸本町一丁目 愛知縣商工館内

昭和九年創立。商業美術に關する調査研究、展覽會講習會の開催、紹介幹旋等をなす、十二年五月第五回展覽會開催。

〔會長〕菅原省三 〔理事長〕高橋信三 〔理事〕伊藤靜定、杉本健吉、坂本正夫、石黒一彦、富野巖松、大野明、坂井茂、成田市郎、成田光彌

**青丹會(洋)** 東京市品川區大井庚塚町四八三二 田坂乾方 電大森二八五一

昭和七年創立。文化學院美術科卒業生を以て組織。洋畫研究並發表をなす。

〔會員〕千葉明、千頭清策、井村義人、小平鼎、並河弘、野中榮吉、大橋文子、大石俊彦、大兼實、田坂乾、安井隆

**青森縣工藝協會** 弘前市百石町三六電四七

縣下工藝の振興を圖り、弘前地方の工藝品製作者、販賣者等を以て組織。年一回競技展覽會開催。

〔會長〕橋本良雄 〔理事〕奈良金一、八木橋文平、木村勇藏、齋藤熊五郎

〔會員〕九十餘名

**青森工藝協會** 青森市榮町堤橋前倉光木工所内 電一七〇一

青森市の工藝業者、販賣者等を以て組織。展覽會、講習會の開催、他展への出品幹旋等をなす。

**秋田美術會(綜合)** 東京市世田谷區代田一ノ七六六 福田豐四郎方

昭和三年、故平福百穂を中心として、秋田縣出身の在京縣美術家有志を以て組織した。年一回東京及秋田市に展覽會開催。會員六十四名

**淺草美術家協會(洋)** 東京市淺草區千束町一ノ一六 山田篤方

昭和十一年十二月淺草區在住の洋畫家を以て結成。展覽會開催。

〔會員〕相原良保、井手長徳、海老原省

象、府川道徳、文挾勝、近馬勘吾、柏木仁平、加藤利以雄、川村秀治、村上鐵太郎、沼田一郎、野邊欣一、西卷多門、小倉一雄、國分治、森村芳郎、竹原千緒、梅原武夫、山田説義、吉田陽悦、山田篤

**アヴァン・ガルド藝術家クラブ** 東京市本郷區駒込林町一四六 四宮潤一方

昭和十一年四月結成。「アヴァン・ガルド藝術家の懇親と、それによる相互の啓發」を目的とし、毎月座談會、講演會等を開催する。會員は瀧口修造、四宮潤一、植村鷹千代等の評論家及二科獨立、飾畫、一九四〇年協會、エコール・ド・東京、ア

ニマ、ジャン、黒色、動向、フオルム、リラ等諸團體の作家有志に詩人が加つて組織してゐる。

**伊部陶業協會** 岡山縣和氣郡伊部町役場内

昭和九年伊部町の伊部燒業者を以て組織。伊部燒の發達を圖り、展示會開催、他展への出品幹旋、宣傳等をなす。

〔會長〕松本鹿藏 〔副會長〕木村貫一 〔會員〕二十八名

**池袋美術家クラブ** 東京市豐島區池袋四ノ四四五 佐藤方 電大塚二五〇一

昭和十一年池袋及長崎町在住の美術家が親睦を目的として結成。同年九月第一回街頭展開催。

〔委員長〕田中佐一郎 〔委員〕佐波甫、佐藤英男、森繁、須藤清彦、葛見安治郎、寺田政明、桑原實

**石川縣工藝獎勵會展覽會** 石川縣廳

內經濟部商工水産課 縣下の美術工藝、生産工藝、輸出工藝の發達を圖り、年一回金澤市に展覽會開催。引續き東京、大阪其他樞要の地に陳列會を開く。會員二百餘名

〔會長〕石川縣知事

**石川縣輸出工藝振興會** 金澤市泉旭町一丁目

昭和九年創立。縣下輸出工藝の振興を目的とし輸出工藝品關係者に依り組織せらる。見本製作の獎勵、販路擴張等の事業をなす。

〔會長〕石川縣知事 〔副會長〕中川剛毅 〔幹事〕千田孝平、高田利守、淺野廉、能波清二

**一軌社(洋)** 東京市豐島區池袋二ノ九四三 桑原實方

舊スクラム社改稱。昭和八年度東美校師範科卒業生により組織。同人相互の研究機關。

〔會員〕林佐門、高田廣喜、小島勇、桑原實、榛葉嘉一郎、森繁

**一水會(洋)** 東京市荒川區日暮里渡邊町一〇三五 石井方 電駒込四七三

昭和十一年十二月、舊二科會員八名は「會場藝術を非とし、技術を重んじ、高雅なる藝術を尊重することに於て一致」、同會を創立した。同十二年十二月東京府美術館に第一回公募展を開催した。

〔會員〕有島生馬、池部鈞、石井柏亭、木下孝則、木下義義、小山敬三、碓伊之助、安井曾太郎、山下新太郎、高野三三

美術家團體一覽

ア—イ

一五



男、中村善策

第二回同展規則抜萃

一、本會展覽會は昭和十三年十一月二十四日より十二月十日迄東京市上野公園内東京府美術館に開く

一、本展覽會は廣く繪畫の出品を公募す

一、出品は日本に於ける公的の展覽會に發表されたることなきものに限る。

一、一人の出品點數を五點以内とす

一、出品は鑑査を経て之を陳列す

一、出品の鑑査は會員之に當る

一、本會は陳列作品の賣却を取扱ふ。賣却成立の場合は本會は手数料として賣價の一刻を徴す

茨城美術展覽會(日、洋、工) 水戸市南町いばらき新聞社内 電水戸五〇、三〇四、三三三

大正十二年五月いばらき新聞社主催で日本畫展を開催し、ついで昭和五年工藝部を加へて、爾來交互隔年開催し、日本畫展は七回、工藝展は四回に及ぶ。昭和十三年に洋畫部を増設した。會員、出品者共に茨城縣出身若くは同縣に縁故ある者なる事を資格とする。主なる會員、第一部(日本畫)横山大觀、飛田周山、第二部(洋畫)熊岡美彦、第三部(工藝)板谷波山、磯崎美亞、等。

〔會長〕いばらき新聞社長〔顧問〕茨城縣知事

岩手美術工藝協會 盛岡市 岩手縣工業試驗場内 電五一

昭和八年創立。縣下美術工藝の振興を圖り研究の助成及展覽會指導を事業とし、特に郷土古民藝の現代的再生に努む。

〔總裁〕岩手縣知事〔會長〕同經濟部長會員八十名

院友俱樂部(日) 東京市下谷區谷中三崎南町 日本美術院内 電下谷二五一〇

日本美術院繪畫部院友の全員を以て、昭和十二年三月結成。「最近美術界の情勢に顧みて自重を緯とし信念を經とし確固たる精神を以つて藝術の本體を高揚せんとする」もの。年一回院友展を開催する。尙昭和十二年九月會員十名が速快退會した。

〔委員〕跡部白鳥、柴宗廣、松永成路、村田一橋、安孫子荻聲、柿沼宗居、岡田雄就

鳥城會(日、洋) 京都市岡崎法勝寺町一八 柴原希祥方

昭和二年創立、岡山縣出身京都在住畫家を以て組織。毎月研究會を開く。

〔常任幹事〕柴原希祥、稻葉春、生戸田英次、會員三十餘名

愛媛美術工藝協會 松山市 愛媛縣商品陳列所 電四四五

愛媛縣在住並出身の美術及工藝家を以て組織。縣下の美術及工藝の振興を圖り、綜合展を開催す。

〔總裁〕縣知事〔會長〕縣經濟部長

越佐工藝美術會 東京市豊島區長崎町三ノ五三二 佐々木泉堂方

昭和九年新潟縣出身の工藝家を以て組織。何れも舊帝展第四部に關係の作家で、會員相互の研究並發表に努むると共に郷土工藝の指導啓發に努む。同年十二月第

一回展開催、爾來毎年一回縣下及東京に展覽會開催。

〔會員〕小林知象、佐々木泉堂、富田藍堂、品田慎一、柴田武次、市橋繁山、原宗治、小野爲郎、眞藤玉眞

エトアル洋畫會 和歌山市和歌浦七八六 和田傳太郎方

昭和三年創設。年一回春季に展覽會開催。會員六名

大分縣工藝協會 大分市舞鶴町 大分縣工業試驗場内 電三三一

昭和十年四月創立。翌年三月第一回展、十三年三月第二回展開催。研究會、講習會の開催、作品集刊行等を行ふ。

〔會長〕大分縣經濟部長

大分縣美術協會(綜合) 大分市荷揚町 縣教育會館内 電三六一、一五五

昭和十二年五月創立。縣下美術の向上を圖り、春秋二回の展覽會、研究會の開催等を行ふ。同年十一月第一回展開催。

〔會長〕石丸優三〔會員〕凡二〇〇名

大阪繪畫會(洋、版) 大阪市南區大寶寺町東之町六〇 川島方

昭和十三年五月、同人の洋畫作品發表を目的として結成。同年大阪新美術家同盟に加盟、十一月第五回同盟展に参加す

〔會員〕谷福太郎、難波架空像、橋上菁兒、細川冬二(版畫)、川島昇太郎、赤松大祐、原田實、岡本誠、尾形海藏、田川覺三

大阪工藝振興展覽會 大阪市西區江之子島 大阪府工業獎勵館内 電土佐堀

七九〇、七九一

昭和十四年三月、大阪府下の工藝關係諸團體の聯合により創設。毎年春季には美術工藝展を、秋季には産業工藝及圖案展を開催する。同年大阪府、大阪市、大阪商工會議所、堺市、大阪府工業懇話會大阪府工藝協會の聯合主催の下に第一回展開催。

〔審査長〕正木直彦〔審査員〕津田信夫、廣川松五郎、松田權六、岩田藤七、杉田禾堂、中島豐次、黒岩淡哉、山本笙園、島野三秋、安原祥窓、根箭忠縁

同展出品規程抜萃

一、本會は昭和十四年五月五日より同月十四日まで十日間大阪府立美術館に於て美術工藝品の展覽會を開催す

一、出品物は創作工藝品とし出品點數は制限せず

一、出品者は大阪府下在住者及大阪府工藝協會員に限る

一、出品物は鑑査を経て陳列す(一部例外を除く)

一、審査の結果優秀なる出品には左の褒賞を授與す

一等賞(賞金壹百圓)

二等賞(賞金五十圓)

三等賞(賞金貳拾圓)

大阪女人社(日) 大阪市天王寺區上汐町六丁目 藤枝春月方

大阪の婦人日本畫家により組織され、毎年大阪三越に於て「大阪女流畫家展」を公募により開催し、昭和十四年六月第六回展に及ぶ。

〔同人〕生田花朝、橋本花乃、星加雪乃



融紅鸞、大江更岡、村岡小丘、矢島玉女、松本華洋、福田芳穂、小松華影、木谷千種、四夷星乃、嶋成園

### 大阪新美術家同盟(洋、彫)

住吉區阪南町西五ノ二四 西阪方

關西に於ける各美術團體の綜合展開催を趣旨とする。昭和八年四月大阪の洋畫團體、神岡會及ZIGZAGが合同して

結成、次で彫刻團體クレイ(現在大阪彫刻會)が加盟、同年第一回展開催、同年セクション・ダールが加盟、同十二年

一月、神岡會が脱會したが、同年四月ロボット洋畫協會及關西水彩畫協會が加盟した。同十三年、ZIGZAGは解散し

たが、新に六月會、新畫人集團、大阪繪畫會が加盟し、計洋畫六團體、彫刻一團體となつた。同年十一月第五回展を開催。

### 〔委員〕

西阪修、田村譽志那、玉澤潤一、小島大輔、田川寛一、松本銳次、池島勘治郎、桂龍雄、木村孝三、藤田金之助、藤井光、寺田清四郎、川島昇太郎、難波架空像、白石正義、宮島久七

### 大阪彫塑會

大阪市北區新川崎町一宮島久七方

昭和六年洋畫團體ZIGZAGの彫刻部として成立。翌年獨立して大阪近郊の青年彫塑家を加へ帝展、二科、院展、國

展、構造社各系の相互研究團體たる「クレイ」を結成。八年より大阪新美術家同盟展に加盟。十一年十月組織を擴大して大阪彫塑會と改名した。

### 美術家團體一覽

〔會員〕菅原安男、保田龍門、白石正義、谷本整映、宮島久七、木下正彦、大栗和七、金森勝太郎、木下幹、日高政法、三澤賢三

### 大阪二科系美術家協會(洋、彫)

大阪市住吉區住吉町一三八五 桂龍雄方

昭和十四年一月、近畿在住の二科系美術家により組織。

〔會員〕米良道博、桂龍雄、日高政法外十六名

### 大阪美術懇話會

大阪市東區大手前之町 大阪府情報部内

昭和十四年二月、大阪情報部の勸奨により阪神を中心とする美術家が相集り同會を結成した。趣旨は「會員相互の時局に處する信念を固くし美術の振興と文化の向上に努め以て美術報國の使命を全ふせんとする」にあり、之に必要な事業を行ふ。

〔評議員〕矢野橋村、北野恆富、菅橋彦庭山耕園、福岡青嵐、中村貞以、山口艸平、赤松雲嶺、幸松春浦、矢野鐵山、須磨對水、國枝金三、鍋井克之、赤松麟作、松本銳次、藤堂奎三郎、永瀬義郎、岡部晋、青木大乗、小西謙三、古家新、齋藤清二郎、上田曉、保田龍門、中島豐次

### 大阪美術展覽會(日)

三越大阪支店內

大阪三越が主催となり、毎春一回開催する日本畫の公募展。昭和十四年三月第二十五回展開催。

### 〔鑑査委員〕

西山翠嶂、堂本印象、川村

曼舟、中村大三郎、宇田萩郎、山口華楊、矢野橋村、福田平八郎、菊池契月、北野恆富、水田竹園、菅橋彦

### 大阪府工藝協會

大阪市西區江ノ子島 大阪府工業獎勵館内

大正十三年十月創立。社團法人組織。各種の工藝家、意匠圖案家及斯道關係者を以て組織。工藝品及圖案的調査研究、展示會開催。月刊「大阪府工藝協會雜誌」を發行する。

〔名譽會長〕大阪府知事 〔名譽副會長〕大阪府經濟部長 〔理事長〕和田太郎 〔理事〕高橋清、中山修三、杉田不堂、入江來布、江藤喜吉、中島保美、安原祥窓、山本笠園、黒岩淡哉、吉田岩平、土山隆克、瀬川三五郎、益子勇雄、島野三秋、中村半兵衛、松本儀八

### 旺玄社(洋)

東京市芝區芝公園十五號ノ一一

牧野虎雄を主宰とする青年洋畫家の團體。昭和八年より毎春東京府美術館に公募展を開催、出品種目は油繪、水彩、素描、パステル、版畫等。又臨時小品展を開き、夏期講習會を東京及各地に開催す。同十二年從來の同人制を會員會友制に改めた。

〔會員〕牧野虎雄、市村雄造、岩井彌一郎、新野歡一、遠山陽子、千木良富士、甲斐仁代、川城國司、田澤八甲、橋作治郎、田邊嘉重、塚本茂、中出三也、中村新治郎、村瀬眞治、梅澤照司、能勢眞美、野田信、牧野醇、松本茂雄、深澤省三、

福田新生、藤村はつる、小林喜代治、小林榮、小林猶治郎、坂田虎一、佐藤文雄、樹下行雄、水戸範夫、宮部進、宮芳平、三谷浩三、三好俊一、東久世秀雄、東久世小六、森田太郎、鈴木金平、鱈利彦

### 〔會友〕

二十五名

岡崎工藝美術展覽會 岡崎市役所勸業課 電五四九

岡崎美術展の工藝部が昭和二年分離獨立したもの。同市の特産たる石製品、青銅器、木彫等の發達を計るを目的とし毎年同市並愛知縣工藝協會岡崎市支部の共催の下に開催する。十二年十一月第十六回展開催。

### 岡崎美術展覽會(日、洋)

岡崎市立圖書館内 電六五〇

岡崎市の美術の發達を圖り、大正十二年設立。同年第一回展開催、昭和二年繪畫部と工藝部が分離した。十三年五月第十七回展開催。

〔會長〕(岡崎市長)菅野經三郎 〔委員長〕柴田顯正 〔委員〕(日本畫部)板倉晃邦、岡田撫榮、平岩三陽、和田青雨、松原耕嶺、山本一郎、早川藜香、西東米峰 〔洋畫部〕杉山新樹、山本銀太郎、花島龍雄、平山年(幹事)鈴木實、西尾勉雄、伊藤十一

### 佳都美術村(工)

京都市上京區小山村

明治四十二年神坂雪佳を中心に佳都美術設立され、後佳都美術村と改稱、大正十三年これを解散し殆ど舊同人を以て京都

會見延藏方

一七

工藝美術會を組織し、同十五年美工院と改稱したが更に昭和十年佳都美村に還稱した。京都工藝美術會組織以後は公募展を開催したが、現在は同人の研究を目的とする。臨時作品發表をなす。

〔村長〕神坂雪佳〔村員〕伊東陶山、伊東翠壺、岩村哲齋、岩村光眞、一瀬小兵衛、丹羽冬橋、神坂祐吉、神坂松壽、江馬長閑、鈴木表朔、三木表俊、魚野自醒山田樂全、清水六兵衛、宮永東山、溝口安太良、古市垣太郎、皆川月華、山鹿清華〔事務理事〕會見延藏

### 香川縣工藝美術綜合展覽會(綜合)

香川縣商工獎勵館内

縣下の工藝並に美術の發達を圖るを目的とし、豫算の範圍内に於て毎年五月公募展を高松三越で開催す。昭和十三年第五回展に至る。

尙十三年度審査員は、洋畫小林萬吾、日本畫高田美一、西村平間、彫刻新田藤太郎、工藝大須賀喬、磯井如眞、三好眞長等である。

### 香川縣漆藝會

高松市花ノ宮町 香川縣工業試驗場内 電三九〇二

昭和十年一月設立。香川縣工業試驗場の輸出向漆器講習修了者を以て組織。同試驗場指導の下に輸出向一般工藝品の研究をなす。同十二年八月第二回漆藝展開催。

〔會長〕香川縣工業試驗場長〔會員〕二十餘名

### 華陽會(彫)

東京市本郷區駒込神明

町三四一 後藤良方 電駒込一一五五  
昭和八年後藤良方社中により組織。彫塑研究を目的とし、年一回展覽會開催。

塊藝會(彫) 名古屋市西區臺所町三ノ一一 石田方

昭和八年一月創立。名古屋に於ける新進彫塑家の團體。年一回同市に展覽會開催。

〔會員〕石田清、大嶽茂樹、高藤鎮夫、曾我八代、野々村一男、穴吹義雄、安藤菊男、森本啓史、千木谿山、菅沼五郎

海洋美術會(洋) 東京市麹町區丸之内郵船ビル 海軍協會内 電丸之内二七九八

昭和十二年五月海軍記念日を機として海軍協會主催、海軍省後援の下に在京洋畫家九十五名の出品を得て、日本橋三越に海洋美術展が開催され、同六月、海洋美術會發會を決定、次いで同十一月會則の決定を見た。國民海事思想の普及を圖り、毎年海軍記念日を中心として、海軍協會と共同主催、海軍省後援の下に海洋に關係の深い洋畫展覽會を開催する。

〔常任幹事〕石川寅治、石井柏亭、中村研一〔會員〕石川寅治、石井柏亭、長谷川昇、奥瀬英三、中澤弘光、中村研一、永地秀太、山下新太郎、田邊至、小林萬吾、權藤種男、北蓮藏、南薰造、御厨純一、三上知治、三國久、清水良雄

各人社(綜合) 京都市押小路富小路角 岡本庄三方

昭和六年結成。藝術一般の研究及會員

相互の向上を目的とす。毎年展覽會開催。

〔會員〕(日本畫)辻村宗太郎、中村敏郎、赤松稜一、芝正雄、白岩悦三郎(洋畫)仲千代二、安田謙、藤井勇、徳永玉樹(版畫)稻垣耕四郎(彫塑)岡本庄三、吉川常雄、吉田淑示、中村三郎(工藝)天野六郎助

### 革丙會(日)

東京市本郷區弓町一ノ二六 棚田曉山方

明治四十年故小堀新吾門下に依りて組織。大和繪系の國史畫研究並に創作を目的とす。大正十年第一回展を催し、爾來展覽會を繼續して昭和十二年三月、日本橋三越に第十六回展開催。

〔會員〕磯田長秋、岩田豐磨、太田天洋、川崎小虎、川船水棹、棚田曉山、山川永雅、安田親彦、小山榮達、小堀安雄、森戸果香(幹事)棚田曉山

### 學校美術協會

東京市荒川區日暮里町三ノ一九六 電根岸一〇三〇

昭和二年設立。我が國の小學校、中等學校に於ける圖畫手工教育の發達を側面より助成するを以て目的とし、圖書の刊行、教材用具の研究製作供給、本邦圖畫手工の海外紹介等の事業を行ふ。月刊「學校美術」發行。

〔會長〕岸邊福雄(常務理事)後藤福次郎(理事)板倉贊治、山本鼎、稻田靜志、赤津隆助、石谷辰治郎

### 型會(工)

東京市澁野川區田端一五五 小杉二郎方 電駒込二三六五

東京美術學校昭和十三年度の工藝科出身者を以て組織。十三年銀座資生堂に於て第一回展を開催。

〔會員〕小杉二郎、高橋節郎、黒瀬英雄、金子徳次郎

### 關西水彩畫協會

大阪府住吉區住吉町一三八五 桂龍雄方

昭和十年關西在住の水彩畫家十二名を以て組織。年一回大阪、神戸、京都に於て作品展開催。夏期講習會並に毎月研究會を催し、機關誌「水彩」發行。十二年二月大阪新美術家同盟に加盟。

〔會員〕池島勘治郎、別車博資、桂龍雄、吉倉三郎、田中丘人、中谷武雄、福井逸郎、江本兼次、南右橋、青野馬左奈、會友六名、研究會會員百三十名

### 岐阜社(日)

岐阜市大宮町二 杉山方

岐阜縣下郷土美術の向上を目的とする公募展。昭和十四年六月岐阜市に第四回展を開催した。

〔同人〕長谷川朝風、川田虛舟、横山泰溪、杉山祥司

### 九夏會(洋)

東京市世田谷區赤堤町一ノ一五四 土屋義郎方

昭和九年創立。春陽會々友の組織する洋畫發表團體。十一年第一回展開催。

〔會員〕伊藤慶之助、岩田榮之助、上野春香、遠藤典太、小栗哲郎、大澤鉦一郎、鬼塚金華、加山四郎、川端彌之助、兼平英示、齋藤清二郎、眞田久吉、土屋義郎、藤堂全三郎、久泉共三、森田勝、楊佐三郎、和田茂一、新沼杏一、原精一

九元社(形) 東京市豊島區長崎仲町

一ノ二七八四 鈴木三郎助方

昭和八年創立。昭和二年より八年までの東美校卒業生有志が結成せる木彫研究團體。毎月研究會を開き又年一回展覽會を開催する。

〔會員〕森大造、高橋泰藏、中野四郎、

村井辰夫、鈴木三郎助、松本光史、長谷

川宏、長沼孝三、紺谷英儀、齋藤誠一、

田近政二、石塚貞男、奥山泰資、江上正

男、水島嶺、矢野秀徳〔顧問〕關野聖雲

北村西望、建品大夢、羽下修三

九阜會(日) 東京市麹町區九段四ノ

一五 關向美堂内

昭和九年關向美堂に於て太田聰雨、奥

村土牛、吉岡堅二、高橋周桑、田中青坪

常岡文龜、寺島紫明、小倉遊龜、森白市

の九名を以て組織。其後徳岡神泉、山口

華楊、上村松篁、杉山寧、福田豊四郎加

入、現在會員十四名。昭和十三年四月第

四回展覽會。

九室會(洋) (東京事務所)板橋區中

新井町二ノ六五三 伊藤久三郎方(大阪

事務所)兵庫縣武庫郡蘆屋樋ノ口新田七

四三 吉原方

昭和十三年九月創立。二科會の主とし

て第九室を中心とする新傾向作家の親睦

を圖り、併せて各自の研究に資する。毎

年春季東京に展覽會開催。

〔顧問〕藤田嗣治、東郷青兒〔幹事〕峰

岸義一、吉原治良、山本敬輔〔會員〕阿

部金剛、青木壽、新井ふみ子、遠藤倫太

郎、藤田金之助、原田直康、廣幡憲、稻

田徳生、稻垣志行、井上覺造、石丸一、

伊藤久三郎、伊藤研之、桂ユキ子、川口

四郎吉、金煥基、峰岸義一、村田篤志郎

中野淑子、浪江勘次郎、難波架空像、小

川貞彦、岡田オカイン、齋藤義重(昭和

十四年五月脱退)、鈴木正治、高橋迪章

(昭和十四年五月脱退)、高井貞二、高根澤

政子、應山宇一(昭和十四年五月脱退)、

板木宗三郎、山口長男、山路眞護、山本

敬輔、山本直武、吉原治良

九州沖繩各縣聯合工藝試作品展覽會

別府市濱脇海岸 大分縣殖産館内 電別

府二五九

九州沖繩各縣聯合のもとに毎夏公募展

を開催。昭和十三年第五回展を沖繩市に

開催した。

九年會(洋) 東京市豊島區駒込一ノ

八六 川端實方 電大塚五〇九六

昭和九年度東京美術學校洋畫科卒業生

を以て組織。相互の親睦、向上を目的と

す。會員四十餘名。

玖密會(日) 東京市豊島區池袋町三

ノ一四五七 菅澤幸司方

東京美術學校日本畫科の昭和九年度出

身者を以て組織。十三年二月第一回展開

催。

京都工藝院 京都市東山區五條坂五

丁目 電祇園六九八

昭和十二年一月創立。京都に於ける工

藝の八團體、五條會、陶藝協會、綵工會

仲更會、京都漆藝會、金工作家聯盟、若

潤社、工友會が京都工藝の革新誕生を宣

言して大同團結した工藝の綜合團體。其

の結成に伴ひ右諸團體は解消された。同

年京都美術館に第一回展を、十三年第二

回展を、京都及東京の兩市に開催してゐ

る。

〔常任理事〕山鹿清華、清水正太郎〔理

事〕伊東翠雲、番浦省吾、堂本漆軒、岸

本景泰、皆川月華〔幹事〕井上彦之助、

今大路長光、小合友之助、岡本庄三、奥

村究果、米澤蘇峰、中村鶴生、佐野多景

夫、江間長閑、清水祥次、森野嘉光、水

内平一郎、宮下善壽、鈴木貞路〔陶藝部

會員〕伊東翠雲、井野榮造、井上憲吾、

井上素明、八田蘇谷、長谷川白峰、橋本

隆、堀岡道仙、徳力孫三郎、中條昇、岡

本爲治、奥西松雲、桶谷定一、小倉千尋

涌波蘇薩、叶松谷、叶光夫、米澤蘇峰、

吉田光雄、瀧本蘇嶺、高木風子、谷口道

仙、辻晋六、中谷小太郎、中村幸節、中

村昌夫、村井瓶生、草加春陽、黒田清華

山本龍山、山内陶谷、山澤松篁、福田力

三郎、國領素夫、寺池旬煥、淺見安兵衛

淺見與志三、清水六兵衛、清水正太郎、

清水祥次、北村祥鳳、北村陽山、宮川香

齋、宮下善壽、新開邦太郎、森野嘉光、

清風與平、諏訪蘇山〔染織部會員〕石田

玉英、今西良夫、今村冠峰、井關英夫、

岩崎眞也、八田泰造、長谷川文平、馬場

笛山、林雨染、太田光嶺、小合友之助、

川瀬茂次、龜山善博、横山芙明、三宅更

紗、田中初雄、田中貞造、田井修一、中

村鶴生、長村華城、村田春緑、村田博三

山鹿清華、山崎茶平、安武聖果、前田良

三、福村健、佐野多景夫、岸本景泰、皆

川月華、島田勝四郎、龜山竹司、服部好

雄、田中貞造、宇野善之助、山田誠一、

高橋忠一、賀集正夫〔漆藝部會員〕井上

彦之助、岩村貞雄、板倉未利、井上金花

番浦省吾、西澤玉舟、戸島光阿彌、堂本

漆軒、奥村究果、高橋表清、竹中微風、

上原清、山田豊、迎田嘉亭、天野六郎助

水内平一郎、平石孝、鈴木貞路、山岸表

壽、山本伊作、江馬長閑、湯淺華曉、尾

關成章、清水美象、梅村表雲〔金工部會

員〕今大路長光、岡保美、永峰秀作、村

上彦自郎、小森寸龍、古市垣太郎、磯村

律太郎〔木竹部會員〕田中保、中野平一

野呂天潤、藤澤伸一、面屋庄三、芦田岳

堂〔陶藝部會員〕飯田泰三、林不折、

林田山、長谷川吉藏、金山久男、吉田仁

三郎、高木岩華、野本正光、北村金太郎

佐々木清一、東野春生、宮川巳之助、宮

本香齋、水野定一、山本香雲〔染織部準

會員〕賀集正夫、宇野善之助、山田誠一

〔漆藝部準會員〕西澤桃也、大藏更生、

湯淺清二朗、森元伊造

京都工藝美術協會 京都府廳經濟部

内

京都工藝界の各部門、各流派の作家を

網羅して相互の聯絡統制を圖り京都工藝

界の全面的進歩を圖るを目的とす。毎春

京都市に工藝展を開催、薦賞を爲して新

進作家を世に紹介し、又新興工藝の發達

を助長する爲に必要な施設をなす。機關誌發行。

〔名譽顧問〕中澤岩太〔會長〕鈴木信太郎〔副會長〕淺山富之助、田中博、評議員四十一名、會員四百五十名

京都裝飾藝術協會 京都府伏見桃山宗和園内

昭和二年七月設立。織染繡及其他的裝飾藝術の向上普及を圖るを目的とす。作品展覽會、互評會、講演及出版等の事業をなす。

〔總務〕澤田宗山〔理事〕箸尾清、狩野秀峰、岸本景泰、山田江秀、井田宣秋、小林文齋、吉田玉城、櫻田光可、其他會員三十八名、顧問六名

京都青年美術家クラブ〔綜合〕 京都市河原町二條下ル 河原町ビル内

昭和十二年五月創立。京都在住青年作家日本畫六十八名、洋畫三十六名、彫刻四名、工藝二名に依り組織。相互批判を通して懇親裡に京都美術界の革新向上に資せんとするもの。月例研究會の他、講演會開催。

〔幹事〕樋口富麻呂、北脇昇、井上和雄、政田英三、奥村厚一、川口金作、西垣壽、西田信、戸島孝雄、木村廣吉

京都陶磁器工業組合 京都市東山區五條通東大路東入 電祇園一二五〇

昭和九年十二月設立認可。製作品検査共同販賣、金融統制等の事業をなし同地方美術陶磁器の産業化を計る。

〔理事長〕淺見五郎助〔副理事長〕藤岡

幸二、宮永剛太郎、組合員五百八十五名

京都美術家クラブ 京都市河原町三條朝日新聞社京都支局内 電上七二〇〇

昭和十二年八月設立。京都在住の美術家並評論家の親睦團體。毎月例會を開催〔理事〕石崎光瑤、宇田萩郎、山口華楊、桑本一洋、森守明、黒田重太郎、須田國太郎、松田尙之、清水正太郎、皆川月華

〔幹事〕櫻井義臣、佐久間義雄

郷土會〔日〕 東京市世田谷區松原町二ノ七三〇

大正六年六月錦木清方門下に依り創立昭和六年迄毎年展覧會を催したが以後休止、現在は月一回錦木宅に研究會開催。

〔顧問〕錦木清方〔幹事〕渡邊泰次〔會員〕伊東深水、石井滴水、西田西坡、鳥居言人、千島華洋、門井洵水、川瀬巴水、龜永吾朗、笠松繁浪、柿内青葉、山川秀峰、山田喜作、松田青風、小早川清、榎本千花俊、寺島紫明、櫻井霞洞

行人社〔洋〕 東京市淀橋區東大久保一ノ三五七 岡田一馬方 電四谷九三七

昭和四年創立。年一回展覧會開催。

〔會員〕金原五郎、齋藤二男、安達眞太郎、中村節也、白石隆一、倉員辰雄、新道繁、佐藤章、水船三洋、井上脩、福原達朗、岡田一馬、小林榮

金城畫壇〔日、洋〕 金澤市兼六公園内 石川縣商會陳列所

大正十四年石川縣の畫家に依り組織。〔會長〕青木外吉〔同人〕市川昌德、原田太致、八田一路、玉井敬泉、高光一也

田邊榮次郎、中村皓、武藤直信、安井雪光、山科杏亭、紺谷光俊、越田勝治、相川松瑞、淺川修三、澤村冬岳、新納琢川會友六十六名、特別會員四十六名

錦巻會 東京市麻布區東町四〇 三尾方 電三田四〇七

東美校圖書師範科卒業生を以て組織。本部を東京に置き各地方に支部を設けて會員相互の親睦を圖ると共に技能教育の振興に資するを以て目的とす。毎月雜誌「圖畫と手工」發行。

〔會長〕伯爵平田榮二〔理事長〕三尾與喜藏〔理事〕松岡正雄、三浦直政、倉田三郎、山尾薫明、足代義郎〔幹事〕高橋重雄、橋本興家、岩瀬富士雄、榛葉嘉一郎

銀座美術協會〔洋〕 東京市京橋區銀座四丁目 三和ビル四階 銀座聯合會事務所内

昭和十一年二月房野德夫の發起にて發會。同年四月銀座聯合會後援の下に銀座通兩側商店ウインドウに洋畫展開催。

〔會員〕井手坊也、房野德夫、島津一郎、石川滋彦、木下幹一、川端實、富川潤一、三輪孝、沼田一郎、大貫松三、島崎政太郎、副島秀生、黒田頼綱、眞木小太郎、須田壽、千葉衛、笹岡了一

華嚴社〔日〕 東京市下谷區谷中坂町七九 田口勝三郎方

昭和四年、故小堀朝音、小杉未醒、荒井寛方等の主唱により栃木縣出身の在京日本畫家有志を以て組織。隔年東京及郷上に展覧會を催し、後進の誘導に任ず。

〔理事〕石川幸三郎、田口勝三郎〔會員〕小杉放庵、荒井寛方、松本泰水、福田浩湖、關谷雲峯、岡田蘇水、小林草悅、武井晃陵、河内舟人、大貫銀心

形象工藝美術會〔工〕 大阪市東成區勝山道八ノ四〇六

昭和十四年五月創立。工藝美術の向上を圖るを目的とし、工藝の作家及批評家を以て結成す。毎年展覧會開催の豫定。

〔會員〕〔顧問〕白川朋吉、入江來布、今井千尋、羽原秋芳、中條義男、小澤裕、大國壽郎、河合壽成、川口虛舟、橋外波田邊竹雲齋、津田順二、根筒忠雄、中島豐次、黒岩淡哉、山本笙園、安原祥憲、福岡洋哉、深田駒吉、越田尾山、古賀藤々、小林美春、會田裕宜、坂口宗雲齋、柴崎風卿、島野三秋、日比野近三、平松宏泰、森田誠之助、杉田禾堂

乾坤社〔日〕 大阪市外枚方町御殿山電二六二

南畫家を以て組織し、昭和十四年秋、大阪、東京に第一回の公募展を開催した。〔同人〕矢野橋村、矢野鐵山、小松均、福田恵一〔社友〕三十二名

建築學會 東京市京橋區銀座西三ノ一 電京橋一二三二、一二三八

明治十九年四月創立、同三十八年社團法人組織となる。建築に關する學術技藝の攻究發達を圖るを目的とす。事業として月刊「建築雜誌」、其他圖書の刊行、建築に關する調査研究、講演會、展覧會の開催等を行ふ。



〔會長〕佐野利器、會員九千二百名  
**現代美術展覽會**（日、洋） 東京市中野區野方町二ノ一二六八 現代美術社內電中野三五七一

現代美術社主催の綜合展、純真なる青年美術家の道場たるしむるを目的とす。昭和十四年五月東京府美術館に第二回公募展を開催。

〔同會第二回展審查員〕（第一部）奥村土牛、金島桂華、中村岳陵、山口蓬春、福田平八郎、宇田萩郎（第二部）金山平三、安井曾太郎、牧野虎雄

**古伊賀復興會**（工） 東京市品川區下大崎一ノ九四 川崎方 電大崎一〇五〇

大正十年三月發會。古伊賀燒の復興を目的とす。三重縣上野町字野畑に古代式登り窯を備へ、會員組織に依り製品を分與す。又昭和十一年武州金澤町野島に登り窯を築造し、宮川香山指導の下に製作を行ふ。

〔會長〕 川崎克

**互陽會**（洋） 東京市澁谷區若木町三二 土屋實方

昭和十三年創立。春陽會系作家を以て組織し、毎秋同人展を開く。同年十二月銀座資生堂に第一回展開催。

〔會員〕 中谷泰、土屋實、二見利節、高木勇次、藤野龍、角南松生、伊川鷹治

**工華社**（工） 東京市小石川區宮下町六〇 深瀬嘉臣方

昭和六年設立。工藝の研究並に發表の團體。年一回展覽會開催。

〔會員〕 長谷川昇、唐杉榮四、笠木敦次郎、内藤四郎、山口寅男、深瀬嘉臣、小柳今朝一、湯川豊、島崎正二郎、下嶋

**工畫會**（工） 京都市中京區錦藥師新町西入 梅原榮二路方 電本局一三二三  
昭和九年創立。染織圖案家を以て組織し、工畫の創作に努む。毎年一回以上展覽會開催。

〔會員〕 小合友之助、横山英明、中村昭生、梅原榮二路、山田泰三、麻生辨次、佐藤久吉、平尾周更

**工藝技術官協會** 商工省工務局內

昭和十三年五月、從來の圖案技術官協會と木漆金工技術官協會とを合併して、新に同協會を創立した。廣く我邦工藝産業の改善發達を企圖し、各方面の調査研究と會員相互の業務上の連絡並に親睦を圖る。會員百二十一名。

**工藝濟々會**（工） 東京市澁谷區田端町四三八 香取方

大正十四年創立。東西文化合一の基礎の上に新しき工藝美術を創造せんとす。臨時展覽會開催。

〔會員〕 板谷波山、石田英一、六角紫水、飯塚琅珪齋、保坂光山、仰木政齋、香取秀貞、鹿島英二、河面冬山、桂光春、堆朱楊成、海野清、梅澤隆眞、山本安曇、松田權六、佐々木泉堂、都筑幸哉、北原千鹿、清水龜藏、森川紫山

**工藝美術批評家協會** 東京市京橋區銀座西五ノ三 大野法律事務所內 電銀座一三四七

昭和十三年十月創立。嚴正なる工藝美術批評の確立を期して研究會を開きパンフレットを發行す。

〔會員〕 大山廣光、太島隆一、柴崎風郎  
**工人社**（工） 東京市世田谷區深澤町四ノ五〇八 北原千鹿方 電世田谷三〇九一

昭和二年創立。現代意識に立脚せる金工藝の創作研究を目的とす。年一回作品展開催。（昭和十五年一月解散）

〔同人〕 大須賀喬、岡部達男、川本吉藏、鴨政雄、鴨幸太郎、各務鐵三、田村泰二、村越道守、信田洋、山脇洋二、安井喜一、松原南海、福田三郎、佐藤潤四郎、北原千鹿〔準同人〕 富田稔、古橋茂、後藤學一

**甲戌會**（工） 東京市小石川區久堅町二七 野口光彦方

昭和九年創立。純美術としての人形及びこれに伴ふ工藝の研究、製作をなす。年一回展覽會開催。

〔會員〕 鹿兒島壽藏、野口光彦、堀柳女、山川亨造、氏里雅彦、河島茂人、中川光一、綿貫萌春〔會友〕 林俊郎、逸見良之助  
**光風會**（洋、工） 東京市杉並區西荻窪三ノ一二九 太田三郎方 電荻窪二九二三

明治四十五年創立。舊帝展系洋畫家の團體。春季洋畫及び圖案工藝の公募展を開催。昭和十四年二月第二十六回展を東京府美術館に開いた。

〔會員〕 石川欽一郎、石橋武助、池上浩、

石川滋彦、井手坊也、伊藤悌三、岩崎勝平、服部亮英、橋口康雄、遠山清、太田三郎、大野隆徳、岡野榮、緒方亮平、大澤海藏、小川智、和田香苗、和田清、加藤靜兒、梶原貫五、河井清一、川合修二、角野判治郎、花嚴巖、稻森義、川端實、吉田苞、武内鶴之助、田中實一、相馬其一、辻永、中澤弘光、中村研一、長原坦、上野正之輔、黒田頼綱、山形駒太郎、山喜多二郎太、山崎坤象、山下忠平、牧野

司郎、小林萬吾、小林鐘吉、小林眞二、小寺健吉、小絲源太郎、江藤純平、寺内萬治郎、跡見泰、赤城泰舒、安達眞太郎、朝井閑右衛門、鮫島利久、鬼頭鍋三郎、清原重以知、南薰造、南政善、三宅克己、耳野卯三郎、水上信雄、清水良雄、島野重之、新道繁、白川一郎、平岡權八郎、森山肇、杉浦非水、鈴木榮二郎、杉村悌

〔會友〕 市ノ木慶治、伊藤四郎、池田快三、星野正三、土佐林豊夫、戸塚孝三郎、大河内信敬、數見定一、田村一男、反町博彦、高橋道雄、田中義夫、高宮一榮、高坂元三、中谷ミユキ、中田滿雄、中上川蝶子、山口猛彦、山中清一郎、益山雅衛、藤岡俊一郎、藤井芳子、藤彦右衛門、小林貞三、足立眞一郎、木村八郎、神保和幸、白井次郎、本儀信、森田元子、瀬戸千代三、須田剋太（昭和十四年三月現在）

〔十四年度審查委員〕

〔洋畫〕 太田三郎、寺内萬治郎、辻永、鬼頭鍋三郎、中澤弘光、南薰造、中村研一、三宅克己、小林萬吾、耳野卯三郎、小寺健



吉、清水良雄、小絲源太郎、平岡權八郎、  
〔圖案工藝〕山形駒太郎、杉浦非水

神戸實用美術協會 神戸市神戸區  
榮町通五ノ三〇 關山金市方

昭和七年五月創立。舊稱神戸創作圖案協會。商業美術の向上と研究を目的とす。

〔會員〕渡邊正雄、梶原庄之助、土谷勇、藤井郁博、青木宜二郎、南正光、樋口芳太郎、關山金市

高知縣工藝協會 高知市丸之内 高知縣商工獎勵館内 電四八三

昭和十年三月從來の高知工藝協會を變じて現在の組織に改む。縣下工藝の發達を圖るを目的とし、意匠圖案の改善指導、展覽會、講演會の開催、他展への出品、輪展、販路擴張等を行ふ。會員は工藝作家及販賣者七十五名。

〔會長〕（縣經濟部長）里見富次〔副會長〕（經濟課長）北榮造、山本輝美

浩然社（日） 東京市中野區榮町通二ノ二 高橋慶伸方

荒井寛方門下に依り組織。毎月研究會を開く。昭和八年第一回展開催、十三年六月第六回に至る。

〔指導者〕荒井寛方〔幹事長〕高橋慶伸〔幹事〕笹沼寛祐、座間素賢、菊地公明、鈴木三朝、佐藤耕寛、廣原浩暉〔會員〕石澤孝輔、磯部白鳩、今川青宏、西木爲雄、常磐大空、大西郷島、渡邊明洋

神田好司、瀧澤直七、田中茂雄、深見月光、塚本政子、中村泰泥、山下浩素、仙川青也、關口眞緒、木村光市、井出岳水

中川博汀、佐藤一鳳、河内舟人、時山南鳳、六川水聲、松本渡、赤松惠園女、田山正臣、黑崎慧美

紅日會（日） 東京市下谷區谷中眞島町七 横山孝行方

昭和十年故松岡映丘門下により創立。大和繪研究並發表機關。同年六月日本橋高島屋に第一回展開催。

〔顧問〕服部有恆〔同人〕林雲鳳、橋本明治、河村東次郎、横山孝行、中村德二、名古屋謙一、森村稻門

煌土社（日） 東京市杉並區上高井戸町五ノ一八九〇 野田九浦方

野田九浦の塾、居仁洞の改稱。昭和十四年四月、日本美術協會列品館に於て第五回展を開催。

構造社（形） 東京市豊島區池袋二ノ一〇九一 安永方 電大塚一八四四（呼出）

大正十五年九月立體藝術の研究及發表を目的として齋藤素巖、日名子實三の兩人を以て發會、昭和二年東京府美術館に第一回展を開いた。同年平井爲成の入會により洋畫部を設け、次で神津港人が入會した。三年構造社彫塑研究所を開設。

七年九月第六回展の終了後齋藤素巖退會を宣言、會内に紛擾あり、日名子實三、清水三重三が脱會し、一時同會解散を聲明したが、それを取消して事務所を神津方に移し、彫塑研究所を閉鎖した。八年齋藤素巖復歸し、九年會則を改め新會員、彫塑部三十三名、繪畫部二十一名を加へた。十年五月齋藤素巖帝國美術院會

員となる。六月齋藤、濱田、陽三名を残し彫刻部全會員が一時退會したが内十名は留任。同月神津港人退會、又構造社幹事會の決議によつて繪畫部を解消した。十年九月寺畑助之丞退會。尙構造社彫塑研究所は十年より再會されてゐる。昭和十四年五月東京府美術館に於て第十二回展を開催した。

〔會員〕萩島安二（十四年三月死去）、河村龍興、中野五一、野村公雄、安永良徳、後藤精一、齋藤素巖、進藤武松、袖月芳宮地寅彦（會友）星野健一、淺沼俊雄 同社第十二回展規定抜萃

一、本展覽會は毎年五月上野公園東京府美術館に於て之を開く

一、出品の種類は彫塑とし一般出品は貼數に制限を附せず

一、一般出品は鑑査の上之を陳列する

一、一般出品中特に優秀なりと認めたる出品に構造賞を授與する事あるべし

一、陳列場の必要に基き出品物の臺等を本會に於て作成したる時はその費用は出品者の負擔とす

一、賣約せられたる出品に對し實價の二割を手數料として本會に申受く

曠技會（形） 東京市瀧野川區上中里町一一七 菊地互道方

東京彫工會が大正十三年解散して日本美術協會に合併後、第七部の牙彫家が大家像を組織、後曠技會と改稱したものである。象牙彫刻の向上に努め展覽會を開催する。

〔會長〕子爵錦小路頼孝〔委員長〕吉

田宗齋〔副委員長〕森田藻亡、中山昇民〔會計〕菊池互道、堀志光〔委員〕竹内士生、菊池親章、吉田尙秋、成川旭舟、松田道直、小林昇雲、中村鳳堂、藤田寛堂、安藤文雅、吉橋正風、矢澤寛秀、天谷美山、富岡璋雄、淺井弘雄、田中秀行、石黒行鳴〔正會員〕五十二名

國畫院（日） 東京市豊島區巢鴨五ノ一四一 吉村忠夫方

昭和十年九月故松岡映丘盟首となつて設立。我が民族精神の精華たる古典の素養に基いた新興藝術の創造を目的とす。同十二年四月第一回展開催。同十三年三月松岡映丘逝去するに及び、國畫院研究會を結成以降は展覽會を休止し、研究團體として存続することとなつた。

〔同人〕岩田正巳、服部有恆、長谷川路可、狩野光雅、吉田秋光、吉村忠夫、高木保之助、小村雪侍、遠藤教三、穴山勝堂

國畫會（洋、工、寫眞） 東京市品川區北品川三ノ三一二 益田方 電大崎三〇三六

大正七年一月小野竹喬、土田麥僊、村上華岳、野長瀬晚花、柳原紫峰の五名は從來の文展にあきたらず、竹内栖鳳、中井宗太郎を顧問として國畫創作協會を設立

爾來每秋、東京及京都に於て協會展を開催し、又入江波光はじめ數名の若い作家を同人に推薦したが、同十五年梅原龍三郎、川島理一郎の兩名を迎へて第二部を新設し更に富本憲吉、金子九平次を加へ

て彫刻及工藝を同部に置いた。その後會の維持困難となり、昭和三年七月國畫創作協會は解散となつたが、第二部は其儘存続して國畫會と改稱し、大橋幸吉、梅原龍三郎、川島理一郎、金子九平次、宮本憲吉、山脇信徳の舊會員に新に高村光太郎、椿貞雄、河野通勢の三名が参加し、翌四年「第四回國畫會展」を公募の上開催した。爾來同展を繼續して同十四年第十四回に及ぶ。十年梅原龍三郎及宮本憲吉は新帝院會員に任命、同年六月川島理一郎は同會を脱退した。同十二年四月從來の會員、會友制を同人制に改む。尙第十四回展には寫眞部を新設し、鑑査には福原信三、野島康三の兩名が當つた。同十四年七月、彫刻部は會員總會を開き、繪畫部と「藝術上の見解」を異にする故を以て同會を結束離脱し、清水多嘉示を除いて他の全員が新制作派に合流した。依つて同會は彫刻部を解消した。

〔同人〕(繪畫部) 青山義雄、池邊貞喜、梅原龍三郎、大森啓助、大谷房吉、仰木茂、仰木ゲルトロド、大淵武夫、大橋孝吉、柏木俊一、河野通勢、久保守、庫田毅、佐藤哲三、佐藤豊吾、清水多嘉示、立石鐵臣、土田文雄、辻愛造、椿貞雄、杉本健吉、中村博、野島照正、長谷川泰子、平塚運一、藤田太郎、別府貫一郎、眞垣武勝、益田義信、宮田重雄、宮坂勝村上巖、馬越樹太郎、山田正、山村誠、山脇信徳、山下品藏(版畫部) 恩地孝四郎、川西英、平塚運一、ブブノヅ、棟方

志功、(舊彫刻部) 清水多嘉示、高田博厚、本郷新、明田川孝、柳原義達、山内壯夫(工藝部) 石井恒、仰木ゲルトロド、奥村博史、宮本憲吉  
同會第十四回展出品規定拔萃  
一、本展覽會は東京に於て左記の規定に據り開催す  
一、本展覽會は何人と雖も自己の作製したる繪畫、版畫、彫刻、美術工藝品、寫眞(新設)を出品することを得  
一、鑑査審査は本會審査員其の任に當る  
一、陳列中の作品を審査し卓越せる作品に對しては國畫會獎學金義狀を贈る  
一、繪畫部の鑑査細則左の如し  
審査員の過半数に依り入選を決す。但過半数に達せざる時と雖も審査員中特にこれ

を支持するものある時は各員二點以内に限り入選せしむることを得、此の場合に於ては支持したる審査員の氏名を發表するものとす  
一、出品作品に對しては左記の手数料を要す  
一點毎に金五十錢  
一、出品作品賣約に對しては出品者は賣價の一割但し工藝は二割を手數料として本會に收むべし  
寫眞部  
一、藝術印畫、應用印畫(裝飾、報道、宣傳等)と雖も藝術的に見て優秀なるものは此れを認む  
一、作品大きさは全紙以上とす  
但し壁畫の場合は表装共幅七八以内とす  
一、その他の出品規定は繪畫部規定に同じ

國際人形協會 東京市品川區南品川  
コーサ  
三ノ一五七七 電高輪六四七〇  
昭和十一年十一月發會。日本人形の國際的進出、人形製作技術の指導、人形の普及等を目的とす。  
〔理事〕有坂與太郎、山村耕花、横山正三、成舞平兵衛  
國風畫會(日) 東京市杉並區天沼二丁目三一  
昭和五年十一月創立。倭繪の進歩發達を圖るを以て目的とす。創立後間もなく同人一同の謹作に係る伊勢物語繪卷を陛下に獻上す。毎月研究會を開き又隨時作品發表を爲す。  
〔會頭〕子爵入江爲守〔幹事〕岩田豊磨〔會員〕安田靉彦、伊東紅雲(昭和十四年四月二日死去)、磯田長秋、大坪正義、棚田曉山、川崎小虎、永井幾麻、前田氏實、小山榮達、荻生天泉、公文廣淵、兒玉輝彦  
國民美術協會 東京市丸之内明治生命館マール内  
大正元年、第六回文展洋畫部の出品者懇親會の席上「美術全部門を包容する協會組織」の設立が發議され、翌二年三月創立總會を開催、森林太郎、黒田清輝、岩村透、松岡壽、和田英作の五名が理事となつた。同會は作家並美術關係者を以て組織し、繪畫(日本畫、洋畫)、彫塑、建築、裝飾美術、學藝の五部を設置し、藝術家共通の利益擁護並美術の社會的普及を圖るを以て目的とする。既往に於ける主要なる業績は大正年間に於ける美術

館建設、美術學校改革、裸體畫取締り、文展工藝部増設等の美術行政上の諸問題に關する政府當局への進言及數回に亘る佛蘭西及獨逸現代美術展覽會の開催等で、尙前後十二回に亘り本會員の綜合展を開催したが昭和三年以後中止となつた  
〔理事〕辻永、小倉右一郎、中村順平、森田龜之助、島田豊仙  
黒牛會(洋) 東京市澁野川區西ヶ原三六一 渡邊光徳方  
昭和三年創立。毎年一回展覽會を開き油繪、水彩、版畫等に互る會員の創作を發表す。  
〔會員〕五味清吉、前田慶藏、高嶋野十郎、小室孝雄、佐藤醇吉、渡邊光徳  
早苗會(日) 京都市釜座二條下ル三宅風白方  
故山元春舉の遺業を繼承す。年一回展覽會を開催し、又月次研究會、講演會を開く。  
〔會長〕川村曼舟〔參與〕山元清秀〔評議員〕庄田鶴友、山下竹齋、玉舍春輝、久保田竹文、林文塘、高橋秋華、岡文濤、船川華州、伊藤溪水、植中直齋、山元櫻月、中島春鷗、小早川秋聲、柴田晚葉、古谷一晃〔常議員〕玉舍春輝、山下竹齋、古谷一晃、堀江春輝、案本一洋、武田鼓葉、齋藤紫山、三宅風白、中野草雲、佐々木春華、勝田哲〔幹事〕貴道草衣〔副幹事〕高木富三、齋藤和秀〔會計〕谷口英雄  
佐賀縣工藝協會 佐賀縣經濟部商工

課内

昭和十一年設立。縣特産工藝品の産業化並その海外的進出を圖るを目的とし、工藝資料の蒐集展示、作品展、競技會の開催、宣傳等を行ふ。

〔會長〕佐賀縣經濟部長

佐賀美術協會（日、洋、彫） 佐賀市興賀町精町 山口亮一方

大正三年岡田三郎助、久米桂一郎を指導者として、佐賀縣出身の美術同好者に依り組織。郷土美術の啓蒙を趣旨とす。

年一回公募展開催。會員三十五名。

皇月會（工） 東京市豊島區駒込三ノ

三九九 山本安曇方

昭和十一年五月第一回展開催。十四年六月第四回展開催。會員の新作を発表する。

〔會員〕板谷波山、石田英一、飯塚琅珪齋、六角紫水、保坂光山、仰木政齋、香取秀眞、桂光泰、鹿島英二、河面冬山、堆朱楊成、都筑幸哉、海野清、梅澤隆眞、山本安曇、松田權六、佐々木象堂、北原千鹿、清水龜藏、森川紫山

〔會員〕板谷波山、石田英一、飯塚琅珪齋、六角紫水、保坂光山、仰木政齋、香取秀眞、桂光泰、鹿島英二、河面冬山、堆朱楊成、都筑幸哉、海野清、梅澤隆眞、山本安曇、松田權六、佐々木象堂、北原千鹿、清水龜藏、森川紫山

〔會員〕板谷波山、石田英一、飯塚琅珪齋、六角紫水、保坂光山、仰木政齋、香取秀眞、桂光泰、鹿島英二、河面冬山、堆朱楊成、都筑幸哉、海野清、梅澤隆眞、山本安曇、松田權六、佐々木象堂、北原千鹿、清水龜藏、森川紫山

〔會員〕板谷波山、石田英一、飯塚琅珪齋、六角紫水、保坂光山、仰木政齋、香取秀眞、桂光泰、鹿島英二、河面冬山、堆朱楊成、都筑幸哉、海野清、梅澤隆眞、山本安曇、松田權六、佐々木象堂、北原千鹿、清水龜藏、森川紫山

〔會員〕板谷波山、石田英一、飯塚琅珪齋、六角紫水、保坂光山、仰木政齋、香取秀眞、桂光泰、鹿島英二、河面冬山、堆朱楊成、都筑幸哉、海野清、梅澤隆眞、山本安曇、松田權六、佐々木象堂、北原千鹿、清水龜藏、森川紫山

〔會員〕板谷波山、石田英一、飯塚琅珪齋、六角紫水、保坂光山、仰木政齋、香取秀眞、桂光泰、鹿島英二、河面冬山、堆朱楊成、都筑幸哉、海野清、梅澤隆眞、山本安曇、松田權六、佐々木象堂、北原千鹿、清水龜藏、森川紫山

本香湖、渡邊壽、松本竹根、鬼頭篁、白杵香穂、山本光文、鶴崎熊太、安藤美靈

豊島司城、野倉桃仙、菅沼寛（京都部）

岩佐古香、佐藤空鳴、奥村紅稀、高井孤

郎、廣本進、余語可山、新見虛舟、高木

勇、服部文幸、大嶽知弘、横江正義

埼玉縣工藝協會 埼玉縣廳商工課

昭和九年七月創立。縣下工藝的産業の發達を圖り業者約三十名を以て組織。展示會、講習會の開催、出品斡旋、意匠圖案の配布等をなす。

〔會長〕（經濟部長）遠山信一郎〔副會長〕（商工課長）鈴木直人〔幹事〕辻野

秀夫、大成常太郎、村上辰夫

僅書會（洋彫） 東京市品川區大井

伊藤町五七七 渡邊進方

昭和十三年二月創立。畫家、彫刻家の交遊團體。同年神戸市に小品展を開き、同十四年三月東京資生堂に於て第一回展を開催した。

〔會員〕伊川鷹治、池田榮一、石井了介

渡邊進、谷とし子、津谷鹿市、中西義雄

奥田まち子、岡村進、山崎省三、山本鼎

政森敏男、湯尾留吉

〔會員〕磯田又一郎、橋本明治、西村卓

三、西山英雄、奥田元宋、奥村厚一、加

藤榮三、村田泥牛、山本丘人、新井勝利

三十谷子、菊池隆志

〔會員〕磯田又一郎、橋本明治、西村卓

三、西山英雄、奥田元宋、奥村厚一、加

藤榮三、村田泥牛、山本丘人、新井勝利

三十谷子、菊池隆志

〔會員〕磯田又一郎、橋本明治、西村卓

三、西山英雄、奥田元宋、奥村厚一、加

藤榮三、村田泥牛、山本丘人、新井勝利

三十谷子、菊池隆志

〔會員〕磯田又一郎、橋本明治、西村卓

三、西山英雄、奥田元宋、奥村厚一、加

藤榮三、村田泥牛、山本丘人、新井勝利

三十谷子、菊池隆志

在野洋畫五團體懇話會 東京市大森區田園調布三ノ三五一 足立源一郎方

電田園調布二三四六

昭和十二年二月結成。「日本畫壇の革新發展を期し諸事情の研討批判協定」を目的として二科會、獨立美術協會、國畫會、新制作派協會、春陽會の五團體に依り組織された。

〔代表者〕（二科會）鍋井克之、東郷青

兒（獨立美術協會）中山巍（國畫會）益

田義信、宮田重雄、福島繁太郎（新制作

派協會）猪熊弦一郎、佐藤敬、三田康、

小磯良平（春陽會）足立源一郎、木村莊八

挿繪俱樂部 東京市瀧野川區田端町

四〇四 岩田專太郎方 電駒込二八九〇

昭和十一年五月創立。挿繪の向上並挿

畫家の權利擁護を以て目的とす。同月著

作權審議會に著作權法中に挿繪に關する

條文を加へられ度旨の決議書を提出し

た。

〔顧問〕鍋木清方、小杉放庵〔書記〕吉

田貫三郎

讀岐美術協會（日、洋） 高松市兵庫

町 古木堂本店内 電二七〇一

昭和四年創立。地方美術の向上發達を

圖る。毎年一回公募展を開催し、講習會

寫生會等を行ふ。昭和十二年二月高松三

越に第八回展開催。

〔會員〕井川敬逸、小西光雄、高橋正三

谷口國介、神内正芳、岡田季雄、黒田純

二、小川誠一、高木靜雄、高尾雄次、中

村重幸、本多一郎、藤田四郎、河部基一

平井爲成

三春會（洋） 東京市本郷區森川町四

二 野崎方

昭和三年度東美校洋畫科卒業生を以て

組織。十四年六月東京府美術館に第六回

展開催。

〔會員〕岩田芳助、伊勢幸平、波多野勝

好、二宮不二磨、和佐良顯、大澤昌助、

奥村義雄、加藤顯清、飯島誠二郎、勝見

謙信、田中致美、田中孝夫、田淵巖、竹

田讓、中井惣之助、野崎龍雄、山村孝太

郎、山口猛彦、安田岩次郎、丸山清六、

松原勝、福島順之助、小松原義則、天野

武吉郎、淺井景一、佐藤文雄、佐藤功、

佐川源治、三木辰夫、加藤久幹、原田直

康、關谷陽、杉山榮、鈴木重成、林清

珊瑚會（日） 京都市四條高倉 大丸

美術部内

大丸京都店美術部主催。舊「六人會」

を擴張したもので、毎秋展覧を行ふ。

〔會員〕板倉星光、池田遙郎、徳岡神泉

金島桂華、勝田哲、宇田萩郎、上村松篁

山口華楊、案本一洋、松元道夫、前田萩

郎、福田翠光、麻田辨次、三宅風白、森

守明

珊々會（日） 東京市日本橋 高島屋

美術部

高島屋美術部の主催する日本畫發表の

團體。昭和十四年六月第五回展開催。

〔會員〕西山翠峰、鍋木清方、菊池契月

結城素明、上村松園、小杉放庵

産業工藝社 大阪市浪速區惠美須町

〔會員〕西山翠峰、鍋木清方、菊池契月

結城素明、上村松園、小杉放庵

産業工藝社 大阪市浪速區惠美須町

〔會員〕西山翠峰、鍋木清方、菊池契月

結城素明、上村松園、小杉放庵

産業工藝社 大阪市浪速區惠美須町

二ノ一四六 電或一九四

京阪神地方を中心とし、産業、工藝に關する調査、指導獎勵、海外紹介を行ふ。毎月研究會を開催し、機關誌「産業工藝」の編輯をなす。

〔主事〕上田儀一

### 産業美術振興運動廣告美術作品展覽會

大阪市北區堂島 大阪毎日新聞社事業部内 電北五五〇〇

大毎事業部の主催する産業美術振興を目的とする展覽會で、年一回新聞廣告圖案並にポスター圖案及び染織圖案の懸賞公募による展覽會を開催す。昭和十四年春東京大阪に第八回展を開催。

燦本社(日) 東京市板橋區中村町三ノ六二二 東谷桃岡方

大正十五年五月創立。東美校圖畫師範科出身の在京日本畫家有志を以て組織。年一回展覽會開催。

〔會員〕穴山勝堂、山田義雄、東谷桃岡、松垣龜夫、小林澄心、福宿一穂、中居良次、藤原芳泰、大島正記、伊藤昇、山田武、石井進、鹿島則元

四櫻會(洋) 東京市世田谷區代田一ノ六四四 橋本八百二方

昭和四年度東美校洋畫科卒業生を以て結成。舊稱「一會」。同十二年第一回展開催。

〔會員〕橋本八百二、刑部人、渡邊友次郎、吉井淳二、田邊陸夫、南郷梓、中村節也、宇野千里、倉員辰雄、久保守、山田秀雄、松村菊麿、福原達朗、手島貢、

荒明實、安藤高久、佐藤一章、齋田章三、齋藤二男、水谷浩、水船三洋、宮内秀雄、島村三七雄

四元莊(洋) 東京市澁橋區東大久保一ノ三五七 鈴木繪畫研究所内

昭和十一年十月鈴木千久馬門下に依り組織。

〔莊首〕鈴木千久馬〔同人〕倉員辰夫、安藤信哉、新道繁、外十三名

四行會(洋) 東京市豊島區池袋四ノ四四五 齊藤福藏方 電大塚二五〇一

獨立展所屬の作家四名を以て組織。展覽會を開催する。

〔會員〕竹中三郎、中尾彰、佐藤英男、富樫寅平

滋賀縣工藝協會 大津市東浦 縣物産陳列場 電大津一四五七

昭和十年六月設立。縣下工藝の振興、産業的進出を圖り作品展覽會、講演會等を行ふ。

〔會長〕滋賀縣商工水産課長、會員約六十名

滋賀圖案會 大津市東浦 縣物産陳列場 電大津一四五七

昭和三年創立。滋賀縣内各指導機關に於ける圖案關係技術者を以て組織。縣内の物産及工藝品の意匠圖案の向上を計るため展覽會、講演會の開催、現地指導視察旅行等をなす。

〔會員〕深澤和美、村瀬眞治、新井武治、廣瀬義景、坪井明、藤田幸助、松宮寛明、井口俊夫

自由學園工藝研究所 東京市豊島區雜司ヶ谷六丁目

自由學園卒業生を以て昭和五年創立。

工藝品の創作並に發表をなし、同八年より、東京、大阪、其他に展覽會を開催し、又巴里博、紐育博等に出品、同十三年五月以降北京に於て中國少女を指導し、工藝品の製作を行ひ一方國內重要都市に再生工藝講習會を催しその指導に當つてゐる。

自由美術家協會(洋畫、其他) 世田谷區上北澤三ノ一一九 山口薫方

昭和十二年二月結成。同七月第一回展開催。趣旨「純粹にして積極的な藝術意志によつて前進せんとする眞摯なる美術家の大同團結により、各人の藝術の自由なる發展と時代の藝術精神の振興とを期す」年一回公募展開催。

〔顧問〕今泉篤男、外山卯三郎、大口理夫、川路柳虹、龍村謙、内山義郎、植村鷹千代、佐波市、四宮潤一、森口多里、〔會員〕長谷川三郎、濱口陽三、村井正誠、矢橋六郎、山口薫、荒井龍男、難波田龍起、植木茂、北尾淳一郎、(昭和十四年六月推薦)小山昇、中村眞、森芳雄

〔會友〕岩橋英遠、馬場頼三、馬場和夫、西田信一、大橋城、小野里利信、野原隆平、吉見庄助、金煥基、船田玉樹、平岡潤、富岡宏資、山田光泰、山岡良文

同展規則抜萃

一、本展覽會ニ出品シ得ル作品ノ種類ハ左記ノモノトス A 油繪、B 水彩、C 版畫、D 素

描、E コラーージュ、F オブジェ、G フォー

トグラム

一、本展覽會ニ出品シ得ル大キサハ左記ノ如シ

A 會員 一人合計 油繪 二百號以内

B 會友 一人合計 油繪 百號以内

C 立體作品ハ十二立方米(2×2×3)以内

D 一般公募作品ハ一人五點以内

一、本展覽會開催都市ニ於テ既ニ發表シタル作品ハ出品スルコトヲ得ズ

時習園(工) 京都市東山區五條橋東四丁目 淺見五郎助方

大正九年十一月創立。嶄新なる意匠圖案の創立並に其工藝品への應用を研究するを以て目的とし、年一回作品發表を行ふ。

〔顧問〕中澤岩太〔指導者〕霜島正三郎〔會員〕澤田宗山、稻葉七穂、淺見五郎助、井本米泉、小川文齋、中谷小太郎、池田泰山、淺見隆三、米澤蘇峰、井田宣秋、平井香秋、樫田光可、平野泰三、西澤玉舟、楠田撫泉

七絃會(日) 東京市日本橋 三越美術部内

昭和五年創立。毎年一回作品發表をなし、十四年十一月第十回展開催。

〔會員〕錦木清方、小林古徑、菊池契月、安田靉彦、前田青邨〔物故會員〕平福百穂、速水御舟、土田麥僊、西村五雲

七彩會(洋) 東京市大森區馬込町東三ノ八二二 長谷川春子方



洋畫家の組織する會。毎年、東京、大阪に展覽會開催。

〔會員〕橋本はな、藤川榮子、三岸節子、佐伯米子、遠山陽子、島あふひ、長谷川春子

七人社〔圖〕 東京市牛込區東五軒町二 岸秀雄方 電牛込四二七

大正十三年杉浦非水に師事する七名にて發企、昭和元年東京三越に第一回創作ボスター展開催。圖案、商業美術、挿繪等をなす。

〔會員〕岸秀雄、岸信男、野村昇、新井參夫、關口謙輔、小池巖、金丸重嶺、原萬助、須山浩、田中富吉、毛利滋、小川金重、金田德郎、野依健、前島誠一

靜岡縣工藝協會 靜岡市追手町 靜岡縣商工課内

昭和九年設立。縣内工藝の發達を圖り工藝に關する調査研究、展覽會、講演會等を行ふ。

〔總裁〕靜岡縣知事〔會長〕靜岡縣内務部長

靜岡縣美術協會〔綜合〕 靜岡市綠町

一 地方美術の向上を圖る目的を以て昭和九年靜岡縣出身並在住美術家を以て組織年一回靜岡市に於て繪畫、彫刻、工藝の三部に互る綜合公募展を開催。昭和十四年五月第四回展を開いた。

〔總裁〕靜岡縣知事〔會長〕尾崎元次郎〔常任幹事〕原川和雄

〔第四回展審査員〕和田三造、石川欽一

郎、芹澤銈介

實在工藝美術會

東京市本郷區駒込

林町一五五 高村豐周方 電駒込一一八二 昭和十年十月創立。從來の帝展第四部の鑑賞本位にのみ向ふ傾向にあきたらず、「工藝の實在性」に新境地を開拓するを目的とす。十一年度より春季公募展、秋季同人展開催。

〔會員〕豐田勝秋、河村喜太郎、吉田源十郎、高村豐周、内藤春治、山崎覺太郎、丸山不忘、新井謹也、佐藤陽雲、木村和一、廣川松五郎

〔會友〕磯矢阿伎良、西村敏彦、大坪重周、金丸重嶺、武樋貞波留、中村董一、山脇敏子、山脇道子、松崎福三郎、深瀬嘉臣、小畑雅吉、清水巖、森羅一郎

同會第四回展規定抜萃

一、出品は一般より募集す  
一、出品の種類は左の如し  
A一般工藝品 B立體圖案 C平面圖案  
一、出品點數に制限を設けず、組合せ品はその全部を以て一點と見做す

一、鑑賞は本會々員之に當る  
一、優秀なる作品に對しては賞金又は賞を以て表彰することあるべし

一、陳列品は本會に於て賣約を取扱ふ、本會は之に對し價格の百分の二十を手數料として徴集するものとす

一、本規則に就て尙不明の點あるときは東京市本郷區駒込林町一五五 實在工藝美術會〔電話駒込一一八二〕電承合せらるべし

芝浦工藝會 東京市芝區西芝浦一

東京高等工藝學校内 電三三一五六

東京高等工藝學校出身者及び同校關係者を以て組織、會員相互の親睦を計り併せて本邦工藝の發展に資するを目的とす。年六回會報發行。

〔會長〕安川祿造〔副會長〕鎌田彌壽治〔幹事長〕杉山豐梧、會員一七一一名、支部十九ヶ所

島根縣工藝協會 松江市殿町 島根縣物產獎勵館内 電四四五

昭和九年七月創立。同縣の工藝振興を計り縣内の工藝家、圖案家及販賣業者を以て組織し、工藝品及意匠圖案の調査研究、展覽會、競技會の開催又は助成、内展への出品斡旋等を行ふ。

〔總裁〕島根縣知事〔會長〕同縣經濟部長

下萌會〔日〕 東京市牛込區若宮町二 九 川合玉堂方

明治三十二年川合玉堂門下長流畫塾々生により組織、毎月一回定期研究會を開催し、又隨時展覽會を催す。

〔理事〕長野草風、菊池華秋、松本姿水、佐々木尙文、今中素友、兒玉希望、大島佳山、伊藤馨浦

主線美術協會〔彫〕 東京市澁谷區代々木初臺町五九四 安藤照方

昭和十一年三月東京會員高間惣七、橋本八百二、堀田清治等は「煩雜な團體的雜事から離別して一意各個の純粹な藝術的精選に全力を盡すことに決心しました」と聲明し、同會を脱退、主線協會を

結成した。翌月安藤照等の組織する彫塑團體塊人社と合して名を主線美術協會と改む。同會は「藝術の科學の獲得」を主唱し、その團體の機構をして「時代の必要に依る繪畫形體の創作」に對する組織的研究會たらしめ、その研究成果の「發表機關としての展覽會」を開催する。十四年三月第三回公募展開催、同展閉會後繪畫部は解消され、彫刻部のみ存続することになり、名稱も塊人社に還稱した。

〔會員〕〔舊繪畫部〕橋本八百二、堀田清治、土肥原三千喜、大川武司、高間惣七、高野眞美、染木照、牛島憲之、山野正、房野德夫、手島實、溝江勘二、三井正登、三宅策郎〔彫刻部會員〕泉谷喜一郎、長谷川樹藏、堀江越、小笠原貞弘、大屋義昌、渡邊徹、田中林藏、中野右左人、成瀬瀧治、村田勝四郎、松田尙之、藤澤古實、古屋太郎、小室達、河内山賢祐、岸崎夜光、安藤照、荒井德亮、三澤寛

朱玄會〔洋〕 東京府下武藏野町吉祥寺本田南二四〇五 栗原信方

會員の新作發表を目的とす、昭和十三年一月日本橋三越に於て第一回開催。

〔會員〕宮本三郎、田村孝之介、栗原信朱葉會〔洋〕 東京市澁谷區下落合一ノ五四〇 大久保方 電大塚四〇三七

大正七年創立。婦人の洋畫研究團體、年一回公募展開催。昭和十四年五月日本橋白木屋に第二十一回展開催。

〔會員〕飯守米子、長谷川春子、土肥正



枝、遠山陽子、小寺菊子、大久保百合子

大久保爲世、龜高みよ子、吉田ふじを、

谷島豊子、谷貞子、中川幸江、八星三代

秋元松子、木下壽々子、喜多春子、宮崎

美喜、鹽川時子、清水信子、平岩夏子、

伊佐エツ子、一本微子、徳川禮子、高倉

孝子、仰木ゲルト、黒瀬雅子、山口

葉子、町田典子、櫻井その子、島田鉦

子、下田愛子

聚工會(工) 東京市豊島區雜司ヶ谷

町一ノ三四七 磯矢阿伎良方 電牛込二

三四

昭和八年解散の凸凹會々員を中心に昭

和十年六月結成。工藝各科作家の集團、

相互の研究並に親睦機關。

〔會員〕磯矢阿伎良、武樋貞波留、田中

武雄、多田茂吉、宮井健平、三好弘、清

水巖、森羅一郎〔地方會員〕八井孝二、

大原彰、武田武文、松崎福三郎、小泉清

一、安部郁二、高見九藏、山本達次〔客

員〕安藤春治

十年社(日) 東京市淀橋區下落合四

ノ一六八八 石田粧秋方

大正十年度東美校日本畫科卒業生に依

り組織。昭和十年五月銀座紀伊國屋に第

一回展開催。

〔同人〕池田幸太郎、中井三介、石井喜

三郎、平岩三陽、石田粧秋、小野踏青、

畠山錦成、山崎良夫、長谷川路可、柳晴

一、花村晃歎、中村青以、榎本千花俊、

遠藤敦三

春光會(洋) 西宮市神樂町四一 伊

美術家團體一覽

藤慶之助方

春陽會、新興美術展の出品者にして、

伊藤慶之助の指導下にある洋畫家の集

團、昭和九年以降毎年大阪、神戸に展覧

會開催。會員二十四名

春虹會(日) 東京市日本橋 三越美

術部内

三越の主催で昭和十年京都在住の畫家

十七名を以て組織。毎春東京、大阪の三

越に展覧會開催。同十四年第五回展開

催。

〔會員〕板倉星光、石崎光瑤、西山翠峯、

堂本印象、徳岡神泉、小野竹喬、川村曼

舟、金島桂華、竹内栖鳳、中村大三郎、

宇田萩郎、上村松岡、山口華楊、梶本一

洋、福田平八郎、榊原紫峰、菊池契月、

三宅風白、三木翠山

春台美術展(洋、工) 東京市本郷區

春木町二ノ二八 本郷繪畫研究所内

岡田三郎助を會長とし本郷繪畫研究所

關係者を以て組織する繪畫、工藝の展覧

會。大正十年同研究所有志に依り赤淘社

繪畫展が組織され同十三年迄四回の展覧

會を開いたが、同十四年之を解散し、改

めて本郷繪畫展を組織し、會長に岡田三

郎助を、副會長に片多徳郎を推して同年

より毎春一回展覧會を開催、昭和五年「春

台美術展覽會」と改稱して今日に至る。

昭和十三年二月第十三回展開催。

〔會長〕岡田三郎助(逝去)〔副會長〕大

隅爲三〔顧問〕和田三造、辻永、太田三

郎、齋藤五百枝〔鑑査委員〕吉田久繼、

シ

中村研一、伊原宇三郎、關口隆嗣、權藤

種男、矢島堅土、有馬さとし、江藤純平

岩田藤七、有岡一郎、鬼頭鍋三郎、緒方

亮平、佐鹿彪、和田清〔常務委員〕佐鹿彪

春泥社(日) 京都市富小路二條南

福村方

昭和十二年五月結成。關西の婦人日本

畫團體。同十三年九月京都大丸に第二回

展開催。

〔會員〕生田花朝、丹羽阿樹子、大日三

世子、梶原緋佐子、藤本岡子、小松華影

秋野不矩、木谷千種、三谷十糸子、廣田

多津

春陽會(洋) 東京市杉並區和田本町

八三二 木村莊八方 電中野四二四七

大正九年秋、藝術の自由を唱へて日本

美術院元洋畫部を脱退した小杉未醒、山

本鼎、倉田白羊、森田恆友、長谷川昇、

足立源一郎の六名は同十一年一月、新歸

朝の梅原龍三郎を加へ、更に九名の客員

を迎へて同會を創立した。發會に際し

「春陽會は從來屢々見たる如き既成會へ

の社會的對抗として興らず、單なる藝術

家の心を以て因縁相熟したるものです」

と聲明した。翌年五月上野竹之臺陳列館

に第一回展を開き、爾後毎年春季に公募

展を開催し、又東京開催後大阪、名古屋

等に地方展を催して居る。昭和四年春陽

會研究所を開設し十二年迄續いた。昭和

十年帝院改組に際し、同會はその試案を

提出したが、結局新帝展の機構は會の理

想に一致せず、其の年不参加を聲明し

た。尙山本鼎、山崎省三は離脱して帝院

に参加、同十一年長谷川昇、岡本一平が

之に續いた。同十三年當局より文展審査

員参加の交渉あり、官展機構に關する豫

ての會の意見である綜合案に近い故を以

て、中川、木村を審査員に送り、爾後協

賛の方針を持して居る。同會自營の春季

展には變化はない。

〔會員〕足立源一郎、石井鶴三、今關啓

司、木村莊八、國盛義篤、倉田三郎、栗

田雄、小穴隆一、小林徳三郎、小杉放庵

田中善之助、島海青兒、中川一政、長谷

川潔、水谷清、横堀角次郎、若山爲三、

加山四郎〔會友〕伊藤慶之助、岩田榮之

助、上野春香、遠藤典太、小栗哲郎、大

澤鉦一郎、鬼塚金華、川端彌之助、兼平

英示、眞田久吉、田中咄哉洲、土屋義郎

藤堂奎三郎、久泉共三、森田勝、楊佐三

郎

同會第十七回展規定抜萃

一、出品畫ハ常會々員之ヲ鑑査ス

鑑査公開ノ意味ヲ以テ新聞及美術雜誌記者

之ニ立會フ

一、陳列中ノ作品ヲ審査シ、春陽會賞金ヲ贈

ルベシ

一、出品ハ一般繪畫(素描、版畫ヲ含ム)

一、鑑別手數料ハ一點ニ付五拾錢トス

一、賣約品價格ノ一割ヲ當會ニ收ム

一、東京開會後引續キ大阪及ビ名古屋ニ於テ

開催スルコトアルベキニツキ出品者ハ豫メ

是ヲ承認シ置カレベキモノトス但シ出品畫

ノ關西往復費ハ當會之ヲ負擔ス

女性人形同人 東京市荏原區戸越一

二七

## 二五五

昭和十一年發會。趣味涵養のための人形製作を目的とし、年一回作品展開催のほか懇談會、講習會を開く。

〔顧問〕今井邦子、長谷川時雨、與謝野品子、有坂太郎、會員四十六名

## 如水南畫會

東京市神田區一ツ橋如水會館内

昭和七年六月創立。如水游心畫談會と稱し如水會員及其家族を以て組織。岸浪百軒居を講師として日本文人畫の創意に努める。同年二月銀座伊東屋に第一回觀賞展開催。十一年四月如水南畫會と改稱。會員五十名

## 昭和艺术協會

京都市岡崎公園 京都市商品陳列館内

昭和二年創立。京都在住の各部門の工藝作家三十五名を以て組織。毎年京都及東京に於て展覧會を開催。

〔會長〕村上宇一〔總務〕霜島之彦〔顧問〕中澤岩太

## 昭和工藝美術展覽會

東京市日本橋高島屋美術部内

昭和九年創立。舊帝展系作家の集團。作品發表、新古工藝美術の研究等をなす。同年高島屋に於て第一回展を開催、以後毎年展覽會を開く。

〔會員〕二橋美衡、大須賀喬、各務鐵三、香取正彦、吉田醇一郎、高野松山、田村泰二、長野埜志、村越道守、海野建夫、信田洋、山本自燭、北原三佳、富之原謙、三田村自芳

## 昭和美びる會

横濱市神奈川區岡野町一三一 中央圖畫手工研究所内 電神奈川六二五

昭和十年創立。水彩畫の向上を目的とす。東京其他に於て臨時展覽會、講習會を開催し、全國各地に會員、會友併せて二百四十八名を擁す。昭和十三年五月第二回展開催。

〔主なる會員〕山口敏男、桂龍雄、青野馬左奈、東本泰水、古川弘、野村房雄、茅原哲衛、石野隆

上社會〔洋〕 東京市豊島區駒込一ノ二八 藤岡一方

昭和二年度東美校洋畫科卒業生に依り組織。年一回展覽會開催。

〔會員〕林炳東、張秋海、顏水龍、金貞探、譚連登、都相鳳、犬丸順衛、池田幸太郎、石井清美、猪熊弦一郎、荻野暎彦、染木惣、加山四郎、田村義夫、高橋弘二、大館健三、中西利雄、牛島憲之、矢田清四郎、深井修次、藤岡一、小堀四郎、近藤啓二、小磯良平、水上信雄、島野重之、白井次郎、日高榮聰、森寅雄、森達雄、菱田武夫、橋口康雄、高野三三雄、岡田謙三、青山爽、高嶋功、瀧波恒雄、中川規矩磨、大月源二、杉浦俊雄、永田一脩、萩須高徳、山口長男、太刀川英次郎

農島社〔日〕 京都市上京區北野紅梅町 山口華楊方

明治四十五年創立の西村五雲、農島社は昭和十三年九月五雲の逝去により解散同年十一月六日舊業生の總意に依り新に農島社を結成し、山口華楊、前田萩郎、西村卓三の三名が總務となつた。研究會展覽會等を行ふ。同人七十五名

新古典派協會〔洋、彫〕 東京市世田谷區玉川奥澤町一ノ一九 金子九平次

昭和十一年三月設立。「人間の高貴さと、秩序ある觀念、思想の美しさ」を宣揚する新古典主義藝術運動を起す。十三年九月第三回展を開催。

〔會員〕金子九平次、片山健吉、那須辰造、鹽月越、渡邊正太郎、下田範次、小泉勝世

新雪會〔日〕 京都市左京區銀閣寺前橋本關雪方 電上四六〇

大正八年橋本關雪門下に依り組織。其後一時解散したが、昭和十年橋本關雪の帝國美術院會員に任命を機とし、有志の發起に依り再興された。昭和十一年十一月、京都大丸に第一回展開催。

〔指導者〕橋本關雪〔會員〕嵯峨鐵香、嵯峨朱雀、三津川光胖、小笠原綱、川田虛舟、宮瀬泉城、竹林愛作、竹内貞親、高安龍雲、後藤春島、石塚仙堂、仙波久榮、稻垣錦莊、木村杏園、伊藤逸峰、標文峰、淺野鶴汀、小林直衛

新構造社〔洋、彫、工〕 東京市中野區野方町二ノ一六二五 寺畑方

昭和十年六月構造社有志幹事會は繪畫部の解消を決議したが同部は翌月構造社總會を招集、前記の解消宣言を「彫刻部の計畫的な違犯行動と認め、彫刻部會

員を退會者なりとして決議し新に會規を制定して同年十一月第九回構造社繪畫展を公募の上開催した。同十一年七月寺畑助之丞を代表とする彫塑團體十七會の加盟により名を新構造社と改稱、更に工藝部を新設した。同十三年第十二回展開催。

〔會員〕〔繪畫部〕足立重興、内田正男、内島親晴、大澤彦六、改非徳寛、葛西康倉本七郎、神山恒、岡部香峰、多比羅榮一、武田芳雄、上田重正、福崎精哉、三村英一、石田隆一、〔彫刻部工藝部〕稻本弘之、恩田忠一、大泉博一郎、加藤正巳、河野文一郎、清水三重三、中谷宏運中森遊、寺畑助之丞、鍋元治、降旗正男、山名常人、山本正年、スエタケ・タツ

〔會友〕〔繪畫部〕田代一郎、中田博三、山本好信、楠本繁、佐藤正也、村田鹿次郎、寺尾みづ子〔彫刻部工藝部〕山本博加藤春平、岡登けい子、添田賢則、鈴木勤

〔代表〕〔繪畫部〕三村英一〔彫刻部工藝部〕寺畑助之丞

新興美術協會 東京市豊島區堀内町三〇 電大塚二五一八

昭和九年二月創立。學校教育に於ける圖畫、手工、作業科の擴充を圖るを目的とし、事業として月刊雑誌「新興美術」を發行し又全國各地に講習、講演、研究會等を催す。全國各府縣に支部二百三十あり。

〔理事長〕石野隆

新興美術院(日) 東京市下谷區竹町九五 芝垣興生方

昭和十二年九月、日本美術院々友十二名が「自由拘束なき新興清新なる藝術を揚達する」目的を以て、同院を脱退、結成した。尙二名は其後日本美術院に復歸した。春季公募展、秋季同人展を開く。同十四年東京府美術館に第二回展開催。

〔同人〕 茨木杉風、保原良樹、吉田澄舟、田中案山子、内田青蕭、小林三季、小林渠居、鬼原素俊、芝垣興生、森山夢笑

〔準同人〕 岡田魚降、並木瑞穂

〔同友〕 淺香金四郎、長谷川俊策、町田兼人、成田玉泉、渡邊正光、松岡さち子、平岩長四郎、箱山精一

新興美術家協會(綜合) 東京市杉並區井荻町二ノ一

昭和十年七月、ホクト社の玉村方久斗、笹川巴流夫、平川清藏、院展の大内青圃、故木村五郎、國畫會の清水多嘉示、大乗美術の大内青坡等の八名が發起者となり「新興精神に據る諸種の藝術運動」及作品發表を目的として同協會を創立。同年十月第一回展を開催した。毎秋公募展を開催す。尙同人はすべて會友と稱する。

〔會友〕 清水多嘉示、恩地孝四郎、平川清藏、大内青坡、大内青圃、小野忠重、笹川巴流夫、玉村方久斗、坂井半甫、石井勉、鈴木貞、村井麗樹、村上樞夫、山崎外郎、五十嵐幸男、藤田悟、永井宏、多田正介、大貫悌二、小林良曹、石川清田、邊德三郎、二階堂顯藏、藤本美弘、野澤武美、濱谷二郎、山田稔、大久保實雄、井上孟、杵谷精一、明田川孝、杉本幸一郎、安井喜一、山脇洋二、鴨幸太郎、伊藤喜朔、丹慶俊二、圓山信一、安部幸毅、廣藤道明、山本衛、神谷万吉、野口慎太郎、宇治山哲平、白井保春、木下秀一郎、松岡正雄、野口道方、横越自入、加藤正之、秋山正、陳泰德、松上茂、田中南窓、清水正博、川村秀次

新興美術協會(洋) 大阪市旭區新森小路南一ノ一九 藤堂奎三郎方

昭和七年田中善之助、若山爲三、國盛義篤により設立。關西洋畫の發達を期し、一派に偏せず、特色ある作家を迎ふるを趣旨とす。毎年一回公募展を大阪及其他に開催する。昭和十三年十一月大阪市立美術館に於て第七回展を開催。

〔會員〕 田中善之助、足立源一郎、齋藤清二郎、岩崎又二郎、田川勤次、三木朋太郎、木下公男、若山爲三、藤堂奎三郎、西村鳳山、前田藤四郎、和田茂一、國盛義篤、川端彌之助、伊藤慶之助、佐藤昌胤、山川清、飯田衛、加藤啓三、永瀬義郎、會友十三名

新自然派協會(洋) 東京市目黒區中目黒四ノ一四四一

昭和十年七月小城基門下により創立。新自然主義派の研究發達を期す。年一回同人展開催。

〔主幹〕 小城基 〔顧問〕 荒城季夫、川路柳虹、黒田鶴心、森口多里、田邊孝次、外山卯三郎 〔會員〕 半田丈夫、腰山實

政、金井巳年男、三上亨、小城基、成田廣、杉本謙、和田裕介、山内實〔會友〕七名〔同人〕二十四名

新制作派協會(洋、彫) 横濱市鶴見區東寺尾町一五一四 佐藤方 電鶴見二五三二

昭和十一年七月、第二部會總會は文展参加を決議するに及び、從來「帝院の獨立帝展の解消」説を主張し來つた猪熊弦一郎、内田巖、佐藤敬、中西利雄、小磯良平、三田康の六名は結束して同會を脱退、脇田和、伊勢正義、鈴木誠の三名を加へて七月二十五日新制作派協會を設立した。同會は爾後「反アカデミック」の藝術精神に於て官展に關與せざることを聲明して居る。同十四年七月國畫會の彫刻部は結束國畫會を離脱し、清水多嘉示を除く他の會員が同會に合流した。

同十四年十一月第四回公募展開催。

〔會員〕 (繪畫部) 猪熊弦一郎、伊勢正義、脇田和、中西利雄、内田巖、小磯良平、佐藤敬、三田康、鈴木誠、野田英夫(昭和十四年一月逝去)、三岸節子(彫刻部) 國展彫刻部参照

同會第三回展規定拔萃

一、出品は油繪水彩にして他の公開展に於て陳列せざるものに限る。出品點數に制限なし。

一、一點につき手数料五十錢撥入と同時に納入の事。

一、賣約の場合は手数料として賣價の二割本會に納入の事。

新造型美術協會(洋) 東京市本郷區

弓町一ノ二五 内藤外次方

昭和九年四月「新傾向繪畫」を標榜して獨立美術協會と絶縁せる同志を以て設立。「新超現實主義」の繪畫運動を起す。十二年東京府美術館に第五回展開催。

〔會員〕 島津純一、池ノ内篤人、中野政行、藤田峰英、内藤外次、瀧口綾子、下郷羊雄、今井滋、宮城輝夫

新彫塑協會 東京市世田谷區野澤町一ノ二四一 元野木昇一方

昭和十年八月二科會彫塑部の故藤川勇造門下、早川義一郎(後に脱退)、太田三郎、飯島三四二の三會友外九名は故藤川勇造の藝術的主張を繼ぎ新に同協會を組織、二科會と訣別した。同會は年一回公募展を開催し又海外作家の紹介に努める。十二年六月第二回展開催。

〔同人〕 飯島三四二、岩田清平、太田三郎、小田定一、菊池一雄、酒見恆、元野木昇一、中澤安雄、中村米藏、中島武、岡本庄三

新圖案家集團 東京市大森區馬込東二ノ八九一 三浦和美方

昭和九年十一月帝國美術學校圖案科第一、二回卒業生を中心として設立。昭和十二年五月銀座伊東屋に第三回展開催。

〔顧問〕 杉浦非水、金須孝、金丸重嶺

〔會員〕 江坂實、櫻井善三郎、河合雄二、野津憲之丞、川勝得三郎、遠藤隼兒、三浦和美

新燈社(日、洋) 大阪市天王寺區勝山通一ノ五四 電天王寺八一九

新燈社(日、洋) 大阪市天王寺區勝山通一ノ五四 電天王寺八一九

大正十一年創立。洋の東西を問はず、そのよき處を取入れて我國の新美術として價值ある新日本畫を創作するを趣旨とす。毎年東京及大阪に公募展を開催し、昭和十三年十二月第十六回展に及ぶ。

〔主宰〕青木大乗 〔同人〕北村種三、三井文二、山田皓齋、沖中陽明 〔準同人〕北村泰山、杉原正五、前田來山、柿谷草王子、上田巳之助、坂本正機

新美術協會（日） 東京市世田谷區代田一七六六 福田豊四郎方

昭和九年六月東京、京都の同志十七名により新日本畫研究會を結成し、新時代の日本繪畫樹立を盟約した。展覽會を開き、十二年五月第三回展に及ぶ。十三年二月同會々員により新美術協會を結成、「新時代と共に成長する作家の協力を求むる意味に於て」新に公募制を採用して、十四年六月第二回展開催。

〔會員〕（新日本畫研究會々員）吉岡堅二、中江正美、柳文男、岡宮正、福田豊四郎、藤田復生、藤田隆治、酒井亞人、島田良祐、久保田善太郎、大石哲路、青木崇美、柴田安子、岩崎鐸、猪飼俊一、神田禎之、米田崇爾、海老原南英、恩田耕作

同會第二回展出品規定抜萃

一、會場 上野公園東京府美術館

一、出品料 一點に付金壹圓

一、出品資料 一點に付金壹圓

一、出品資料の場合には本會にその二割を手數料として受領いたします

一、本展覽會は公募作品並びに新日本畫研究會作品を選擇の上陳列いたします

一、選考責任者 吉岡堅二、福田豊四郎

翠紅會（日） 東京市中野區本町通り五ノ一九 星野方

大正十四年星野錫、藤懸靜也兩名の幹旋により各畫塾を網羅して結成された女流日本畫家の團體。

〔會長〕星野錫 〔顧問〕藤懸靜也

〔會員〕上原桃畝、陸貞末、山下紅畝、

杉本文英、保井正子、永井勝子、西郷松正、木村青畝、笠原冬子、阿久津一枝、宮内英子、江崎照、尾形奈美、山口高子、櫻村靜江、宮島やす子、今井壽々子、谷口倫紀子、小島孝子、安藤ふ枝、春日井いく代、青柳喜實子

杉芽會（洋） 東京市豊島區千早町三ノ一 矢野武子方

昭和十二年度女子美術專門學校師範科西洋畫部卒業生を以て組織。展覽會を開く。會員十一名

寸土社（洋） 兵庫縣寶塚局區内米谷和川正節方

洋畫研究團體。昭和八年より略毎年大阪に作品發表を行つてゐる。

〔會員〕池永英夫、和田正節、錦木順三、高岡義次、高岡徳太郎、竹中良吉、向井潤吉、須藤保、安藤金一郎、木下公男、樋口治、森島忠夫、鈴木總作 〔顧問〕神原一廣 〔常任幹事〕和田正節

瀬戸作陶會（工） 瀬戸市大字瀬戸一五二七

昭和四年創立。瀬戸古來の特技、傳統的工藝の復興を趣旨とす。同十二年東京白木屋に第六回展を開催。

〔會長〕水野憲吾 〔同人〕大江文象、加藤清、瀧川七郎、河本千春、栗本儀三郎、龜井清市、松原廣長、加藤壽郎、水野壽山 〔會友〕五名

瀬戸市陶藝協會（工） 瀬戸市役所第一部産業課内 電二四〇〇

昭和十一年創立。同市の陶工並贊助者

を以て組織。事業として陶藝に關する研究、郷土工藝資料の調査、展覽會、講演會の開催、他への出品幹旋、圖書刊行、工藝研究獎勵金の交付等を行ふ。

〔名譽會長〕（市長）古村貢三郎 〔理事〕加藤盡 〔副理事長〕加藤青山 〔常務理事〕伊藤武 〔理事〕加藤華仙、河本磯亭、加藤英一、森下謙策、三浦榮舟、龜井清一

井井會（日） 東京市麹町區六番町六ノ一 宮崎政近方、電九段二七四七

井南居宮崎政近の主催する新作日本畫展。昭和十三年三月第一回展開催、以後毎春開催ノ豫定。

新日本畫協會 京都市大宮通下長者町下ル 獨立美術京都研究所内

獨立美術京都研究所の研究生有志の組織する作品發表機關。昭和十年九月京都美術館に第一回展開催。毎秋展覽會を開く。會員二十名

新美術協會（洋） 東京市世田谷區世田谷四ノ三〇四 松本方 電世田谷三九三一

昭和四年設立の証人社を同七年改稱せるもの。會員は二科會々友、二科展受賞者及び一水會々員、出品者、受賞者等。

尚栗原信、宮本三郎、田村孝之介の三名は會の友人として毎回出品す。年一回東京府美術館に同人展を開き、十三年二月第十回展開催。

〔會員〕伊藤久三郎、伊藤繼郎、服部正一郎、早川國彦、金子博信、柏原覺太郎、大澤昌助、吉井淳二、高田力藏、田中忠雄、高橋庸男、田崎廣助、中村三樹男、中村善策、松本弘二、田邊三重松、寺田

生爽會（日） 京都市右京區嵯峨町分町五 加藤美代三方

昭和十二年京都の青年日本畫家に依り組織。同年東京三越に第一回展を開催した。

〔會員〕跡部勇、近藤桂二、加藤清澄、中山正人、須藤雅路、寺尾作次郎、上田儀一、柏崎榮助、小池岩太郎、松岡武夫、西村義男、須田幸治、上田健一、安永良徳



〔賛助員〕西山翠嶺、堂本印象、中村大三郎、菊池契月〔會員〕井關雅夫、井上和雄、岩本周郎、西村卓三、西山英雄、戸嶋光雄、豊島伯幸、奥村厚一、加藤美代三、川島清、川島洞、堤利彦、南家勇吉、桑野博利、曲光男、會津勝巳、澤島正武、坂本普彦、櫻井孝一、水野深輝、樋口富磨、久山正義

成層繪畫研究集團 東京市目黒區下目黒三ノ五七六 小林方

新日本畫の創作を目的とし、日、洋の青年作家及美術史家を以て組織する。昭和十三年第一回展開催。

〔會員〕猪飼俊一、池澤賢、石田一郎、神田禎之、黒田哲二、小林源太郎、中川幸永、服部幸太郎

青丘會(日) 東京市日本橋區通二丁目 高島屋美術部内

昭和十一年創始の高島屋五人展を十三年に至り標記の如く改名。同十三年七月日本橋高島屋に第三回展開催。

〔會員〕徳岡神泉、山口華楊、奥村上牛小倉遊龍、太田聰南

青松會(日) 大阪府南區日本橋三丁目 大阪松坂屋内

東西の日本畫家十五名を以て創立。昭和十年大阪松坂屋に第一回展開催。

〔會員〕伊東深水、服部有恆、堂本印象、徳岡神泉、金島桂華、中村大三郎、中村岳陵、宇田萩穂、矢野橋村、山口蓬泰、山口華楊、案本一洋、福田平八郎、兒玉希望、廣島晃市

青樹社(日) 名古屋市外守山町文化村 横山方 電守山一一四

舊稱白曜會。毎月研究会を開き、初夏に大展覽會、秋に小品展開催。

〔同人〕横山龍生、安藤美露、宮坂一義、嶋谷自然、我妻碧宇、加藤晨明

青土社(彫) 京都市左京區修學院大林町一六 松田尙之方

昭和十三年創立。京都在住の彫塑家を以て組織し、毎年春秋二季に展覽會を開く。

〔會員〕松尾薫、松田尙之、徳力牧之助、田中源三、柴田和彦、山本節郎、岡本庄三、芦田政一、伊勢保三、加藤春平、矢野判三、丸山政次、西川亨、吉川常雄、久保駒太郎

青龍社(日) 東京市大森區新井宿四ノ一〇五三 電大森三〇一二

昭和三年川端龍子日本美術院を脱退するに及び、龍子及び其御形塾員の制作發表の機關として昭和四年六月青龍社を創立。同年東京府美術館に第一回展開催。八年より一般公募制に改め、又同年三月「春の青龍社」第一回を三越に催す。帝院改組に際し龍子帝國美術院會員となるも社人は「畫業精進の過程の上から、決して二兎を追はず、只管に青龍社に依つて自己を發揮すると同時に、在野團體としての青龍社の主張を一層確立する事に努力する」との旨を聲明した。同社の主張として在來の所謂床の間藝術に對して、「健剛なる會場藝術」の創建を唱へ、又

大衆と藝術の接觸に留意して、八年より展覽會に際して入場無料(目録必買)の新制を採用した。

〔主宰〕川端龍子〔社人〕川端龍子、坂口一草、加納三樂、福岡青嵐、山崎豐

〔社友〕安西啓明、渡邊綱雄、小島鼎子、木村鹿之介、佐藤木草、市野亨、時田直善〔社子〕演出榮一、利谷双樹、松宮左京、坂鏝一、奥田正一、結城正雄、岡部建一郎、大塚榮治、菱田幾久、渡邊龍三、佐藤正一、鈴木茂子、里見公起、上條靜光、直江義泰

同社第十一回展出品規則抜萃

一、秋期の本展覽會は、作品公募制に依つて一般搬入作品の内より、吾人の主張―健剛なる時代精神に合致するの畫業、或はその將來を期待し得る作品を鑑査採用の上陳列す

一、入選作品に就ては審査の上薦賞―賞牌並に賞金を交付す

一、鑑別審査は社人川端龍子、坂口一草、加納三樂、福岡青嵐之に當る

一、作品面積の制限は付せず。但し堅十一尺(飾棒長)を越ゆるものは大阪會場に於て陳列なし得ず

一、出品點數にも制限を置かず

一、出品作品は他の展覽會(個展、藝展をも含む)に公表せざる新作品に限る

一、出品作品にして買約されし場合、本展覽會に於てはその割を手數料として收納す但し破約の場合には本展覽會に於てその責任を負はず

一、地方出品者はその宛先を左記運送店に連絡されれば便宜あるべし

青龍社荷扱 東京市芝區新橋二丁目二八

川長運送株式會社(電話銀座二七二三)

清光會(日、洋、彫) 東京市日本橋區江戸橋二ノ八 松慶ビル 座右寶刊行會内

昭和八年四月創立。東京、大阪に展覽會を開催す。

〔會員〕小林古徑、安田靉彦、梅原龍三郎、安井曾太郎、坂本繁二郎、佐藤朝山、高村光太郎〔責任者〕後藤眞太郎

審義會(日) (會事務所) 京都市御幸町三條下ル (研究所) 京都市上賀茂坂口町蟻ヶ池畔

大正十年水田竹園門下を以て組織。毎月研究会を、年一回展覽會を開催。昭和十年十一月研究所設立。

〔會長〕水田竹園〔評議員〕水田硯山、安田半園、幸松泰浦〔幹事〕渡邊凌雲〔副幹事〕小林柏陽、會員七十餘名

齊々會(彫) 東京市板橋區練馬南町一ノ三四七一 眞鍋忠行方

東美校彫刻科の最近の卒業生を以て組織。昭和十三年第三回展開催。

〔會員〕岩井藤吉、伊藤三子雄、井上信道、石橋史郎、堀田巖美、渡邊一八大、高橋英吉、山内皓臣、眞鍋忠行、佐伯留守夫

絕對象派協會(洋) 東京市中野區鷺ノ宮五ノ四〇七 山本方

昭和十三年一月二科會出品の新傾向作家五名にて創立。同年日動畫廊にて第一回展開催。

〔會員〕廣幡憲、齋藤義重、高橋迪章、鷹山宇一、山本敬輔

染織技術官協會 商工省工務局内



昭和五年六月創立。各府縣主任染織技術官、地方染織關係試驗場講習所の場長及所長並染織關係技術官を以て組織。染織工業の改良發達を圖る爲必要な調査研究をなし、併せて會員相互の業務上の連絡並に親睦を圖るを目的とす。會員百二十名

**染織刺繍作家協會** 東京市赤坂區青

山南町四ノ一 大槻一雄方

染色、織物、刺繍の研究を目的として昭和三年創立。展覽會を開く。

〔常務委員〕山形駒太郎、齋藤五百枝、木村和一、大槻一雄、遠藤順治

**閃人社（日）** 東京市品川區大井倉田

町三四一九 濱倉清光方

伊東深水の朗峯畫塾々生有志に依り組織、昭和十二年五月第一回展開催。

〔會員〕池田輝治、濱倉清光、津村新太郎、植草保二郎、福山美都夫、遠藤燦可佐伯泰虹、澤井一三郎、鈴木康之

**全關西洋畫協會**

大阪市住吉區天王

寺町三〇七三 塚口方 電天王寺八二五九

全關西洋畫界の綜合展開催を目的として設立。昭和二年より毎春大阪中之島朝日會館に公募展開催。昭和十四年四月第十三回展に至る。

〔特別會員〕濱田保光、國枝金三、黒田重太郎、鍋井克之、横井禮市

〔會員〕藤井二郎、福島金一郎、古家新早川國彦、伊庭傳次郎、飯田清毅、伊谷賢藏、伊藤繼郎、石丸一、岩崎重雄、小出卓二、小出三郎、松本銳次、米良道博

向井潤吉、中村眞、錦義一郎、西村五郎、小野藤一郎、田川寛一、高岡徳太郎、田村孝之介、辻愛造、塚口正一、渡邊造酒三、山本直治

**全國商業美術教育協會**

東京市牛込

區早稲田鶴巻町早稲田實業學校内 電牛込七五

昭和九年十月實業教育五十周年記念事業の一つとして東京府下商業學校聯合會の主催で上野松坂屋に於て第一回商業展を開催。翌年又開いたが、十一年四月全國商業學校百一校の聯合に依つて本協會を設立した。事業として年一回展覽會を開催、會報及圖録を發行し、又商業美術に關し各地と聯絡し教材の交換、頒布等を行ふ。

〔委員〕下記九校の職員。早稲田實業學校、府立第一商業學校、府立第三商業學校、淺草女子商業學校、三重縣松阪商業學校、京北實業學校、市立京橋商業學校、昭和第一商業學校、宇都宮市商業學校

**全日本産業美術聯盟**

東京市牛込區

東五軒町二 電牛込四二七

昭和十一年十月創立。各種商業美術家の團體を以て結成す。

〔委員長〕杉浦非水

〔常任委員〕多田北

島、山名文雄、岸秀雄

〔加盟團體〕H・L圖案研究會、N・Cデザイン研究會、構圖社、七人社、資生堂廣告美術研究會、新圖案協會、中央圖案家集團、實用版畫美術協會、東京廣告美術家俱樂部、東京印刷美術家集團、東京包裝美術協會、銀

座産業美術研究會、北海道商業美術家協會、靜岡商業美術協會、大阪商業美術協會、關西廣告美術協會、商業美術聯盟、新廣告美術作家同盟、日本新美術家協會、神戶創作圖案協會、廣島商業美術家協會、北九州商業美術家聯盟、長崎商業美術協會、熊本ポスター研究會

**梳風會（日）**

東京市荒川區日暮里町

九ノ一二四

故島崎柳樹の棚々亭塾門下一同により組織、大正二年以來隨時展覽會を開いた。

〔幹事〕清田柳莊、木島柳鳴、石川綠南、高橋樵場、仲村眞齋

**疎藹會（日）**

大阪府豐中市新免北通

四丁目 瀧秋方方 昭和十三年九月創立。毎年春秋二回展覽會を開催する。

〔會員〕生田花朝、内田稻葉、梶川眞人、草刈樵谷、小松均、菅橋彦、菅江白華、岡田証二、立松玉泉、瀧秋方、津田青楓、西田逸堂、宮本頌、矢野鐵山

**楚人社（洋）**

札幌市北七條西五丁目

能勢眞美方 電一六七六

昭和六年創立。主として札幌在住の洋畫家を以て組織する。同十二年五月第四回展開催。

〔同人〕今田敬一、繁野三郎、能勢眞美、久保守、山田正、伊藤信夫、大森滋、齋藤尚、本間紹夫

〔社友〕十六名

**神園會（洋）** 大阪府浪速區西關谷町

一ノ八 黒田方 電或三〇一八 大正十五年創立。當時の會員は伊藤慶

之助、奥村正三郎、小西謙三、大石輝一、和田歳一、辻愛造等で展覽會、講習會を開催し、又研究所を經營したが昭和八年ZIGZAGと共に大阪新美術家同盟を創立、以後同展に参加したが、十二年一月同盟を脱退した。同十三年十一月第九回展開催。

〔會員〕抱康子、黒田繁成、松本銳次、前田藤四郎、田川寛一、田川勤次、和田歳一、三崎孝雄、土岐流司、小西清太郎、西雅司、大石輝一、田中惣三郎、三崎六郎、六條篤、浦久保義信

**草芽會（工）** 京都市東山區山科竹花

塚本方 電山科一一五

昭和五年創立。京都高等工藝學校圖案科卒業生有志を以て組織。工藝各種の研究團體。八年東京に於て第一回展開催。

〔同人〕川那部澄、塚本繁、赤澤鉦太郎、峯親吉、加藤八洲男、宮永友雄

**神兒社（日）**

京都市伏見區深草正覺

町七ノ四 西山英雄氣付

京都繪專學校の卒業生、在學生有志を以て組織。昭和十二年京都大丸に第二回展開催。

〔會員〕井上和雄、濱田親、西山英雄、小川武春、高橋馨、長野正男、安島雨品、曲子光男、安藤寛、阪本普彦、北村壽一郎、下川千秋、下村正一

**創造美術協會（洋）**

堺市甲斐町西四

丁一六 玉澤方

昭和十年創立。舊稱セクション・ダール。大阪新美術家同盟に加盟し、同盟

展に参加のほかセクション・ダール展及小品展を開いたが、十四年大阪新美術家同盟を脱退。十五年一月現稱に改め大阪三越に小品展を開催した。

〔會員〕井上賢三、上島龍、河野通紀、小島大輔、小島結治、小林武夫、下高原龍巳、高須操、高橋進、玉澤潤一、田村譽志那、永田禎彌、西阪修、長谷川初女、堀澤好一、山口久一

### 創工社(工)

昭和十年解消の舊無絃社の同人有志が同年結成せる工藝團體で、十一年第一回展、十三年第二回展を開催したが、十四年四月解散となつた。

### 蒼原會(洋)

東京市神田區淡路町二ノ一一 水谷景房方 電神田一三二五  
大正十一年日本水彩畫會研究所の小山良修、富田通雄、中西利雄等が創立した東京三脚會を同十三年改稱せるもので水彩畫專門の研究團體。水彩畫日曜研究所を經營す。各地方に支部を設け地方會員は二百名に及ぶ。

〔在京本部會員〕馬場重次郎、不破章、橋口竹夫、小山良修、間所一郎、水谷景房、丸山東美男、松田寅重、中西利雄、野口健司、岡田正二、齋藤大、富田通雄、山中仁太郎、山崎政太郎、山下忠平、原達三、荒谷直之介、岡田節男、野澤潤二郎、相澤光朗、藤江志津、本多信彦、福田建夫

荻菁社(日) 京都市左京區下鴨中河原町七一 池田遼郎方 電上六六〇

昭和九年創立。月例研究会、展覽會等を開催する。昭和十二年大阪に第一回展開催。

〔會員〕池田遼郎、稻葉春生、濱田觀、川口吳川、加藤清彬、川本參江、山本朝光、小松華影、小豆島甘兆、柴原希祥、嶋田満洲

造型彫刻家協會 東京市豊島區長崎町三ノ四二三 山内壯夫方

昭和十一年二月創立。科學的造型性に立脚した彫刻藝術の創作を目的とす。展覽會に際しては主題の美術性を強調し、又、毎回外國作家の作品を紹介する。昭和十三年六月第四回展覽會開催。

〔會員〕芥川永、明田川孝、川口信彦、佐藤邦輔、清水要、武内收太、谷本整映本郷新、峯孝、宮島久七、柳原義達、山内壯夫、山本常市、尾島禎二、佐藤忠良舟越保武、吉田芳夫、昆野恆、稻田健四  
造型版畫協會 東京市本郷區金助町七三 柴秀夫方

昭和七年、新版畫集團の舊稱を以て創立。十一年第六回展を経て組織變更、十二年三月造型版畫協會と改稱、第一回展開催。十四年五月公募展により第三回展開催。版畫の純粹なる繪畫的造型性の確立を目的とす。

〔會員〕清水正博、柴秀夫、小野忠重、水船六洲、末木東留、矢田桂一、宇治山哲平、畑野織藏、齋藤清  
同會第三回展規定抜萃  
〔作品〕木版、石版、銅版、型紙版、デカルコヤニ、フロッタージュ、其他版畫一般、既

作品にあつても彫、摺に改變あるものは新と認む。其他複製的作品のうち製版技術上參考とすべきもの、産業的用途のもの等を含む。

〔點數〕制限なし。組織的制作品は額縁表装等陳列單位に含有可能な場合は一點と數ふ。  
〔手数料〕點數に拘らず一人に付一圓。  
〔審査、授賞〕本協會員これを行ふ。結果は四月二十九日午前中に發表す。尙優秀作品を選出し造型版畫協會賞、新版畫家賞を授與す。別に副賞を設定す。

### 造形文化協會

東京市淀橋區下落合四ノ二〇七一 尾川多計方

昭和九年四月創立。美術批評家を以て組織。美術批評の研究並に實踐を中心として造形一般の文化的事業を行ふ。

〔會員〕横川毅一郎、荒城季夫、大島隆一、尾川多計〔顧問〕森田龜之助、外狩素心庵

### 太平洋畫會(洋、彫)

東京市下谷區谷中眞島町一 電下谷一七九二

明治二十二年創立の明治美術會を同三十四年組織を一新し翌年一月太平洋畫會と改稱、第一回展を上野公園第五號館に開催した。同三十七年下谷區谷中清水町に洋畫研究所を開設、翌三十八年研究所を現在の下谷區眞島町一に移轉、洋畫、彫刻の指導をしたが、昭和四年太平洋美術學校と改稱し、同九年東京府の認可を受けた。昭和七年四月上野松坂屋に創立三十年記念展を開催した。昭和十四年三月第三十五回公募展に至る。

〔會員〕淺井眞、相會秀之助、江崎寛友府川道徳、布施信太郎、藤坂太郎、布施

梯次郎、早川國彦、平澤定治、堀進二、星野二彦、石川寅治、石井柏亭、池田永一治、伊藤成一、石橋美三郎、飯田實、石井明、井口勇、鹿子木孟郎、金子保、香取正彦、北島吾次平、桑重儀右衛門、小宮宗太郎、丸山晚霞、前田眞一、三上知治、光安浩行、水戸敬之助、永地秀太、中村不折、中野桂樹、野田半三、中田恭一、能見三次、岡精一、奥瀬英三、小野田元興、大沼靜嚴、佐々貴義雄、齋藤俊雄、澤田晴廣、佐藤三郎、澁谷榮太郎、清水敦次郎、菅谷元三郎、杉本宗一、高村眞夫、高橋虎之助、多々羅義雄、田原輝夫、鶴田吾郎、佃武昭、都島英喜、玉井力藏、渡部泰也、渡邊正太郎、内田泉水、吉田博、吉田ふじを、安田豊〔會友〕有川武夫、福王誠、畑本一夫、堀澤、本郷惇、市原達夫、今里龍生、河本一夫、海洲正太郎、小泉秀松、小坂健三、國澤和衛、小林森次、木原二郎、久保進、三輪捨三郎、名島貢、小倉一雄、坂本不二、島添鶴雄、鈴木寛司、田村政四郎、田原利一、等々力巳吉、戸津文雄、土屋穿石、恒石敬磨、吉原甲藏

同會第三十五回展規定抜萃

一、出品の種類は油畫、水彩畫、素描、版畫及彫塑とします。  
一、同一人の出品數は五點以内とし手数料として金二圓を申受けます。  
一、會員以外の出品はすべて鑑査の上陳列します。

大潮會(日、洋) 東京市豊島區駒込三ノ四〇三 浦崎永錫方

昭和十年創立の大東會を廢止して十一年七月設立。全國中等學校の圖畫教育關係者の作品的主張を明らかにし、その中央畫壇への進出を計るを目的として、毎年秋季に文部省後援の公募展を開催する。十三年十一月東京府美術館に第三回展開催。

〔會長〕小村捷治〔常任理事〕浦崎永錫〔理事〕阿部七五三吉、多賀谷健吉〔評議員〕岩佐新、大下正男、垣見宣修、松垣鶴雄、藤本昭三、杉山司七、三浦直政  
同會展規定沿革

〔資格〕出品人は在職教員並に美術關係者に限る

〔作品〕曾て公展に發表したる作品は出品することを得ず

〔部分〕第一部 水彩、クレオン、バステル、クレパス、版畫、第二部 日本畫、第三部 油 繪

〔點數〕一人の出品點數は五點迄とす

〔出品料〕一人に付金二圓とす

〔十三年度展審査員〕伊東深木、兒玉希望、山村耕花、小泉勝爾、中澤弘光、長谷川昇、正宗得三郎、永地秀太、寺内萬治郎、太田三郎、中野和高、阿以田治修

大日美術院(日)(東京事務所) 東京市本郷區西片町一〇 結城素明方 電小石川一五七三(大阪事務所) 大阪市天王寺區勝山通一ノ五四 電天王寺八一九

昭和十二年三月創立。在來の流派系統を超越して眞の日本精神に活きた新しい日本繪畫の創作研究を趣旨とす。十二年初夏東京並大阪に於て第一回公募展を開催した。

〔同人〕結城素明、川崎小虎、青木大乗

同展規定沿革

一、本展覽會の出品は鑑査の上陳列す。但し一度他の展覽會に出品せしものは受付けず  
一、出品畫の點數は一人三點以内とし、出品手數料として一人金壹圓納入の事とす  
一、出品畫にして賣約せられたるときは手數料として賣價の二割を申受くべし

大日本體育藝術協會 東京市麹町區有樂町一ノ一一 東日會館内 電九ノ内二九〇二

體育運動に關する藝術の普及發達を圖り、國際オリンピック大會藝術競技の參加、明治神宮體育大會藝術競技の參加、體育運動に關する美術の調査研究等の事業を行ふ。昭和七年及十一年のオリンピック大會藝術競技に參加した。

〔會長〕男爵森村市左衛門〔副會長〕瀧澤秀雄〔顧問〕伊東延吉、岩原拓、乗杉嘉壽、大島又彦、山川建、正木直彦、芝田徹心、平沼亮三〔常任理事〕吉村忠夫

中村岳陵、矢澤弦月、伊原宇三郎、伊藤廉、碓伊之助、池田勇八、石井鶴三、長谷川榮作、渡邊義知、建呂大夢、齋藤素巖、高村豐周、成澤金兵衛、土浦龜城、小林政一、小森太郎、澤崎定之、諸井三郎、中島健藏、深田久彌

大日本藥業協會 東京市京橋區銀座西四丁目五ノ六號 銀座南館第四階 電京橋五五一九

明治二十五年創立。社團法人。本邦藥業の發達を圖り、雜誌圖書の發行、講演會、講習會の開催、調査、建議、公共事業の助長等をなす。京都、大阪、名古屋

九州八幡等に支部を設く。

〔會頭〕伯爵金子堅太郎〔理事長〕山田清太郎〔理事〕和泉正光、熊澤治郎吉、近藤清治、佐々木源藏、芝田理八、高田安雄、永井彰一郎、不破政吉〔監事〕大野政吉、倉田昌修〔常議員〕八十八名

大日本陸軍從軍畫家協會 東京市日本橋區吳服橋二ノ五 春秋ビル内 電日本橋一七七

昭和十三年六月發會。主として戰役事變に従軍せる畫家、彫刻家を以て組織す。作品を通じて陸軍軍事に關する思想普及を計り、又皇軍將士及び遺家族の慰恤をなすを目的とす。同年第一回展開催。

〔副會長〕藤島武二〔顧問〕川端龍子、鹿子木孟郎、中澤弘光〔委員長〕石井柏亭〔委員〕川島理一郎、五味清吉、鶴田吾郎、大野隆德、清水登之、中村研一、伊原宇三郎、小磯良平、向井潤吉、小早川秋聲、高島祥光、日名子實三〔常任幹事〕住喜代志〔會員〕前出氏名ヲ除ク

荒井陸男、青山龍水、麻生豐、伊藤鉦次、江藤純平、一色五郎、一氏義良、柏原覺太郎、河野鷹思、久保田金僊、古城江觀、小室孝雄、小林喜代吉、眞道黎明、鈴木榮二郎、鈴木良三、瀨野覺藏、田中比左良、千地秀弘、堤寒三、寺本忠雄、等々

力已吉、中村直人、直原放奇、野上大業、長谷川榮作、長谷川春子、深澤省三、福田眉仙、三橋武顯、三迫星洲、南政善、宮澤鐵夫、山田正、矢野鐵山、行田泰英、朝井閑右衛門、栗原信、脇田和、藤田嗣

治、酒見恆、福田豐四郎、吉岡堅二、山崎坤象、橋本徹郎、横江嘉純、高井貞二

林唯一、深澤紅子、光安浩行、長谷川八十、矢橋廣、鈴木御水、(陸軍省囑託)高島勝馬、石井光楓、榎信太郎、武内英男、碓伊之助、和田香苗、永地秀太、吉田博、佐々貴義雄、島海青兒、熊岡美彦、倉垣辰夫、水平讓、今井滋、浦田正夫、笠置季男、小泉素彦、田中稻三、中田甚吉、小合保一郎、金井達三、坂井精一、内田矩吉、鮫島利久、竹内榮三郎、大橋城

大美展(日、洋) 大阪府北河内郡枚方町御殿山 大阪美術學校内

大阪美術學校日本畫並西洋畫部卒業生の全員を會員とす。昭和三年より毎年一回展覽會開催。

〔會長〕矢野橋村〔役員〕齋藤與里、福岡青嵐

大輪畫院(日) 東京市目黒區上目黒八ノ五三八 電澁谷三二四四

昭和十三年六月創立。小林彦三郎主宰し、主として明朋美術聯盟の舊同人に依り結成す。春秋二回展覽會を開催し、秋季展は公募に依る。毎月研究會を開催。

〔同人〕(主)小林彦三郎、樋口英雄

〔院友〕谷良治、佐々木順、楠奉白光、穗坂光希、福島秀行〔準院友〕(空席)〔會員〕十名

體漆工房(工) 東京市赤坂區福吉町一、甲六號

昭和十三年五月創立。漆工、乾漆の立體的工藝品製作研究を目的とす。

〔顧問〕正木直彦、和田三造、畑正吉、田邊孝次〔擔任者〕河面冬山、大槻一雄

第一美術協會（洋） 東京市龍野川區田端町四五五 三國久方

昭和四年創立。每年初夏、洋畫の公募展を開く。十三年五月第十回展開催。

〔會員〕濱地清松、石川重信、河邊梅村、黒越正二、三國久、御厨純一、三木辰夫、松見吉彦、松坂康、中原實、佐野忠吉、鈴木巖、高橋亮、山田篤、古澤康三郎、〔會友〕袴田恆男、長谷川富三郎、小嶺伸、川口精六、小島三郎、野村陸雄、照木廣一、谷井喜三郎、高橋賢一郎、宇田川榮三郎、山樹寅二郎

（客員省略）  
第三部會（彫） 東京市荒川區日暮里渡邊町一〇四〇 石川確治方 電駒込二六九七

昭和十年六月、舊帝展第三部無鑑査級有志は「帝院改組は全然誤れる措置」なりとして、帝展不開催新帝院解散等を要望する旨聲明したが、其趣旨から反帝展を標榜して七月同會を結成した。所謂展覽會むきのものを見せるよりも常に作りつつあるものをすべてさらけ出した方が「好い」との意味で個展の集合形式を取り、同年十月公募に依る第一回展を開き、十三年九月第四回展に及ぶ。

〔會員〕石川確治、池田勇八、畑正吉、吉田久繼、日名子實三、濱田三郎、大野信藏、向山峽路〔會友〕鈴木賢二、早乙

女颯次

高松工藝協會 高松市役所内

昭和七年五月創立。高松市の各工藝團體を綜合せるもので、工藝の振興を計るため工藝品並意匠圖案の調査、展覽會、研究會の開催、販路調査、他への出品斡旋等を行ふ。

〔會長〕（高松市長）富家政一〔副會長〕林平七、坂本榮、磯井如眞  
千葉縣美術協會（綜合） 千葉市市場町二 千葉縣立圖書館内 電千葉八二四  
昭和十一年創立。千葉縣出身及在住者を以て組織。地方美術の振興並に普及を圖る。十三年四月第五回展開催。

〔會長〕（千葉縣圖書館長）廿日出逸曉〔理事〕圓治月潭、河野周耳、菅谷元三、郎、長澤菊慈、奈良坂昂、無緣寺心澄、大須賀力、信田洋、丸木久雄、水野浩助、池田和、鈴木英之助

筑前美術會（日、洋、彫） 東京市世田谷區深澤町二ノ七三四 田中繁吉方

福岡縣出身作家により昭和八年結成、帝展及其他有力の展覽會に三回以上入選せる者を以て會員とす。毎年展覽會開催

〔顧問〕山崎朝雲、和田三造

竹立會（日） 京都市右京區嵯峨神明町二一 山本紅雲方 電嵯峨三六

竹内栖鳳門下同期生の研究團體。昭和十二年七月大阪三越に第一回展開催。

〔同人〕徳岡神泉、山本紅雲、青木生冲、岩岡集、中田晃陽、小森綠光

中央美術會（日、洋） 東京市本郷區曙

町一一 山口掬汀方

大正四年以來雜誌「中央美術」を刊行昭和四年休刊したが、同八年復興し、十一年十二月迄續刊した後廢刊した。年一回同會の主催にて日本畫、洋畫の公募展を開く。但し支那事變中は休展。

〔同展鑑査員〕（日本畫部）伊東深水、奥村土牛、中村岳陵、宇田萩郎、山川秀峰、兒玉希聖、郷倉千毅、堂本印象、小野竹喬、中村大三郎、山口蓬泰、福田平八郎、小泉勝爾〔洋畫部〕伊原宇三郎、碓伊之助、川口軌外、中野和高、野間仁根、鈴木千久馬、伊藤廉、東郷青兒、田口省吾、中村研一、清水登之、鈴木亞夫

中部水彩畫會 名古屋市昭和區洲原町六ノ二八 東本春水方

昭和十二年創立。年に一回公募による水彩展を開く。十三年十二月名古屋美術館に第一回展開催。

〔公募展鑑査委員〕横井禮市、早川國彦、石野隆、船橋治彦、藪野正雄、渡邊多平、東本春水

中部日本商業美術聯盟 名古屋市西區御幸本町通一丁目 愛知縣商工館内 電本二一五六

昭和十一年創立。中部各縣に於ける商業美術關係の諸機關を以て組織。商業美術の發達を圖るため展覽會、講習會等を開く。十二年十月愛知縣商工館に第二回展開催。

〔加盟團體〕岐阜縣商業美術協會、滋賀圖案會、富山商業美術協會、福井商業美術協會

術協會、靜岡商業美術協會、愛知商業美術協會、三重縣觀光協會、新潟商業美術協會

朝鮮童寶藝術院 京城府大和町一ノ三五 松川方

昭和十二年五月創立。朝鮮の人形發達と人形を通じての日鮮融和並社會教育の一助たらしめとするもの。毎春朝鮮在住者の出品による展覽會を開催。

〔顧問〕津田信夫、西澤信敬、大塚源二郎〔會員〕松田黎光、宇野光惠、遠田運雄其他十二名

朝鮮南畫院 京城府竝末町二四 電本局三三二二

大正三年創立。舊稱朝鮮木石南畫會。朝鮮に於ける南畫道の振興を目的とす。本部及支部を設置し之に加盟する者を院友となし、年一回院友の出品による展覽會を開催す。昭和十一年十九回展に至り、十四年第二十回展開催。院友六百餘名。

〔主幹〕久保田天南〔幹事〕江原如水、伊藤天達、大森天蔚、今井天澄、今澤天洲

沈爾留（彫） 東京市目黒區自由ヶ丘二二七 林是方

東美校彫刻科製造部の卒業生に依り、昭和二年發會。毎春展覽會を開く。

〔同人〕長谷川正雄、林是、大須賀力、奥田勝、黒田嘉治、佐土哲二、喜田三五、三木凱歌

圖案家協會 京都市伏見區桃山町宗



和園 澤田宗山方 電伏見六〇二

大正十一年創立。京都在住の陶案家を以て結成。展覽會、研究會等を催す。

〔總務〕 澤田宗山 〔理事〕 澤田宗山、山鹿清華、田村春曉、落合萬水、狩野秀峰、福岡玉僞。正會員百六十五名

龜起研究會(工) 東京市中野區江古田二ノ七四八 三井方

昭和七年八月結成。東美校鍛金部卒業生の研究親睦團體。年一回展覽會開催。

〔會員〕 石田英一、河村清司、八田辰之助、品田愼一、寺田龍雄、鈴木孝次、三井安蘇夫、藤本長邦、柴田武次、加藤正之、松原泰男、井尾敏雄、梶尾宗一、大西甚平、佐藤猛郎、小川正

帝國工藝會 東京市芝區西芝浦一丁目

東京高等工藝學校内

大正十五年七月創立。本邦工藝の産業化並其の進歩發達を圖るを目的とし、事業として生産業者、販賣業者、美術工藝家並に科學者の聯絡提携に努め、産業工藝の状況を調査研究し、又地方特産工藝品の改良並に販賣の紹介等をなす。毎月雑誌「帝國工藝」發行。(事業中休刊)

〔會長〕 男爵阪谷芳郎 〔副會長〕 鶴見左吉雄 〔顧問〕 伯爵金子堅太郎、伯爵牧野伸顯、伯爵清浦奎吾 〔常務理事〕 安川祿造、和田嘉衛

天地會(洋) 東京市世田谷區世田谷一ノ九一八 岡常次方

英橋洋畫研究所の末期の出身者を以て組織す。恩師黒田清輝の遺徳を追慕し、

相互の研鑽に努む。同人展を開く。

〔會員〕 安藤信哉、青樹官三、荒井邦朝、荒谷直之介、江尻房美、我部政達、橋口康雄、林秀二、伊川啓治、池上浩、河原瑞兒、花巖巖、菊地源八、樹下行雄、小林猶治郎、兒玉貞平、小泉秀雄、小西芳明、横島德次、松本茂雄、松濤泰亨、松澤清五郎、水島太一郎、無羅田正健、内藤勘司、中村重一、中西利雄、岡崎信夫、大西秀吉、斧山萬次郎、大塚金吾、鮫島利久、清水柳太、篠崎昌義、岡田省兵、スエケタツ、田澤八甲、寺門幸藏、外山英知、上田三郎、山岸主計、柳川清一郎、横尾泥海男

富山縣工藝協會 高岡市中川、富山縣工業試驗場内 電七一九

昭和四年創立。縣内の工藝家、販賣業者其他を以て組織。工藝の發達、販路擴張を目的とし、毎年縣下及東京、大阪に展覽會を開催し、臨時講習會、講演會等を開く。

〔會長〕 富山縣商工水産課長 〔副會長〕 縣工業試驗場長(常務理事) 縣商工水産課主事、富山市商工獎勵館長、高岡市商工獎勵館長

豐島會 東京市中野區野方町二ノ一二六八 中山方 電中野三五五七

昭和十二年結成。美術雜誌發行者を會員とし、相互の親睦と業務の協調を目的とする。

〔會員〕 美術春秋社芳川越、畫觀社高木紀重、現代美術社中山貞夫、美術界社浦

崎永錫、美術街社大山廣光

東叡會 東京市麹町區中四番町八ノ一 市喜山義夫方 電九段三七五四

昭和八年東京府美術館借館料改正の運動起り同年五月美術團體及美術記者に依り、東京府美術館借館料改正期成會が結成された。同會は問題解決後同年十二月解散されたが、之が機縁となり將來借館團體共同の權益を保護しその便宜を圖る可き集團として九年一月設立されたものである。

〔加盟團體〕 一水會、白日會、二科會、日本寫眞會、日本美術院、日本水彩畫會、日本畫院、東光會、東京表裝師組合、獨立美術協會、讀畫會、旺玄社、太平洋畫會、第一美術協會、第三部會、泰東書道院、南畫聯盟、構造社、光風會、國畫會、明朗美術聯盟、上社會、主線美術協會、春陽會、春台美術會、新制作派協會、新構造社、新美術家協會、新美術人協會、實在工藝美術會、表裝同人會、青龍社

〔理事〕 岩佐新、市喜山義夫、垣見泰山、藤本留三〔相談役〕 坂井岸水 〔評議員〕 石井柏亭、富田溫一郎、山口省吾、東根德夫、吉田白嶺、望月省三、野田九浦、熊岡美彦、香取重吉、福澤一郎、湯原柳畝、樹下行雄、石川寅治、濱地清松、石川確治、鹽原光男、福田浩湖、齋藤素巖、太田三郎、梅原龍三郎、川口春波、藤岡一、安藤照、木村莊八、笹鹿彪、内川巖三村英一、酒井亮吉、福田豐四郎、高村豐周、栗山弘三郎、川端龍子

東海美術協會(綜合) 名古屋市西區御幸本町 愛知縣商工館内

明治四十四年創立。美術及び美術工藝の振興を圖るを目的とし、會内に東洋畫西洋畫、彫塑、工藝の四部を置く。毎年協會展を開催の傍、文展への出品の獎勵並に之に關する各種の事務の取扱、研究會、講演會の開催をなす。昭和十三年四月第二十七回展を開く。

〔會頭〕 伊藤次郎左衛門 〔副會頭〕 岡谷惣助、菅原省三〔評議員〕 石河有鄰、渡邊秋鷺、小林松仙、菊地香三、原田隆諦〔主事〕 淺野甚七、岡田良右衛門、宮部鈴三郎〔正會員〕 (東洋畫) 六十一名、(洋畫) 十五名 (彫塑) 一名(工藝) 一名

東京鑄金會(工) 東京市下谷區谷中眞島町一ノ一號

明治三十六年の創立に係り主として東京在住の鑄金家を以て組織し、毎秋展覽會を開催する。

〔顧問〕 大島如雲(逝去) 〔幹事〕 香取秀眞、渡邊長男、佐々木象堂、山本安晏、香取正彦〔評議員〕 市岡紫雲、北原三佳、山本純民、齋藤鏡明、加納晴雲、丸谷端堂、小野田晴正、長野埤志、山口淨雄、梅村豐舟、伊藤忠雄、渡邊紫鳳、林萬壽人、山本自燭、根來實三

東京表裝師組合 東京市淺草區淺草橋一ノ三 香取重吉方 電淺草四七四一

東京市に於て營業をなす表裝師を以て組織。技術の向上及同業親睦を圖るため



種々の事業をなす。年一回東京府美術館に表装展を開催。昭和十四年二月第十七回展に及ぶ。

〔組合長〕香取重吉〔副組合長〕前波鐵太郎、原田萬平〔會計主任〕小川久雄、根本徳三郎

東京みつゑ會(洋) 東京市淀橋區下落合三ノ一七二七 佐藤平太郎方

昭和二年春創立。國民性に合致する水彩畫の研究と同趣味の普及を目的とする展覽會、講習會等を行ふ。十四年三月第十回記念展開催。

〔總務〕佐藤平太郎〔會員〕飯島八郎、

恩田孝徳、小椋繁治、小川俊郎、片岡豐彦、香月照次、小堀進、小林保司、齋藤大、佐々木正道、酒泉淳、柴田善太郎、諏訪邦一、高田力藏、竹内梅次郎、互井開一、佃政道、寺尾浩、内藤秀因、野澤潤二郎、藤野盈雄、堀野秀雄、松田晃八、松本慎三、牧野正吉、森谷清一、山崎政太郎〔會友〕七名

東光會(洋) 東京市淀橋區戸塚町二ノ一二 電牛込一四四一

昭和七年、舊帝展第二部出品者たる橋本八百二、堀田清治、岡見富雄、高間惣七、熊岡美彦、齋藤與里の六名に依り結成。八年二月東京府美術館に第一回展を開催、以來毎年春季に公募展を開き昭和十四年三月第七回展に至る。尙十一年三月會員橋本八百二、堀田清治、高間惣七の三名は退會した。

〔會員〕岩下三四、岡見富雄、渡邊浩三

岡部吾生、野口謙藏、熊岡美彦、胡桃澤源一、小早川篤四郎、齋藤與里、佐藤一章、水船三洋、平通武男、井上脩、石本秀雄、山下大五郎、正田二郎、森田茂、田代順七、江藤哲〔會友〕辻利平、山本清、松岡正、岸田淑子

同會第七回展規定技萃

一、出品手数料二點以内一圓、一點を増す毎に五十錢

一、出品畫は油畫、水彩、素描、パステル、テンペラ、版畫とし、一人の出品數五點を限りとする。但し大さには制限なし

一、他の展覽會に於て既に發表したる作品は出品するを得ず

一、鑑査員に審査は本會々員之を行ふ

一、賣却品に對しては其價格の二割を本會に支拂ふものとす

東學會(日) 東京市澁谷區向山町一〇二 吉田方 電高輪三六五八

從來東美校出身有志の日本畫家が相互の親睦の爲、毎月懇話會を開催し來つたが、昭和十二年六月、新に東學會と命名、結成した。邦畫壇の進展に寄與せんとするものである。

〔會員〕岩田正巳、服部有恆、畠山錦成、橋本明治、川崎小虎、狩野光雅、加藤榮三、吉田秋光、吉村忠夫、高木保之助、常岡文龜、根上富治、永田春水、村島西一、野口謙次郎、矢澤弦月、山本丘人、小泉勝爾、榎本千花俊、穴山勝堂、廣島晃甫、望月春江、杉山寧

東臺會(綜合) 奈良市雜司町 新納忠之介方 電三七五

昭和五年四月發會。東美校出身奈良在

住者有志の懇親並研究團體。毎年春季同人

人の展覽會を開催し、隔月集會を行ふ。

〔會員〕(日本畫) 富田一昭、立野雪郷、谷山介春〔洋畫〕西孝親、遠山八二、小野藤一郎、谷山藤四郎、中村義夫、小松原義則〔彫刻〕新納忠之介、細谷三郎、吉川政治、奥田勝、明珍恆男、菅原安男〔金工〕後藤年彦〔漆工〕幸王好太郎、北村久造〔圖案〕岸熊吉〔染織〕井上清

町六八 狩野探道方 電三田二二三六

明治四十四年十二月東美校日本畫科出身者に依り、東臺畫會が創立され大正四年三月第三回展を開催するに至つたが、同年十二月東美校出身者が新に東臺美術會を結成、依つてこれと合流したところ間もなく同會が瓦解したので再び日本畫科出身者有志相寄り大正五年二月池畔俱樂部を結成した。ついで大正十四年、池畔俱樂部の組織を擴大し在京の日本畫科出身者を網羅して東臺邦畫會と改稱し六月第一回展を開き、引續き展覽會を開催して昭和十二年六月第十二回展に及んだ。(昭和十四年六月解散)

〔會長〕結城素明

東潮會(日) 橫濱市中區本牧三ノ谷一三七 新井勝利方

橫濱在住の院展出品者の組織せる津登比會を昭和八年解散し、翌九年舊同人に新たに神奈川縣在住の帝展系作家を加へて設立した。毎年同人展開催。

〔會長〕栗原清一〔幹事〕飯田九一、中島清、中庭煥華、並木瑞穂、牛田雞村、小島一谿、新井勝利、水野陽翠、座間素賢、冬木大丙、木下春〔會員〕山下日出子、鈴木鳥心、高橋萬年、藤井白映、長谷川路可、片岡珠子、中島保、加藤洵綾、吉川朝衣、關暉明、柴宗廣、上垣候鳥、森博

東土會(彫) 東京市本郷區駒込神明町三四一 後藤良方 電駒込一一五五

昭和六年創立。東京生れの東美校彫刻科出身者にして舊帝展出品者を以て組織。隨時作品展開催。

〔會員〕淺岡重治、安藤秀吉、大須賀力、大橋清、金田豐、木内五郎、黒田嘉治、後藤光行、後藤良、杉浦藤太郎、杉本三郎、明珍勝友、安一、安田周三郎、吉田久繼、武田榮

東陶會(工) 東京市中野區川添町一

大森光彦方 電中野五八三五

昭和四年設立。東京及其附近の陶磁器並硝子工藝の作家を以て組織。年一回展覽會開催。(昭和十四年三月解散)

〔顧問〕板谷波山、宮川香山、沼田一雅

〔會員〕板谷梅樹、井上良齋、長谷川怒瑠好、星野國太郎、土肥刀泉、大森光彦、小川雄平、唐杉榮四、各務鐵三、橫山朝陽、竹内蘭山、安藤喜明、小柳今朝一、古宇田正雄、湯山青厓、水野喜作、宮之原謙、塗師淡齋、小柴外一〔會友〕伊東翠壺、伊東信助、楠部彌式、眞鍋知道、澤田宗山、宮永東山、清水正太郎、加藤

苔山、加藤華仙、加藤士師、柄本曉舟、松本佐吉、松本佩山

東風社(日) 東京市深川區富岡町二ノ一三 福田浩湖方 電本所六一五

大正十五年創立。南宋畫の研究團體。展覽會開催。

〔同人〕 大津雲山、高須芝山、福田浩湖、佐藤華岳、木村棲雲、金子米軒、中田雲暉、荒居翠湖、佐々木永秀、關谷雲暉

東方美術協會(日、工) 京都市上賀茂南大路町 井上永悠方

昭和九年創立。レアリズムを唱導し、毎月座談會を開く。十三年三月京都朝日會館に第一回展開催。

〔會員〕 井上永悠、品角黎晃、大西政治、木下靈山、絲井永晃

東邦彫塑院(彫) 東京市杉並區永福町四〇五 雨宮治郎方

昭和十年六月帝院改組に際して舊帝展審査員級の長谷川榮作、加藤顯清、吉田久繼、國方林三、山根八春、後藤良、雨宮治郎、北村正信、關野聖雲等の九名は

「帝國美術院改組の結果、吾人等主義を同じくする者に於ては團結の必要を痛感し、こゝに東邦彫塑院を結成して藝術權威維持と後進誘掖に盡し、もつて吾人の生命とする創作により主義主張の貫徹を期するものなり」と聲明して、東邦彫塑院を結成、同年十一月東京府美術館に第一回公募展を開催した。昭和十四年六月第三回展に至る。

〔會員〕 一色五郎、長谷川榮作、羽下修

三、橋本朝秀、服部仁郎、花里金央、新田藤太郎、富永朝堂、岡本金一郎、奥山泰堂、分部順治、渡邊弘行、矩幸成、上條俊介、吉田敬示、吉開伊喜藏、田村審火、中島東洋、國方林三、倉澤興世、山根八春、梁川剛一、牧俊高、藤野舜正、後藤良、雨宮治郎、安達貫一、赤堀信平

安一、北村正信、木下繁、宮本朝清、柴田正重、毛利敦武、森大造、森山朝光、關野聖雲、杉浦藤太郎

東北美術展覽會(日、洋) 仙臺市東三番丁 河北新報社内 電四一〇〇

昭和五年創立の東北美術協會の主催展覽會を同八年より河北新報社が引き繼いだもので、東北の美術思想普及並に發達を目的とし、仙臺市に年一回日本畫、洋畫の公募展を開催する。規則は毎年一月上旬發表。

〔會長〕 (河北新報社長) 一力次郎 〔副會長〕 (同副社長) 一力五郎 〔顧問〕 勝本正晃、國井喜太郎

東北北海道工藝協會 仙臺市二十人町通一〇 商工省工藝指導所内 電三七六〇—三七六二

昭和四年設立。東北六縣及北海道に於ける工藝關係者相互の聯絡を保持し、東北工藝の産業的發達を圖るを目的とし、事業として工藝品並意匠圖案の指導、販路擴張、競技會、展覽會の開催、各種工藝的副業の指導獎勵等をなす。

〔名譽會長〕 藤澤幾之輔 〔理事長〕 國井喜太郎 〔常任理事〕 齋藤信治、野村道

夫 〔評議員〕 寺坂毅 〔常任幹事〕 阿久津保太郎、古谷豐吉、西川友武、樋浦守治

等迎會(洋) 東京市淀橋區角管三ノ一七八 長屋勇方

大正十一年度東美校洋畫科出身者を以て組織。臨時展覽會開催。

〔會員〕 飯守好雄、大海清三、小野藤一郎、長屋勇、窪田照三、松本銳次、小平正彦、三田康、三谷浩三、光石藤太、鈴木誠、鈴木啓二

稻花會(工) 東京市杉並區久我山三ノ一一三 三田村自芳方

大正十一年故赤塚自得の社中を以て組織。相互の親睦並向上を目的とし、漆工藝をあらゆる方面より研究せんとす。臨時展覽會開催。

〔會員〕 三田村自芳、魚野自醒、太田自適、久慈自然、横越自入、岡本昇三、石川古堂、關聰雨、井澤靈山、辻喜一郎、月尾慶水、金井正文、村田義忠、吉岡郁三、南忠、池田自勝、小澤裕、工藤喜代志、山浦等

濤友會(洋) 東京市豊島區池袋二ノ九七〇 日高方

昭和十一年春結成。二科出品者の洋畫研究團體。

〔會員〕 木寺轍、小堀進、桑原實、萩野康兒、日高健泰、財保、百足遠六、中野亨、川合喜二郎、北島達夫、増田英一、森繁、山田順治 〔賛助〕 藤田嗣治、野間仁根、北川民次

同調會(日) 東京市板橋區常盤臺一ノ一一〇號 岩崎方

昭和十三年度東美校日本畫科卒業生を以て組織す。年一回展覽會開催。

〔會員〕 岩崎鏗、池澤賢、石田一郎、河原丈夫、川本壽一、加藤英純、神田禎之米澤裕二、土山幸一郎、村尾博仁、野嶋清一、黒田哲二、山崎民士、小池平四郎、佐藤正衛、三浦眞一、宮川澄康、白尾嚴理、澁谷保三

堂本畫塾東丘社(日) 京都市東山區八坂東大路西 堂本印象方 電祇園一〇八八

堂本印象の主宰する畫塾。昭和十三年六月第一回東丘社展を京都美術館に開催す。塾員七十三名。

堂本畫塾東丘社三樹會(日) 京都市東山區八坂東大路西 堂本印象方 電祇園一〇八八

堂本畫塾東丘社内の七曜會、黒美會、三名會を以て組織。昭和十四年六月第三回展開催。

〔會員〕 池田長三郎、妹背平三、岩田登司雄、都司倉群青、長田紅霞、河原悅人、高井誠、堤利彦、無憂樹、今野可啓、奈良榮一、長野正男、中川眞次、草野謙吉、安藤寛、澤野文臣、三原清宏、下村正一大嶽智弘、河原長一郎、平塚榮三、川口勤作

堂本畫塾東丘社春風會(日) 京都市中京區問之町押小路上ル 池田洛中方

昭和九年十一月堂本印象畫塾生を以て

〔會員〕 一色五郎、長谷川榮作、羽下修

〔會員〕 一色五郎、長谷川榮作、羽下修

〔會員〕 一色五郎、長谷川榮作、羽下修

〔會員〕 一色五郎、長谷川榮作、羽下修

〔會員〕 一色五郎、長谷川榮作、羽下修

〔會員〕 一色五郎、長谷川榮作、羽下修

〔會員〕 一色五郎、長谷川榮作、羽下修

〔會員〕 一色五郎、長谷川榮作、羽下修

〔會員〕 一色五郎、長谷川榮作、羽下修

〔會員〕 一色五郎、長谷川榮作、羽下修

〔會員〕 一色五郎、長谷川榮作、羽下修

組織、昭和十二年五月、京都大丸に第一回展開催。

〔贊助〕三輪晃勢、是永學秀〔會員〕井上和雄、井關雅夫、池田洛中、戸島光雄、山口芳央、松尾冬青、曲子光男、古川雅司、阪本音彦

堂本畫塾東丘社如月會（日） 京都市東山區八坂東大路西 堂本印象方 電祇園一〇八八

堂本印象畫塾生に依り組織。昭和九年二月京都大丸に第一回展を開き、以後毎春展覽會を開催す。

〔昭和十三年度（第五回展）會員〕井上和雄、池田洛中、池田榮廣、妹背平三、都司倉群青、戸嶋光雄、大日三世子、長田紅霞、河原悅人、河田賢三、高井誠、竹内無憂樹、堤利彦、山口英央、松尾冬青、曲子光男、古川雅司、不二木阿古、是永學秀、安藤寛、阪本音彦、三輪晃勢、三木朝子、茂森繁二、下村正一

童寶美術院 京都市淺草區淺草橋一ノ三 電淺草二四六九

昭和五年創立。人形藝術並に童心を表現し、童心を啓發し得るやうな藝術作品の向上普及を目的とし、毎春繪畫、彫刻工藝、人形玩具等の各科に互る公募展を開催する。十四年二月日本橋三越に第九回展を開いた。

〔同人〕石井柏亭、笹川臨風、西澤信敬、服部憲夫、山田徳兵衛、山本鼎、和田英作、倉橋惣三、津田信夫〔顧問〕子爵岡部長景〔代表幹事〕西澤信敬、山田徳兵衛

衛

童林社（洋、彫） 京都市豊島區長崎東町三ノ二四三 橋本方

昭和六年度東美校洋畫科及び彫刻科の入學者により組織。毎年展覽會を開催す〔會員〕（繪畫部）岩田榮、井上自助、伊藤彰、池田輝之、池田快造、橋本正躬、富山良治、沈亨求、李石樵、大山英夫、川田恒之輔、河口正喜、高木周平、根守悦夫、中西次郎、中村立行、永田精二、村田保三、上原誠、上島長健、野末恆三、野口徳次、藥師寺孝太郎、山中清一郎、船越達仁、藤岡俊一郎、江守龜男、寺田春一、赤津實、柳克文、齋藤齊、里見明正、廣瀬正雄、須澤鴻、須藤清彦、杉山一正、杉山卓、鈴木貞三〔彫刻部〕千村士乃武、吉田芳夫、瀧一夫、能美八重夫、黒川泰、柳原義達、古池恆雄、榎國吉、新田實、佐藤邦輔、清水勳、水船六洲、關長造

德島縣工藝協會 德島市前川町 德島縣工業試驗場内 電二八五三

昭和十二年創立。工藝品製造者、販賣者等を以て組織し、同縣の木材及其他の工藝の發達を圖る。事業として各種の調査、指導、印刷物の刊行、展覽會、講演會の開催、助成等をなし、輸出工藝の振興に努む。同十四年六月第一回展開催。正會員六十餘名。

獨立美術協會（洋） 京都市外國分寺多喜窪二三八六 兒島善三郎方

昭和五年十一月二科の兒島善三郎、里

ト

見勝藏及び會友七名は新なる藝術主張の下に結束して、同會を脱退、三岸好太郎、高島達四郎、伊藤藤、清水登之を加へ「我々は既設の團體より絶縁し新時代の美術の確立を期す」と宣言、獨立美術協會を創立した。同六年より毎春東京府美術館に公募展を開催し又大阪、京都、名古屋、神戸、福岡、熊本、鹿児島、長崎、臺北等に地方展を催して居る。尙毎秋、會員の小品展を行ふ。其他事業として夏季講習會、出版等を行ひ、又自治制の研究所を東京、大阪、京都に設く。同十二年伊藤藤、里見勝藏、妹尾正彦、田中行一、曾富一念、林重義の六名退會。同十四年第九回展開催後、會員福澤一郎は、美術文化協會を結成、退會せるを以て同人を除名した。同年森芳雄、三岸節子退會。

〔會員〕井上長三郎、海老原喜之助、川口軌外、兒島善三郎、小島善太郎、小林和作、清水登之、鈴木亞夫、鈴木保徳、須田國太郎、高島達四郎、田中佐一郎、中山巖、野口彌太郎、林武、中村節也、松島一郎〔會友〕今西中通、上田清一、浦久保義信、大野五郎、菊地精二、熊谷登久平、齋藤長三、中間朋夫、藤岡一、水野佳一、森有材、樋口加六〔十四年度會友推薦〕池田金之助、富樫寅平、佐藤英雄、中尾彰

同會展出品規定抜萃  
一、出品は洋畫（大々無制限）とし一人五點限りとする（未發表の作品に限る）  
一、出品手数料は一人に付金三圓とす  
一、陳列畫賣約は即時全價格を支拂ふか或は價格の三割を手附金として前納せらるべし（破約の場合は手附金を返却せず）  
一、陳列畫賣約の出品者は手数料として價格の一割を本會に納むるものとす

讀畫會（日） 京都市本郷區動坂町三二七 湯原方 電駒込五三一

明治四十年荒木寛畝を主宰として設立寛畝の歿後は十畝を會長とし、毎春展覽會を開催、昭和十四年五月第三十二回展に及ぶ。

ト

同會第三十二回展規定抜萃  
一、出品畫ハ荒木一門及其系統ニ屬スルモノトス  
一、出品畫ハ鑑査ヲ經タルモノニ限リ陳列ス  
一、無鑑査ノ出品ト雖モ陳列セザル事アルベシ

一、入選作品中優秀ナルモノニ對シ鑑査ノ上授賞ス  
一、出品畫ハ鑑査ヲ經タルモノニ限リ陳列ス  
一、無鑑査ノ出品ト雖モ陳列セザル事アルベシ

栃木縣美術協會（洋） 栃木縣鹿沼町下村木町 吉村勇方、京都市淺草區馬道町二ノ五 交換勝方

栃木縣在住並出身者の結成する洋畫團體。昭和十年宇都宮市に於て第一回公募展開催。

〔會員〕淺野研兒、文挾勝、飯田張、石川勝平、水沼清、西村清子、野中寅太郎、大野五郎、清水登之、高松甚二郎、渡邊敏、吉村勇〔會友〕鈴木貫司、田神正巴〔會友〕（日） 京都市本郷區駒込東片町三〇 鹽崎逸陵方

故寺崎廣業門下にして舊帝展所屬の十名を以て組織す。昭和十四年三月第三回展開催。

〔會員〕野田九浦、矢澤弦月、吉田秋光

三九

水上泰生、菊澤武江、鹽崎逸陵、伊藤龍涯、岡部光成、町田曲江、角田盤谷

ナゴヤ、アバンガルド、クラブ 名

古屋市昭和區菊園町二ノ一 下郷羊雄方電ミズホ一九六九

昭和十一年、名古屋在住及出身の前衛作家により結成。同市に於て展覽會を開く。會員十二名。

名古屋工藝協會(工) 名古屋市役所産業部内

名古屋地方の工藝家及關係者を以て組織。工藝に關する種々の調査、出版、展覽會開催等を行ふ。昭和十二年名古屋及東京に於て、第二回名古屋工藝品展開催

〔會長〕神田純一〔顧問〕藤井達吉、板谷波山〔理事長〕田中藏六〔理事〕横山安吉、太田良次郎、中川貞三、藤本鐵男、安阿彌宗閑、高橋千代三郎、新森愛勇、原三郎〔委員〕勝利彦、山田峴山、多和田實、青井正太郎、後藤九吉、伊藤米松、小幡正次、伊藤仁齋、龜井清市

名古屋美術聯盟 名古屋市役所内

昭和十一年創立。愛知縣在住及出身の美術家を以て組織。郷土美術界の向上を圖り展覽會、講習會等開催の外美術獎勵に關する諸事業を行ふ。

〔會長〕(市長)縣忍〔評議員〕川崎小虎、服部有恆、太田三郎、伊藤廉、鬼頭鍋三郎、加藤靜兒、宮田重雄、毛利教武、長野埤志、狩野梅齋、朝蔭其明、小川鴻城、横山龍生、織田杏逸、淺井正臣、石川英鳳、朝見香城、岩佐古香、平岩三陽

井上安男、中野安治郎、船橋治彦、數野正雄、渡邊多平、安藤邦衛、伊藤鎌、石井國義、魚津良吉、杉本健吉、大澤鉦一郎、横井禮市、遠山清、市ノ木慶治、宮脇晴、矢野陶々、加藤忠三郎

奈良美術家聯盟 奈良市大佛殿裏田中修方

昭和十年創立。主として奈良在住の帝展、二科、獨立等の出品者を以て結成する洋畫研究團體。毎年春秋二回展覽會開催。研究所を設置。

〔會員〕今西春治、乾平三、岩本恆三、間瀬謹平、森島包光、岡島吉郎、奥山堤、六條篤、下瀬貞和、田中修、辰巳義人、寺瀬信一、遠山八二、浦久保義信、吉田直之〔贊助員〕濱田葆光、中村義夫山下繁雄

奈良洋畫會 奈良市法蓮佐保川町曾根靖雅方

昭和七年設立。奈良縣美術家の指導養成を目的とす。例年五月に公募展、十月に同人展開催。夏期洋畫講習會を開く。昭和十三年度は事變の爲公募展開催を中止した。

〔同人〕若山爲三、飯田衛、笠松春彦、森永昔雄、武若武作、辻操、小森重雄、廣瀬英男、岩井濱子、鎌田史彦、吉澤健二、曾根靖雅、御宮地保、庄司吉郎、保田貞治、顧問十二名

長野縣農美生産組合聯合會(工) 長野縣廳經濟部規則課内 電長野四三〇一 縣下農村工藝品生産團體により組織。

各團體の聯絡を圖り、生産の指導、販路擴張並に、展覽會開催等を行ふ。

〔會長〕(經濟部規則課長)今井清武〔副會長〕(經濟部副課主任)江島次郎、中村實

南畫鑑賞會(日) 東京市麹町區四番町四 電九段六二〇

昭和七年三月創立。南畫道の普及を計るを目的とし、會員は臨時入會の便あり。會長の執筆指導を主とし、通信教授に依り修畫するを得。年一回會員の習作展開催。

〔會長〕小室翠雲〔總務〕石塚彰吾

南畫聯盟(日) (東京事務所)東京市深川區富岡町二ノ一三 福田浩湖方

電深川六一五(京都事務所)京都市新町北大路上小柳北通西入 白倉二峰方 電西陣三二一四

昭和十一年九月日本南畫院及環堵畫苑の解散後、有志相謀り翌十月に結成した。南畫道の興隆を目的とし、研究會、公募展を開催する。

〔顧問〕小室翠雲〔幹事〕岡田晴峰、白倉二峰、人見少華、福田浩湖〔委員〕關谷雲龍、大栗旗折、荒居翠湖、高須芝山、横内大明、村岡應東、小川千麿、須藤幽邨、降旗篁岳、鷹野樗亭、木内一榮、馬來田愛岳、峰村北山、宮原柳櫻、渡邊黃華、松野自得、久保田玉堂、小山居泉、佐々木喜堂、高橋暉山、横山松雲、高島祥光、栗飯原大醒子〔會員〕七十七名

南紀美術會(日、洋、彫) 東京市荒川區日暮里渡邊町一〇四〇 建昌大夢方 電駒込一四〇一

大正八年紀州出身の美術家により結成。年一回東京或は郷里に展覽會を開く。

〔常任幹事〕建昌大夢〔幹事〕後藤光行 木下繁、會員二十九名

二科會(洋、彫) 東京市四谷區愛住町七八 電四谷四九七八

大正三年文展第二部に二科設置運動が起つたが、當局に容れられず、同年十月ついに文展より分離して、上野竹之臺陳列館に二科美術展覽會が開催された。同展開催に際して其の任に當りたる鑑査委員十一名は翌年そのまゝ、會員となり、二科會は茲に在野團體として獨立した。

(其中中柳敬助、田邊至の二名は直ちに脱會)爾來同會は常に新進流派の作家を包容して我が洋畫史上に啓蒙の功績を擧げて居る。大正八年第六回展の開催に際し藤川勇造會員に推され初めて彫刻部加入を見た。昭和五年兒島善三郎、里見勝藏外會友七名は退會し、獨立美術協會を創立した。昭和十年會員石井柏亭、山下新太郎、安井會太郎、有島生馬、藤川勇造の五名新帝國美術院會員に任命さるゝ、や同會は其の盟約に基いて右五名と訣別し、その功勞を謝して名譽會員に推薦し、同會は從來の通り飽くまで在野として行動する旨を聲明した。毎秋東京に展覽會を開催し、引續き京都、大阪、福岡、名古屋等に於て臨時地方展を開催する。尙十二年石井柏亭、有島生馬、山下新太



郎、安井曾太郎等は名譽會員を辭退した。

〔會員〕 藤田嗣治、熊谷守一、北川民次

栗原信、正宗得三郎、宮本三郎、向井潤

吉、中川紀元、野間仁根、岡田謙三、島

崎鶴二、鈴木信太郎、東郷青兒、田口省

吾、高岡徳太郎、笠置季男、松村外次郎

渡邊義知、横井禮市、黒田重太郎、鍋井

克之、國枝金三、濱田葆光、田村孝之助

上田曉、坂本繁二郎、國吉康雄、齋藤豊

作、アスラン、ビツシエール、ロオト、

ザツキン

〔會友〕 榎倉省吾、松本弘二、柏原覺太

郎、椎塚猪知雄、岡部邦香、酒井亮吉、

吉井淳二、早川國彦、藤川榮子、清水刀

根、服部正一郎、伊谷賢藏、伊庭傳治郎

錦義一郎、松井正、浪江勘治郎、山本直

治、藤井二郎、小出卓二、伊藤繼郎、古

家新、福島金一郎、吉原治良、小林喜一

郎、田邊三重松、山口長男、長谷川八十、

木内克、水野欣三郎、川崎榮一、三浦舜

太郎、土田實

同會第二十五回展規則抜萃

一、本展覽會は何人と雖隨意出品をする事

を得。但し鑑査の上陳列決定せられたる作品

の作者は他の對立的公募展覽會へ出品する

を得ず

一、展覽會には繪畫彫塑の二部を設く

一、本年の出品點數は繪畫、彫塑とも各五點

とす但し出品畫は一點の大きき百五十號を限

度とす

一、同一作者にして同時に兩部へ出品するこ

とを得、但し其場合は各々指定點數以内と

す

一、既に本邦に於て發表したることある作品

は受理せず

一、作品には出品目録及出品手數料として出

品點數に關せず一人に付金二圓を添へ搬入

せらるべし

一、陳列作品の買約は本會に於て之を取扱

價額の一割を申受くものとす

二科西人社(洋、彫) 福岡市大名町八

七 青木壽方

昭和九年十一月創立。福岡縣出身の二

科會出品者の組織する洋畫彫刻の研究團

體。年一回展覽會開催。

〔同人〕(繪畫) 伊藤研之、伊東靜尾、大

河原元、加藤尙義、加藤タキノ、吉武友

樹、高田力藏、能間寛、小松清次、眞隅

太莊、後藤繁喜、安部治郎吉、青木壽、

坂宗一、山口長男、有隅善郎(彫塑) 柳

田昌、福田安敏、廣瀬不可止、上野三郎

廿四人會(洋) 東京市中野區櫻山一

一 樋口加六方

昭和七年創立の十七人會の擴大せるも

ので獨立展出品者の親睦團體。臨時作品

展開催。

〔會員〕 樋口加六、岡部文之助、法充昌

雄、小島圭一、長島榮吉、横山清治、熊

谷登久平、久保田久一、今西忠通、池田

金之助、中尾彰、佐藤英男、竹中三郎、

清水鍊徳、坪内節太郎、森有村、浦久保

義信、赤星孝、小原雄二、坂本善三、赤

堀佐兵、綠川廣太郎、富樫寅平

兩歩美術協會(洋) 京都市烏丸通上

立賣上ル 太田喜二郎方 電西陣五九六

昭和十一年創立。年一回の公募展及洋

畫講習會を開く。同年京都美術館に第一

回展開催。

〔會員〕 太田喜二郎、角野判治郎、吉田

苞、赤松麟作、新井完(會友) 東坊城光

長、天井陸三、伴庄兵衛

新潟縣工藝協會 新潟縣廳商工水産

課内

昭和九年三月創立。工藝團體相互の連

絡、工藝品の輸出促進を圖り、工藝に關

する調査、指導助成、展覽會開催、販賣

斡旋等をなす。

〔會長〕(新潟縣經濟部長) 山田武雄〔副

會長〕(商工水産課長) 安井久

西日本美術展覽會(洋、工) 福岡市島

警固九八四 福岡日日新聞社内

福岡日日新聞社の主催する公募展で、

洋畫部及美術工藝部の二部より成る。昭

和十一年第四回展開催。(時局に鑑み當

分休止する。)

西山畫塾青甲社(日) 京都市岡崎法

勝寺町 福田翠光方

大正十二年西山翠嶺門下を以つて創立

毎月研究會、年一回展覽會開催。

〔幹事〕 福田翠光〔副幹事〕 水野深輝

本庄陶苑〔研究會主事〕 澤宏毅〔學藝

部主事〕 樋口富麻呂〔評議員〕 山ノ内信

一外十四名〔常議員〕 堂本印象外九名

日本アンデパンダン協會 神戸市神

戸區元町一丁目 プチギヤラリー内

毎春神戸にて左記委員の主催により洋

畫の無鑑査公募展を開催する。

〔委員〕 今井朝路、井關昇、奥村一彦、

吉田一夫、多田榮二、田中香苗、三好繁

治、森川豐三、有吉正雄、木村五六

日本漆繪協會 東京市麻布區今井町

二五 三木義榮方

昭和十一年設立。漆繪及漆工藝の新生

面開拓を目的とす。毎年春季に會員展、

臨時試作展を開催する。十二年四月第一

回展開催。

〔會員〕 片山佳吉、横井弘三、太齋泰夫

大村素峰、松岡政雄、三木義榮、森山珪

秀

日本カトリック美術協會 東京市小

石川區小日向臺町二ノ二七 湯川方

昭和四年創立。カトリック信徒の美術

家及び美術愛好者を以て組織。「日本精

神による基督教美術の研究創作發表」及

「海外同種團體との交渉機關」昭和十

二年マニラに於て展覽會を開催した。

〔顧問〕 ヘルマン・ホイグエルス〔賛助

員〕 木村太郎、黒澤武之助、松風誠人

〔會員〕 長谷川路可、小倉和一郎、木村

圭三、佐田好陽、小關君子、岡山聖慮、

佐々木松次郎、古屋清

日本畫院(日) 東京市本郷區駒込千

駄木町五九 望月春江方 電駒込二六四七

昭和十三年四月東京の文展系日本畫壇

有志に依り結成。「現下の日本畫壇の趨

勢に鑑み、之を横斷的に結束するの要を

痛感し茲に日本畫院の成立を見るに至

る。吾等は協力以て清澄なる畫壇の先驅

者たらんとす。」と聲明した。十四年五

月第一回公募展開催。



〔同人〕岩田正巳、服部有恆、畠山錦成、西澤信敬、川崎小虎、吉田秋光、吉村忠夫、吉岡堅二、高木保之助、常岡文鶴、根上富治、永田春水、野田九浦、矢澤弦月、松本泰水、福田豊四郎、小泉勝爾、兒玉希望、穴山勝堂、飛田周山、望月春江、森白市、杉山寧

同會第一回展規定拔萃

- 一、應募出品は鑑査の上陳列す
- 一、應募出品にして審査の上優秀と認めたるものに對し日本畫院賞に獎勵賞として金五百圓を贈與す
- 一、鑑査及審査は同人之に當る
- 一、出品者は手数料として一人につき一圓を納入するものとす(出品點數は制限せず)
- 一、出品畫の大きさは任意とす
- 一、出品畫にして賣約せられたる時は手数料として賣價の二割を申受くべし

日本玩具協會

東京市世田ヶ谷區世田ヶ谷町二ノ一〇八〇

昭和三年設立。玩具産業の發達を圖り、玩具の研究調査並發明考案の助成に關する諸事業を行ふ。

〔常務理事〕畑正吉、西澤信敬、加納淳男、永澤謙三、氏家壽子、國井喜太郎、山根省三、山田義郎、木槍恕一、阿部七五三吉、鈴木豊次郎

日本建築士會

東京市京橋區銀座西三ノ一建築會館七階 電京橋六二〇(關西支部) 大阪市北區中之島三ノ三朝日ビル四階日本建築協會内 電北濱四〇五一

大正三年創立。昭和三年社團法人設立認可。建築士の業務の進歩發達を圖るを以て目的とす。月刊雜誌「日本建築士」

を發行。

〔理事長〕櫻井小太郎〔理事〕堀越三郎、石原信之、西村好時、山下壽郎、黑崎幹男、岡田捷五郎、松田軍平、安井武雄、波江悌夫〔關西支部幹事〕波江悌夫、安井武雄、松井貴太郎

日本工藝美術會

(東京) 東京市下谷區谷中眞島町一ノ一號(關西) 大阪市住吉區住吉町一三〇〇 柴崎方

大正十五年創立。流派の新奇、様式の東西を問はず、あらゆる工藝の作家、鑑賞家、評論家を以て組織せる綜合團體。毎年一回展覽會を開催する外、工藝美術の社會的施設に關する建言をなし又その實現に努める。

〔常務委員〕

岩田藤七、大島隆一、吉田源十郎、津田信夫、内藤泰治〔委員〕板谷波山、石川英一、磯矢阿伎良、飯塚琅玕、六角紫水、畑正吉、西村敏彦、豐田勝秋、河合秀市、小川雄平、香取秀貞、桂光春、河村崎山、高村豊周、高井白陽、多畑宗哉、堆木楊成、筑都幸哉、村越道守、梅澤隆眞、海野清、山崎覺太郎、松田權六、佐藤陽雲、北原千祿、木村和一、清水龜藏、廣川松五郎、森川紫山〔地方委員〕堂本五三良、沼田一雅、中島豊次、山鹿清華、安原祥窓、松崎福三郎、越田尾山、迎田嘉亭、宮永東山、清水六兵衛、島野三秋、柴崎風岬、杉田不堂

日本工作文化聯盟

東京市麹町區內幸町二ノ三 幸ビル内 電銀座三三八三 昭和十一年十二月九日發會、本會は科

學、藝術其他工作文化に關與する諸分野の専門家を糾合し、且つ産業上の諸機能と提携して「一、様式建築より生活建築へ二、有閑工藝より目的工藝へ三、低俗製品より價值製品へ」なる指標の下に建築を中心とする工作文化の健全なる發達を圖らんとするもので次の如き項目を事業課題とし、且つ出版、展覽會、講演會の開催、諮問應答等をなす。(イ) 研究

(一) 住の基本問題の研究(二) 都市及農村計畫に關する研究(三) 史的生活文化財の研究(ロ) 指導(一) 住に關する工業製品の指導(二) 建築生産の指導(三) 工作の諸分野に關係し來る藝術的諸形式の批判檢討(ハ) 普及(一) 生活文化に關する知識の普及(二) 健全なる工作文化財の普及

〔會長〕伯爵黒田清〔理事長〕岸田日出刀〔理事〕堀口捨巳、佐藤武夫、關重廣、小池新二〔幹事〕市浦健、關野克〔特別會員〕澤島英太郎、鈴木道次、上野伊三郎、奥本新太郎、藏田周忠、坂倉準三、谷口吉郎、土浦龜城、中村彌三、服部勝吉、藤島亥治郎、前川國男、山越邦彦、山脇巖、吉田鐵郎

日本挿畫院

東京市小石川區久堅町八六 加藤まさを方 電小石川四二八二

昭和十年創立。挿畫藝術の向上を目的とし、挿畫版權確立の運動、挿畫展の開催をなす。機關誌「畫ともち」刊行。「挿畫研究會」開催。

〔同人〕

鴨下晃湖、加藤まさを、清水三重三、鈴木朱雀、田中比佐良、細木原青起、嶺田弘

重三、鈴木朱雀、田中比佐良、細木原青起、嶺田弘

日本挿畫家協會

東京市世田ヶ谷區北澤三ノ九〇九 海野方 電銀座四五一二

昭和三年創立。挿畫界の向上發展を期し、會員の權利擁護、相互扶助、新人紹介、作品發表等を主なる目的とす。

〔委員〕

岩田專太郎、井川洗屋、石井滴水、林唯一、細木原青起、田中良、武井武雄、海野精光、近藤紫雲、齋崎英朋〔會員〕井上猛夫、伊藤幾久造、今村寅士、馬場射地、本田庄太郎、保積稻夫、富田千秋、遠山陽子、布目敏行、岡本一平、大橋月皎、小笠原寛三、太田稚光、岡田なみじ、渡部審也、加東三郎、加藤まさを、河目悌二、川上四郎、河盛久夫、樺島勝一、高島華脊、橋小夢、竹中英太郎、名取春仙、中江正美、野水昌子、山六郎、山口將吉郎、柳田謙吉、松田青風、丸尾至陽、小村雪岱、大郷盛八郎、明石精一、淺野薫、新井芳宗、佐川珍香、齋田喬、清原重以知、水島彌保布、道岡敏清水對岳坊、代田牧一、神保朋世、新關青花、平澤文吉、須藤重、須藤宗方、大石哲路、吉郷二郎、福與英夫、伊勢良夫、淡路多茂津

日本山岳協會

(洋) 東京市品川區大井元芝町八七〇 茨木猪之吉方

昭和十一年一月創立。山岳を崇敬愛好する畫家を以て組織し、山岳に關する繪畫の研究發表を行ふ。十三年七月東京高島屋に、同十月大阪大丸に第三回展開

龍。

〔會員〕足立源一郎、中村清太郎、茨木猪之吉、石井鶴三、石川滋彦、小菅徳二、丸山晚霞、染木照、武井眞澄、吉田博、末光紘、内野猛、中村善策、山川勇一郎

〔顧問〕小島烏水、藤本九三

日本自由畫壇(日) 京都市烏丸通出水上ル西 廣田方 電西陣三〇五六

大正八年京都の日本畫家に依り設立。毎年秋季公募展開催。

〔同人〕上山萬秋、廣田百豊、玉舎春輝、久保飛路史

日本漆藝院 東京市澁谷區常盤松町四八 電青山七二二九

昭和十一年五月結成。本邦独自の漆藝の發展を圖るため従来の漆藝家の小黨分離の弊を打破して協力邁進せんとす。每春三越に公募展を開き、十四年第三回展開催。

〔同人〕石井青士、本間葵華、富樫光成、河面冬山、河合秀市、勝田靜璋、吉田醇一郎、横越自入、高井白陽、高野松山、多畑宗哉、堆米楊成、都筑幸哉、梅澤隆眞、太田自適、大村素峯、岡本昇三、山永光市、松田權六、福澤健一、結城哲雄、三田村自芳、莊司芳眞、森川紫山、守屋松亭〔賛助員〕六角紫水、渡邊素舟〔顧問〕正木直彦〔主事〕岩瀧尙美

同院第三回展規則拔萃

一、出品點數 一人二點以内とし當て公私の展覽會に於て鑑査を受けざるもの  
一、手数料 出品に對し一點毎に金五十錢、

賣約品は賣價の二割(三越會場費)及戰時特別稅一割を出品者の負擔とす

一、授賞 日本漆藝院賞、推薦の二種とす

日本漆工會 東京市神田區鍛冶町一六ノ二

明治二十三年小川松民、柴田是眞、川之邊一朝、池田泰眞、白山松哉、田邊源助等二十四名の發企により設立。品川彌次郎子初代會頭となり、二代には田中光顯伯宮内大臣現職のまゝ、就任最も力を會勢に致した。爾來略隔年に漆工競技會を開催し、大正十一年迄に十六回を重ねた。而して十二年の震災後同展は一時其開催を休止したが、昭和九年三月より新に現代漆藝品展覽會の名稱の下に全國漆藝展を開催するに至つた。日本特有の蒔繪並に漆に關する傳統保存及進歩を圖り、事業として漆並に漆工業に關する諸般の施設調査及技術上の研究、漆樹栽培の獎勵及其生産調査、圖書標本類の蒐集、展覽會講演會開催等をなす。月刊雜誌「漆と工藝」發行。

〔會頭〕正木直彦〔理事長〕手塚千代吉〔理事〕吉野富雄、都筑幸哉、松田權六、山崎尙三郎、岩瀧尙美  
日本商業美術協會 東京市京橋區銀座三ノ五 古田達賢方

大正十五年設立の商業美術家協會を改組し、昭和九年現稱に改む。健實なる商業美術の發達普及を圖るを目的とし、事業として商業美術展、講習會、講演會等の開催、圖書出版等をなす。

〔理事長〕古田達賢〔理事〕京谷涼二、畫間優佐、田野郁温、伊藤豐、稻垣知雄、他會員百七名。

日本新興南畫院 大阪市天王寺區松ヶ鼻八一

昭和十二年十一月主として大阪並京都在住南畫家に依り結成。十三年五月大阪市立美術館に公募に依る第一回展開催。〔會員〕稻村虹亭、池田十朗、西岡都久路、直原放青、渡瀬凌雲、片山秀陵、片桐白登、横山泰澄、高須白雲、橋徹州、村上蘭田、福田青藤、福與悅夫、船井秋浦、衛藤晴村、秋吉玄圃、佐野蘆水、湯川三舟、平野長彦、須網雨亭、末藤米岡、杉本白象

日本水彩畫會 東京市本郷區駒込神明町七二 望月省三方

故大下藤次郎、丸山晚霞、故河合新藏の三人の經營せる日本水彩畫會研究所を大正二年四月石井柏亭、石川欽一郎、故戸張孤雁等三十七名の發起に依り、改制擴張して新に各派水彩畫家の綜合團體として設立、毎春公募展開催、昭和十四年五月第二十六回展に至る。

〔顧問〕石井柏亭、石川欽一郎、丸山晚霞、眞野紀太郎、南薫造、中澤弘光、〔十四年度委員〕相田直彦、赤城泰舒、荒谷直之介、平井武雄、石井柏亭、石川欽一郎、小山周次、小山良修、春日部たすく、小堀進、丸山晚霞、眞野紀太郎、南薫造、望月省三、水谷景房、中澤弘光、中西利雄、齋藤大、富田温一郎、山中仁太郎

〔會員〕百二十名

第二十六回展規定拔萃

一、出品の種類は水彩、素描、版畫、グワッシユ、パステル、テンペラ等とす

一、出品は會員外は五點まで、出品手数料金二圓納入のこと

一、審査の上會員外出品中の優秀作者に對し日本水彩畫會賞其他の賞を附す  
一、賣約の際は手数料(會員一割、會員外二割)を本會に徴收す

日本彫刻家協會 東京市世田谷區等々力三ノ七五三 黒田嘉治方

昭和十一年五月結成。彫刻の研究團體昭和十四年六月東京府美術館に第三回展開催。

〔會員〕早川義一郎、中村七十、林是、畠村直久、長谷川正雄、野々村一男、大川遼一、黒田嘉治、大嶽茂樹、雨田光平、大須賀力、佐土哲二、奥田勝、加藤顯清、片山義郎、三木凱歌、武井直也、菅沼五郎〔準會員〕伊室正次、金谷興三郎、黒川泰、小柴利孝、三坂耿一郎、白井謙二郎

同會第二回展規定拔萃

一、手数料 出品ハ一點ニ付金五十錢ノ出品手数料ヲ搬入ト同時ニ納入ノ事

一、鑑査 本協會員之ヲ行フ

一、授賞 本會ハ卓越セル作品ニ對シ授賞スル事アルベシ

一、賣約 陳列作品賣約ノ場合ハ手数料トシテ賣價ノ一割ヲ本會之ヲ受ク  
日本彫塑家聯盟 東京市瀧野川區上中里一七二 小倉有一郎方 電駒込一八九八

昭和十三年九月結成。物資動員に依る

青銅使用制限問題に關する對策を講ずるため、新に彫刻十四團體により組織する、同月當局に銅使用許可申請書を提出した。

〔加盟團體〕文展第三部作家協會、東邦彫刻院、構造社、日本美術院彫刻部、瀧野川彫刻研究所、主線美術協會、日本彫刻家協會、國展彫刻部、造型彫刻家協會、日本木彫會、日本美術協會彫刻部、木心舍、九元社、新構造社、朝倉塾、太平洋畫會彫刻部

**日本圖書手工協會** 東京市神田區駿河臺二ノ五 伯爵平田榮二方

昭和六年設立。主として中等學校の圖畫手工科並作業科の教職員を以て組織。東京に本部を置き各府縣に支部を設く。

技能科教育の振興、同科教員の地位擁護及び向上を目的とし、事業として同教育に關する研究調査、展覽會の開催、各地講習會、展覽會等に於ける援助、同科教員の人事斡旋、圖書雜誌の出版等をなす

〔會頭〕平田榮二〔理事長〕三尾與喜藏  
**日本陶藝研究會** 東京市中野區川添町一 電中野五八三五

昭和十四年四月舊東陶會系の作家有志に依り組織。隔月研究會を開き、毎年公募展を開催す。

〔會員〕長谷川怒、星野國太郎、土肥刀泉、塗師淡齋、小倉雅道、大森光彦、小川雄平、唐杉榮四、加藤閑陸、横山朝陽、竹内蘭山、松島一夫、小柳今朝一、湯山青厓、水野清一、鈴木不丈子

## 同會第一回展出品規定抜萃

一、本展覽會ハ左ノ規定ニヨリ、昭和十四年六月三日ヨリ同月十四日マデ、東京府美術館ニ於テ開催ス

一、出品ハ自己ノ製作シタル陶磁器工藝品ニ限ル

一、出品ハ鑑査ヲ行フモノトス

一、優秀ナル作品ニ對シテハ陶藝賞並ニ陶藝獎勵賞ヲ贈ル

一、出品ハ一名五點以內トス

一、出品費約ニ對シテハ實價ノ貳割五分ヲ手數料トシテ本會ニ收ムルコト 但シ加税ノ場合ハ別ニ申受ク

**日本童畫家協會** 東京市豊島區池袋二ノ一〇二一 武井武雄方

昭和二年創立。童畫の向上發達、著作權の擁護等を目的とし、展覽會、出版等をなす

〔會員〕初山滋、川上四郎、武井武雄、深澤省三、清水良雄〔會友〕熊谷元一、福與英夫、佐藤今朝治、木俣武

**日本人形研究會** 東京市神田區豐島町四ノ四 電浪花一五三六

昭和八年人形作家及研究家を以て組織日本人形の向上普及、作家の社會的地位の向上を計るを目的とし、臨時講習、講演會を催し、又人形使節による國際親善に努む。

〔會長〕山田德兵衛〔副會長〕太田德久

〔評議員〕原米洲、海老原吾人、澤栗玉秀、鈴木甲子八、川上南市、菊地吉五郎、瀧澤豐太郎、野口光彦、野口明豊、本川秀月、平田陽光〔會計主任〕樗村豐太郎

**日本人形藝術作家協會** 東京市日本橋區室町三ノ一 東亞人形合名會社內 電日本橋二六三四

昭和十二年創立。人形作家の向上を圖る。

〔會務遂行委員〕鹿兒島壽藏、佐久間瑠甫、佐野光輝、中川光一、野口光彦、堀柳女、山本壽

〔會員〕石井君子、市川阿久理、氏里雅彦、太田通、鹿兒島壽藏、河島茂人、上條蝶子、木下南緒子、黒川多加詩、小杉幸三、五味文郎、佐久間瑠甫、佐野光輝、所河春陽、津田安太郎、中川光一、野口光彦、馬場次郎、林俊夫、福永菊世、堀柳女、山川亨造、山本壽、吉村歌子、綿貫朋泰

**日本人形社** 東京市下谷區上野櫻木町五四 電下谷九二

昭和十年創立。我國人形藝術の向上發達を圖るを目的とす。十三年第三回公募展を開催した。

〔會員〕岡本玉水、平田郷陽、久保勝太郎、平田陽光、吉田順光、磯貝勝之、平田玉陽、野田芳正、宇佐美弘業、川上南市、平野鏡國〔會友〕四名〔賛助員〕吉田永光、久保佐四郎〔顧問〕西澤笛畝、有坂與太郎、笹川臨風

**日本版畫協會** 東京市目黒區駒場八九一 山口進方

大正七年創立の日本創作版畫協會が、昭和六年版畫家の大同團結をはかり改組せるもの。毎年定期の公募展を開き版畫美術の振興と研究に努む。尙文部省外務省の後援で、歐米各地に國際的版畫展を開催した。

〔會長〕岡田三郎助〔逝去〕〔副會長〕山本鼎〔常任理事〕藤森靜雄、逸見亨、前川千帆〔理事〕旭泰宏、石井鶴三、恩地孝四郎、平塚運一、畦地極太郎、山口進〔會員〕六十二名

**日本美術院**〔日、彫〕東京市下谷區谷中上三崎町五二 電下谷二五一〇

明治三十一年十月、當時東京美術學校長を退いた岡倉覺三を盟主とし、橋本雅邦以下二十六名を正員として結成。「新時代に於ける東洋美術の維持並開發」が創立に際しての二大主張であつた。同年十月第一回展を開催、且つ研究所を下谷谷中初音町に設置して後進の養成に努め雑誌「日本美術」を發刊。同三十九年十二月に至り一時東京の研究所を撤廢、同人四名は岡倉覺三と共に常陸の五浦に退去し專念研鑽に努めたが、大正二年岡倉覺三病歿するに及び、直に院の再興を劃し新に院舎を谷中上三崎町に起し翌三年九月開院式を舉行、十月再興第一回展を開催した。再興に當りしは横山大觀、下村觀山、木村武山、安田靉彦、今村紫紅、小杉未醒、辰澤延次郎、笹川種郎、齋藤隆三等で其の中實技者六名を以て同人とした。再興美術院には彫刻部並に洋畫部を設けたが洋畫部は大正九年小杉未醒、山本鼎、倉田白羊等の脱退と共に消滅した。毎年秋期に公募展を開き、又春季には内部の試作展を開く。大正十年米國クリブランド美術館の要請に應じ、

同國主要都市六箇所に巡回展を開き、以降日本美術の海外紹介にも努む。昭和十年帝院改組に際して、同人合議の上新帝院への参加を聲明し、横山大観、安田靉彦、小林古徑、前田青邨、富田溪仙、平櫛田中、佐藤朝山、藤井浩祐の八名が會員に就任した。十一年二月第一回帝展に參加す。六月新任平生文相の試案提示されるに及び、同院出身の會員は（藤井浩祐を除く）他の八會員と共に、同試案を改組の趣旨を没却せるものとなし、當局不信任を聲明して會員を辭任した。同年近藤浩一路、藤井浩祐、武井直也の三名脱退、十二年三月院友の集團として院友俱樂部が結成されたが同年十二名の院友が脱退した。十三年第二十五回展開催。

〔經營者〕横山大観、木村武山、安田靉彦、齋藤隆三、小林古徑、前田青邨、大智勝觀、平櫛田中

〔同人〕（繪畫部）横山大観、木村武山、安田靉彦、小林古徑、前田青邨、大智勝觀、中村岳陵、荒井寛方、山村耕花、筆谷等觀、長野草風、橋本静水、北野恆富眞道黎明、小林柯白、橋本永邦、郷倉千靱、堅山南風、酒井三良、富取風堂、小山大月、奥村土牛、小倉遊龜、田中青坪太田聰雨、中村貞以（彫刻部）平櫛田中吉田白嶺、佐藤朝山、石井鶴三、保田龍門、喜多武四郎、新海竹藏、大内青圃、山本豊市、中村直人、宮本重良、松原松造、村田徳次郎、關谷充（院友）（繪畫部）西村青歸、牛田雞村、兒玉素光、石

原春秋、野生司香雪、奥村藻山、大塚是岐、橋本秀邦、黒田古郷、木下泰、四田觀水、加藤洵綾、歸山千若、奥村玲瓏、野田文雄、跡部白鳥、三石紅樹、中庭煥華、小島一谿、並木瑞穂、眞道秋晴、藤井白映、鈴木大藏、石本光太郎、柴宗廣高橋萬年、中島清、小谷津任牛、村田泥牛、高橋周桑、上田唯章、高橋秀佳、高橋都哉、中島榮刀、岡田臺中、川手青郷鈴木鳥心、島田納郎、岡田雄駱、松永成路、宮崎東里、河村良孝、半田鶴一、我妻碧宇、丸儀太郎、宮田隆子、鶴飼節夫横田仙草、花岡朝生、佐藤耕寛、冬木大丙、小林草悅、八ツ井舜圭、中澤一僑、新井勝利、對馬安正、佐野光穂、岩橋英遠、河内舟人、小島丹彦、半田泰至、鈴木主子、里内久則、安孫子萩聲、久保清子、中島萬木、鈴木三朝、菊池公明、柿沼宗居、岩田光靈、岡本彌壽子、山口蒼輪、關暉明、岡茂以、長井亮、彌川伸二

三村石邦、佐々木京林、鈴木麻古等、小松均、片岡球子、上垣候鳥、山本大慈、狗卷南名雄、酒井とし、郷倉和子、鹽出英雄（彫塑部）大橋敏男、松村秀太郎杵谷精一、寺瀬默山、入江美法、大野隆一、林是、矢崎虎夫、横田七郎、宮本理三郎、辻智堂、長濱虎雄、長谷川豊雄、岡村進、小林章、中平四郎、古藤正雄、土井要輔、河野正造、關長造、柏木康兵加藤泰三、武林與吉、小林貞吾、森豊一〔研究會員〕百十六名

同院第二十五回展規則抜萃

一、出品ハ繪畫及彫塑ノ二種トス  
一、本會ニ出品セントスルモノハ出品物ヲ東京府美術館内日本美術院出品受付事務所ニ差出サルベク本院ハ鑑査ノ上之ヲ本會ニ陳列ス

一、鑑査ハ本院同人ノヲ行フ  
一、出品物ハ總ベテ新製作ニ限ル公私展覽會ニ一たび公表シタルモノハ採ラズ  
一、陳列サレタル作品中特ニ優秀ナルモノアル時ハ詮衡ノ上本院ハ之ニ賞ヲ附スルコトアルベシ

一、賣約サレタル出品ニ對シテハ手数料シテ賣價ノ一割ヲ本院ニ申受ケベシ  
一、本會閉會後引續キ京都或ハ大阪名古屋等ニ於テ開會スルコトアルベキニツキ出品者ハ豫メ之ヲ承認シ置カルベシ

日本美術協會（綜合） 東京市下谷區上野公園櫻ヶ岡 電下谷一九一〇

明治十一年日本美術の衰頹を憂へ河瀬秀治等の同志會して美術品評會を開き、翌十二年會名を選んで龍池會と命名し、佐野常民を會頭に推し明治十六年有栖川宮織仁親王殿下を總裁に奉戴した。而して明治十三年内務省博物館の開設せる第一回觀古美術會を第二回より繼承して開催し明治二十年に至つた。此年十二月規則を改正し、會名をも亦日本美術協會と改め、其後毎年春季二回（彫刻、工藝及書、篆刻）、秋季一回（日本畫）の三回に分ち展覽會を開催するを例とする。昭和十一年度は第百回に相當せるを以て記念の爲各部の綜合展覽會を春季に於て開催した。大正十四年組織を改めて財團法人とした。而して現在其組織は第一（繪畫）、

第二（書、篆刻）、第三（彫刻）、第四（建築圖案）、第五（玉、石、木、竹、牙、角、介甲彫品、木象嵌）、第六（彫金、鍍起、鍍金）、第七（鑄金、鍍金）、第八（陶磁、七寶、玻璃）、第九（漆器、蒔繪）、第十（織物、刺繡）、第十一（寫眞、製版）の十一部より成る。

尙同會列品館は大正十年の竣工で平家建、延坪五百二坪、同會主催展覽會に使用するの外は希望者の依頼に應じ貸館する事がある。

〔總裁〕 高松宮宣仁親王殿下〔會頭〕 伯爵金子堅太郎〔副會頭〕 中田敬義〔專務理事〕 溝口順次郎〔理事〕 男爵東郷安、山崎朝雲、八木岡春山、香取秀眞、板谷波山、千葉風明、大坪正義、今井爽邦、

〔監事〕 三輪善兵衛、杉山令吉〔主事〕 安井易市、評議員二十八名、委員顧問十一名、委員九十九名、名譽會員三十二名特別會員三名、通常會員一千三百三十六名  
日本文人畫協會（日） 東京市小石川區小日向臺町二ノ二九 渡邊雪峯方 電大塚六三三七

文人畫の振興を圖るを目的とし、隨時畫及詩文書等の研究會、講習會、展覽會等を開催す。昭和十一年上野公園日本美術協會に第一回公募展開催。

〔幹事〕 中村不折、渡邊雪峯、中田雲暉大久保楓閣、西丸小園、柚木玉郎〔評議員〕 磯部羽州、伊藤紫雪、島田鶴亭、藤本翠園、辻香塲、松岡吳藍、海上龍子、本尾香園、木村棲雲、吉田苞竹、平原香



雪、入澤華畦、寺山春龍、皆川桐蔭

**日本壁畫會**(日、洋、彫) 東京市澁谷區幡ヶ谷原町八〇〇 安田豊方 電四谷二九三二(呼)

昭和十年十一月結成。壁畫藝術の研究並發表を目的とす。十四年五月銀座青樹社に第三回展開催。

〔同人〕鶴田吾郎、安田豊、武野光瑠、布施信太郎、中村直人

**日本漫畫會** 東京市中野區本町通四ノ一七 牛島一刀方

大正二、三年頃當時の都下新聞社在勤畫家の紙上藝術に飽き足らず、展覽會開催を發企したのが同會結成の起源で、現在ではジャーナリスト以外の青年漫畫家を擁して年一回展覽會を開催する。

〔會員〕池田永一治、池部鈞、牛島一刀、江島初喜、岡本一平、小野佐世男、大森弓磨、帷子進、可東みの助、京屋金介、北澤榮天、寺内純一、小林克己、小峰三四郎、近藤日出造、阪本牙城、清水勘一、志村和男、杉浦幸雄、杉田三太郎、田中比左良、田邊路平、名越國三郎、中村圭助、服部亮英、代田收一、細木原青起、前川千帆、水島爾保布、宮尾しげを、三宅當也、村上鐵太郎、森火山、森島直造、森山三郎、安本亮一、山本奎兵衛、矢崎茂四、和田邦坊、富山まもる、生澤朗、澁谷三止朗

**日本木彫會** 東京市世田谷區田園調布二ノ七二六ノ一 澤田晴廣方 電田園調布二九八一

内藤伸の主唱により大正十三年設立された木彫研究會と其の姉妹會たる木生會とを合併して昭和六年春結成。木彫藝術の研究、發表を目的とし、毎年東京乃至大阪に於て製作展を開く。十四年四月第八回展開催。同展は作品を公募せず會員にて互選の上陳列す。

〔幹事會務員〕内藤伸、佐々木大樹、三木宗策、澤田晴廣、中野桂樹、三國慶一、西村雅之〔會員〕森野圓像、山脇敏男、山口四郎、井口喜夫、橋本高昇、本田德義、大島駒藏、平澤信男、阿井瑞岑、工藤敬三、西田明史、佐伯量良、外會友十三名。見學員二十名

**日本輸出工藝聯合會** 東京市麹町區丸ノ内二丁目九ビル二階 電丸ノ内五三七二、六〇八五、六〇八六

昭和八年創立。同十三年社團法人となる。日本工藝の傳統を表現して且つ海外の用に即せる工藝品の海外進出を助長せしめ一面以て本邦輸出貿易の伸長を圖ると共に他而世界文化の進展に寄與せんとするもの、内外に工藝的商品に關する陳列會を開催し、隨時輸出工藝に關する圖書、印刷物を刊行する。

〔會長代理〕安田祿造〔顧問〕寺尾進、和田三造、鹽谷狩野吉、大島永明、奥田新三〔常務理事〕帝國工藝會、大阪府工藝協會〔理事〕京都工藝美術協會、愛知縣工藝協會、神奈川縣工藝協會〔監事〕東北北海道工藝協會〔參事〕白井義三、齋藤吉臣

**人形藝術院** 東京市品川區南品川三ノ一五一七 電高輪六四七〇

人形の藝術的向上を計るを目的とし、年一回公募展を開く。昭和十二年三月東京白木屋に第二回展開催。

〔同人〕正木直彦、建昌大夢、有坂與太郎、會員は定めず。

**人形すがた會** 東京市杉並區松ノ木町一六八

昭和十一年創立。人形の研究、製作を志す婦人に依つて組織。昭和十三年十一月第三回展開催。

〔顧問〕太田徳久、小村雪信、西澤信敬、花柳壽美、藤懸靜也、山田徳兵衛

**人形白潮會** 東京市下谷區上根岸四ノ五 電根岸三二九

偶人社を昭和十三年三月改組して結成。人形美術の向上を計る。十四年五月第一回展開催。

〔會員〕佐野光輝、佐久間瑠市、所河春陽、小杉幸三、津川安太郎、黒川多賀詩

**ねばつち社**(彫) 東京市豊島區東鴨一ノ二二 志田達三方 電大塚八六二

昭和九年度東美校彫刻科製造部出身者を以て組織。彫塑研究並發表をなす。

〔同人〕井上信道、盤若一郎、片山義郎、富岡泰、吉田寛治、横田文男、鷹巢照久、志田達三、上山薫、畠村直久、酒見恆、中村三郎、中村七十、淺岡重治、大間知

諒之助、眞鍋忠行、富田武雄、松田一郎〔賛助員〕北村西望、建昌大夢

**農村工業協會** 東京市神田區錦町一

の六 電神田四六七二

昭和九年創立。社團法人組織。農村工業の發達を圖るを以て目的とし、これに關する調査研究、生産技術及經營の指導、販賣連絡等の事業を行ふ。雑誌「農村工業」を發行し、展覽會、講演會の開催、講師の斡旋派遣等をなす。

〔會長〕子爵大河内正敏〔顧問〕吉野信次、後藤文夫、伯爵有馬頼寧、結城豐太郎〔理事〕友部泉藏、吉田茂、田澤義鋪、那須皓、上田貞次郎、山本忠興、山口安憲、小平權一、東榮二、安藤廣太郎、佐藤寛次、佐野利器、關口八重吉、鈴木梅太郎〔監事〕寶來市松〔幹事〕増田作太郎

**巴人社**(洋) 東京市下谷區上野櫻木町五〇 中山正義方

洋畫の研究團體。毎春同人展を開催する。會員十三名。

**巴里東京新興美術同盟** 東京市中野區江古田四ノ一五五四 齋藤五百枝方 電中野四四一四

昭和五年創立。巴里に於けるアヴァンガルド藝術を東京に招來し又東京の新興美術を巴里に紹介し一黨一派に偏せざる文化交流を行ふ。昭和七年第一回展開催〔盟員〕齋藤五百枝、峯岸義一〔展覽會委員〕(在佛) アンドレ・サルモン、アン・ドレ・ブルトン、パブロ・ピカソ、ジャン・ミロ、ジュアン・リユルサ、アンドレ・マツソン、ジャン・ド・ボットン、モイズ・キスリング、松尾邦之助、(東京) 川路柳虹、



川邊孝次、森口多里、小城基、柴田勝衛  
葉隠美術協會（綜合） 東京市目黒區  
原町一三五〇 江島信一方

昭和十一年五月創立。佐賀縣出身美術  
家により組織。年一回展覽會開催。

〔會長〕岡田三郎助（逝去）〔副會長〕田  
難五郎（幹事）江島信一〔會員〕（日本

畫）野口謙次郎、山口實、池田幸太郎、  
秀島英磨、久間光一、陣内松齡、辻勝喜、

立石春美（油繪）小代爲重、北島淺一、  
御厨純一、武藤辰平、光石藤太、手塚一

郎、宮地亨、高木背水、松本弘二、副島  
秀生、山口猛彦、山崎善次郎、新宮清彦

甲斐仁代（彫刻）古賀忠雄、松尾仁衛、  
（金工）田難五郎、石田英一、江島信一

土屋杏平

白璧會（洋） 京都市東山區神宮道堀  
池町 山内善三郎方 電上二二五五

昭和二年九月關西美術院關係の同志を  
以て結成。昭和十三年十一月第十六回展

開催。

〔會員〕柴田又太郎、藤井義晴、水清公  
子、戸島孚雄、井上賢三、山内善三郎、

伊谷賢藏、岩崎金雄、錦義一郎、飯田清  
毅、伊庭傳治郎、尾崎悌之助、永井朔夫

松村綾子、津田周平、藤田輝世、中西倪  
太郎、竹内喜助、廣田延造、豐岡孝子

白御會（日） 京都市左京區淨土寺南  
川町一〇三 佐野光穂方 電上七二九七

昭和十二年九月關西在住の日本美術院  
系作家に依り結成。毎月研究會を開き、

春季に、大阪、京都美術館に展覽會開催

〔會員〕石九犬象、岩永蘇香、今井紫悦  
細田謙之助、富川潤一、朝川伸二、川本

朝雄、館岡栗山人、中島榮刀、永友綠樓  
内藤宗純、上田英二、山田冬櫻、山本大

慈、藤井源一、福井末義、小松均、佐野

光徳、三宅淳、鹽見青嵐、持田卓二  
白日會（洋、彫） 東京市下谷區清水

町六 富田温一郎方  
大正十三年春組織。同年六月東京三越

本店に第一回展開催。爾來每年春季に東  
京府美術館に公募展を開き昭和十四年第

十六回展に及ぶ。

〔會員〕（繪畫部）伊藤清永、灰野文一  
郎、鴉川誠一、富田温一郎、大久保喜一

荻野康兒、川村精一郎、加治屋隆二、渡  
部菊二、高畑正明、田中繁吉、竹林順一

長明、中澤弘光、永井武夫、無縁寺心澄  
村上鐵太郎、浮島弘行、野口良一、熊

谷登久平、山田説義、間部時雄、小堀進  
香田勝太、五島甚之介、秋元松子、笹岡

了一、相田直彦、篠原薫、鈴木秀雄、鈴  
木重成（彫刻部）吉田三郎、永原廣、木

村桂二、笹野惠三、田島龜彦、明珍勝友  
岩崎良平

〔會友〕（繪畫部）石橋隆良、伊倉晋、  
渡邊柳次郎、柏木仁平、岡崎金藏、栗原

丈、山森茂、小坂立夫、小泉馨二、兒玉  
道夫、河野浩、朝田進、坂江重雄、南登

志、平川要、關口誠、鈴木民次郎、鈴木  
莊示、飯島八郎、渡部百合子、古川陽子

佐藤龍雄、大石七鳳、荻原英一、青山龍  
水、森靜一、川口榮、島田四郎、谷部正

内田梅吉、古川弘、山田三郎、山口敏夫  
吉田穂、山内邦義、高橋忠彌、門脇耕、

川島實、徳山崑、松岡次賀、結田信、木  
村武男、神田橋信夫（彫刻部）富田匠美

西田信、兒島正典、小田寛一  
同會第十六回展規定抜萃

一、出品點數一人五點迄  
一、出品者は出品手數料として一人に付金二

圓を出品物搬入と同時に納入の事  
一、鑑査は會同人によりて之を行ふ

一、優秀なる作品に對しては白日賞證に獎勵  
賞を贈與す  
一、陳列品賣約となりたる時は手數料として

賣價の二割を本會に申受くる事  
白囀會（洋） 東京市世田谷區大藏町

一八三五 廣本李與九方  
昭和八年一月結成。洋畫研究團體。十

一年五月銀座資生堂に第一回展開催。  
〔會員〕淺井政勝、内田一郎、畑季雄、

廣本李與九、高橋好雄  
白閃社（日） 東京市杉並區永福町四

七〇 渡部香堂方  
昭和十一年十二月舊南畫院有志に依り

結成。十四年七月銀座松坂屋に第三回展  
開催。

〔會員〕石原紫雲、大根田雄國、渡部香  
堂、田中蘭谷、田岡春徑、田能村竹莊、

村上得明、高士陶篁、江川武村、須藤悟  
雲、鈴木石鷗

白朝會（洋） 東京市淀橋區下落合一  
ノ五四〇 杉本貞一方

昭和九年秋舊帝展第二部審査員級有志  
により組織。毎年二回東京に於て展覽會

を開く。十三年三月日本橋高島屋に第四  
回展開催。

〔同人〕金澤重治、金井文彦、吉村芳松  
田邊至、大久保作次郎、安宅安五郎、柚

木久太、杉本貞一  
白鈴會（日） 東京市板橋區中新井町

三ノ二〇七五 石川朝彦方  
昭和五年一月創立。會員の自由なる創

作發表機關。  
〔會員〕石川朝彦、春日井幾代、武田一

路、上田泰芳、中島白陽、前田鳳堂  
八爽會（洋） 東京市澁谷區千駄ヶ谷

五ノ九〇九 石原求龍堂内 電四谷六四  
八三  
求龍堂並に兜屋西川武郎主催の洋畫發

表機關。昭和十二年十月銀座資生堂に第  
一回展開催。

〔會員〕青山義雄、林重義、猪熊弦一郎  
伊藤廉、小磯良平、向井潤吉、野口彌太

郎、曾宮一念  
原町機工藝研究會（工） 福島縣相馬

郡原町 吉井樺家具製作所内  
昭和五年創立。同地方の特産たる櫨材

による工藝品の改善、販路開拓を圖る。  
年二回展覽會開催。

〔會長〕吉井佐吉、會員三十八名。  
汎美術協會（洋） 東京市麻布區霞町

六 小林茂方 電赤坂四四二二  
昭和八年創立。舊稱新興獨立美術協會、

「創作の自由と獨創」を尊重し、從來の  
有鑑査展制度を否定し、作品公募による

無鑑査展を開催。

〔會員〕小林茂、丸野豊、鈴木清作、佐藤文彦、林靜子、八木秀晃、築比地正司、津田昇宏、奥水瑛、牧島省三

阪神彫塑家協會 神戸市葦合區龍池通五ノ八 木村敏一方

昭和十一年創立。二科出品の彫塑家を以て結成。十二年十月第一回展開催。

〔顧問〕上山曉〔會員〕織田久馬一、唐木政一、山根顯一、木村敏一、水野美恵子、妹尾健太郎、山本博一、河合芳男、大西金次郎、河野清治

斑丘社(工) 東京市下谷區上野黒門町六 神戸屋内 電下谷九八一

昭和五年度東美校工藝科入學者を以て組織する。毎年十一月展覧會開催。

〔同人〕井尾敏雄、井上周平、石橋貞治、橋本欣三、長谷川八十吉、近江晃、小川正、和田鴨江、浦波達雄、鹿取一男、金田諒三、柏崎榮助、芳武茂介、高田六藏、中川清一、中村保彦、内田邦夫、乗松巖山本光、松原泰男、松川照二、小池岩太郎、小林達雄、古代幸三、江波戸一郎、寺井直次、赤松義弘、淺田二郎、佐伯義雄、宮島昌男、島田陽次郎、下嶋、廣瀬英五郎、末田利一、進來昇

萬華鏡社 東京市澁野川區西ヶ原五四三 中郷蘭堂方

昭和五年創立。書、畫、篆刻、工藝等各作家の親睦團體。

〔會員〕一噌青水、島海鶴洞、鹿兒島二橋、竹原明風、中郷蘭堂、山田正平、江川碧潭、相原大樹、西川琢盒、小澤天來

横山善信、竹越眞三夫、村雲大機子、小泉繁、荒木柳城、澤田篁齋、北村明道、美校横濱會 横濱市中區庚臺六 宮川香山方

昭和十年五月創立。横濱在住若しくは出身の東美校卒業生、在校生、關係者を以て組織。親睦團體。年一回展覧會を開催。

〔顧問〕矢代幸雄〔幹事〕飯田九一、石野隆、岩井藤吉、鈴木泰、友田昌政、杉浦忠一郎、川本敏郎

美術記者聯盟 東京府美術館内

昭和十四年三月美術雜誌記者が相互の連絡協力をもつて結成。

〔會員〕中川愛水、石川幸三郎、浦崎永錫、湯山昇、芳川起、佐久間善三郎、中山貞夫、大山廣光、菊池芳一郎、高木紀重、猪木卓爾、藤森順三、齋田元次郎

〔幹事〕浦崎永錫、大山廣光

美術工藝大阪巧藝社 大阪市北區河内町一ノ二三 伊藤光秋方 電堀川二六八三

大正十四年創立の精美會を昭和八年會員を増加して現稱に改む。年一回同人の工藝展開催。

〔顧問〕白川朋吉〔會員〕伊藤光秋、伊藤鐵崖、今橋春齋、市川鏡瑠、大原貫學、大森金一、川端近左、田中貞二、瀧波雅堂、楠正多、松澤壽水、松下翠峰、小林美奈、三國丹祐、北野宗三郎、龜文堂正平、江殿功一齋、鈴木玩々齋

美術公正會 東京市澁野川區西大久保

二ノ二五三 電四谷六三二五

昭和十年美術記者に依て組織。美術行政並に美術に關する諸問題を研究し、時宜に應じて其主張を行ふ。パンフレットを發行す。

〔會員〕岩佐新、垣見泰山、浦崎永錫

美術懇話會 東京市下谷區上野公園美術研究所内 電下谷三四八七

昭和六年十一月、美術研究所内に創立。『美術に關する趣味及理解を進め社會に於ける美術の健全なる發達に貢獻する』を以て目的となす。事業として一、美術に關する懇話會の開催、二、展覧會講演會等の美術に關する研究的集會の開催

三、美術に關する出版等を行ふ。昭和七年一月より十二月迄美術研究所の編輯にかゝる月刊『美術研究』を發行したる外、美術研究資料(計四輯)、美術懇話會叢書(計二輯)等を出版してゐる。

〔理事長〕正木直彦〔理事〕荻野仲三郎

川合玉堂、芝田徹心、原邦造、矢代幸雄、和田英作、渡部信〔會員〕百四名

美術雜誌東臺俱樂部 東京府美術館内

美術雜誌編輯者の組織する親睦團體。

〔會員〕藤本詔三、石川幸三郎〔美之國〕、岩佐新〔美術〕、浦崎永錫〔美術界〕、垣見宣修〔美術時報〕、大下正男〔みつゑ〕

美術批評家協會 東京市麴町區麴町四丁目五 電九段一三五三

昭和十一年十月設立。美術各部門の學者、批評家を會員とし、美術批評の確立、進歩的なる文化運動の實踐を目的とす。

その計畫する事業は左の通りである。

(A)機關雜誌『美術批評』の發行、(B)美術圖書館設立、(C)美術行政に對する提案建議、(D)都市美術に對する美術的批評、(E)美術教育に對する指導機關の設立、(F)産業美術に對する指導機關の設立、(G)海外に於ける美術批評家團體との提携、(H)海外に於ける文化團體との資料の交換、(I)一般美術問題に關する講演、(J)美術著作權の制定、(K)國際的文化交換に對する批評、(L)美術コンクールの開催、(M)優秀作品の推薦

〔會長〕子爵吉川元光〔書記長〕柳亮〔事務長〕外山卯三郎〔會員〕(東洋美術)小林剛、蓮實重康、土方定一(西洋美術)外山卯三郎、柳亮、今泉篤男(工藝)ブルーノ・タウト(逝去)(建築)佐藤武夫(工業美術)安田清(裝飾美術)藏田周忠(商業美術)原弘(都市計畫美術)石原憲治(舞臺美術)園池公功(舞踊)蘆原英了(映畫)岩崎起、三雲祥之助(寫眞)仲田定之助、中原實(服飾)フランシス・フエロデイ(裝幀)庄司淺水(チャナル・グラフィック)三浦逸雄

美術文化協會(綜合) 東京市本郷區動坂町三二七 福澤方

主として獨立、二科の所謂前衛派の新進が、さきに獨立を脱退した福澤一郎を中心に昭和十四年五月新に結成した。同會は繪畫、彫刻、寫眞、裝飾、圖案、文

者、批評家を會員とし、美術批評の確立、進歩的なる文化運動の實踐を目的とす。

その計畫する事業は左の通りである。

(A)機關雜誌『美術批評』の發行、(B)美術圖書館設立、(C)美術行政に對する提案建議、(D)都市美術に對する美術的批評、(E)美術教育に對する指導機關の設立、(F)産業美術に對する指導機關の設立、(G)海外に於ける美術批評家團體との提携、(H)海外に於ける文化團體との資料の交換、(I)一般美術問題に關する講演、(J)美術著作權の制定、(K)國際的文化交換に對する批評、(L)美術コンクールの開催、(M)優秀作品の推薦

〔會長〕子爵吉川元光〔書記長〕柳亮〔事務長〕外山卯三郎〔會員〕(東洋美術)小林剛、蓮實重康、土方定一(西洋美術)外山卯三郎、柳亮、今泉篤男(工藝)ブルーノ・タウト(逝去)(建築)佐藤武夫(工業美術)安田清(裝飾美術)藏田周忠(商業美術)原弘(都市計畫美術)石原憲治(舞臺美術)園池公功(舞踊)蘆原英了(映畫)岩崎起、三雲祥之助(寫眞)仲田定之助、中原實(服飾)フランシス・フエロデイ(裝幀)庄司淺水(チャナル・グラフィック)三浦逸雄

美術文化協會(綜合) 東京市本郷區動坂町三二七 福澤方

主として獨立、二科の所謂前衛派の新進が、さきに獨立を脱退した福澤一郎を中心に昭和十四年五月新に結成した。同會は繪畫、彫刻、寫眞、裝飾、圖案、文

者、批評家を會員とし、美術批評の確立、進歩的なる文化運動の實踐を目的とす。

筆等各分野を網羅し、総合的に前衛運動を爲さんとす。明春公募展開催の豫定

【同人】絲岡和三郎、今井滋、坂坂勇、濱松小源太、長谷川宏、濱谷次郎、土井俊夫、小川原脩、大塚耕二、大口登、柿手春三、吉井忠、米倉壽仁、高松甚二郎、高橋迪章、鷹山宇一、土屋幸夫、瀧口綾子、横地康行、塚原清一、永井東三郎、梨本紀美夫、藪内正直、福澤一郎、古澤岩美、小牧源太郎、寺田政明、淺原清隆、阿部芳文、豊光、荒木剛、淺利篤、麻生三郎、安孫子貞人、佐田勝、齋藤義重、北脇昇、三橋健、森堯之、杉全直

兵庫縣美術家聯盟（日、洋） 神戸市元町驛下鯉川筋 畫廊内 電三宮三三五  
昭和五年兵庫縣在住の美術家を以て結成。毎年春季に同人展を秋季に公募展を行ふ外機關誌を發行す。十三年六月第十五回展、同十月第十六回展を神戸大丸に開催。

【評議員】（日本畫）福田眉仙、牛尾桃里、山本大慈、中村久巳（洋畫）鈴木清一、平松武清、山崎隆夫、櫻井政雄、杉浦三郎、小松益喜、元川嘉津美、大石輝一、宮下貞之助、福島金一郎

【囑託】大塚銀次郎、會員百八名。  
兵庫縣美術協會（綜合） 神戸市須磨區離宮前町二番屋敷 畫室社山本廣洋方 電須磨一〇二〇  
大正十一年三月創立。同地方美術の奨励を目的として毎年春秋二回公募綜合展を神戸三越に開く。昭和十三年十一月第

三十回展開催。機關雜誌「畫室」發行。

【會長】兵庫縣知事 【總務】山本廣洋

【展覽會委員】飯塚周悅、土肥若樹、濱田觀、立脇泰山、中野草雲、山下摩耶、鐘ヶ江辰一、前田萩郎、前田賢、菅浦大悅、佐野光穂、宮崎翠壽、伊川寛、中安保、唐木政一、丸毛小平、大串貞美、森月城、小山正雄  
【展覽會顧問】村上華岳（逝去）、濱田葆光、黒田重太郎、國枝金三、廣島晃市、中村岳陵、金島桂華

廣島縣工藝協會 廣島市猿樂町 縣產業獎勵館内 電一八三八、二六三〇  
昭和六年設立。縣下の工藝品製作者並關係者を以て組織。工藝産業の調査、意匠圖案の研究、販賣斡旋、展覽會開催等を行ふ。

【會長】森村義信（副會長）伊藤琢郎  
廣島縣美術協會（日、洋、工） 廣島市猿樂町 縣產業獎勵館内 電一八三八  
大正四年創立。美術及美術工藝の發達を圖るを目的とす。公募展を開催す。昭和十三年五月第二十四回展開催。

【會長】森村義信（副會長）原貫之助、長尾富太郎（主事）堀修  
びゆるて（洋） 東京市豊島區長崎町一ノ二三八三 大山英夫方  
昭和十一年度東美校洋畫科卒業生を主なる會員とする。十二年十一月銀座三味堂に第四回展開催。

【同人】岩田榮、橋本正躬、大山英夫、村田保三、廣瀬正雄、須藤清彦、山中清

一郎

伏虎美術協會（洋） 東京市澁谷區千駄ヶ谷町五ノ九〇二 木下孝則方

昭和十一年設立。和歌山縣下の洋畫の發達獎勵を目的とす。毎春和歌山市に公募展開催。十二年五月第二回展開催。

【會長】和歌山縣知事 【會員】木下孝則、木下義謙、濱地清松、川口軌外、碓伊之助、岡部邦香、村井正誠

服飾美術會 京都市岡崎北御所町三七 山鹿清華方 電上八一二  
昭和十年創立。舊絲工會同人により組織。毎月數回研究會を開き又各地の百貨店に展覽會を開催す。

【會員】石田玉英、井下阿木良、井口紀岩崎眞也、長谷川文平、林雨榮、馬場笛山、星流、小合友之助、太田光嶺、長村華城、横山芙明、田中貞造、田中初雄、田井修一、村田春祿、中村鶴生、山鹿清華、山崎茶平、安竹聖果、福村健、悟道卯一、駒井宗悅、皆川月華、島田勝四郎、平尾周史

福井縣漆藝會 福井縣今立郡河和田村 小林作兵衛方  
福井縣漆工藝の發達を目的とし、漆藝の研究並發表を行ふ。

【名譽顧問】根尾謙兒、山崎覺太郎【會長】小林作兵衛、會員七名  
福井縣美術協會 福井市 福井縣商會陳列所内  
大正十五年創立。福井縣出身並在住の美術家を以て組織。縣下美術及工藝の發達を圖り、毎年展覽會、講習會、講演會等開催の外他展への出品斡旋を行ふ。

【會長】根尾謙兒  
福岡縣工藝協會 福岡市天神町 福岡縣產業獎勵館内  
昭和十一年設立。縣下工藝産業の發達を圖り、工藝に關する調査、展覽會、講習會の開催、工藝功勞者の表彰等を行ふ。「福岡縣工藝展覽會」は同協會員が主としてその開催に當る。

【會長】福岡縣知事  
福岡美術會（綜合） 福岡市因幡町 福岡市通俗博物館内 電一六七五  
大正十二年創立。福岡縣出身並在住の美術家を以て組織。美術の向上に資する爲中央より二科、春陽、獨立等の諸美術展の誘致開催に努め、又毎年會員の綜合展を開催する。

【會長】（市長）畑山四男美（幹事）齋藤陽江、白石久三郎、安部勝三、富田賢四郎【評議員】上田昇邦、祝部至善、永倉江村、白石久三郎、太田嘉兵衛、眞隅太莊、伊藤研之、廣瀬不可止、外幹事四名【會員】八十三名  
福岡縣美術協會（洋） 福岡縣福岡市市役所内  
昭和五年設立。縣下美術の發達を目的として年一回福岡市に於て公募展開催の他、隨時講習會、講演會等を開く。

【總裁】福岡縣知事【會長】佐藤澤  
福岡美術會（日） 東京市本郷區駒込林町七六 角田磐谷方

大正八年、福島縣出身の日本畫家を以て組織。會員の親睦、後進の誘掖に努め、東京郷土に於て毎年展覽會を開催し來り、昭和十四年第十回展に及ぶ。

〔會長〕勝田蕉琴 〔理事〕荻生天泉、太田秋民、酒井三良 〔幹事〕角田磐谷、石塚省三、渡部浩年、酒井白澄、鴻巣一善、須田善二、湯上琢、猪卷清明

文展三部作家協會（彫） 東京市荒川区日暮里町九ノ一〇九七 藤井浩祐方

舊文、帝展、文展に出品の彫刻家に於て所屬團體を持たぬ人々が合同し昭和十四年六月東京府美術館に第一回展を開催した。會員五十名。

〔幹事〕藤井浩祐、吉田三郎、長谷川義起、中川清、木村珪二、白井保春、長川平次、小野田高節、中川爲延

戊辰會（日） 東京市杉並區井荻一ノ四〇 磯部草丘方

昭和二年下町會展覽會の解消後兒玉希望、長谷川光孝兩名の發起により同會を結成、翌三年春第一回展を開催した。爾後毎年一回展覽會を開催。昭和十二年新會員十一名を推薦し、別に會友制を設く。十四年第十回展開催。（同年四月解散）

〔顧問〕川合玉堂〔會員〕飯川九一、伊藤藤浦、磯部草丘、井上恆也、今中素友、石渡風古、花村晃、千嶋華洋、太田一彩、大島佳山、甲斐常一、川崎求俊、高田美一、高田那美、田中針水、田崎美山、長野草風、村雲大櫻子、野添草郷、野澤蓼洲、山下巖、松本姿水、古家苔軒

古屋正壽、藤井霞郷、藤井親文、兒玉希望、佐々木尙文、菊池華秋、水野陽翠、島春潮、清水有聲、鈴木有哉、石塚晃溪、大野重幸、川合白流、神谷飛佐至、田中宏明、中村黎峰、長嶋華涯、藤谷雅泰、福宿一穂、宮部榮芳〔會友〕猪卷清明、林楚人、岡田霞友、若林翠光、渡邊浩年、大工園秋夫、高橋勇次、安川象契、阿部六陽、境野五郎、坂井青泉、澤谷五右、御供器代太、平田虹橋、武谷雪嶺

邦畫教育研究會 東京市赤坂區新坂町四七 大貫鏡心方

昭和十二年結成。東美校日本畫科及び師範科出身の美育家により組織。研究會を開催す。

〔會長〕結城素明〔評議員〕川崎小虎、矢澤弦月、小泉勝爾、山田廉、常岡文龜、多賀谷健吉、松田義之、松垣鶴天〔幹事〕狩野探道、大貫鏡心、大島正記、白井剛夫、石田粧秋、松垣鶴天、淺野秀一、下田舜堂〔會員〕五十名

萌青會（日） 東京市小石川區小日向臺町三ノ五三 長澤美枝方 電牛込二二二

女子美術專門學校の師範科高等科日本畫部の昭和九年度卒業生有志を以て組織。十三年六月第四回展開催。會員九名

北越美術家清盟會（綜合） 東京市板橋區新井町 阿々土社內 電練馬一六八 昭和十三年創立。新潟縣出身の美術家を會員とする親睦團體。年一回同人展開催。

〔會員〕小林古徑、古川北華、小川潮人、安宅安五郎、牧野虎雄、高村眞夫、佐々木泉堂、武石弘三郎、羽下修三、廣川松五郎、山田正平、岡田紅陽

北海道美術協會（綜合） 札幌市北四條西七丁目三 大正十四年創立。爾來每秋展覽會を開催。昭和十三年第十四回展に至る。毎夏講習會を開く。

〔會長〕（北海道長官）半井清〔副會長〕（北海道帝國大學總長）今祐〔理事〕荒瀧實、木下三四彦、小谷義雄、齋藤與一郎、鬼川俊藏、島崎貢、佐野四滿美、竹内武夫〔會員〕（日本畫）本間亮彩、岩田華谷、北山晃文、成田太古、炭光任、小山浩子、島田壽山、小濱紅波、菅原無田、高木黃史、坂本利代、堀井聖峰〔洋畫〕池谷寅一、兼平英示、菊地精二、今田敬一、能勢眞美、中村善策、岡部文之助、高橋北修、田邊三重松、水野佳一、久保守、山田正、小山昇、前田政雄、三浦鮮治、林竹次郎、繁野三郎、石川確、澤枝重雄、能戶幸、朝倉力男、伊藤信夫、竹田信夫、池田雄次郎、國松登、山田義夫、小川マリ子、大森滋、野村英夫、新島清〔彫塑、工藝〕本郷新、山内壯夫、武内收太、本間貞子、本間紹夫

北信工藝協會 各縣廳內 長野、新潟、富山、石川、福井の五縣を以て組織し、各縣廳内に事務所を置く。毎年各縣の交代で、商工省輸出工藝展の出品を目的とする試作品展、一般工

藝展の開催、其他の事業を行ふ。

北方美術協會（洋、彫） 小樽市山ノ上町四四 澁谷政雄方

昭和十年、小樽出身及在住の美術家（主として洋畫彫塑）に依り結成。毎年六月に公募展を、秋に試作展を開催する。尚研究所を兼平英示方に設置し、又雜誌「北方美術」を刊行。

〔會員〕兼平英示、樹田誠一、三浦鮮治、中野五一、中村善策、澁谷政雄、谷吉二郎、竹部武一、山崎省三

北陽會（綜合） 東京市麴町區大手町二ノ二 日清ビル六二一號 電丸ノ内一八七七

昭和八年創立。東美校卒の富山縣出身在京美術家を以て組織。同人展開催。

〔會長〕伯爵前田利男〔副會長〕高廣三郎〔世話人〕佐々木大樹、郷倉千靱、長谷川義起、山崎覺太郎、中谷宏運、五島甚之助、會員五十一名

墨雲社（日） 大阪市西區南堀江通三ノ二二 赤松雲嶺方

大正十一年、赤松雲嶺門下に依り組織。展覽會開催。

〔會員〕四十八名

墨人會俱樂部（日） 東京市世田谷區三宿町七一 電世田谷三七〇九（呼）

昭和十二年二月創立。「日本民族の文化高揚の爲に東洋藝術の再認識と進展とを期するもの相集り、作家の個性を尙ぶが爲に各人主義を採る」。十三年東京、大阪に公募による第二回展を開催した



が、十四年よりは公募をやめ、他よりの出品は會員の責任推舉に依ることにした。尙展覽會は毎年秋季に開催する。

〔會員〕生田花彌、渡邊大虛、瀧秋方、津田青楓、中川一政、草野蘆江、矢野橋村、八百谷大樹、小杉放庵、小松均、菅植彦〔代表者〕渡邊大虛

**馬込美術會** 東京市大森區馬込町東二ノ九七三 大塚金吾方 電大森四〇五〇

昭和二年春設立。馬込町在住美術家の親睦團體。展覽會を開く事三回に及ぶ。

〔會員〕佐藤朝山、橋田庫次、關口隆嗣、馬越樹太郎、小林克己、須藤宗方、服部亮英、川澤八甲、井上白楊、池部一夫、青柳瑞穂、大塚金吾、眞野紀太郎、矢鳥甲子太郎

**斑社(日)** 東京市淀橋區下落合三ノ一四七八 藏原方

昭和十二年、川端畫學校出身者を以て組織せる日本畫研究團體、毎年一回同人展開催。

〔會員〕河村良孝、坊坂倭文明、佐々木越雲、藏原直人、内田浪平、兒玉徹、石井寅雄、土生勝宣、井波良則、長谷川一男、池田憲二、高野秀雄、遠藤章一、岡田明方

**三重縣工藝協會** 三重縣津市中茶屋町 三重縣廳商工課内

昭和九年創立。縣下の工藝品製造業者、販賣者並に工藝組合團體を以て組織。工藝品の改善並に輸出増進を圖り、展覽

會、講習會の開催、取引上の紹介斡旋等を行ふ。

〔會長〕(三重縣經濟部長)松本茂一、正會員百七十名

**未知會(洋)** 東京市小石川區林町四〇 藥師寺孝太郎方 電大塚二八五二

洋畫の研究並發表團體。昭和十三年十二月第六回展開催。

〔會員〕藤岡俊一郎、野寺恆三、里見明正、大畑實、寺田春一、上原誠、齋藤齋、藥師寺孝太郎、本儀信、杉山一正、渡邊武夫、小田忠

**明朗美術聯盟(日)** 東京市板橋區練馬南町一ノ三四八五 狩野晃行方

昭和九年一月青瀧社舊同人落合朗風、川口春波等に依り結成。同年秋第一回展開催、同十二年四月盟首落合朗風急逝しよつて川口春波主宰となり同年九月第四回展を開催した。尙此會期中、同人盟友八名が退會し、又十三年五月同人小林彦三郎他六名が退會した。年一回公募展を開催し、又明朗美術研究所を設置す。十三年九月第五回展開催。十四年落合朗風遺作展を開催。後川口春波退會す。

〔同人〕狩野晃行〔盟友〕二宮幸世〔盟員〕渡邊武行、東條光高、木和村創爾郎、山下昌風、城野三藏〔研究員〕吉田錦穂

同會第五回展規定拔萃

一 作品受付は九月八日午前九時より午後五時迄に出品目録と手数料金壹圓を添へ上野美術館内明朗美術展事務所へ搬入されたし

一 出品點數及び畫幅の面積は任意とす、但し出品作品は適當の裝飾をなすこと

一 作品は鑑査の上之を陳列す、鑑査は同人之に當る

一 作品の賣約されたる場合は手数料として三割を本聯盟に申受く。但し破約の場合は本聯盟に於てその責任を負はす

**木心會(彫)** 東京市荒川區日暮里渡邊町一〇四〇 吉田白嶺方 電駒込二六四〇

大正七年、吉田白嶺の指導により木心合研究所が設立された。昭和十一年第一回展を開催、爾後毎年東京及び大阪に同人展を開く。

〔會員〕吉田白嶺〔指導者〕、松村外次郎、林是、高山九羊、小林貞吾、中村竹男、松原岳南、中村直人、長谷川豐雄、岡村進、藤井隆義

**ハツ手會(工)** 東京市中野區鷺ノ宮木村章平方

昭和十一年創立。彫刻家による工藝品の製作並發表の團體。同年七月第一回展開催。

〔同人〕林是、長谷川豐雄、岡村進、中村直人、黒田嘉治、三枝古都、松村外次郎、木村章平

**八木橋文平あけび工藝指導所** 弘前市山道町一二 電六一八

昭和七年八木橋文平に依り設立。輸出向新あけび工藝品の研究創案並其販路増大に努む。

〔所長〕八木橋文平、所員百五十名  
**山梨美術協會(日、洋、彫、工)** 東京市世田谷區赤堤町一ノ一五四 土屋義郎方

甲府市百石町 山梨日日新聞社内  
昭和十一年結成。山梨縣出身並在住の美術關係者を以て組織。展覽會、講演會を開く。昭和十四年十一月第三回展を甲府市に開催。

〔會長〕(山梨日々新聞社長)野口二郎

〔會員〕六十一名

**幽興會(日)** 東京市淀橋區下落合二ノ六四〇 古川北華方

昭和十一年創立。古川北華を中心とする集で、同人展を開く。十二年六月上野松坂屋に第二回展開催。

〔會員〕橋本關雪、古川北華、正宗得三郎、牧野虎雄、錢瘦鉄、近藤浩一路、中川紀元、藤田嗣治

**羊和會(工)** 東京市豊島區池袋三ノ一三五八 大野光典方

昭和六年、舊帝展第四部入選者を以て組織。金工藝の發達を圖るを目的として毎年日本橋三越に同人展を開催す。

〔顧問〕磯崎美亞、伊藤正見、石田英一、桂光春、海野清、船越春環、北原千鹿、清水龜藏、鈴木美彦〔會員〕磯崎美夫、大關勝盛、大野光典、大木秀春、桂信春、長嶋正親、梅垣景山、山下泰興、府川一信、小杉芳盛、小林盛良、有田利章、宮本猛、森田一靜、鈴木春盛

**洋風版畫會** 東京市瀧野川區西ヶ原町三六一 渡邊光徳方

昭和四年十二月創立。主としてエッチング及石版畫の團體。毎年一回展覽會を開く。



〔會員〕田邊至、吉田久繼、織田一磨、中村研一、及川康雄、間部時雄、小磯良平、猪熊弦一郎、永坂春雄、大久保作次郎、寺崎武雄、渡邊光徳

横濱美術協會（日、洋、販） 横濱市中區弘明寺町三一〇 志村計介方 電長者町一二五七

昭和七年創立。横濱在住の日本畫家及洋畫家を以て組織。年一回日本畫、洋畫版畫の公募展を開く。十三年第七回展を開催した。

〔會長〕横濱市長〔會員〕五十九名〔無鑑査〕三名

〔第七回展査員〕（洋畫）田邊嘉重、川村信雄、中村德次郎、泉治作、松島一郎、志村計介、加山四郎、岩田榮之助、山下品藏、中村茂好（日本畫）牛田雞村、小島一齋、中島清、中庭援華、並木瑞徳、木下春、新井勝利、飯田九一

渚澤會（工） 京都市伏見區桃山宗和園

昭和四年創立。澤田宗山の指導を仰ぐ京都陶磁器作家の團體。展覽會、研究會等を催す。

〔會長〕澤田宗山〔幹事〕松本石亭、鈴木則司、伊地知仁郎、横山瑞祥、薮部清里南會（洋） 京都市中野區江古田二ノ九三一 鈴木良三方 電落合長崎二五六九（呼出）

昭和十一年結成。嘗て巴里に於て共に修學せる人々。隨時作品展開催。

〔會員〕勝間川武夫、能勢頼太郎、大橋

了介、鈴木良三、高林和作、田村憲、和川清

離騷社 京都市板橋區常盤臺一ノ六四九七 西澤信敬方 電板橋一二〇一

大正九年創立。會員の親睦を圖ると共に、研究會、見學旅行等を催して修養に資せんとする集である。

〔幹事〕西澤信敬、金井紫雲、石川昂水、飛田周山、田口黃葵、會員三十七名

陸軍美術協會（日、洋、彫） 京都市日本橋區吳服橋二ノ五 春秋ビル三階 電日本橋一七七

昭和十四年四月創立。主として戰役、事變に従軍せる畫家及び彫刻家を以て組織す。會員の作品を通じ、適切な方法により軍事美術に關する獎勵普及を計り、陸軍と協力して興亞國策に貢獻す

〔會長〕松井石根〔副會長〕藤島武二〔總務〕石井柏亭、橋本關雪、中澤弘光

〔委員〕伊原宇三郎、栗原信、清水登之中村研一、日名子實三、向井潤吉、吉岡堅二〔監事〕大野隆徳、鶴田吾郎〔幹事〕住喜代志〔會員〕（前出氏名ヲ省ク）朝井閑右衛門、荒井陸男、荒木十畝、一色五郎、江藤純平、柏原覺太郎、鹿子木孟郎

川島理一郎、川端龍子、熊岡美彦、小磯良平、小早川秋聲、小林萬吾、五味清吉、眞道黎明、鈴木榮二、瀬野覺三、田中佐一郎、永地秀太、中村直人、裕伊之助、長谷川榮作、長谷川春子、福田豐四郎、南薰造、南政善、矢野鐵山、吉田三郎、吉田博、横江嘉純、脇川和

立光會（洋） 假事務所 大阪市北區鬼我野町七 胡桃澤方

昭和八年六月創立。關西に於ける東光會出品者及同好者を以て組織。十四年第四回展開催。

〔講師〕齋藤與里〔幹事〕岩中徳次郎、家永麒三郎、石田勝重、西寺鐵舟、小栗文雄、川本浩三、河井達海、吉村藤作、多田俊彦、辻利平、胡桃澤澤一、山崎萬壽夫、小池光三、圓城寺泥、三田村策、柴谷宗治、普通會員六十名

柳美會（工） 京都市伏見區桃山 宗和園内

大正六年京都柳池校開校五十年記念に同校關係の工藝家を以て創立。毎年展覽會開催。

〔理事長〕澤田宗山〔理事〕泰藏六、吉田長春、青木俊勝

聊娛會（洋） 京都市淀橋區下落合四ノ一六二三 大給近清方

大正八年創立。故黒田清輝子及南部利淳伯及び故小笠原長幹伯の發意に依り華族及び華族籍にありたる者を以て組織せる洋畫愛好者の團體で、年一回展覽會を開く。昭和十一年新宿伊勢丹に於て第十二回展を開いた。

〔代表者〕徳川義恕〔幹事〕子爵織田信大、子爵松平定晴、大給近清、會員十九名、客員十五名

綠卷會（洋） 京都市杉並區東荻町六九神津方 電荻窪二四四三

神津港人が主宰する洋畫團體。昭和十

四年五月公募により東京府美術館に第一回展を開催した。

〔會員〕神津港人、村上誠、大澤左一、佐藤利平、内堀一雄、石黒義保、平井爲成

緣人社（彫） 京都市下谷區谷中上三崎南町六〇 伊藤鉦次方

昭和八年度東美校彫刻科製造部卒業生を以て結成。毎年六月展覽會開催。

〔會員〕岩崎良平、伊藤鉦次、西田信、星野宣、小田寛一、川口信彦、漆原馬須雄、宇佐見庄一、新井喜惣治、青柳利男、明田川孝、北青史

綠蠟彫刻會（彫） 京都市豊島區千川町一ノ三一七〇 中野昂方

舊稱大東彫刻會。大正十二年以降の東美校木彫部卒業生有志を以て組織。關野聖雲の彫刻界に於ける主張を襲賛せんとす。會員六十名

留加會（洋） 京都市神田區駿河臺二ノ五 文化學院内 電神田三三三九

昭和三年創立。文化學院美術部出身者有志を以て組織す。年一回展覽會を開催する。

〔會長〕石井柏亭〔名譽會員〕文化學院美術部現舊職員〔普通會員〕文化學院美術部出身者有志

瓊瑤畫社（日） 京都市豊島區池袋二ノ九七一 浦田方

故松岡映丘の門下生有志を以て昭和九年結成。新日本畫の創作を目的とす。十三年六月銀座資生堂に第三回展を開催し

七。

〔會員〕岡田昇、高山辰雄、若海鯨一郎、浦田正夫、山本丘人、須田善二、杉山寧、麗交會(工) 京都市中京區富小路四條上ル 龍文堂安之介方

昭和十一年三月、東京及び京都の工藝界の中堅作家十九名により結成。相互の研究を目的とす。

〔會員〕各務鐵三、香取正彦、吉田醇一郎、高野松山、田村泰二、海野建夫、信田洋、山本自雄、北原三佳、富之原謙、(以上東京) 伊東陶山、井田宣秋、龍文堂安之介、小川文彦、加藤宗巖、楠部彌式、淺見五郎助、道林俊正、平館會

歷程美術協會(日) 東京市世田谷區上馬町一ノ八六六 山岡良文方、京都市東山區澁谷西入ル下梅谷町 東出方 崎隆方

昭和十三年六月創立。新日本畫の創作を趣旨とす。展覽會を開く。

〔會員〕馬場和夫(十四年十月離脱)、船

田玉樹(十四年八月離脱)、岩橋永遠、田口壯、山岡良文、丸木佐里(十四年八月離脱)、江崎孝坪、村山東英、蒔田晴成〔會友〕小森龍太郎、小山浩子、佐々木勝磨、野原茂夫、山崎隆

連袖會(洋) 横濱市神奈川區三ツ澤下町二九 久野方

昭和十二年二月安井會太郎門下生に依り組織。十四年三月銀座青樹社に第二回展開催。

〔會員〕奥田郁太郎、小野末、笠置イヅ子、片多三吉、金子博信、狩野壽一、高田誠、仲田菊代、中村琢二、二宮雪夫、高見耿太郎、久野昌康、本郷惇、三浦俊輔、鷺田一太、渡邊正太郎、渡邊宗一

LES LILAS (レリラ)(洋) 東京市王子區稻付町五ノ九八二 宮川仁方

昭和十二年度の東美校油繪科卒業生を以て組織。毎年同人展開催。

〔會員〕高階重紀、高見澤藤治、成井弘

文、松下義晴、宮川仁、椎野修、關峯畫塾(日) 東京市大森區池上本町一八六

はじめ深水畫塾と稱す。日本畫の指導達成を旨とし、月一回研究會を開く。

〔主宰〕伊東深水(顧問) 渡邊泰次、小林源太郎(幹事) 遠藤燦可、塾員約百名

六潮會(日、洋) 東京市目黒區大原町一六二 横川毅一郎方

昭和六年七月成立。作家及び批評家の集で、交友を主とする研究團體。十三年五月日本橋區三越に第七回展を開いた。

〔會員〕中村岳陵、中川紀元、山口蓬泰、牧野虎雄、木村莊八、福田平八郎、外狩素心菴、横川毅一郎

六萌會(洋) 横濱市鶴見區東寺尾町一六〇七 鳥羽宗雄方

昭和八年度東京美術學校西洋畫科出身者有志を以て組織。展覽會を開く。

〔會員〕鳥羽宗雄、楡原健三、中村新次

郎、上田久之、小林三郎

綠明莊(工) 東京市中野區川添町一

大森光彦方 電中野五八三五

昭和七年創立。一藝一匠の工藝研究並製作發表團體。每年初夏日本橋高島屋に展覽會開催。

〔同人〕飯塚琅玕齋、池田美春、原田臺山、富樫光成、大森光彦、川島東洲、梅村豊舟、山口淨雄、安藤文雅、櫻井霞洞、木下泰叢、篠秀一

和光會(工) 東京市京橋區銀座四丁目 服部時計店內

昭和九年設立。十三年十二月第五回展開催。

〔會員〕岡田三郎助(逝去)、和田三造、津田信夫、沼田一雅、高村豊周、廣川松五郎、山崎覺太郎、河村靖山

エツチング 月刊、西田武雄編輯、日本エツチング研究所發行、麴町區麴町一ノ三、電九段五一四、二五五

畫室觀 月刊、高木紀重編輯、畫觀社發行、豊島區要町一ノ三ノ八、五〇〇

畫室 月刊、山本廣洋編輯、畫室社發行、神戸市須磨區離宮前町二番屋敷、電須磨一〇二〇、一四〇

藝術 月刊、中川愛永編輯、大日本藝術協會發行、本郷區湯島天神町二ノ二、電下谷一六〇八、月五〇〇

藝術日本 月刊、中村武平編輯、東京美術觀交會藝術社發行、小石川區西江戸川町一八電小石川四三二〇、五〇〇

現代美術

月刊、太田真一編輯、現代美術社發行、中野區野方町二ノ一二六八、電中野三五五七、五〇〇

造形藝術 月刊、藤本韶三編輯、造形藝術社發行、世田谷區世田谷二ノ二〇七七、一四

アトリエ 月刊、福山威之助編輯、アトリエ社發行、牛込區西五軒町三四、電牛込四三六〇、一四五〇〇

阿々々 月刊、藤川薫編輯、阿々々社發行、板橋區中新井町三丁目一九三四、電練馬一六八、一四〇

美術家團體一覽

レ・ワ・定期刊行物一覽

五三

定期刊行物一覽

五四

丹 青	五〇錢 四回、一水會編輯、教育美術振興會發行、神田區一ツ橋二ノ九、電九段二六六、二四	美術評論	月刊、藤森順三編輯、美術評論社發行、牛込區矢來町二九、電牛込一三二三
塔 影	月刊、齋田元次郎編輯、塔影社發行、麹町區二番町一一番地ノ一、電九段三三四〇、一四二〇錢	美術文化	四回、淺原清隆編輯、美術文化協會發行、本區鄉動坂町三二七、二五錢
南 畫 鑑 賞	月刊、石塚彰吾編輯、南畫鑑賞會發行、麹町區四番町四番地、電九段六二〇、四〇錢	美 之 國	月刊、石川幸三郎編輯、美之國社發行、豐島區雜司谷町七ノ九四七、電牛込七四二七、一四五〇錢
日 本 美 術	月刊、吉田久次郎編輯、日本美術社發行、名古屋市中村區西日置町七ノ一、電西二九三五(呼)、四〇錢	文 藝 日 本	月刊、牧野吉時編輯、文學と美術社發行、麹町區一番町元園會館、電九段三五〇九、五〇錢
日 本 美 術 新 報	月刊、猪木卓爾編輯、資文堂發行、麹町區九段一ノ一四、電九段二、七一一、月一圓	み づ 糸	月刊、大下正男編輯、春島會發行、小石川區關口駒井町三、電牛込二〇四三一圓五〇錢
白 日	月刊、湯山昇編輯、白日社發行、澁谷區代々木上原町一二九五、電澁谷三四六、六〇錢	工 藝	月刊、日本民藝協會編輯發行、神田區淡路町二ノ七小口ビル、電神田二〇一〇、年一五圓
美 術	四回、岩佐新編輯、美術發行所發行、澁谷區代々木上原町一一四九、電澁谷九四〇、二四五〇錢	工 藝 ニ ュ ー ス	月刊、商工省工藝指導所編輯、工業調査協會發行、神田區旅籠町三ノ四、三五錢
日 本 美 術 新 聞	旬刊、高橋正男編輯、日本美術新聞社發行、日本橋區人形町三丁目稻垣ビル	人 形 賦 産 業 工 藝	月刊、堀田松三郎編輯、人形藝術院發行、品川區南品川三ノ一五一七、四〇錢
美 術 往 來	月刊、猪木卓二編輯、資文堂發行、麹町區九段一ノ一四、電九段二七一五、五〇錢	創 作 工 藝	月刊、上田儀一編輯、産業工藝社發行、大阪市浪速區惠美須町二ノ一四六、電戎一九四、七五一、三〇錢
美 術 街 界	月刊、浦崎永錫編輯、美術界社發行、豐島區駒込町三ノ四〇三、一〇錢	帝 國 工 藝	月刊、山田義郎編輯、創作工藝獎勵會發行、芝區田村町一ノ一二、電三田一二一、一〇錢
美 術 グ ラ フ	月刊、大山廣光編輯、美術街社發行、牛込區矢來町五九、電牛込七三二三、五〇錢	汎 工 藝	月刊、宮下孝雄編輯、帝國工藝會發行、芝區西芝浦東京高等工藝學校内、電三田一一五六、一一五八、五〇錢(休刊中)
美 術 時 代	月刊、長谷川放心編輯、日本洋畫協會發行、麹町區飯田町一ノ一一、五〇錢	輸 出 工 藝	月刊、柴崎俊吉編輯、汎工藝社發行、大阪市住吉區住吉町一三〇〇、三〇錢
美 術 時 報	月刊、石田幸太郎編輯、美術時代社發行、本區區元町一ノ一五、電小石川二六二一、一圓	建 築	隔月、池田美明編輯、日本輸出工藝聯合會發行、麹町區九ノ内二丁目九ビル内、電九ノ内五三七二、六〇八五、三〇錢
美 術 春 秋	月刊、垣見寛修編輯、美術時報社發行、淀橋區西大久保二ノ二五三、電四谷六三二五、月一圓	建 築 雜 誌	月刊、菅原肇編輯、建築學會發行、京橋區西銀座三ノ一、電京橋一二二三、一二三八、一圓
美 術 世 界	月刊、芳川赴編輯、美術春秋社發行、豐島區西巢鴨二ノ二三五八、電大塚五七六三、三〇錢	建 築 世 界	月刊、鈴木增雄編輯、建築世界社發行、京橋區京橋二ノ二ノ四、電京橋一五七五、八〇錢
美 術 通 信	月刊、木村重夫編輯、美術世界社發行、中野區千光前町二五、二〇錢	國 際 建 築	月刊、小山正和編輯、國際建築協會發行、麻布區市兵衛町二ノ四六、電赤坂四九四一、七〇錢
美 術 乃 日 本	月刊、佐久間善三郎編輯、日本美術通信社發行、蒲田區蓮沼町一三四、月一圓二〇錢	住 宅	月刊、小林清編輯、住宅改良會發行、大阪市西區土佐堀船町八、電土佐堀二三二九、五〇錢
美 術 日 本	月刊、繪畫教育改進、芳川赴編輯、繪畫教育會發行、小石川區小日向水道町五三、電大塚六〇六八、五〇錢	新 建 築	月刊、吉岡保五郎編輯、新建築社發行、京橋區寶町一ノ六、電京橋四七五二〇、一圓

日本建築士

月刊、小瀧文七編輯、日本建築士會發行、京橋區銀座西三ノ一建築會館內、電京橋六二〇、四〇錢

教育

繪畫教習

月刊、芳川越編輯、繪畫教習會發行、小石川區小日向水道町五三、電大塚六〇六八、五〇錢

學校美術

月刊、後藤福次郎編輯、學校美術協會發行、荒川區日暮里町三ノ一九六、電根岸一〇三〇、三〇錢

教育美術

月刊、佐竹林藏編輯、教育美術振興會發行、神田區一ツ橋二ノ九教育會館內、電九段一六六、三〇錢

新興美術

月刊、石野隆編輯、新興美術協會發行、豐島區堀ノ内三〇、電大塚二五一八二〇錢

圖畫と手工

月刊、三浦直政編輯、錦港會發行、世田谷區田園調布二ノ七〇九、三〇錢

美術

月刊、圖書教育獎勵會編輯、晚成處發行、下谷區櫻木町二、三〇錢

圖書室通信

月刊、河合博編輯、圖書室通信社發行

報告書類

月刊、荒城季夫編輯、國民美術協會發行、本郷區湯島切通坂町五一、非賣

國民美術

月刊、大日本窯業協會編輯發行、京橋區銀座西四丁目銀座商館內、電京橋五一九

東京美術

二回、高村豐周編輯、東京美術學校友會發行、非賣

日本美術協會報告

月刊、水野常吉編輯、日本博物館協會發行、下谷區上野公園東京科學博物館電下谷六四〇〇

博物館研究

月刊、水野常吉編輯、日本博物館協會發行、下谷區上野公園東京科學博物館電下谷六四〇〇

古美術關係

月刊、佐伯啓造編輯、龍谷大學發行、奈良縣法隆寺村法隆寺二六八、電法隆寺四、每卷一圓二〇錢平均

以可留我

月刊、佐伯啓造編輯、龍谷大學發行、奈良縣法隆寺村法隆寺二六八、電法隆寺四、每卷一圓二〇錢平均

浮世繪界

月刊、日本漆工會編輯發行、澁谷區常盤松町四八、七〇錢

漆と工藝

月刊、日本漆工會編輯發行、澁谷區常盤松町四八、七〇錢

瓜蒞

月刊、日本漆工會編輯發行、澁谷區常盤松町四八、七〇錢

學藝叢書

月刊、木曜會發行、牛込區二十勝町三二、非賣

京都市美術青年會誌

月刊、中西勇太郎編輯、京都市美術青年會發行、京都市御池幸町東入、電駒込二四九五、五〇錢

藝術資料

月刊、金井紫雲編輯、芸興堂發行、京都市中京區寺町二條南、一四二〇錢

國史

月刊、瀧精一博士監修、村山長舉後援、名義人村山句吾、國華社發行、麻布區市兵衛町二ノ一、電赤坂八五二、五〇錢

好古寶

月刊、小原銀之助編輯、日本美術社發行、牛込區岩戶町一一、五〇錢

史蹟と古美術

月刊、國史普及會編輯發行、京都市七條通堀川西人、田住昇、電下一五七五（目下發行停止中）

史迹と美術

月刊、川勝政太郎編輯、スズカケ出版部發行、京都市島九通二條南人、電二二二九、四〇錢

書畫骨董雜誌

月刊、大岡純太郎編輯、書畫骨董雜誌社發行、牛込區南山伏町一二、電牛込二九〇五、三五錢

書道

月刊、藤原光男編輯、泰東書道院出版部發行、日本橋區江戶橋三ノ三、六〇錢

茶わん

月刊、遠藤敏夫編輯、茶わん發行所、日本橋區江戶橋二ノ八松慶ビル、寶雲舍內、電日本橋二四五六、二〇八一、八〇錢

陶磁

隔月、東洋陶磁研究所編輯發行、日本橋區江戶橋二、松慶ビル二階、五〇錢

東洋建築

月刊、相模書房發行、日本橋區通二丁目四、日本橋ビル（休刊中）

東洋美術

四回、小川晴鳴編輯、飛鳥園發行、奈良市奈良帝室博物館、電八八七、二圓

なかの樂

不定、香取正彦編輯、七日會發行、瀧野川區田端五〇〇

寧樂

不定、栗原武平編輯、寧樂發行所發行、奈良市東大寺能松院、二圓

日本美術協會報告

四回、安井易市編輯、日本美術協會發行、下谷區上野公園櫻ヶ岡、非賣

美術研究

月刊、美術研究所編輯發行、下谷區上野公園美術研究所內、電下谷三八八七二圓五〇錢

美術及美術史

二回、內藤藤一郎編輯、日本美術同好會發行、大阪市住吉區天下茶屋二ノ二一、三五錢、休刊中

佛教美術

不定、源豐宗編輯、佛教美術社發行、京都市左京區北白川伊織町四五、電上二〇四七、不定

定期刊行物一覽・美術商一覽

五六

寶雲 四回、森嶋編輯、實雪刊行所發行、京都市左京區岡崎如堂前町二、三、四〇錢

星岡 月刊、林根木編輯、便利堂出張所發行、京橋區銀座西五丁目五、五〇錢

燒もの趣味 月刊、鈴木伸樹編輯、學藝書院發行、麴町區二番町六、六〇錢

大和志 月刊、島本一編輯、大和國史會發行、奈良縣郡山御町一九八、三〇錢

夢殿 年二回、佐伯啓造編輯、船故郷會發行、奈良縣法隆寺村法隆寺二六八、電法隆寺四、四圓平均

林泉 月刊、重森三玲編輯、京都林泉協會發行、京都市左京區吉田下大路町四五、三〇錢

考古學及歷史關係

貨幣 月刊、田中謙編輯、東洋貨幣協會發行、荏原區戸越町二九一、七五錢

考古學雜誌 東京考古學會編輯發行、大阪市住吉區阿倍野筋三ノ一〇坪井良平方

考古學叢誌 月刊、考古學會編輯、吉川弘文館發行、京橋區京橋二ノ一、六〇錢

國史論叢 三森定男編輯、考古學研究會發行、京都市左京區吉田近衛町二六

國史同願會紀要 四回、國史學會編輯發行、澁谷區若木町九、國學院大學內、六〇錢

四天王寺 國史同願會編輯發行、赤坂區青山南町六ノ一五六隈侯爵邸內

史苑 月刊、奧田慈應編輯、四天王寺事務局發行、大阪府天王寺區元町、三〇錢

史淵 四回、立教大學史學會編輯發行、豐島區池袋三、七五錢

史學研究 二回、九大史學會編輯、富山房發行

史學雜誌 三回、三田史學會編輯發行、芝區三田慶應義塾大學文學部研究室內、一圓

史學觀 月刊、廣島史學研究會編輯、中文館書店發行、牛込區辨天町一七四、六〇錢

史學雜誌 月刊、史學會編輯、富山房發行、神田區神保町、五五錢

史學雜誌 月刊、早稻田大學文學部岸畑久吉編輯、早稻田大學史學會發行、澁橋區戸塚町、五〇錢

日本畫・其他

阿部克平 東京市澁橋區 修町五ノ一八、電北濱二七二四

美術商一覽 (五十音順)

淺井清之助 京都市東山區新門前通大和路東入西之町、電祇園二二六

淺川直太郎 京都市上京區西堀川通一條角、電西陣四六九八

淺野梅吉 合名會社竹石

山房淺野商店、大阪府東區平野町四ノ五六、電北濱五〇八

淺野萬藏 大阪府東區今橋三ノ一五、電北濱六二一一

史蹟名勝天然紀念物 月刊、矢吹活譯編輯、史蹟名勝天然紀念物保存協會發行、麴町區霞ヶ關三ノ四、文部省宗教局保存課內

史潮 四回、大塚史學會編輯、刀江書院發行、神田區駿河臺三ノ六、八〇錢

史林 四回、京都帝國大學文學部內史學研究會編輯、內外出版印刷株式會社發行、京都市西洞院通七條南入、九〇錢

東方學報 一回、東方文化學院編輯發行、小石川區大塚町五六ノ一五

東洋學報 四回、東洋協會學術調查部編輯發行、麴町區內幸町二ノ一、電銀座四〇三九一圓五〇錢

東洋史研究 六回、京大文學部陳列館內東洋史研究會編輯、榮文堂發行、京都市中京區寺町通九太町南入

鴨台史報 大正大學史學會編輯發行、豐島區西巢鴨四ノ五三〇大正大學史學研究室

立正史學 立正大學史學會發行、品川區東大崎四丁目

龍谷史壇 龍谷大學史學、佛教史學會編輯發行、京都市七條、龍谷大學史學研究室

歷史學研究 月刊、歷史學研究會編輯發行、赤坂區青山北町六ノ四四五

歷史教育 月刊、四海書房編輯發行、豐島區巢鴨町宮下一六九四

歷史公論 月刊、雄山閣編輯發行、麴町區富士見町二ノ八

歷史地理 月刊、花見朔已編輯、日本歷史地理學會發行、神田區錦町三ノ二二、四五錢

其他

思想文化 月刊、長田幹雄編輯、岩波書店發行、神田區一ツ橋二ノ三、五〇錢

月刊、大鐵出版株式會社編輯發行、本郷區本郷三丁目、二〇錢

月刊、東北帝國大學文科會編輯、岩波書店發行、神田區一ツ橋二ノ三、五〇錢

朝岡善四郎 合資會社精華堂代表社員、東京市日本橋區芳町一ノ六、鈴木とき方

味岡由兵衛 合名會社味岡商店代表社員、植田、名古屋市西區袋町五ノ五、電本局一二三

荒尾重吉 大阪府南區南炭屋町二六、電南六二八四

伊藤平藏 東京市世田谷區岡本町八〇五、電玉川五七

伊藤高太郎 大好堂、東京



市日本橋區通三ノ一、電日本橋三九〇九

伊藤清治郎 東京市本郷區

湯島天神町一ノ四、電下谷四九八

伊藤信藏 推古堂、東京

市日本橋區通二ノ五、電日本橋四五二

伊藤喜兵衛 合名會社萬壽

商店、名古屋市東區龜屋町一ノ二四

電東二八一

猪木卓爾 美術往來社、

東京市麴町區九段一ノ一四ノ四、電

九段二七一五

池田金太郎 合資會社銀座

美術園代表社員、東京市京橋區銀座

西五ノ五ノ一、電銀座三〇〇六

池戸宗三郎 合名會社池戸

宗三郎商店、大阪市東區今橋三ノ一

二、電北濱六五、三三二

石井柳助 合資會社石井

三柳堂代表社員、東京市京橋區京橋

一ノ四ノ一、電京橋四八

石川貞吉 東京市小石川

區同心町二五、電小石川二五〇〇

石野力藏 山澄商店、東

京市日本橋區濱町一ノ一五、電茅場

町四五七五

石橋幸次郎 東京市日本橋

區通三丁目六ノ五

石黒久呂 石川縣金澤市

十間町五三

磯上青治郎 大阪市東區瓦

町一ノ五、電北濱一二二八

一色利厚 松利商店、東

京市芝區南佐久間町二ノ一〇、電芝

四〇一九

泉藤吉 合名會社泉藤

吉商店、大阪市東區高麗橋五ノ一九

電北濱五一二一

泉岡善三郎 大阪市南區櫻

屋町一四、電南五一三

稻垣一六 東京市日本橋

區箱崎町二ノ二五、電茅場三三八

七

稻垣利恭 萬泰堂、東京

市本郷區湯島天神町二ノ三〇、電下

谷七六〇六

今井敬藏 合名會社今井

商店代表社員、京都市下京區四條

屋町東人奈良物町三六三

今井長兵衛 京都市中京區

六角通數屋町西人、電本局八〇二

今井鐵藏 名古屋市中區

針屋町二丁目、電東二〇三八

入江熊吉 春樹堂、大阪

市東區瓦町三ノ一、電北濱六〇八九

岩井慶三郎 東京市麻布區

飯倉町四ノ一七、電赤坂四五

岩上虎吉 大和屋、東京

市日本橋區兩國六ノ六、電浪花九五

八、五四八二

乾益次郎 金澤市上今町

八、電金澤九七七

市本郷區湯島天神町二ノ三七、電下

谷一九八八

宇田川熙 東京市澁谷區

原宿一ノ二二八

白井吉之助 大阪市東區伏

見町二ノ一九、電北濱三〇〇五

內山豐男 揚音、金澤市

中町三四、電金澤四八五

梅本長太郎 宇治長、名古

屋市西區島田町三ノ五、電本局四〇

一〇

【才】

小川義一 東京市神田區

金澤町一、電下谷五四一六

小川清一 東京市下谷區

西黑門町五、電下谷七二四一

小川藤吉 東京市澁谷區

羽澤町八〇、電青山二二四五

小川文吉 東京市小石川

區大塚窪町二四、電大塚五一七一

小高眞藏 合資會社大勝

商店代表社員、東京市本郷區湯島切

通町一、電小石川五九〇四

小野春吉 平野屋、東京

市京橋區銀座八ノ四、電銀座四四一

〇

尾崎榮次郎 合名會社尾崎

榮次郎商店、大阪市東區南久寶寺町

四ノ五六、電船場一四〇六

大川源 東京市本郷區

春木町二ノ一五、電小石川四一〇八

商店、東京市芝區芝公園第五號地一

三、電芝二六二〇

大田清造 清眞堂、東京

市麻布區新網町一ノ六九、電赤坂一

九四八

大坪 大東京市芝區神

谷町二八

大沼政吉 靜觀堂美術店

東京市日本橋區茅場町一ノ六、電茅

場町五一六

太田龜三郎 東京市澁谷區

代々木富ヶ谷町一四六五

太田佐七 合名會社太田

佐七商店、株式會社大阪美術俱樂部

取締役社長、大阪市東區伏見町三ノ

二三、電北濱一五七二

岡田祝三 東京市下谷區

東黑門町五、電下谷七三〇八

岡田太郎 大阪市東區伏

見町四ノ二九、電北濱八五八、八六

〇

岡田卓爾 東京市目黒區

中目黒一ノ五、電大崎四三八

岡村藤兵衛 東京市麻布區

飯倉町三ノ一、電赤坂九七〇

岡本良民 東京市芝區西

久保明舟町一三、電芝一九〇七

長田捨三郎 大阪市東區今

橋三ノ一五

治村竹次郎 大阪市東區淡

路町一ノ二二、電北濱三二六九

日裏三四三三、電足利七三八

【力】

加賀朝一 心齋橋美術館

大阪市南區心齋橋第一ノ二九

加賀千代太郎 東京市日本橋

區榮町一ノ五、電日本橋四三三五

加藤小三郎 大阪市東區瓦

町二ノ四〇

加藤善之助 愛知縣海部郡

津島町大字津島字藤浪二ノ割一三〇

五

加藤松太郎 金澤市上今町

一八

柿谷勘造 京都市中京區

富小路通二條下ル、電上六五六

角谷憲一 二葉堂、東京

市本郷區湯島同朋町六、電下谷三四

七二

春日秀三郎 大阪市東區伏

見町五ノ一九、電北濱五八八四

勝倉源三郎 東京市淺草區

田原町一ノ八、電淺草一五三四

門垣爲作 靜觀堂、小倉

市室町五〇、電小倉三四六

金子忠次郎 東京市淺草區

雷門二ノ一九、電淺草八九三

金澤治三郎 合名會社金澤

治三郎商店、大阪市東區高麗橋一ノ

一四、電北濱二七二

金森三郎 東京市芝區芝

公園第五號地一三、電芝二五六七

上村 環 東京市京橋區寶町一ノ八ノ一、電京橋六〇二八

龜井 貫二 東京市日本橋區藏前町二ノ二、電茅場町三七〇七

川合 定治郎 川合尚雅堂、東京市京橋區銀座西六ノ四、電銀座五一六、京都市押小路通敷屋町東人

川添 寅藏 京都市中京區六角通御幸町西人、電本局六九

川部 利吉 株式會社川部商會、東京市芝區芝公園第五號地一三、電芝三七〇一

【キ】

木口 金太郎 東京市下谷區竹町六五、電下谷三三〇八

木村 幾五郎 東京市本郷區湯島天神町三ノ二、電下谷六六一

木村 錦太郎 名古屋市中區魚町九、電東一九八七

喜多虎之助 京都市中京區三條通大橋西人

喜多村 喜之助 合資會社丸嘉商店代表社員、東京市京橋區銀座七ノ四、電銀座五八八、五八九

北岡 東造 京都市中京區御幸町通御池南人、電本局五一六

北川 莞英 大阪府東區今橋三ノ一一、電北濱五九一九

岸本 正之助 京都市中京區柳馬場通御池南人、電本局二八〇五

【ク】

九十步 京一 紫雲洞、東京市豐島區巢鴨町三ノ三〇、電大塚五五八〇

楠 七兵衛 京都市東山區古門前通大和路東人

組田 綱之助 東京市澁谷區豐澤町二五、電高輪八三二二

栗田 直太郎 東京市日本橋區富澤町一、電浪速六六五

栗原 芳太郎 東京市日本橋區通三ノ三ノ七、電日本橋一八四八

黒部 正雄 東京市麻布區霞町二三、電赤坂四七七四

【コ】

小出 源三郎 大阪府東區伏見町五ノ一一

小鹽 治之吉 大阪府東區今橋五ノ一二、電北濱一〇八八

小林 彰夫 東洋堂、東京市麴町區九ノ内二ノ二、九ビル二階電九ノ内四六二七

小林 一哉 東京市本郷區湯島天神町二ノ二七、電下谷五四〇七

小林 喜代志 東京市芝區芝公園第九號地二、電芝八一九

小林 信次郎 東京市芝區西久保櫻川町四、電芝二三〇

小林 甚太郎 新潟市東區通十番町一七三九

小林 鐵之助 京都市東山區大和路通四條南人大和町四

小松 邦芳 東京市芝區新橋五ノ一二、電芝三三三九

小山 常次郎 青龍堂、東京市下谷區池ノ端仲町一六、電下谷五四四九

古賀 勝夫 大阪府東區伏見町三ノ五、電北濱二四五三

光明 義一郎 合資會社光明商店代表社員、京都市東山區四條祇園町南側、電祇園一四四六

近藤 鎮治 米近、名古屋市中區小林町五九、電中一八二

【サ】

佐藤 淺吉 大阪府天王寺區石ヶ辻町一一九

佐藤 一郎 佐一、東京市本郷區湯島切通坂町一、電小石川五六五七

佐藤 梅吉 梅軒畫廊、京都市烏丸通西四條北人、電本局三五一〇

佐藤 章太郎 京都市東山區繩手通辨財天町八

齋藤 才次郎 紫學堂、京都市鞍馬町御池上ル、電本局四八六五

齋藤 豐三郎 東京市日本橋區藏前町二ノ二

齋藤 利助 合資會社平出堂代表社員、東京市四谷區尾張町一電四谷一〇〇、三〇〇〇

坂井 準平 新潟市本町通七番丁一〇八五、電新潟三九九

坂田 作治郎 株式會社坂田作治郎商店、大阪府東區高麗橋二ノ三〇、電北濱三七一、一七〇二

境 定美 端泉堂、東京市澁谷區大和田町三〇

里見 忠三郎 京都市堺町通三條上ル、電本局五四二三

澤 達三郎 百和堂、東京市日本橋區人形町一ノ一四、電茅場町六六三一

澤 島太助 京都市中京區熱屋町通三條上ル、電本局三五七〇

【シ】

茂山 宗吉 東京市牛込區津久土町一八

篠田 實識 翠昇、東京市麴町區平河町二ノ二九ノ五、電九段四〇二〇

篠原 卯平 大阪府南區八幡町一、電南三一四

柴田 桂作 東京市麻布區霞町六、電赤坂三六五五

柴田 又治 合名會社柴田又商店代表社員、京都市下京區萬壽寺通間ノ町角、電下三七五

上保 福藏 東京市赤坂區新町一ノ二二、電青山七一八三

莊 英達 那須屋、東京市神田區田代町九、電下谷一四七〇

神通 傳二郎 東京市日本橋區通二ノ五ノ一〇、電日本橋四五六七

神通 豐次郎 富山縣豐川町五

諏訪 喜之松 東京市京橋區京橋三ノ四、電京橋八一六

菅 松治郎 大阪府東區安土町一ノ五、電本町一六七九

杉原 仁三郎 東京市大森區調布鶴ノ木町四三三、電田園調布二六八

鈴木 政三 白鳳堂、東京市澁谷區景丘町三三、電高輪六五六九

砂 壽治 合名會社砂文商店代表社員、大阪府東區北濱五ノ四五、電北濱一八五〇、一八五一

砂 元吉 砂元、大阪府東區北濱五ノ三九、電北濱一四一八

【セ】

瀬津 伊之助 雅爾堂、東京市日本橋區通三ノ三、電日本橋三六五〇

瀬島 小一 東京市四谷區南伊賀町一

關 長次郎 尙美堂、東京市麴町區九段四ノ一五、電九段二六〇二

關口 喜三郎 東京市京橋區京橋一ノ九ノ五、電京橋一九一七

關口 定次 靜運堂、東京市京橋區京橋二ノ二

善田 喜一郎 昌運堂、京都

市中京區姉小路通鳥丸東入、電本局  
二八一七

### 【ソ】

宗田 作藏 東京市芝區西  
久保櫻川町二、電芝二〇三九

### 【タ】

田口 ハマ 東京市芝區新  
橋六ノ六、電芝一七七二

田谷 廣吉 東京市淺草區  
橋場町二ノ四、電淺草二二六七

田中源之助 合名會社田中  
源商店代表社員、大阪市東區高麗橋  
三ノ一六、電北濱一九五一

田中正次郎 東京市麴町區  
麴町六ノ一ノ一、電九段三〇六五

田中平三郎 田中合名會社  
代表社員、大阪市東區唐物町五ノ一

田中良助 株式會社東京  
會、東京市下谷區谷中清水町二〇、  
電下谷一四四四

田中與平 東京市牛込區  
市ヶ谷田町二ノ三八

田原信次郎 合資會社田原  
壽善堂代表社員、東京市本郷區湯島  
天神町一ノ七一、電下谷三六一五

田村勝 東京市四谷區  
荒木町二三

泰文 社 東京市日本橋  
區室町四ノ一、電日本橋一〇三七

高橋 一雄 文鳳堂、門司  
市錦町三ノ一二三ノ一、電門司九

美術商一覽

八六  
高橋熊太郎 東京市芝區西  
久保巴町二〇、電芝一一

高橋吉兵衛 合名會社高橋  
梨花堂代表社員、京都市中京區三條  
通熱屋町西入、電本局一四六五

高橋初五郎 東京市品川區  
大井倉田町三二四九

高山開治郎 株式會社東京  
美術館、東京市京橋區銀座一ノ三、  
電京橋五四四五

瀧川廣太郎 大阪市南區八  
幡筋玉屋町、電南六一一五

竹内七郎 百華堂、名古屋  
市東區蒲燒町四ノ八、電東七二二〇

竹内善次 近善、東京市  
芝區西久保巴町四一、電芝一九六二

竹内秀太郎 竹秀、東京市  
京橋區寶町一ノ六ノ二、電京橋三三  
七四

竹内廣太郎 東京市目黒區  
下目黒三ノ七三七、電高輪六六六三

武田德太郎 大阪市東區北  
濱五ノ三三

武田茂吉 大阪市東區南  
本町五ノ一六、電船場四三九五

谷村庄平 谷庄、金澤市  
十間町四四、電金澤四七八

玉井久次郎 東京市芝區西  
久保巴町一九、電芝一七三四

津川義隆 大阪市南區西  
清水町三三、電南二八一九

土橋嘉兵衛 合名會社土橋  
永昌堂代表社員、京都市下京區四條  
通堺町東入、電本局一二三、一二四

辻梅吉 詩琴堂、大阪  
市東區平野町四丁目

辻吉長盛堂、京都  
市清水四丁目

### 【ツ】

中川清壽 壽泉堂、東京  
市本郷區湯島天神町一ノ八三、電下  
谷一八一五

中川寧次郎 合名會社中川  
寧次郎商店代表社員、京都市上京區  
平野島居前町電本局三〇〇四

中島勝也 廣榮堂、東京  
市赤坂區青山南町二ノ三四、電青山  
七一〇

中島鐵雄 大阪府東區伏  
見町四ノ六、電北濱四〇八四

中島庸介 中藥、東京市  
下谷區池ノ端茅町二ノ五、電下谷六  
四〇一

中西房之助 大阪府東區高  
麗橋五ノ三二、電北濱二〇六三

中野善九郎 大阪府東區高  
麗橋三ノ一五

中野利助 京都市中京區  
寺町通御池下ル、電上二六七六

中村嘉十 東京市赤坂區  
青山北町一ノ八

中村富次郎 中村好古堂、  
東京市京橋區京橋一ノ一、電京橋五  
二七、(自宅)澁谷區南平臺六、電澁  
谷六三三

永堀政利 東京市澁谷區  
神泉町四、(自宅)神奈川縣鎌倉郡戸  
塚町三八二二、電戸塚二二二

永山賢四郎 東京市芝區西  
久保櫻川町六

長尾芳次郎 東京市京橋區  
寶町一ノ四ノ四、電京橋一三七八

柳川市郎 東京市下谷區  
御徒町二ノ三九

柳川善左衛門 大阪府南區  
谷中之町二九、電南三二二一

【ナ】

夏目吉藏 東京市日本橋  
區兩國二ノ二、電浪花四四二〇

濤川 薰 阿々土社、東  
京市板橋區中新井町三ノ一九三四、  
電練馬一六八

成瀬信治郎 合資會社東方  
美術館代表社員、東京市本郷區湯島  
三組町八〇、電下谷六五六

丹羽忠一 東京市芝區西  
久保巴町一四

二本木 關太郎 東京市下谷區  
御徒町三ノ六九、電下谷二一六八

西浦克昌 東京市澁谷區  
原宿町一ノ一六〇

西川大六 東京市本郷區  
湯島三組町八一、電下谷七五一

西原幾之助 合名會社西原  
幾太郎商店代表社員、大阪府東區伏  
見町二ノ一五、電北濱三一九五

西村彦太郎 合資會社西村  
彦太郎商店、大阪府東區道修町四ノ  
三一、電北濱四二二、二九七九

西村吉次郎 大阪府東區伏  
見町二ノ一二、電北濱三三五九

野崎久兵衛 宇治久合名會  
社代表社員、名古屋市中區東區東本町  
四ノ一、電東四七二七

野村洋三 サムライ商會  
橋濱市中區本町一ノ五、電本局九一  
五、四九二二

【ニ】

【ノ】

【ハ】

【ヒ】

【フ】

【八】

羽津巳之吉 川定、大阪市  
南區八幡町八、電南四三八六  
橋崎治三郎 大阪市東區高  
麗橋五ノ三、電本局二八二四  
橋本元佑 壺屋、東京市  
日本橋區兩國二四ノ二、電浪花四五  
一七  
橋本秀二郎 多開堂、東京  
市麻布區我善坊町一、電赤坂一五九  
七  
長谷友二郎 東京市芝區西  
久保巴町四一、電芝五一五

長谷川貞八 東京市京橋區  
西八丁堀一ノ一、電京橋九六六  
一  
長谷川竹次郎 長宜堂、名古  
屋市中區住吉町一ノ二七、電中一九  
五九

八田富雄 東京市日本橋  
區通三ノ一、電日本橋四七七  
服部多一郎 京都市下京區  
萬壽寺通烏丸東入、電下七五二  
服部政太郎 合名會社服部  
來々堂代表社員、京都市佛具屋通魚  
棚上錫屋町四番戶

林新兵衛 分林（合名會  
社林新兵衛商店代表社員）、京都市  
東山區祇園町北側三一七、電祇園二  
〇〇八、二〇〇九、

林新助 合名會社林新  
助商店代表社員、京都市東山區新門  
前通梅本町二六五、電祇園一三、一

四

林朋之 萬林、京都市  
中京區押小路通祇園町東入、電下四  
四

林田等 東京市赤坂區  
青山北町一ノ一

原田文 東京市本郷區  
切通坂町四五、電下谷二三五四

春海謙二 合資會社春海  
商店代表社員、大阪市東區伏見町三  
ノ三、電本局一七一八、一九〇二

【七】

日野雄太郎 東京市麴町區  
麴町五ノ四ノ六、電九段二五五四

平岡英二 大阪市北區老  
松町一ノ二三、電北五一四九

平澤駒四郎 金澤市下近江  
町五

平野太郎 合名會社本山  
圖書堂代表社員、東京市芝區芝公園  
第五號地一三、電芝二〇

廣田熙 壺中居、東京  
市日本橋區通三ノ五、電日本橋四五  
九三

廣田松繁 東京市芝區芝  
公園第五號地一三、電芝三三四三

廣瀬茂男 久茂、名古屋  
市東區東本町四ノ一一

福井藤七 奈良市西御門  
町二、電奈良一八五五

【六】

福田淺次郎 元永堂、京都  
市中京區寺町通押小路ノ上ル、電上二  
七一

福中又次 九ノ内美術俱  
樂部、東京市麴町區九ノ内、九ビル  
内、電九ノ内三六二八

伏原羊次郎 春芳堂、東京  
市日本橋區室町一ノ一〇、電日本橋  
一四四四

藤岡清雄 東京市芝區西  
久保櫻川町三

藤城銀太郎 東京市本郷區  
湯島天神町二ノ三七、電下谷八三九  
八

藤原伊兵衛 兵庫縣西宮市  
森具奥畑三二、電西宮二五四六

二木外二郎 二嘉、金澤市  
橋場町二七、電金澤七二九

古川伊三郎 好美堂、東京  
市日本橋區人形町三ノ一二、電茅場  
町五七四〇

古木常八 東京市小石川  
區大塚窪町一九

堀口磯吉 九孝商店、東  
京市日本橋區室町三ノ四ノ二、電日  
本橋三九六一

堀越震六 三昧堂、東京  
市京橋區銀座八ノ二、電銀座一八〇  
八、（自宅）麴町區六番町四ノ一、電  
九段二四四一

堀田竹藏 大阪市東區今  
橋三ノ一五、電北濱三四〇二

堀本佐助 京都市中京區  
柳馬場通御池上ル、電本局五五四三  
七一

眞鍋棧四郎 大阪市東區高  
麗橋四ノ一三、電北濱五〇八二

前田義一 大阪市東區高  
麗橋五ノ九、電北濱五八二〇

前田捨次郎 大阪市南區玉  
屋町二、電南三八七六

牧寺三樹 東京市牛込區  
橋寺町四九、電牛込四七〇五

柁忠雄 東京市下谷區  
上野町一ノ七、電下谷七六三八

松岡丈吉 京都市中京區  
新町通二條南入、電上三一四八

松岡六兵衛 合名會社松岡  
六兵衛商店代表社員、京都市中京區  
富小路通三條南入、電本局三四五八

松本善右衛門 京都市新門前  
仲ノ通二七八、電祇園七五

松島勝之助 松島畫舫、東  
京市日本橋區江戶橋二ノ三、電日本  
橋四八八九

松谷豐次郎 東京市牛込區  
矢來町一〇二、電牛込二六八四

松平吉太郎 松吉、金澤市  
上今町四七、電金澤三八七

滿山順吉 合資會社滿山  
龍泉堂代表社員、京橋區京橋二ノ一  
ノ四、電京橋三〇五八

圓井德太郎 大阪市東區北  
濱三ノ二八、電北濱二二九一

三谷勘四郎 三溪洞、東京  
市日本橋區室町四ノ一、電日本橋一  
〇〇三

三野道夫 昭和堂、大阪  
市天王寺區茶臼山町八〇、電天王寺  
一〇五一

三村和三郎 東京市本郷區  
湯島切通坂町九、電小石川七一四六

三宅利右衛門 海老屋、東京  
市日本橋區室町三丁目四、電日本橋  
一五四一

三輪藤十郎 合資會社三輪  
華陽堂代表社員、名古屋市中區蒲燒  
町二丁目

水崎信太郎 東京市下谷區  
南稻荷町四六、電下谷一六二四、營  
業所麴町區九ノ内二ノ二九ビル内、  
電九ノ内一八一〇

水原金兵衛 合名會社水原  
商店、大阪市東區淡路町二ノ一四、  
電北濱一四四〇

義進 東京市麻布區  
飯倉町二ノ一六

宮崎政近 井南居、東京  
市麴町區六番町六ノ一、電九段二七  
四七

宮地甚吉郎 金澤市古寺町  
一八、電金澤七五〇

宮部鈴三郎 名古屋市中區  
針屋町九二番戶、電東二五二三

針屋町九二番戶、電東二五二三

針屋町九二番戶、電東二五二三

針屋町九二番戶、電東二五二三

針屋町九二番戶、電東二五二三

村上民二郎 大阪市東區高

麗橋五ノ三〇、電北濱一二二九

村上甚三郎 大阪市東區平

野町四ノ四七、電北濱一〇七

村瀬勇次郎 東京市芝區愛

宕町二ノ四、電芝三三九〇

村田憲司 香樹園、東京

市豊島區皇鴨町三ノ三〇、電大塚二

五七三

村松幸右衛門 東京市澁野川

區中里町一〇六、電駒込二五三八

### 【モ】

守口一義 大阪市北區老

松町一ノ三

守口三郎 有香堂、東京

市京橋區寶町一ノ四、電京橋七一五

森川保 大阪市東區伏

見町五ノ一

森本市太郎 東京市麴町區

平河町二ノ一三

### 【ヤ】

矢尾豐 東京市麻布區

三河臺町三

安井彌三郎 合名會社安井

聚好山房、大阪市東區平野町四ノ四

八、電北濱二三〇五

山下貞藏 大阪市東區北

久太郎町四ノ五八、電船場二〇八九

山下伊兵衛 大阪市東區北

久太郎町四ノ四四、電船場二八六八

山崎淨忍 東京市下谷區

余田喜一 東京市大森區

池ノ端仲町一九

山田健太郎 玉鳳堂、東京

市日本橋區通三ノ一ノ六、電日本橋

三〇〇七

山田保次郎 玉保、東京市

四谷區西信濃町一〇、電四谷八五四

山中吉太郎 株式會社山中

商會代表取締役、大阪市東區高麗橋

一ノ一二、電北濱一九七〇、一九七

一中吉郎兵衛 大阪市東區北

濱二ノ五二、電北濱二〇一

山中松治郎 山中合名會社

業務執行社員、株式會社山中商會相

談役、京都市東區粟田口三條坊町

一四、電祇園九三一、九三二

山内孝造 春靜堂、東京

市日本橋區吳服橋二ノ一ノ五、電日

本橋一九二九

山室文亮 東京市牛込區

橫寺町六八、電牛込二二五五

山本西二 洪學堂、東京

市芝區芝公園第七號地九、電芝三七

一〇

山本豐次郎 東京市芝區西

久保巴町二〇

### 【ユ】

湯山昇 白日莊、東京

市澁谷區代々木上原町一二九五、電

澁谷三四六

### 【ヨ】

吉田武雄 分平、東京市

四谷區見張町三

吉田忠一 東京市赤坂區

青山高樹町一二、電青山三〇九二

北千束町六九三

餘吾藤兵衛 合名會社久藤

商店代表社員、名古屋市西區袋町二

八二番戶、電本一四五二

橫井庄太郎 名古屋市南區

熱田市場町二八、電南一〇六九

橫井新平 分米万、名古屋

市東區田代町坂上八二ノ八、電東

四八五

橫井清三郎 合名會社米万

商店代表社員、名古屋市東區朝日町

二ノ一四、電東二〇四四

橫井仲治郎 東京市牛込區

矢來町三一、電牛込四七三四

橫山小八郎 京都市繩手通

新橋北入

橫山保太郎 岐阜市中竹屋

町三三、電岐阜五九七

橫山龍治 合名會社橫山

商會代表社員、名古屋市西區伏見町

二ノ八、電本局一五一〇

吉岡班嶺 帝國美術協會

東京市下谷區谷中清水町一、電下谷

四一五〇

吉澤丹治 東京市神田區

小川町三ノ一、電神田三六一四

吉田吉之助 水戸幸、東京

市京橋區京橋一ノ五ノ九、電京橋三

三六

吉田武雄 分平、東京市

四谷區見張町三

吉田忠一 東京市赤坂區

青山高樹町一二、電青山三〇九二

吉田富子 赤坂水戸幸、

東京市赤坂區仲ノ町三、電赤坂二七

一〇

吉村鏡治 香風園、東京

市目黒區上目黒三ノ一七六八、電青

山七七四、玉川一六六

吉村正雄 東京市目黒區

上目黒五ノ二三四〇、電澁谷三七九

六

米田長之助 合名會社米田

長之助商店代表社員、大阪市南區玉

屋町四五、電南一四七六

米田留治 松留、東京市

芝區西久保巴町四二、電芝二八六九

米田久雄 大阪市東區清

水谷東ノ町四一七

### 【ワ】

若山猪作 東京市麻布區

飯倉四ノ七、電赤坂一二三三

渡邊政四郎 淀橋區諏訪町

二三一、電牛込六五八二

### 洋畫・其他

石原龍一 求龍堂、東京

市澁谷區千駄ヶ谷五ノ九〇九、電四

谷六四八三

佐藤次郎 日佛畫堂、東

京市麴町區麴町一ノ一、電九段四〇

八七

鈴木里一郎 青樹社、東京

市京橋區銀座四ノ四、電京橋三六七

八、自宅澁谷區代々木大山園一〇七

九、電四谷七〇八四

薄田晴彦 三角堂、大阪

市淀屋橋南、電北濱三二三九、同京

都店、京都市河原町三條南、電本局

三七四一

平春漢 美交社、大阪

市東區大川町御堂筋、電北濱二五四

二

西川武郎 兜屋、東京市

澁谷區櫻田三ノ一八九、電青山四五

〇二

西田武雄 室內社、東京

市麴町區麴町一ノ三、電九段五一四

長谷川仁 日動畫廊、東

京市京橋區銀座西五ノ一日動ビル一

階、電銀座四四一八

藤井輝夫 晴潮社、京都

市下鴨、高木町六五、電上二二三〇

堀越震六 三昧堂、東京

市京橋區銀座八ノ二、電銀座一八〇

八、自宅麴町區六番町四ノ一、電九

段二四四一



美術家及美術關係者名簿

## 凡例

一、本名簿にのせた美術家及美術関係者の数は二三五七名である。わが國において美術家として社會的地位を有する人々を一定の標準に従つて採録した。未だ人選洩れもあるべく不備の點は次年度に補ひたい。

一、建築家は美術的見地から見た建築の設計家のみに限つて採録した。

一、本名簿は電話番号簿の如く、氏名の頭文字の發音によつて五十音順に記載した。發音の同じ場合は字畫の少いものを先にした。頭文字の同じものは二字目の發音により、その發音の同じ場合は字畫の少いものを先にした。但し使用上の便を考へて同字は訓音の異なるものなるべく一箇所に集めた。安宅、安達、安西、安藤等を同一箇所に掲げた如くである。

一、本名簿に用ひた略語は大體左の通りである。

(日)日本畫 (洋)西洋畫 (挿)挿畫 (版)版畫 (漫)漫畫 (彫)彫塑 (工)工藝  
(漆)漆工藝 (陶)陶磁 (金)金工藝 (染)染色 (織)織物 (繡)刺繡 (木)木工  
藝 (竹)竹工藝 (硝)硝子工藝 (圖)圖案 (建)建築 (學)學者 (文)文藝家  
(批)美術批評家 (教)美術教育家 (記)美術記者 (帝院)帝國美術院 (帝院賞)  
帝國美術院賞 (舊帝展)舊帝國美術院美術展覽會及帝國美術院展覽會 (舊文展)舊  
文部省美術展覽會 (文展)昭和十一年文部省美術展覽會・第一回以降文部省美術  
展覽會 (藝術院會員)帝國藝術院會員 (學士院會員)帝國學士院會員 (國寶委

員)國寶保存會委員 (重要美術委員)重要美術品等調査委員會委員 (史蹟名勝委  
員)史蹟名勝天然紀念物調査委員會委員 (朝鮮寶物委員)朝鮮總督府寶物古蹟名  
勝天然紀念物保存會委員 (輸出振興委員)輸出工藝振興委員會委員 (東美校)東  
京美術學校 (日美校)日本美術學校 (女美校)女子美術學校・女子美術專門學校  
(東京高工藝校)東京高等工藝學校 (東京高工校)東京高等工業學校 (美術院)日  
本美術院或は同研究所 (美術協會)日本美術協會 (太平洋)太平洋畫會研究所或  
は太平洋美術學校 (川端校)川端畫學校 (水彩畫會)日本水彩畫會或は同研究所  
(本郷研)本郷繪畫研究所 (南畫院)日本南畫院 (葵橋研)葵橋研究所 (京都美  
工校)京都市立美術工藝學校 (京都繪專校)京都市立繪畫專門學校 (京都高工藝  
校)京都高等工藝學校 (大阪美校)大阪美術學校 (信濃橋研)信濃橋洋畫研究所  
(自由畫壇)日本自由畫壇

一、住所中東京市のみは市名を略して區名を以て始めた。

一、舊帝展出品者で特選を得た人々についてはその旨を記したが、その人が無鑑査の  
場合には特選のことは略した。又審査員であつた人々は新文展に互りすべて無鑑査  
なる故無鑑査のことは記さなかつた。

一、文展不参加の團體の作家については文展無鑑査のことは記さなかつた。

「美術家及美術関係者名簿」 ページ (65～115 ページ)

個人情報保護のため非公開

Pages of the list of Artists and Experts in Art (pp.65-115)

Cut for protection of the personal information

日本美術年鑑 昭和十四年版

昭和十五年三月二十五日印刷  
昭和十五年三月三十日發行

定價 六 圓

東京市下谷區上野公園

著者兼發行者 美術研究所

東京市下谷區二長町一番地

印刷者 井上源之丞

東京市下谷區二長町一番地

印刷所 凸版印刷株式會社

著者權所有



發賣所 岩波書店

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

振替口座東京二六二四〇番